

小 阪 遺 跡

—近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線

建設に伴う発掘調査報告書—

本 文 編



1992.3

大阪府教育委員会
(財)大阪文化財センター

卷頭カラー 1



小阪遺跡全景

卷頭カラー 2



I 地区土器片敷遺構

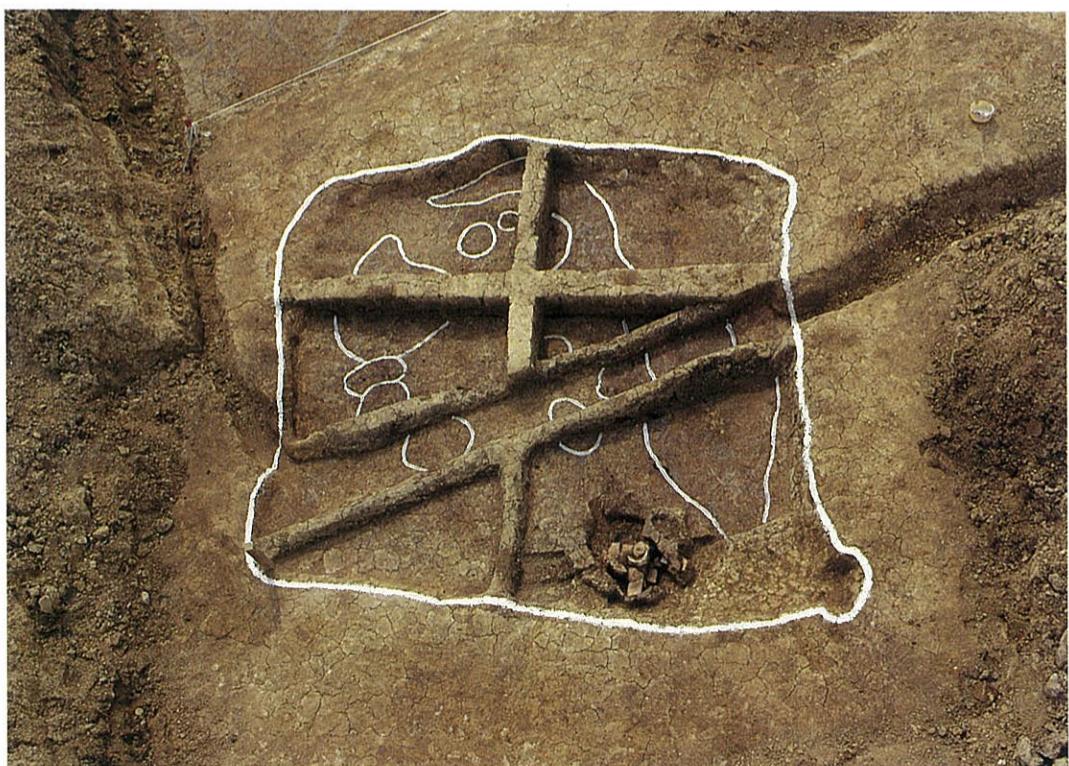
←火山灰



I 地区基本層序土層断面



C 地区集落域全景



C 地区竈付き住居

卷頭カラー 4



D 地区偽畦畔断面



E 地区偽畦畔平面

卷頭カラー 5



縄文土器



縄文土器

巻頭カラー 6



縄文土器

卷頭カラー 7



土師器



須恵器

卷頭カラー 8



H地区　灰原出土須恵器

序 文

美原町から堺市にかけて併設される府道松原泉大津線と近畿自動車道松原海南線の建設に先立って実施された発掘調査は、昭和59年度の真福寺遺跡から開始され、平成2年度の小阪遺跡の調査で終了しました。

その間、様々な遺構や遺物などの膨大なデータが蓄積されましたが、こうしたデータの一部については調査終了後に速報として概要報告書を刊行し、公開してきました。その後、幸いにも関係諸機関の協力を得て平成元年度から本格的な整理作業を開始することになり、小阪遺跡をその端緒として2ヵ年の予定で整理作業を進めて参りました。本書は、その整理事業報告書あります。

小阪遺跡は、本府が泉北ニュータウン造成に伴って調査した「陶邑古窯址群」の北縁に位置する遺跡です。今からおよそ1500年前、登り窯で土器作りを始めたばかりの頃の集団が居住した集落遺跡が検出されています。現在の焼き物の祖先であるその土器は、後の文献によると「須恵器」とよばれ、なお、1400年前の窯から搔き出された灰原が検出され、膨大な量の須恵器が出土しました。それらのことから、小阪遺跡も周辺の陶邑内の遺跡と同様に須恵器生産と密接に結びついた遺跡であることが判明しました。それに加えて、近畿地方では数少ない縄文時代各時期の遺物が層位的に出土したり、奈良時代の条理地割りと方向を一にする水田跡が検出されました。

遺跡は、陶器川沿いの洪水の危険性の高い地域にありますが、このように多数の遺構・遺物等が検出されるということは、泉北丘陵内の遺跡分布の密度の濃さを示していると考えられます。

本府では、泉北ニュータウン関連発掘調査の整理作業を実施してきており、その成果は報告書『陶邑』として順次、刊行をしてまいりました。小阪遺跡の報告書は、こうした須恵器生産を支えた集落やそこから出土した多様な遺物についての報告が一つの柱となっています。土器を焼いた「ムラ」の歴史を理解し、地域の文化遺産として顕彰するためには、そのような面からのアプローチも不可欠であり、貴重な報告書となっています。

ここに成果を皆様に示し、調査を担当した大阪文化財センター、日本道路公団、本府土木部、鳳土木事務所などの関係各位の協力に対し、記して感謝の意を表すとともに、これからも文化財保護行政への御理解、御協力を賜るようお願いいたします。

平成4年3月

大 阪 府 教 育 委 員 会
文化財保護課長 亀 岡 勝 敏

序 文

堺市の南東部に位置する泉北丘陵一帯は、日本古代最大の窯業地であった陶邑古窯址群の存在する所として著名である。しかし、それ以外にも、人々の生活活動の盛んな地域であったことが、近年の大小様々な発掘調査によって明らかとなっている。当センターにおいても、1980年に府道松原泉大津線関連の遺跡調査に携わって以降、この地域の発掘調査に継続して係わってきた。本書に報告する小阪遺跡もその一つであるが、その間、多くの新知見が得られている。ここに、その一端を紹介しておこう。

縄文時代では、従来の見解を覆す重要な発見があった。これまで、地山下として調査の対象としてこなかった谷底平野の段丘面の下から、縄文各期の遺構や遺物包含層が検出されたことである。この段丘面は、地形分類では沖積段丘とされてきたものである。この段丘面の形成時期は、かつては縄文前期をピークとする海進時に求める説が有力であった。それは、海進により河川の勾配が緩やかとなって堆積作用が促進されたとするものである。ところが、小阪遺跡において、地表下4.5mからプライマリーか、それに限りなく近いアカホヤ火山灰(B.P.6300)の堆積層が検出されたのを始め、中・後・晩期の包含層が順次下層から上層へ検出されている。また、周辺地域でも、段丘面下で晩期包含層の検出が相次いでおり、この段丘面が縄文晩期以降に形成されたものであることが明確となっている。

弥生時代で注目されるのは、小阪遺跡で縄文晩期末と弥生前期中段階の土器が共伴して出土していることである。弥生時代初期の段階で、丘陵地を生活の場としたことは、丘陵や段丘上の開析谷を水田開発の対象としていた可能性が強く、当時、平野部にも可耕地が残されていたにも関わらず、丘陵地の谷水田が選択されたのは、そうした場所が当時の水稻栽培技術の上で適地と認識されていたのであろう。

陶邑古窯址群に関連するものとしては、小阪遺跡や大庭寺遺跡などで初期須恵器の出土量の多いことが注目される。この地域は、海岸部から陶邑に至る主要経路の入口にあたり、陶邑で最も古いとされてきたTK73号窯に近いことからも、最初の須恵器製作集団の活動拠点であった可能性は高い。小阪遺跡で検出された同時代の集落も、そうした一つと考えられる。

条里地割の施行時期についても、興味ある成果が得られている。小阪遺跡Ⅰ地区で検出された小区画水田は、8世紀末をやや遡る時期と想定されているが、畦畔の方向が現条里と一致する。この地域の条里は、石津川中・下流域の条里と一連のものであり、それからすると、8世紀段階で海岸部から石津川中流域までを含む広大な範囲に、基軸線を一つにする条里が施行されたと言えるのではないか。条里地割は、後世の水田の作り替えにより容易に破壊されるものであり、中々その始原を決めがたいが、小阪遺跡Ⅰ地区の例は、その始原、もしくはそれに限り無く近い水田として重要な意味を持つものであろう。

本書は、1985年から1990年まで実施した小阪遺跡の発掘調査成果をまとめた本報告書である。期間に限りのある中で、十全な整理を全うできたかについてはいささかの危惧を禁じ得ないが、ともかくは泉北丘陵の多彩な歴史解明の一助となることは間違いかろう。

これも偏に大阪府教育委員会、大阪府土木部、日本道路公団を始めとする関係各位の御指導・御協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへの御支援を賜るよう切に希望する。

平成4年3月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 坪井清足

遺跡名	こさか 小阪遺跡
所在地	おおさか ふさかいし ひらい こさか ふせお 大阪府堺市平井（小阪・伏尾）地内
略称	K S K
遺跡番号	大阪府文化財分布図（1991・03） 堺市 181
座標	第VI座標系 X = -164,800 Y = -46,600 (遺跡の中心) 東経 135° 29' 33" 北緯34° 30' 55"
立地	堺市南東部の泉北丘陵北端の石津川と陶器川の合流地点T.P.+22~25m付近の完新世段丘面（沖積段丘）、氾濫原および自然堤防
時代	1. 縄文 2. 弥生 3. 古墳 4. 古代 5. 中世 6. 近世
遺構	1. 縄文時代 土器片敷遺構、遺物集中区 2. 古墳時代 集落（住居址、掘立柱建物、土坑、溝等）、須恵器灰原 3. 古代 条里水田 4. 中～近世 水田、粘土採掘坑、火葬土壙
遺物	1. 旧石器 2. 縄文土器前期～晩期〔特に中期末～後期（北白川C式）の良好な資料〕 3. 縄文（～弥生）石器 4. 弥生土器前期～中期 5. 古式土師器 6. 初期須恵器および土師器、韓式系土器、須恵質當て具、鐵鏃 7. 灰原出土須恵器（I-2～II-4 TK216～MT85）、統計処理 8. 古代人面墨書き土器 9. 中～近世各種土器、貨銭
備考	新知見としては、陶器川の谷底平野下に縄文時代各期の遺物包含層（一部遺構面）がT.P.+20.5m前後から順次堆積しているのが検出されており、縄文時代の遺跡の立地を考える上で注目される。

例　　言

1. 本書は、近畿自動車道松原海南線ならびに都市計画道路松原泉大津線建設工事に伴って実施された小阪遺跡発掘調査の整理事業に対する本報告書である。
2. 整理事業は、大阪府教育委員会および財団法人大阪文化財センターが日本道路公団大阪建設局および大阪府鳳土木事務所の委託を受け実施した。
3. 本整理事業に要した費用83,797,180円は、日本道路公団大阪建設局および大阪府鳳土木事務所が負担した。
4. 総括的な整理作業および本書作成の作業は、1989年4月1日から1991年3月31日の2年間にわたり実施し、本報告書の印刷に関しては1991年度に行った。
5. 本整理ならびに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施した。整理事業は、調査課長中西靖人、主幹兼調査第3係長赤木克視の指示のもと、調査第3係技師森屋美佐子・合田幸美・清水篤が内業整理、主任技師平井貞子・技師立花正治が写真を担当した。
6. 発掘調査は、1985年8月5日から1990年10月31日にわたり実施し、各年度ごとにそれぞれの調査区の概要報告書を刊行している。
7. 発掘調査担当者は、以下の通りである。

調査課課長 中西靖人
業務課業務第3係係長 山本 彰
業務課業務第2係係長 國乗和雄
調査課主幹兼調査第3係係長 赤木克視

1985年度	その1	入江正則・三好孝一・村上富喜子（遺物整理）・立花正治（写真）
1986年度	その2	入江・大楽康宏・三好・森屋美佐子（遺物整理）・立花（写真）
1986年度	その3	村上年生・服部文章・三宮昌弘・森屋（遺物整理）・平井貞子（写真）
1986年度	その4	竹原伸次・長谷川一英・清水篤・森屋（遺物整理）・平井（写真）
1987年度	その5	長谷川・三宮・森屋（遺物整理）・平井（写真）
1988年度	その5-2(9)	金光正裕・森屋（遺物整理）・平井（写真）
1987年度	その6. 6-2	小野久隆・合田幸美・森屋（遺物整理）・平井（写真）
1988年度	その6-3	鋤柄俊夫・合田・三宮・森屋（遺物整理）・平井（写真）
1987年度	その6-4	三好・清水・平井（写真）
1987年度	その7. 7-2	村上・松山聰・森屋（遺物整理）・平井（写真）
1988年度	その7-3	松山・江浦洋・清水・森屋（遺物整理）・平井（写真）
1989年度	その7-4	三好・市本芳三・平井（写真）
1988年度	その8. 8-2	寺川史郎・本間元樹・高橋雅子（遺物整理）・立花（写真）
1989年度	その8-3	中村淳磯・平井（写真）
1988年度	南その1	長谷川・三好・市本・森屋（遺物整理）・平井（写真）
1989年度	南その2	三好・市本・平井（写真）
1990年度	南その2-2	小野・三好・市本・平井（写真）

8. 出土石器の石材鑑定は、大阪府立長野高等学校教諭 佐藤隆春氏にお願いした。記して厚く感謝の意を表する次第である。
9. 自然科学的調査の成果については、以下に記した方々に依頼し、玉稿を賜った。記して厚く感謝の意を表する次第である。

地質およびソフトX線断面観察	高橋 学（立命館大学）
火山灰分析	檀原 徹〔株京都フィッショントラック〕
地震跡	寒川 旭（通商産業省工業技術院地質調査所）
花粉分析・大型植物遺体鑑定	安田喜憲（国際日本文化研究センター）
花粉分析	鈴木 茂〔株パレオ・ラボ〕
プラント・オパール分析	外山秀一（帝京大学 山梨文化財研究所）
大型植物化石鑑定	南木睦彦（流通科学大学）
木材鑑定	能城修一（農林水産省総合研究所木材利用部組織研究室）
	植田弥生（大阪市立大学）
	山口誠治〔（財）大阪文化財センター〕
{花粉、珪藻、 〔プラント・オパール分析	辻本崇夫・伊藤良永・辻本裕也（パリノ・サーヴェイ株式会社）
土器付着炭化物の分析	松谷暁子（東京大学総合研究資料館）
¹⁴ C年代測定	山田 治・小橋川 明（京都産業大学）
	柴田せつ子・川野瑛子（大阪府立大学付属研究所）
胎土分析	清水芳裕（京都大学埋蔵文化財研究センター）
	井上 巍〔株第四紀地質研究所〕
	三辻利一（奈良教育大学）
	矢作健二（パリノ・サーヴェイ株式会社）

なお、胎土分析および土壤分析の試料の提供を以下の関係諸機関より受けた。記して感謝申し上げる。

大阪府教育委員会、泉佐野市教育委員会、河内長野市教育委員会、堺市教育委員会、財団法人大阪府埋蔵文化財協会、熊取町教育委員会

また、本書の作成段階において以下の方々の多大なるご指導、ご教示を得た。記して感謝申し上げる。

一瀬和夫（大阪府教育委員会）、泉 拓良（奈良大学）、伊藤正人（名古屋市見晴台考古資料館）、岡戸哲紀（財団法人大阪府埋蔵文化財協会）、小田富士雄（福岡大学）、尾谷雅彦（河内長野市教育委員会）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、梶山彦太郎、木下 亘（樋原考古学研究所）、國分政子、白神典之（堺市教育委員会）、鈴木陽一（泉佐野市教育委員会）、武末純一（北九州市立考古博物館）、田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、田中靖夫（財団法人古代學協會）、田村陽一（三重県埋蔵文化財センター）、千葉 豊（京都大学埋蔵文化財研究センター）、中井貞夫（大阪府泉北考古資料館）、西田泰民（財団法人古代學協會）、西山要一（奈良大学）、萩本 勝（平安高等学校）、穂積裕昌（三重県埋蔵文化財センター）、間壁忠彦（倉敷考古資料館）、三田村宗樹（大阪市立大学）、宮本長二郎（奈良国立埋蔵文化財研究所）、柳本照男（豊中市教育委員会）

10. 本整理の過程では、以下の方々の参加、協力を得た。

調査員

上河善子、田中千賀、玉置文子

調査補助員

伊井野久喜子、井上由里子、池辺さおり、岩田祥子、江藤豊子、大谷浩之、緒方晴子、小川文亜、龜田由美子、川崎朝子、川道靖子、北尾朋代、久喜谷純子、久禮孝志、黒坂由紀子、後藤陽子、佐藤弘子、芝野恵子、正道麻里子、杉本加代子、高山多美子、谷口千明、土屋佳代、寺田順子、西尾広子、沼口恭子、土師郁子、平本布由美、宮武府子、峰 順子、安村ゆき、薮 智恵子、山口晶子、山本加代子、渡辺京子（五十音順）

11. 本調査に関わる遺物、写真、カラースライド、実測図等は財団法人大阪文化財センター泉北分室（大阪府和泉市伏屋町141-2 電話0725-56-6090）において保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 小阪遺跡の略称は、KSK (KOSAKAsite) である。
2. 付図の遺構全体図の縮尺率は、1/1000である。遺構、遺物の出土状況図の縮尺率は1/10、1/50、1/80、1/100、1/200を基調とし、場合によっては任意とした。
3. 遺構実測図の基準高は、すべて東京湾平均海水位 (T.P.) 土で表記した。
4. 地点の表記は、基本的に国土座標を用い、第VI座標系に基づく国土座標およびそれに則った地区割りによって表しており、方位は座標北を示す。
5. 工区毎の地区割りは、概報時と若干異なり、その1地区からその9地区をアルファベットで表記し、トレンチ名称も全体的に1 A～14 I トレンチに統一した。
6. 遺構名称および遺構番号は、概報時と異なり、各時代で各遺構毎に、A地区より順に通しの番号を付与した。詳しくは、新旧遺構名対照表を参照されたい。
7. 遺物番号は、土器、石器・石製品、木器、土製品、金属器の各々で一連の番号を付与し、土器には数字のみ、それ以外のものにはそれぞれ頭に記号を付した。石器・石製品(S)、木器(W)、土製品(P.T.)、貨幣を含む金属製品(M)である。遺物実測図、写真図版の番号は共通する。ただし、遺物のうちわずかではあるが写真図版にあって実測図版に無い場合があり、それらにはアルファベットおよびローマ数字を付与した。
8. 遺物実測図の縮尺率は、石器の打製が2/3、磨製が1/2、1/3、縄文・弥生土器が1/3（ただし、遺物集中区出土土器は1/2）、古墳時代以降出土の土器が1/4、拓本1/2である。木器は1/4、1/6、1/8である。
なお、須恵器の断面は黒塗りにし、他は白抜きであり、土師器の生駒西麓産のものにはスクリーントーンを付した。また、H地区の灰原出土の遺物実測図の☆印は、統計処理にかかったものを示している。
古墳時代以降の遺構図に伴う○印は土器、●印はその他の遺物を表している。それに加えて、遺構に伴う遺物実測図は各遺物実測図の1/2縮図である。

9. 遺物写真の縮尺率は、石器に関しては約1/1、1/2、1/3であり、縄文土器は原則として約1/3、2/3、古墳時代以降の土器の調整等が約1/1である以外は任意である。
10. 遺構断面図における実線は層界、破線は不明瞭な層界、一点鎖線は任意の掘り下げ線を示す。
11. 土器および石器における外形線のうち、太線は原型をとどめる部分、細線および破線は破損部分を示す。
- なお、古墳時代以降の土器に関しては、回転ヘラケズリが一点鎖線で、回転ナデが破線で示している。
12. 引用文献および参考文献は各章の末尾に記した。
13. 地図は建設省国土地理院の承諾を得、大阪府が調整した2万5千分の1、大日本帝国陸地測量部作成仮製2万分の1、堺市都市計画図を使用した。
14. 土色は小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
15. 遺構については、概要報告書をまとめた報告書という立場から、基本的に遺構の網羅に努めるものの、各遺構の詳述は概要報告書に依るところが大である。本書の遺構の記述は、各年代の遺構の補足説明、概括を経た後、その連関性に主眼をおいた。したがって、遺構の詳細については、概要報告書を併読されたい。
16. 本文中の用語、記載方法等において、執筆者の考えを尊重して部分的にあえて統一していないところもある。
17. 本書の編集は各担当者が行い、総編集は赤木が行った。

Tab.17 石器の計測基準表（拡大）

石鏃 ドリル 尖頭器 ナイフ形石器	C1 F1 幅(φ)長さの軸に直交するみかけの最大幅 重量(g) 面積(cm ²)遺物の投影面積 厚さ指数(g/cm ²)単位面積あたりの重量
石匙	C2 長さ ツマミのくびれ部分を水平に置いた場合の鉛直方向での長さ F2 幅 重量 面積 厚さ指数
楔形石器	C3 F3 長さ 上縁部を水平に置いた場合の鉛直方向の長さ 幅 重量 面積 厚さ指数
スクレイパー ノッチ 二次加工のある剝片 剝片(打点の残らないもの)	C4 F4 長さ 素材剝片の剥離の加撃軸方向でのみかけの最大長 幅 重量 面積 厚さ指数
剝片(打点の残るもの)	A 打点厚(cm)打点部分での打面の厚さ B 打面角(°)打面と主要剥離面との交わる角度 C5 長さ打点から最遠位端までの長さ D 加撃軸長(cm)打点から加撃軸と縁辺との交点までの長さ E 振れ角(°)長さを決定する軸線と加撃軸とのなす角度 F5 幅 G 加撃軸幅(cm)加撃軸に直交するみかけの最大幅 重量 面積 厚さ指数
石核	重量 面積 厚さ指数
碎片	重量
石錐・石棒 石庖丁・石斧 敲石・凹石 石皿	長さ 水平に置いた場合、残存部の最大長石庖丁は刃部を水平とした 幅長さの軸に直交するみかけの最大幅 重量 厚さ(cm)残存部の最大厚

目 次

卷頭カラー	卷頭カラー-1	全景	卷頭カラー-2	I 地区土器片敷遺構、断面
卷頭カラー-3	C 地区古墳時代集落・竪穴住居竈	卷頭カラー-4	偽畦畔断面・平面	
卷頭カラー-5	縄文土器（1）	卷頭カラー-6	縄文土器（2）	
卷頭カラー-7	土師器・須恵器	卷頭カラー-8	H 地区灰原出土須恵器	

序 文 大阪府教育委員会 i

序 文 (財) 大阪文化財センター ii

例 言 iii

凡 例 iv

序 章 調査の概要と遺跡の立地

1. 調査の概要	(赤木)	1				
1) 発掘調査に至る経過	2) 発掘調査の方法						
2. 位置と環境	(三好)	7				
1) はじめに	2) 旧石器時代	3) 縄文時代	4) 弥生時代	5) 古墳時代	6) 古代以降		

第 I 部 発掘調査の成果

第1章 層序と遺構の概要	(清水)	17			
1. 基本層序	17			
1) 層序の概要	2) 層序の対応関係とその問題点				
2. 遺構の概要	19			
1) 河川	2) 縄文時代～弥生時代の遺構	3) 古墳時代の遺構	4) 飛鳥時代以降の遺構		
第2章 縄文～弥生時代の遺構と遺物——谷間のむら	(合田)	27			
1. 河川	29			
2. 早期末～前期初頭の遺物出土状態	41			
3. 中期の遺物出土状態	41			
1) 包含層と面の認識	2) 遺物出土状態				
4. 中期末～後期初頭の遺構と遺物出土状態	43			
1) 包含層と面の認識	2) 土器片敷遺構	3) 土坑	4) 落込み	5) 遺物出土状態	
5. 後期の遺構と遺物出土状態	48			
1) 包含層と面の認識	2) 遺物集中区	3) 遺物出土状態			

6. 晩期～弥生前期の遺構と遺物出土状態	54
1) 包含層と面の認識	
2) 土坑	
3) 溝	
4) 木の根痕	
5) 遺物出土状態	
7. 弥生時代の遺構と遺物出土状態	59
1) 土坑	
2) しがらみ	
3) 杭列	
4) 水田	
5) 谷状地形	
8. 土器	63
1) 縄文土器	
2) 弥生土器	
3) 1990年度出土土器	
4) 既存の土器型式との対応関係	
9. 石器	(松山・合田) 143
1) 概要と計測基準	
2) 打製石器	
3) 磨製石器	
10. その他の遺物	(合田) 194
1) 木器	
2) 土製品	
11. 小結	195
第3章 古墳時代の遺構と遺物 —— 陶邑のなかで	199
1. 河川	(清水) 205
2. 前期の遺構	216
1) 土坑	
2) 溝	
3. 中期の集落	225
1) 壑穴住居	
2) 掘立柱建物	
3) 平地住居	
4) ピット	
5) 土坑	
6) 溝	
7) 方形周溝状遺構	
8) 井戸	
9) 木根痕	
4. 中期～後期の遺構	254
1) 灰原	
2) しがらみ	
3) 土坑	
4) 溝	
5) 水田	
5. 前期の遺物	(森屋) 259
1) 土坑	
2) 溝	
3) 河川	
6. 中期の遺物	271
1) 壑穴住居	
2) ピット	
3) 井戸	
4) 土坑	
5) 溝	
6) 木根痕	
7) 包含層	
8) 河川	
7. 中期～後期の遺物	308
1) 土坑	
2) 溝	
3) 河川	
8. 灰原出土の遺物	(森屋・清水) 352
1) 須恵器	
2) 土師器	
3) 数量的検討	
9. 小結	(森屋・清水) 411
1) 古墳時代前期	
2) 古墳時代中期	
3) 古墳時代中～後期	
第4章 古代の遺構と遺物 —— 条里制の施行と湿田	415
1. 遺構	(赤木) 416
1) 河川	
2) 谷状地形	
3) 掘立柱建物	
4) ピット	
5) 土坑・落込み	
6) 溝と暗渠	
7) 水田	
8) しがらみ・ダム状土盛り	
2. 遺物	(森屋) 439
1) 掘立柱建物	
2) 溝	
3) 水田	
4) 河川	
5) 落込み	
6) 谷状地形	
7) 包含層	
3. 小結	(赤木) 451

第5章 中～近世の遺構と遺物 ——新田開発（乾田化）の時代	453
1. 遺構	(赤木) 454
1) 河川 2) 井戸 3) 粘土採掘坑 4) 火葬土壙 5) 土坑 6) 溝 7) 暗渠・導水管	
8) 水田	
2. 遺物	(森屋) 461
1) 土坑 2) 導水管 3) 河川 4) 包含層	
3. 小結	(赤木) 470

第II部 自然科学的調査

第1章 自然科学的調査の概要	(合田)
1. 自然科学的調査の経過	471
2. 各自然科学的調査の分野について	472
3. 自然科学的調査の概要	473
第2章 石津川流域平野の地形環境分析 —小阪遺跡の地形環境と土地利用—	高橋 学
1. 視点	479
2. 地域の概観	481
3. 石津川流域の古環境に関する研究	481
4. 石津川流域の地形面分析	481
5. 石津川中・下流域の地形帶環境分析	483
6. 小阪遺跡周辺の微地形環境分析	487
1) I 地区 2) H 地区	
7. 須恵器生産と地形環境の変貌	494
8. おわりに	497
第3章 地層のソフトX線分析および画像解析	高橋 学
1. はじめに	499
2. 発掘調査における地層の基本概念	499
3. ソフトX線分析	500
4. ソフトX線分析のためのサンプリング	501
5. ソフトX線分析の手順	502
6. ソフトX線写真の判読	502
7. おわりに	503
第4章 小阪遺跡火山灰分析結果報告	檀原 徹
1. 試料の分析方法	505
1) 前処理 2) 重鉱物分析 3) 火山ガラスの屈折率測定 4) 鉱物の屈折率測定	
2. 分析結果および考察	506
第5章 小阪遺跡出土の地震跡について	寒川 旭
1. 地震考古学について	511

2. 近畿地域の地震跡	512
1) 巨大地震の地震跡 2) 内陸地震の地震跡	
3. 小阪遺跡の地震跡	515
1) 地震跡の形態 2) 地震跡の形成時期と地震の性格	
第6章 小阪遺跡の泥土の花粉分析	安田喜憲
1. はじめに	519
2. 試料の採取と層序	519
3. 花粉分析の方法と結果	519
4. 考察	519
第7章 小阪遺跡の大型植物遺体について	安田喜憲 523
第8章 小阪遺跡15F トレンチの花粉化石	鈴木 茂
1. はじめに	525
2. 試料	525
3. 分析方法	527
4. 結果	527
5. 考察	532
1) 縄文時代後・晩期の古植生 2) 奈良時代から中世にかけての古植生	
第9章 プラント・オパール分析からみた小阪遺跡の土地条件と土地利用	外山秀一
1. はじめに	535
2. プラント・オパール分析	535
3. 試料の採取と地層の堆積状況	536
4. 分析の方法	537
5. 結果	537
6. 考察	540
1) 地形環境と土地条件 2) 土地利用	
7. おわりに	541
第10章 小阪遺跡の大型植物化石	南木睦彦
1. はじめに	545
2. 試料の層位と産状	545
3. 分析方法	547
4. 結果と古環境の考察	548
5. いくつかの種類の同定の根拠ならびに形態の記載	549
第11章 小阪遺跡出土の木材	植田弥生・能城修一・山口誠治
1. はじめに	551
2. 樹種同定結果	552
3. 木材化石群の特徴	555
1) 古代河川4の木材化石 2) 縄文中期～晩期の木材化石群 3) 縄文時代の埋没林	
4) 大阪府下の縄文時代からの産出例として注目される木材化石	

第12章 小阪遺跡における珪藻・花粉・植物珪酸体からみた古環境

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに	561
2. 調査地点の地形・地質	561
1) 地形環境の概要 2) 各調査地点における層序の概要と試料	
3. 珪藻化石群集からみた堆積環境	565
1) 分析方法 2) 小阪遺跡の堆積物中から検出された誘導化石について	
3) 各地点における珪藻化石の産状 4) 珪藻化石からみた各地点の堆積環境	
4. 花粉化石・植物珪酸体からみた古植生と古環境	572
1) 分析方法 2) 各地点の花粉化石の産状 3) 各地点の植物珪酸体組成	
4) 各時期の花粉化石群集・植物珪酸体組成の特徴と古植生	

第13章 小阪遺跡出土土器付着炭化物の走査型電子顕微鏡による観察	松谷暁子
1. はじめに	583
2. 方法	584
3. 結果	584
4. おわりに	584

第14章 小阪遺跡の液体シンチレーション ¹⁴ C年代測定について	山田 治・小橋川 明
1. はじめに	585
2. ¹⁴ C年代測定の原理	585
3. ¹⁴ C年代測定の方法	586
1) ¹⁴ C年代測定の方法 2) 結果の読み方	

第15章 小阪遺跡における自然遺物の ¹⁴ C年代測定	柴田せつ子・川野瑛子
1. はじめに	591
2. ¹⁴ C年代測定法の原理	591
3. 測定方法	591
1) 試料の前処理 2) 炭化物試料からメタノールの合成	
3) 液体シンチレーションカウンターによるメタノールの ¹⁴ C放射能測定	
4. ¹⁴ C年代測定の結果	592

第16章 小阪遺跡縄文土器の胎土	清水芳裕
1. 岩石学的分析	595
2. 元素分析	599
3. 赤色顔料	602

第17章 小阪遺跡出土土器胎土分析	井上 巍
1. はじめに	603
2. 実験結果	603
1) タイプ分類	
3. 石英(Qt)-斜長石(Pt)の相関について	607
1) 全体の傾向について 2) 縄文時代について 3) 古墳時代の土器について	

4.まとめ	613
第18章 小阪遺跡出土硬質土器の蛍光X線分析	三辻利一 615
第19章 小阪遺跡周辺地域の地質と土器胎土の鉱物分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
1.はじめに	619
2.分析のねらい	619
3.試料	619
4.分析方法	620
5.分析結果	620
1)土器試料の分類 2)自然堆積物の重鉱物組成	
6.考察	629
1)土器胎土および自然堆積物中の重鉱物の由来について	
2)胎土中の角閃石について	
7.まとめと今後の展開	636

第III部 考 察

第1章 縄文時代後期の剥片生産について	松山 聰
1.はじめに	671
2.多変量解析とその結果	671
3.仮説の検討	675
4.まとめ	678
第2章 北白川C式土器について 一小阪遺跡出土土器を中心として	合田幸美
1.はじめに	681
2.北白川C式の位置付け	681
3.器種分類	683
4.各器種の分析	684
5.資料の整理	686
6.器種構成と文様からみた地域差	690
7.まとめ	693
第3章 西日本出土の浮線紋土器	三好孝一
1.はじめに	695
2.浮線紋土器の系譜と細分	695
3.近畿地方以西出土の浮線紋土器	697
4.まとめ	701
第4章 和泉における古式土師器の様相	鈴木陽一
1.はじめに	705
2.泉大津市東雲遺跡出土の土師器	706
3.泉大津市池上遺跡出土の土師器	709

4. 豊中遺跡出土の土師器	711
5. 府中遺跡出土の土師器	713
6. 小阪遺跡出土土器の様相と占める位置	716
第5章 小阪遺跡出土土器の問題点 一初期須恵器の時代	森屋美佐子
1. はじめに	719
2. 土器の特徴	719
1) C地区出土土器 2) G地区出土土器 3) H地区出土土器	
3. 土器変化の細分	722
1) 土器の形態変化 2) 土器の時期区分	
4. おわりに	724
第6章 小阪遺跡出土の高坏型器台について	尾谷雅彦
1. はじめに	729
2. 出土の器台について	729
3. 日本と半島の高坏型器台について	732
4. まとめ	735
第7章 古墳出土の埴輪と初期須恵器	一瀬和夫
1. 古墳共伴資料としての初期須恵器	739
2. 円筒埴輪と初期須恵器	739
3. 円筒埴輪の外面調整の変化	740
4. 円筒埴輪による各段階	740
5. 定型化前須恵器の新旧	743
6. 陶邑窯跡群における初期須恵器の推移	744
7. 初期須恵器の変化のもつ意味	746
第8章 小阪遺跡の開発についての一考察	入江正則
1. はじめに	749
2. 石津川流域の地形	749
3. 各時代の遺跡の様相	749
1) 平安時代 2) 中世 3) 近世	
4. 各時代の問題点	752
1) 平安時代 2) 中世 3) 近世	
5. まとめ	753

終　章　小阪遺跡発掘調査の意義

挿 図 目 次

序章 調査の概要と遺跡の立地

Fig. 1	周辺の都市計画図	1
Fig. 2	試掘グリットの位置	2
Fig. 3	国土座標系とそれに伴う地区割	3
Fig. 4	地区の配置と調査年度	4
Fig. 5	トレンチの位置と名称(1)	5
Fig. 6	トレンチの位置と名称(2)	6
Fig. 7	旧石器時代から縄文時代の主要遺跡分布図	8
Fig. 8	弥生時代から古墳時代の主要遺跡分布図	10
Fig. 9	古代以降の主要遺跡分布図	14

第 I 部 発掘調査の成果

Fig.10	小阪遺跡の多期にわたる基本層序	20
Fig.11	各地区における柱状断面(1)	21～22
Fig.12	各地区における柱状断面(2)	23
Fig.13	周辺の地形と縄文～弥生時代の遺構	27
Fig.14	縄文～弥生時代遺構(1)	28
Fig.15	縄文～弥生時代遺構(2)	29
Fig.16	D地区 河川3断面	30
Fig.17	E地区 河川4.5.6断面	31
Fig.18	F地区 河川7.8.9平面および遺物出土状態	32
Fig.19	F地区 河川7.8.9断面	33
Fig.20	F地区 河川11.12断面	34
Fig.21	G地区 河川19.20.21断面	36
Fig.22	H地区 河川27断面	37
Fig.23	I地区 河川28.29.30断面	38～39
Fig.24	I地区 層序断面模式図	40
Fig.25	I地区 中期遺物出土状態	42
Fig.26	I地区 中期末～後期初頭平面(上段)、土器片敷遺構周辺(下段)	44
Fig.27	I地区 土器片敷遺構遺物出土状態	45
Fig.28	I地区 中期末～後期初頭土坑1	46
Fig.29	I地区 中期末～後期初頭落込み1(右)、2(左)	46
Fig.30	F地区 中期末～後期初頭遺物出土状態	47
Fig.31	F地区 後期遺物集中区三次元復元(東から)	49
Fig.32	F地区 後期遺物集中区平面および断面	50
Fig.33	F地区 後期遺物集中区内土器溜まり遺物出土状態	51
Fig.34	F地区 後期遺物集中区内石器集中区	51

Fig.35	E～G地区 後期遺物出土状態	53
Fig.36	A～D地区 繩文晚期～弥生前期遺物包含層	54～55
Fig.37	B地区 晩期～前期土坑1	55
Fig.38	B地区 晩期～前期土坑2	55
Fig.39	木の根および焼土塊の平面分布	56
Fig.40	C・D地区 繩文晚期～弥生前期遺物出土状態	57
Fig.41	F地区 晩期土器5	58
Fig.42	F地区 晩期～前期土器6	58
Fig.43	H地区 弥生前期土器群7	58
Fig.44	H地区 弥生土坑	59
Fig.45	H地区 弥生しがらみ	60
Fig.46	H地区 弥生平面	60
Fig.47	H地区 弥生土壤化層(水田)断面	60
Fig.48	H地区 弥生杭列	61
Fig.49	繩文土器 I～III群	64
Fig.50	繩文土器 III群	66
Fig.51	繩文土器 IV群(1)	68
Fig.52	繩文土器 IV群(2)	69
Fig.53	繩文土器 IV群(3)	70
Fig.54	繩文土器 IV群(4)	71
Fig.55	繩文土器 IV群(5)	73
Fig.56	繩文土器 IV群(6)	74
Fig.57	繩文土器 IV群(7)	75
Fig.58	繩文土器 IV群(8)	76
Fig.59	繩文土器 IV群(9)	77
Fig.60	繩文土器 IV群(10)	78
Fig.61	繩文土器 IV群(11)	80
Fig.62	繩文土器 IV群(12)	81
Fig.63	繩文土器 IV群(13)	82
Fig.64	繩文土器 IV群(14)	84
Fig.65	繩文土器 V群(1)	85
Fig.66	繩文土器 V群(2)	86
Fig.67	繩文土器 V群(3)	87
Fig.68	繩文土器 VI群、VII群(1)	89
Fig.69	繩文土器 VIII群(1)	90
Fig.70	繩文土器 VII群(2)、VIII群(2)	91
Fig.71	繩文土器 VIII群(3)	92
Fig.72	繩文土器 VIII群(4)	93

Fig.73	縄文土器 VIII群(5)	94
Fig.74	縄文土器 VIII群(6)	95
Fig.75	縄文土器 VIII群(7)	96
Fig.76	縄文土器 VIII群(8)	97
Fig.77	縄文土器 VIII群(9)	98
Fig.78	縄文土器 IX群(1)	99
Fig.79	縄文土器 IX群(2)、X群(1)	100
Fig.80	縄文土器 IX群(3)、X群(2)	101
Fig.81	縄文土器 XI群、XII群(1)	105
Fig.82	縄文土器 XII群(2)、XIII群(1)	106
Fig.83	縄文土器 XIII群(2)	107
Fig.84	縄文土器 XIII群(3)	108
Fig.85	縄文土器 XIII群(4)	109
Fig.86	縄文土器 XIII群(5)	110
Fig.87	縄文土器 XIII群(6)	111
Fig.88	縄文土器 XIII群(7)	112
Fig.89	縄文土器 XIII群(8)	113
Fig.90	縄文土器 XIII群(9)	115
Fig.91	縄文土器 XIII群(10)	116
Fig.92	弥生前期土器(1)	119
Fig.93	弥生前期土器(2)	120
Fig.94	弥生前期土器(3)	121
Fig.95	弥生中期土器	122
Fig.96	弥生土器底部	123
Fig.97	1990年度出土土器(1)	125
Fig.98	1990年度出土土器(2)	126
Fig.99	1990年度出土土器(3)	127
Fig.100	1990年度出土土器(4)	128
Fig.101	石器の計測基準	143
Fig.102	F地区 縄文時代後期打製石器(1) 石鏃、楔形石器、スクレイパー	147
Fig.103	F地区 縄文時代後期打製石器(2) 石核	148
Fig.104	F地区 縄文時代後期打製石器(3) 石核、二次加工のある剝片	149
Fig.105	F地区 縄文時代後期打製石器(4) 二次加工のある剝片、接合資料	150
Fig.106	F地区 縄文時代後期打製石器(5) 剥片(打点の残るもの)	151
Fig.107	F地区 縄文時代後期打製石器(6) 剥片(打点の残るもの)	152
Fig.108	F地区 縄文時代後期打製石器(7) 剥片(打点の残るもの)	153
Fig.109	F地区 縄文時代後期打製石器(8) 剥片(打点の残るもの)	154
Fig.110	F地区 縄文時代後期打製石器(9) 剥片(打点の残るもの)	155

Fig.111 F 地区 縄文時代後期打製石器(10) 二次加工のある剝片、剝片(打点の残らないもの)	156
Fig.112 F 地区 縄文時代後期打製石器(11) 剥片(打点の残らないもの)	157
Fig.113 F 地区 縄文時代後期打製石器(12) 剥片(打点の残らないもの)、碎片・チップ等	158
Fig.114 F 地区 縄文時代後期打製石器(13) 碎片・チップ等、破碎礫	159
Fig.115 打製石器(1) 国府型ナイフ形石器、翼状剝片、有舌尖頭器、尖頭器	160
Fig.116 打製石器(2) 尖頭器、石鏟	161
Fig.117 打製石器(3) 石鏟	162
Fig.118 打製石器(4) 石匙	163
Fig.119 打製石器(5) 石匙	164
Fig.120 打製石器(6) 石匙、スクレイパー	165
Fig.121 打製石器(7) 鋸齒縁石器、ノッチ、ドリル	166
Fig.122 打製石器(8) 両面加工石器、石槍?、楔形石器	167
Fig.123 打製石器(9) 楔形石器	168
Fig.124 打製石器(10) 楔形石器	169
Fig.125 打製石器(11) 楔形石器、二次加工のある剝片	170
Fig.126 打製石器(12) 二次加工のある剝片	171
Fig.127 打製石器(13) 二次加工のある剝片	172
Fig.128 打製石器(14) 二次加工のある剝片	173
Fig.129 打製石器(15) 二次加工のある剝片	174
Fig.130 打製石器(16) 二次加工のある剝片	175
Fig.131 I 地区出土石器(1) 国府型ナイフ形石器、有舌尖頭器、石鏟、二次加工のある剝片、スクレイパー、楔形石器	176
Fig.132 I 地区出土石器(2) 二次加工のある剝片、石核、剝片、碎片、石庖丁	177
Fig.133 磨製石器(1) 石錘、石棒、石庖丁	180
Fig.134 磨製石器(2) 石庖丁	181
Fig.135 磨製石器(3) 石庖丁、石斧	182
Fig.136 磨製石器(4) 敲石	183
Fig.137 磨製石器(5) 敲石	184
Fig.138 磨製石器(6) 敲石	185
Fig.139 磨製石器(7) 敲石	186
Fig.140 磨製石器(8) 凹石	187
Fig.141 磨製石器(9) 石皿	188
Fig.142 その他の遺物	194
Fig.143 周辺の地形と古墳時代の遺構	199
Fig.144 古墳時代河川・溝空間分布(1)	200
Fig.145 古墳時代河川・溝空間分布(2)	201
Fig.146 古墳時代溝断面(1)	202

Fig.147	古墳時代溝断面(2)	203
Fig.148	古墳時代溝断面(3)	204
Fig.149	小阪遺跡における一般的な河川重層関係(模式)	205
Fig.150	C地区 河川1遺物出土状況平面と主な出土遺物	206
Fig.151	C地区 河川1断面図および層序模式図	207
Fig.152	C地区 河川1遺物出土状態(1)	208
Fig.153	C地区 河川1遺物出土状態(2)	209～210
Fig.154	E地区 河川4断面	212
Fig.155	F地区 河川5断面	212
Fig.156	F地区 河川6断面	213
Fig.157	G地区 河川8断面	215
Fig.158	G地区 土坑39.40平面	216
Fig.159	G地区 土坑39上層遺物出土状況および断面	217
Fig.160	G地区 土坑40遺物出土状況および断面	217
Fig.161	F地区 溝24出土土器分布と主な出土遺物	219
Fig.162	G地区 溝30-b出土土器分布(1)と主な出土遺物	221
Fig.163	G地区 溝30-a出土土器分布(2)と主な出土遺物	223
Fig.164	G地区 溝30および32出土土器分布(3)と主な出土遺物	224
Fig.165	C地区 竪穴住居1平面と主な出土遺物	225
Fig.166	C地区 竪穴住居2・3平面	226
Fig.167	C地区 竪穴住居4床面検出状況と主な出土遺物	227
Fig.168	C地区 竪穴住居4竈施設 平面および断面	228
Fig.169	C地区 竪穴住居4基底面ピット群および断面	229
Fig.170	C地区 竪穴住居5床面検出状況と主な出土遺物	230
Fig.171	C地区 竪穴住居5鉄鏃出土状態	230
Fig.172	C地区 竪穴住居5柱穴・基底面ピット群および断面	231
Fig.173	C地区 竪穴住居6床面検出状況と主な出土遺物	232
Fig.174	C地区 竪穴住居6床面柱穴および断面	233
Fig.175	C地区 竪穴住居6基底面ピット群および断面	234
Fig.176	C地区 掘立柱建物1平面および断面	235
Fig.177	C地区 掘立柱建物2平面および断面	236
Fig.178	C地区 掘立柱建物3平面および断面	236
Fig.179	I地区 掘立柱建物4平面および断面	237
Fig.180	C地区 平地住居1平面	238
Fig.181	C地区 平地住居2平面	238
Fig.182	C地区 土坑2・5平面および断面と主な出土遺物	242
Fig.183	C地区 土坑8・14・15平面および断面と主な出土遺物	243
Fig.184	C地区 土坑19・21・22平面および断面と主な出土遺物	244

Fig.185	C地区 土坑35平面および断面と主な出土遺物	245
Fig.186	C地区 集落域と溝の機能	246
Fig.187	C地区 溝8出土土器分布	248
Fig.188	C地区 溝8遺物出土状態	248
Fig.189	C地区 溝11出土遺物分布と主な出土遺物	249
Fig.190	C地区 溝11勾玉出土状態	250
Fig.191	E地区 溝17,18出土遺物分布と主な出土遺物	251
Fig.192	C地区 方形周溝状遺構1,2平面	251
Fig.193	C地区 井戸1平面・断面と主な出土遺物	252
Fig.194	C地区 木根痕	253
Fig.195	H地区 灰原除去後の地形	254
Fig.196	H地区 灰原断面	254
Fig.197	G地区 河川8内しがらみ立面	255
Fig.198	G地区 河川8内しがらみ・溝33出土遺物分布と主な出土遺物	256
Fig.199	H地区 水田平面および断面	258
Fig.200	G地区 土坑40出土遺物	259
Fig.201	G地区 溝30-a出土遺物(1)	260
Fig.202	G地区 溝30-a出土遺物(2)	262
Fig.203	G地区 溝30-a出土遺物(3)	263
Fig.204	G地区 溝30-b出土遺物	264
Fig.205	G地区 溝30と河川8との合流点出土遺物	264
Fig.206	G地区 溝32出土遺物	265
Fig.207	F地区 溝24出土遺物(1)	266
Fig.208	F地区 溝24出土遺物(2)	267
Fig.209	G地区 河川8左岸肩部遺物群1出土遺物	268
Fig.210	G地区 河川8遺物群2出土遺物	269
Fig.211	15Gトレンチ 溝30、各地区上部包含層出土遺物	270
Fig.212	C地区 壓穴住居1出土遺物	271
Fig.213	C地区 壓穴住居4出土遺物	271
Fig.214	C地区 壓穴住居5出土遺物	272
Fig.215	C地区 壓穴住居6出土遺物	274
Fig.216	C地区 ピット18,ピット143,土坑4、他出土遺物	275
Fig.217	C地区 井戸1出土遺物(1)	276
Fig.218	C地区 井戸1出土遺物(2)	277
Fig.219	C地区 土坑5出土遺物	279
Fig.220	C地区 土坑8出土遺物	280
Fig.221	C地区 土坑14出土遺物	281
Fig.222	C地区 土坑19出土遺物	282

Fig.223 C地区 土坑35出土遺物	282
Fig.224 B～C地区 溝3出土遺物	283
Fig.225 C地区 溝8出土遺物	284
Fig.226 C地区 溝11出土遺物(1)	286
Fig.227 C地区 溝11出土遺物(2)	287
Fig.228 E地区 溝17、F地区 溝23出土遺物	288
Fig.229 C地区 木根痕出土遺物	289
Fig.230 C地区 包含層出土遺物	289
Fig.231 C地区 河川1遺物群1出土遺物(1)	291
Fig.232 C地区 河川1遺物群1出土遺物(2)	292
Fig.233 C地区 河川1遺物群2出土遺物	293
Fig.234 C地区 河川1遺物群3出土遺物(1)	294
Fig.235 C地区 河川1遺物群3出土遺物(2)	295
Fig.236 C地区 河川1遺物群4出土遺物(1)	296
Fig.237 C地区 河川1遺物群4出土遺物(2)	298
Fig.238 C地区 河川1遺物群5出土遺物(1)	300
Fig.239 C地区 河川1遺物群5出土遺物(2)	301
Fig.240 C地区 河川1青灰色シルト層出土遺物(1)	302
Fig.241 C地区 河川1青灰色シルト層出土遺物(2)	303
Fig.242 C地区 河川1砂礫層出土遺物	303
Fig.243 C地区 河川1出土遺物拓本(1)	304
Fig.244 C地区 河川1出土遺物拓本(2)	305
Fig.245 C地区 河川1出土遺物拓本(3)	306
Fig.246 C地区 河川1出土遺物拓本(4)	307
Fig.247 C地区 河川1出土遺物拓本(5)	307
Fig.248 C地区 土坑2出土遺物	308
Fig.249 D地区 土坑37出土遺物	308
Fig.250 G地区 溝33出土遺物	308
Fig.251 G地区 溝27.28出土遺物	309
Fig.252 G地区 河川8下層出土遺物(1)	311
Fig.253 G地区 河川8下層出土遺物(2)	313
Fig.254 G地区 河川8下層出土遺物(3)	314
Fig.255 G地区 河川8下層出土遺物(4)	316
Fig.256 G地区 河川8下層出土遺物(5)	318
Fig.257 G地区 河川8下層出土遺物(6)	320
Fig.258 G地区 河川8下層出土遺物(7)	322
Fig.259 G地区 河川8下層出土遺物(8)	324
Fig.260 G地区 河川8下層出土遺物(9)	325

Fig.261	G地区 河川8下層出土遺物(10)	326
Fig.262	G地区 河川8下層出土遺物(11)	327
Fig.263	G地区 河川8下層出土遺物(12)	328
Fig.264	G地区 河川8上層出土遺物(1)	330
Fig.265	G地区 河川8上層出土遺物(2)	332
Fig.266	G地区 河川8上層出土遺物(3)	333
Fig.267	G地区 河川8上層出土遺物(4)	336
Fig.268	G地区 河川8上層出土遺物(5)	338
Fig.269	G地区 河川8上層出土遺物(6)	340
Fig.270	G地区 河川8上層出土遺物(7)	341
Fig.271	G地区 河川8上層出土遺物(8)	342
Fig.272	G地区 河川8上層出土遺物(9)	343
Fig.273	G地区 河川8上層出土遺物(10)	344
Fig.274	G地区 河川8下層出土遺物拓本(1)	345
Fig.275	G地区 河川8下層出土遺物拓本(2)	346
Fig.276	G地区 河川8上層出土遺物拓本(1)	347
Fig.277	G地区 河川8上層出土遺物拓本(2)	348
Fig.278	H地区 古代河川7出土埴輪	349
Fig.279	G・I地区 出土埴輪(1)	350
Fig.280	G・I地区 出土埴輪(2)	351
Fig.281	H地区 灰原出土遺物(1)	353
Fig.282	H地区 灰原出土遺物(2)	355
Fig.283	H地区 灰原出土遺物(3)	356
Fig.284	H地区 灰原出土遺物(4)	358
Fig.285	H地区 灰原出土遺物(5)	359
Fig.286	H地区 灰原出土遺物(6)	360
Fig.287	H地区 灰原出土遺物(7)	362
Fig.288	H地区 灰原出土遺物(8)	363
Fig.289	H地区 灰原出土遺物(9)	365
Fig.290	H地区 灰原出土遺物(10)	367
Fig.291	H地区 灰原出土遺物(11)	369
Fig.292	H地区 灰原出土遺物(12)	370
Fig.293	H地区 灰原出土遺物(13)	371
Fig.294	H地区 灰原出土遺物(14)	373
Fig.295	H地区 灰原出土遺物(15)	374
Fig.296	H地区 灰原出土遺物(16)	376
Fig.297	H地区 灰原出土遺物(17)	377
Fig.298	H地区 灰原出土遺物(18)	378

Fig.299 H地区 灰原出土遺物(19)	379
Fig.300 H地区 灰原出土遺物(20)	380
Fig.301 H地区 灰原出土遺物(21)	381
Fig.302 H地区 灰原出土遺物(22)	382
Fig.303 H地区 灰原出土遺物(23)	383
Fig.304 H地区 灰原出土遺物(24)	384
Fig.305 H地区 灰原出土遺物(25)	386
Fig.306 H地区 灰原出土遺物(26)	387
Fig.307 H地区 灰原出土遺物(27)	389
Fig.308 H地区 灰原出土遺物(28)	391
Fig.309 H地区 灰原出土遺物(29)	393
Fig.310 H地区 灰原出土遺物分類1	395
Fig.311 H地区 灰原出土遺物分類2(1)	395
Fig.312 H地区 灰原出土遺物分類2(2)	396
Fig.313 H地区 灰原出土遺物分類3(1)	397
Fig.314 H地区 灰原出土遺物分類3(2)	398
Fig.315 H地区 灰原出土甕分類図	398
Fig.316 H地区 灰原出土須恵器器種構成	405
Fig.317 [坏身] 主成分分析・合成変量プロット	406
Fig.318 [坏蓋] 主成分分析・合成変量プロット	407
Fig.319 主成分分析による蓋坏の形態モデル	408
Fig.320 蓋坏各部計測値による相関係数と相関散布	409
Fig.321 蓋坏のデンドログラム	410
Fig.322 周辺の地形と古代の遺構	415
Fig.323 古代河川・溝空間分布(1)	416
Fig.324 古代河川・溝空間分布(2)	417
Fig.325 G地区 河川6内水田状遺構断面	418
Fig.326 I地区 河川8断面	419
Fig.327 C・F地区 谷状地形断面	420
Fig.328 C地区 掘立柱建物1平面	421
Fig.329 C地区 掘立柱建物2平面	421
Fig.330 C地区 掘立柱建物3平面および断面	422
Fig.331 F地区 掘立柱建物4平面	423
Fig.332 F地区 土坑15平面および断面	424
Fig.333 I地区 土坑16~22平面および断面	424
Fig.334 D地区 落込み群平面	425
Fig.335 F地区 溝1~5平面および断面	426
Fig.336 F地区 木樁出土状態	427

Fig.337	F地区 木樁出土状態	427
Fig.338	G地区 溝6.7.8.9平面および断面	428
Fig.339	I地区 水田平面および旧地形推定コンタ図	429
Fig.340	I地区 土壌化層(水田)断面	430
Fig.341	I地区 水田検出状況	431
Fig.342	F地区 古代谷状地と水利施設	434
Fig.343	F地区 しがらみ2平面および断面	435
Fig.344	F地区 しがらみ1平面および見通し図	436
Fig.345	F地区 ダム状土盛り断面	437
Fig.346	C地区 掘立柱建物、I地区 溝10、G地区 水田出土遺物	439
Fig.347	I地区 水田出土遺物	439
Fig.348	C地区 河川1出土遺物(1)	440
Fig.349	C地区 河川1出土遺物(2)	440
Fig.350	E地区 河川2出土遺物	440
Fig.351	E地区 河川3出土遺物	440
Fig.352	F地区 河川4出土遺物	441
Fig.353	F・G地区 河川5出土遺物(1)	442
Fig.354	F・G地区 河川5出土遺物(2)	443
Fig.355	G地区 河川6出土遺物(1)	444
Fig.356	G地区 河川6出土遺物(2)	445
Fig.357	H地区 河川7出土遺物	445
Fig.358	I地区 河川8出土遺物(1)	446
Fig.359	I地区 河川8出土遺物(2)	447
Fig.360	A地区 落込み1出土遺物	449
Fig.361	C地区 谷状地形1出土遺物	449
Fig.362	F地区 谷状地形2出土遺物	449
Fig.363	G地区 包含層出土遺物	449
Fig.364	E・F・I地区 包含層出土遺物	450
Fig.365	周辺の地形と中・近世の遺構	453
Fig.366	中・近世河川と大畦畔・鋤溝の方向(1)	454
Fig.367	中・近世河川と大畦畔・鋤溝の方向(2)	455
Fig.368	I地区 粘土採掘坑平面および断面	456
Fig.369	I地区 火葬土壙平面および断面と見通し図	457
Fig.370	I地区 溝1土坑1・2平面および断面	458
Fig.371	H地区 導水管平面および見通し図	459
Fig.372	H地区 土坑出土遺物	461
Fig.373	H地区 導水管出土遺物	461
Fig.374	E地区 河川1出土遺物	462

Fig.375 I 地区 河川 2 出土遺物(1)	463
Fig.376 I 地区 河川 2 出土遺物(2)	464
Fig.377 G 地区 中世包含層(I - 5 層)出土遺物	465
Fig.378 G 地区 中世包含層(I - 4 層)出土遺物	466
Fig.379 各地区 中世包含層出土遺物(1)	467
Fig.380 各地区 中世包含層出土遺物(2)	467
Fig.381 各地区 中世包含層出土遺物(3)	468
Fig.382 各地区 中・近世包含層出土遺物	469
Fig.383 各地区 近世包含層出土遺物	470
第II部 自然科学的調査の成果	
Fig.384 試料採取地点の位置図	474
Fig.385 地形環境分析の手順	480
Fig.386 地形面分類図	482
Fig.387 石津川中・下流域地形帶分類図	484
Fig.388 完新世段丘面と条里型土地割	485
Fig.389 古代末における段丘化と地形環境・土地開発	487
Fig.390 小阪遺跡周辺微地形図	488
Fig.391 小阪遺跡周辺微地形分類図	490
Fig.392 小阪遺跡(I 地区)表層地質断面図(南一北)	491
Fig.393 石津川周辺における登窯の分布	495
Fig.394 陶器川流域の時期別窯数	496
Fig.395 サンプリング採集地点(分層および記載: 大阪文化財センター)	502
Fig.396 ソフト X 線立体写真撮影法	503
Fig.397 遺跡の地震跡模式図	511
Fig.398 古文書と遺跡の地震跡から推定される巨大地震の発生時期	512
Fig.399 近畿の主要活断層と遺跡の地震跡	513
Fig.400 サブトレチ 5 - 8 ・ 5 - 9 の位置	515
Fig.401 サブトレチ 5 - 9 の北西側壁面の液状化跡	515
Fig.402 液状化層と噴砂の粒度組成	516
Fig.403 サブトレチ 5 - 9 の南東側壁面の液状化跡	517
Fig.404 サブトレチ 5 - 8 の北東側壁面の液状化跡	517
Fig.405 花粉ダイヤグラム	521
Fig.406 15F トレチ試料採取地点の地質柱状図	526
Fig.407 15F トレチ b 地点のセクション図	526
Fig.408 15F トレチ a 地点の主要花粉化石分布図	529
Fig.409 15F トレチ b 地点の主要花粉化石分布図	529
Fig.410 15F トレチ d 地点の主要花粉化石分布図	531
Fig.411 試料採取地点	536

Fig.412 プラント・オパール分析結果 1	538
Fig.413 プラント・オパール分析結果 2	539
Fig.414 I 地区 14 I トレンチ縄文時代河川28北岸断面	546～547
Fig.415 I 地区 縄文時代河川30中央セクション東西方向断面	548
Fig.416 15 F トレンチ 試料採取地点の地質柱状図	552
Fig.417 15 F トレンチ b 地点のセクション図	553
Fig.418 I 地区 縄文時代河川30中央セクション東西方向断面	554
Fig.419 I 地区 14 I トレンチ縄文時代河川28北岸断面	556～557
Fig.420 小阪遺跡における試料採取地点の位置	561
Fig.421 小阪遺跡における9.19.20.25.26.31.35各調査地点の模式柱状図	562
Fig.422 E 地区 4 E トレンチ南壁(9地点)における断面および試料採取位置	562
Fig.423 F 地区 16 F トレンチ北壁(19地点)における断面および試料採取位置	563
Fig.424 F 地区 16 F トレンチ南壁(20地点)における断面および試料採取位置	564
Fig.425 G 地区 11 G トレンチ東壁(26地点)における断面および試料採取位置	564
Fig.426 I 地区 13 I トレンチ東壁(35地点)における断面および試料採取位置	565
Fig.427 小阪遺跡における9.19.20.25.26.31.35各地点における分析試料採取層準	566
Fig.428 G 地区 30地点における主要珪藻化石の層位分布	567
Fig.429 E 地区 9 地点における主要珪藻化石の層位分布	568
Fig.430 F 地区 19地点における主要珪藻化石の層位分布	568
Fig.431 F 地区 20地点における主要珪藻化石の層位分布	569
Fig.432 G 地区 26地点における主要珪藻化石の層位分布	570
Fig.433 I 地区 35地点における主要珪藻化石の層位分布	570
Fig.434 E 地区 9 地点における主要花粉化石の層位分布	572
Fig.435 F 地区 19地点における主要花粉化石の層位分布	573
Fig.436 F 地区 20地点における主要花粉化石の層位分布	574
Fig.437 G 地区 25.26地点における主要花粉化石の層位分布	575
Fig.438 E 地区 7 地点における主要花粉化石の層位分布	575
Fig.439 F 地区 19地点における植物珪酸体の層位分布	576
Fig.440 F 地区 20地点における植物珪酸体の層位分布	577
Fig.441 G 地区 25.26地点における植物珪酸体の層位分布	577
Fig.442 E 地区 7 地点における植物珪酸体組成の層位分布	578
Fig.443 ガスカウンターの特性曲線の例	589
Fig.444 K, Ca, Fe, Rb, Sr, Zrの含有率にもとづく分類樹	601
Fig.445 Qt-Pt 相関図（総括図）	607
Fig.446 三角ダイヤグラム(1)	608
Fig.447 三角ダイヤグラム(2)	609
Fig.448 菱形ダイヤグラム(1)	610
Fig.449 菱形ダイヤグラム(2)	611

Fig.450 Qt-P ℓ 相関図（縄文時代後期～晩期）	612
Fig.451 Qt-P ℓ 相関図（古墳時代）	613
Fig.452 大阪陶邑群と内谷洞群の相互識別（K,Ca,Rb,Sr因子使用）	615
Fig.453 小阪遺跡出土硬質土器の産地推定（K,Ca,Rb,Sr因子使用）	616
Fig.454 小阪遺跡出土硬質土器のRb-Sr分布図	616
Fig.455 土器試料胎土重鉱物組成	624
Fig.456 土器試料胎土重鉱物組成	626
Fig.457 土器試料胎土重鉱物組成	627
Fig.458 土器試料胎土重鉱物組成（グループ別）	628
Fig.459 土器試料胎土重鉱物組成（グループ別）	629
Fig.460 土器試料胎土重鉱物組成（グループ別）	630
Fig.461 自然堆積物試料胎土重鉱物組成	631
Fig.462 自然堆積物試料胎土重鉱物組成	631
Fig.463 自然堆積物試料胎土重鉱物組成（地域別）	632
Fig.464 試料の出土または採取地とその地域分けおよび和泉地域周辺の基盤地質概略	633
第III部 考 察	
Fig.465 資料の計測基準	671
Fig.466 主成分得点散布図（その1）	673
Fig.467 数量化III類 カテゴリー数量散布図	673
Fig.468 数量化III類 個体数量散布図	674
Fig.469 主成分得点散布図（その2）	674
Fig.470 遺物投影面積ヒストグラム	675
Fig.471 出土剝片	680
Fig.472 小阪遺跡出土北白川C式土器の各器種	685
Fig.473 各遺跡出土の北白川C式土器	691
Fig.474 浮線紋(系)土器出土遺跡分布図	697
Fig.475 西日本出土の浮線紋(系)土器	700
Fig.476 東雲遺跡 溝-1出土土師器	706
Fig.477 東雲遺跡 溝-2出土土師器	708
Fig.478 池上遺跡出土土師器	710
Fig.479 豊中遺跡出土土師器	712
Fig.480 府中遺跡出土土師器	714
Fig.481 小阪遺跡出土須恵器分類	725～726
Fig.482 小阪遺跡出土土師器分類	727～728
Fig.483 出土器台とI類	730
Fig.484 爐形器台	731
Fig.485 西部慶南タイプ爐形器台	732
Fig.486 高坏型器台II類～VI類	733

Fig.487 墳輪による段階別 古墳出土須恵器編年表	741
Fig.488 陶邑窯跡群 初期須恵器坏身変遷推移	745
Fig.489 陶邑窯跡群 初期須恵器甕変遷推移	747
終章	
Fig.490 古墳時代集落復元図	760

表 目 次

Tab. 1 新旧トレンチ名対照表	6
Tab. 2 新旧遺構名対照表(1) 縄文～弥生時代遺構	24
Tab. 3 新旧遺構名対照表(2) 古墳時代遺構①	25
Tab. 4 新旧遺構名対照表(3) 古墳時代遺構②	26
Tab. 5 新旧遺構名対照表(4) 古代遺構	26
Tab. 6 新旧遺構名対照表(5) 中世以降遺	26
Tab. 7 角閃石を含む土器の数量	133
Tab. 8 縄文～弥生時代土器一覧表(1)	135
Tab. 9 縄文～弥生時代土器一覧表(2)	136
Tab.10 縄文～弥生時代土器一覧表(3)	137
Tab.11 縄文～弥生時代土器一覧表(4)	138
Tab.12 縄文～弥生時代土器一覧表(5)	139
Tab.13 縄文～弥生時代土器一覧表(6)	140
Tab.14 縄文～弥生時代土器一覧表(7)	141
Tab.15 縄文～弥生時代土器一覧表(8)	142
Tab.16 石器出土総数	143
Tab.17 石器の計測基準表	143
Tab.18 石器一覧表(1) 石鏃	189
Tab.19 石器一覧表(2) 楔形石器	189
Tab.20 石器一覧表(3) スクレイパー	189
Tab.21 石器一覧表(4) 二次加工のある剝片	189
Tab.22 石器一覧表(5) 石核	189
Tab.23 石器一覧表(6) 剥片①	189
Tab.24 石器一覧表(6) 剥片②	190
Tab.25 石器一覧表(7) 碎片・チップ・その他	190
Tab.26 石器一覧表(8) その他の石器①	191
Tab.27 石器一覧表(8) その他の石器②	192
Tab.28 石器一覧表(8) その他の石器③	193
Tab.29 石器一覧表(9) 磨製石器	193
Tab.30 古墳時代ピット一覧表(1)	239

Tab.31	古墳時代ピット一覧表(2)	240
Tab.32	古墳時代ピット一覧表(3)	241
Tab.33	溝30-a 出土土器器種構成	261
Tab.34	抽出資料の総量と構成比	404
Tab.35	〔环身〕各部計測値	406
Tab.36	〔环蓋〕各部計測値	406
Tab.37	〔环身〕カテゴリカル・データ	408
Tab.38	〔环蓋〕カテゴリカル・データ	409
Tab.39	小阪遺跡と伏尾遺跡の比較一覧	412
Tab.40	古代ピット一覧表	423
Tab.41	自然科学的調査一覧	472
Tab.42	小阪遺跡試料採取一覧	474.475
Tab.43	小阪遺跡の火山灰諸特性と広域テフラとの比較	506
Tab.44	重鉱物分析結果一覧表	507
Tab.45	火山ガラス屈折率測定結果一覧表	507
Tab.46	鉱物の屈折率測定結果一覧表	507
Tab.47	火山ガラス屈折率データ・シート	508
Tab.48	鉱物片の最大屈折率データ・シート	509
Tab.49	小阪遺跡の花粉・胞子出現表	522
Tab.50	15F トレンチ a・b 地点の産出花粉化石一覧表	528
Tab.51	15F トレンチ d 地点の産出花粉化石一覧表	530
Tab.52	基本層序	536
Tab.53	小阪遺跡から産出した大型植物化石	550
Tab.54	A・D地区とF地区一部の樹種同定結果	551
Tab.55	F地区のa・b・d地点の木材化石産出表	552
Tab.56	I地区の木材化石産出表	554
Tab.57	I地区 繩文時代河川30中央セクション東西方向断面(Fig.418)中の木材の樹種	556
Tab.58	I地区 14I トレンチ縄文時代河川28北岸断面(Fig.419)中の木材の樹種	557
Tab.59	I地区 35地点の花粉分析結果	576
Tab.60	¹⁴ C年代測定結果の比較	589
Tab.61	¹⁴ C年代試料一覧表	589.590
Tab.62	¹⁴ C年代試料一覧表	593
Tab.63	分析試料	595
Tab.64	土器の含有岩石鉱物(1)	597
Tab.65	土器の含有岩石鉱物(2)	598
Tab.66	胎土の元素含有率	600
Tab.67	各元素の含有率	600
Tab.68	分析結果(1)	604

Tab.69	分析結果(2)	605
Tab.70	H地区 灰原出土須恵器胎土分析試料一覧表	617
Tab.71	分析データ	618
Tab.72	胎土重鉱物分析試料表(土器試料)その1	621
Tab.73	胎土重鉱物分析試料表(土器試料)その2	622
Tab.74	胎土重鉱物分析試料表(自然堆積物試料)	623
Tab.75	土器試料胎土重鉱物組成	624
Tab.76	土器試料胎土重鉱物組成	624
Tab.77	土器試料胎土重鉱物組成	625
Tab.78	土器試料胎土重鉱物組成	625
Tab.79	土器試料胎土重鉱物組成	627
Tab.80	自然堆積物試料胎土重鉱物組成	631
Tab.81	自然堆積物試料胎土重鉱物組成	631
Tab.82	属性カテゴリー一覧	672
Tab.83	相関関係と関連の程度	672
Tab.84	定量的属性の相関係数	672
Tab.85	因子負荷量と寄与率	672
Tab.86	剝片の形状と打面	677
Tab.87	剝片の形状と縁辺部の状態	677
Tab.88	剝片の形状と大きさ(自然面打面)	677
Tab.89	剝片の形状と大きさ(剝離面打面)	677
Tab.90	剝片の形状と背面の状態(自然面打面)	677
Tab.91	剝片の形状と背面の状態(剝離面打面)	677
Tab.92	属性一覧	679
Tab.93	各型式間の並行関係	682
Tab.94	各遺跡における北白川C式土器の器種構成	692
Tab.95	縄紋時代晩期から弥生時代前期編年対応関係試案	703
Tab.96	総合一覧表	762

写 真 目 次

写真1.	京都府八幡市木津川河床遺跡の液状化跡	514
写真2.	東大阪市池島・福万寺遺跡の液状化跡	514
写真3.	サブトレンチ5-9の北西壁面の液状化跡	514
写真4.	サヌカイトの鉱物組成	639
写真5.	ソフトX線の特性	640
写真6.	ソフトX線写真	641
写真7.	ソフトX線写真(実体視可)	642

写真8. 花粉化石の顕微鏡写真1	643
写真9. 花粉化石の顕微鏡写真2	644
写真10. 植物遺体化石の電子顕微鏡写真	645
写真11. 小阪遺跡15F トレンチの花粉化石1	646
写真12. 小阪遺跡15F トレンチの花粉化石2	647
写真13. プラント・オパール、その他	648
写真14. 小阪遺跡の大型植物化石1	649
写真15. 小阪遺跡の大型植物化石2	650
写真16. 小阪遺跡の大型植物化石3	651
写真17. 小阪遺跡の木材化石	652
写真18. 珪藻化石の顕微鏡写真1	653
写真19. 珪藻化石の顕微鏡写真2	654
写真20. 珪藻化石の顕微鏡写真3	655
写真21. 花粉化石の顕微鏡写真1	656
写真22. 花粉化石の顕微鏡写真2	657
写真23. 花粉化石の顕微鏡写真3	658
写真24. 花粉化石の顕微鏡写真4	659
写真25. 植物珪酸体の顕微鏡写真	660
写真26. 試料番号1～8のS E M像	661
写真27. 土器の胎土組成と含有岩石鉱物1	662
写真28. 土器の胎土組成と含有岩石鉱物2	663
写真29. 重鉱物1	664
写真30. 重鉱物2	665
写真31. 重鉱物3	666
写真32. 重鉱物4	667
写真33. 重鉱物5	668
写真34. 重鉱物6	669
写真35. 重鉱物7	670

写 真 図 版 目 次

P.L. 1 調査地遠景	P.L. 8 繩文中期末～後期初頭遺構
P.L. 2 調査地近景	P.L. 9 繩文中期末～後期初頭遺構
P.L. 3 繩文時代河川	P.L. 10 繩文中期末～後期遺構
P.L. 4 繩文時代遺構	P.L. 11 繩文後期遺構
P.L. 5 繩文時代河川	P.L. 12 繩文後期遺構
P.L. 6 繩文時代河川	P.L. 13 繩文後期遺構
P.L. 7 繩文早・前期以前景観	P.L. 14 繩文後期～晩期遺構

P.L. 15	縄文晚期遺構	P.L. 53	縄文土器
P.L. 16	弥生時代遺構	P.L. 54	縄文土器
P.L. 17	弥生時代遺構	P.L. 55	縄文土器
P.L. 18	古墳時代遺構	P.L. 56	縄文土器
P.L. 19	古墳時代遺構	P.L. 57	縄文土器
P.L. 20	古墳時代河川	P.L. 58	縄文土器
P.L. 21	古墳前期溝	P.L. 59	縄文土器
P.L. 22	古墳前期溝	P.L. 60	縄文土器
P.L. 23	古墳前期溝	P.L. 61	縄文土器
P.L. 24	古墳前期遺構	P.L. 62	縄文土器
P.L. 25	古墳中期集落	P.L. 63	縄文土器
P.L. 26	古墳中期遺構	P.L. 64	縄文土器
P.L. 27	古墳中期遺構	P.L. 65	縄文土器
P.L. 28	古墳中期遺構	P.L. 66	縄文土器
P.L. 29	古墳中期遺構	P.L. 67	縄文土器
P.L. 30	古墳中期遺構	P.L. 68	縄文土器
P.L. 31	古墳中期遺構	P.L. 69	縄文土器
P.L. 32	古墳中期遺構	P.L. 70	縄文土器
P.L. 33	古墳中期遺構	P.L. 71	縄文土器
P.L. 34	古墳中期遺構	P.L. 72	縄文土器
P.L. 35	古墳中期遺構	P.L. 73	縄文土器
P.L. 36	古墳中期遺構	P.L. 74	縄文土器
P.L. 37	古墳中期遺構	P.L. 75	縄文土器
P.L. 38	古墳中期遺構	P.L. 76	縄文土器
P.L. 39	古墳中期遺構	P.L. 77	縄文土器
P.L. 40	古墳中～後期遺構	P.L. 78	縄文土器
P.L. 41	古墳中～後期遺構	P.L. 79	縄文土器
P.L. 42	古墳中～後期遺構	P.L. 80	縄文土器
P.L. 43	古墳中～後期遺構	P.L. 81	縄文土器
P.L. 44	古代の遺構	P.L. 82	縄文土器
P.L. 45	古代の遺構	P.L. 83	縄文土器
P.L. 46	古代の遺構	P.L. 84	縄文土器
P.L. 47	古代の遺構	P.L. 85	縄文土器
P.L. 48	古代の遺構	P.L. 86	縄文土器
P.L. 49	古代の遺構	P.L. 87	縄文土器
P.L. 50	中・近世の遺構	P.L. 88	縄文土器
P.L. 51	中・近世の遺構	P.L. 89	縄文土器
P.L. 52	中・近世の遺構	P.L. 90	縄文土器

P.L. 91	縄文土器	P.L. 129	打製石器
P.L. 92	縄文土器	P.L. 130	打製石器
P.L. 93	縄文土器	P.L. 131	打製石器
P.L. 94	縄文土器	P.L. 132	打製石器
P.L. 95	縄文土器	P.L. 133	打製石器
P.L. 96	縄文土器	P.L. 134	打製石器
P.L. 97	縄文土器	P.L. 135	打製石器
P.L. 98	縄文土器	P.L. 136	打製石器
P.L. 99	縄文土器	P.L. 137	打製石器
P.L. 100	縄文土器	P.L. 138	打製石器
P.L. 101	縄文土器	P.L. 139	打製石器
P.L. 102	縄文土器	P.L. 140	打製石器
P.L. 103	縄文土器	P.L. 141	磨製石器
P.L. 104	縄文土器	P.L. 142	磨製石器
P.L. 105	縄文土器	P.L. 143	磨製石器
P.L. 106	縄文土器	P.L. 144	磨製石器
P.L. 107	縄文土器	P.L. 145	磨製石器
P.L. 108	縄文土器	P.L. 146	磨製石器
P.L. 109	縄文土器	P.L. 147	古墳前期遺物
P.L. 110	縄文土器	P.L. 148	古墳前期遺物
P.L. 111	縄文土器	P.L. 149	古墳前期遺物
P.L. 112	縄文土器	P.L. 150	古墳前期遺物
P.L. 113	弥生土器	P.L. 151	古墳中期遺物
P.L. 114	弥生土器	P.L. 152	古墳中期遺物
P.L. 115	弥生土器	P.L. 153	古墳中期遺物
P.L. 116	弥生土器	P.L. 154	古墳中期遺物
P.L. 117	弥生土器	P.L. 155	古墳中期遺物
P.L. 118	弥生土器	P.L. 156	古墳中期遺物
P.L. 119	縄文土器(1990年度分)	P.L. 157	古墳中期遺物
P.L. 120	縄文土器(1990年度分)	P.L. 158	古墳中期遺物
P.L. 121	縄文土器(1990年度分)	P.L. 159	古墳中期遺物
P.L. 122	その他の遺物	P.L. 160	古墳中期遺物
P.L. 123	打製石器	P.L. 161	古墳中期遺物
P.L. 124	打製石器	P.L. 162	古墳中期遺物
P.L. 125	打製石器	P.L. 163	古墳中期遺物
P.L. 126	打製石器	P.L. 164	古墳中期遺物
P.L. 127	打製石器	P.L. 165	古墳中期遺物
P.L. 128	打製石器	P.L. 166	古墳中期遺物

P.L. 243	古墳中期～後期遺物	P.L. 253	古代遺物
P.L. 244	古墳中期～後期遺物	P.L. 254	古代遺物
P.L. 245	古墳中期～後期遺物	P.L. 255	古代遺物
P.L. 246	古墳中期～後期遺物	P.L. 256	古代遺物
P.L. 247	古墳中期～後期遺物	P.L. 257	中～近世遺物
P.L. 248	古墳中期～後期遺物	P.L. 258	中世遺物
P.L. 249	古代遺物	P.L. 259	中世遺物
P.L. 250	古代遺物	P.L. 260	中～近世遺物
P.L. 251	古代遺物	P.L. 261	中～近世遺物
P.L. 252	古代遺物	P.L. 262	中～近世遺物

付 図 目 次

- 付図 1. 繩文時代～弥生時代遺構全体図
- 付図 2. 古墳時代遺構全体図
- 付図 3. 古代遺構全体図

序章 調査の概要と遺跡の立地

1. 調査の概要

1) 発掘調査に至る経過

近畿自動車道松原海南線（通称・和歌山線）は、近畿自動車道天理吹田線の松原ジャンクションより南に分岐し、和歌山県海南市に至る高速国道である。一方、府道松原泉大津線は、府道中央環状線の美原ロータリーより南に分岐し、泉大津市助松で府道大阪臨海線と結ぶ都市計画道路である。この両道は、美原ロータリーから堺市小阪まで併設され、中央に高架橋方式の高速道路、両側に平面方式の府道が建設される。

この道路建設予定地には多くの遺跡の存在が予想されたため、早くよりその取扱いについて大阪府教育委員会、大阪府土木部、日本道路公団大阪建設局等の関係機関の間で協議が続けられてきた。その内の府道堺かつらぎ線（泉北2号線）以西の松原泉大津線単独区間については、1974年度に（財）大阪文化財センター（以下、センターと略す）により周知の和泉市・高石市・泉大津市の大園遺跡、和泉市観音寺遺跡の試掘調査とそれ以外の路線内の分布調査を実施した¹⁾。この分布調査によって、鶴田池東・西浦橋・菱木下・万崎池・太平寺遺跡が新たに発見された。これらの遺跡の内、大園²⁾・観音寺³⁾・鶴田池東⁴⁾・西浦橋遺跡（西半部）⁵⁾については、大阪府教育委員会の手により順次本調査が実施されている。また、西浦橋（東半部）・菱木下・万崎池・太平寺遺跡については、センターにより1980～1983年度に本調査を実施している⁶⁾。

泉北2号線以東の併設区間については、1974年度にセンターによる予備的な分布調査が実施され、確認された遺跡の内、真福寺遺跡について1975年度にセンターによる試掘調査が実施されている⁷⁾。その後、1977年度に大阪府教育委員会により再度分布調査が実施され、多くの遺跡の存在が確認された。その結果を受けて、関係機関の間で協議が進められ、出来るだけ路線が埋蔵文化財を避けるとともに、や

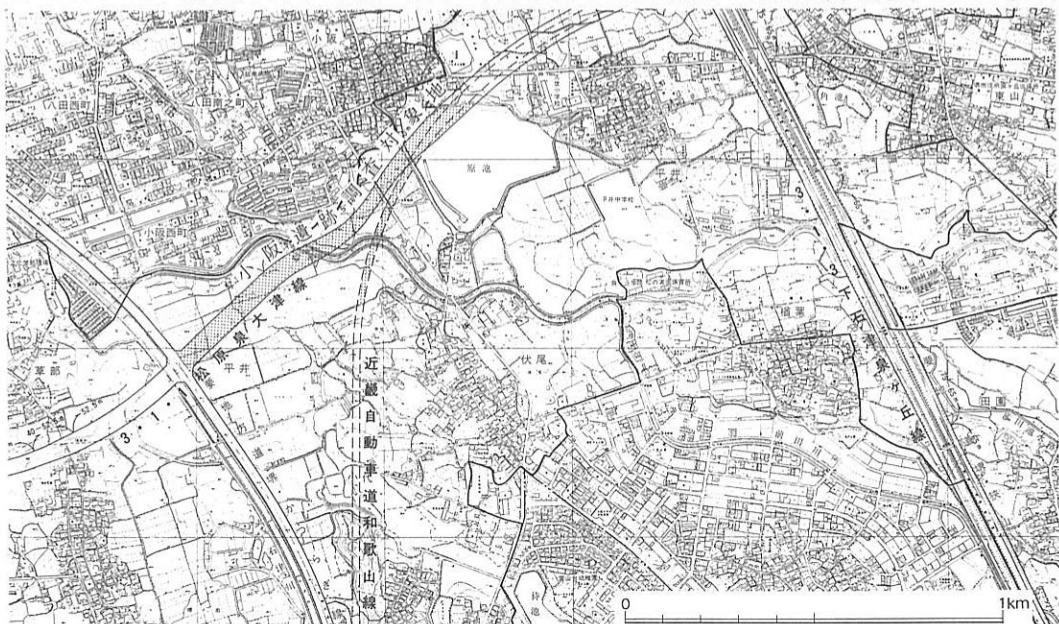


Fig. 1 周辺の都市計画図

1. 調査の概要

むを得ず路線内にかかる遺跡については発掘調査を実施することになった。現地調査は、大阪府教育委員会の指導の下に引き続きセンターが担当することになり、1981年12月に大阪府教育委員会・大阪府土木部・日本道路公団大阪建設局・センターの関係4機関の間で基本協定が締結された。調査対象となつた遺跡は、美原町域では丹上・真福寺・太井遺跡、美原町から堺市にかけての日置荘遺跡、堺市域の福田・平井・小阪遺跡である。なお、平井遺跡については諸般の事情により(財)大阪府埋蔵文化財協会に調査を委ねており、1986～1989年度にかけて調査が実施されている⁸⁾。

小阪遺跡の範囲は、泉北2号線から原ノ池東岸までの間約1kmである。小阪遺跡内で高速道路と府道が分岐するため、発掘費用負担の関係から併設部、府道単独部、公団単独部に分かれる。路線内の調査対象部分は、府道部の全域、公団部の盛土部全域と橋脚基礎部、それに公団部の特に調査の必要とされる箇所である。そのため、調査範囲の形状は複雑なものとなっている。しかし、調査区の区分は、それにはとらわれず、道路、河川、畦畔等で9分割しており、さらに細分が必要な調査区は、6-2、6-3等の枝番をつけている。なお、9分割した調査区は、それぞれA～Iまでの地区名を与えており⁹⁾、その中で細分された調査単位は、1F、2Fトレンチ等と数字を前にする方式で順番に命名している。

小阪遺跡の調査は、1985年度より泉北2号線側から開始され、順次東へ調査が進められた。現地調査は、用地取得が遅れたために、1990年度の小阪南その2-2(I地区14Iトレンチ)の調査までずれこんだが、各調査区の調査成果については、それぞれ当該年度に概要報告書を刊行しており、その数は14冊にもおよんでいる。

和歌山線、および松原泉大津線の調査については、現地調査終了後ただちに概要報告書を作成し、次の調査に移行することになっていた。さらに、各遺跡の遺物を主とする整理作業と本報告作成については、遺物整理事業として現地調査の目処がついた段階で新たに始める予定であった。遺物整理事業は、15の遺跡群を南北2つに分けて各時代毎にまとめる大阪線の方式とは異なり、各遺跡毎に実施することになった。これは、和歌山線・松原泉大津線関連の遺跡が、各遺跡に共通点が少ないと、小阪遺跡を除けば段丘上に立地しているものが多く、同一遺構面に複数時期の遺構が検出されて、遺構を時期別に分離することが困難なためである。

遺物整理事業は、小阪遺跡より始められることになり、I地区の現地調査と並行しながら、1989・1990年度の2カ年で整理作業を実施した。本書は、その整理報告であるが、印刷は1991年度に行い、3月31日付けで刊行した。



Fig. 2 試掘グリッドの位置

2) 発掘調査の方法

小阪遺跡の調査は、当センターが制定した「遺跡調査基本マニュアル」¹⁰⁾に則って実施されている。このマニュアルが制定された契機は、近畿自動車道天理吹田線（通称・大阪線）の調査がそれぞれの調査区の担当者によりバラバラな方法で遂行されたために、後の整理段階でデータの理解に非常に苦労したことによる。マニュアル作成にあたっては、発掘調査に係わる職員全員が討議に参加し、意見の一致を見た部分のみを成文化した。そのため、発掘調査に不可欠な必要最低限の方法のみを定めたものになっている。

地区割については、国土座標軸（第VI座標系）を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区割できるように、大小6段階の区画を設定している。第I区画は、1/10,000地形図の地区割図をそのまま利用したもので、縦6km、横8kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A～O、横軸0～8で表示する。

第II区画は、1/2,500地形図の地区割図をそのまま利用したもので、第I区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。南西端を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。

第III区画は、第II区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦A～O、横1～20となる。第IV区画は、第III区画を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10となる。

第V区画は、第IV区画内を5m単位で4分割するもので、遺物の取り上げ等の際に第IV区画を面として細分する場合に使用する。北東側I、北西側II、南東側III、南西側IVと呼称する。第VI区画は、第IV区画を5m単位ではなく、任意に細分する場合に使用し、北東端を基点に必要な桁まで表示する。

因みに小阪遺跡の第I区画はE-5、第II区画は5と9にまたがる。第III区画以下は、A1（第III区画）a1（第IV区画）-I（第V区画）S 2.30m W 3.10m（第VI区画）というように表記される。

このように、多段階の地区割方法を採用したのは、以下の理由による。第I・II区画によって、大阪府全域を1/10,000や1/2,500地形図と同じ図面番号で呼称できること、通常使用する第III・IV区画とトレンチ名を併用することにより、大抵の遺跡調査では10m単位ですべての範囲を別の呼称で区分できること、第V・VI区画によって、必要であればさらに共通の方法で細分できることである。

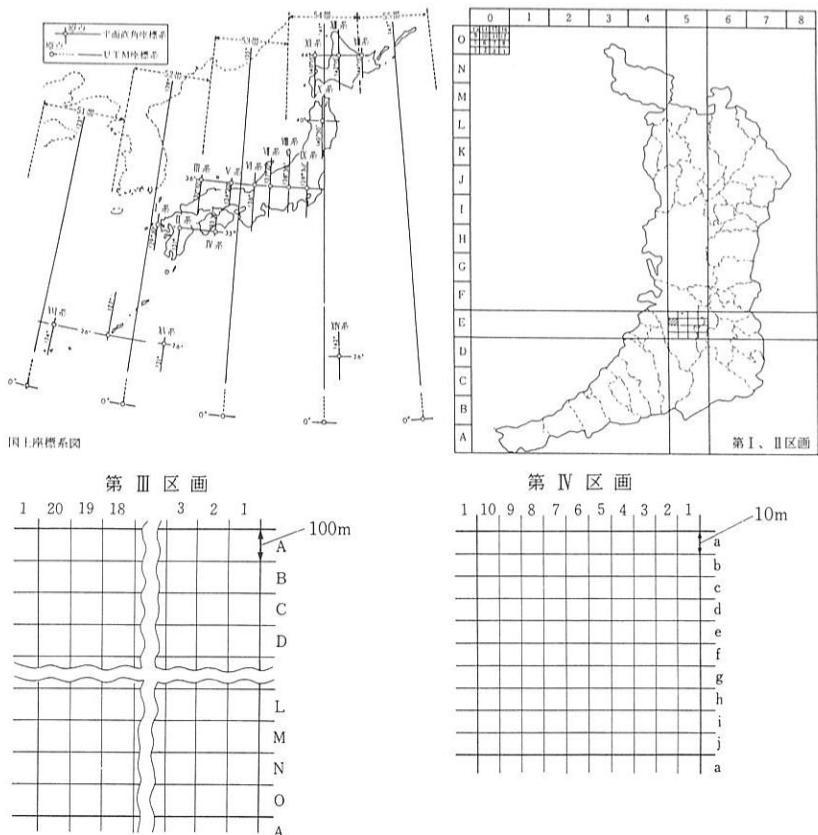


Fig. 3 国土座標系とそれに伴う地区割

1. 調査の概要

方位については、座標北を使用している。これは、地区割や測量基準線も国土座標軸を使用している関係からである。因みに、小阪遺跡周辺の座標北と他の方位との関係は、真北が $0^{\circ}17'$ 東に振り、磁北が $6^{\circ}2'$ 西に振っている。

水準は、全国で共通基準となっている東京湾平均海面(T.P.)を使用している。大阪では、T.P.の他に大阪湾平均海面(O.P.)も併用されており、どちらを使用するかは論議の分かれる所である。遺跡の立地を考える上では大阪湾の海水面の高さが重要なため、O.P.の方がよいとの意見も強い。しかし、大阪湾の海水準も固定されたものではなく、時代により大きく変化している。そのため、今の海水準を

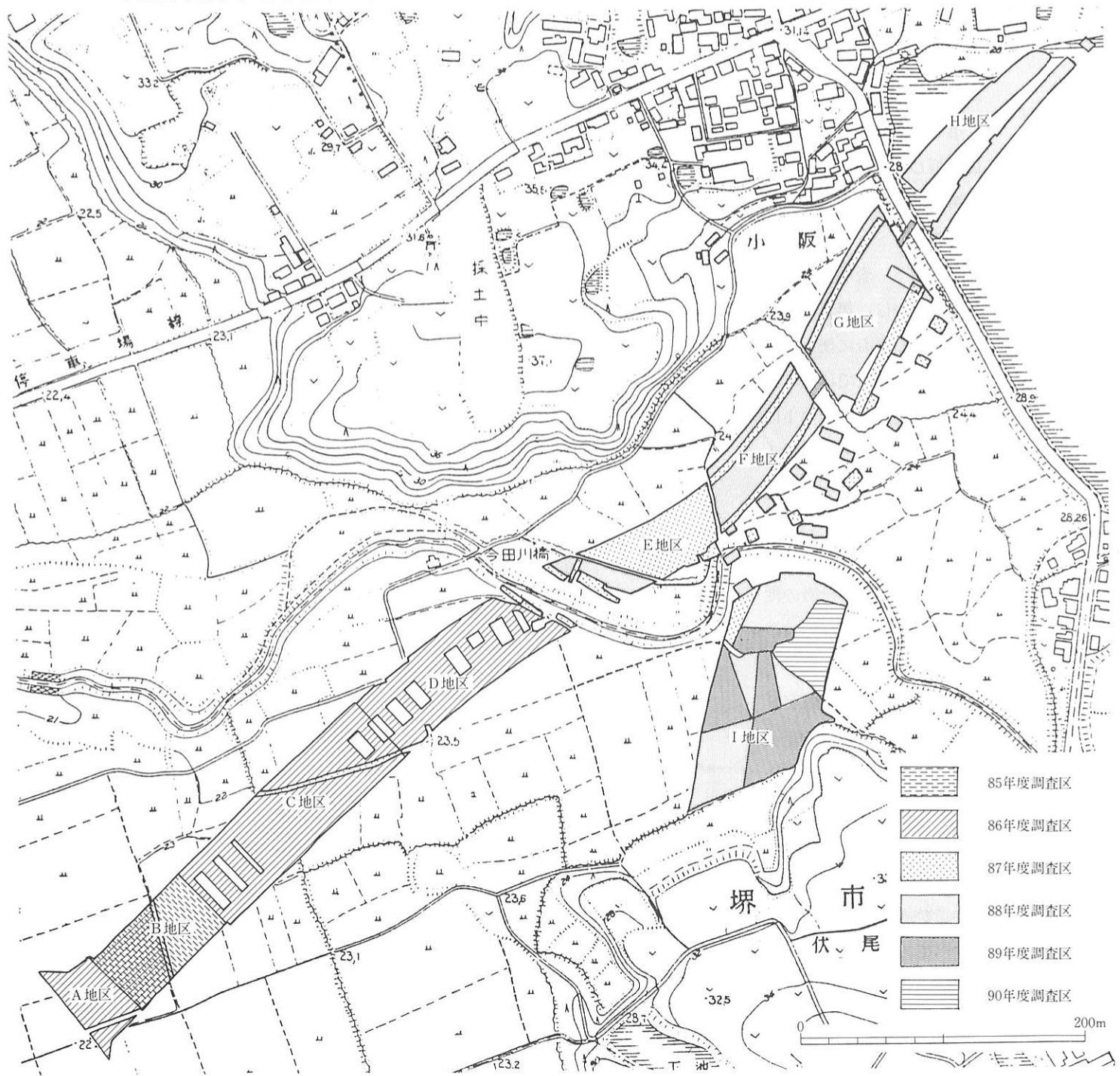


Fig. 4 地区の配置と調査年度

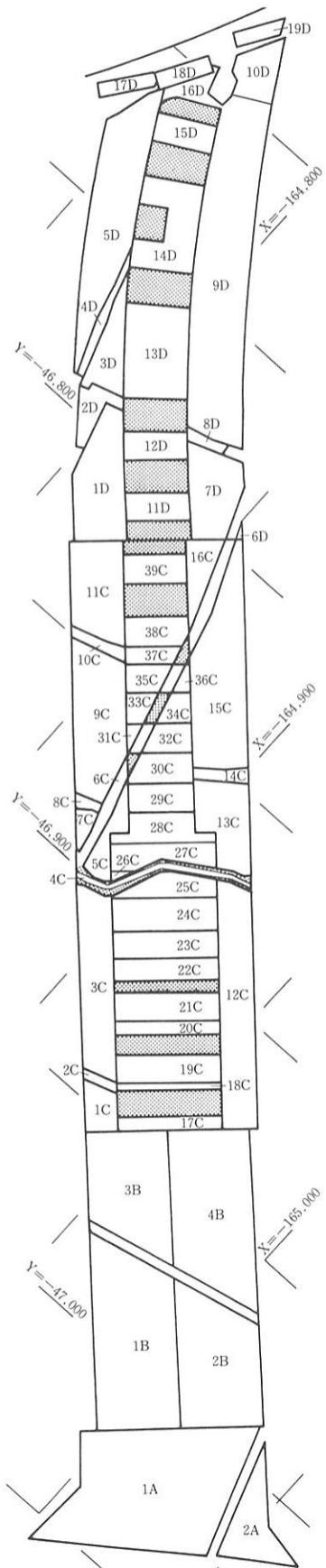


Fig. 5 トレンチの位置と名称(1)

もとに遺跡の立地を考えてもあまり意味はなく、各時代毎に海水準を求める上で遺跡の立地を考えなければならない。その意味で、どの道十一が必要となれば、全国的に相互比較が可能なT.P.を使用した方がよいのではないかと思われる。なお、両者のレベル差は、T.P.±0 m=O.P.+1.3mと決められている。

遺構名は、原則として日本語で表現することにしている。遺構略称の採用についても、マニュアル制定の際には相当の論議を重ねたのであるが、現状での採用は時期尚早として検討課題の一つとして残されている。採用を見送ったのは、以下の理由からである。

遺構略称の使用は、記述の簡便さから非常に便利なものであるが、それが各調査機関毎に独自に制定された場合、一々凡例を見なければ遺構名がわからないという事態になる。過去、当センター刊行の報告書においても遺構略称が個別に使用されており、混乱を生じている。この最も大きな原因は、最も流布している奈良国立文化財研究所の遺構略称が宮跡の調査を対象としたもので、その他の調査には適応しにくい欠陥を持っているからである。奈文研の制定した略称をそのまま使用すれば、略称のない墓等の性格の明確な遺構から性格不明の遺構までその他の遺構を意味するS Xとされ、略称を見ただけでは遺構の性格がわからなくなることになる。そのため、集落や墓等の調査には新たな略称を用いる必要があり、それが各調査機関別個の略称制定につながっている。以上のことから、当センターでは、拙速に遺構略称を採用するよりは、とりあえず分かりやすい日本語で遺構を表記することにしたのである。ただ、遺構略称使用の利点も否定しがたいため、奈文研の略称のうち、その他を意味するS X以外は使用することを認めている。

註

- 1) 大阪文化財センター 1975 『都市計画道路松原～泉大津線建設予定地内遺跡試掘分布調査報告書』
- 2) 大阪府教育委員会 1976 『大園遺跡発掘調査概要』 III
" 1981 " V
" 1982 " VII
- 3) 大阪府教育委員会 1982 『観音寺遺跡発掘調査報告書』
- 4) 大阪府教育委員会 1980 『西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』
" 1982 『鶴田池東遺跡発掘調査概要』 II
- 5) 大阪府教育委員会 1980 『西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』
- 6) 大阪文化財センター 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』 I、及びII
- 7) 大阪文化財センター 1975 『美原町真福寺所在遺跡試掘調査報告書』
- 8) 大阪府埋蔵文化財協会 1988 『平井遺跡』
" 1989 『平井遺跡 II』
- 9) 実際の調査でこの地区名を使用したのはその5調査区以降であり、それ以前のその1～4調査区にA～D地区を割り当てている。
- 10) 1986年12月に制定し、1988年3月に印刷物としている。

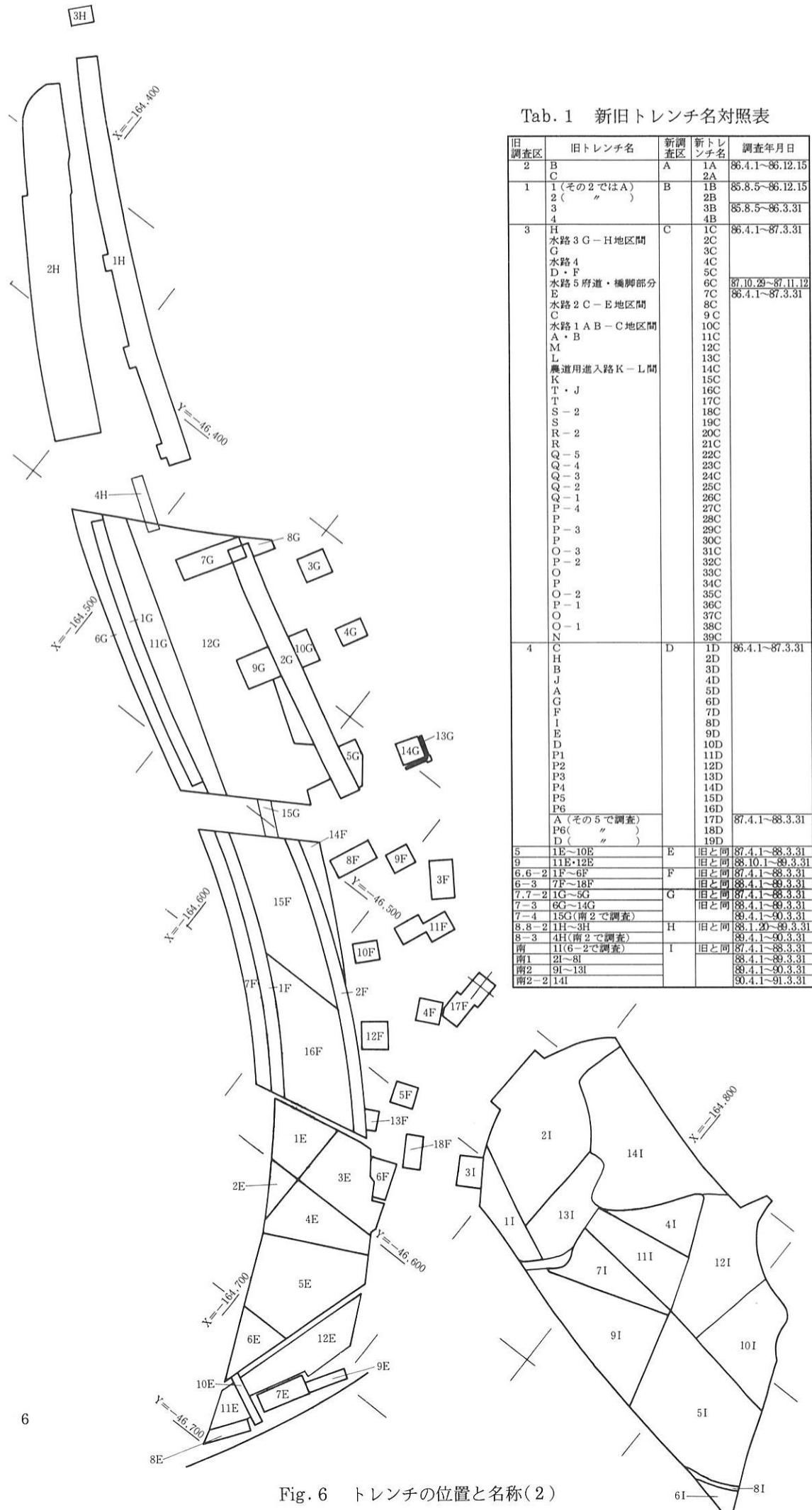


Fig. 6 トレンチの位置と名称(2)

2. 位置と環境

1) はじめに

大阪府西南部、堺の一部を含み、それ以南の海に面した泉北・泉南地域一帯を、古より「いずみ」と呼ぶ。小阪遺跡はこの地域に含まれ、現在の行政区画では大阪府堺市平井地内に位置することとなる。

「いずみ」と呼称される以前、この地は血沼（文献一）、茅渟（文献二）、あるいは珍、珍努、父努の字を充てて「チヌ」と呼称された。「チヌ」とされた地名がいつのころから「いずみ」と呼ばれたのかは明らかにはし難いが、「いずみ」なる地名の由来は、泉井上神社本殿の背後に今は形ばかりとなった小さな池〔和泉の清水〕に源を発するという。孝徳朝の大化には「泉郡」、元明朝に吉字「和」を加えて「和泉」と呼ばれたとされ、奈良時代の国郡制が施行された後には、靈亀二（716）年、大鳥・和泉・日根の三郡を治める特別行政区「和泉監」が設置された（文献三）。和泉国が初めて史書に登場するのは、神亀元（724）年、聖武天皇が和泉国所石頓宮に行幸するという記事（文献四）であり、716年から724年の間には国が設置されていた可能性がある¹⁾。続く天平十二（740）年には、「和泉監を河内国に併す」（文献五）とあり、和泉国の統合は記されないものの、和泉監が河内国に一旦編入され、この後、天平宝字元（757）年の詔勅（文献六）により和泉国が設置され、以後この地名が踏襲された。

和泉国・監の設置、統廃合をより細かに追求したものとして、『日本書紀』養老六（722）年の「知河内和泉事」（文献七）という記載を根拠に、国の設置を同年に求めようとし、さらに、和泉国が河内国に統合されたのを、天平四（732）年とする考え方（山本1980）があるほか、同記載について、二者が行政単位として統括されていたとする見解（松本1980）がある。

上記、文献上の記録以外に考古学的成果を併せれば、より内容の濃い足跡が辿れる。ここでは旧石器時代以降の歴史的環境を見てゆくこととした。なお、遺跡周辺の地形分類・微地形観察には、平井遺跡の報告書（趙ほか1980）、これまでの各種概要報告書があり、各遺跡の引用参考文献には、和泉全体の文献を集成した冊子（久世1990）、岸和田市域・信太山丘陵一帯の遺跡を取りまとめた成果（駒井1987a・1987b）が公にされているためここでは改めて取り上げないが、合わせて参考されれば幸いである。

2) 旧石器時代

前期旧石器時代にまで遡る例は現在までに報告されていない。続く後期旧石器時代では、遊離した状態で遺物が出土する例が多く、数カ所を除いて実体は不明瞭である。このような中でも、野々井遺跡より、瀬戸内技法より先行するとされるルヴァロア型石核が検出され貴重な資料を供している他、学史的には和泉における旧石器時代遺跡調査の鏑矢となり、主としてサヌカイトの剝片類が検出された大床遺跡があげられる。瀬戸内技法の段階では、大園遺跡で接合資料を含むチャート、サヌカイトで構成される3ヶ所のブロックが検出されている他、遺構とともにナイフ形石器を中心とする多量の石器類が出土した南花田遺跡があげられる。また、山直北、觀音寺山、大園、日置荘遺跡などからは舟底形石器が出土している。なお、小阪遺跡I地区第1調査区の崖錐性堆積砂礫層中には、二次堆積ながらこの時期の広域テフラである始良Tn火山灰がブロック状を呈して包含され、今後の調査に注意を要する。

終末の段階から縄文時代初頭にかけては、段丘上や丘陵上の各地で有舌尖頭器が検出され、特に大園遺跡では12点以上が出土し注目される。また、近接して所在する野々井、小阪遺跡ではチャート製の例が報告され、大阪市桑津遺跡出土例などとともに畿内以外で多用される石材の使用で注目できる。また、栄ノ池遺跡より、府下では他にもう1例が確認されるチャート製異形局部磨製石器が検出されている。

2. 位置と環境

3) 縄文時代

早期では池田寺遺跡の山形文を施す押形文土器、畠中遺跡より神宮寺式土器が出土しているほか、末頃に位置づけられる土器が以下の3遺跡で出土している。第1は条痕調整を施す土器や、関東地方鶴ヶ島台式に近似した土器などが出土した仏並遺跡、第2は条痕調整を施す土器片、胎土中に纖維を混入する土器片が検出された小阪遺跡、第3は条痕文調整を施す土器片が出土した太平寺遺跡である。しかし、これらの土器は遺構に伴った形で検出されたものではなく、二次堆積土中からの出土である。なお、この時期に降下した鬼界アカホヤ火山灰が羽倉崎、小阪遺跡の発掘調査で確認されている。

前期ではフキアゲ山遺跡より北白川下層Ia式土器が出土し、羽状縄文を施す北白河下層IIa式土器が太平寺、小阪遺跡より、末の大歳山式土器が平井、小田、小阪遺跡より出土している。



Fig. 7 旧石器時代から縄文時代の主要遺跡分布図
(『土地分類図 表層地質図』 国土庁土地局 1976を一部改変)

中期では、初頭の鷹島式土器が箕土路遺跡から、船元式土器が葛城山山頂遺跡より出土している他、小阪遺跡からは、船元II式の土器が縦型の石匙を伴って当時の生活面で検出されている。続く里木II式の段階では、小阪遺跡I地区第2調査区の当該期の包含層より出土し、H地区からも遊離した状態で土器が出土した。これ以降和泉では各地域で遺跡数の増加が見られ、明確な遺構が検出される例も報告される。代表的なものに各種の遺構が多量の遺物と共に検出された仏並遺跡が上げられ、小阪遺跡E地区以東では、破碎した土器片を敷き並べた特殊な遺構や土坑などと共に、各調査区で豊富な遺物が出土し、豊中、万町北、池田下遺跡などからも遺物が出土している。

後期では初頭の中津式から末の宮滝式の段階の遺物が各遺跡で出土している。代表的なものに輕部池西、小田遺跡の自然流路内、山ノ内、三軒屋、板原、春木八幡山、長滝遺跡があげられる。遺構としては、四ッ池遺跡から竪穴住居跡1棟、淡輪遺跡より竪穴住居跡5棟が検出された他、仏並遺跡より竪穴住居跡5棟を始め、土製仮面という特殊な遺物を含む多量の遺物が出土している。この他、板原、小阪遺跡で当該期の遺構面、池田寺遺跡で中津式土器の出土する土坑が報告されている。

晩期では前半期の遺跡数は非常に少なく、中葉以降の遺物が海岸部や段丘上の各遺跡から出土し、これまで丘陵部を中心として分布していた遺跡が平野・海岸部にまで拡散する状況が看取される。末葉の船橋・長原式土器の段階になるとより以上に遺跡数が増加し、低地縁辺部にまで進出する状況が窺える。しかし、多くの遺物出土遺跡が確認されるにも係わらず、遺構が検出された地点は万町北遺跡の土器棺墓、小阪遺跡の土坑、西浦橋遺跡の土壙墓など非常に稀少であるといえる。

和泉地域の縄文時代遺跡は、中期以前の様相は不明確であるが、後期を前後として山地、丘陵、段丘上に立地し始め、晩期では海岸部の浜堤や、沖積地にまで分布範囲を広げてゆく傾向が観察される。

そして、末葉の遺跡数は前段階の3倍程度となり、この時期各地で見られる生駒西麓産の土器が多量に移動する状況が鈴の宮遺跡、小阪遺跡、船岡山B地点を代表としてこの地域でも報告されている。これらの中でも小阪遺跡は、和泉の縄文時代集落の様相を端的に表現しているといつても過言でなく、谷底平野の沖積地上に立地するという特異な立地条件を持つこととも相まって注目されよう。今後、周辺でも同様の立地条件で遺跡が確認されることが予測され、充分な注意が払われんことを望みたい。

4) 弥生時代

前期の古い段階で四ッ池、小阪遺跡が出現し、これに遅れて池浦、板原遺跡が成立する。新段階では遺跡数が増し、規模の大きな四ッ池、池上遺跡周辺に小規模な集落が点々と所在する。2大集落を核とし、その周辺の可耕地に集団が分布する様相が窺えよう。また、これらの遺跡の中には、生駒西麓産や紀伊産の土器が出土する遺跡もあり、近接する各地域との交流が窺える。

中期では、初頭の段階で10ヶ所余りの遺跡が確認され、この地域に特徴的な日明山式土器を棺とする墓が助松、鈴の宮遺跡などで検出される。後半では四ッ池、池上遺跡が最も巨大化し、周辺遺跡数の増加も顕著で、各河川中上流域にも一定程度の規模を有する集落が展開され始める。

中でも段丘上の畠、栄の池、万町北、池田下遺跡では、先の二大集落と同様に多量の遺物のほか、住居跡や方形周溝墓などの各種遺構が検出され、集落の様相も比較的明らかにされている。

中期末から後期では、集落の垂直移動が顕著となり高地性集落も出現する。代表的な例には環濠を巡らせ、100余棟の竪穴住居跡が検出された觀音寺山遺跡があげられ、この他どぞく、惣ヶ池、上松、ちご池東、滑瀬、棚原遺跡などが存在する。この状況は前段階まで見られた共同体が解体し、多数の小単位集落となって、垂直方向に移動した結果を表していると考えられる。

2. 位置と環境

終末に近づくに従いこの傾向はやわらぎ、再び低地部に集落が成立しはじめる。この時期の遺跡としては平野部に位置し、自然流路より大量の遺物が出土した箕土路遺跡があげられる。

墳墓では、下池田遺跡より検出された周溝墓群の中に陸橋部を持ち、平面形態が前方後円形を呈する周溝墓が検出されるが、単独で構築され副葬品を持つ例は、現在の和泉では報告されていない。

この時代新たに出現した青銅器は、四ッ池遺跡で後期の銅鏡が出土し、また、貨泉とみられる銭貨の出土が伝えられ、豊中（要池）遺跡からは有鉤銅鉗が出土している。下池田遺跡からは後期の連鋸式銅鏡が2点繋がったまま出土し、このことから、和泉でも青銅器を鋳造した集落の存在を推測できる。

銅鐸は、破碎された状態で検出された池上遺跡の2例、複数で出土した流木遺跡の2例、平野部で出土した浜寺昭和町遺跡の1例のほか、出土地点の不明確な諸例を含めれば10点の出土が確認される。



Fig. 8 弥生時代から古墳時代の主要遺跡分布図
(『土地分類図 表層地質図』 国土庁土地局 1976を一部改変)

5) 古墳時代

前期初頭では、四ッ池遺跡をはじめとする遺跡は確認されるものの、良好な土器の資料が非常に少ない。比較的まとまったものには上町、船尾西遺跡の井戸出土資料、石津町遺跡出土土器があり、これらは、所謂伝統的第V様式に代表される弥生時代の系譜を引く土器群を主体とし、これに搬入土器が少量検出される傾向が看取される。搬入土器の代表である生駒西麓産庄内式土器は各遺跡で少量検出されるが、西大路遺跡のように全く検出されない遺跡もある。これ以外の搬入土器では、七ノ坪遺跡から東海地方のS字状口縁を持つ土器、山陰地方に多く分布する土製支脚が出土し、府中遺跡から山陽地方の鬼川市III式に位置づけられる甕、他地域からの搬入品と見られる壺が出土している。また、他地域の製作になると思われる器台、中部瀬戸内地域からの壺が羽衣砂丘、小阪遺跡より出土し、弥生時代で見られた以上に広範囲にわたる土器の移動が活発化する。木製品では豊中遺跡から素環頭、剣などの特殊な製品を含む大量の資料が報告されるほか、下田遺跡からはキヌガサが出土し、また、土生遺跡では集落内での自己消費量をはるかに凌駕する大量の製塩土器が出土し、和泉という地域の中でも特異性を持っている。

遺構では竪穴住居跡が和氣遺跡より2棟、山ノ内遺跡から焼失家屋が2棟、西大路遺跡より6棟が検出され、小阪遺跡では少数の遺構と共に、この時期の遺物を包含する河川が検出されている。

定形化した墳墓では前期後半の全長200m前後、この時期では府下最大の規模を持つ前方後円墳、摩湯山古墳が築造される。後円部墳頂に板状の割石が散在することから、主体部は竪穴式石室と推定され、方形に埴輪列が囲繞している。使用される埴輪の中には、鰐付円筒埴輪の存在も確認されている。これにやや遅れる全長85mの前方後円墳和泉黄金塚古墳では、3基の粘土櫛が検出され、中央櫛からは中国晋代墳に鋳造された五銖錢とみられる方孔円形銅製品、多量の玉類とともに、魏の景初三(239)年銘を持つ画文帶神獸鏡が出土した。この他、東櫛からは早い時期の副葬例である三角板革綴式短甲、新羅に類例を持つ長さ6.2cmの大型水晶製切子玉が検出された。ほぼ同時期の前方後円墳として、全長96mの丸笠山古墳、若干の遺物が採集されている全長145mの久米田貝吹山古墳が存在する。

中期には石津川北方の中位段丘上、18km²の範囲に百舌鳥古墳群と呼ばれる大王墓を含む約100基の古墳が築造される。中でも古く築造されたのは石津川河口近くに位置し、全長約150m、4世紀末から5世紀初頭に築造された乳の岡古墳であり、内部主体に和泉砂岩製石棺を埋置する。石棺を被覆する粘土中より碧玉製腕飾類破片が20個体以上出土した。また、カトンボ山古墳からは2万1千余点にも及ぶ大量の各種滑石製模造品、七觀古墳の3基の遺物埋納施設の一基から古式の木芯鉄板張輪燈、大山古墳の陪塚とされる塚廻り古墳からは巨大な硬玉製勾玉が出土し、前方後円墳の大塚山古墳では8基の主体部が検出され、内6基は大量の鉄製品が納められた施設である。百舌鳥以外での比較的規模の大きな古墳には直径60mの円墳、王塚古墳、全長135mの風吹山古墳、直径46m、細身の碧玉製管玉が出土した玉塚古墳、帆立貝式古墳では滑石製案が出土した全長65mの信太貝吹山古墳、全長53mの大園古墳があるのみで、巨大な前方後円墳は和泉南端部に所在し、紀氏との関係が説かれる宇度墓、西陵古墳を中心とした淡輪古墳群以外築造されない。この状況から前期に勢力を誇った和泉の首長層は、大王政権の傘下に組み込まれたことが推定されている。一方、浜寺四ッ塚古墳群の1基一辺45mを測る方墳の塔塚古墳では、割り石を使用し、羨道部の未発達な構造をもつ近畿地方でも初源期の横穴式石室が構築され、墓制に対し新たな展開が見られる。この時期を中心とする遺跡には、掘立柱建物を主要とする居住形態を持つことで古墳時代集落論に一石を投じ、現在までに10群、160余棟の掘立柱建物が検出された大園遺跡、類例の乏しい双孔大型甕が出土した堺市環濠都市遺跡内SKT60地点、初期須恵器と滑石製有孔円

2. 位置と環境

板が出土し祭祀的様相が強い百舌鳥夕雲遺跡、有孔円板が出土した大仙中町遺跡、未製品を含む大量の臼玉が出土し工房的性格が指摘されている舳松南高田遺跡、集落中央を貫く大溝内より8基の埴輪円筒棺が検出された土師遺跡、木製鞍や多量の木製品が出土した陵南北遺跡がある。生産遺跡では百舌鳥古墳群に埴輪を供給したと考えられる百舌鳥梅町窯跡が上げられ、中でも百舌鳥古墳群周辺に所在する遺跡は、古墳群造営の動向と軌を一にしており、築造集団である土師部との係わりをもつと考えられている。一方、この時期注目されるのは、大陸からの新技術を導入して製作が開始された須恵器生産であり、以後400年間国内における窯業の中心地となる。須恵器焼成窯は泉北丘陵附近一帯に群在し、総数一千基にも及ぶとされ、往時には「茅渟県陶邑」と呼称され隆盛を極めた。この中でも最も古い段階の須恵器を焼成したとされるものに高藏寺73号窯が上げられる。これと比肩できる段階の須恵器を焼成した窯に瀬り池、上代遺跡検出窯が知られていたが、咄池西岸部、濃登池南岸部でも同時期の窯跡の存在を示唆する遺物が検出され、中には陶邑では類例の乏しい形態、紋様を持つ例もある。近年、一須賀2号窯の他、ほぼ同時期と見られる窯が各所で検出され、それぞれの窯の特徴を備えた遺物が出土し、この状況からより広範囲な視野に立って陶邑の再検討が行われる時期を迎えている。

また、水源地遺跡からは須恵器製作技術をもたらした集団の故地を示唆するように、韓半島洛東江下流域右岸地域で出土する土器と酷似した双耳壺や格子目タタキを施す陶質土器が出土し、浜寺黄金山遺跡からは螺旋状沈線を巡らせ格子目タタキを施した陶質土器、府中遺跡からは野中古墳で出土した伽耶地域で類例の見られる把手付有蓋短頸壺と類似した形態を呈する脚部が出土している。

さらに、生産された須恵器の選別、集積地的性格を持つ遺跡として、深田、小角田、辻之、豊田遺跡があげられ、小阪遺跡では、竪穴住居・掘立柱建物から構成される初期須恵器製作に係わったと見られる集団の居住域が多数の韓式系土器、須恵器を伴って検出された。調査では臼や鋤などの木製農耕具が出土し、こここの住人達が當時窯業のみを行う専業集団ではなかったことを窺わせる。

後期になると再び前方後円墳の築造が復活する。これには単独で構築されるもの、群集墳中の盟主として構築されるものの二者に分れるが、視覚的には比較的小規模なものである。前者には全長9.5m以上の横穴式石室の他、各種構造を持つ7つの主体部を持つ全長48mの富木車塚古墳、玄室長4m、羨道長3.1m、松香石製家形石棺を納め、当方では大きな横穴式石室を内部主体とする湯山古墳などの地域首長層クラスの墳墓があげられ、後者には63基程度で構成される陶器千塚古墳群中の全長29mの御坊山古墳、78基が確認される信太千塚古墳群中の全長56mを測る狐塚古墳を代表とし、牛石古墳群中の牛石7号墳、桧尾塚原古墳群中の2基の前方後円墳、和泉丘陵内遺跡B27号墳などがあげられ、群を構成する集団の中の有力家父長クラスの墳墓と考えられる。また、和泉の後期古墳の特色には、横穴式石室を構築する石材に恵まれないため小規模な竪穴式小石室を主体部とする例が多いこと、主体部に紀ノ川流域に産出する片岩類を使用する例が含まれる信太山古墳群や、聖神社1号墳玄門の立石に見られるように紀伊との関係が深いことが一つあげられる。また、他方面では、所謂横穴式木室などと呼ばれる主体部を持つ聖神社2号墳、道田池2・4号墳、菩提池西古墳、神明原古墳、これに円筒形の須恵質陶棺を納めた陶器千塚29号墳、床面に埠を敷き詰める牛石13・14号墳、時期は下るが鷦尾を使用して主体部を構築する原山古墓など窯業に深く係わった人々の姿を彷彿とさせる葬法が見られることがあげられる。

なお、百舌鳥古墳群東南部に位置する日置莊西町窯跡群では、形態・紋様に特異性を持つ大型の円筒埴輪や形象埴輪を焼成した窯跡が検出された。附近に所在する福田遺跡、太井遺跡などでも同様の埴輪が出土しているが、古墳に樹立して使用される通常の埴輪として供給された地点は明確ではない。

6) 古代以降

古墳築造が終焉に近づき寺院建立が盛んとなる時期、和泉でも有力氏族がこの動向に追従する。最古の例は、7世紀前半代の豊浦寺式素弁八葉蓮華紋軒丸瓦が出土する小松里廃寺であり、山田寺・川原寺式の軒丸瓦が出土し、法隆寺式伽藍配置を持つ海会寺跡・輕寺式軒丸瓦を持つ坂本寺が建立される。

この他、「信太寺」の刻印瓦が出土する信太寺跡や、土師廃寺・秦廃寺より紀寺式、そして、大園遺跡より山田寺と同范の連座博仏や、本薬師寺と同范の平城宮軒瓦型式6121Aの軒丸瓦が採集されている。

これらには、河内に建立された寺院と同型式のものが多いと指摘され、その要因として、和泉国成立以前は河内国に属していたことがあげられている。この他、作りの粗雑な中央系軒瓦が検出される事例が多く、この事象を中央と和泉との関係を示すものとし、また、平城宮系軒瓦の検出が比較的少数であることも述べられている。そして承和六（839）年、和泉の国分寺として安楽寺がこれに充てられた。

また、この時期忘れてならないのは和泉から僧行基を産み出したことである。行基は天智天皇の称制七（668）年、高志才智を父に、蜂田古爾比売を母として生まれ、後には菩薩とまで崇められるほどの信仰心を集めた。出生場所は小阪遺跡から石津川を少し下った現在の家原寺であると伝えられている。

行基の布教活動の特色は、ただ単に寺院を建立し、仏教を広めるというものに止まらず、民衆の知識を募ることによって灌漑施設の整備、橋梁の架設等の社会事業を積極的に行いながら、行基四九院に代表される寺院を造営していったという点である。この活動の端的な証左が、大野寺土塔に葺かれていたと考えられる人名を記した多数の箋書瓦であろう。小阪遺跡周辺でも多数の溜池構築伝承と共に、大修惠院、大庭院、大鳥布施屋、鶴田池院等、枚挙の暇がないほどに行基の足跡を辿ることができる。

このような行基の活動は中央政権からはうとんじられ、幾度かの弾圧を受けた。しかし、蘆舎那仏建立という大事業に際し、知識の勧進を民衆に至るまであまねく求めようとした国家は、行基の民衆に対する影響力を利用することを以てこれを遂行せんとし、最終的には大僧正にまで補任する。

なお、大庭寺遺跡では、行基を支えた檀越の一集団とも考えられる大庭造が、その本貫地として蟠踞していたことを裏づけるかの如く、一辺1mにも及ぶ掘方を持ち、柱痕一尺を測る倉庫を初めとした多数の掘立柱建物群が検出され、特色ある遺物にも小型軒丸瓦や、陶硯、博仏などがみられる。

また、小阪遺跡をこの時期中央政権によって施行される耕地を方形に区画し、一定の約束で土地の所在を明示する条里制に則って表現するならば、和泉国大鳥郡蜂田郷に属し、さらに周辺に遺存する千鳥式の坪名を追求すると、蜂田郷の中でも上神郷と境を接する南辺に位置し、西側に大鳥郷水合里をひかえた蜂田郷南西角に位置する一つの里を中心として、附近一帯の地域に広がる遺跡となる。

和泉において、中央政権の出先である官衙的性格を持つ遺跡を発掘調査で確定できた事例は少ないが、和泉国府が府中遺跡周辺に所在していたと考えられている他、山直北遺跡からは大型掘立柱建物群が検出され、出土遺物にも綠釉陶器、灰釉香炉、石鎔帶が存在し、一般集落に見られぬ様相が看取されるため、中央により近い人物が居住していたと推定されている。この他、陶邑の幹道として利用されたと考えられる石津川の河口に所在する浜寺石津町東遺跡より、平城宮軒瓦型式6647Aの偏行変形忍冬唐草紋軒平瓦や石鎔帶が出土し、立地条件と相まって、通常の集落ではなかった状況が窺える。官位の象徴として採用され始めた鎔帶が出土したこのほかの遺跡には、河合古墓より元来一連分が揃っていたと考えられる銅製黒漆塗り巡方3点、丸鞘5点が採集され、これは六位から八位の文官、武官の志以上、兵衛、主師が衣服令で着用を規定された烏油腰帶に相当するとみられる。また、附近より別規格の銅地鍍銀の鉈尾が採集された他、浜寺石津町東遺跡で石製丸鞘、山直中遺跡より石製丸鞘、池田寺、西大路遺

2. 位置と環境

跡より石製巡方、大園、池田寺遺跡より石製鉈尾が出土している。上記以外の奈良・平安時代に属する遺跡には、奈良時代の溝が検出された翁橋遺跡、奈良時代の遺物が祭祀的様相を示して検出された深井清水町遺跡B地点、須恵器蔵骨器に承和昌寶を伴う墳墓が検出された菩提池東寺院跡、土師器焼成窯に伴うと見られる灰原が検出された深井幡池遺跡、黒色土器を焼成したとみられる窯跡が検出された四ッ池遺跡、平安時代集落跡が検出された金岡、机场遺跡などがある。

また、遺物では信太山丘陵付近より出土したとされる2点の須恵器蔵骨器、同丘陵の黒鳥町から採集された和同開珎20点、豊中遺跡の和同開珎、上フジ遺跡より隆平永寶、箕土路遺跡より承和昌寶、春木八幡山遺跡より富壽神寶、脇浜遺跡より貞觀永寶、小阪遺跡より神功開寶、延喜通寶の各種皇朝錢が出土している他、池田寺跡からは、当該期の土器群が検出された。

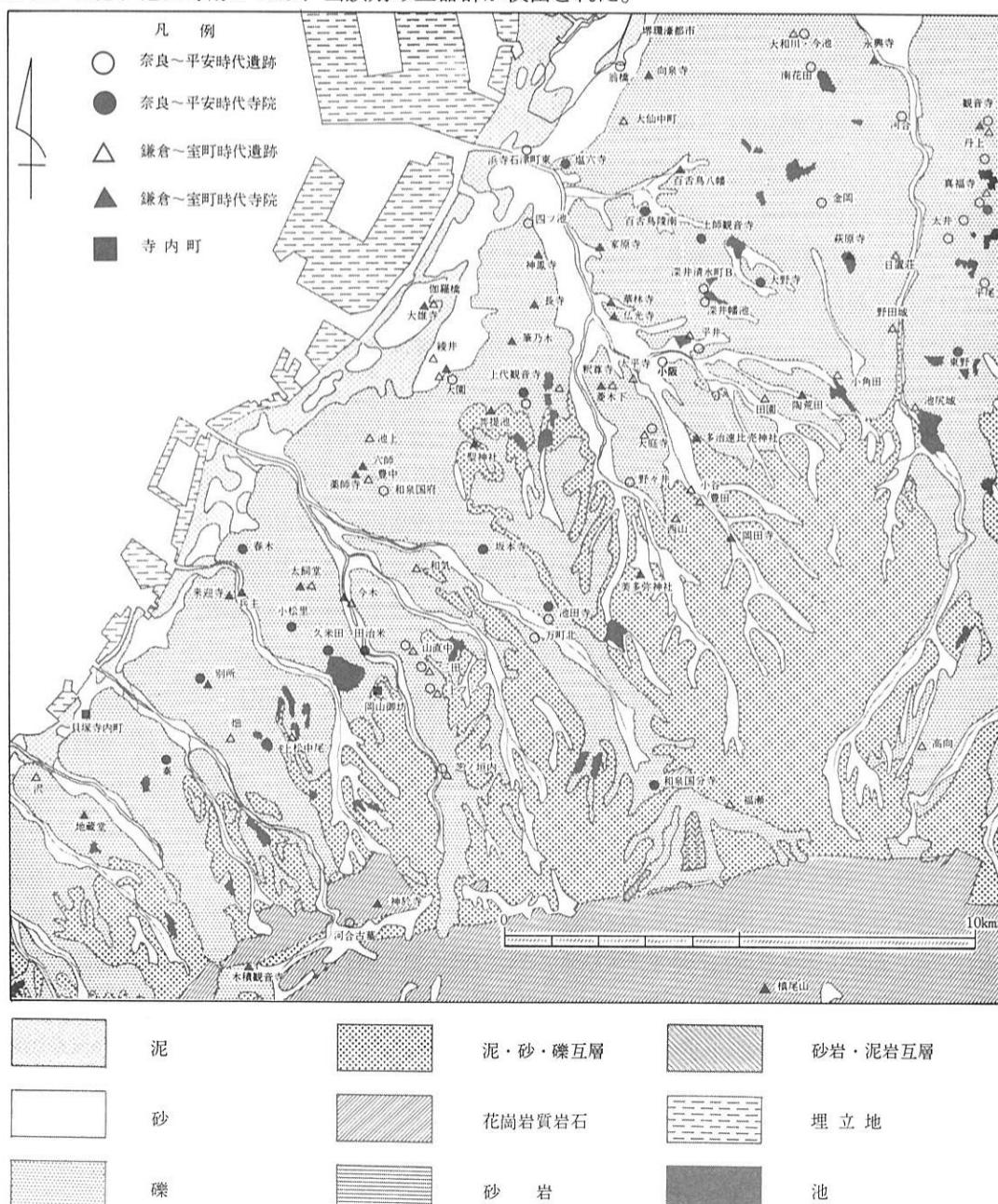


Fig. 9 古代以降の主要遺跡分布図

(『土地分類図 表層地質図』国土庁土地局 1976を一部改変)

また、律令期の祭祀に関連する遺物である土馬、ミニチュア土器、人面墨書き土器などが南花田、小阪遺跡などより出土し、識字層の存在を窺わせる遺物としては、大庭寺、万町北、小角田、小阪遺跡などから出土している各種陶硯があげられる。

さらに、万町北遺跡から検出された井戸からは、土師器、「中家」と墨書きされた須恵器坏身、黒色土器A類などと共に、大同五(810)年七月十六日云々と記された記年銘木簡が出土し、特筆に値する。

前時代に施行された律令制の崩壊が顕在化する頃では、荘園領主や在地有力者により平野部の耕地が再整備され、一方、それらの経済力を基盤として寺院建立が盛んとなる。小阪遺跡周辺でも仏光寺、釈尊寺などが確認されており、この時期、新たに発展した山岳仏教の浸透を和泉において具現する形では松尾寺、大威徳寺なども建立される。また、槇尾山には末法思想を反映した経塚群が構築されはじめる。

これら荘園領主、在地有力者層の台頭が、やがて武装集団に取って変わられる時期では、和泉の各地域で、『一遍上人絵伝』に表されるような堀によって区画された居館跡が発掘調査で検出されている。代表的な例は複郭式構造をもつ和氣遺跡の例、福瀬遺跡などであり、それはやがて防御的性格が強まり、大仙遺跡や、当時の景観を現在に留める複郭式の綾井城跡検出例のように城館へと発達してゆく。

調査で確認された集落も数多く、区画溝や、掘立柱建物をはじめとした各種の遺構が検出されている。これらの中には、園池を構築している例や、青磁・白磁などの輸入陶磁器を中心とした遺物を副葬する墳墓が検出される田園、小角田、万町、机场遺跡などが報告されている。小阪遺跡周辺で現在見られる整然とした土地区画が完成するのも、この時期であることが発掘調査で確認されている。

この他、当時の石製品も現在にまで遺存し、代表的なものに孝恩寺の貞觀4(1348)年銘、興善寺の正平21(1366)年銘を持つ五輪塔があるほか、大雄寺跡からは応安5(1372)年の笠塔婆が出土している。

武士が権勢を欲しいままにする頃、岡山、貝塚などに宗教を根幹とし、城塞的性格を持つ寺院を構築して自治統治を主張する寺内町が形成された他、莫大な財力を持つ商人を中心とした会合衆と呼ばれる世話役を選出することによって独立的管理を行った環濠を巡らす自由都市『堺』が成立した。二者はそれぞれ戦国武将に抗ったが、織田信長、豊臣秀吉らの徹底的な弾圧、武力攻撃により屈伏を余儀なくされた。堺環濠都市遺跡では、各調査区で奢侈な遺物が大量に出土し、我々の眼前に往時を偲ばせている。

幕藩体制が確立した後、小阪遺跡付近一帯は、農業主体の生産活動を行う人々の生活基盤として利用された。地名に遺存する伏尾新田等の名が示す通り、周辺部とともに耕地拡大や整備が幾度となく繰り返された。さらには、商品作物である菜種栽培も普及したことが記録に留められ、小阪遺跡発掘調査の一環として実施した花粉分析では、アブラナの花粉化石が検出され、上記を裏付けるものであろう。

以上が小阪遺跡周辺の歴史的変遷である。遺跡を理解する一助とならんことを望みたい。

註

1) この記述に対し森氏は、和泉國は和泉監の誤りであろうとしている。

森 明彦 1986「奈良時代」『高石市史』第二巻 資料編I 高石市史編纂会 P.304

引用文献

- 文献一 血沼の地名説話には、五瀬命が手についた血を洗ったことに由来するという古事記の一文がある。
- 文献二 茅渟の字が使用されるものに日本書紀の一文がある。
- 文献三 716年に和泉監が河内国より独立して設置されたことが続日本記の一文にある。
- 文献四 聖武天皇が紀伊行幸の帰り和泉国所石頓宮(現高石市域)に立ち寄ったことが続日本記の一文にある。
- 文献五 740年和泉監を河内国に統合することが続日本記の一文にある。
- 文献六 757年に河内国から和泉国を分割したことが続日本記一文にある。
- 文献七 阿部広庭なる人物を知河内和泉事に任命したという続日本記の一文がある。

2. 位置と環境

- 山本 博 1980 「竹原井頓宮の造営とその廃滅」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』 鏡山猛古稀記念論文集刊行会 P.676~679
 氏は、上記の記載を根拠に第1回目の和泉国の設置を広庭の着任した養老六(722)年、同国が河内国に統合されたのを広庭の没した732年とし、『法隆寺伽藍縁起并流起資材帳』に見える天平十(738)年四月、同十九(747)年の記事で日根郡・和泉郡が河内国に編入されていることから、740年までは和泉監が執政を行い、757年、新たに和泉国が設置されるまで旧和泉国は廃止されたとした。
- 松本政春 1980 「和泉国の併合と独立について」『忠岡の歴史』2 忠岡町教育委員会
 文献七の記事に着目した松本氏は、『続日本紀』の養老五(721)年、神亀元(724)年、天平五(733)年5月には和泉監を含めた五畿内の表現がみられるが、『公卿補任』に阿部広庭が知河内和泉事に任せられていることが記されている神亀三(726)年六月と天平二(730)年六月、同閏六月には四畿内と表現されていることから、河内と和泉が同一の行政単位として位置づけられていたとした。
- また、同氏の論考に対し、かなりの蓋然性をもつとしたものに森氏の見解がある。
- 森 明彦 1989 「律令制下の高石」『高石市史』第一巻 本文編 高石市史編纂会 P.199
 趙 哲済・藤田憲司・瀬川 健ほか 1988 『平井遺跡－発掘調査報告書－』 (財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第21輯 大阪府教育委員会・財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
 久世仁士 1990 『和泉考古学文献目録』地沼3 和泉考古学研究会
 駒井正明 1987a 「歴史的環境(付)岸和田市域遺跡文献一覧」『芝ノ垣内遺跡－発掘調査報告書－』 (財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第8輯 大阪府教育委員会・財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
 1987b 「歴史的環境」『信太山遺跡－発掘調査報告書－』 (財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第12輯 大阪府教育委員会・財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

参考文献

一 古事記 中巻 神武記

五瀬命、於御手一負_二登美毗古之痛矢串_一、故爾、詔、吾者為日神之御子、向_レ日而戰不良、故、負_二賤奴痛手_一、自_二今者_一行廻而、背負_レ日以擊期而、自_二南方_一廻幸之時、到_二血沼海_一、洗_二其御手之血_一、故、謂_二血沼海_一也

二 日本書紀 卷第三 神武即位前紀戊午年五月癸酉条

軍至茅渟山城水門_一、亦名山井水門_一、茅渟_二此云智怒_一

三 続日本紀 卷七 靈亀二年四月甲子条

割_二大鳥_一、和泉、日根_二郡_一、始置_二和泉監_一焉

四 続日本紀 卷九 神亀元年十月丁未条

行還至_二和泉國所石頓宮_一、郡司小領已上給_二位一階_一、監正已下至_二于百姓_一、賜_レ祿各有_レ差

五 続日本紀 卷十三 天平十二年八月甲戌条

和泉監并_二河内国_一焉

六 続日本紀 卷二十 天平勝宝九歳五月乙卯条

勅日、(中略)其能登、安房、和泉等国依_レ旧分立

七 続日本紀 卷九 養老六年三月戊申条

以_ニ正四位下阿部朝臣広庭_一知河内和泉事

『国史体系』第二卷

『国史体系』第二卷

『日本思想体系』1
67

第Ⅰ部 発掘調査の成果

第1章 層序と遺構の概要

1. 基本層序 (Fig.10~12)

前章で述べてきたように小阪遺跡は総延長約1kmにもおよび、調査区の中心をまさに分断するかたちで現在の陶器川が貫流している。調査に着手する以前から、この広大な氾濫原内に堆積した土砂が一様ではないことがわかつてはいたが、実際の状況は予想をはるかに越えて複雑であった。調査を開始してもしばらくは担当者も頭をかかえるだけというありさまであった。調査が終了した現段階でも、全調査区にまたがる基本層序を再構築するのは現実の作業としては容易なことではない。したがって、ここでは便宜上、地形的な分類と地層の成因によって包括されるいくつかのグループに記述を分け、各地区の堆積層から調査中に問題となった部分を抽出し、さらに大きな堆積層の単位ごとに時代別の対応関係を明らかにすることで後章への理解の助けとしたい。

1) 層序の概要

小阪遺跡は前述したように東西に長い谷状の地形に立地する。これらは、小阪遺跡の東端にあたる部分で原ノ池を含む大きな谷部（G、H地区）、そして伏尾丘陵から旧陶器川への斜面堆積（I地区）や旧陶器川の直接的な氾濫原（D地区）など、西端側では旧陶器川と旧石津川の氾濫原が錯綜する部分（A～C地区）に大別することができる。以下では、この4パターンの地形生成原因を念頭におきながら各時期ごとに見ていくことにしたい。

中・近世（第I層）

現況地盤をみると、東から西へゆるやかに傾斜する地形に水田区画が整然と配置されているのがわかるが、この傾斜は現在の耕作にともなう土壤などを取り除いた後も、近世、中世を通じて継続していることから、この時期には比較的安定した自然環境であったことがうかがえる。

近世の堆積層はおもに砂質のものが多く、ほとんどの土層の上部は土壤化している。礫はごくまれにしか含まれない。層の厚さは各々均一で、5cm～20cm程度の薄層である。土壤化した層の上部にはマンガンの点状小結核が集積していることから、雑草、栽培植物にかかわらず、植物の繁茂が想定される。いわゆる耕土の特徴であろうかしまりが悪く、空気を多く含む。植物遺体なども比較的多く含むために土色は灰色系にかたよる。粘土質の堆積層も若干は存在するが、砂質土層より相対的に下位に堆積する傾向が認められた。この土層には鉄分を多く含むためか、明黄橙色を呈するものが多い。従来、床土と呼ばれてきたものがこれにあたるが、土壤学の見地から、自然堆積である可能性も一部では指摘されている。通例、この両者の互層を1単位として2～3回の堆積がくりかえされている。これらの堆積状況は全地区を通じて見られる。

中世の堆積層もおおむね近世の堆積層と同じ様相である。ただし、若干の還元状態にあるため、土質はやや粘性が強く、鉄分を多く含むので色相は黄灰色系で、下層になるほど灰白色を呈する。近世の堆積層と同様にマンガン粒の点状小結核は認められるが、同一堆積層中に広く散見される場合が多い。層厚は10cm～20cm程度である。これらの堆積層はC地区の巨大な自然堤防を除いて、ほぼ全地区で見られる。G地区では原ノ池の堤が築造された関係で地下水が滯留し、中世の堆積層は半還元状態におかれている。

1. 基本層序

いた。このため、G地区の中世堆積層は暗灰色を呈し、粘性の非常に強い土壌となっている。この中には炭酸カルシウムの結核が認められ、沼地のような環境であったことがうかがわれる。

古代（第II層）

飛鳥～奈良・平安時代にかけての堆積層は、古墳時代河川あるいは谷状地形の埋没過程最終段階に形成された窪地にのみ見られる。したがって層厚は一定しないが、深くても40cm程度である。堆積層はどの地点でも大変近似した様相を示しており、特に下半部は非常に粘性が強い。有機質を多く含む、基本的に灰色系の土壌である。数次にわたる堆積の間隙には、足跡と考えられる痕跡が存在し、下部の堆積層を巻き上げていることが断面で観察できる。非常に短期間の水田耕作が行われた可能性もある。

古墳時代以前（第III層）

基本的には鉄分の沈着が著しく、黄橙色を呈する粘質土である。マンガン粒の点状小結核も比較的多く見られ、層厚は10～30cm程度を測る。この堆積層の上面から古墳時代中期の遺構が検出されるが、本来なら、第II層と第III層の間に有るべき古墳時代包含層は残存しておらず、C地区にわずかながらその痕跡をとどめるにすぎない。層中には古墳時代の遺物を全く見出せず、下層の第III層には、弥生時代以前の遺物のみが包含されているので、堆積層自体の形成時期は弥生時代以前のものと考えるほうが妥当であろう。この堆積層は、調査範囲の中でも現陶器川左岸を中心とした分布を示すが、右岸側周辺にも若干見られる。旧陶器川と旧石津川によって形成された自然堤防の頂部であろうと考えられる。

弥生時代以前（第IV層）

第III層と同様の分布を示すが、現陶器川右岸側にもやや広く分布する。巨視的に見れば粒度の違いはあるものの、シルト質の土壌で、層厚は約80cmを測る部分もあってかなり厚い堆積である。堆積土自体は、灰白色系の色調を基本としているが、マンガン斑が大量に層中に含まれるため、褐色系を呈するよう見えたり、部分的には遺構の埋土と取り違えるぐらい、平面、垂直両方向ともに密集している。かなり広範囲で濃密な植物の繁茂が想起される。そしてこの堆積層の上面には、巨大な立ち木の幹が顔を覗かせており、その根は層中に張り巡らされている。この立ち木は調査区全域に広がり、後章で詳しく報告するが、放射性炭素¹⁴Cを利用した年代測定によると、ほとんどすべての試料が縄文時代晚期以前の年代を示している。堆積層の上位で、D地区内に弥生時代前期の遺物が確認されているほかは、すべて縄文時代晚期以前の遺物のみが確認されている事実と符合する。現陶器川右岸を中心とした範囲では、古墳時代の遺構がこの堆積層上面で検出される。

縄文時代晚期以前（第V層）

基本的にこの堆積層から下位は地下水の影響下にある。常に還元状態に置かれているため、全地区を通じて青灰色～緑灰色系の色調を示す。土質は、粘土あるいは粒形の細かいシルトで構成されており、層厚1mにもおよぶ堆積が幾層も連続している。各堆積層自体のしまりは非常に良く、均質である。遺物も含めて、混入物は極めてまれである。各堆積層は本来は確実に分離できたものであろうが、調査段階ですべてを正確に分層することは困難であった。ただし、比較的長期にわたって露出していたと考えられる層理面付近は、土壌化して有機質を多く含んでいるため、暗灰色を呈しており判別しやすい。顯著に有機質を含む層が確認されたのは第V層中では上下で2個所あり、上位の有機質層付近では、縄文時代晚期の土器が点的に散見される。F地区では縄文時代後期の遺物が集中する部分があり、そこでも大量の有機質が確認されている。I地区では最下部に近い深度でアカホヤ火山灰層が検出されている。第V層の下層には砂礫が堆積しており、相当数に上る河川等が複雑に切り合っている状況がうかがえる

が、調査深度がその上部にまでしか到達しておらず、詳細は不明である。

2) 層序の対応関係とその問題点

前節でその概略を記した基本層序の第Ⅰ層～第Ⅴ層は、各々微視的に見れば、複数の堆積層で構成されていたり、堆積後の環境変化によって色相などが激変しており決して一様ではない。各地区ごとの層序も同様の理由や、調査時の視点の違いによって必ずしも統一されているわけではない。そこでFig. 11・12にあげたように、各地区から代表的な層序を表している部分を柱状図として抜粋した。これを時期が確認された遺構面ごとに連結し、さらに特徴的な堆積層を明示することで、調査区全体の層序の流れを把握できるようにしている。Fig.10はこれらの基本層序と遺構面とのかかわりを模式化したものである。

さて、ここでこれらの基本層序が内包する問題について若干触れておきたい。それは、堆積層の対応関係についてである。問題はそれらがあくまで層中に含まれる遺物や上面の遺構の年代から類推して、最大公約数的にまとめられたものであるというところに存在する。先述したとおり、大きくは3パターン程度の地形生成原因があって、さらに細かい河川等の溢流堆積が繰り返される中では、無限に近い堆積状況が考えられる。すなわち、厳密には単独の堆積層が調査区全域に分布することは有り得ないのである。特に基本層序の第Ⅴ層などは還元状態にあるため、グライ化して全体が青灰色になってしまっており、肉眼観察による通常の方法で分層することは不可能に近い。遺物を面的に検出した場合、あるいは突如として現れる河川の砂礫などを指標として、偶発的に層理面を発見することはあっても、当時の微地形を復元するなどというレベルからは、ほど遠い資料しか得られてはいないということである。こうした問題を踏まえた上でも、敢えて青灰色の堆積層上面を上位の堆積層と切り離す理由は、G地区を中心に現陶器川の右岸では遺構面が確認されているからである。ただし、現陶器川の左岸ではこの青灰色の堆積層の上面というのは、現状での地下水位の高さを示すものではあっても、少なくとも考古学的には全く意味を持たないということを補足しておく。

2. 遺構の概要（付図1～3）

小阪遺跡内では古墳時代の集落を中心に各時代の遺構が検出されている。これらのほとんどはすでに概要で報告されているが、ここでは抜本的な再編成を行い、新たな遺構番号等も付与することとした。從来からの刊行物との対照を明確にするため以下に表を示し、主な遺構の時間的、空間的な分布についてはその概略を記す。

1) 河川

調査区の自然地形については前項でも述べたが、旧地形もほぼ同様の状況であり、検出される埋没河川はすべてこの地形に沿っている。旧石津川の氾濫原付近で南北方向の河川が確認されているほかは、旧陶器川沿いに東西方向へ流れていたと考えられる河川が圧倒的に多く検出されている。時期的には縄文時代の河川が最も古く、規模も大きい。この縄文河川の上部と重複して古墳時代河川が検出される例が多い。また、ほとんどの河川が最終的には中世に至る前に埋没してしまうが、その形成時期は古墳時代にさかのぼる。

2. 遺構の概要

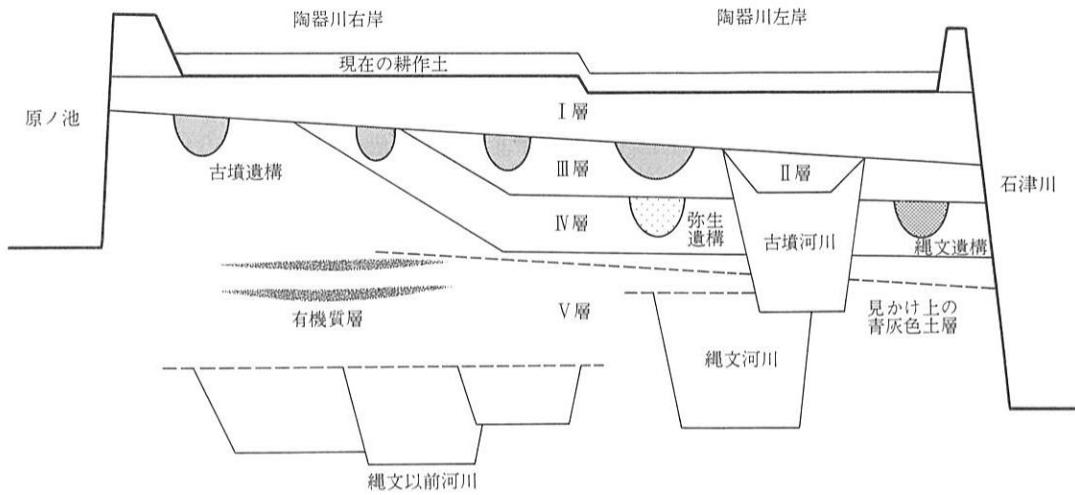


Fig.10 小阪遺跡の多期にわたる基本層序

2) 縄文時代～弥生時代の遺構

縄文時代の主な遺構としては、I 地区で検出された土器片敷遺構があげられ、類例の少ない土器が出土している。現石津川よりには土坑が数基、検出されている。この他、F 地区で遺物が集中して検出された以外には顕著な遺構はない。弥生時代にいたっては、C 地区で自然の流路を利用したと考えられる溝状の遺構が数条検出されているのみで、調査区内での空白期となっている。

3) 古墳時代の遺構

古墳時代は小阪遺跡内ではまさに中心的な時代であり、検出される遺構も極めて多い。特に C 地区で検出された、竪穴住居や掘立柱建物をはじめとする古墳時代中期の集落は、すぐ南側に隣接する伏尾丘陵の集落との対比からも注目に値する遺構群であろう。また、現陶器川右岸側で数多く検出された溝群は庄内期～布留期にかけての古墳時代初頭のものである。調査区東端にあたる H 地区では古墳時代中期～後期の須恵器窯の灰原も検出されている。

4) 飛鳥時代以降の遺構

当該時期を境にして、小阪遺跡内では直接的な生活の痕跡は姿を消し、耕作にかかる遺構がほとんどを占めるようになる。調査区内のいたるところで古墳時代河川の最終埋没層の上に湿田が営まれるのがその発端である。I 地区では、小区画の水田が検出されている。この後、条里制施行後に長地型の地割りに統一され、中・近世に至るまで調査区全体で鋤溝が継続して検出される。

T.P.+23.0m

T.P.+22.0m

T.P.+21.0m

T.P.+20.0m

T.P.+19.0m

T.P.+18.0m

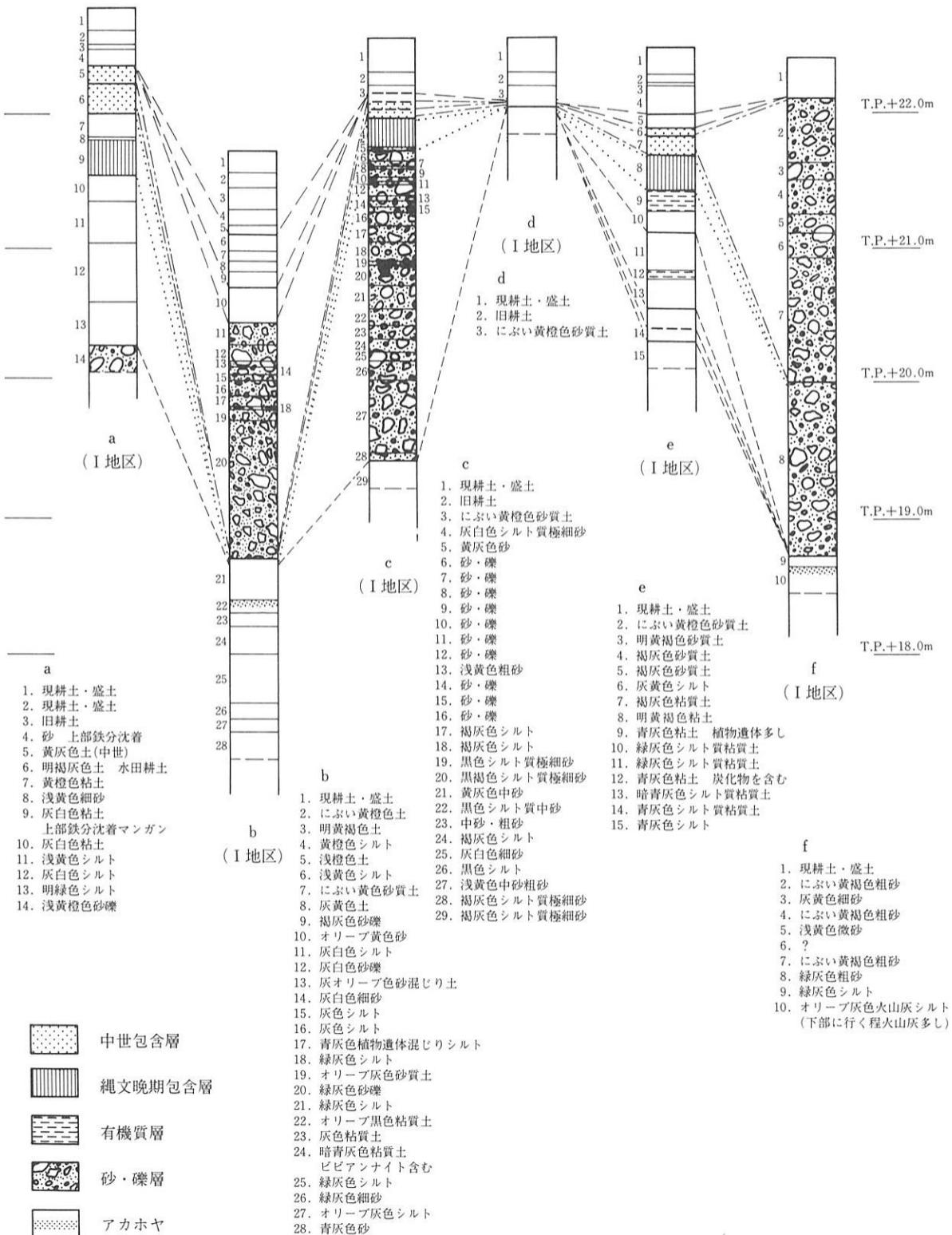


Fig.12 各地区における柱状断面(2)

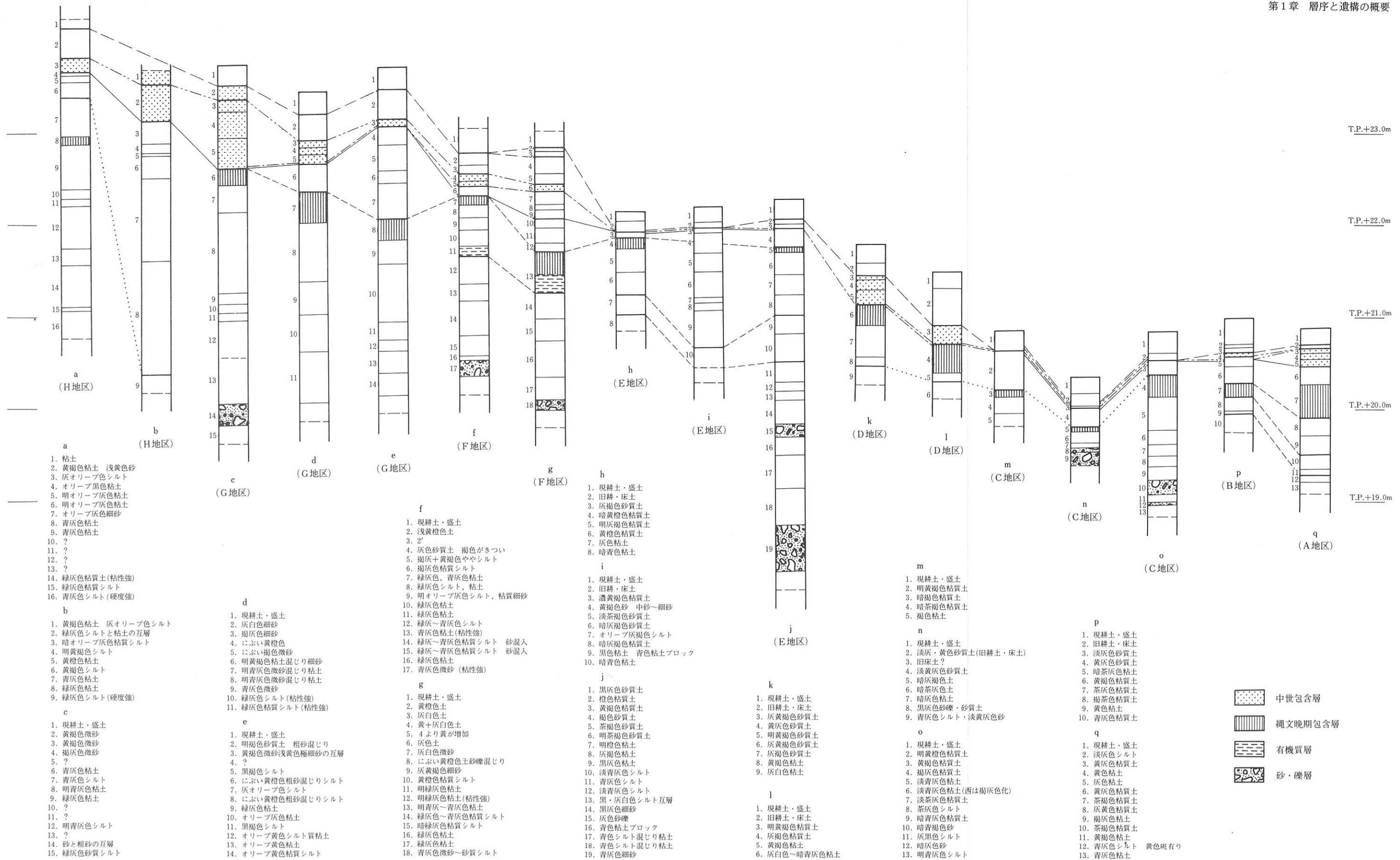


Fig.11 各地区における柱状断面(1)

2. 遺構の概要

Tab. 2 新旧遺構名対照表(1) 繩文～弥生時代遺構

新遺構番号	概報時遺構名	地区	参照概報名・項・図面および写真	時期
河川 1	第5遺構面 微高地	3/4B	その3 1写13,14	繩文
河川 2	砂層堆積	1/12/17C	その3 15 図6,10	繩文
河川 3	河川	3/12/13/22～25C	その3 11 図10	繩文？
河川 4	流路	1/2/12～16D	その4 9～11 写5	繩文晚期～弥生
河川 5	自然流路	2/3/4E	その5 29～31 図17,19	繩文後期～晩期
河川 6	河川	6F	その6 1,2 45 図41	繩文後期～晩期
河川 7	—	2/4/5/6E	その5 33 図19,20	繩文後期？
河川 8	河川 5	3/4/5E	その5 33～38 図19,20 写21,22	繩文中期～後期
河川 9	河川 2／河川 1	1/2F	その6 1,2 26,39 図17,28 写31	繩文中期末(前)～後期初頭
河川 10	繩文河川 1	16F	その6 3 12 図6,7 写5～7	繩文中期末(前)～後期初頭
河川 11	河川 2	1F	その6 1,2 26,39 国17,28 写31	繩文中期～後期
河川 12	繩文河川 2	15/16F	その6 3 12 国6,7,13 写5～7	繩文中期～後期
河川 13	河川 2	1F	その6 1,2 26 国17	繩文後期
河川 14	繩文河川 3	15/16F	その6 3 22 国13	繩文後期
河川 15	河川 1／河川 3	2F	その6 1,2 40 国28 写32	繩文
河川 16	繩文河川 4	1/2F	その6 1,2 26,40 国17,28 写33,34	繩文
河川 17	繩文河川 4	15F	その6 3 12 国6 写6	繩文
河川 18	河川 1	1F	その6 1,2 26 国17	繩文中期～後期初頭
河川 19	繩文河川 5	15F	その6 3 12 国6	繩文中期～後期初頭
河川 20	繩文河川 1	15G	南その2 付章 国3 写3～5	繩文中期～後期初頭
河川 21	繩文時代の河川	3F	その6 1,2 43 国32	繩文後期
河川 22	繩文時代河川	4F	その6 1,2 44 国36	繩文
河川 23	繩文河川 1	1/2G	その7 1,2 12,13 国7,8	繩文(前)中期～後期
河川 24	繩文河川 2	1G	その7 1,2 13 国7	不明
河川 25	繩文河川 3	1G	その7 1,2 13 国7	不明
河川 26	河川 5	2G	その7 1,2 16 国11	弥生中期
河川 27	河川 19/11/12G	7/9/11/12G	その7 3 10,11 国6	繩文中期～後期
河川 28	河川 2	7/9/12G	その7 3 10,11 国6	繩文中期～後期
河川 29	弥生河川 1	7/11/12G	その7 3 10,11 国6	弥生
河川 30	弥生河川 2	9/12G	その7 3 16 国6 写5	弥生
河川 31	自然流路 4	1H	その8 19～22 国14,16	繩文晚期～弥生
河川 32	自然流路 7	1H	その8 19～22 国14,	繩文後期
河川 33	自然流路 1／6	1/2H	その8 19～22 国14,16	繩文中期～弥生
河川 34	自然流路 2	1H	その8 19～22 国14,16	弥生
河川 35	自然流路 3／8	1/2H	その8 19～22 国14,16 写9	弥生
河川 36	河川 3	13/14I	南その2～2 27 国26 写14	繩文後期
河川 37	河川 4	13/14I	南その2～2 33	繩文中期～後期初頭
河川 38	河川 5	13/14I	南その2～2 33	繩文中期
土 器	—	10I	南その2	繩文早期～前期初頭
土器群	第9,10面	13I	南その2 44,45 国41 写36,37	繩文中期
土器片敷遺構	土器片敷遺構	11I	南その2 36,43 国36 写32～35	繩文中期～後期初頭
土 坑	土坑13	14I	南その2～2 32 国32	繩文中期～後期初頭
落込み 1	落込 1	11I	南その2 34,36 国34,35	繩文中期～後期初頭
落込み 2	落込 2	11I	南その2 34,36 国34,35	繩文中期～後期初頭
土器群 1	土器集中区	13F	その6～3 71 国63	繩文中期～後期初頭
土器群 2	第3地点	2F	その6～1,2 37～39 国27,28 写30	繩文中期～後期初頭
土器群 3	第1地点 下層	2F	その6～1,2 37～39 国28	繩文中期～後期初頭
土器 4	—	15G	南その2 付章 6	繩文中期～後期初頭
土器群 5	第7,8面	11I	南その2 34 国34	繩文中期～後期初頭
遺物集中区	遺物集中区	15F	その6～3 24～28 国13～15 写14～18	繩文後期
土器 1	第6面	4E	その5 29～31 国17 写17	繩文後期(宮瀧)
土器群 2	—	1F	—	繩文後期(北白川上層2～3)
土器 3	青灰色粘土層内(遺物のみ)	16F	—	繩文後期(元住吉山1)
土器群 4	繩文河川埋土直上(同上)	16F	その6～3 31	繩文後期(上層3～一乗寺K)
土器群 5	第2地点	2F	その6～1,2 37～39 国26,28	繩文後期(上層3～一乗寺K)
土器群 6	第1地点	2F	その6～1,2 37～39 国25,28 写29	繩文後期(上層3～一乗寺K)
土器群 7	—	10F	その6～3 63	繩文後期
土器群 8	繩文後期土器集中区	11F	その6～3 67 国56,57 写96	繩文後期(北白川上層2)
土器群 9	青灰色粘土面下層	3F	その6～1,2 43 国32	繩文後期(4ツ地)
土器群10	繩文後期相当層	9F	その6～3 60 国47 写86	繩文後期
土器群11	青灰色粘土中	12G	その7～3 10,11	繩文後期(元住吉山)
土坑 1	第4遺構面 土坑	4B	その1～14 国5 右 写11	繩文晚期
土坑 2	第4遺構面 土坑	4B	その1～14 国5 左	繩文晚期
土坑 3	第5遺構面 土坑	4B	その1～16 写17	繩文晚期
溝 1	溝 2～10,12	3/12/19C	その3～13 国10,64	繩文晚期～弥生前期
溝 2	溝 2～9	12/19C	その3～13,15 国10,64	繩文晚期～弥生前期
溝 3	溝 2～11	3C	その3～15 国9,10,64 写6	繩文晚期～弥生前期
溝 4	溝 2～7	5～7/29C	その3～13 国10,64	繩文晚期～弥生前期
溝 5	溝 2～6	32C	その3～13 国10,64	繩文晚期～弥生前期
溝 6	溝 2～4	9～11C	その3～13 国10,64	繩文晚期～弥生前期
溝 7	溝 2～5	11C	その3～13 国10,64	繩文晚期～弥生前期
溝 8	溝 2～1	15C	その3～12～13 国10,64 写3	弥生前期
溝 9	溝 2～3	16/39C	その3～13 国10,64	繩文晚期～弥生前期
溝 10	溝 2～2	16C	その3～13 国10,64	弥生前期
	自然流路	7D	その4～9 国8 写3	弥生前期
土器群 1	土器群 2	5/29C	その3～12～15 国10 写5	弥生前期
土器群 2	土器群 1	15C	その3～12～15 国10,64 写4	弥生前期
土器群 3	5面	5/6E	その5～29～31 写16,19,20	繩文晚期
土器群 4	青灰色粘土面下層	6F	その6～1,2 45 国39	繩文晚期
土器 5	青灰色粘土出土土器	16F	その6～3 22 写9	繩文晚期
土器 6	土器・石器散布地	1F	その6～1,2 26 国17 写19	繩文晚期
土器群 7	弥生土器出土状況	2H	その8～20 国15 写8	弥生前期
土器群 8	第6面河川 2両岸土壤化層	5I	南その1～21	繩文晚期～弥生前期
	第6面河川 2両岸土壤化層	10/12I	南その2～32 国33	繩文晚期～弥生前期
土 坑	土坑10	2H	その8～21,22 国16,17 写10	弥生
しがらみ	しがらみ状遺構 1	2H	その8～21 国17 写11	弥生
杭 列	杭列	2H	その8～22 国18 写11	弥生
水 田	—	2H	その8	弥生
谷状地形	谷状地	9/10/11C	その3 国64	弥生～

Tab. 3 新旧遺構名対照表(2) 古墳時代遺構①

新遺構番号	概報時遺構名	地 区	参照概報名・項・図面および写真	時 期
河川1	河川	3/12/13/22~25C	その3 52~53 図49~52 写14~23	中期 ~
河川2	河川2	1~6E	その5 19~21 図11 写12	中期以降
河川3	河川1	1/2E	その5 19~21 図11 写12	中期以降
河川4	流路2	2~4E	その5 29~31 図17	中期以前
河川5	流路1	5E	その5 29~31 図17	中期以前
	自然流路2	15/16F	その6~3 34 図22	中期以前
河川6	自然流路3	8/10/12/14F	その6~3 57,63,68,69,72 図43,52,60, 写101,102	中期~後期
河川7	自然流路4	14/15/16F	その6~3 34,72 図23,66	中期以降
	自然流路1	1F	その6~2 23 図13,15	中期~後期
河川8	自然流路1	7/15F	その6~3 34 写27	中期~後期
	河川2	2/3G	その7,7~2 31~32 図23,26~28	中期~後期
	河川2	9/10/12G	その7~3 24~28 図10,17,18 写14~23	中期~後期
河川9	自然流路6 / 自然流路1	1/2H	その8 15~19 図11,12	?
溝 1	溝301	1A	その2 11 写3~5	?
溝 2	溝?	3/4B	その1 10 写8	中 期
	溝29	12/21/19/17C	その3 52 図65	中 期
溝 3	溝23	12/17C	その1 13 写8~10	中 期
溝 4	溝27	12C	その3 50,51 図48,65	中 期
溝 5	溝25	12C	その3 52 図65	中 期
溝 6	溝26	12C	その3 52 図65	中 期
溝 7	溝24	12C	その3 52 図65	中 期
溝 8	溝14	5/27C	その3 48,49 図45	中 期
溝 9	溝13	27C	その3 図65	中 期
溝 10	溝12	28C	その3 図65	中 期
溝 11	溝11	9/28/29C	その3 45~47 図42,43	中 期
溝 12	溝9	14/30C	その3 図65	中 期
溝 13	溝6	15C	その3 図65	中 期
溝 14	溝19	31C	その3 国65	中 期
溝 15	溝3	15/33/34/9C	その3 45 国65	中 期
溝 16	溝3	5E	その5 28 国14	?
溝 17	溝1	4/5E	その5 23~28 国14	中 期
溝 18	溝2	4/5E	その5 27,28 国14	中 期
溝 19	溝3 / 溝3	7/16F	その6~3 38 国23,40	中 期
溝 20	溝1	1F	その6,6~2 18,19 国9,10	?
溝 21	溝3 / 溝12 / 溝19	1F	その6,6~2 22 国10,12	前 期 ?
	溝1 / 溝12 / 溝19	7/15/16F	その6~3 38,55,56 国23~39	前 期 ?
溝 22	溝8	16F	その6~3 33~38 国23	前 期 ?
溝 23	溝2	7F	その6~3 56 国37~39 写70~74	中~後期
溝 24	溝2 / 溝1 溝17 / 溝17	1/2F 15/16F	その6,6~2 20,21,31 国10,11,19 写13~15 その6~3 38 国23~26 写29~43	前 期
溝 25	溝?	2F	その6,6~2 29 国19	?
溝 26	溝18	15F	その6~3 38 国23	?
溝 27	溝20	15F	その6~3 33~38 国23	前 期 ?
溝 28	溝9 / 溝12	1/2G	その7,7~2 国23	後 期
溝 29	溝16	11/12G	その7~3 48 国10	後 期
溝 30	溝15	12G	その7~3 国10	後 期
溝 31	溝11	2G	その7,7~2 24	?
溝 32	溝8	2/5G	その7,7~2 17 国13~16	前 期
溝 33	溝17	12/14G	その7~3 15,17~20 国10~13 写8~10	前 期
溝 34	溝9	12G	その7~3 国10	前 期 ?
溝 35	溝3	10G	その7~3 20 国10,14 写12,13	前 期
溝 36	溝9 / 溝9	2H	その7~3 47 国10,18	中~後期
溝 37	溝8	2H	その8 19 国13	?
土坑1	土坑38	2H	その8 16 国11	?
土坑2	土坑37	13C	その8 17 国12	?
土坑3	土坑53	13C	その8 17 国12	?
土坑4	土坑33	7C	その8 17 国12	?
土坑5	土坑34	29C	その8 17 国12	?
土坑6	土坑31	29C	その8 17 国12	?
土坑7	土坑31	13C	その8 17 国12	?
土坑8	土坑30	13C	その8 17 国12	?
土坑9	土坑32	13C	その8 17 国12	?
土坑10	土坑28	13C	その8 17 国12	?
土坑11	土坑29	13C	その8 17 国12	?
土坑12	土坑23	13C	その8 17 国12	?
土坑13	土坑24	13C	その8 17 国12	?
土坑14	土坑25	13C	その8 17 国12	?
土坑15	土坑51	9C	その8 17 国12	?
土坑16	土坑22	30C	その8 17 国12	?
土坑17	土坑20	14C	その8 17 国12	?
土坑18	土坑19	14C	その8 17 国12	?
土坑19	土坑17	14C	その8 17 国12	?
土坑20	土坑18	14C	その8 17 国12	?
土坑21	土坑20	14C	その8 17 国12	?
土坑22	土坑16	14C	その8 17 国12	?
土坑23	土坑9	14C	その8 17 国12	?
土坑24	土坑8	14C	その8 17 国12	?
土坑25	土坑7	14C	その8 17 国12	?
土坑26	土坑15	14C	その8 17 国12	?
土坑27	土坑11	14C	その8 17 国12	?
土坑28	土坑13	14C	その8 17 国12	?
土坑29	土坑12	14C	その8 17 国12	?
土坑30	土坑29	14C	その8 17 国12	?
土坑31	土坑21	14C	その8 17 国12	?
土坑32	土坑16	14C	その8 17 国12	?
土坑33	土坑5	14C	その8 17 国12	?
土坑34	土坑3	14C	その8 17 国12	?
土坑35	土坑2	14C	その8 17 国12	?
土坑36	土坑1	14C	その8 17 国12	?

2. 遺構の概要

Tab. 4 新旧遺構名対照表(3) 古墳時代遺構②

土坑36	土坑	7D	その4 15 写11 図12	後期
土坑37	土坑	7D	その4 15 写11 図12	後期
土坑38	土坑	7D	その4 15 写11 図12	後期
土坑39	土坑4	2G	その7,7-2 25 図20	前期
土坑40	土坑5	2G	その7,7-2 25-26 図21,23	前期
竪穴住居1	住居4	13C	その3 27-28 図21	中期
竪穴住居2	住居6	13C	その3 28 図23	中期
竪穴住居3	住居5	13C	その3 28 図23	中期
竪穴住居4	住居3	13/28C	その3 24-26 図18,19	中期
竪穴住居5	住居2	28C	その3 21-24 図16	中期
竪穴住居6	住居1	13/29C	その3 17-20 図13,14	中期
掘立柱建物1	建物3	13C	その3 30 図26	中期
掘立柱建物2	建物2	15C	その3 30 国25	中期
掘立柱建物3	建物1	30C	その3 29 国24	中期
掘立柱建物4	掘立柱建物1	5/6/8I	南その1 27-28 国8,13 写21,22	中期
平地住居1	建物5	13/14/15C	その3 32 国27	中期
平地住居2	建物4	15C	その3 32 国27	中期
落込み	落込み301	1A	その2 12 写4	後期?

Tab. 5 新旧遺構名対照表(4) 古代遺構

新遺構番号	概報時遺構名	地区	参照概報名・項・図面および写真
河川1	河川	3/12/13-22-25C	その3 71 図66
河川2	河川2	1/2/4/5E	その5 19-21 国11 写12
河川3	河川3	1/2/3E	その5 19-21 国11 写12
河川4	古墳自然流路の上層	2F	その6,6-2 33 写24
	古墳自然流路の上層	10/12/14/15F	その6-3 45,61,68,69,72 国23,50,60, 写89,101,102
	古墳自然流路の上層	1F	その6,6-2 33 写24
	古墳自然流路の上層	7F	その6-3 55 国37
河川5	河川3	2G	その7,7-2 32-33 国30,31
	河川3	9/12G	その7-3 50-51 国37
河川6	河川1	1/6G	その7,7-2 26-29 国23,24
	河川1	7/11/12G	その7-3 50-51 国37 写31
河川7	自然流路1／6	1/2H	その8 15-19
河川8	河川2	9/7/11/4/13I	南その2 18-19 国10,20
谷状地形1	谷状地	9/10/11C	その3 58 国58
谷状地形2	自然流路	3E	その5 29-31 国17
	-	16F	その6-3 50 国32
掘立柱建物1	建物8	3C	その3 72-73 国62
掘立柱建物2	建物7	3C	その3 72-73 国62
掘立柱建物3	建物6	38C	その3 72-73 国62
掘立柱建物4	-	3F	その6,6-2 43 国31
土坑1	土坑49	37C	その3 国65
土坑2	土坑50	37C	その3 国65
土坑3	土坑44	38C	その3 国65
土坑4	土坑	1D	その4 17 国13
土坑5	土坑	1D	その4 17 国13
土坑6	土坑	1D	その4 17 国13
土坑7	土坑	1D	その4 17 国13
土坑8	土坑	1D	その4 17 国13
土坑9	-	1D	その4 17 国13
土坑10	-	1D	その4 17 国13
土坑11	-	1D	その4 17 国13
土坑12	-	1D	その4 17 国13
土坑13	-	1D	その4 17 国13
土坑14	-	14D	その4 17 国13
土坑15	土坑	8F	その6-3 57-58 国43,44 写78,80,81
土坑16	土坑12	10I	南その2 30-31 国26
土坑17	土坑10	10I	南その2 30-31 国26
土坑18	土坑3	5I	南その1 18-19 国15 南その2 国26
土坑19	土坑4	5I	南その1 18-19 国15 南その2 国26
土坑20	土坑5	5/9I	南その1 18-19 国15 南その2 30 国26
土坑21	土坑11	11I	南その2 31 国26
土坑22	土坑8	9I	南その2 18 国19
落込み群	落込み	5D	その4 17 国13 写12
溝1	-	16F	その6-3 国28
溝2	-	16F	その6-3 国28
溝3	溝13	16F	その6-3 国28
溝4	溝15	16F	その6-3 国28
溝5	溝16	16F	その6-3 国28
溝6	溝11	12G	その7-3 54-55 国41
溝7	溝12	12G	その7-3 54-55 国41
溝8	溝5	12G	その7-3 54-55 国41
溝9	溝1	12G	その7-3 54-55 国41
溝10	溝11	9I	南その2 18 国17 写9
しがらみ1	しがらみ	2F	その6,6-2 35,36 国23,24 写28
しがらみ2	しがらみ	15F	その6-3 45-48 国28,30,31
しがらみ3	しがらみ	2G	その7,7-2 31 国28

Tab. 6 新旧遺構名対照表(5) 中世以降遺構

新遺構番号	概報時遺構名	地区	参照概報名・項・図面および写真
河川1	河川4	7~12E	その9 8,11 国7
河川2	河川2	1/4/9/7/11/13I	南その2 18,19 国20 写10
河川3	河川3	2/9/12G	その7-3 51 国37
井戸1	-	1B	その1 国3
井戸2	井戸	16D	その4 16 国14
粘土探査坑	粘土探査坑	2I	南その1 29,30 国22,23 写29,30
土坑1	土坑8	10I	南その2 18 国13,14 写6
土坑2	土坑9	10I	南その2 18 国13,14 写6
溝1	溝4	10/12I	南その2 15,16 国13,14 写6
導水管	導水管	2H	その8 14 国9 写1
水溜1	水溜	16D	その4 16 国14
水溜2	水溜	16D	その4 16 国14
水溜3	水溜	16D	その4 16 国14

第2章 縄文～弥生時代の遺構と遺物

—谷間のむら

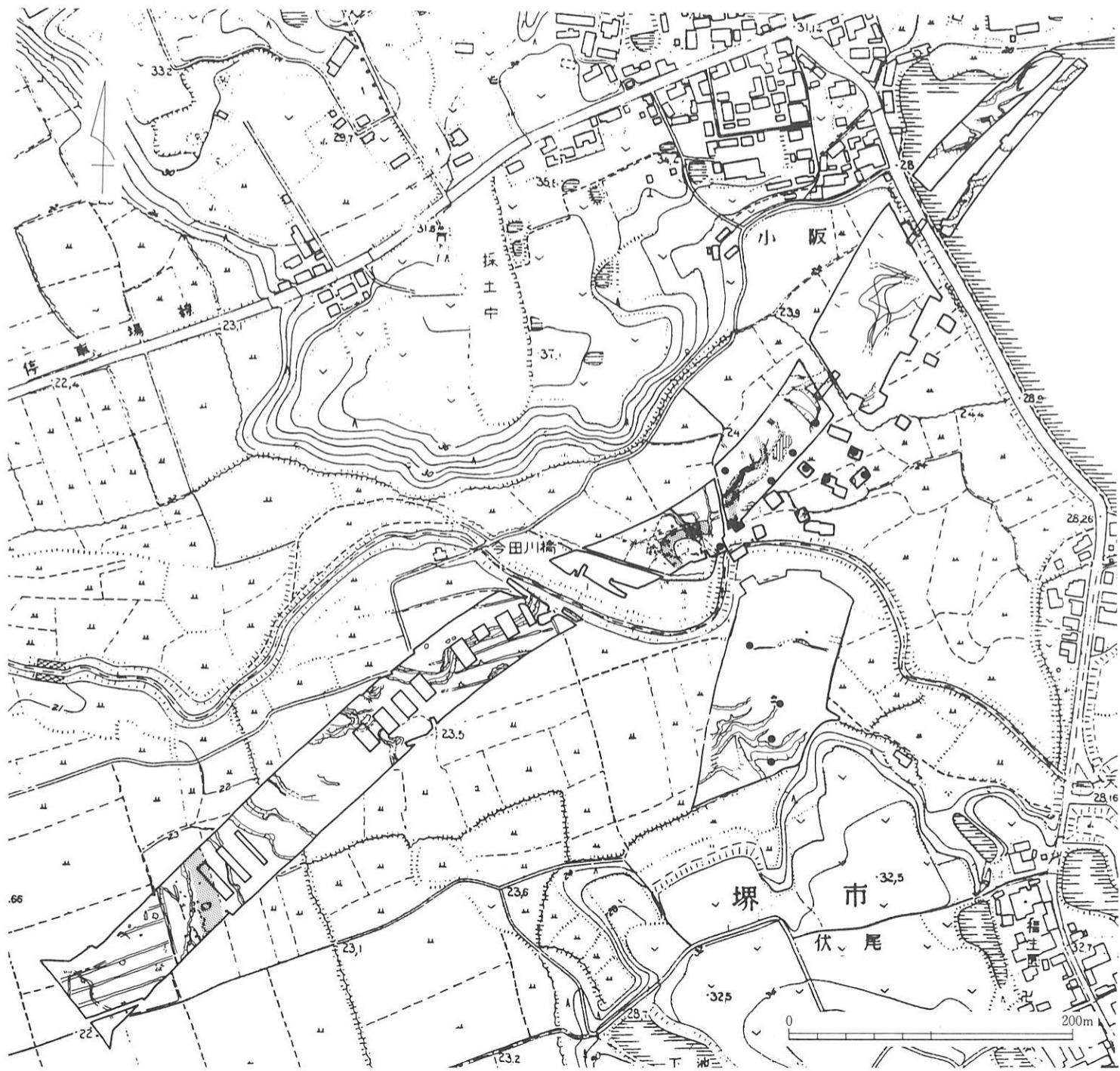


Fig. 13 周辺の地形と縄文～弥生時代の遺構

小阪遺跡における縄文時代から弥生時代の遺構は、遺構の概要で先述したとおり、河川が主であり人為的な痕跡は非常に希薄である。これは繰り返し述べられるとおり、河川の氾濫原に立地するという遺跡の性格によるところが大きい。しかしながら、自然科学的調査においては各方面からのアプローチが試みられ、その成果は第II部に明らかである。また、出土遺物は縄文早期末～晚期・弥生土器の幅広い年代にわたり、とくに縄文中期～後期初頭の遺物は河川出土ながらまとまった量が出土するなど大きな成果を納めることができた。

調査はA、B地区より始められI地区にいたるまで順次進められたが、試掘調査の成果や調査の進展に伴う新知見により、A～D地区の掘削深度に比べE～I地区の掘削深度が深くなっている。そのため大まかに述べれば、A～D地区は縄文晚期相当層まで、E～I地区の調査は縄文中期～後期相当層までの調査成果を得ることとなった。A～D地区では調査最終段階において深掘部を設けているが、E～I地区と同様に埋没河川であろう砂層を検出しておらず、調査がより深部におよべばE～I地区と同様、縄文中期～後期までの成果を得た可能性がある。

記述の順序についての留意点を記す。本書においては、各章ごとに河川を最初に記述し、続けて各遺構について詳述している。これは各年代の河川のあり方によって、氾濫原、自然堤防、後背湿地の形成される箇所が異なり、それに伴い遺構の種類や地点が制限されると考えたためである。また、時期の区分については縄文中期～後期初頭、または縄文晚期～弥生前期と時期幅をもたせて各1節ずつ設けている。前者については北白川C式最終末と中津式の区分が困難であり、後者においては縄文晚期土器と弥生前期土器が共存する場合が多いからである。石器はF地区、I地区石器集中区出土遺物の一部を除いては包含層出土遺物が多く、帰属時期が不明のため、縄文～弥生時代の時期幅で各製品ごとに記述した。

層序の項で述べたように縄文土器が出土する層位はグライ化が進み、有機物を含むやや黒みがかった層や砂層が介在する以外は分層が非常に困難である。したがって調査途上も遺物が出土した地点を中心に面的に精査するといった状態であった。こうして調査された成果が本章で遺物出土状態としたものであるが、結果的には土器片1点のものから、ある程度の広がりをもつものまで含まれることになった。そのため単体で出土したものについては土器、広がりをもつものは土器群として遺物出土状態の項で扱った。ただし、F地区後期遺物集中区については別項をもうけた。

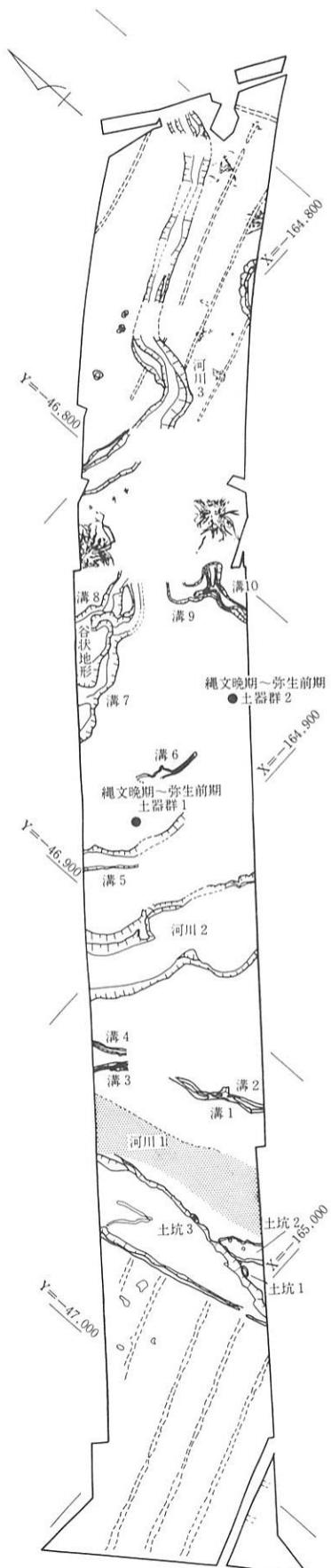


Fig.14 縄文～弥生時代遺構(1)

1. 河川

河川1～河川30がある。基本的に概報において扱われた河川は全て記載しているが、複数トレンチにわたる河川で同一河川と考えられるものは併合した。

縄文～弥生時代の河川はIII～V層中において検出される埋没河川である。規模は幅1～2mのものから20～30m、深さ0.5mのものから2mを超えるものまで様々であり、大規模な河川は古墳時代～古代河川と重複して存在する場合が多い。発掘調査においては、このような重複する河川は断面観察によって明らかになる場合が多く、平面的に河川を区別

しての調査は困難であった。今回の河川の呼称では、河川が重複しながらも平面的に追えるものについてはそれぞれ1番号を付し、調査面積の狭さなどから断面観察においては複数河川が確認されながらも、平面的な確認が困難であった河川については併せて1番号を付した。

ここで河川としたものは、埋積状態や断面形より実際に流水があったであろう河道の本流部分が主である。しかし、一部シートバーの可能性をもつものも含まれており、河川の定義については曖昧である。個々に詳述するが、ご了承願いたい。

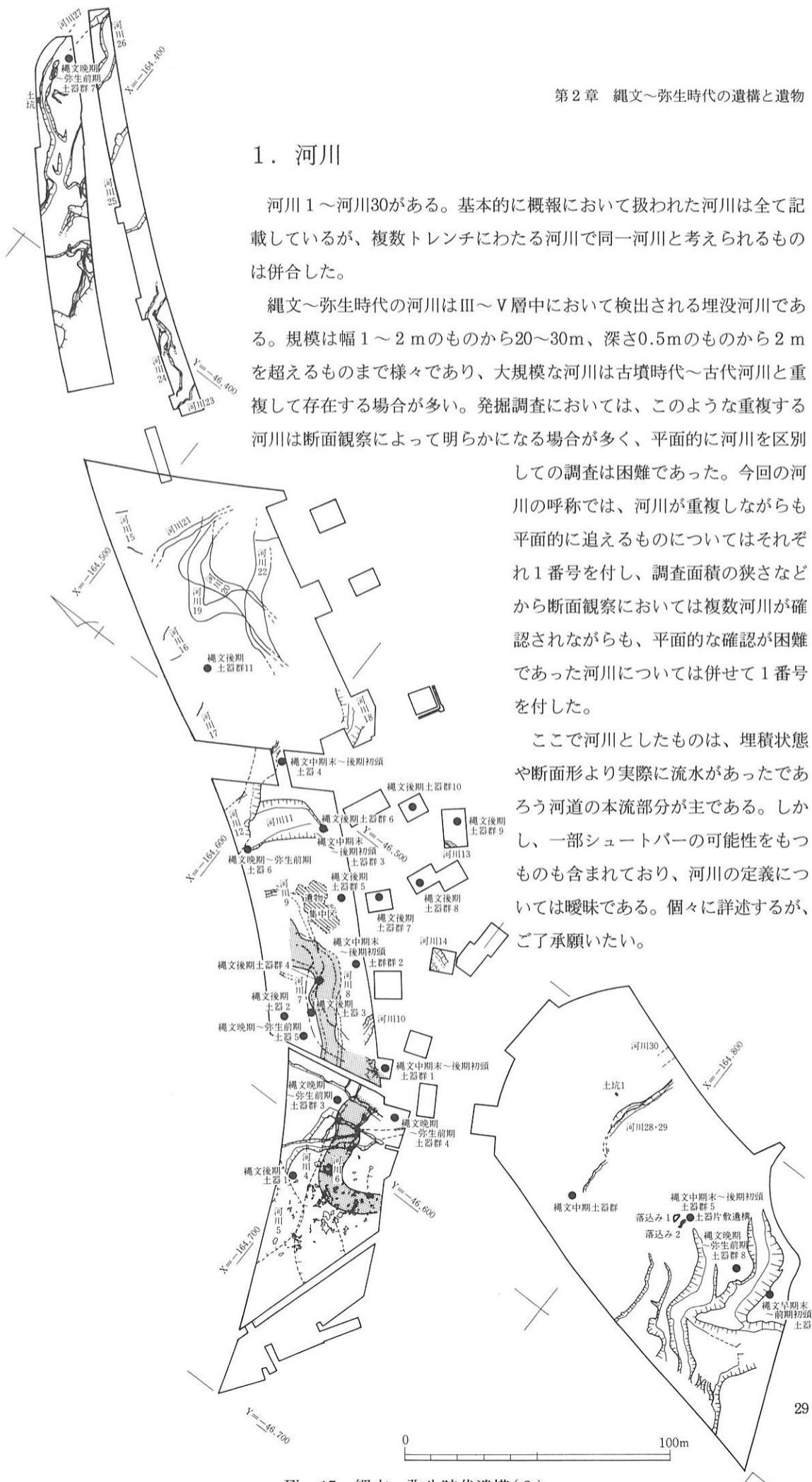


Fig.15 縄文～弥生時代遺構(2)

1. 河川

A～C地区では調査最終面におけるトレンチ調査により、調査区を横断する北西～南東方向の埋没河川と考えられる砂層が確認されているが、点的な確認調査であり、ここに記載するに留める。

河川 1 (Fig.14) B地区、C地区間に位置し、ほぼ南北方向にはしる。T.P.+20.0～20.2mで検出され、幅18m以上、深さ2m以上におよぶ。層は砂礫と粗砂の互層であり、4回以上にわたる砂礫層の堆積が認められる。また直径10～60cmの自然木が多数含まれ、介在するシルト層も認められないことから、短期間における、かなりの水量をもつ急激な流れによる堆積といえよう。縄文土器片が出土しているが、時期は特定できない。

河川 2 (Fig.14) C地区の中央部の西よりに位置し、古墳時代中期河川1の下部で砂礫層を一部確認した。古墳時代中期河川1と同様に南東→北西方向に流れるとと思われる。古墳時代中期の遺物を多量に含む砂礫層からは、縄文中期の土器(14)等が3点出土している。

河川 3 (Fig.14,16) D地区中央を東西方向に貫流し、西端で北西にふる。河川はおおきく2時期に分かれる。上部河川はT.P.+21.2mで検出され、幅8m、深さ0.4mを測る。埋土は淡茶褐色砂1層のみであり、浅い河川である。灰白色シルト層をはさんで下部河川はT.P.+20.8mで検出され、幅10m、深さ1.3mを測る。埋土は粗砂中に炭化物層や暗灰色シルト層が介在し、複数時期にわたる堆積を示すものである。下部河川からはヤナギ属の自然木と縄文晩期土器が出土した。

河川 4 (Fig.15,17) E地区中央よりやや東よりを北西～南東方向にはしる、IV層から切り込む河川である。検出面の高さT.P.+21.0m、幅4～5m、深さ1mである。埋土は粗砂が主である。遺物は縄文土器片1点のみである。

河川 5 (Fig.15,17) E地区北側において確認された河川湾曲部の外湾部分である。トレンチ調査による確認のため河川の平面は復元による部分が大きい。V層内の埋没河川であり、検出面はT.P.+19.5m前後、河川の肩は明確ではないが、幅10m以上、深さ0.6m以上を測る。埋土は上層から淡青灰色シルト、暗灰色砂で炭化物のラミナが介在する。

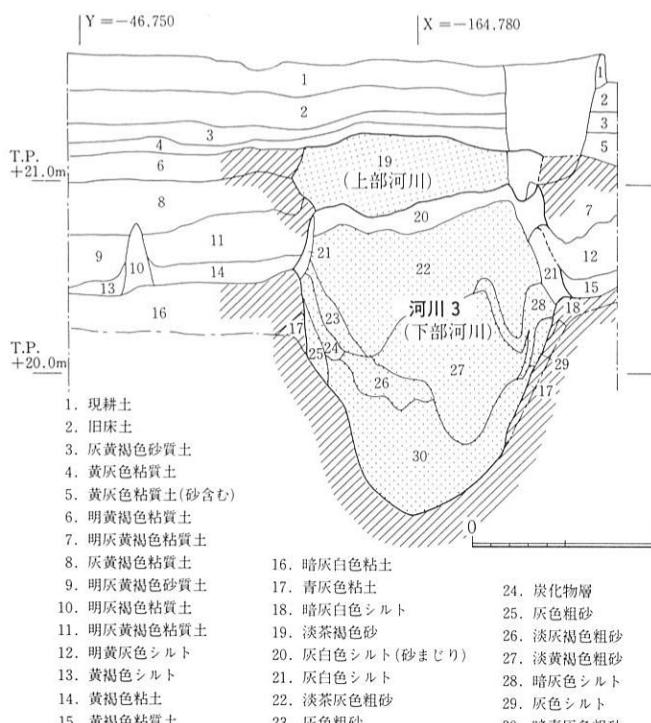


Fig.16 D地区 河川3断面 (縮 縦1/40)

河川 6 (Fig.15,17) 河川6はE地区短辺中央を東西に貫流し、長辺中央付近ではほぼ直角に曲がり、南南東へねける。V層内の埋没河川であり、検出面はT.P.+20.3mである。河川肩部は同レベルにみられるV層内の層理面の可能性が大であるが、T.P.+21.0m前後のIV層内層理面にまで上がる可能性も残る。断面より複数河川の存在がうかがわれるが、明確な区別は困難である。埋土は上層から炭化物を多く含む暗灰色～黒色シルトと砂礫層であり、植物遺体層やシルト層が多く介在する。また砂礫層には自然木、堅果類、サルノコシカケなどの大型植物遺体が多く含まれる。遺物はおもに砂礫層から、縄文中期～後期土器の大型破片が、煤が付着するなど非常に残存良好な

状態で出土した。

河川 7～9 (Fig.15, 18, 19) F 地区西半に位置し、重複する古、中、新段階の 3 河川である。古段階河川を河川 7、中段階河川を河川 8、新段階河川を河川 9 と呼称する。

河川 7 は、16F トレンチ北東端から 2 度にわたり屈曲し南西端へねける。トレンチ中央において、両岸検出部分では幅 5m であり、断面では最大幅 10m、深さ 1.4m 以上を測る。埋土は、おおきく 2 層に分けられ、上層が植物遺体を含む粗砂を主体とする層、下層が砂礫層であり、下部にいくほど礫が多い。河川 7～9 は平面的に区別しての調査をこころみたが、河川内粗砂の堆積状況は不安定であり明確な区別をしての調査は困難であった。Fig.19 は出土遺物のレベルを断面図に投影したものであり、河川への帰属は確定的なものではないが、おおかたの傾向はうかがえる。遺物は河川 7、8 から出土するものの、多くが河川 7 に帰属すると考えられる。大型の破片が多く、土器の残存状況は良好である。土器の時期幅は縄文前期～後期にわたるが、中期末～後期初頭の土器が主体である。

河川 8 は、15、16F トレンチにわたり検出され、ほぼ河川 7 と同様の方向である。平面的には南肩を 16F トレンチ北東端で 5m、西半で 15m 確認したにとどまり大部分は断面観察による復元である。幅 5～10m、深さ 0.8m を測る。埋土は上層がシルト～細砂、下層が中砂～砂礫であり、両層ともに植物遺体を多く含む。

河川 9 は、南肩のみ 40m にわたって検出された。16F トレンチが主であるが、15F トレンチ北西隅へと続き、後期遺物集中区と同時存在の可能性がある。幅 10m 前後、深さ 0.4m を測る。埋土は植物遺体を多く含む細砂主体の層であり、比較的流れのゆったりした浅い河川であったと考えられる。遺物は認められない。河川 9 の南肩には粘土～シルトが堆積しており、河川 9 により形成された自然堤防と考えられる。

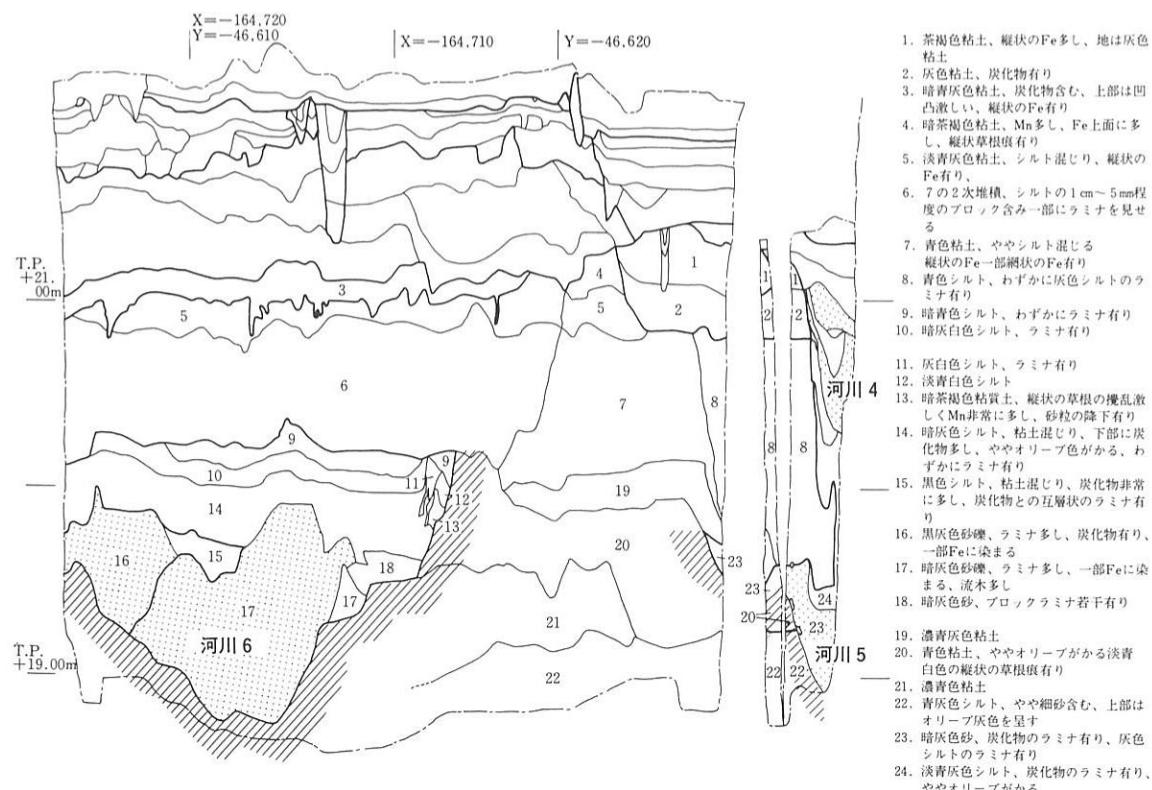


Fig.17 E 地区 河川 4, 5, 6 断面 (縮 縦1/40・横1/400)

1. 河 川



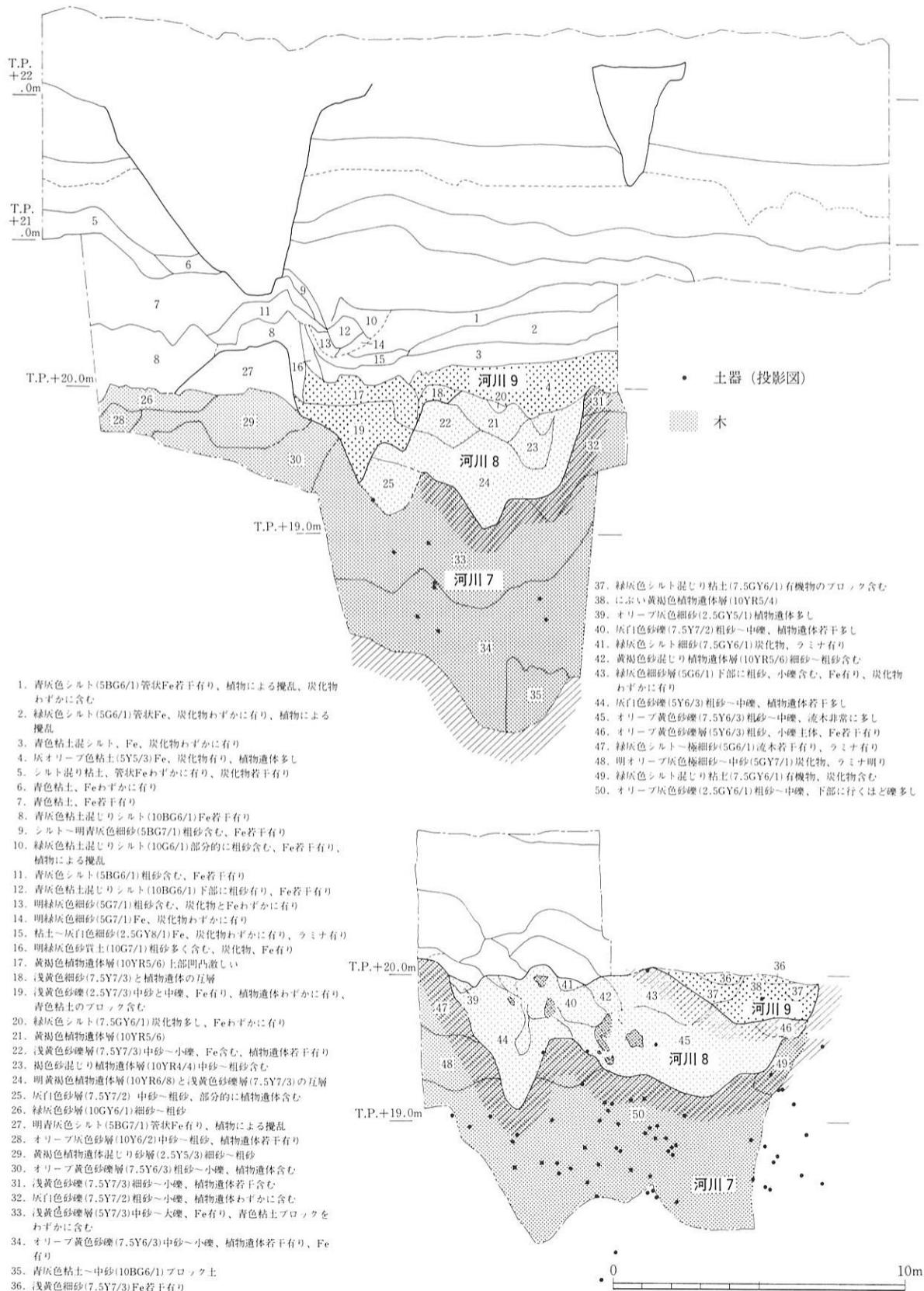


Fig.19 F地区 河川7.8.9断面（縮 縦1/40）

1. 河川

河川10(Fig.15) 2Fトレンチ南西部に位置し東西方向にはしる。16Fトレンチでは延長部において掘削深度がおよばなかったため、2Fトレンチ内のみでの検出である。V層内T.P.+20.0mで検出され、幅5~6m、深さ0.3~0.5mを測る。埋土は粗砂~微砂の互層で、植物遺体を含む。河川両肩部から4~5mにわたり微砂~シルトの溢流堆積が認められる。出土遺物は縄文土器片が2片検出されたが、時期は不明である。

河川11(Fig.15,20) F地区東部に位置し、北西~南東方向にはしる。V層内T.P.+21.2mで検出され、幅15m、深さ1mを測る。埋土は上層から粗砂~礫、砂質シルト、植物遺体層、粗砂~礫の大きく4層に分けられ、数次にわたる堆積がうかがえる。本河川は河川12南肩から南方向にいくにつれて深さを減じ、礫層が認められないことから、河川12のシートバーとなる可能性をもつ。河川南端部の2Fトレンチでは河底に植物遺体が10cm程度埋積し、これを除去すると河底面に偶蹄目の足跡が多数検出された。出土遺物は土器底部、石錐があり、縄文中期に位置づけられる。

河川12(Fig.15,20) 15GトレンチからF地区北東端部において確認され、ほぼ東西方向にはしる。G地区中央へと抜け、河川19、20いずれかと同一河川となる可能性をもつが、G地区西部においては河川が錯綜するため確定できない。古墳時代河川8に切られ、また河川11と重複するため、埋土は上層より植物遺体層の一部および礫層のみの残存である。復元的にみると幅10~15m、深さ1m以上になるものと思われる。遺物は縄文中期末~後期初頭の土器が出土した。

河川13(Fig.15) 3Fトレンチ西端に位置し、ほぼ南北方向にはしる。V層内T.P.+22.2mで検出され、幅1.2~1.7m、深さ0.9mを測る。断面形は上部が大きく広がるゆるやかな形状、下部が垂直に近い逆台形であり、二段掘りの形を呈する。埋土は上部が植物遺体層が介在する粗砂~粘土層、下部が砂礫層であり、急激な流れによる下部の埋積後、窪地にゆるやかな流れがあったものと思われる。遺物は出土していない。

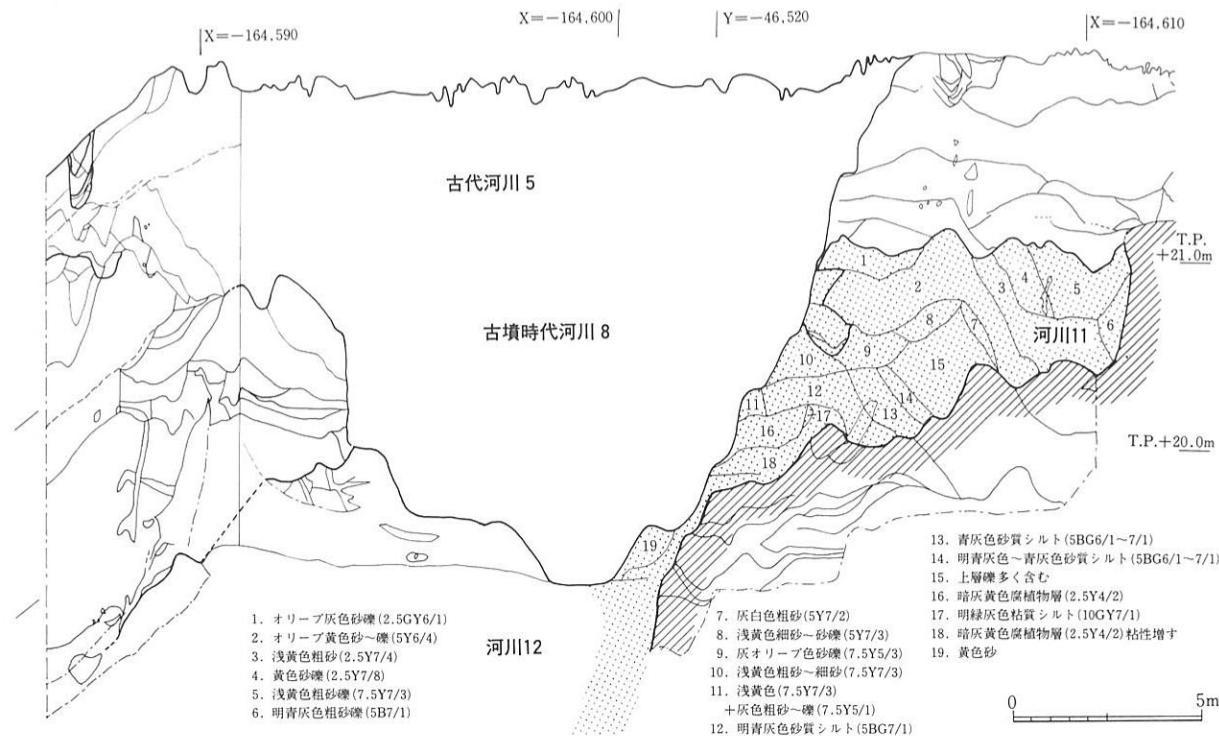


Fig.20 F地区 河川11.12断面 (縮 縦1/40・横1/200)

河川14(Fig.15) 4 F トレンチにおいて検出された南北方向の河川である。V層内T.P.+19.8mで砂礫層がひろがり、幅6.5～7m、深さ0.5mを測る。砂礫層を除去すると層厚10cmの植物遺体層がひろがる。深掘りにより下層河川の存在が確認されている。

河川15(Fig.15) 1 G トレンチ北端に位置する。南東方向に伸びるものと考えられるが、12G トレンチでは複数河川が重複して存在するため特定できず、1 G トレンチ内において長さ5mにわたって確認したに留まる。古代河川6の下部河川であり、V層内T.P.+20.0mにおける北東肩のみの検出であるが、復元幅20m以上、深さ1m以上を測る。埋土は上層より植物遺体層、砂礫層までの確認であり、完掘はしていない。遺物は出土していない。

河川16(Fig.15) 1 G トレンチ中央やや南よりに位置する。河川15同様古代河川6の下部河川であり、南西肩のみT.P.+21.0mで検出された。幅4m以上、深さ1m以上で、完掘していない。埋土は植物遺体層、砂礫層からなり、遺物は出土していない。

河川17(Fig.15) 1 G トレンチ南西端において検出された。検出面はV層内T.P.+20.8mであり、北肩のみを北北東～南南西方向に7m確認した。幅10m以上、深さ1.2m以上である。埋土は上層から粗砂、シルト～粗砂、砂礫層の単純な堆積であり、植物遺体層や粘土層は介在しないことから短期間による堆積と考えられる。遺物は出土していない。

河川18(Fig.15) 2 G トレンチ南西部において検出され、古墳時代溝30の下部にあたる。幅8～10m、深さ1.2m以上を測り、北東～南西方向にはしる。埋土は自然木を含む粗砂～礫の互層である。遺物は、河川上面シルト層より、弥生土器が1点出土している。

河川19(Fig.15, 21) G地区中央部に東から流れ込み南西方向に流れたのち、11G中央付近で屈曲し南東方向へとはしる。G地区南半では古墳時代河川8などに切り込まれ平面形は不明である。V層上面T.P.+21.0m前後で検出され、幅6m、深さ0.9m以上である。埋土は自然木を含む粗砂主体に、礫との互層である。

河川20(Fig.15, 21) 河川19の下部河川である。V層内T.P.+20.1mで検出され、幅9m、深さ0.9m以上である。埋土は河川19同様自然木を含む粗砂、礫の互層であり、30～40cmのシルトブロックが河川のベースに沿って認められる。完掘はしていない。遺物は残存状態が良好な縄文中期～後期土器片が出土した。

河川21(Fig.15, 21) G地区北部において西北西～東南東方向に検出された河川である。V層上面T.P.+20.7m付近で認められるものの、大半を古代河川6に切り込まれるため不明部分が多い。平面形は12G トレンチにおいては確認できたが、7および11G トレンチにおいては断面観察による確認にとどまり、復元によるところが大きい。幅2～3m以上、深さ1m以上になるものと思われる。埋土はシルト～粘土の互層であり、微砂～粗砂層が介在する。また、河川下半部には植物遺体が多く含まれる傾向がある。遺物は、上層出土のものは上部河川に帰属する可能性があり識別困難であるが、河底部において弥生土器片が1片出土している。

河川22(Fig.15) 2 G トレンチ北端から9 G トレンチを通りG地区中央を貫流する。G地区南半における展開は河川19、20同様不明である。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、他河川との前後関係からほぼ弥生時代河川と推定される。

河川23(Fig.15) 1 H トレンチ南西端に位置する。ほぼ東西方向に北肩が検出された。T.P.+21.7mが河川上面であり、幅7m以上を測る。埋土は上層より黄灰色粗砂、青灰色粗砂層で、自然木を含む。

1. 河川

完掘されていないが、下層から縄文晩期土器が1点出土している。

河川24(Fig.15) 1Hトレンチ南西部において検出された。北東—南西方向に、2回わずかに屈曲しながらはしる河川である。幅6~10mを測る。縄文後期土器1片が出土している。

河川25(Fig.15) 1Hトレンチ中央部から2Hトレンチ南西部にかけてはしる河川である。幅22m、深さ2m以上を測る。V層オリーブ灰色シルトを除去後T.P.+23.6mで中粒砂がひろがり、下層にいくにつれ礫を含むようになる。この層を除去した段階、T.P.+22.8mで本河川埋没後の窪地に埋積したと考えられる植物遺体を含む細砂の互層がみられ、下層には流水による細砂～砂礫層が堆積する。河底面はT.P.+20.7mである。遺物は最下層灰白色砂礫より縄文中期土器、上層セクション内より縄文晩期土器、河川肩部より石庖丁が出土しており、層序からも長期間にわたり機能した河川と考えられる。

河川26(Fig.15) 1Hトレンチ北東部において検出された北東—南西方向の河川である。幅4~6m、

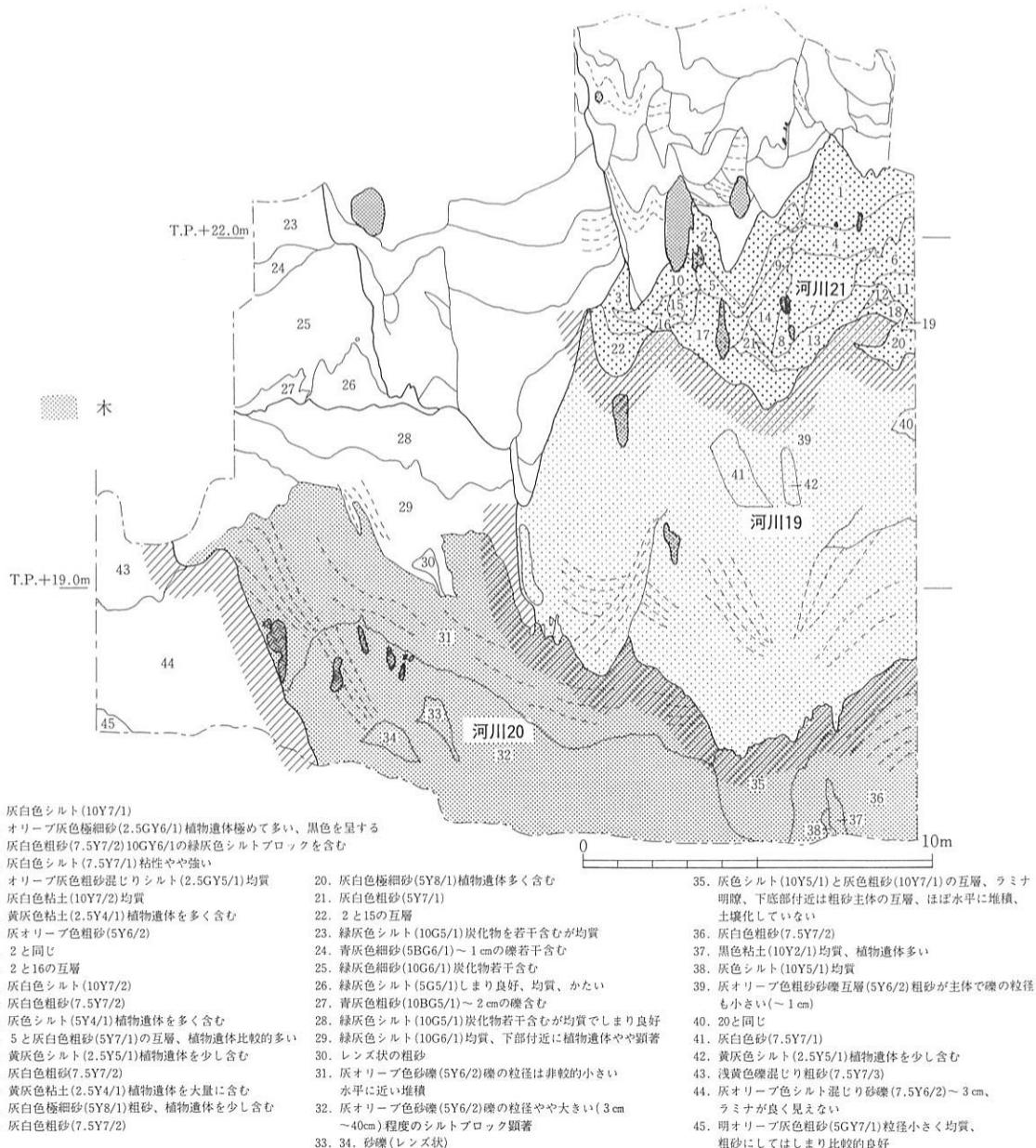


Fig.21 G地区 河川19.20.21断面 (縮 縦1/40・横1/200)

深さ1.2m前後である。T.P.+22.5mにおいて粘土層が層厚0.2mでひろがり、これを除去した後、密な植物遺体層が0.2～0.3m堆積する。この2層は河川26、27両河川埋積後の止水堆積と考えられる。本河川は河川27埋積後その南側の小規模な後背湿地に流れるもので、河川27と厳密な意味における前後関係は確認できるが、両河川は一連のものと考えられる。埋土はシルト～粗砂の互層である。ベースとした層は直径2～3cmの礫や自然木を含む砂礫層であり、下部河川の存在がうかがえる。

河川27(Fig.15,22,46,47) 1Hトレーニング北東端から2Hトレーニング北部にかけて位置する。東から流入し、ゆるやかに蛇行しながら南西方向へと傾斜する河川である。H地区南側は和泉山地から北西へと伸びる中位段丘にあたり、本河川はその南裾部に沿って流れている。したがって河川は南東への溢流堆積が認められ、北西肩部に比べ南東肩部の検出は困難である。河川は、T.P.+23.5mの灰白色シルト面で検出され、幅3～5m、深さは粗砂部分の最深部で1.4mを測る。本河川においては、2Hトレーニング北東端部においてしがらみが、それよりやや南西方向へくだったところにおいて杭列が検出された。また灰白色シルト面上に堆積する土壤化層は水田となる可能性が指摘されている。本河川の埋土は微視的にみると、植物遺体層がラミナ状にはいる浅黄色粗砂1層であり、杭列はこの粗砂層を除去した段階での検出である。河川のベースとなっている灰白色シルト層の下層は植物遺体層や細砂層の互層が硬い緑灰色粘土質シルトの窪地に埋積したものであり、杭列検出面においても河川に切り込まれた植物遺体層が広がる状況であった。河川出土の遺物はみとめられず年代は明らかではないが、河川南肩部付近において、検出面より10cm下で弥生前期土器が出土し、また河川上層には灰原がひろがることから、弥生時代前期以降古墳時代中期以前に機能していた河川と考えられる。

河川28～30(Fig.15,23) I地区の中央やや北寄りにおいて、ほぼ東西方向にはして河川が3条重複して検出された。上より、河川28、河川29、河川30とする。

河川28(Fig.23) 7I、13I、14Iトレーニングにおいて、ほぼ東西方向にはして北岸を32～33mにわたり検出した。南岸は上層から切り込まれる古代河川8によって失われている。全幅長は北肩に直交する断面において8mにわたり、底面にむかって下降する肩部を確認しており、16m以上になる可能性がある。河川はI地区層序断面模式図(Fig.24)における第9層(縄文時代後期遺物包含層)上面から切り込んでおり、T.P.+20.5m付近より認められる。

河川の埋土は上層において植物遺体混じりシルトや細砂の比較的薄い層がみられる以外は、大部分が粗砂～砂礫層からなる。粗砂～砂礫層は上層に比べ堆積の一単位が厚く、ラミナや植物遺体層が介在する層もある。河川下部には直径30cm以下の自然木が多くみられ、砂礫層が優勢することから、豊富な流量が想定される。河川からは縄文後期を主体とする縄文早期末～後期中葉の土器が20点程まとめて出土し、残存状態



Fig. 22 H地区 河川27断面 (縮 縦1/40)

1. 河川

が良好であった。サヌカイト剝片、翼状剝片石核、凹石が集中することなく各層位から出土している。

本河川は縄文後期中葉北白川上層式3期までは機能していたものと考えられる。

河川29(Fig.23) 14 I トレーニングにおいて北岸のみを17mにわたり検出した。河川28北岸よりやや北よりに位置し、北肩ラインは北側に湾曲する。南岸は河川28に切り込まれて不明である。湾曲するコーナー最奥部にもうけた断面では、北岸から底面にかけてのラインが検出され、幅6m、深さ1.6mの河川が復元できる。検出面はT.P.+21.0m、I地区層序断面模式図(Fig.24)における第10層上面であり、縄文時代中期末に位置づけられる。同面では土坑、落込み、土器片敷遺構が検出されている。河川の埋土は大きく3層に分けられ、上層よりシルト～粘土、植物遺体混じり粗砂、礫混じり粗砂が堆積する。自然木は認められない。遺物は北肩斜面堆積の灰色粘質土に主に包含され、縄文中期末の北白川C式土器が出土している。

河川30(Fig.23) I地区層序断面模式図(Fig.24)における第12層上面、T.P.+20.0m前後において検出された、無遺物の河川である。面的な調査にはおよばなかったため、河川の方向は不明である。断面

1. シルト(5GY7/1)	22. 磕混じり粗砂(7.5YR4/4)	43. 磕(5Y6/3)	64. シルト(5G5/1)
2. 砂礫(5Y6/4)	23. 砂礫混じりシルト(2.5Y6/6) 植物遺体	44. 植物遺体混じりシルト(5GY5/1)	65. 粗砂混じり粘土(10G6/1)
3. シルト(10GY6/1)	24. 植物遺体混じりシルト(10YR4/1)	45. 植物遺体混じりシルト(2.5Y4/2)	66. 粗砂混じり粘土(10G5/1)
4. 植物遺体混じりシルト(5BG6/1)	25. 粗砂(2.5Y5/4)	46. 細砂(5GY5/1)	67. 粗砂(10G5/1)
5. シルト(5Y6/1) クレイボールの一部	26. 粗砂(5Y7/4)	47. 火山ガラス(2.5Y5/1) アカホヤ	68. 砂混じりシルト(10G6/1)
6. シルト(7.5Y6/1)	27. 磕混じり粗砂(10YR4/6)	48. 土よく縮まる(5G5/1) ビビアンナイト	69. 粗砂混じりシルト(5BG6/1)
7. 砂礫(2.5Y4/6)	28. 粗砂(7.5YR5/8) ラミナ	49. 砂(5G6/1)	70. 粘土(7.5GY6/1)
8. 砂礫(5Y5/1)	29. 砂礫(2.5Y6/3)	50. 粘土(5G2/1) ビビアンナイト有り	71. 火山ガラス(2.5Y5/1) アカホヤ
9. 植物遺体混じりシルト(2.5Y3/1)	30. 磕混じり粗砂(2.5Y6/1)	51. 粗砂(7.5Y6/2)	72. 粗砂混じり粘土(5G5/1) カルシウム結核有り
10. 磕混じり粗砂(2.5Y6/4)	31. 植物遺体混じりシルト(10YR4/1)	52. 火山ガラス(7.5YR5/3) アカホヤ	73. 粗砂(7.5GY5/1)
11. シルト(5GY5/1) 植物遺体混じり	32. 粗砂(10YR5/6)	53. 土(5GY5/1) 上部鉄付沈着	74. 粗砂混じり粘土(2.5GY4/1)
12. 植物遺体混じり粗砂(5GY5/1)	33. 磕混じり粗砂(10YR6/8)	54. 粗砂混じり土(7.5Y5/1)	75. 粗砂(5GY5/1)
13. 砂礫(2.5Y6/4)	34. 砂礫(5Y7/3)	55. 細砂(5GY5/1)	76. シルト(2.5GY5/1)
14. 砂礫(10YR6/4)	35. 砂礫(5Y6/3) マトリックス有り	56. シルト(7.5Y5/1)	77. 磕混じりシルト(7.5Y5/1)
15. 磕混じり粗砂(2.5Y6/6)	36. 磕混じり粗砂(7.5YR4/6)	57. 砂混じり細砂(7.5GY5/1)	78. 粗砂混じり粘土(2.5GY4/1)
16. 砂礫(2.5Y6/3)	37. 粗砂(10G5/1)	58. 植物遺体混じり細砂(5Y4/2)	79. 磕混じり砂(10G4/1)
17. 砂・ラミナ(2.5Y6/4)	38. 砂礫(7.5YR5/8)	59. 粗砂混じり砂礫(7.5Y5/1)	80. シルト(5Y2/1)
18. 砂礫(2.5Y6/4)	39. 磕混じり粗砂(2.5Y6/3)	60. 磕混じり砂(5Y7/4)	81. 磕混じりシルト(5BG5/1)
19. 植物遺体(10YR7/1)	40. 粗砂(2.5Y5/2)	61. シルト(2.5GY6/1)	82. ビビアンナイト(5Y3/1)
20. シルト(5Y4/1) 植物遺体	41. 粗砂(10YR5/6)	62. 土(2.5Y4/2) 植物遺体混じり	83. 磕混じり粘土(2.5Y3/1)
21. 砂(7.5Y3/4)	42. 磕混じり粗砂(2.5Y5/2)	63. 粗砂混じり土(10G6/1)	84. 砂礫(5Y2/2)

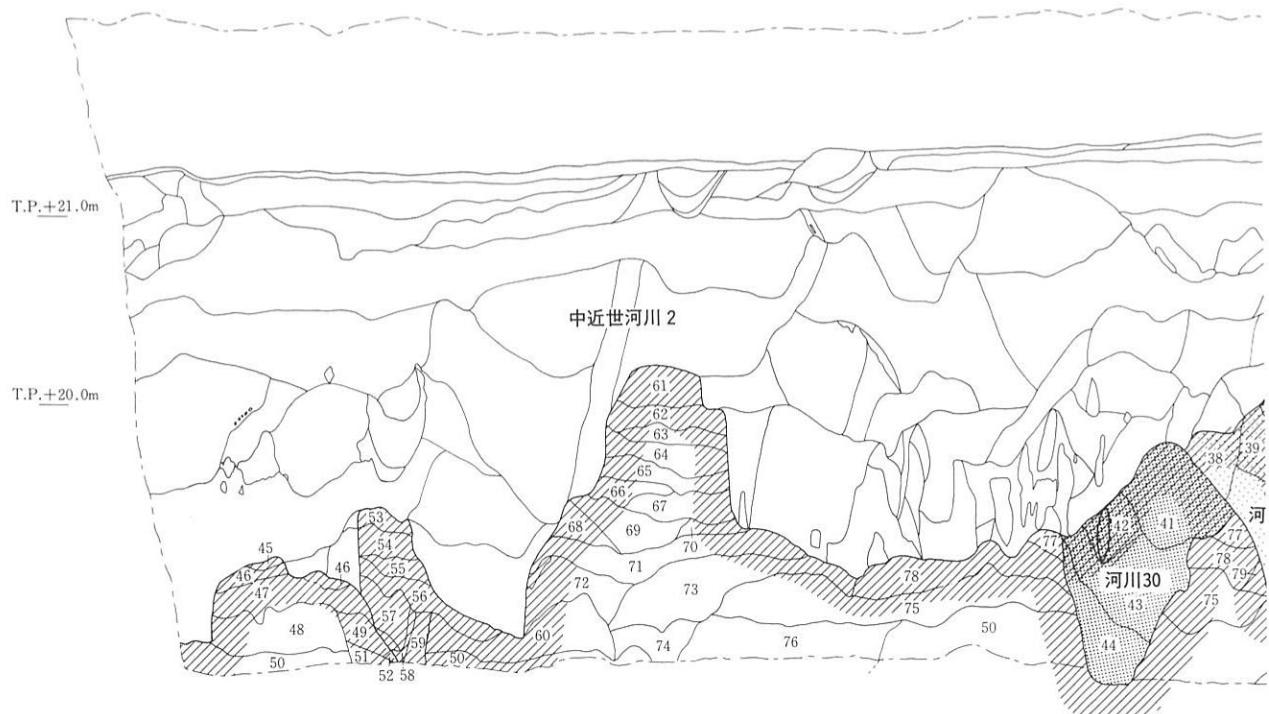
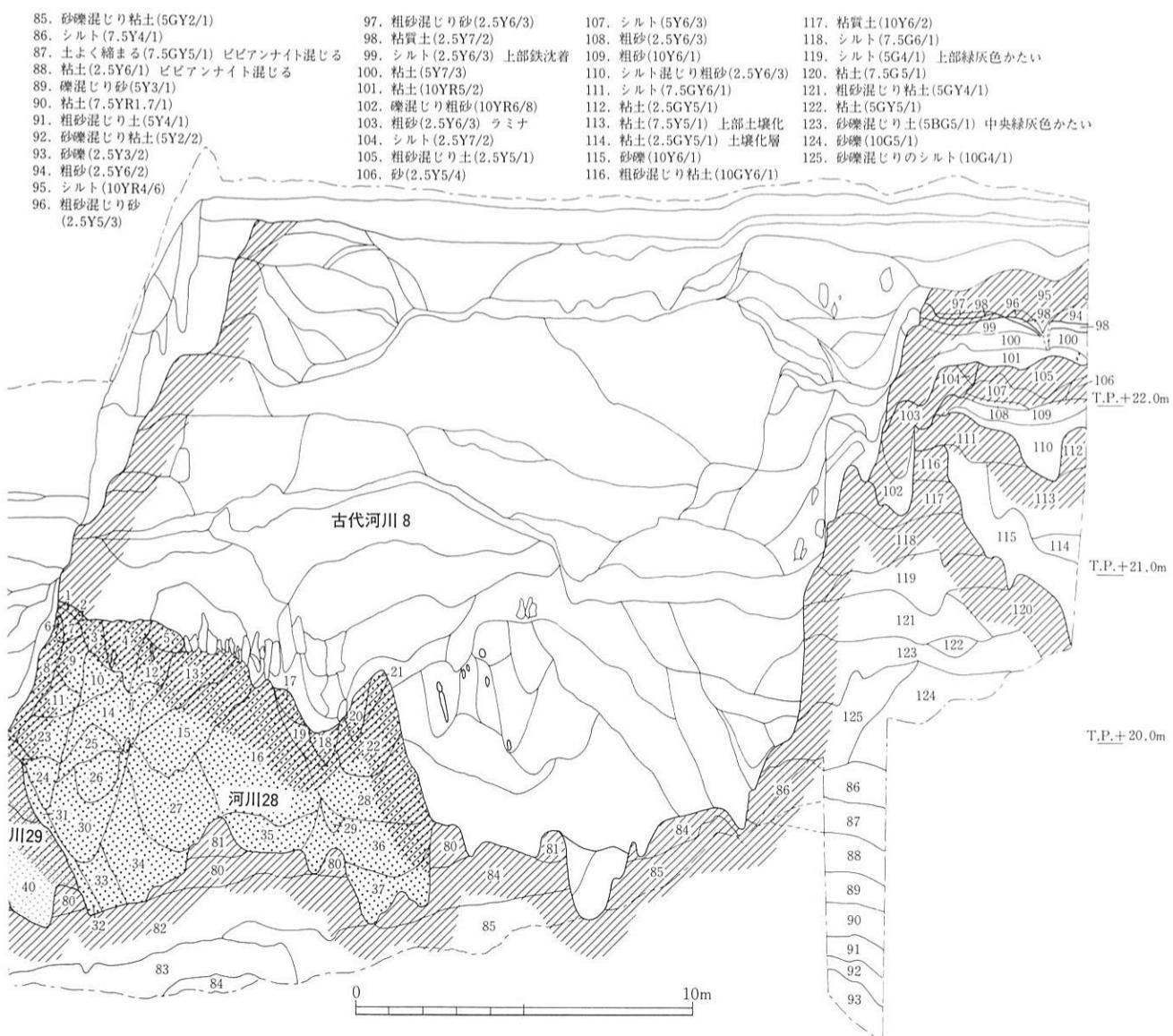


Fig.23 I地区 河川

では幅5.5m、深さ1.1mにわたり観察され、河川肩部のラインは下降線を示すため、河川の規模は全幅11m以上、深さは1.1mよりも更に深くなるものと考えられる。河川30は上層の河川28、河川29によって大きく切り込まれ、河川北半の一部が検出されたにすぎない。断面において観察された土層は限られたものである。上層より植物遺体混じりシルト、粗砂～礫であり、粗砂～礫層中には直径30cmの自然木を含むことから、流量の大きな時期が一時期あり、その後河川が半ば埋積したのち静水堆積したものと想定される。当初検出面より縄文中期の河川と考えたが、埋土上層に含まれる自然木の¹⁴C年代測定値がB.P.3510±40であることから、河川の年代については切り込み面の再検討をふくめ再考の余地がある。河川の検出が狭い範囲に限られたものであり、河川の切り込む肩ライン全体を検出できなかつたためいまひとつ不明瞭であったこと、縄文中期土器が出土する確実な中期面を検出した地点とは30～40m離れた地点であるため層位の連続性を確定するには至っていないこと、などを考えあわせると河川の時期は後期に下がる可能性も考えられる。



28.29.30断面（縮 縦1/40・横1/200）

1. 河川

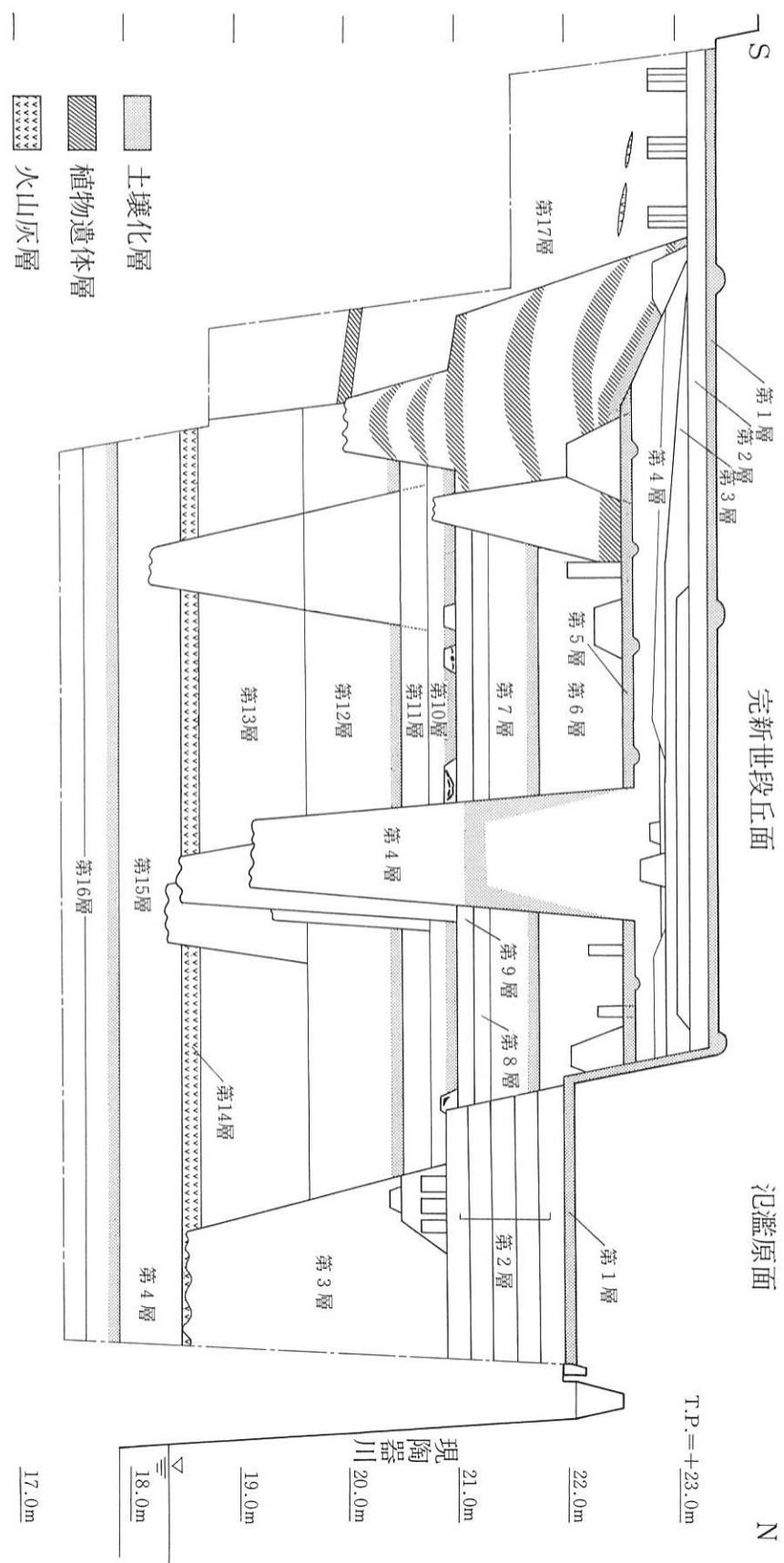


Fig. 24 I 地区 层序断面模式図

2. 早期末～前期初頭の遺物出土状態

縄文早期末～中期の遺物は、I地区において認められ、概報（南その2）の層名に従って記述する。なお、第7層以下が本報告でのV層に相当する。

遺物は、I地区南部における中位段丘崖下の灰白色砂礫層(Fig.24 17層)上面に認められる。灰白色砂礫層は、調査区南側の伏尾地区の中位段丘より供給された崖錐性堆積と考えられ、段丘沿いより北側に向って斜めに堆積している。土器はその上面において同一個体の破片が集積する形で検出され、サヌカイト剝片もともに出土した。土器は、内外面条痕調整の砲弾形を呈する粗製深鉢(1)になるものと考えられ、口唇部に刻み目をもつ口縁部片を1点含む。北白川下層式と考えられる。

この遺物をめぐる堆積状況を、自然科学的調査の成果をふまえながら、I地区層序断面模式図(Fig.24)によってみるとこととする。

まず崖錐性堆積中にはT.P.+20.0mにおいて植物遺体層が介在し、その¹⁴C年代測定値はB.P.7310±70(KSU-1821)である。またその上位T.P.+22.5mでは火山灰層が認められ、分析の結果22000年前に降下したといわれる始良火山灰と認定された。以上2点を考慮するならば、上位の火山灰は中位段丘上に堆積した火山灰の二次堆積である可能性が大きい。

一方、谷部に目を転ずると、崖錐性堆積の上層にはその縁片部から北側にかけて谷を埋積する層が堆積する。掘削深度はT.P.+17.4mにおよんだが谷底平野の基盤層となる砂礫層にはおよばなかった。谷を埋積する層を下層から順に述べる。

16層 下位は河川堆積による灰色細砂であり、上位には止水堆積による黒褐色土が堆積する。

15層 緑灰色土であり、上面が火山灰降下面となる。本層中の乾痕には、火山灰が入いる。

14層 アズキ色を呈し、ガラス質を含む火山灰層である。分析の結果、バブル・ウォール型ガラスが認められ、6300年前に降下したアカホヤ火山灰に比定される。

13層 青灰色土。明確な層界は見出せないが、酸化するにつれてわずかに黒色化する部分があり、一時期の生活面を含む可能性がある。

縄文中期以前に相当する層は以上である。¹⁴C年代測定試料として、16層上位の黒褐色土(土壌化層)、13層下位の自然木を採取し年代測定を依頼したところ、前者は試料不十分のため測定不可能、後者はB.P.5790±30(KSU-2096)という値を得た。

以上より、遺物の出土状況をみると崖錐性堆積上面での検出ではあるが、崖錐性堆積内植物遺体層および二次堆積と考えられる始良火山灰よりは上位であり、現存する灰白色砂礫堆積時に伴うものとは考えられない。また、古代河川8が崖錐性堆積沿いに流れることから、この河川による二次堆積物である可能性も考えられる。同河川からは広義の石山式に比定される遺物も残存良好な状態で出土している。

3. 中期の遺物出土状態

1) 包含層と面の認識

I地区において、中期の遺物が面にともない出土している。前項同様 I地区層序断面模式図(Fig.24)をもとに当該層を説明する。

12層 青灰色土。上位は緑色が濃く、硬く縮まる粘土である。下位にいくにつれシルト質に変化する。上面はやや黒色を呈し土壌化しており、立木の根が確認されたため一時期の生活面であったと考

3. 中期の遺物出土状態

えられる。立木の¹⁴C年代測定値はB.P.4660±20(KSU-2095)である。縄文中期船元式土器が出土しており、この面を縄文中期船元面と呼称することとする。

11層 青灰色シルト。層厚30cmを測り、上層との層界は不明瞭である。里木II式土器が出土している。検出したレベルにおいて土壤化した明確な面はみられないが、縄文中期船元面後の堆積は確実であり、縄文中期里木面と呼称する。河川30は縄文中期船元面もしくは里木面より切り込むものと考えられるが切り込み面がより上層となる可能性も捨てきれない。11層は、河川による堆積物であり層の堆積は一定ではない。直下に堆積する、12層に包含される船元式土器が、混在して出土する部分が認められた。

2) 遺物出土状態

縄文中期船元面(Fig. 25) 13 I トレンチにおいて確認された。T.P.+20.5m付近で検出される、土壤化が認められる面であり、面は凹凸を呈する。遺物はトレンチ東南部において確認し、東西10m、南北7mの範囲で出土した。遺物の出土はトレンチ東南隅部に集中する傾向があるが、全体としては散在的である。土器には船元II式土器が、石器には敲石、石匙、石鏃、楔形石器、両面加工石器が出土している。石匙は5点出土しているが、内4点が縦形である。岡山県里木貝塚出土の石匙は、中期(古)では横形の三角形に近いものが多く、中期(中)では縦形の増加、中期(新)では縦型になる変化が指摘されている(間壁1971)。本遺跡での出土点数は少ないものの、形態の比較資料として興味深いものと考えられる。

そのほか、5 I トレンチの自然堤防内青灰色シルト中から、船元I式に比定される土器が2点出土している。面の確認には至らなかったが、ややさかのぼる年代幅を考慮にいれる必要がある。

縄文中期里木面 13 I トレンチにおいて確認された。V層内T.P.+20.7m付近での検出である。里木式土器の同一個体の口縁部と底部が出土した。還元状態にある青灰色シルト層内の出土であり、土器自体も出土当初は青みがかった還元状態にあった。

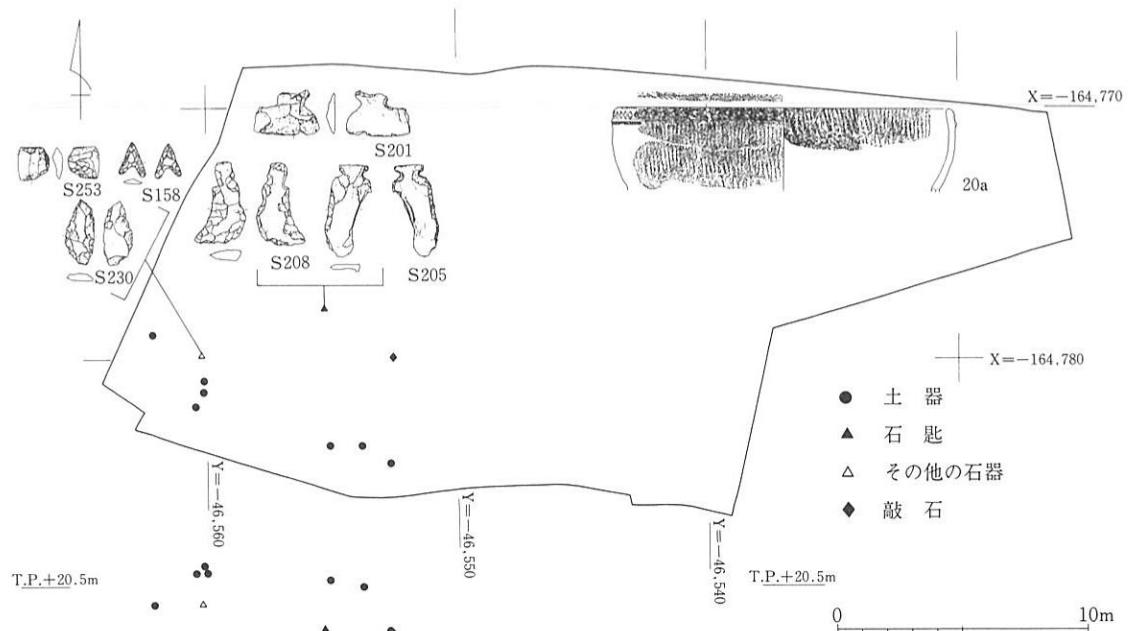


Fig. 25 I 地区 中期遺物出土状態

4. 中期末～後期初頭の遺構と遺物出土状態

1) 包含層と面の認識

当該期の面は、F地区、I地区において認められた。F地区ではV層中で検出される土器群のみであり、明確な遺構はなかった。一方I地区では土器群とともに土器片敷遺構1、土坑1、落込み2が検出された。F地区土器群による面の確認はそれぞれ小範囲にとどまり、その前後関係を追えるものではないため個別に報告することとし、ここではI地区での中期より連続する層序を模式図(Fig.24)により述べることとする。なお、層名は前述の概報による。

10層 青灰色土～シルト。上位から下位につれて次第に粘土からシルト質へと変化する。上面はやや土壌化しており、立木が認められる。縄文中期末～後期初頭の面である。この面より切り込む河川29の北肩では縄文中期末～後期初頭土器が出土しており、その近くで検出された立木の¹⁴C年代測定値はB.P.4470±30(KSU-2092)であった。

9層 青灰色シルト。上面は縄文後期河川28の切り込み面に相当するが、この河川もまた下層に重複する河川があり、その下部河川の肩に相当する層準より中津式土器が出土している。

2) 土器片敷遺構(Fig.26,27)

11 I トレンチ西辺中央に位置する。調査区の北西隅にあたり全容は明らかではない。検出面はT.P.+20.5m前後の縄文中期末～後期初頭面である。遺構は浅い落込みとその下位の土器片敷遺構本体からなるものである。

深い落込みは、長辺7.2m、短辺3.5mの範囲をもって不整円形に検出された。上層には厚さ0.2～0.25mの焼土を含む緑灰色シルト、下層には厚さ0.1～0.2mの焼土・炭混じり緑～青黒色シルトが2次にわたり堆積している。これらを除去した段階でベースの青灰色シルト面に至り、炭混じり粗砂が直径1.2mのほぼ円形に広がる。この粗砂を取り除くと土器片敷遺構が確認された。遺構ベースの青灰色シルト面には直径20～25cmのピットや深い窪みが9ヶ所認められるが、明らかに柱穴になるようなものではなく、位置もアトランダムな配置である。また落込みの肩部は不明瞭であり、調査範囲が限られ不明確ではあるが、ゆるやかな傾斜面における堆積とも考えられる。

土器片敷遺構は、直径0.7m、深さ0.1mを測る。下層には4～5cmの炭層、その上層にはレンズ状に10cm黄色粗砂が堆積する。土器は下層の炭層と粗砂層の上面で認められた。下層から検出された土器は深鉢2片(84.103)であり、10×20cm程度の大型破片が潰れた状態で出土している。粗砂層上面においては、土器片が表裏はあるものの水平かつほぼ円形に、人為的に敷き並べた状態で検出された。土器は、底部を欠くもののほぼ上半部が復元できる深鉢2個体(75.104)分の破片である。2個体分の深鉢片は、同一個体片がそれぞれ集積するものではなく混在しており、また口縁部片、胴部片も混在することから、とくに部位を意識して敷き並べたものではなさそうである。破片上面は一部黒変している。深鉢(75)の破片は、遺構南東隅の深い窪みからも1片出土している。

以上より遺構の形成過程を復元すると、1. 浅い落込みあるいは傾斜面に、皿状の深い窪みを設ける。2. 炭・灰を浅く敷き、深鉢大型破片を敷く。深鉢(84.103)は破碎後敷かれたと考えられる。3. 粗砂を盛り上げる。4. 破碎済の深鉢片(75.104)を上面に敷き並べる。5. 上面で火を用いる。6. 浅い落込みあるいは傾斜面が埋積する、となる。遺構の性格としては、住居跡およびそれに付随する炉である可能性が考えられるが、確定するには至らなかった。

4. 中期末～後期初頭の遺構と遺物出土状態

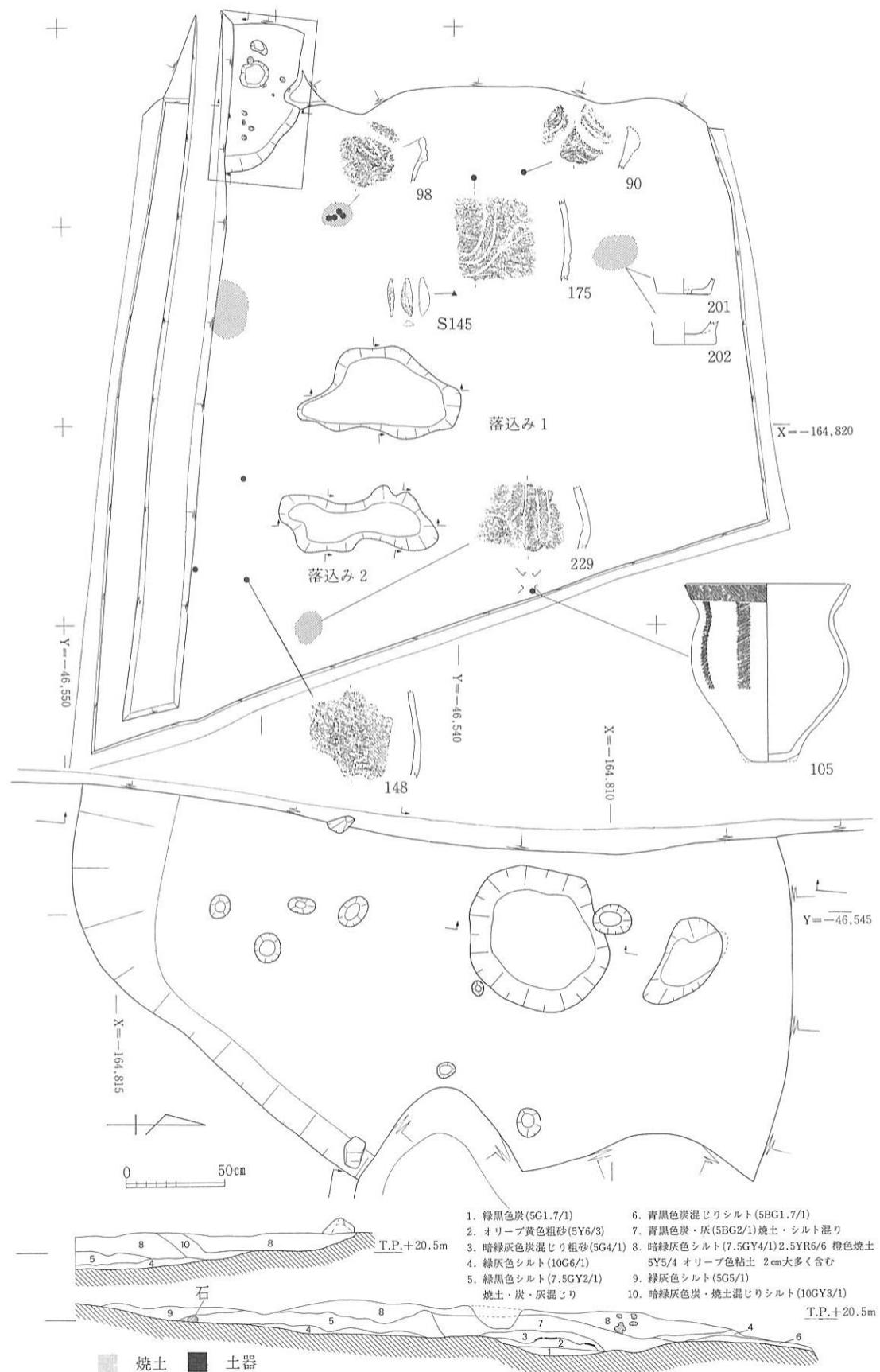


Fig. 26 I 地区 中期末～後期初頭平面（上段）、土器片敷遺構周辺（下段）

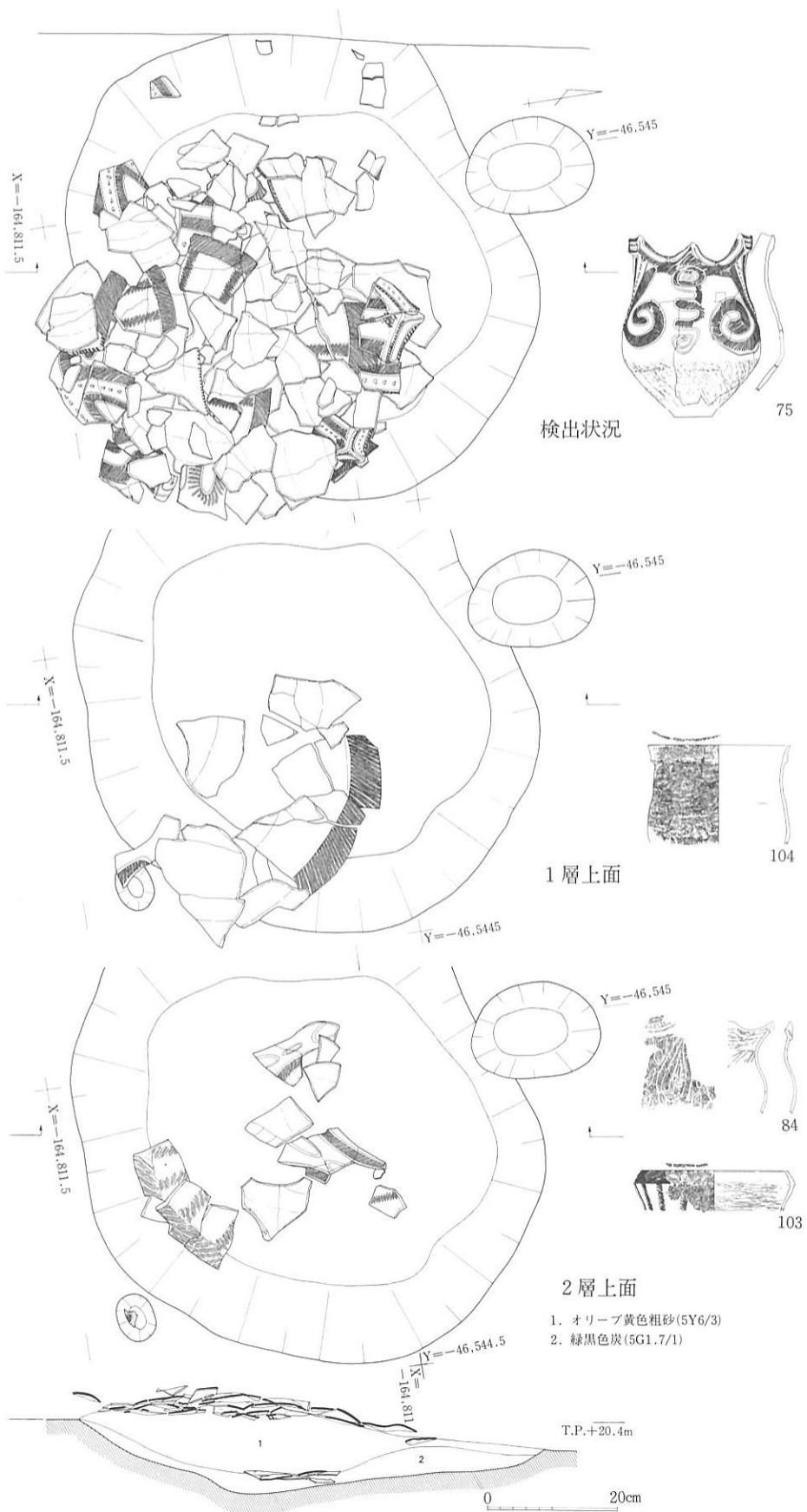


Fig. 27 I 地区 土器片敷遺構遺物出土状態

4. 中期末～後期初頭の遺構と遺物出土状態

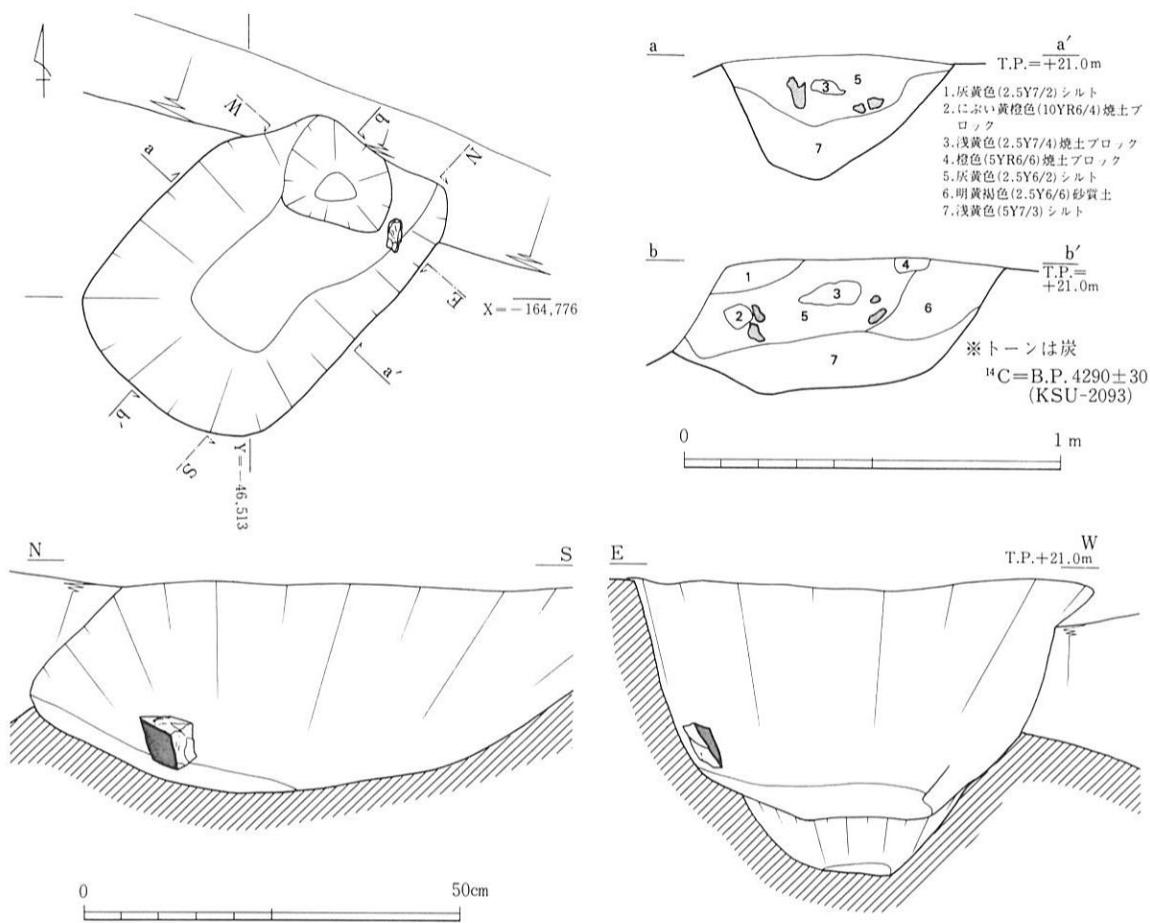


Fig. 28 I 地区 中期末～後期初頭土坑 1

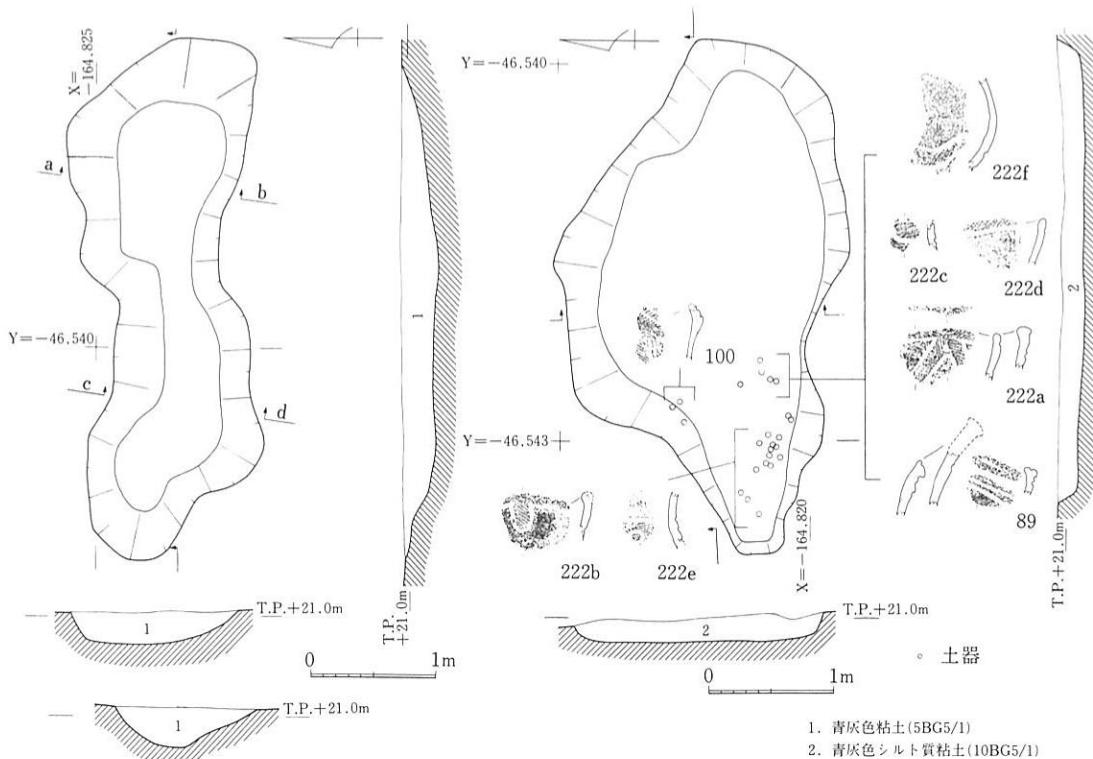


Fig. 29 I 地区 中期末～後期初頭落込み 1 (右)、2 (左)

3) 土坑1 (Fig.28)

土坑1 14 I トレンチのほぼ中央、河川29の北側に位置する。長辺約1m、短辺0.6m、深さ0.4mを測り、平面形は隅丸長方形である。底面北側には直径0.3mの不整円形を呈する、深さ0.15mの掘り込みが認められる。埋土は上層に、多量の炭、焼土が混じる。埋土内炭化材の¹⁴C年代測定値は、B.P. 4290±30(KSU-2093)である。出土遺物は土坑底面北東隅で、サヌカイト剝片1点が壁にはりついて検出された。

4) 落込み(Fig.29)

11 I トレンチ南側で、南北に2基並列して検出された。北側を落込み1、南側を落込み2とする。

落込み1 東西4.0m、南北2.3m、深さ0.3mを測り、不整な橢円形を呈する。埋土は1層であり、ベース層である青灰色シルトに類似するが、粘性が強いことにより区別できる。出土遺物は後期初頭中津式の深鉢片が、落込み西半に集中して出土している。

落込み2 東西4.2m、南北1.3m、深さ0.3mであり、くびれをもち細長い不整形を呈する。埋土は1層であるが、落込み2同様ベース層に類似する青灰色粘土層である。遺物は出土しなかった。

5) 遺物出土状態(Fig.30)

土器群1 13 F トレンチ北東部、T.P.+20.5m前後で、中津式土器片が比較的集中して出土した。

土器群2 2 F トレンチ中央よりやや南寄りに位置し、T.P.+20.5mの硬質緑灰色粘土上面において検出された。遺物は、中津式土器片とともにサヌカイト剝片が出土している。

土器群3 2 F トレンチ北端に位置し、後期土器群6の下層にあたる。遺物は中津式土器片が出土した。

土器4 15 G トレンチ河川12の南側ベース、T.P.+19.9mより中津式土器が1点出土した。

土器群5 (Fig.26) 11 I トレンチ南半から13 I トレンチのT.P.+21.0mにひろがる。立木とともに縄文中期末～後期初頭の土器、磨製石斧、石鎌が出土している。

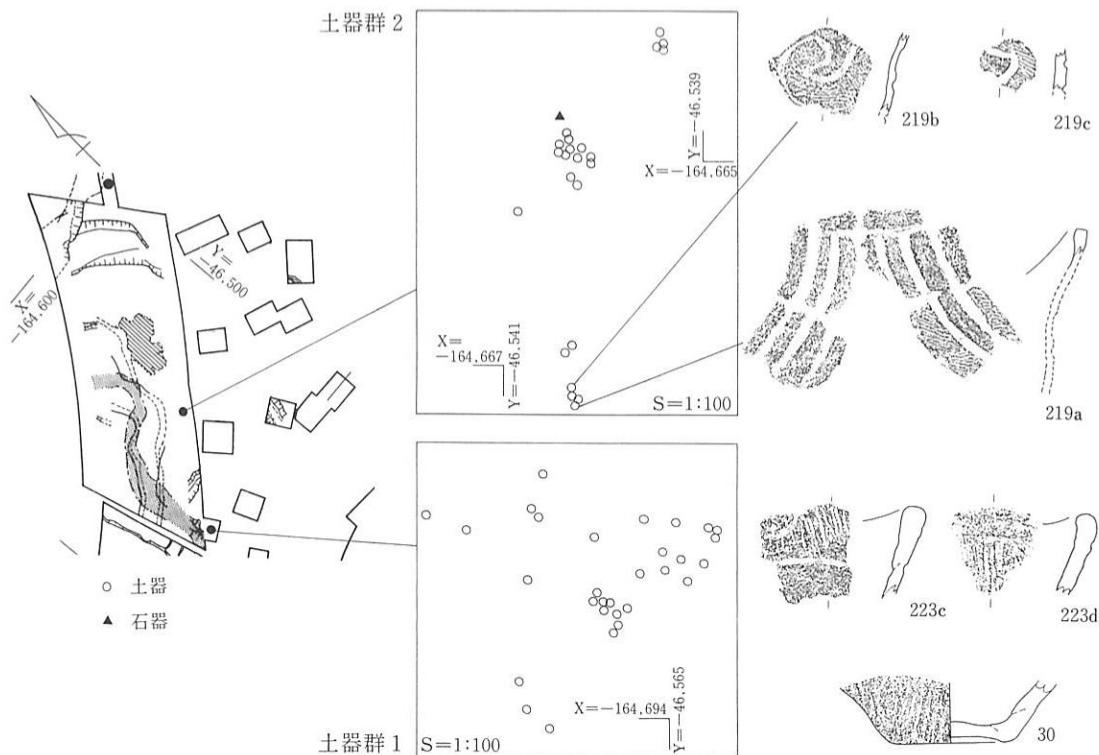


Fig.30 F地区 中期末～後期初頭遺物出土状態

5. 後期の遺構と遺物出土状態

5. 後期の遺構と遺物出土状態

1) 包含層と面の認識

後期の包含層および面は、V層中に土器が出土することによって確認した。F地区中央で遺物集中区が、E～G地区にかけて土器群11ヶ所が認められた。遺物集中区はある程度の広がりをもち、面的に確認できたが、その他の土器群は小範囲での検出であり、面的な調査は困難であった。V層青灰色シルトは、先述されるように還元状態にあり、砂層や土壤化層と考えられる黒色がかった層を除いては、粘土質～シルト質の漸移層であるため層界は明らかではない。

2) 遺物集中区(Fig.31～34)

F地区中央部、15Fトレーナー南部において検出された。河川8、9の東岸にあたる。範囲は南北25m、東西20mにわたり、検出面は遺物集中区南端でT.P.+21.1m、北端でT.P.+20.9m前後である。河川8、9に向かう緩傾斜地である。

検出面では、炭化物を多く含む有機質の茶黒色粘土、おなじく炭化物を多く含む茶黒色粘土に比べしまりの悪い暗灰色粘土、立木の根が腐植したものと考えられる有機質に富む茶灰色粘土、やや青灰色を呈する灰白色粘土の大きく4種の粘土が同一面においてみられた。灰白色粘土の平面形は放射状にひろがるもので、立木の根の腐植後粘土がはいったものと考えられる。検出状況は、茶黒色粘土が幅0.7m～1.5m、長さ13mにわたり南北方向にはしり、その河川側に3ヶ所のひろがりがみられる。その周辺を取り巻くような形で暗灰色粘土がひろがり、そのなかに立木の痕跡とみられる茶灰色粘土、灰白色粘土が点在するといった状況であった。そのほか腐植していない木が、有機質土に埋まる状態で検出されている。

以上の有機質土に土器が多く含まれており、これらを10～20cm掘削、除去するとベースである青灰色粘土～シルトにいたる。ベース面においては、幅0.6m～1.5m、深さ0.1m前後の南北にはしる溝、その河川側には2ヶ所の落込みと溝北端から河川にかけての落込み1ヶ所が検出された。南北溝の中央部分は円形に窪み、深さ0.2mを測る。これは検出面でみられた状況と一致するものであり、溝西側の落込み3ヶ所は立木の根の痕跡であろう。ベース面においてはそのほか、有機質土のひろがりからは距離をおくが、南北溝南端西側で炭化木の入る焼土塊が2m×1.5mの範囲で出土しており、これもまた立木の根である可能性がある。

X=-164,642.5、Y=-46,530において、ベース面より20～30cm下層、T.P.+20.7m前後で土器片が1m×0.8mの範囲で出土したが、小片のみであり時期は不明である。小範囲の確認にとどまったが、有機質土層の下層に包含層の存在する事は確実である。

堆積状況は大きく3層に分けられる。下層より概略的に述べる。ベース上面の下層では炭化物をわずかに含みブロックの混じる薄層が認められ、これはベース上部の搅乱層と考えられる。中層には炭化物を多く含む黒色土の斜面堆積が認められる。砂粒や粘土ブロックの有無などから黒色土は4～5層に分層でき、河川側においてはこの黒色土の二次堆積に比定可能な層も存在する。上層は炭化物をわずかに含むシルトであり、ラミナがはいる。以上より、遺物集中区における堆積は、南から北西河川にかけての緩斜面にそって、数次にわたりなされたものと考えられる。遺物は各層より出土しており、時期幅が認められる。

遺物集中区と河川の関連は、遺物集中区北端の河川を含む東西セクションからうかがえる。河川内埋

土は、植物遺体を含む細砂～粗砂層であり、断面より採取した自然木の¹⁴C年代測定値はB.P.3110±70(KSU-2013)であった。河川東肩には、中層とした黒色土の上層にあたる炭化物や有機物を多く含む粘土層が薄く堆積し、断面で観察される河川埋土はすべてその上層に堆積することから、遺物集中区→河川8、9の前後関係は確認できる。しかし、断面で観察される河川が河川8、9のどちらに比定されるかは判断できなかった。

遺物は、土器および石器が2860片余出土した。土器は黒色土中に包含される1片3～4cmの細片が主でありX=-164,643、Y=-46,534付近に集中する傾向がある。大型の破片は、遺物集中区南半において数点認められるものの大半は北端の河川に通じる土器溜まりから出土した。土器は北白川上層2～3期のものである。石器もまた、黒色土の範囲全体に認められるものの、X=-164,643、Y=-46,534付近の石器集中区に集中する。

土器溜まり(Fig.33)は、長径2.0m、短径1.1mの楕円形であり、深さ0.7mを測る。空洞化した立木の幹部分が落ち込むように埋没しており、中には黒色泥土が堆積する。土器は底面よりやや浮いた状態で、空洞化した幹の上下から出土した。水分を多く含む黒色泥土中に埋積していたためか、遺物集中区黒色土出土土器に比べ残存状態が良好である。空洞化した幹は一部炭化しているが、これが被熱によるものか経年変化によるものかは不明である。この木の¹⁴C年代測定値はB.P.3380±40(KSU-2012)である。

石器集中区では、2.0×1.5mの範囲でサヌカイト剝片が集中して検出された。剝片のほか楔形石器、二次加工のある剝片、チップからなる。T.P.+20.9m前後の高さではほぼ水平に分布する。特筆すべきは、これらサヌカイト剝片中2個体ずつ3組が接合でき、うち1組は打撃後片方の剝片に二次加工を施していることである。石器に磨滅はみられないことからも、これらはプライマリーな状態での出土と考えられ、本地点が作業スペースであったことがうかがえる。

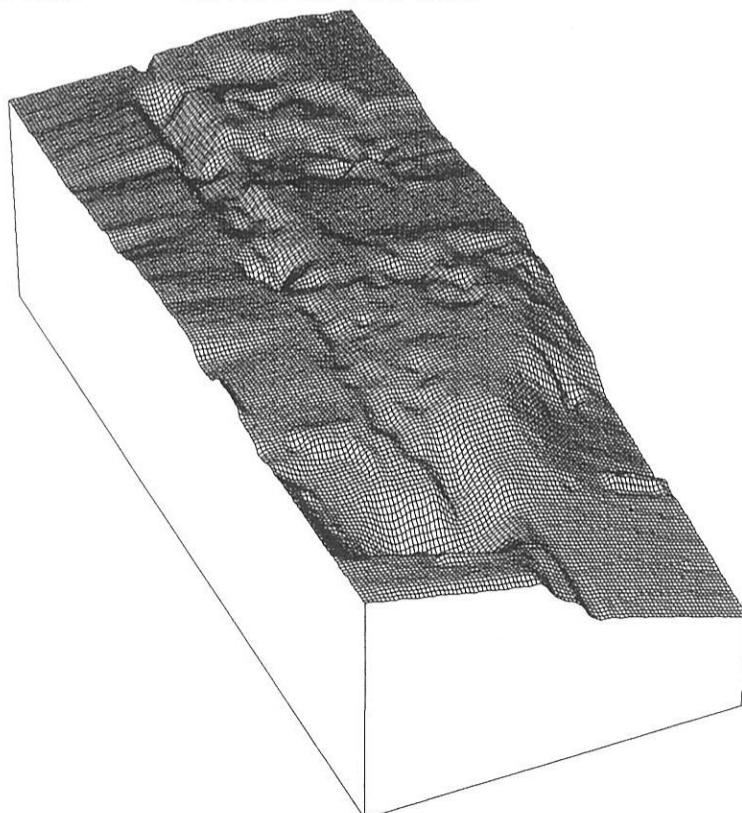


Fig.31 F地区 後期遺物集中区三次元復元（東から）

5. 後期の遺構と遺物出土状態

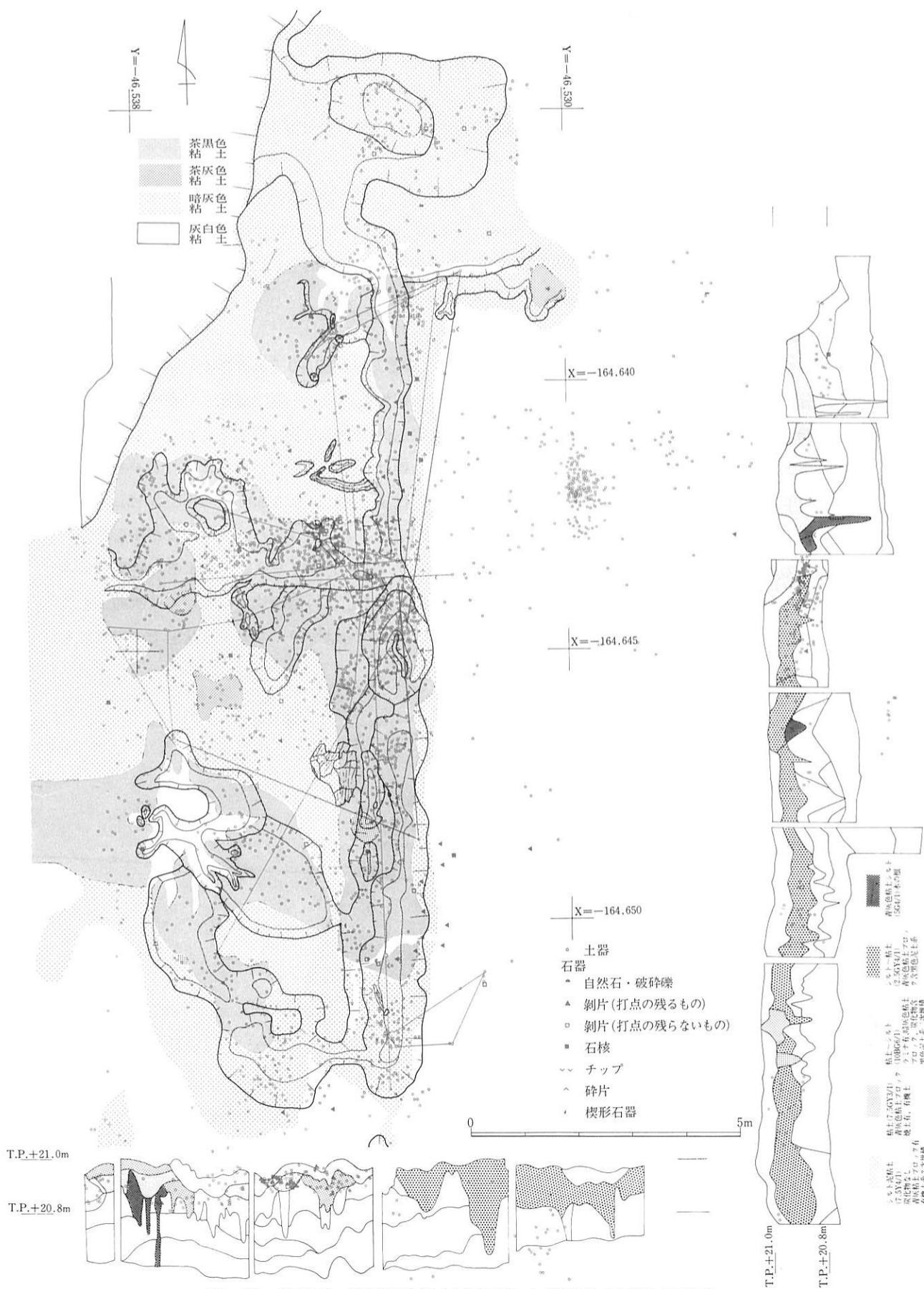


Fig.32 F地区 後期遺物集中区平面および断面（土器は投影図）

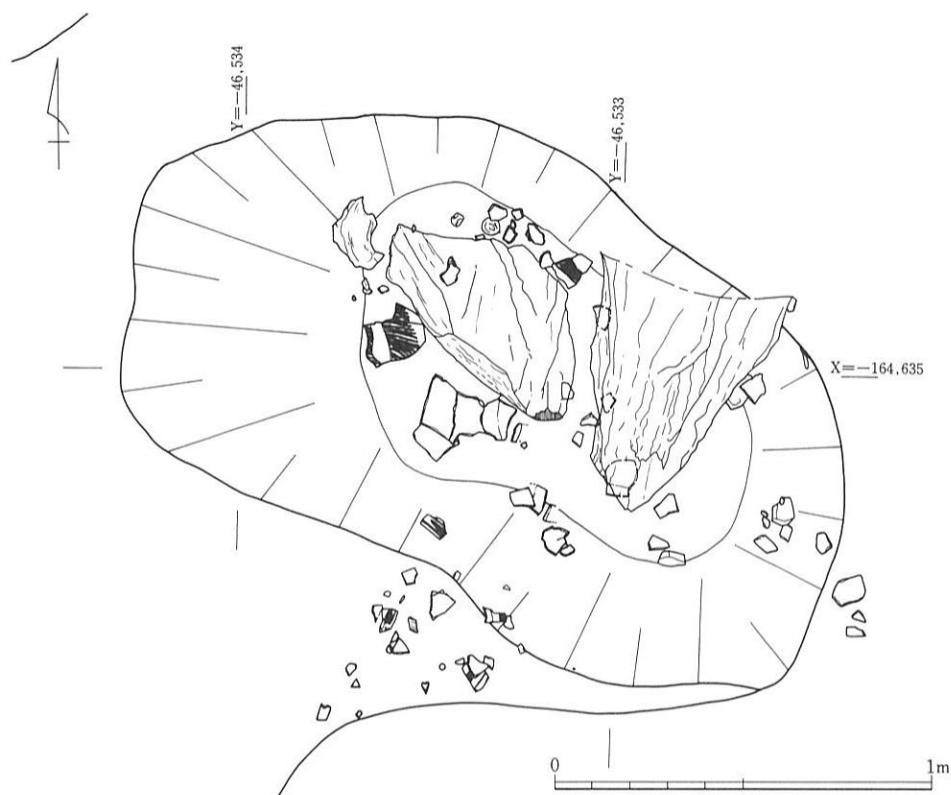


Fig.33 F地区 後期遺物集中区内土器溜まり遺物出土状態

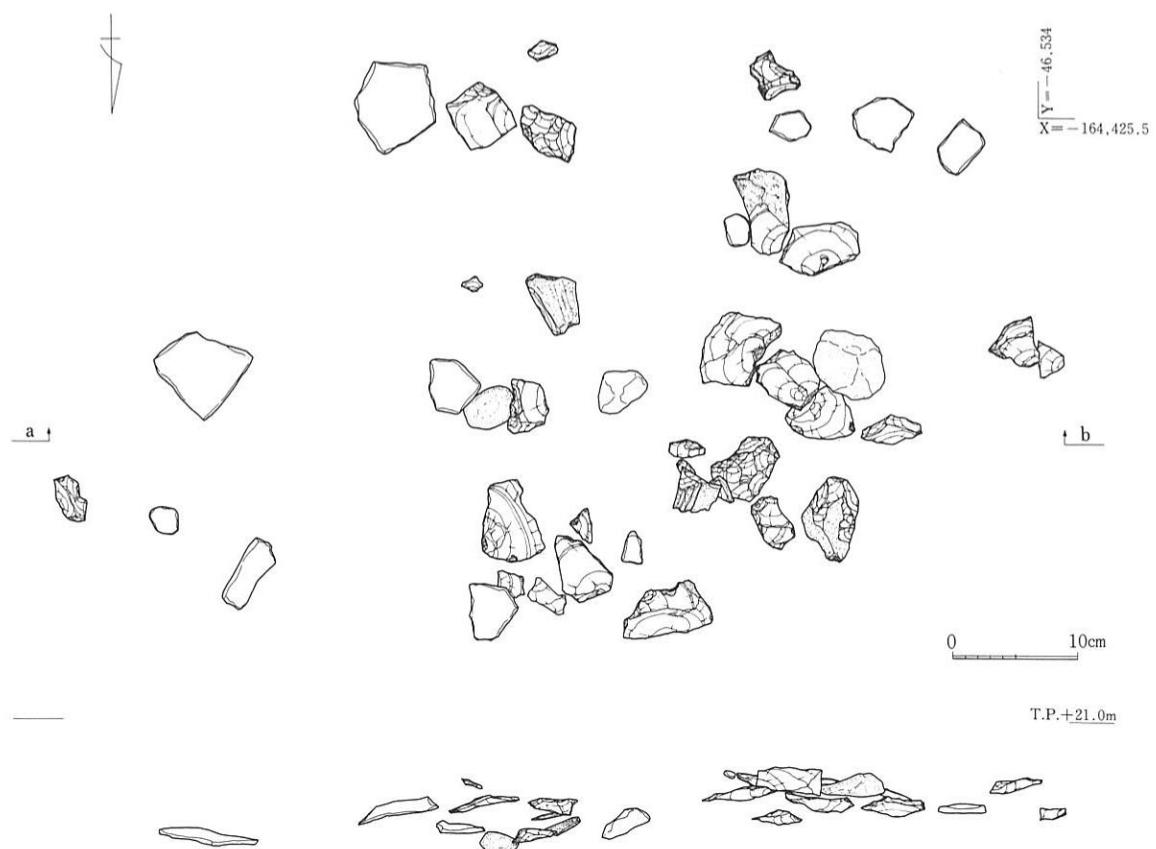


Fig.34 F地区 後期遺物集中区内石器集中区

5. 後期の遺構と遺物出土状態

3) 遺物出土状態(Fig.35)

縄文後期の土器群は、四ツ池式期 1ヶ所、北白川上層式 2期 1ヶ所、北白川上層式 2～3期 1ヶ所、北白川上層式 3期～一乗寺K式 3ヶ所、元住吉山式 2ヶ所と、その他後期には含まれるものとの時期確定困難な土器群が 3ヶ所認められた。

土器 1 E 地区北西辺中央部に位置する。IV層内T.P.+20.9mで、宮滝式深鉢の上半部(428)が潰れたような状態で検出された。検出面は、比較的小規模な浅い河川である河川4の南肩にあたり、直径 1～2 m の立木の根が多数存在する。同面では二次加工のある剝片やチップ、縄文土器の小片が出土している。自然堤防がようやく安定し、森林化した年代の面と考えられる。

土器群 2 1F トレンチ西端において検出された。IV～V層にかけて立木の根が検出され、その下層T.P.+21.0m前後に縄文土器の小片が 2×2m の範囲に散在していた。年代比定可能な土器片は(418)のみであり、これは北白川上層式 2～3期に位置づけられる。

土器 3 16F トレンチ南西、V層内T.P.+20.9mで出土した。深鉢半個体が、外面を下にして検出された。検出面は一時期河川9の北肩であった可能性がある。土器は北白川上層式にさかのぼる可能性を有するものの、器形からは一乗寺K～元住吉山 I式と考えられる(426)。

土器群 4 16F トレンチ中央部、河川9上面において検出された。検出面は、T.P.+20.6mである。細砂～粗砂上に大型破片が 2、その他小片が 10 個体程度 1×2m の範囲に分布する。土器は深鉢片(401～405)であり、北白川上層式 3期～一乗寺K式に比定される。

土器群 5 2F トレンチ中央やや北寄りに位置し、T.P.+21.2m付近で確認された。層厚10～20cmの炭混じり緑灰色粘土を除去した段階で土器(412～414)、石器片、ピットがひろがる。遺物が出土する範囲は 2×3m 程度であり、1辺 3cm 弱の小片が 3ヶ所に集中するかたちで検出された。敲石が 1点、やや離れた地点より出土している。ピットは遺物検出面をやや下げたところで明確に検出され、遺物が集中する地点とは重複しない。ピットは 6×4m の範囲で、計 22ヶ所確認した。直径 0.1～0.5m、深さ 5～10cm を測り、平面形は正円形、橢円形を呈する。埋土は炭化物を含む茶灰色シルトであるが、ベースである青灰色シルトとの土質の違いは不明瞭であり、明確な掘り方の確認にはおよばなかった。浅い落込み状のものが主である。土器は、北白川上層式 3期～一乗寺K式に比定される。

土器群 6 土器群 5 の北へ 25m、2F トレンチ北東部に位置する。土器群 5 と同様な検出状態である。検出面上層 30～40cm に、ワラ(スサ)状炭化物が埋積するピットが確認され、この¹⁴C 年代測定値は B.P. 2610±45(KSU-1710) であった。土器(406～411)は、土器群 5 同様北白川上層式 3期～一乗寺K式である。

土器群 7 10F トレンチ V層中 T.P.+21.3m～+21.5mにおいて、底部片(422)と石皿(S350)が出土。

土器群 8 11F トレンチ北西部、V層中 T.P.+21.5m での検出である。炭化物を含む層から土器および石器片が 2ヶ所に集中して認められた。同面においては幅 1.5m、深さ 0.2m 程度の植物遺体が埋積する浅い落込み状の溝が検出されている。土器(276～280)は、北白川上層式 2期のものである。

土器群 9 3F トレンチ北部に位置する。V層中 T.P.+22.0m の炭化物、植物遺体を含む緑灰色粘土より出土した。敲石を中心に土器、サヌカイト剝片が分布する。土器(247)は四ツ池式期に比定される。

土器群 10 V層中 T.P.+21.9mにおいて、9F トレンチほぼ全域にひろがる立木の根に伴って出土した。注口土器をはじめとする土器片およびサヌカイト剝片が確認された。

土器群 11 G 地区南西部、V層中 T.P.+21.5m 付近で、立木の根が焼けたものと考えられる焼土塊および土器片(214, 423)が出土した。底部片は中期末～後期初頭、胴部は元住吉山 I式と宮滝式である。

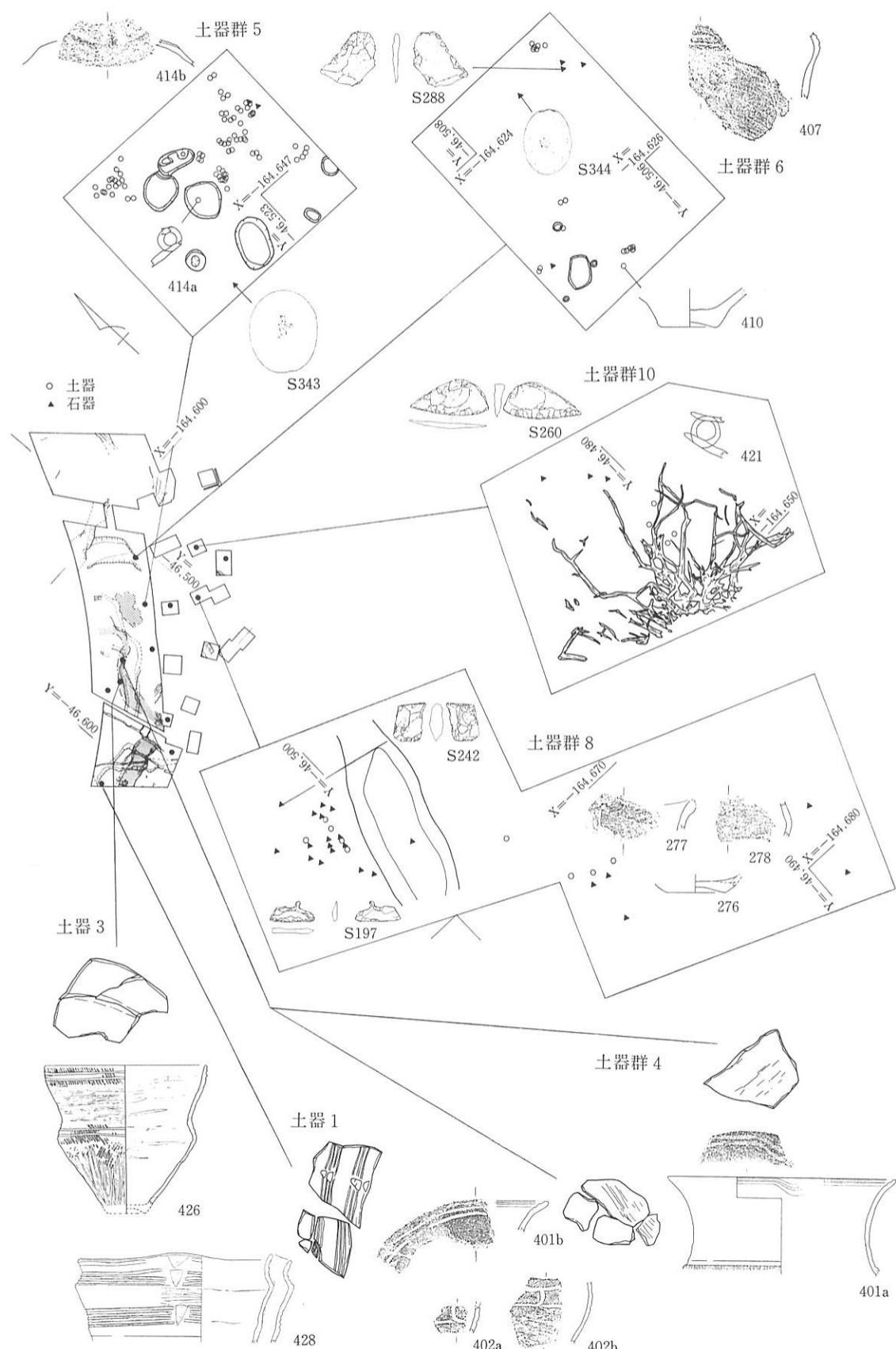


Fig. 35 E～G地区 後期遺物出土状態

6. 晩期～弥生前期の遺構と遺物出土状態

6. 晩期～弥生前期の遺構と遺物出土状態

1) 包含層と面の認識(Fig.36)

当該期の包含層は、おおきくはIV層に相当するものと考える。陶器川右岸、同左岸、I地区において様相が異なる。

陶器川右岸ではE～F地区の南半までしかIV層は追えず、以北のF地区北半からG、H地区にかけては明確なIV層、およびこれに相当する層は確認できなかった。このことは基本層序において先述したとおり、IV層とV層の区別が還元化の有無によるものであり、G地区および原ノ池内のH地区では当然他地区に比べ地下水位も異なるためと考えられる。この地区では土器群5カ所の確認にとどまる。

陶器川左岸のA～D地区においてはIV層の安定した堆積がみられ、とくにA、B地区では包含層中より多くの遺物が出土した。A、B地区ではIII層とIV層の層界が不明瞭であり、IV層上位では古墳時代以降の遺物が混在するものの、下位では縄文晩期～弥生前期の遺物に限られ、プライマリーな堆積と考えられる。A～D地区ではIV～V層中に畦畔状遺構が認められ、その時期と遺構の是非について論議があった。畦畔状遺構の断面観察では、それを埋積する層との層界が不明瞭ではあるが、なかには畦畔状遺構の高まり内が分層されるものもあり、遺構の性格について自然科学的調査もあわせ試みた。その結果、上面の水田と地下水位の関連などから生じた現象と考えられ、水田遺構ではないとの結論に達した(赤木1989)。C地区ではIV層上面で溝10条と土器群が2ヶ所検出されている。

陶器川左岸に位置するI地区では、A～D地区でみられるIV層、すなわちマンガン斑を多く含む黄褐色粘質土は認められないものの、層序断面模式図(Fig.24)の7層がこれに相当すると考えられる。I地区7層は青灰色・灰白色系粘土であり、上位は強い土壤化を受けた土壤化層である。遺構は確認されなかったが、崖錐性堆積縁辺部にそって流れる小規模な河川や谷状地形がみられ、湿地状を呈していたものと考えられる。また、植物遺体が厚く堆積しており、これによる¹⁴C年代測定値はB.P.2600±75(OR-080)であった。

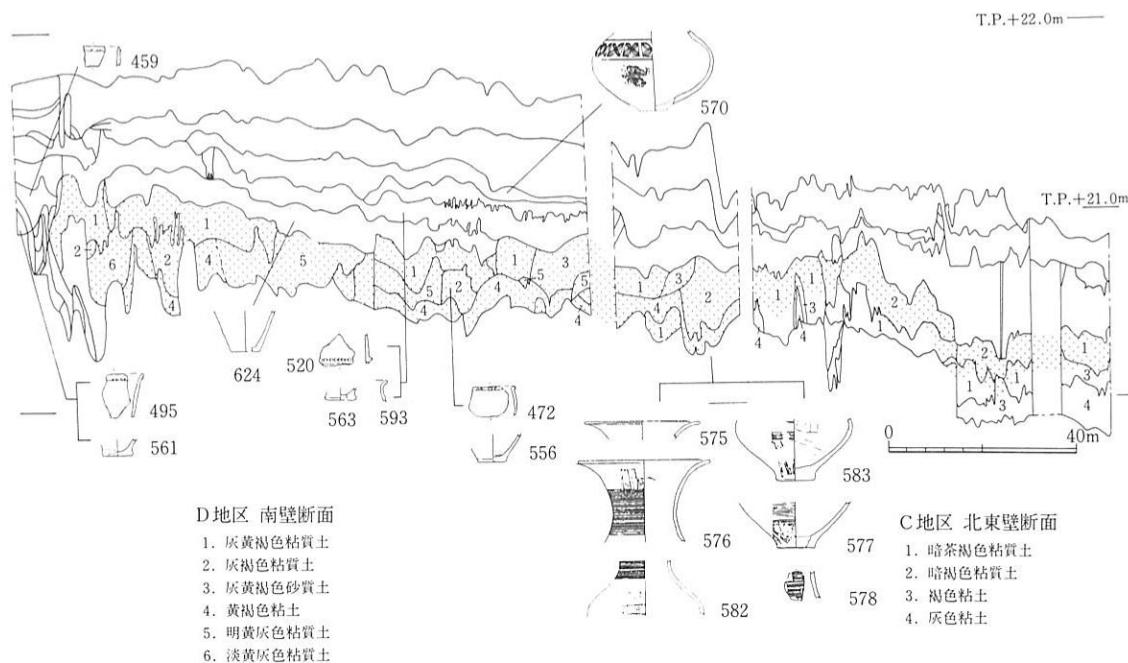


Fig. 36 A～D地区 縄文晩期～弥生前期遺物包含層

2) 土坑

B地区北部の河川1に平行して、南北方向にはしる段の肩部において検出された。南より土坑1、2、3とする。

土坑1 (Fig.37) 平面形は、 $0.7m \times 0.75m$ の隅丸方形を呈し、深さ $0.15m$ を測る。IV層中T.P.+20.3mにおいて検出された。土坑底面よりやや浮いた状態で縄文晩期長原式深鉢が、北肩付近では 15×5 cm程度の石が1点出土した。石は明瞭な敲痕や磨滅は認められないものの表面は平滑であり、何らかの作業に用いられたものと考えられる。

土坑2 (Fig.38) 長辺 $12m$ 以上、短辺 $4.5m$ 、深さ $7 \sim 8$ cmの長円形を呈する浅い落込み状のものである。IV層中T.P.+20.3mにおいて検出された。遺物は上面より縄文晩期長原式深鉢片が出土している。

土坑3 IV層下位、T.P.+20.2mで検出された。長辺 $2.6m$ 、短辺 $1.4m$ の橢円形である。深さは $0.5 \sim 0.6m$ で、埋土は上層から炭化物を含む褐灰色シルト、灰色シルト、炭化物少量含む暗灰色シルトであり、坑底の窪みには暗灰色粘質土が埋積する。上位より石が2点出土した。

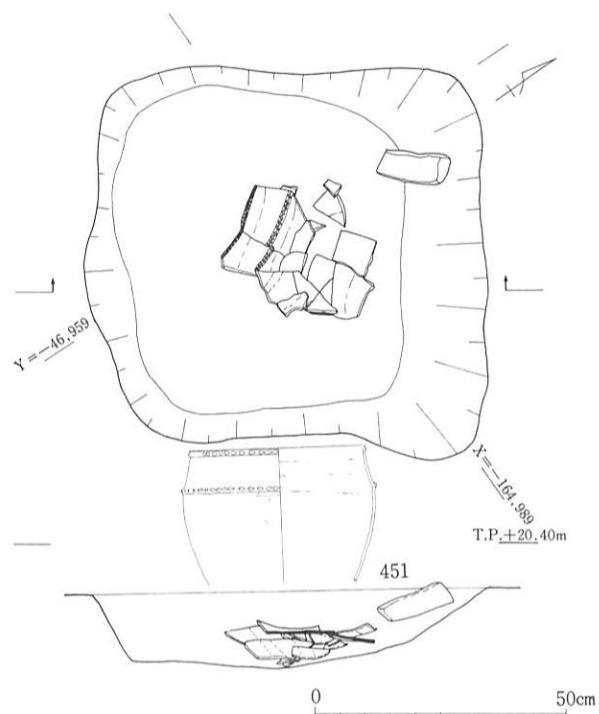
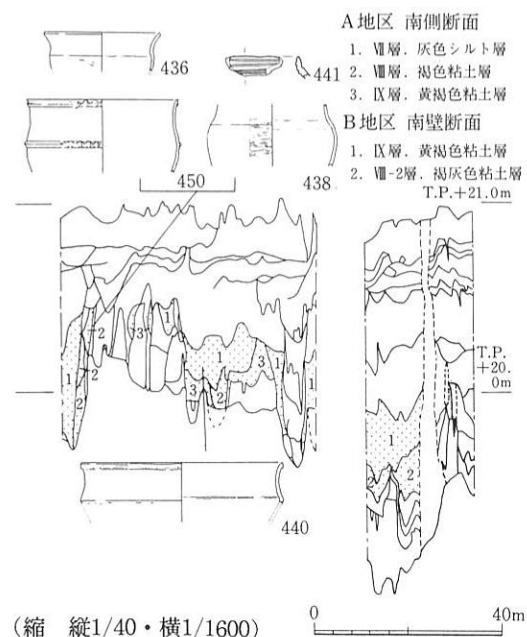


Fig.37 B地区 晩期～前期土坑1

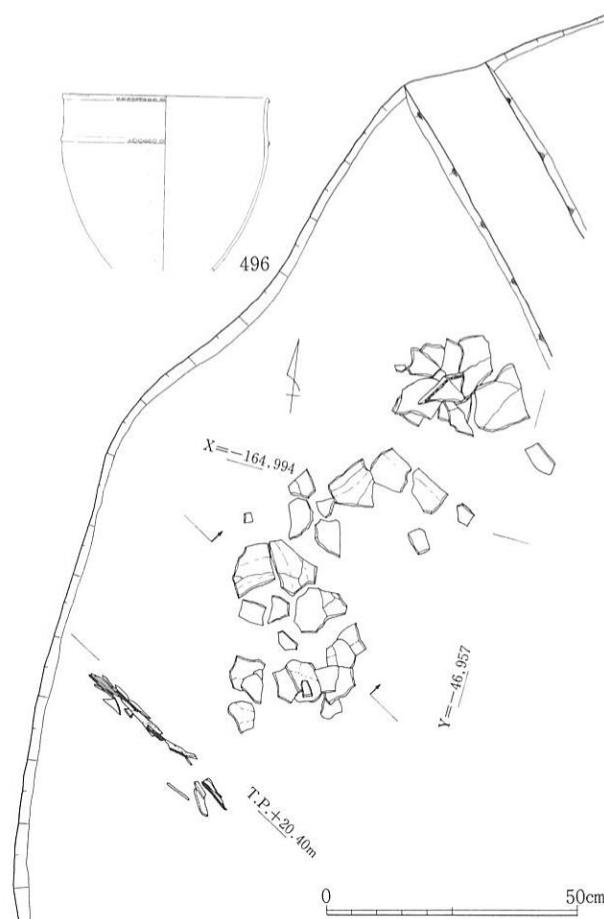


Fig.38 B地区 晩期～前期土坑2

6. 晩期～弥生前期の遺構と遺物出土状態

3) 溝 (Fig.14,40)

C～D地区IV層上面において、河川1以北に溝10条が確認された。

溝1・2 C地区南西部で検出された、南北方向にはしる溝である。両溝は蛇行しながら鎖状を呈し、北部では溝4と合流する。

溝3 C地区北西隅部を北西～南東方向にはしる溝である。幅2.3m、深さ0.6mを測る。埋土内には粗砂が認められ河川1の影響が考えられる。

溝4 溝1、2の延長上にある。幅2.0m、深さ0.3mを測る。埋土は上層から淡黄褐色土、粘土ブロックを含む淡黄灰色土であり、下層上位では縄文晩期長原式深鉢と弥生前期壺が出土している。溝内には粗砂層が認められ、河川1の溢流により流入した遺物と考えられる。

溝5 C地区中央部を北西～南東方向にはしる溝であるが、東部では検出されなかった。幅5.0m、深さ0.8mである。

溝6 C地区中央部やや北よりにおいて検出された。不定形な平面形を呈し、最大幅3.5m、深さ0.5mである。埋土は上層から灰褐色粘土、暗灰色粘土であり、層界に明灰色粘土ブロックが介在する。

溝7・8 C地区北東部の谷状地形先端部に位置する。両溝は中央に島状の高まりをはさみ、C地区東部で合流するものと推定される。

溝9 C地区東端部に位置する「コ」の字状の溝である。幅5.5m、深さ0.7mを測る弥生前期甕が出土した。

溝10 C-D地区境に位置し、最大幅6.0m、深さ0.9mを測る。

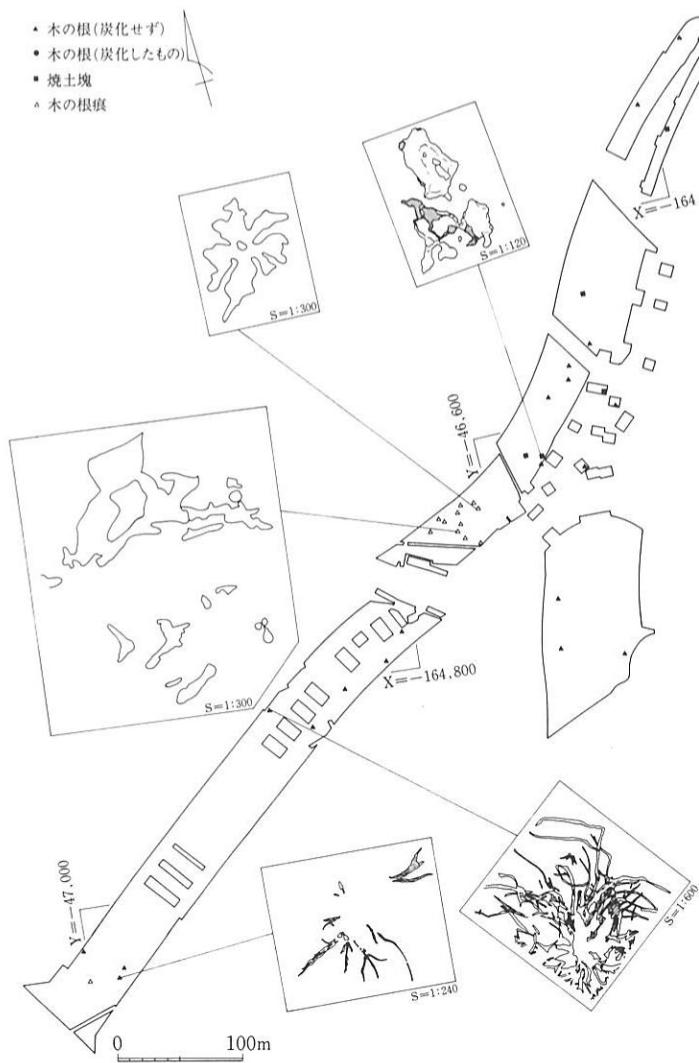


Fig.39 木の根および焼土塊の平面分布

4) 木の根痕(Fig.39)

調査区全域にわたって検出された。立木の根張りがそのまま残るもの、根の一部が炭化したもの、炭化物を伴う焼土塊の3種類の様相を呈する。炭化したもののなかには周辺が焼土化したものも認められた。IV～V層中で検出されるが、とくにIV層中に多い。遺物を伴出するものは限られ、また伴出する場合においても、木が存続した年代の面の確定は困難であることから、出土状況より根の帰属年代を確定するにはおよばなかった。しかし、¹⁴C年代測定値がB.P.2300～2500を示すものが多いことから、縄文晩期の森林の存在が想定される。

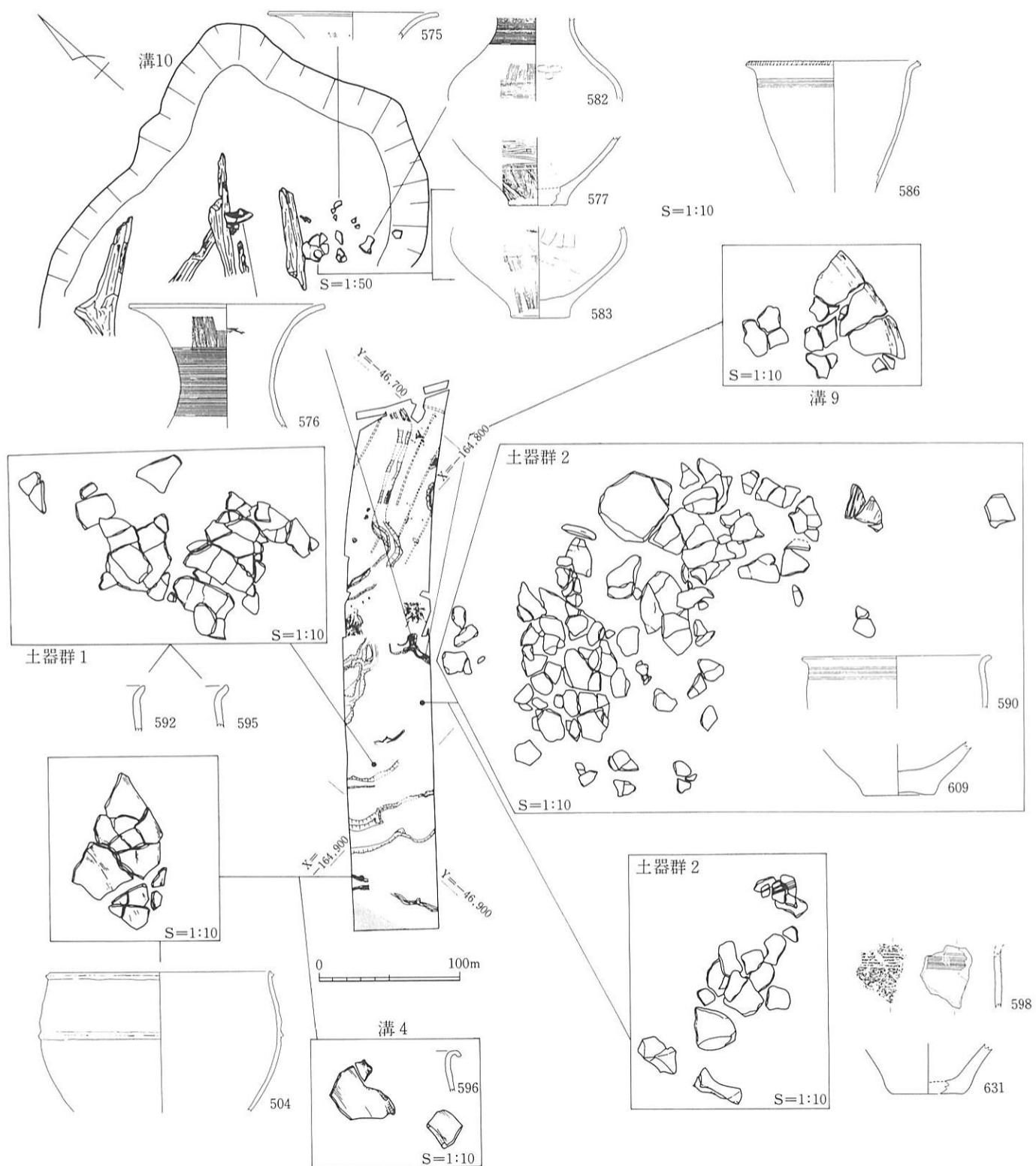


Fig.40 C・D地区 縄文晩期～弥生前期遺物出土状態

6. 晩期～弥生前期の遺構と遺物出土状態

5) 遺物出土状態(Fig.40~43)

土器群1 C地区中央部やや北より、溝5の北肩で検出された。土器は、まとまって2ヶ所に認められた。大型破片が潰れ、小片が重なるような出土状況を示す。

土器群2 C地区北東部において検出された。遺物は、大きく5ヶ所に集中している。遺物は小片に破碎された状態で、平面的な広がりをみせた。出土遺物は弥生前期甕(590)を始めとし、壺底部などが認められた。弥生前期壺(566)が本土器群周辺から出土している。

土器群3 E地区北半の河川へ向かう斜面上で、図化できなかつたが滋賀里式と考えられる土器片が数点出土している。E地区におけるIV層中には土壤化層である黒褐色系有機質土が介在しており、そのいずれかに相当する面での出土と考えられる。

土器群4 6Fトレンチ東半で検出された。T.P.+20.6mで土器片のひろがりと茶灰色シルトを埋土にする浅い落込みが認められる。遺物は縄文晩期長原式深鉢片が出土している。トレンチ西半からE地区へ伸びる河川4の検出面はこれより上層となるため、河川4の年代は縄文晩期以降に位置づけられる。

土器5 (Fig.41) F地区南西部、T.P.+21.6mにおいて検出された。直径1.2m前後の浅い落込み内に土器片がほぼ水平に出土した。土器片はすべて同一個体とみられるものの口縁部を欠き、明確な時期の比定はできないが、縄文晩期滋賀里III～IV式の可能性がある。

土器6 (Fig.42) F地区北西部、河川11肩部上層より出土した。T.P.+21.4mに広がる炭化物混じり暗緑灰色粘土層中もしくはその下位での検出である。土器は深鉢がほぼ半個体分がまとまって出土し、付近から敲石2点が出土している。縄文晩期滋賀里III～IV式と考えられる。

土器群7 (Fig.43) 2Hトレンチ北端、河川27の南肩付近に位置する。河川南肩を10cm程度さげたT.P.+23.2mで、同一個体土器片と立木の根が検出された。遺物は弥生前期壺である。

土器群8 I地区南半、段丘崖下の後背湿地(Fig.24)の基本層序の第7層相当層より縄文晩期長原式土器、浮線文土器、弥生前期土器、木製容器が広範囲に出土している。

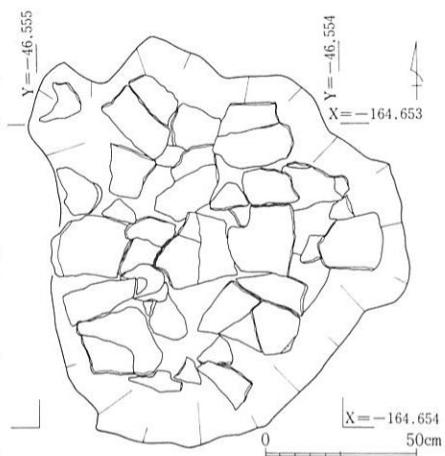


Fig.41 F地区 晩期土器5

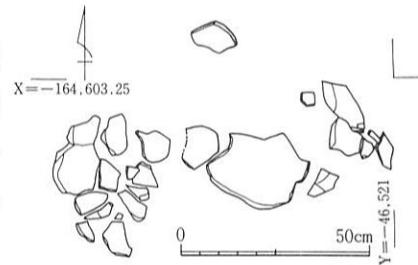


Fig.42 F地区 晩期～前期土器6

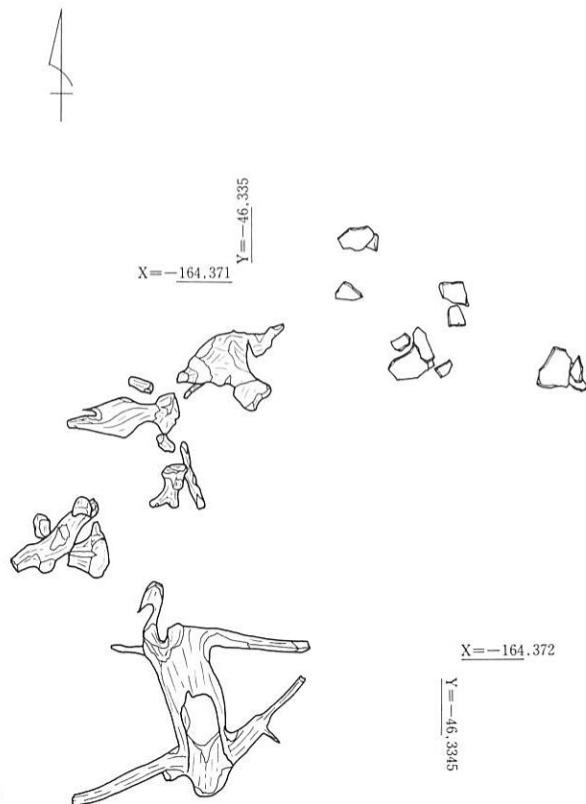


Fig.43 H地区 弥生前期土器群7

7. 弥生時代の遺構と遺物出土状態

弥生時代中期～後期の遺物は、H地区で少数包含層中より出土するもののその他は河川出土であり、H地区以外においては明確に当該期に認定できる包含層および遺構は認められなかった。H地区においても包含層は全域に検出されるものではなく、極めて不安定な状態である。基本層序においても述べたとおり、III層上面において古墳時代前期以降の遺構が検出され、IV層中には縄文晩期～弥生前期の遺物が包含されている。したがって、当該期包含層をあえて比定するならばIII層が該当することとなるが、III層中から弥生中～後期の遺物は出土せず、この年代は小阪遺跡においては空白期となる。

H地区河川27において土坑、しがらみ、杭列、水田の可能性をもつ土壤化層が検出されている(Fig.46)。検出面は灰原の下層、弥生前期土器群7検出面よりは上層にあたる。これら遺構からの出土遺物は認められず、古墳時代前期となる可能性も捨てきれないが、おおきくは弥生時代の範疇におさまるものと考え、本項にまとめた。

C地区では、中世まで埋積が継続したと考えられる谷状地形が検出されている。時期は特定できないが、弥生時代には存在していたものといえ、本項に含めた。

1) 土坑(Fig.44)

2 Hトレンチ、河川27の外湾部北肩に位置する。河川27の北肩はゆるやかに傾斜する肩線が不明瞭なものであり、土坑はその傾斜面で検出された。東西0.6m、南北1.3m、深さ6cmの浅いものであり、河川27により削平された可能性がある。平面形は先端部の尖る橢円形を呈する。埋土は褐灰色シルト1層のみである。遺物は底面中央でサヌカイト剝片が集中して出土し、楔形石器が1点含まれる。

2) しがらみ(Fig.45)

2 Hトレンチ東端、河川27内で2.4×2.0mの範囲にわたり検出された。河川27を埋積する粗砂層を除去することによって確認され、高さはT.P.+23.0～23.5の約50cmを測る。構造は、河川ベースより直立する材とそれらの間に横たわる材、およびその周辺の加工木、自然木よりなる。直立する材は断面三角形を呈しベース面より40cm前後を測るもので、明確なものでは30cm間隔で東西方向に並ぶものが3本検出された。これらの北側には直径3cm、長さ1.0mの丸材をはじめとし、長さ20～30cmの丸材が数本横たわり、1端を削り尖らせた杭や自然木がともに出土している。また南側では直立する材にかぶさるような状態で直径30cm前後の自然木が斜めに出土している。これらの状況から、打ち込んだ杭に横木をわたしたしがらみと考えられ、北東から南西へ流れる水流を制御する機能を有したものと推定される。また、西側につづく杭列とは同一河川内、同一面での検出であり、一連のものと考えられる。

3) 杭列 (Fig.48)

2 Hトレンチ北部の河川27内に位置する。しがらみの南西10mの地点から30mにわたり検出され、高さは、T.P.+23.2～23.4m前後である。杭列は河川27が北西から流れ込み南東へと蛇行する内湾部分南肩とその攻撃面に相当する10m南西の北肩でとくに顕著に認められた。前者を東杭列、後者を西杭列

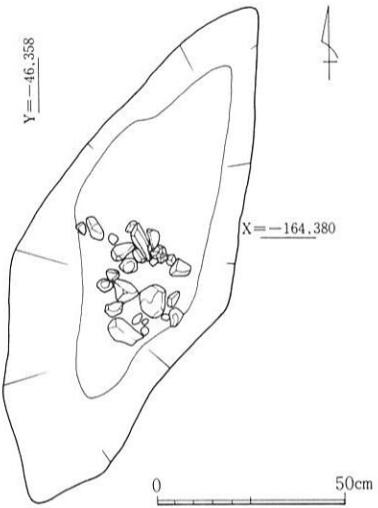
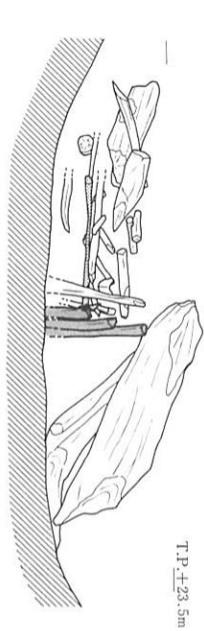


Fig.44 H地区 弥生土坑

7. 弥生時代の遺構と遺物出土状態



横木
杭

0 50cm

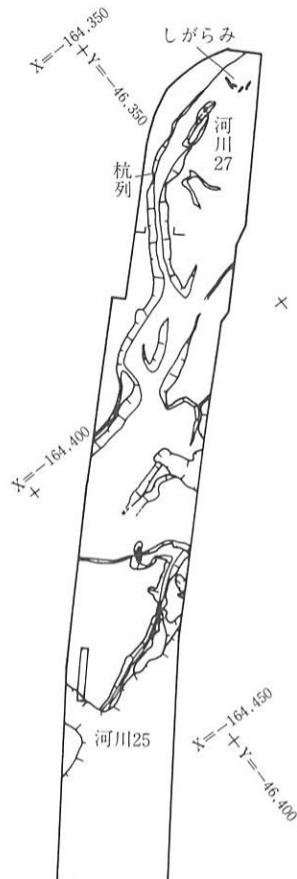
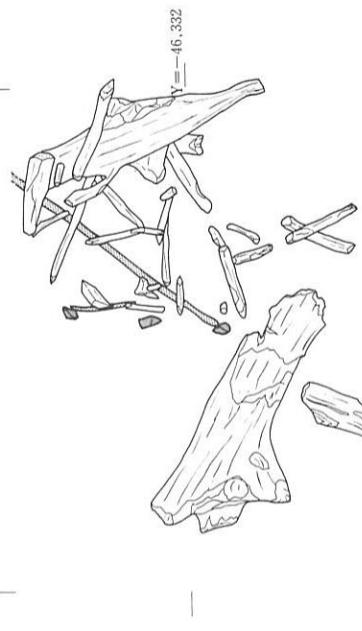


Fig. 45 H地区 弥生しがらみ

Fig. 46 H地区 弥生平面

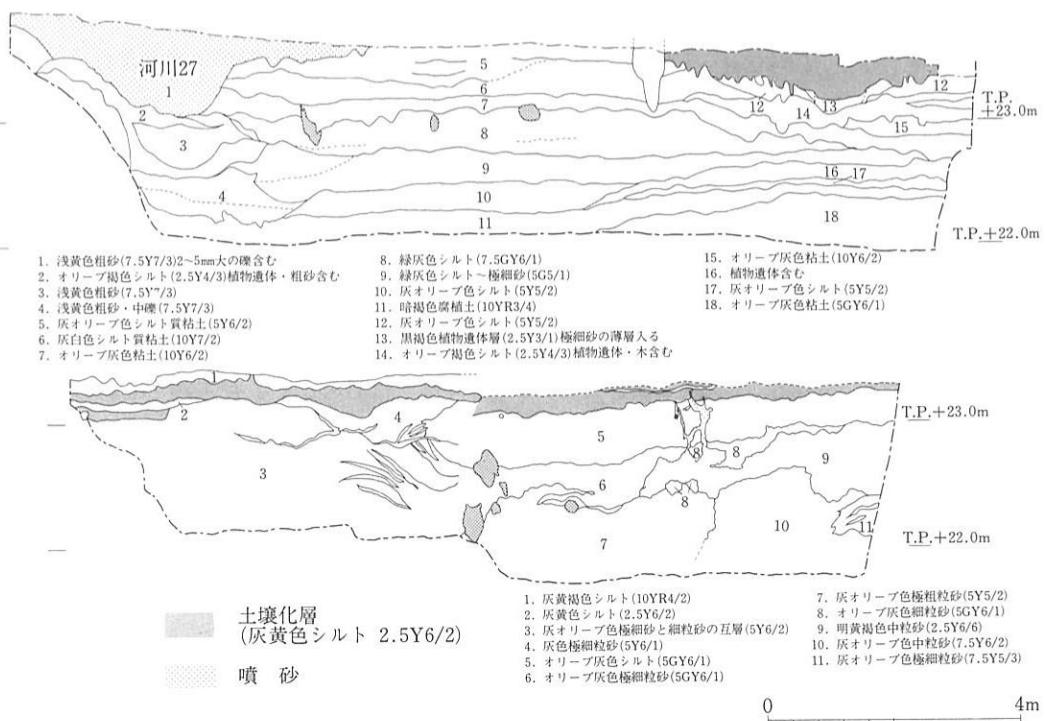


Fig. 47 H地区 弥生土壤化層（水田）断面

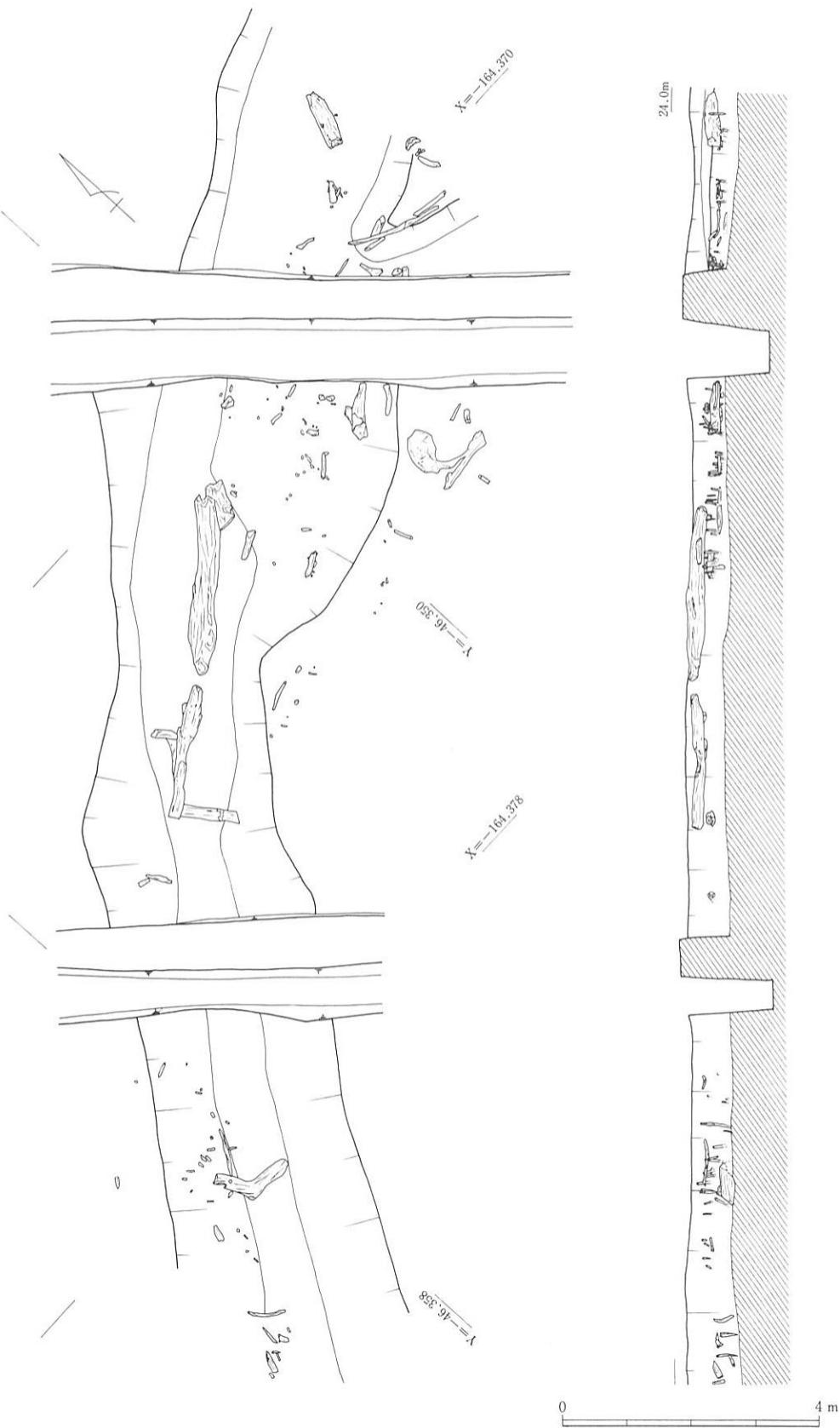


Fig.48 H地区 弥生杭列

7. 弥生時代の遺構と遺物出土状態

とする。

東杭列部分は、河川27肩部から底面へむかうゆるやかな傾斜面の中程で、肩線にはほぼ平行して検出されたものである。6.0m×1.5mの範囲で20~30本の杭が10~20cm間隔で直立する。全体的には河川の肩に平行するものの、範囲内でみるとアトランダムな配置である。20cm~1.5mの長さの丸材および直径20~30cmの自然木が周辺に散在し、一部は直立する杭の河川側にそって出土している。

西杭列部分もまた河川肩部から底面へむかう傾斜面の中程から下端にかけて検出されている。15本前後の杭が10cm間隔で直立し、横木が1本河川に平行して検出されている。

その他、東、西杭列間では直径30~40cmの自然木が河川中央に2本出土しているが直立する杭は認められなかった。以上より、杭列は河川に直交するものではなく平行する傾向が認められ、河川27の護岸的な性格が考えられる。

4) 水田(Fig.46,47)

明確な溝、畦畔等を伴う水田遺構ではないが、水田の可能性をもつ土壤化層が断面観察において確認されている。河川27上面(Fig.47上段)と河川25北肩部周辺に設けた断面(Fig.47下段)で明瞭に確認できた。面的な調査にはおよばなかったが、土壤化層は2Hトレーナーのほぼ中央部にあたる、河川27中程から河川25の北肩部周辺にかけての範囲にひろがるものと考えられる。土壤化層とここで呼称している層は、層厚2~20cmの灰黄色シルト層であり畦畔状の高まりや足跡とみられる窪みが存在し、これが水田の可能性が指摘される契機となった。

河川27上面の断面では、土壤化層は河川埋土の浅黄色砂下層に認められた。河川南肩部から7m離れたやや窪地の部分で、長さ10~20cmの足跡とみられる窪みが多く観察される。窪地底部には黒褐色植物遺体が埋積することから、河川27を埋積する洪水以前の段階では一時期湿地状を呈していたことがうかがえる。

河川25北肩部の断面では、2層の土壤化層が観察されている。上層から土壤化層、層厚10cmの細砂層、土壤化層がシルト層をベースとして堆積しており、少なくとも2時期にわたる水田の存在がうかがえる。下層土壤化層上面には、鋤もしくは鍬などの農具使用の痕跡とみられる搅乱や足跡とみられる窪みが断面において観察されており、水田である可能性が大きい。また、下層土壤化層上面では噴砂のひろがりを確認している。噴砂はベース下層の細砂層から、シルト層を引き裂く幅2~12cm、長さ40~50cmの2本の割れ目にそって上昇している。したがって、下層土壤化層の堆積後に地震があったといえる。年代については出土遺物がなく不明であるが、ベース層下層の細砂層中に含まれる自然木の¹⁴C年代測定値がB.P.2400±25(KSU-1806)、下層土壤化層下位出土自然木がB.P.2300±20(KSU-1805)であり、水田および噴砂の年代はこれ以降と考えられる。

5) 谷状地形(Fig.14)

C地区北部に位置し、南東から北西にむかって開口する。層厚0.8mの暗灰色粘土層を除去後、T.P.+20.6mにおいて検出され、北肩を8m、南肩を32m以上、幅20m以上、深さ3.3m以上を測る。平面形は砲弾形を呈し、肩部から途中幅1m前後のテラスを経て2段に落ち込んでいる。埋土は下層から砂礫層、暗灰色粘土~黒灰色粘土の互層であり、砂礫層から須恵器片、黒灰色粘土層上面から木樋状の木、上層の暗灰色粘土層から奈良~平安時代以降の遺物が出土している。谷の存続年代については、IV層上面において縄文晩期~弥生前期の溝7、8が合流する形で谷の頂部を切り込んでいることから、弥生時代頃にはすでに存在していたものと考えられる。

8. 土器

小阪遺跡出土の縄文土器は、その質、量ともに近畿地方においては数少ないまとった資料である。また、先述したように小阪遺跡は立地上、低湿地性遺跡の範疇に含まれ、特に埋没河川出土の土器は煤が器壁に厚く付着するなど、残存状態の良好な資料が多い。

縄文土器、弥生土器はコンテナ(40×60×15cm)に約50箱を数え、そのうち図化可能な土器は全て実測図を作成するよう努めた。実測点数は約850点であり、そのうち本報告掲載の土器は684点である。ほぼ完形に復元できた土器は深鉢が6点、浅鉢が1点である。なお、接合不可能であるものの同一個体の土器片で必要とおもわれる部位は、同一番号でアルファベット小文字を付して示した。

出土土器は、縄文時代早期末葉から晩期および弥生時代前期～中期までの時期幅を有し、縄文中期末から後期初頭の土器と晩期末葉の土器が多くを占める。弥生時代後期土器については、古墳時代土器と伴出する資料が多いため第3章において扱うこととした。縄文土器は基本的に遺構出土、包含層出土といった出土地点を問わず一括して扱っており、既存の型式を参考に器形、文様帶、文様（意匠）、施文技法をもとにⅩⅢ群46類に分類した。ただし、縄文時代後期に位置づけられるF地区の遺物集中区とその周辺の土器群に関しては、大きくは後期中葉の時期幅におさまるもの、土器群として捉えた場合の若干の年代差を考慮して、各々別類として分類した。土器の部位を示す用語については、主に文様帶から口縁部、胴部、底部に3分割し、口縁部上端に近い部分を口縁部端部、胴部で特にくびれる部分は頸部、張り出す部分は肩部とした。なお、口縁端部は口縁部端部との混同をさけて口唇部とした。なお、土器の出土地点については一覧表として後尾に付した。

1) 縄文土器

I群(Fig.49-1.2) 条痕調整を施した器壁の薄い土器である。

1類(Fig.49-1a～1e) 器形は、水平口縁の尖底深鉢と考えられる。外面、内面ともに条痕調整であり、口唇部には刻み目を施す。底部に近い土器片(1d,1e)には、内面に指頭圧痕が認められる。纖維は含まない。

2類(Fig.49-2) 外面はナデ調整、内面のみ条痕調整を施す。

II群(Fig.49-3～6) 爪形文や縄文、隆帶上の独特的な刺突文を特徴とする土器である。

3類(Fig.49-3.4) 連続しない「C」字形爪形文を施す。爪形文の幅は(3)が7mm、(4)が8mmと小型であるが、爪形文の中央部が両端部に比して浅くなっている。

4類(Fig.49-5) 羽状縄文を施す土器である。

5類(Fig.49-6) キャリパー形口縁をもつ深鉢の口縁部で、断面三角形の低い隆帶上に、先端をV字形にえぐった半截竹管状工具で密接に刺突文を施す。口縁部内面は肥厚しない。

III群(Fig.49,50-7～33) 地文に、節のあらい縄文や撚糸文を用いる土器群である。

6類(Fig.49-7.8) ゆるい波状を呈するキャリパー形の口縁部(7a)とくびれ部(7b)、および撚りの粗い細目の原体による縄文地をもつキャリパー形口縁部(8)がやや古相を示し、別類とした。(7)は、口縁部端部と隆帶上および胴部のくびれ部に、先端がやや屈曲した棒状の刺突文を密接に施す。施

8. 土 器

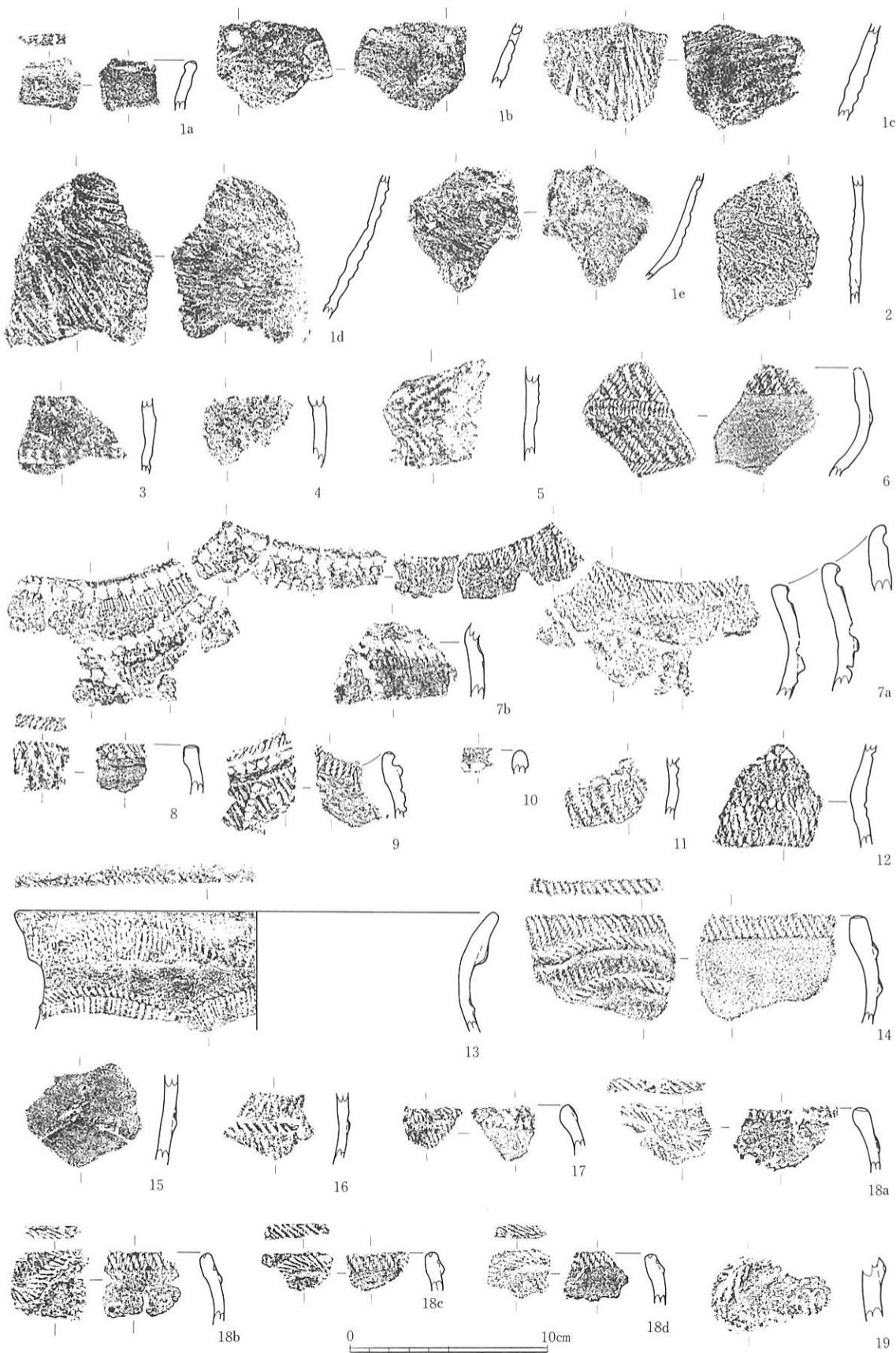


Fig.49 縄文土器 I ~ III群

文具としては二枚貝の腹縁部の可能性がある。この棒状の刺突文は幅が13mm前後と幅広であるが、口縁部端部と隆帶際にそって施される2列の円形刺突文はつながらない。隆帶下には、復元直径12mmの竹管状工具による刺突文が1ヵ所認められる。(8)の口唇部の刻み目は、内外面の繩文施文後、先端をV字形にえぐった半截竹管状工具で口唇部の両端をそれぞれ逆方向に密接に刺突したものである。上から見た場合「Σ」字状になりΣ字状刺突文というべきものか。

7類(Fig.49-9～12) 先端が丸い工具を用いて円形刺突文を連続して施文する土器を一括した。器形がわかる土器片には、ゆるい波状を呈するキャリパー形の口縁部(9)がある。(9)は口唇部に刻み目をもち、口縁部端部には低い隆帶を貼り付け、円形刺突文を施す。隆帶貼付以前に幅16mm以上のやや弯曲する刺突文を施す。この原体もまた二枚貝の腹縁部の可能性がある。

8類(Fig.49-13～19) 刻み目隆帶を施文する土器である。外反する肥厚した口縁部(13)とキャリパー形の口縁部(14.17.18)があり、刻み目隆帶が弧状に巡る。刻み目隆帶は、わずかに盛り上がる程度の低い隆帶としっかりと貼付された隆帶があり、各々次のように分類できる。低い隆帶上に上下二段の刻み目を施すもの(13)、低い隆帶全幅にわたる刻み目を施すもの(15.16.17)、隆帶の主に上半部に刻み目を施し隆帶の下にそって器面をナデるもの(18)、隆帶の上半部のみに刻み目を施し隆帶下半部から器面にかけての部分をナデるもの(14.19)がある。

9類(Fig.50-20～23) 口縁部端部からやや下がったところに隆帶を貼付し、二枚貝の右殻表側殻頂圧痕文を施す土器である。圧痕を観察すると、放射肋上の結節の特徴から、施文具はふねがい科ハイガイ(吉良1989)の若いものである¹⁾。貝殻圧痕文は縦位(21.22.23)と横位(20)がある。口縁部はゆるいキャリパー形を呈するもの(20a.22.23)、外反するもの(21)があり、ゆるいキャリパー形口縁部の土器はくびれ部に繩文原体の末端を用いて施文する(20 b)。(23)は口縁部端部とやや下がったところに2帯高い隆帶を貼付するが、口縁部端部の隆帶は水平部分が剥落し押圧により口縁部が窪む部分にのみ隆帶が残存する。口唇部に刻み目を有する土器は(20)のみであり、施文具は二枚貝である可能性を持つ。隆帶下の施文に着目すると、二枚貝腹縁部を用いて刻み目を施した後に隆帶を貼付するもの(22)、隆帶貼付後に二枚貝腹縁部を用いて隆帶下半部から器面にかけて刻み目を施すもの(21粗.23密)、隆帶貼付後に隆帶自体の下半部を刻むもの(20)がある。

10類(Fig.50-24.25) 押引竹管文を用い、弧文を施文する土器である。ゆるく外反する口縁部(24)とキャリパー形口縁部(25)がある。口縁部はわずかに肥厚し、口唇部には刻み目を施す。

11類(Fig.50-26～30) その他の土器である。口縁部(26)、胴部(27)、底部(28～30)がある。口縁部は直立し口唇部に刻み目を有する。底部は凹底で外反ぎみにたちあがり、底面近くで一度指押さえの後再び外反して立ち上がる。内面はナデ調整である。

12類(Fig.50-31.32) 地文に撚糸文を施す土器である。キャリパー形口縁部をもち、底部はわずかにくぼむ。口唇部はわずかに面をもち刻み目を施すもの(31 a)と、先端部を尖らせやや外反し、内面に刻み目をもつもの(32)がある。文様は、口縁部端部をナデの後列点刺突文を施すもの(31 a)、細い条線で口縁部端部に短いスパンの山形文を描き縦長の3重の紡錘文を描いた後4本の条線で脇に波状文を施すもの(32)がある。

13類(Fig.50-33) 地文や内面文様は磨滅のため不明瞭であるが、沈線文で施文される土器である。キャリパー形口縁部で、波状口縁である可能性をもつ。文様は口縁にそった2本の沈線文間に竹管文を施し、その下部に、おそらく渦文を中心とした左右に展開する文様構成をもつものであろう。

8. 土 器

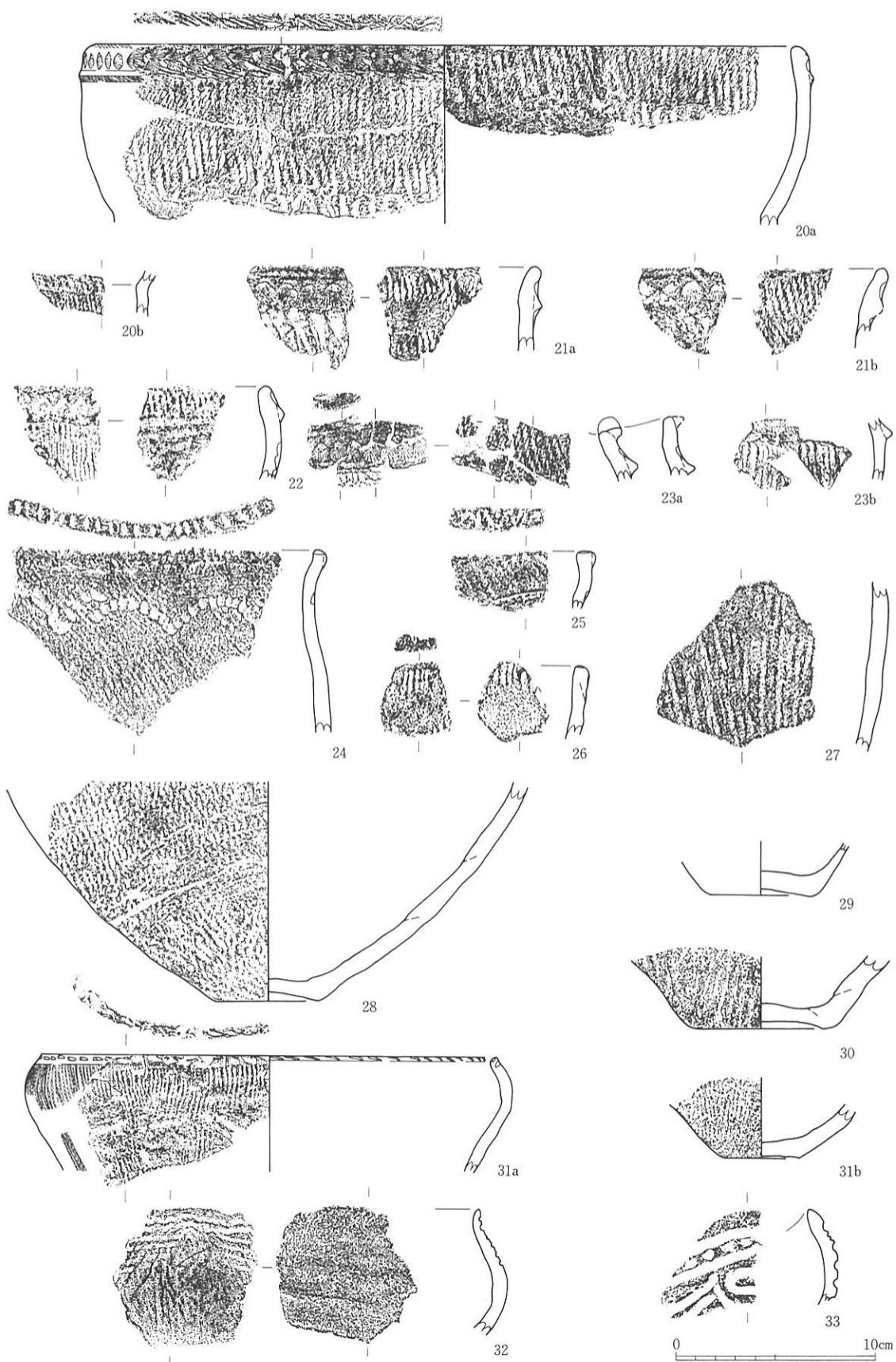


Fig.50 縄文土器 III群

IV群 (Fig.51～64-34～218) 口縁部に横方向、胴部に縦方向の文様を施す土器。深鉢と浅鉢がある。

14類(Fig.51-34～45) 口縁部と胴部を隆帯で区分する土器。隆帯上に縄文を施すもの(34.40.41.44)がある。隆帯を境に「く」の字状に屈曲する口縁(34)、やや内弯する口縁(44.45)、直線的につながる口縁(37.38.39)があり、水平口縁と山形口縁の双方がみられる。口縁部文様は、渦文など中心となる文様とその脇に配される区画文からなり(35.36.37.38.39.44.45)、区画内を磨り消すもの(38.44.45)と磨り消さないもの(35.36.37.39)がある。磨消縄文の区画内には刺突文(38)や横位羽状沈線文(44.45)が描かれる。(44.45)は口縁部と胴部を区画する横位短直線文が描かれ、後述の15、16類との関連が注目される。

15類 (Fig.51-46～48) 隆帯で区分された口縁部に横位の縄文が施される土器である。胴部には縦位縄文間に3本垂下沈線文や蛇行沈線文を施す(46)。多重の横位短直線文(47.48)は(44.45)と同じく、口縁部と胴部を画する文様であろう。

16類 (Fig.52, 53-49～70) 口縁部と胴部を連弧文あるいは波状文で区分する土器である。波状口縁(49.50.52)と水平口縁(51.53～58)の深鉢がある。口縁部文様には、渦文を中心として両脇に区画文を施すもの(49～54)、1～2本の直線文を施すもの(55～58)がある。胴部文様には、2本垂下沈線文間に縦位縄文を施す(49.59)と、縦位縄文のみを施す(54)がある。縄文の施文方法を破片の大きい(49.54.55)からみると、沈線文を描いた後縄文を施す傾向が認められる。縄文を施す際には、(49.55)の場合区画文を避けて横位に縄文をころがすが、施文後区画文内にはみ出した縄文を特に磨り消すことはない。また、(54)の口縁部や(56～58)の連弧文あるいは波状文部では沈線文にそった方向に縄文をころがしており、この場合もやはり施文後特定部位の磨り消しは認められない。特異な縄文としては、縄文が深いものと浅いものが交互に表れる土器(65)があり、注目される。

17類(Fig.53-71～74) 口縁部から一段下がったところに隆帯をもちいて橢円形区画文を施文する土器である。橢円形区画文間が橋状把手となる土器は認められず、突起となる土器のみであり、突起上には円形刺突文が施される(74)。口縁部には横位の縄文を施し橢円形区画文内は、無文のもの(72)と刺突文を施すもの(73.74)があり、隆帯の橢円形の外側に沈線文をめぐらす。胴部には縦方向の曲線になるであろう沈線文の端部のみが認められる(72.74)。

18類(Fig.54-75) 山形口縁と水平口縁が組み合わさった口縁部形態であり、胴部がややくびれた器形をもつ深鉢である。復元できたのは、底部が欠けるものの1個体のみである。したがって、水平口縁を基調とする14類や後述する山形口縁の19～21類のなかでも、完形に復元できた場合本類に含まれる土器があるかもしれない。口縁部は肥厚し胴部と区画され、幅4mmの口唇部には縄文が施される。水平口縁、山形口縁部とともに縄文地に区画文が施され、水平口縁部の区画文内は刺突文が1列施文されるが、山形口縁部の区画文内は無文である。区画文はそれぞれの波頂部の両脇に施されるものであるが、現存する箇所のうち区画文が閉じるところは山形口縁から水平口縁へ移行する部位の1カ所のみであり、他の6カ所は波頂部側が開いている。胴部には口縁部から最大腹径付近まで文様が施文され、胴部最大径より下位は幅6mm前後の籠状原体で左上方に向かってミガキが施される。文様は、山形口縁下に渦文－蛇行沈線文－渦文が施され、その両脇に「J」字文に近い巻きの少ない渦文が配される。水平口縁下の渦文間のスペースには「V」字文の区画文が配され、「J」字文間に下方から上方に向けて刺突文が施される。これら「J」字文、「V」字文ともに肥厚した口縁部下においては沈線文によって区画され、文様帶を明確に分離する意図がうかがわれる。縄文は山形口縁下の渦文－蛇行沈線文－渦文では沈線文にそって、「J」字文、「V」字文では区画内を充填する形で、文様に規制されて施される。「J」字文、

8. 土 器

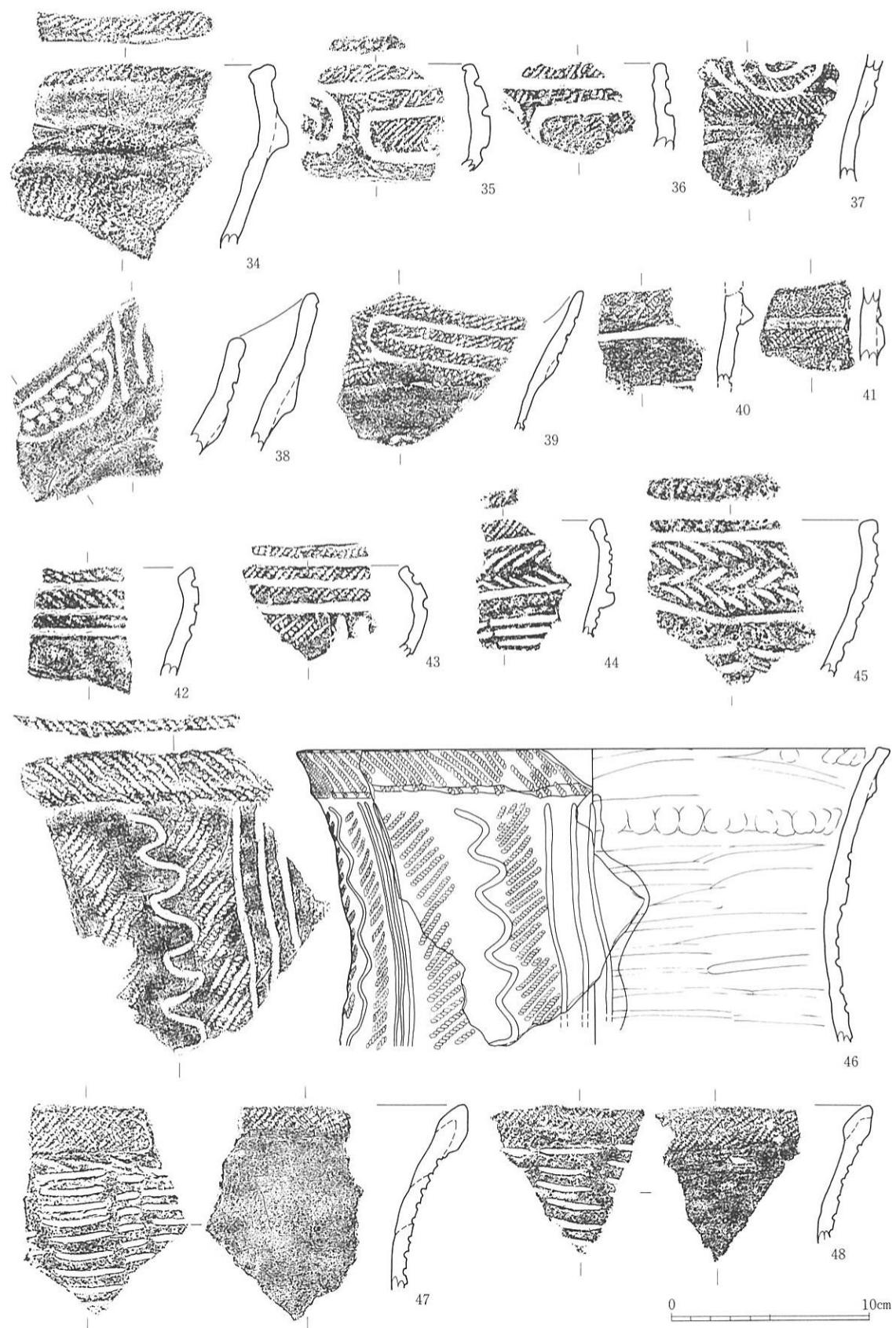


Fig.51 縄文土器 IV群(1)

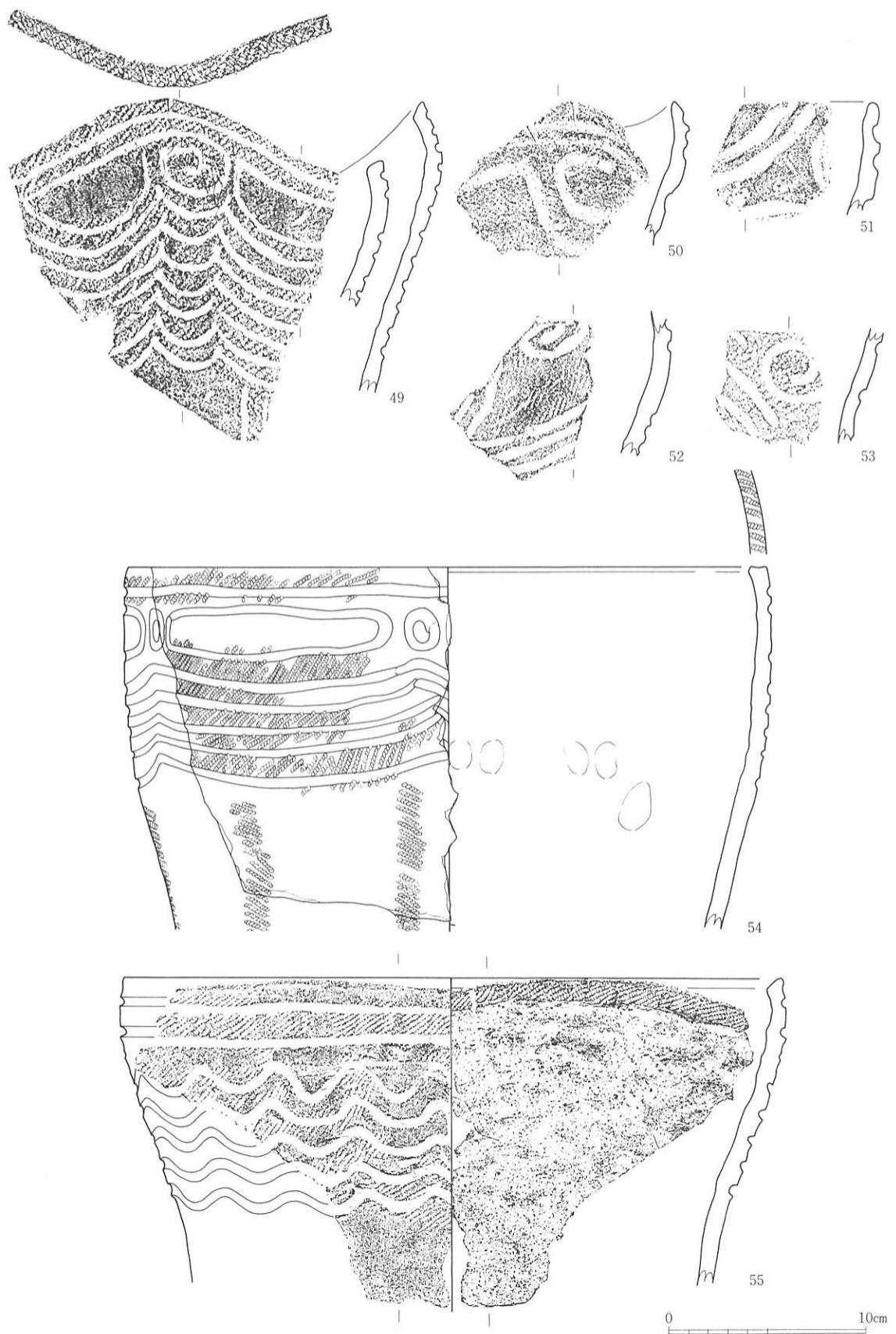


Fig.52 縄文土器 IV群(2)

8. 土 器

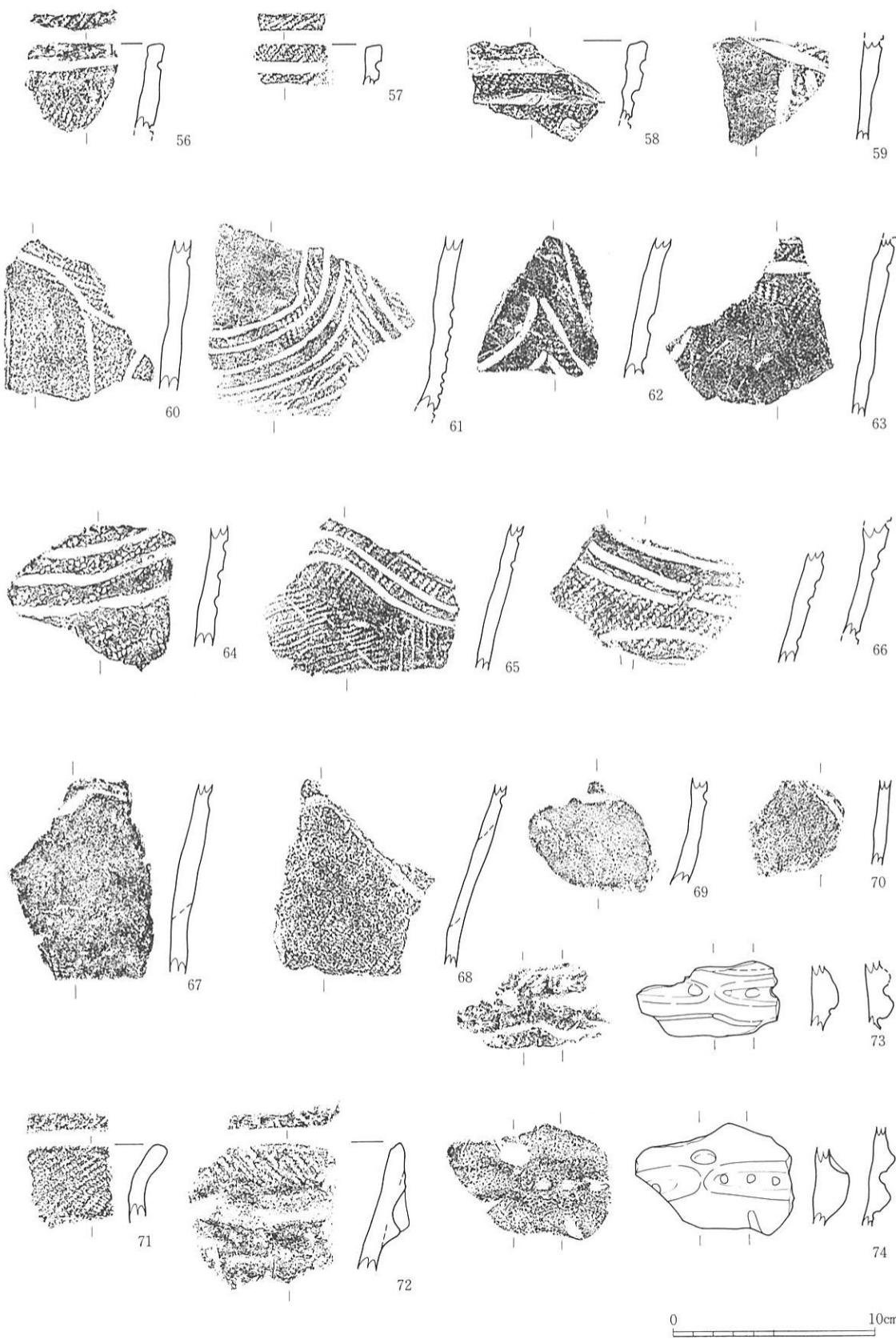


Fig.53 縄文土器 IV群(3)

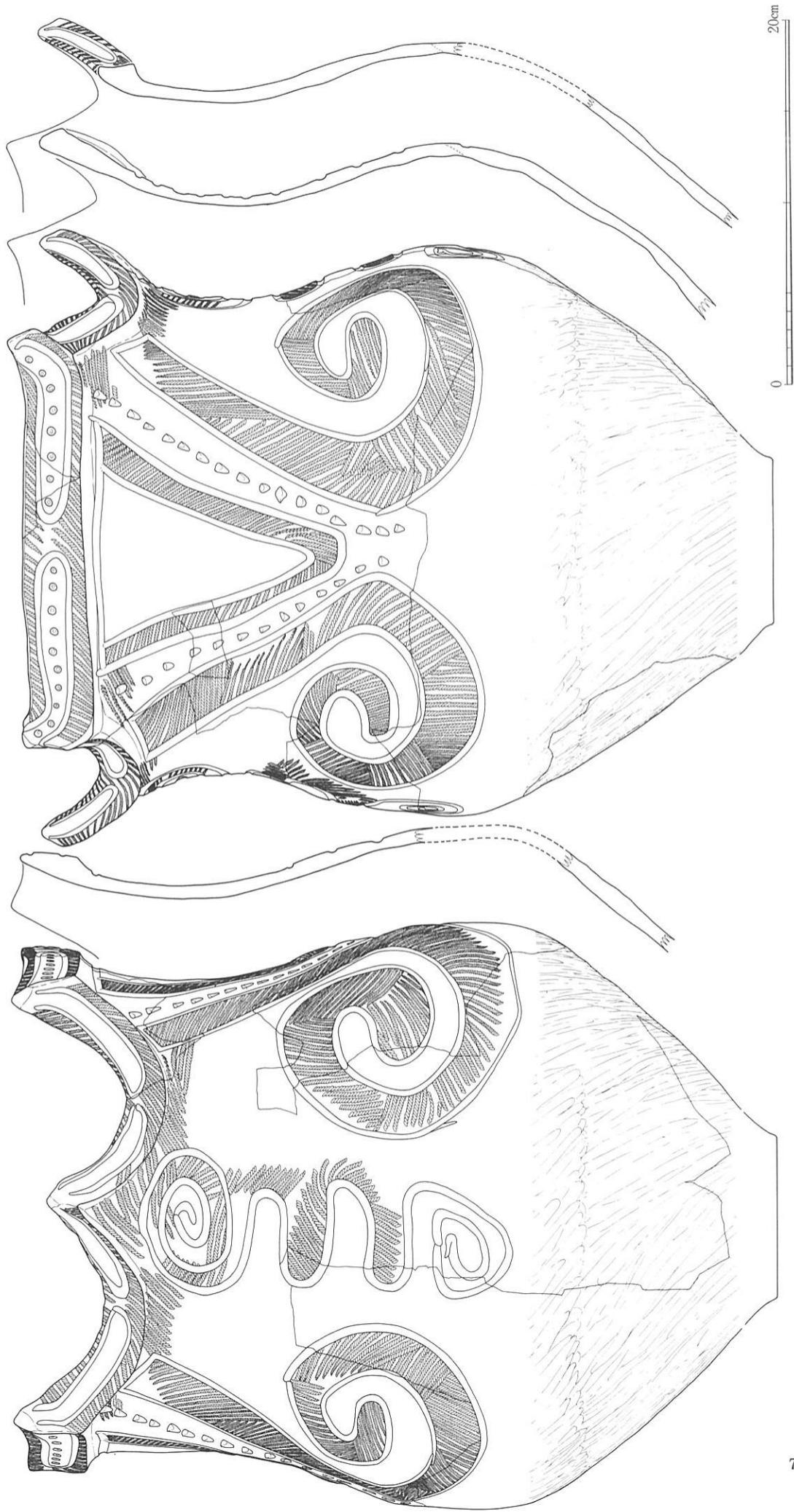


Fig.54 繩文土器 IV群(4)

8. 土器

「V」字文区画内充填では、おそらくはみ出す部分もあったかと思われるが、文様にそって丁寧に磨り消されている。

19類(Fig.55-76～79) 筒状山形口縁をもつ深鉢である。器形は(76)から胴部のくびれがゆるやかな形態が想定できる。筒状部分は把手がつくもの(76)、つかないもの(77.78)があり、同類として空洞部分はないものの頂部が窪むもの(79)も含めた。口縁部内面の文様は縄文のみ(76)と鉤状の沈線文(77)がある。口縁部文様としては波頂部下に渦文を施すもの(76.77)、円形刺突文を施すもの(79)があるが、その下部の文様が明らかな個体は(76)のみである。(76)は、波頂部下に渦文および「S」字文を施しその両脇に区画文を配する。その下部には多重連弧文を用いて文様帯を区画し、縦方向区画文、垂下沈線文と蛇行沈線文を施す。(77)は沈線文のみであり、沈線文部分には細かな条線が走ることから、原体は先端がハケ状あるいは木質の硬質部分が残ったものが想定される。

20類(Fig.55-80～83) 断面台形の突起状山形口縁をもつ深鉢である。口縁部に区画文をもつもの(80.82)と、沈線文のみのもの(81.83)がある。口縁部が肥厚し胴部との間に段差を生じるもの(80.81.82)と、口縁部があまり肥厚せず偏平なもの(83)があり、前者の突起上端は弯曲し、後者の突起上端は水平である。

21類(Fig.56,57-84～102) 波頂部をもつ山形口縁の深鉢である。口縁部が屈曲して面をもつもの(84～93)と屈曲が弱く内弯するもの(94～102)に細分した。

口縁部が屈曲して面をもつもののうち、器形がわかる個体は(84)のみであり、胴部がくびれた形態を示す。口縁部の文様には、区画文をもつもの(84.86.87.90)と沈線文(88.89)、縄文(93)がある。区画文内の文様には刺突文を施すもの(84)、縄文地に区画文を施文するもの(86)、無文(87.90)がある。(85)は口縁部に縄文を施文後、2列の刺突文を上方から施文し、両端を磨り消す。胴部文様は、波頂部下に紡錘文を施しその間に沈線文、区画文を施すもの(84)、区画文を施すもの(86.88)、波頂部下に渦文を施文しその下に区画文を配するもの(93)がある。(93)は口縁部文様が胴部に移動しており、渦文を中心とした左右対象の文様配置ではなく、崩れた意匠を示す。

屈曲が弱まりやや内弯する口縁部には、肥厚する口縁(95.96.98.100.101.102)と、文様帶で区分されるもの(94.97.99)があり、口縁部文様が全面にでてきたものと理解される。口唇部には円形の押圧文(94)、縄文(95.98.99.101.102)が施される。口縁部には区画文(95.96.97.98.99.102)が施される。(97)は残存部より中心の文様が「S」字文と考えられる。(99)は胴部においても渦文とともに区画文が施される。裏面のナデの状態から天地を図のように示したが、渦文が波頂部の中心となる可能性も捨てきれない。

22類(Fig.58,59-103～115) 縄文のみを施文する土器で口縁部に横位縄文帯をもつもの。器形は口縁部が「く」の字形に屈曲する土器(103)が1点ある他は、口縁部がやや外反し、胴部が若干くびれ、最大径が胴部下半にくる深鉢である。ただし、(105)は小型の深鉢であるが、他に比べ胴部最大径の位置が高くなっている。口縁部は隆帶で区画した部分に横位縄文を施すものが多いが、例外として(111)は口縁部全体が肥厚し横位縄文を施すのに対し、(113)は直行する口縁の内外面に横位縄文を施し文様のみで口縁部を区分している。また、口縁部横位縄文は縄文帯の幅が狭いものは一段であるが、隆帶上とその上の口縁部上半に分けて二段に施文される場合が多い(明らかなもので、103.104.110.114)。特異なものとしては、(112)の口縁部縄文帯が縦位縄文を並列して施される。隆帶上に、刺突文が施される土器がある(114.115)。口唇部縄文はほとんどの個体に施されるが、(105)は磨滅が著しく不明である。胴部文様は縦位縄文を施文するもの(103～109.112～115)と無文のもの(110.111)があり、縦位縄文は(104.105)では胴部最大径付近まで垂下する。口縁部が全周できた(104)では、一部復元部分を含むもの

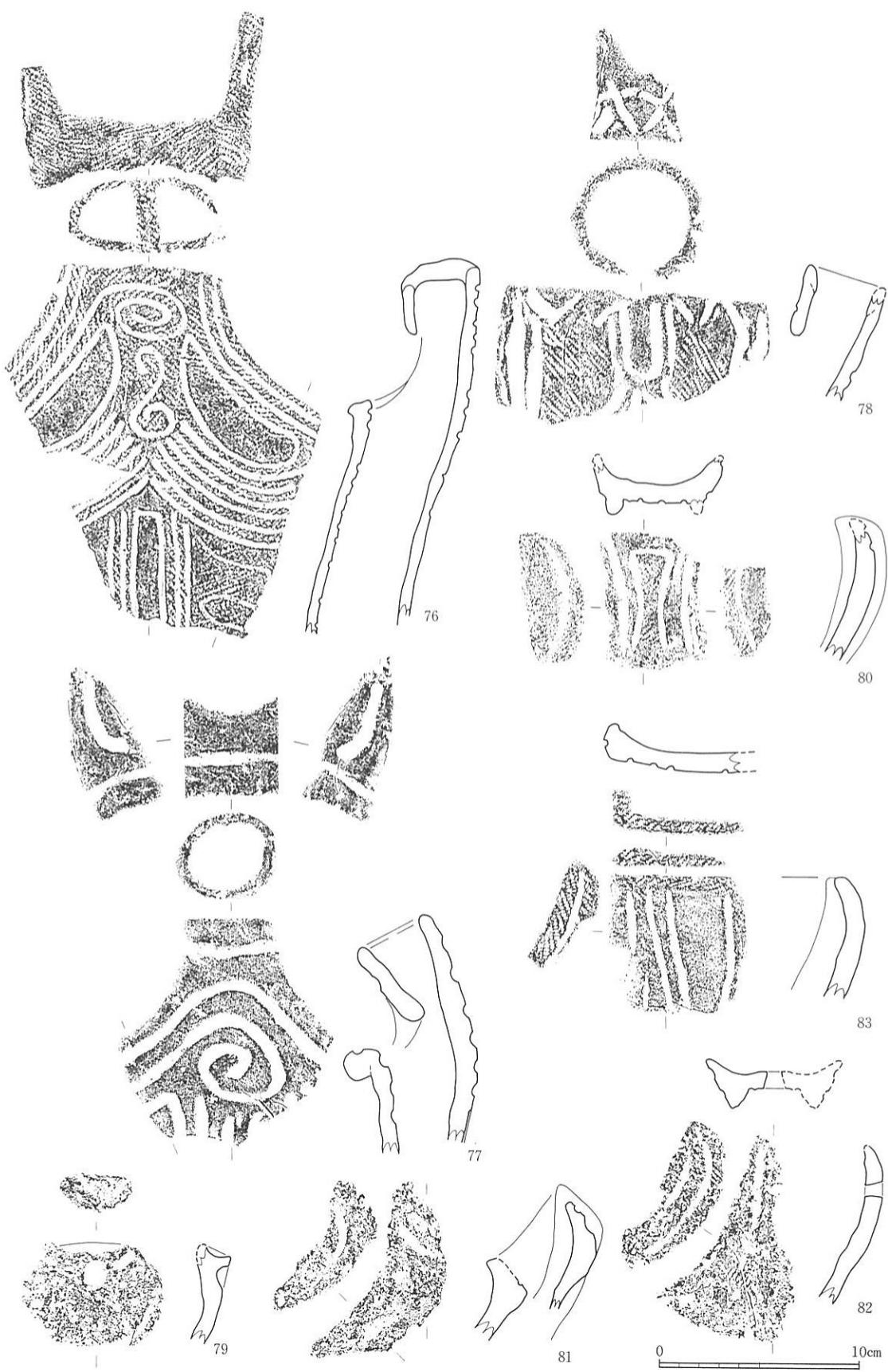


Fig.55 縄文土器 IV群(5)

8. 土 器

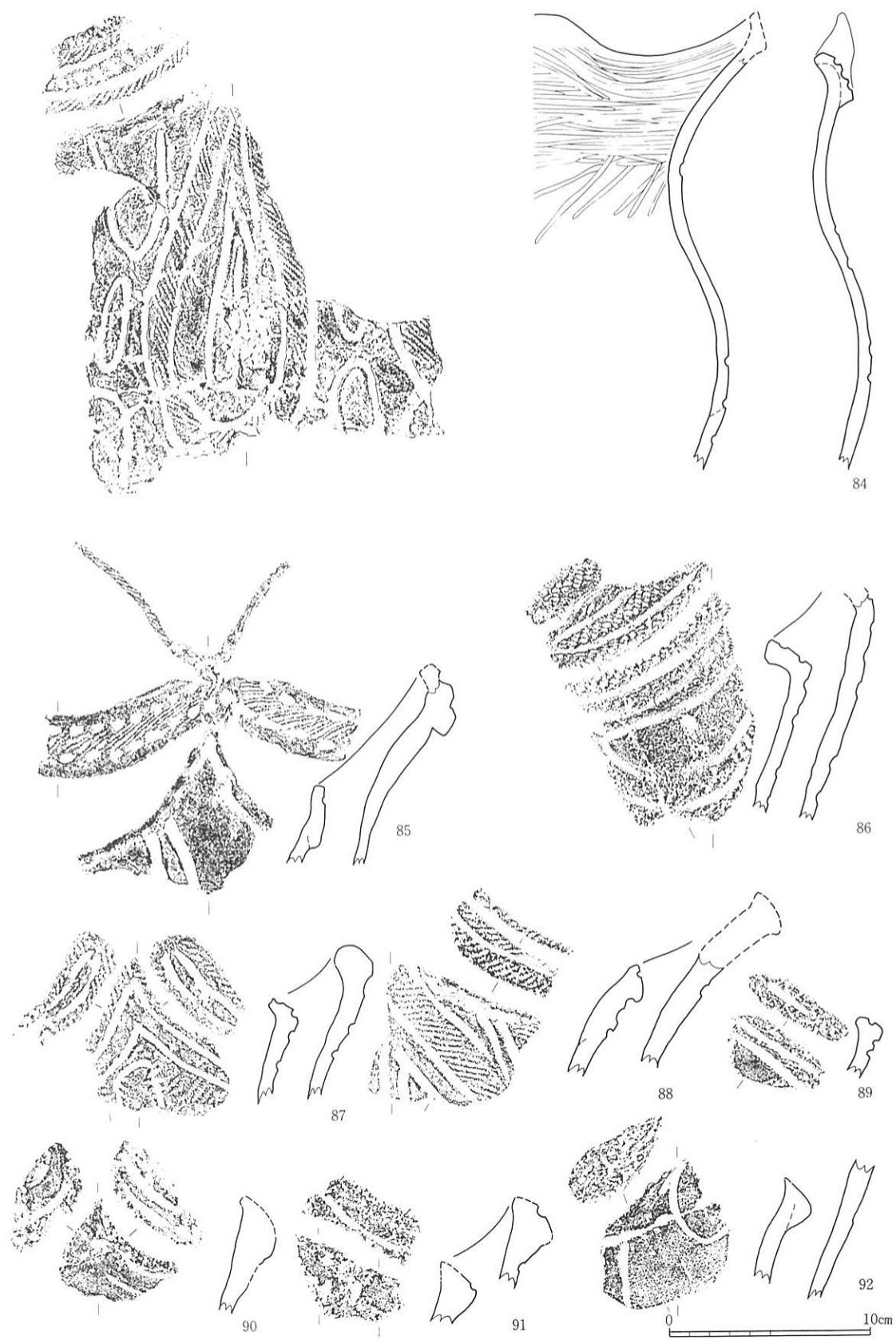


Fig. 56 繩文土器 IV群(6)

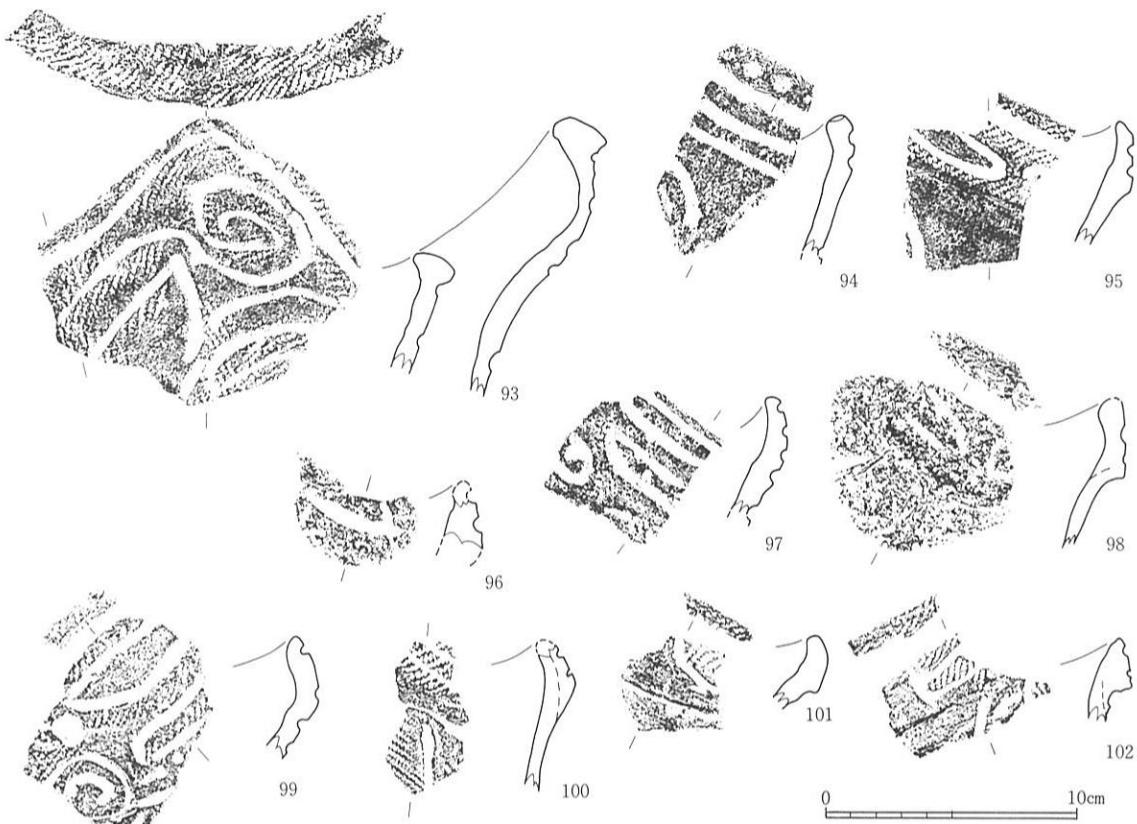


Fig.57 縄文土器 IV群(7)

の15あるいは16条の縦位縄文が施される。縄文は、(105.110)の2点がRL、他は全てLRである。(103)の縄文は条が深浅交互に現れることから、太さの異なる原体を撫り合わせて用いた可能性がある。内面調整は、(111)以外は全てヨコナデである。(111)は口唇部から内面にかけて巻貝条痕が施されることなどから後期に下る土器であろう。

23類(Fig.59-116.117) 縄文のみを施す土器である。両者とも口縁部がやや内弯して立ち上がる。(116)は不定方向に、(117)は横位に縄文を施し一部磨り消す。

24類(Fig.59-118.119) 無文の土器である。口縁部端部から一段下がったところに断面三角形の隆帯を巡らせる。器形はずん胴で、頸部から口縁部にかけてひろがる。口唇部には面をもたない。器面の調整は、外面の頸部がヨコナデ、胴部が幅5～7mmのヘラ状原体による縦方向ミガキ、内面は細かな条線の残るヨコナデである。外面の凹部には煤が残存することから二次的な焼成がうかがえる。

14類～24類の胴部片(Fig.60～63-120～195) 16類を除き、口縁部片以外を一括した。以下のa～j類に細分する。

a類(Fig.60-120～127) 区画文をもつ破片である。(120)が胴部片を含む以外は口縁部から胴部上半の破片である。区画文内は無文のものが多いが、縄文(127)、刺突文(121)が充填されるものもある。(123)の区画内には中途半端に磨り消された縄文が残り、一方区画の端には区画外に施された縄文の端部が磨り消されずに残っている。これより、全面縄文施文後、区画文を描き区画内を磨り消し、その後改めて区画外に縄文を施していることがうかがえる。(120)の胴部片は磨滅著しいものの3本垂下沈線文の下をとおる波状文が認められる。

8. 土 器

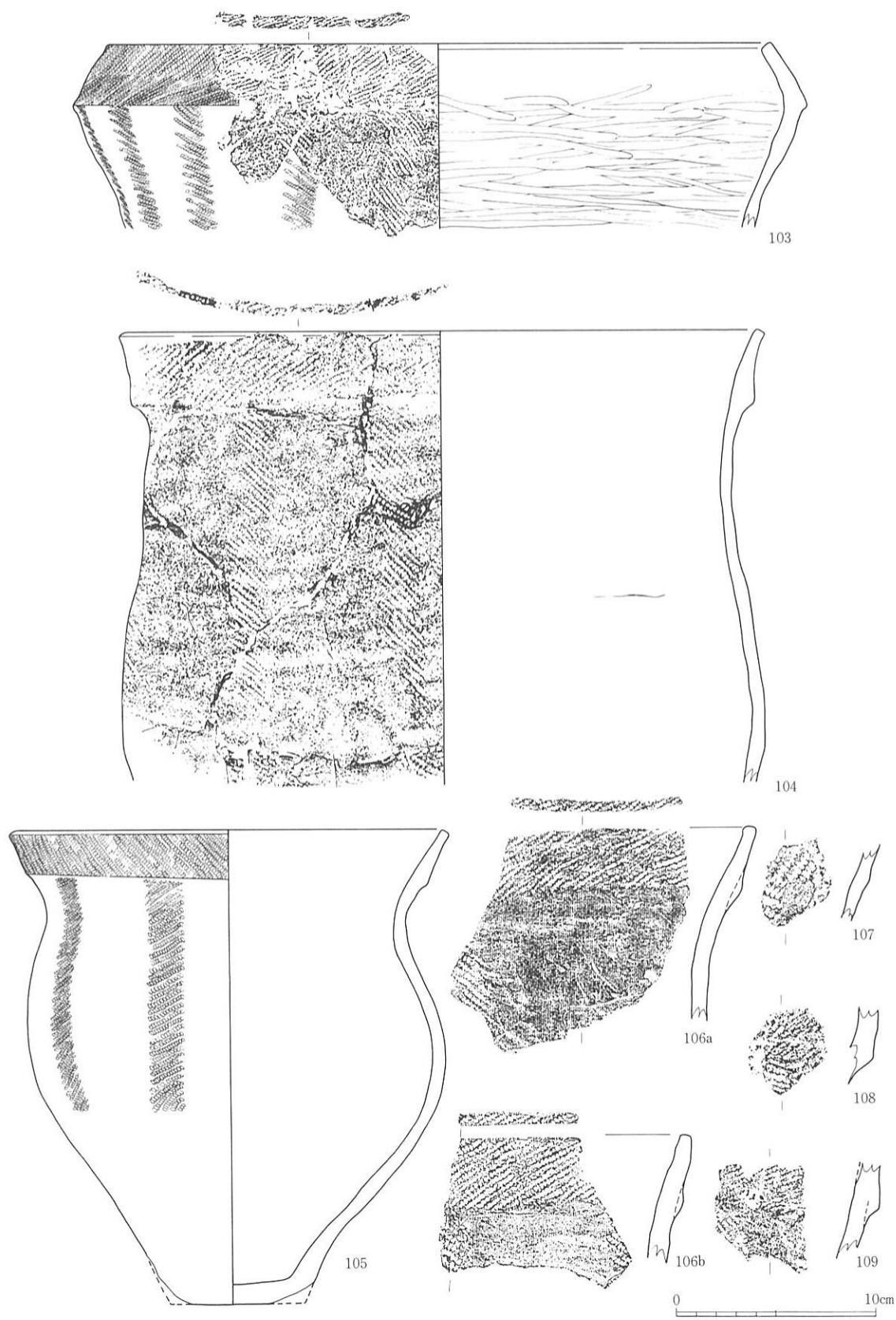


Fig. 58 繩文土器 IV群(8)

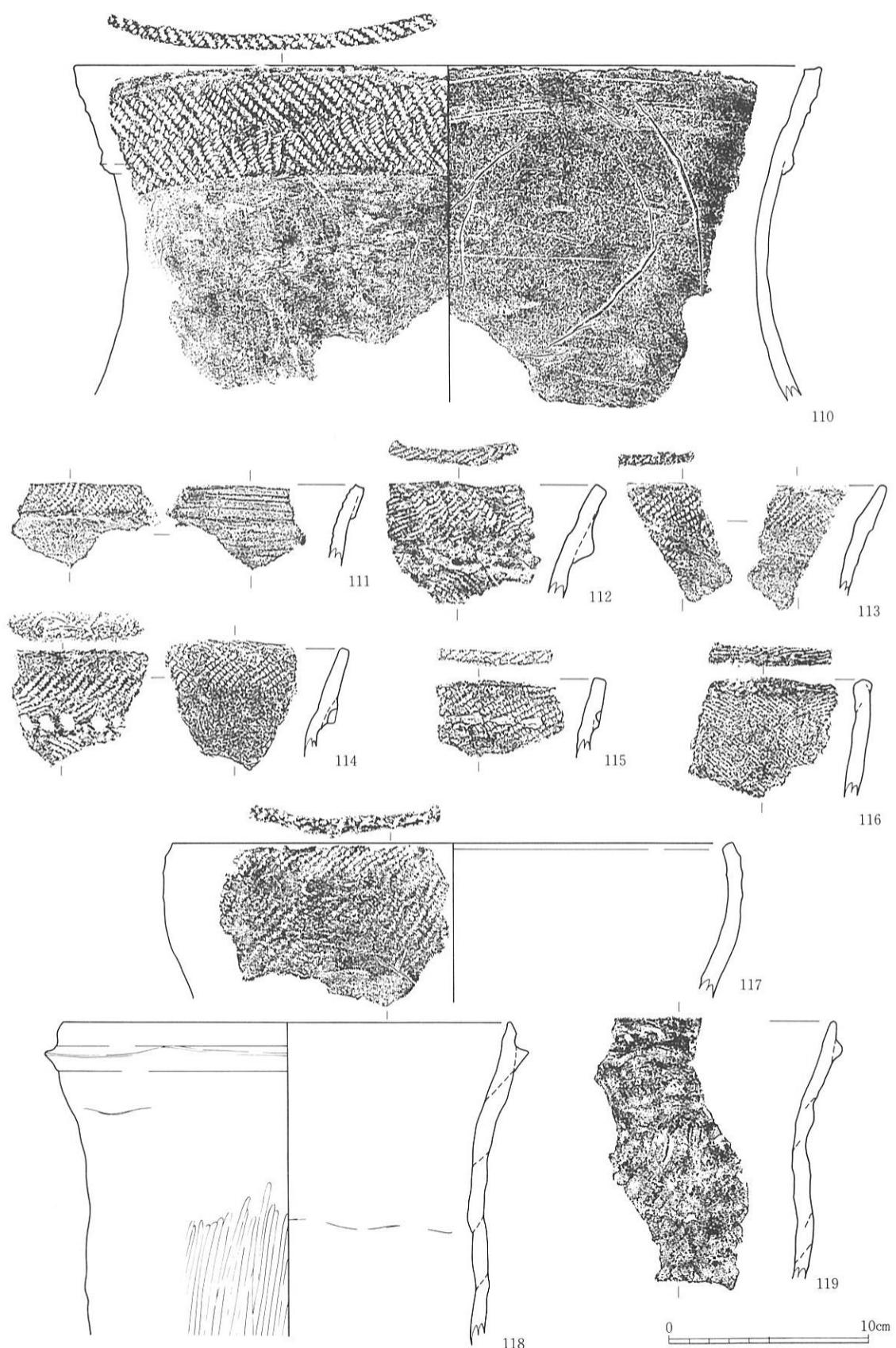


Fig.59 縄文土器 IV群(9)

8. 土 器

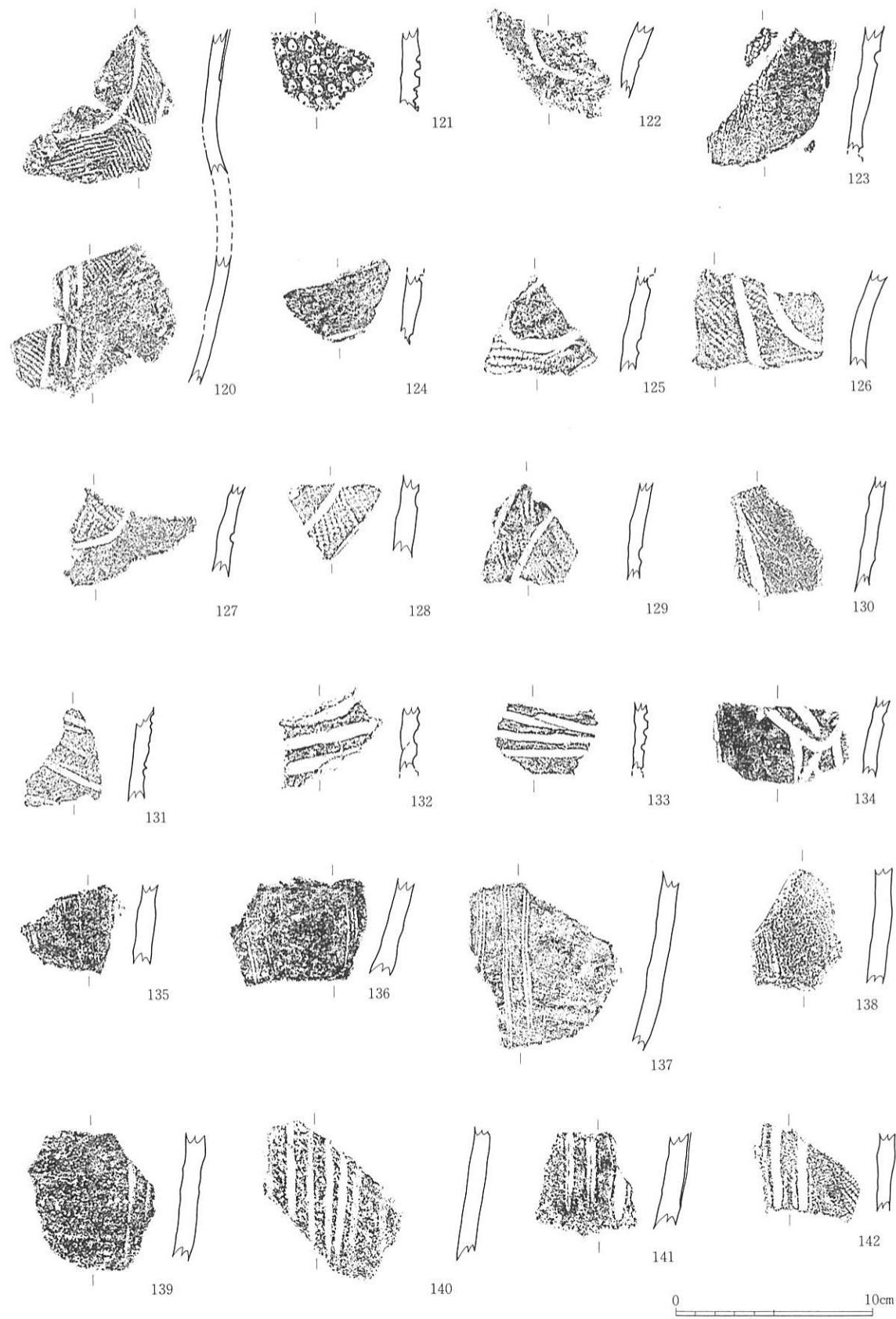


Fig. 60 繩文土器 IV群(10)

b類(Fig.60-128～130) 斜め方向の沈線文と縄文からなる破片である。(128.129)は胴部のくびれ部、(130)は胴部片である。

c類(Fig.60-131～134) 沈線文からなる破片である。(131)の沈線文が浅く細い以外は凹線状の太い沈線で描かれる。(132.133)は16類の多重波状文の一部の可能性があるが、細片で不明のため本類に含めた。(134)は口縁部から胴部の縦方向の文様帶の破片であり、沈線文部分の内面がふくらむ。

d類(Fig.60-135～142) 垂下線を施す土器である。全て胴部片である。(135～137)が垂下条線文、(138～142)が垂下沈線文を施す。垂下条線文は先端が2～3条に割れた原体を用いての浅い施文である。(142)はLR縦位縄文が施される。

e類(Fig.61-143～158) 縦位縄文を施す土器である。(155)がLの無節縄文である以外は、LR縄文が丁寧にナデ調整された器面に施される。(152)はずん胴に近いゆるやかなくびれ部より下半の胴部片であり、縦位縄文がほぼ等間隔に数回に分けて胴部最大径下部付近まで施され、胴部最大径より上部には煤が付着する。無節縄文が施される(155)の胎土は、含まれる岩片種が他の土器片と共通するものの(花崗岩起源)、色調がはだ色(10YR8/3)を呈し明らかに他の土器片と異なる。

f類(Fig.62-159～165) 胴部片で2本の垂下沈線文間に縦位縄文を施す。縄文地に垂下沈線文(165)を施すものも本類に含めた。(159)はゆるやかなくびれ部から胴部にかけての破片であり、2本の垂下沈線文の下端を閉じた区画内に縦位縄文を充填する。胴部最大径より上部には煤が付着する。

g類(Fig.62-166～170) 縦位の楕円形区画文を施すもの。2重あるいは3重以上の楕円形を描くもの(166～169)と、縦位に2つ以上の楕円形を描くもの(170)がある。(166～169)は沈線文間に縄文が充填され、(166)は頂部に刺突文、区画内に縦位沈線文間充填縄文が、(167)は区画内に縦位縄文が施される。(170)の沈線文は先端が割れた原体を用いて施文され、垂下沈線文と区画文間に縄文が施される。

h類(Fig.62-171～176) 紡錘文を一括した。くびれ部(171)から胴部最大径付近の破片があり(174～176)、胴部の張った器形が想定される。(175)は沈線文間充填縄文からなる紡錘文の下に波状文を施し、波状文下から横方向沈線文が伸びる。(176)は紡錘文から直接弧文状に沈線文がのびる。これら波状文下、沈線文や弧文状沈線文は、胴部文様を横方向に連結したものと考えられる。

i類(Fig.63-177～184) 縄文のみを施す。(178)が縦方向主体である以外は横方向主体の縄文である。くびれ部(178.182.184)と胴部最大径付近の破片(177)が含まれる。

j類(Fig.63-185～195) 無文のもの。(186)がくびれ部片である以外は胴部片である。条痕後ナデの可能性をもつもの(185.187.188)や非常に細かい条線が残るナデが施されるもの(189)があり、前者は後期に下る可能性を残す。

IV群その他の器種(Fig.63-196.197) 浅鉢(196)と鉢(197)がある。(196)は口縁部端部がやや内弯ぎみに立ち上がり、無文で丁寧にナデられた土器である。内面の口縁部端部から一段下がったところに凸帯が巡り、橋状把手の退行した無穿孔の突起が付く。(197)は筒状の小型鉢である。全面ナデであり、内外面ともに煤が付着する。特に内面には厚さ1mmの炭化物が厚く付着する。

IV群底部(Fig.64-198～218) 底面からの立ち上がりの角度より、深鉢底部(198～215)と浅鉢底部(216.218)がある。その他小型底部(217)がある。深鉢底部は(198)と(199)が底面から直立して立ち上がる以外は、やや外反ぎみに立ち上がる。なかでも底面直上でくびれるもの(200.203.208～210.212.213)が多く後期的な特徴をみせる。(203)は剝離痕が明瞭であり、輪台状もしくは中央の窪んだ円盤状の底部からの成形開始がうかがわれる。浅鉢底部のうち(216)は残存部上端においてやや内側に屈曲する。

8. 土 器

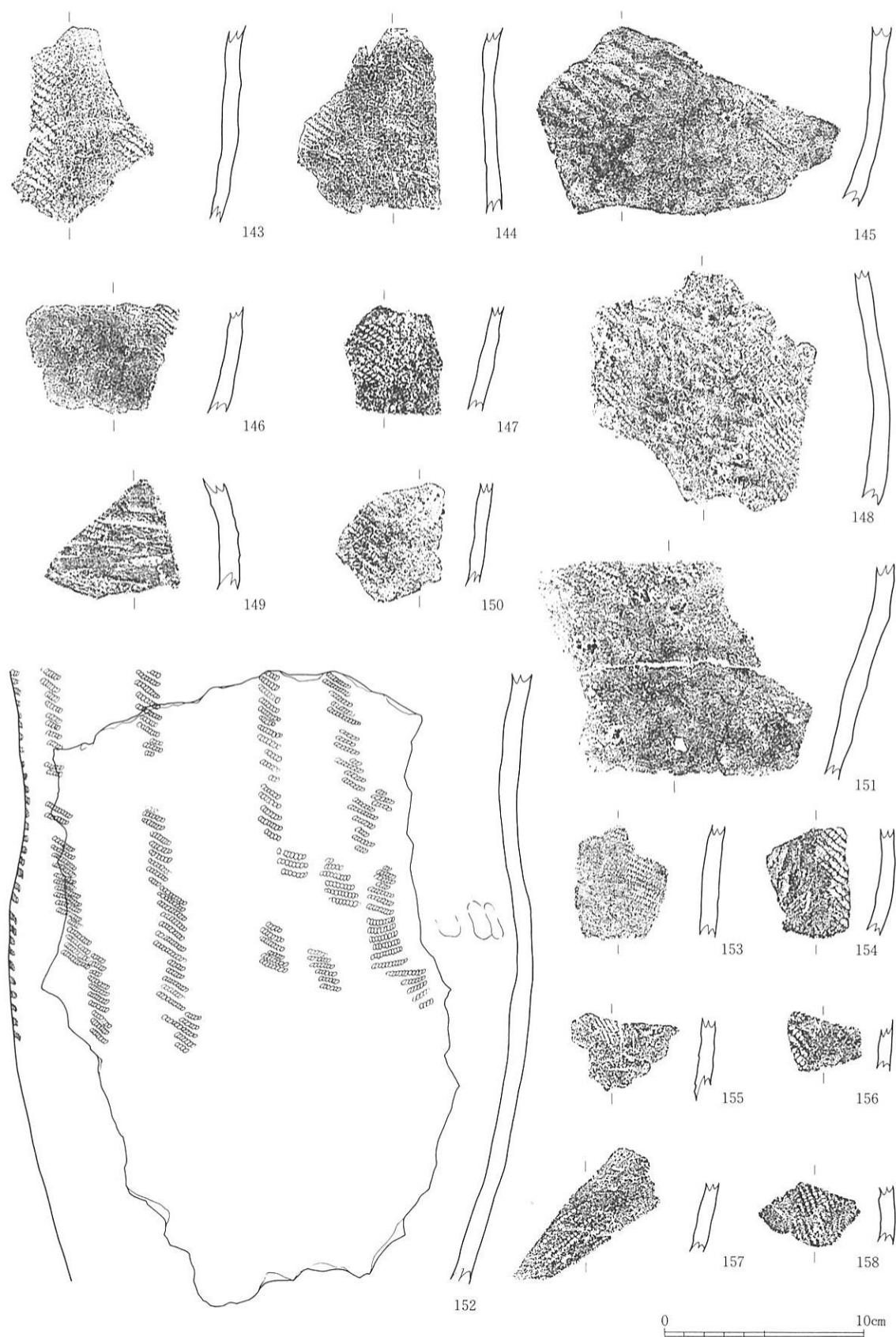


Fig. 61 繩文土器 IV群(11)

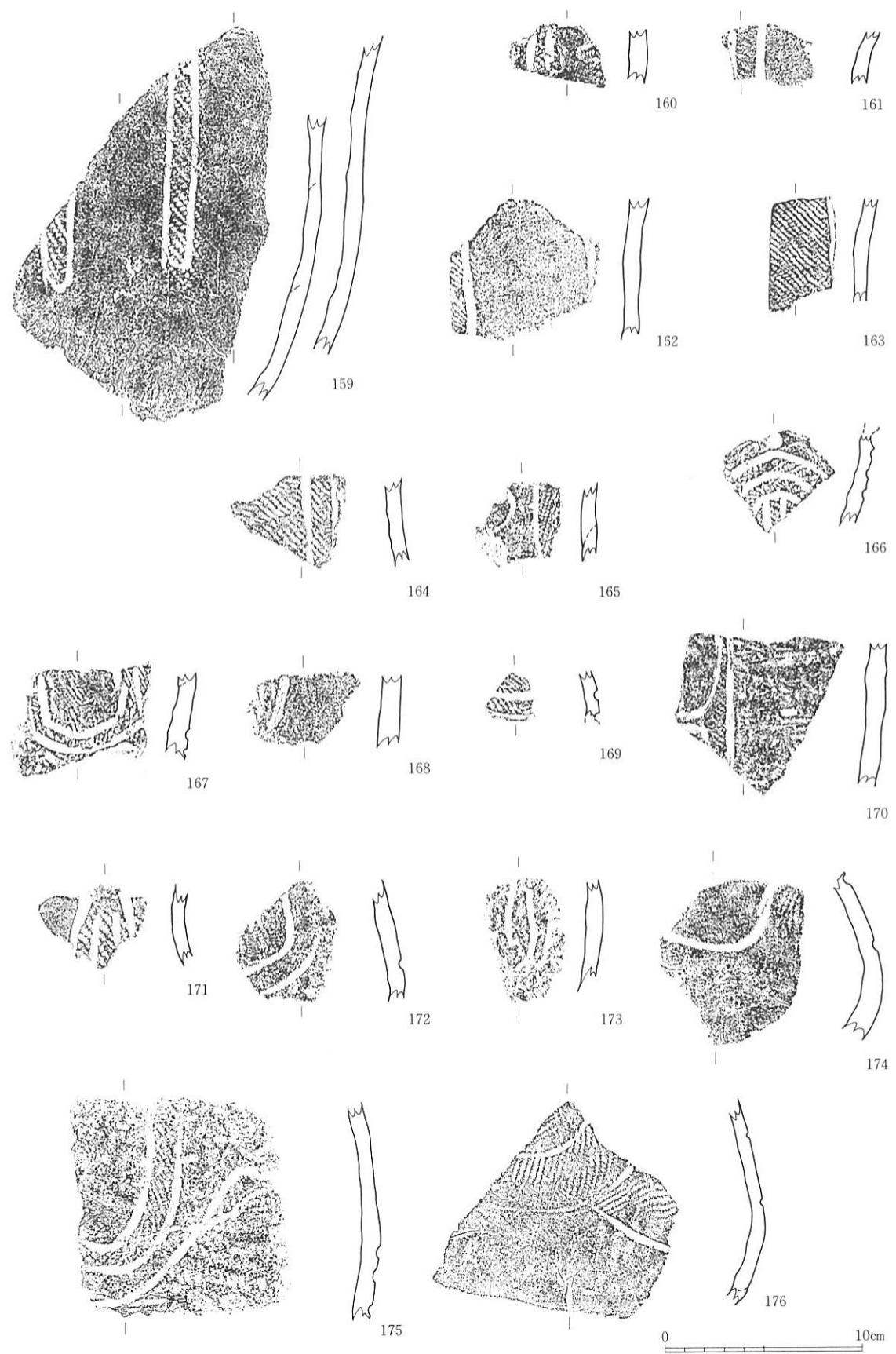


Fig. 62 縄文土器 IV群(12)

8. 土 器

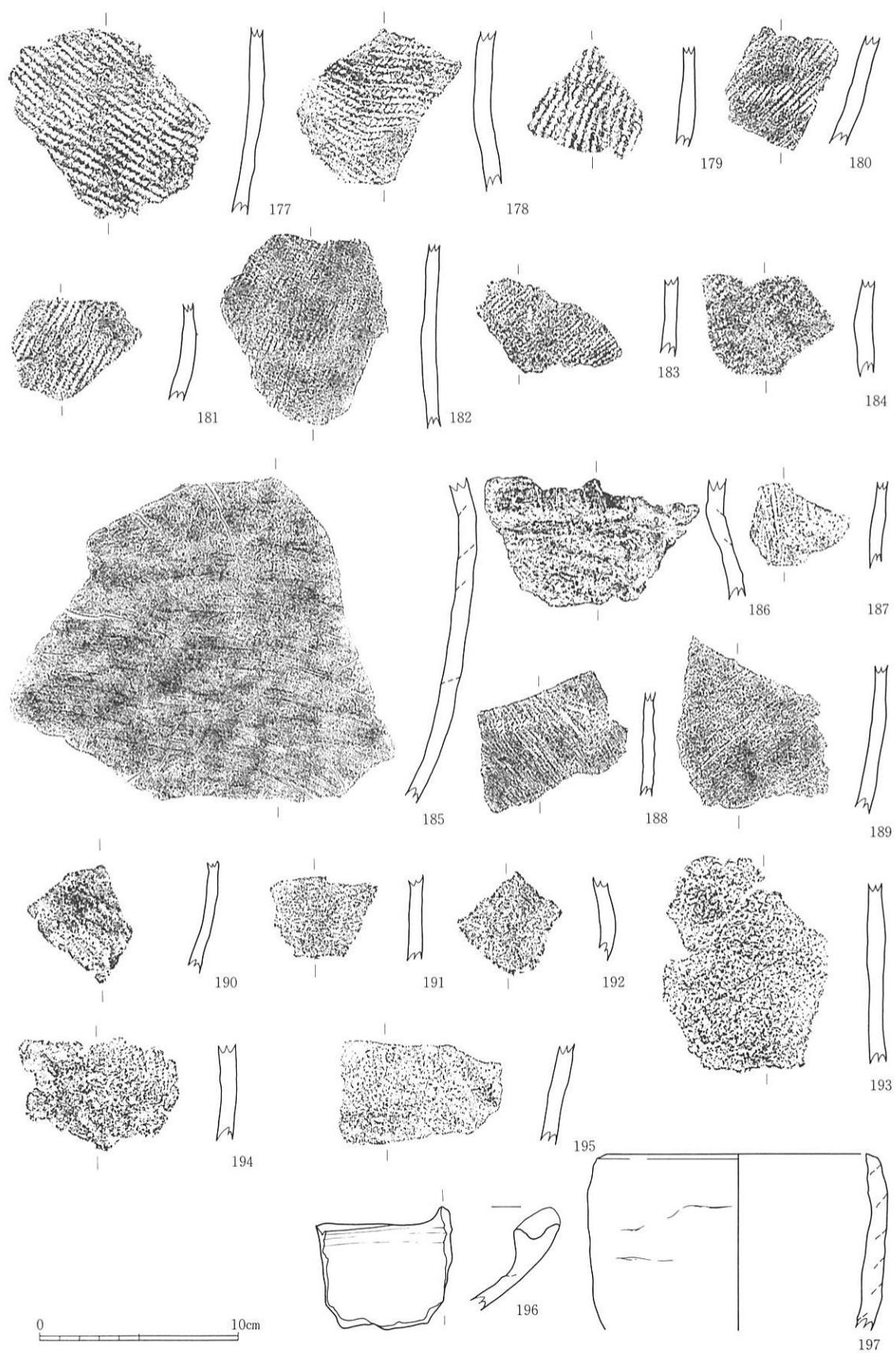


Fig. 63 繩文土器 IV群(13)

V群(Fig.65～67-219～246) 磨消縄文を用いて器面を飾る土器である。

25類(Fig.65,66-219～235) 深鉢は器壁の薄い突起状山形口縁(219)、口縁部端部が内面に肥厚したり屈曲する波状口縁(220.221.222.223.224.227?)のものがあり、口縁部から胴部にかけての細片が多いもののゆるやかなくびれ部をもつ器形が想定できる。口縁部文様は、波頂部にまで沈線文がおよばず口縁部端部に縄文帯をもつもの(222)、波頂部に沈線文を施し口縁部端部から無文部をはさんで区画文に移行するもの(220.221?.223.224.227)がある。(224)は無文部と区画文間に2条の短直線文を施す。胴部文様は「J」字文(220.225)、「H」字形の区画文(229)と縦位沈線文間充填縄文が組み合わさった文様がある。(220)は「J」字文の先端が平坦であり、鉤形の無文部の意匠を先に描いた後縄文を充填した印象を受ける。これは「J」字文先端を描き直している点からも注目される。縄文は(227.229)がRL以外はLRである。特異な文様では条線文(223)、先の割れた原体を用いての曲線文(230)があげられる。

26類(Fig.66-236～241) 無文土器である。深鉢(236～238)と浅鉢(239～241)がある。深鉢の口縁部は直口するもの(236.238)とやや外反するもの(237)がある。端部は丸くおさめられ、(236)の口唇部は両面から節の細かい縄文が施され、擬縄文の可能性がある。浅鉢の口縁部はやや内弯するもの(239)と直口するもの(240.241)がある。口唇部には斜めに刻み目を刺突するもの(240)、直角に浅い直線的な刻みを施すもの(241)がある。調整はナデ(236.240)、条痕(238.239)、条痕後ナデ?(237)であり、(240)の調整は磨滅のため不明である。

V群その他の器種 (Fig.67-242～246) 鉢(242.246)、壺(243)、双耳壺(244)、浅鉢(245)がある。

鉢(242)は口縁部が内弯してたちあがり、水平口縁である。口縁部端部に縄文帯を巡らし、太く浅い凹線文による垂下する「J」字文が認められる。主に外面より穿孔した補修孔があり、内面には未穿孔の孔が残る。鉢(246)は約5mmの比高差をもつ山形口縁であり、復元形は頂部が2ヶ所対面する形態と推定される。屈曲する口縁部と胴部くびれ部の、沈線文のあいだに刺突文をもち充填縄文を施す文様帯をもつ。胴部くびれ部の沈線文の間隔は頂部下に向けて幅を減ずる。頂部下には両面穿孔の補修孔が1ヶ所ある。胎土には長片5mm～10mmの砂岩片が多く含まれることが特筆される。

壺(243)はゆるやかな波状口縁であり、直口ぎみの口縁部と肩から直線的に張り出す胴部をもつ。口縁部から一段下がったところに隆帯が巡り、胴部文様は二重の逆「U」字文を描くものである。波状口縁の波底部下に胴部逆「U」字文の垂下沈線文が4本集合し、その上部隆帯は突起状に残る。磨滅が著しく不明瞭であるが、沈線文間に縄文施文の可能性がある。双耳壺(244)は底部から肩部にかけて残存し、平面橢円形で長径の胴部最大径付近に上下に穿孔された把手状のつまみが付く。把手を中心に対称に「H」字形の沈線文間充填縄文を配置し、肩部には曲線状の沈線文間充填縄文が一部残る。器面は丁寧にミガキを施し内面は指押さえ+ナデで仕上げられる。

浅鉢(245)はやや外反して立ち上がり、水平口縁にわずかにつまみ上げられた突起が貼付され、継ぎ目が明瞭に残る。文様は口唇部に縄文地に刺突文、外面には突起下に渦文を配し、その脇に上端が閉じられた縦位の区画内充填縄文が施される。

VI群(Fig.68-247) 上端が肥厚し、拡大した口縁部をもつ土器である。

27類(Fig.68-247) 口縁部のみで、外側の把手状の肥厚した部分の内外面に刺突文を施す。磨滅著しいものの口縁部端部に刻み目、口縁部内側に1条沈線文が認められる。

8. 土 器

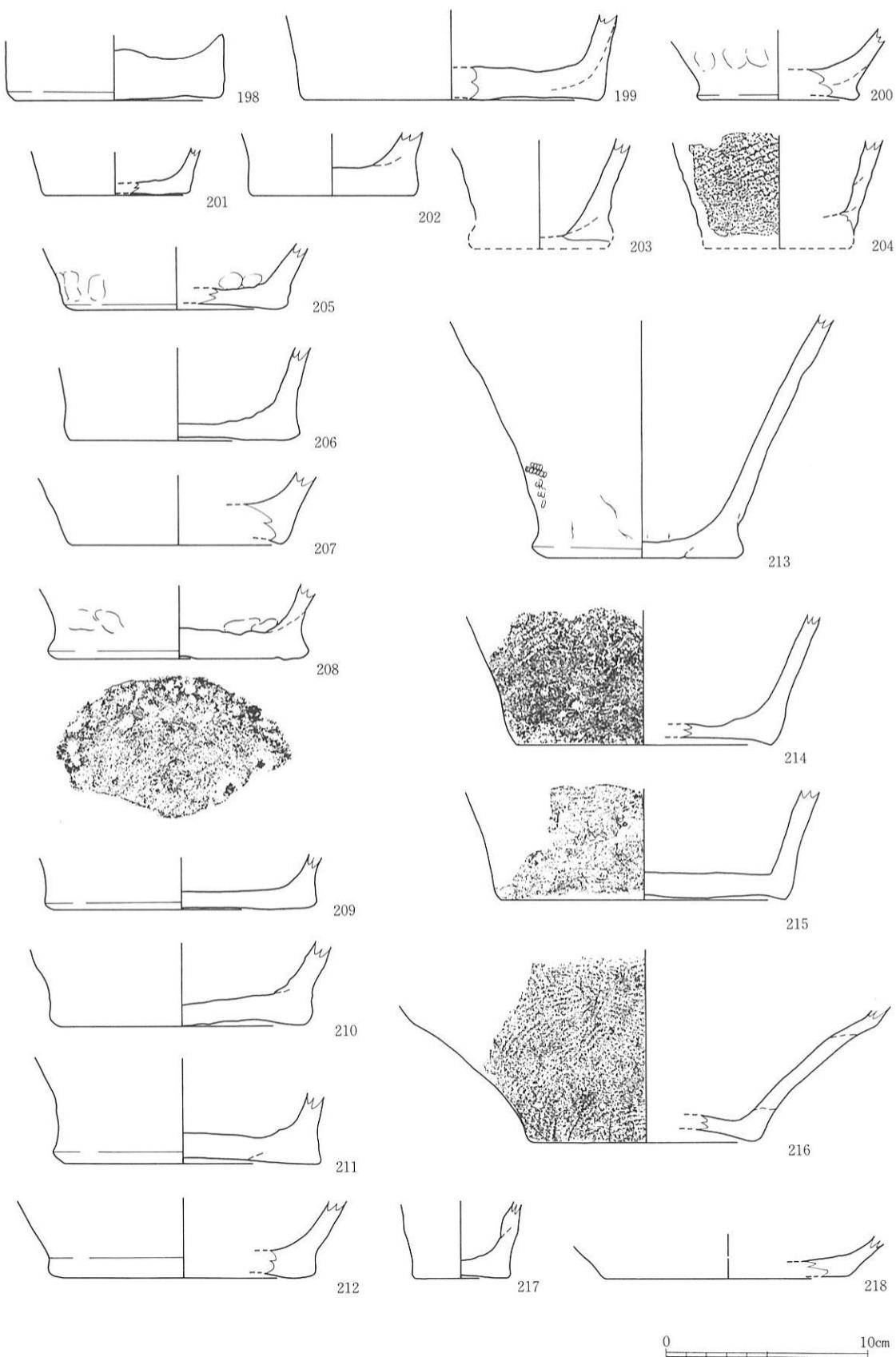


Fig. 64 繩文土器 IV群(14)

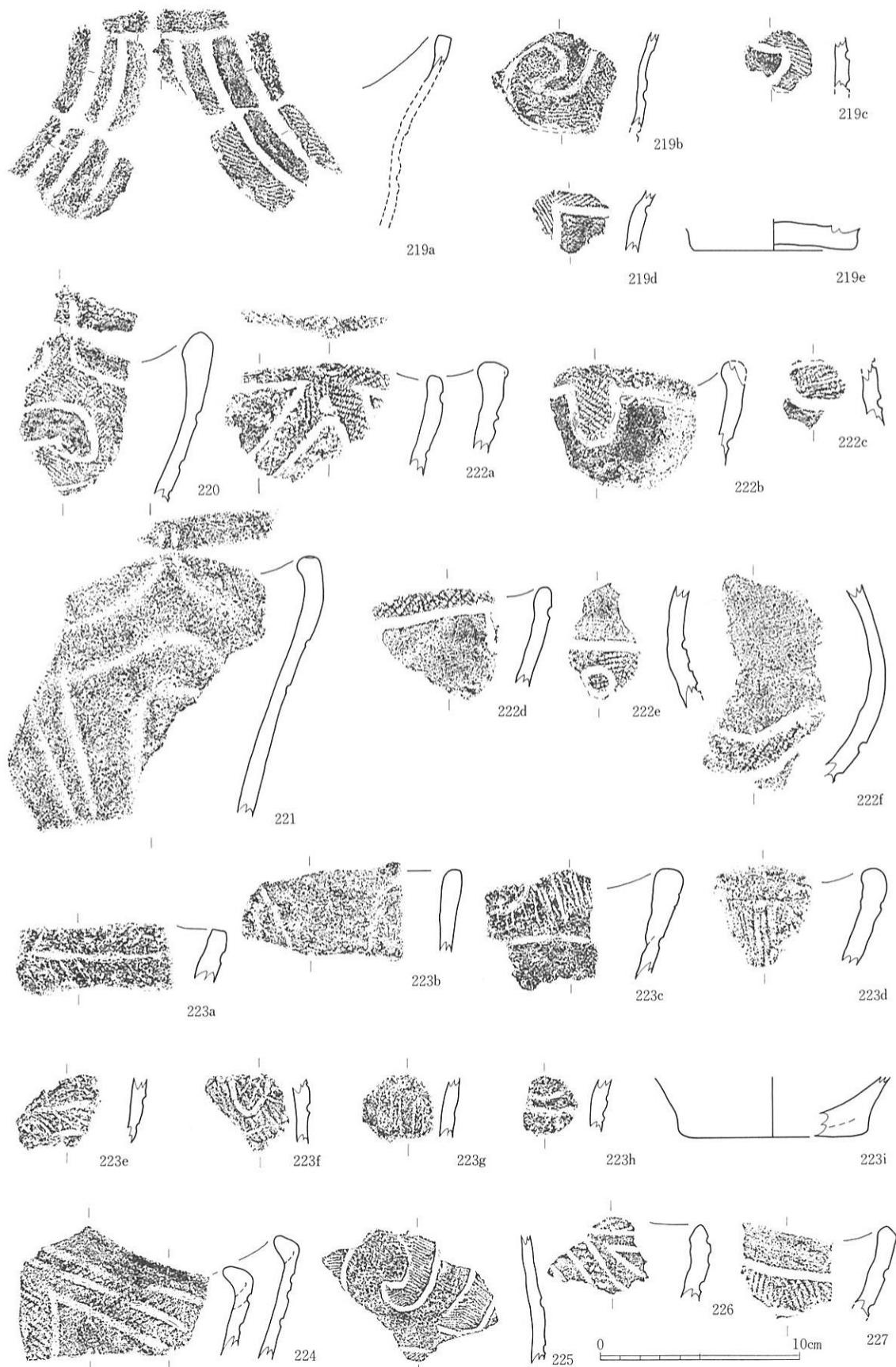


Fig. 65 繩文土器 V群(1)

8. 土 器

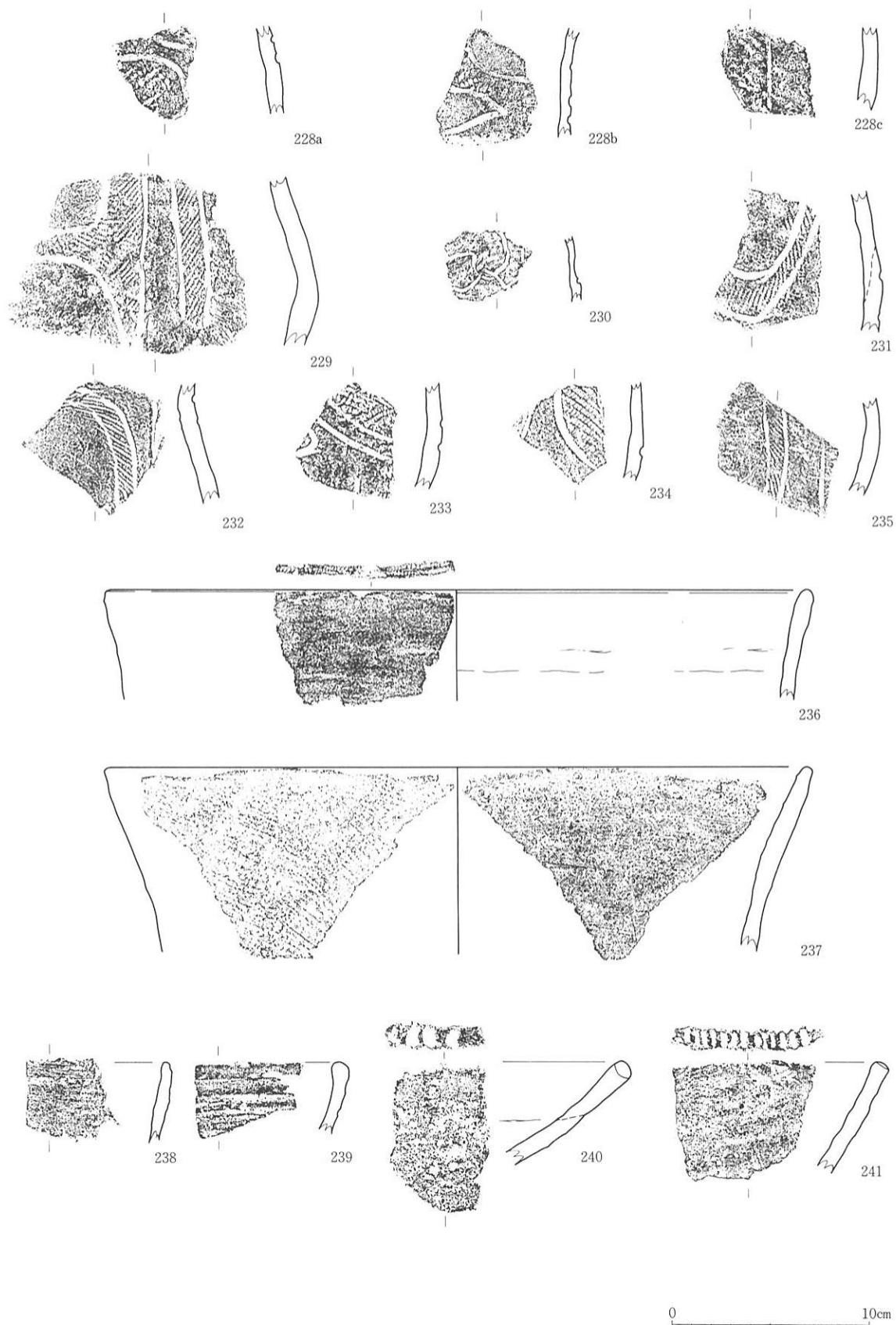
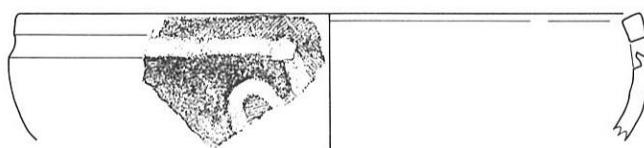
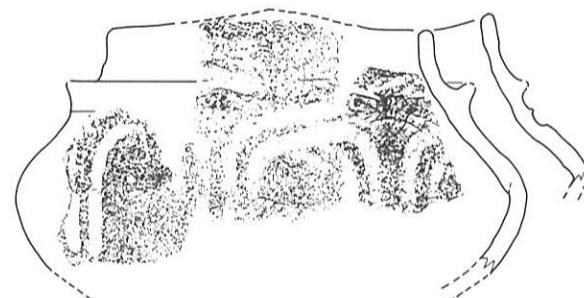


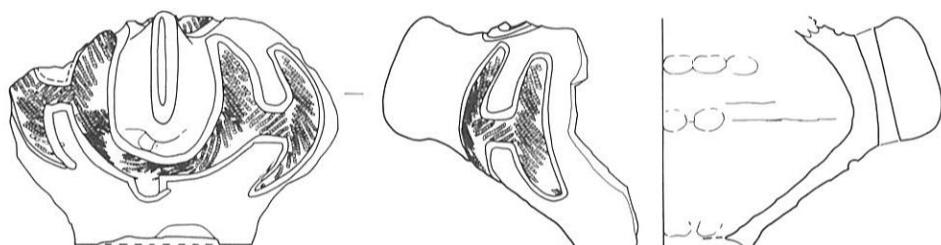
Fig. 66 繩文土器 V群(2)



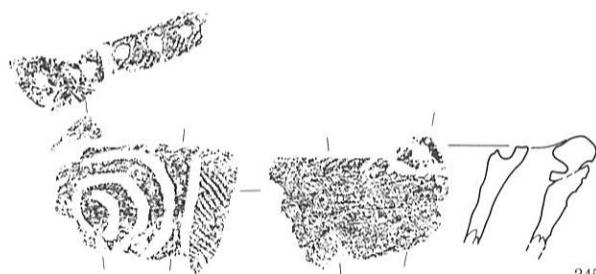
242



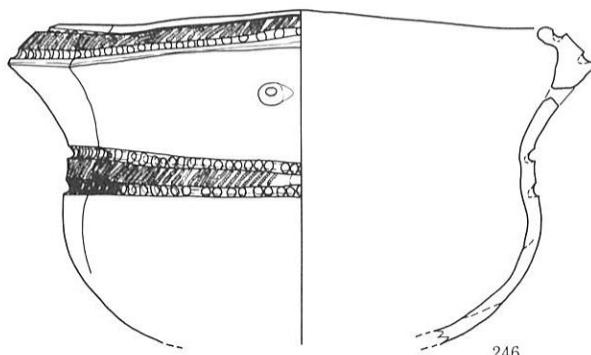
243



244



245



246



Fig.67 縄文土器 V群(3)

8. 土器

VII群(Fig.68-248～264, Fig.70-276～280) いわゆる縁帶文土器のうち、遺物集中区出土以外のものである。28類(Fig.68-248～255, Fig.70-276～280) 口縁部、頸部、胴部の3帯に区分される文様帶をもつ土器である。磨消繩文または多条の沈線文で施文される。部位の明瞭なものには、口縁部(249a.277)、頸部(254)、胴部(250～252)がある。文様は磨消繩文を用いた「J」字文(248.249)、2～3本の沈線文による磨消繩文帯を用いた三角形文(250)、3本沈線文による曲線文や紡錘文(251.252)、垂下条線文、(254.255.277)がある。(249)は、胎土に微細な長石が多く含まれる点が特徴的であり、赤彩が一部残る。29類(Fig.68-256～264) 深鉢(256～262)と浅鉢(263.264)と考えられる土器がある。深鉢は(261)が頸部からやや外反ぎみにたちあがる以外は直口口縁である。端部は丸くおさめられるものが多いが、肥厚するもの(259)、やや面をもつもの(260)がある。(256.257)はヘナタリによる擬繩文で、(258)が巻貝条痕で調整される以外はナデである。(263.264)は口縁部がやや内弯ぎみにたちあがり浅鉢の可能性がある。口唇部は丸くおさめられる。内面は丁寧なナデを施す。

VIII群(Fig.69～77-265～275, 281～400) いわゆる縁帶文土器のうち、遺物集中区出土のもの。頸部無文の土器が多く、胴部文様に3本以上の沈線文を用いた磨消繩文を多用することで特徴付けられる。

30類(Fig.69-267, Fig.71-281～309) 口縁部端部が肥厚または口縁部外面に段をもつものである。口縁部や胴部外面に沈線文や磨消繩文を施文する深鉢である。口縁部文様は、繩文地に区画文が退行した沈線文とそれを縦に区切る沈線文からなるもの(267)、同心円状の渦文(281)、複合鋸歯文(286～288)がある。数少ない頸部文様には纖維束原体による垂下条線文(267)と蛇行沈線文(284)がある。胴部文様は格子文や最多4条以上の帯状磨消繩文が施され、前者は繩文地の可能性がある。後者の沈線文間幅は9～10mmと4～5mmの二者がある。

31類(Fig.70-270, Fig.72-310～328) 口縁部内面に施文する深鉢である。口縁部は外反し、(310)が波状口縁である以外は水平口縁である。(310)は波頂部に刻み目を施しその下部を半円状にナデを施す。その他水平口縁土器の文様は、繩文(270)、沈線文内刺突文(311)、刺突文(313)、1～3本沈線文による渦文(315)や曲線文、直線文であり、沈線文間に充填繩文を施す土器(317.318.319)もある。

32類(Fig.73-329.330) 直立し外に開く口縁部をもつ。堀之内系の朝顔形深鉢と考えられる。口唇部は内側にわずかに屈曲するもの(329)、丸くおさまるもの(330)がある。文様は細片のため不明瞭であるが、(329)は「J」字文、「H」字形から磨消繩文帯を用いての三角形文と思われる。(330)は沈線文内刺突文が口縁部端部から一段下がったところに巡り、巻貝条痕地に「8」の字形文が施文される。

33類(Fig.69-265.266, Fig.70-269, Fig.74-331～342) 口縁部と胴部に繩文を施す深鉢である。口縁部は帯状に肥厚するもの(331.332)、端部がわずかに肥厚するもの(333～335)があり、後者はやや外反する。頸部と胴部の区分は1本の沈線文(336.337)、段(339.340)、文様による区分(341)がある。(340)が羽状繩文である以外は斜行繩文である。(331)の内面調整は横方向条痕による。

34類(Fig.69-268, Fig.74-343～347) 条線文を施す土器である。(268)は復元胴部最大径42cmを測る大型の深鉢である。頸部と胴部の境はゆるく屈曲するのみで、沈線文、段などは認められない。条線文を施す胴部のみの残存のため本類に含めたが、30類または31類の胴部である可能性を残す。条線文は、ヘラ状原体による器面の調整後シャープな3本単位の原体を用いての縦方向施文(268)、3～8本単位原体を用いての縦および斜方向施文(344～347)と浅く密な10本以上単位の不定方向施文があり、前者は先が割れた原体、後者は板状原体を用いての櫛描条線文である。(343)には刺突文が施される。内面調

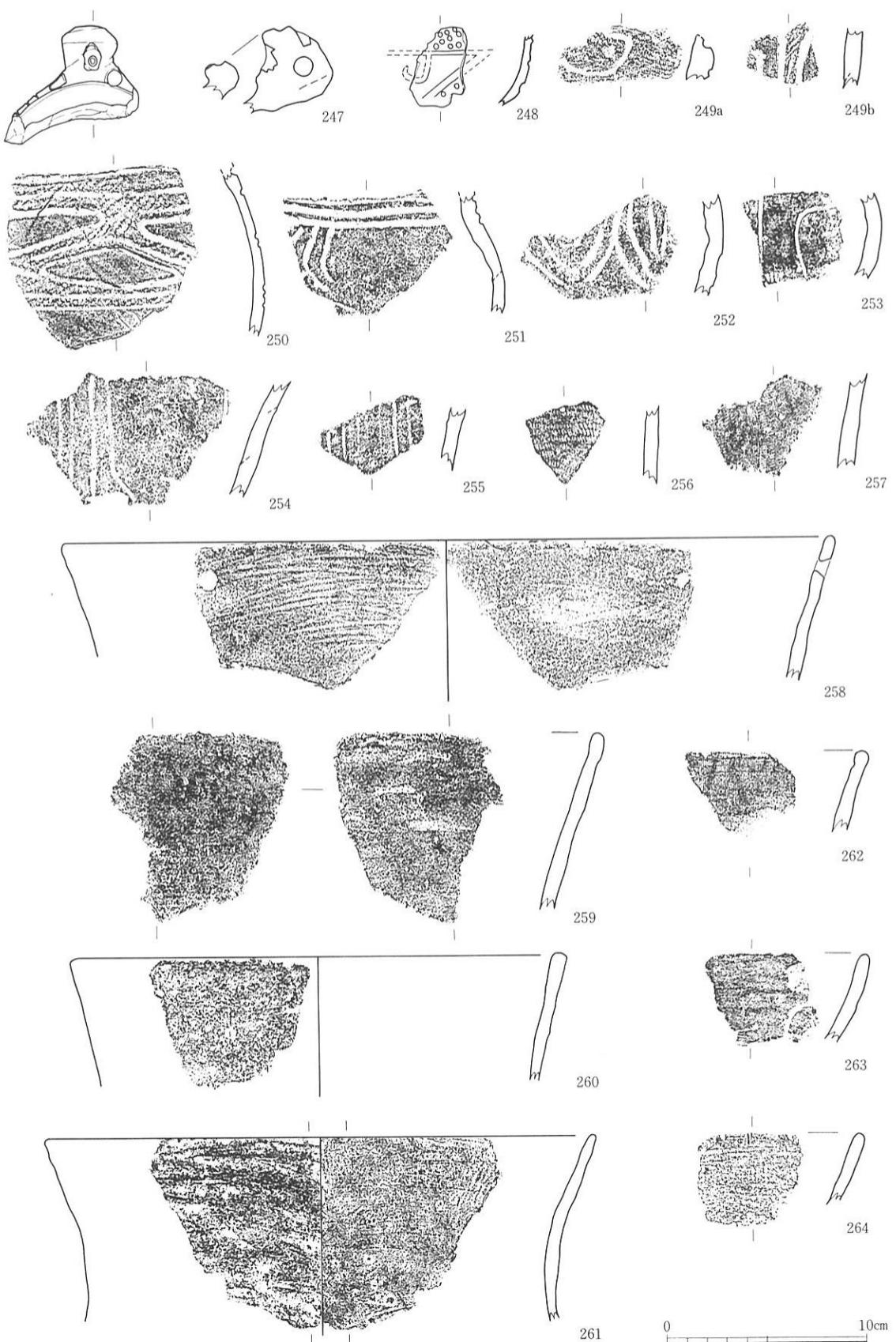


Fig. 68 縄文土器 VI群、VII群(1)

8. 土 器

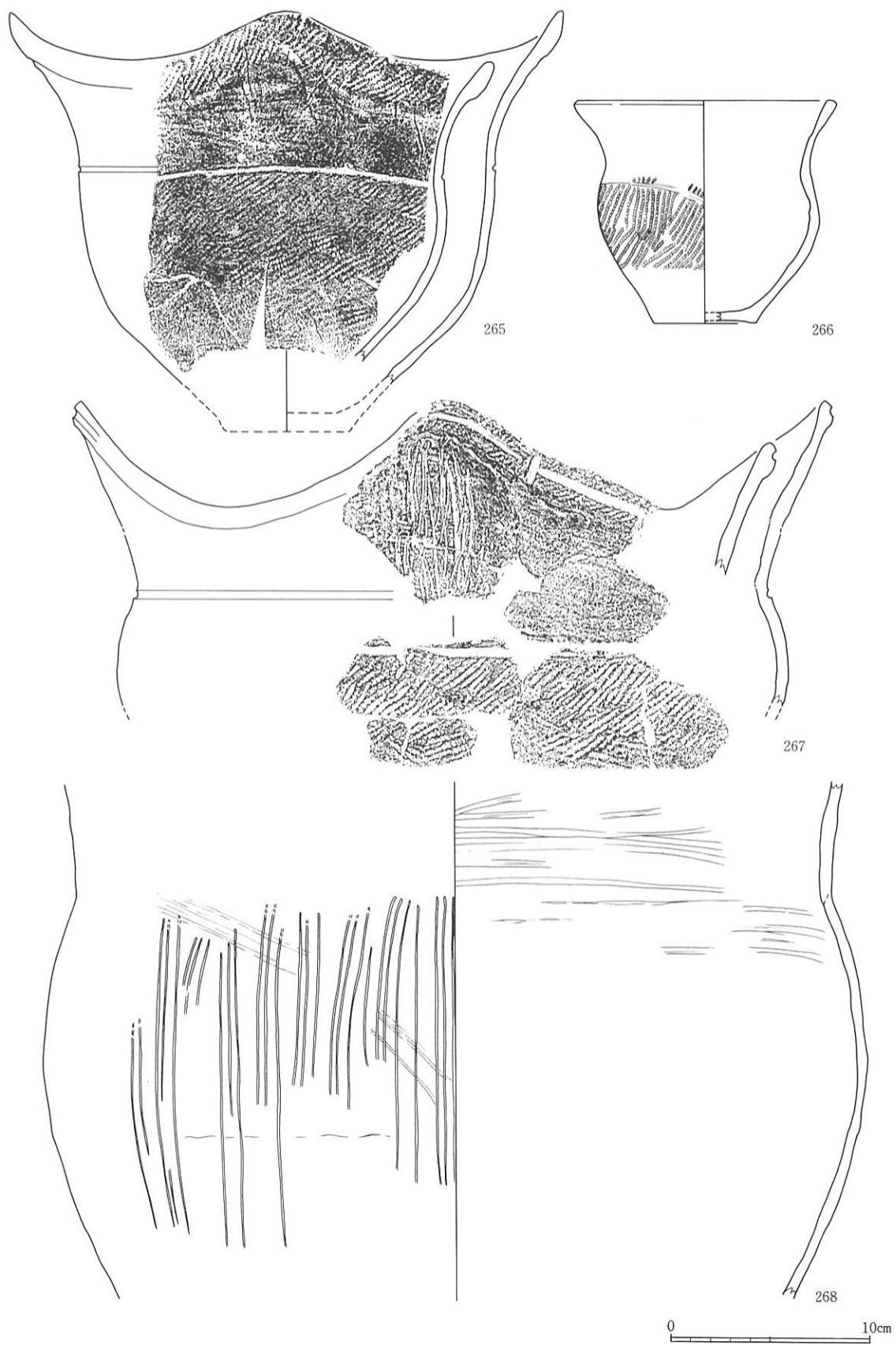


Fig.69 繩文土器 VIII群(1)

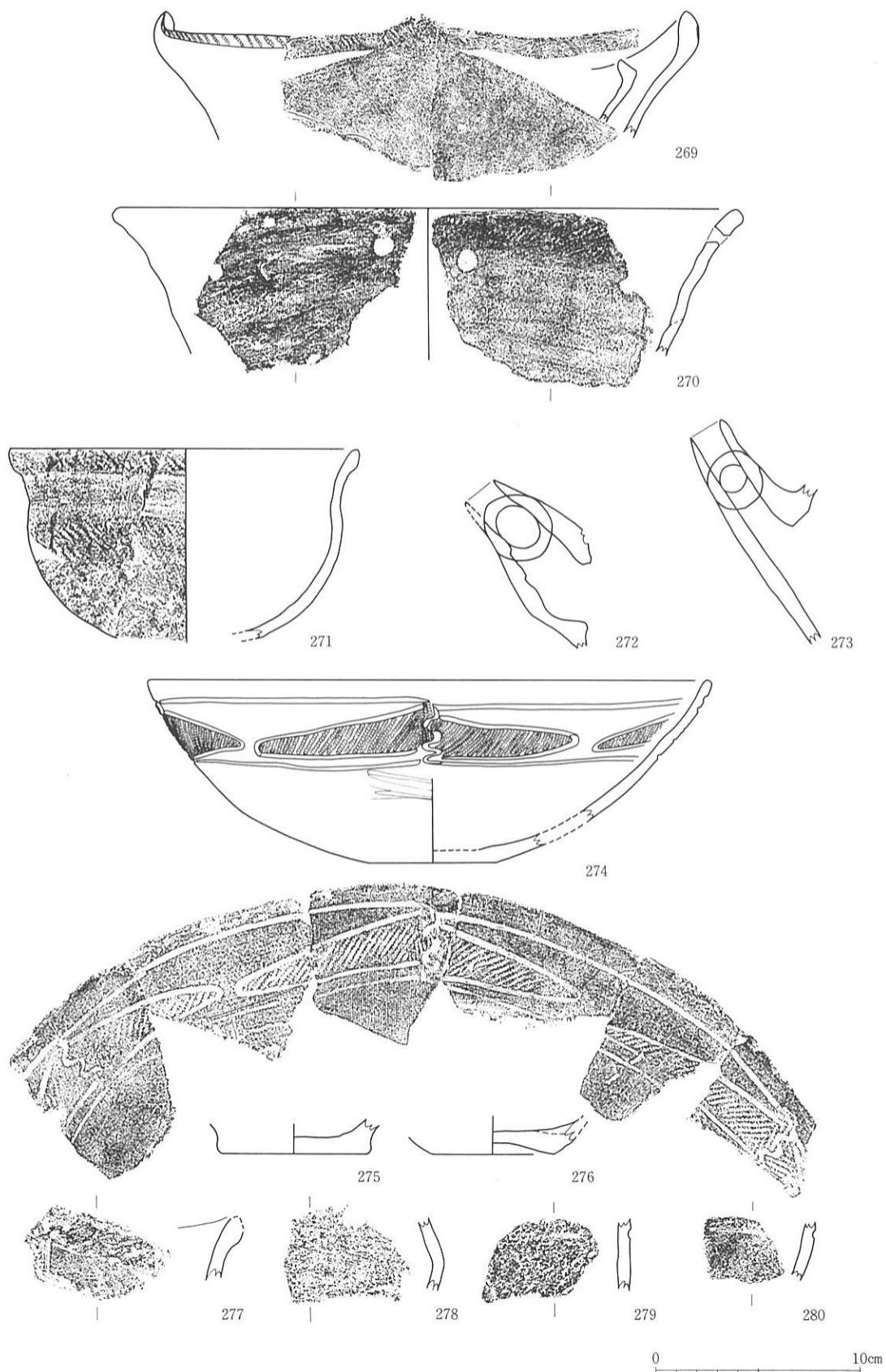


Fig. 70 縄文土器 VII群(2)、VIII群(2)

8. 土 器

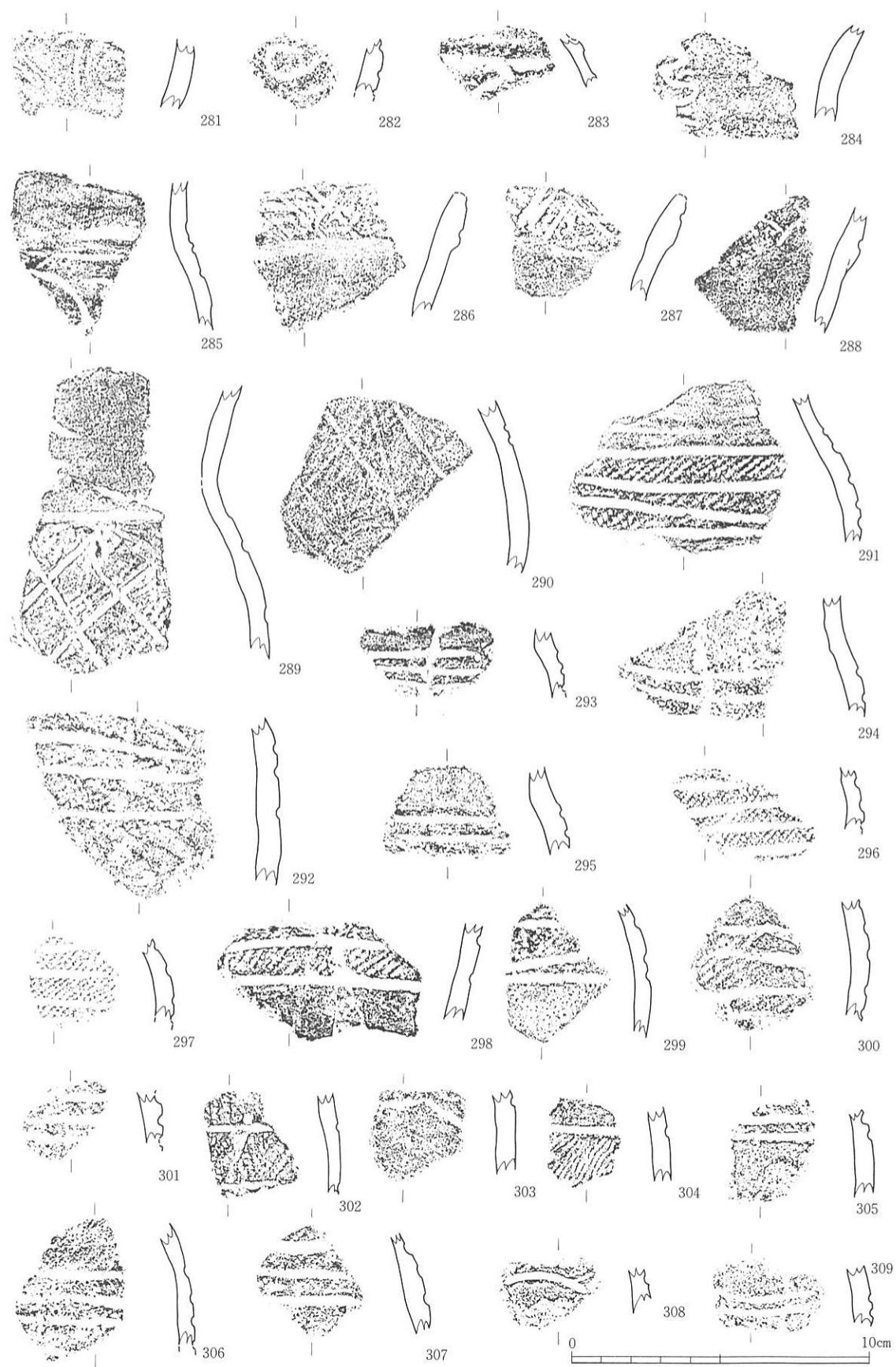


Fig. 71 繩文土器 VIII群(3)



Fig. 72 繩文土器 VIII群(4)

整は(268)の頸部内面が条痕の可能性をもつ以外はナデである。

35類(Fig. 74, 75-348～365) 粗製無文の深鉢である。(354.355)が波状口縁、その他は水平口縁である。

口縁部にはやや内弯ぎみにたちあがり肥厚するもの(348～350)、直口口縁(353～355.357.359.360.362.363.365)、やや外反する口縁(351.352.356.358.360.361.364)があり、それぞれの口唇部は面をなす、丸くおさまる、内面からのナデにより尖る傾向がある。調整は巻貝条痕(348～351)、条痕後ナデ(352)、粗いミガキ(353)、ナデ(354～359)であり、内面は(353)が粗いミガキを両面に施す以外はナデである。

VIII群底部(Fig. 70-275, Fig. 75-366～371) 底面直上でくびれるもの(275.366.367)、底面から直線的

8. 土器

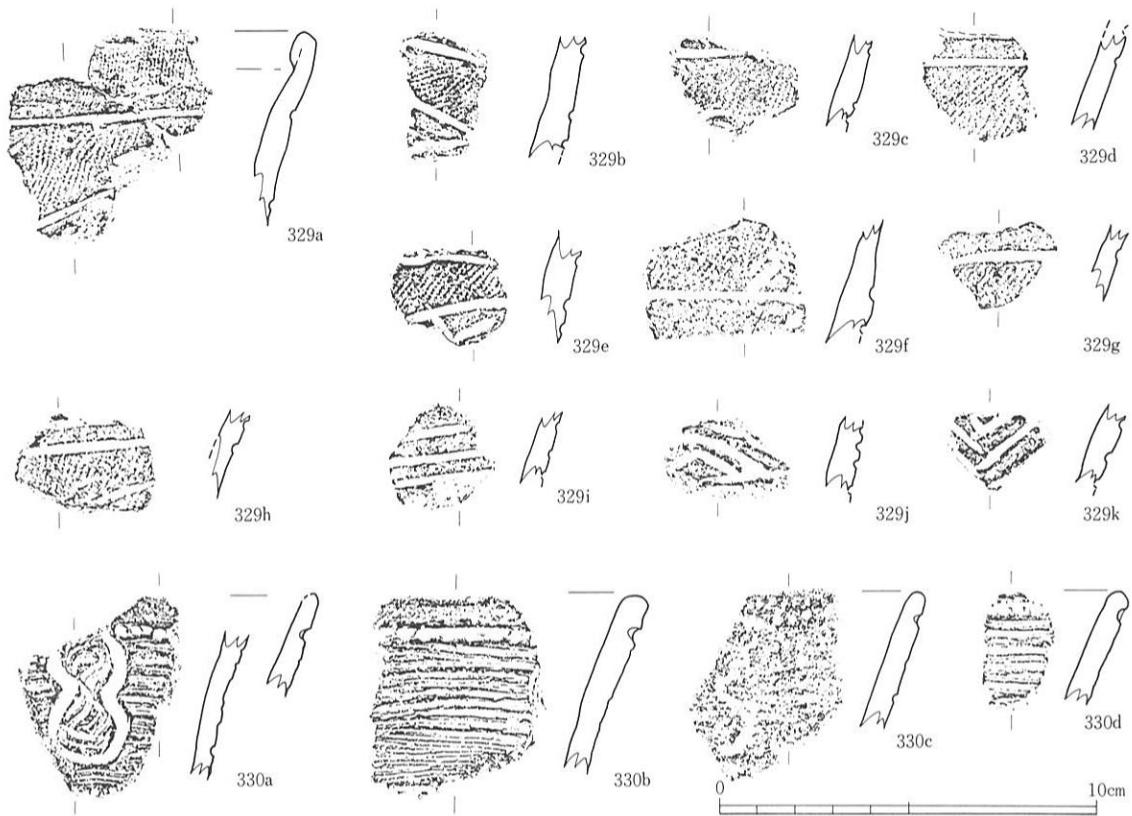


Fig.73 縄文土器 VIII群(5)

に外方にたちあがるもの(368～371)があり、たちあがる角度から(371)が浅鉢である以外は深鉢底部と考えられる。(275)は磨滅のため不明瞭であるが網代底である。

VIII群その他の器種(Fig. 70-271～274, Fig. 76, 77-372～400) 鉢、注口土器、浅鉢がある。

鉢(271.372～384)は小型、丸底であり、口縁部はゆるく外反するものと端部が強く外反するものがあり、前者は口縁部端部に縄文帯をもち、後者は無文のものが多い傾向がある。(373)は口縁部端部が肥厚するものの無文である。縄文帯は、わずかに肥厚し幅広い縄文帯(271)、口縁部端部が屈曲し幅の狭い縄文帯(379)、肥厚せず縄文のみが施されるものがある。口頸部と胴部の区分は沈線文(382)、段(378.384)、文様帯(271.383)による。羽状縄文は(378)のみに認められ、その他は斜行縄文である。

注口土器は、注口部(272.273)と肩部(385)がある。注口部は筒状に伸び先端が上をむくもの(273)と根元が脹らみ先細りの形態を示し、先端がやや前方を向くもの(272)がある。注口部の断面形は楕円形(272)と正円形(273)である。(273)の外面は丁寧に磨かれる。(385)は磨り消し部分を経て2本の押し引き沈線文間に縄文を施す。内面には指頭圧痕が顕著である。

浅鉢は(386)の波状口縁以外が水平口縁で、口縁部はやや内弯するものの直立ぎみに立ち上がるもの(274.386～395)と内弯するもの(396～400)がある。口唇部は前者が丸くおさまり後者は端面をなすもの(396～399)と丸くおさまるもの(400)がある。器形は前者が(274)のような皿形、後者は器高/口径値が前者より大きい鉢形に近いものが想定できる。文様は蛇行沈線文の両脇に三角形文を配する4単位の文様展開をなすもの(274)、2～4本横位沈線文もしくはそれに渦文が組み合わさるもの(387～391)、口唇部から一段無文帯をへて2～3本沈線文以上の縄文帯からなるものがある。口唇部に面をもつ土器の縄文帯は間隔が狭い。

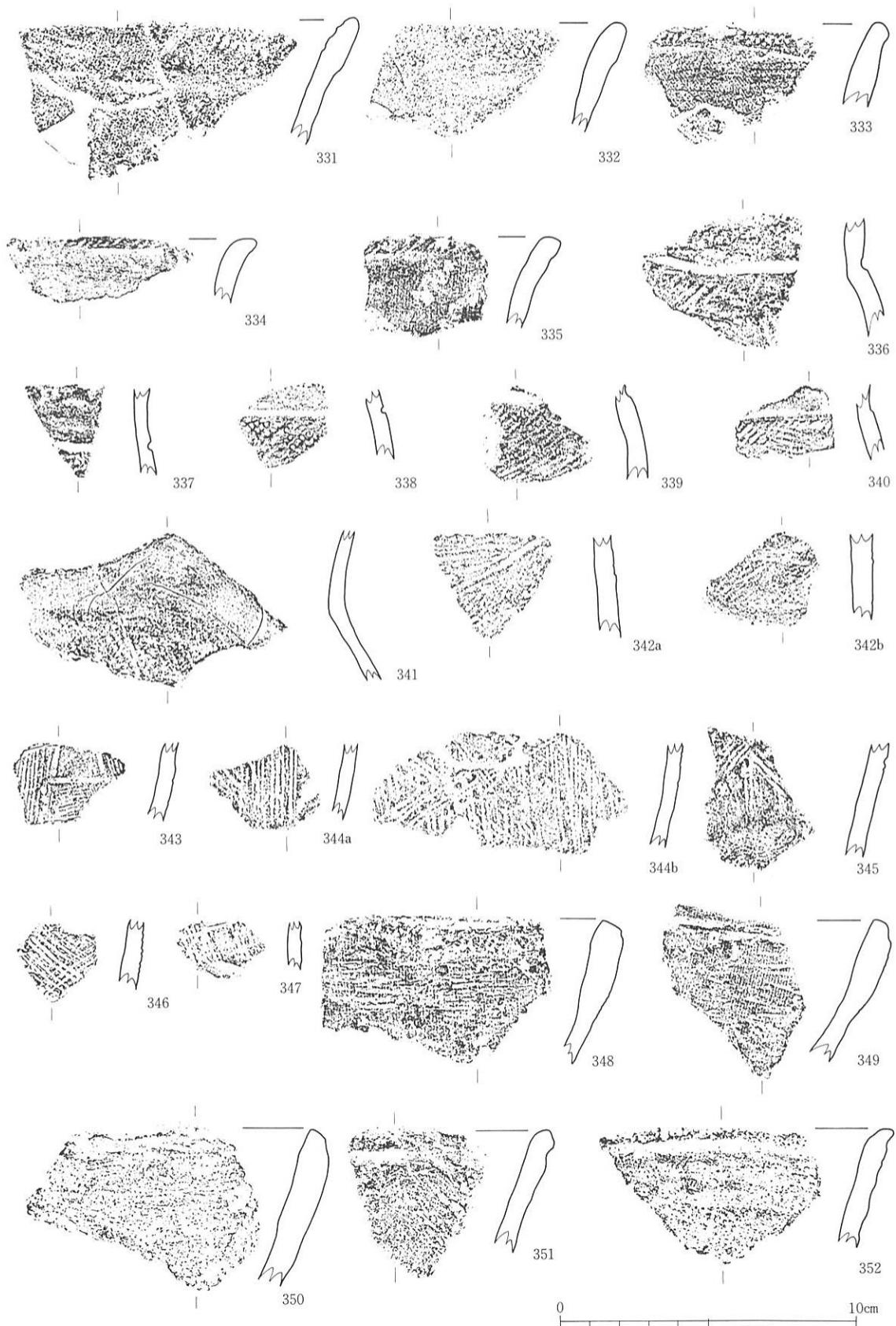


Fig. 74 縄文土器 VIII群(6)

8. 土 器

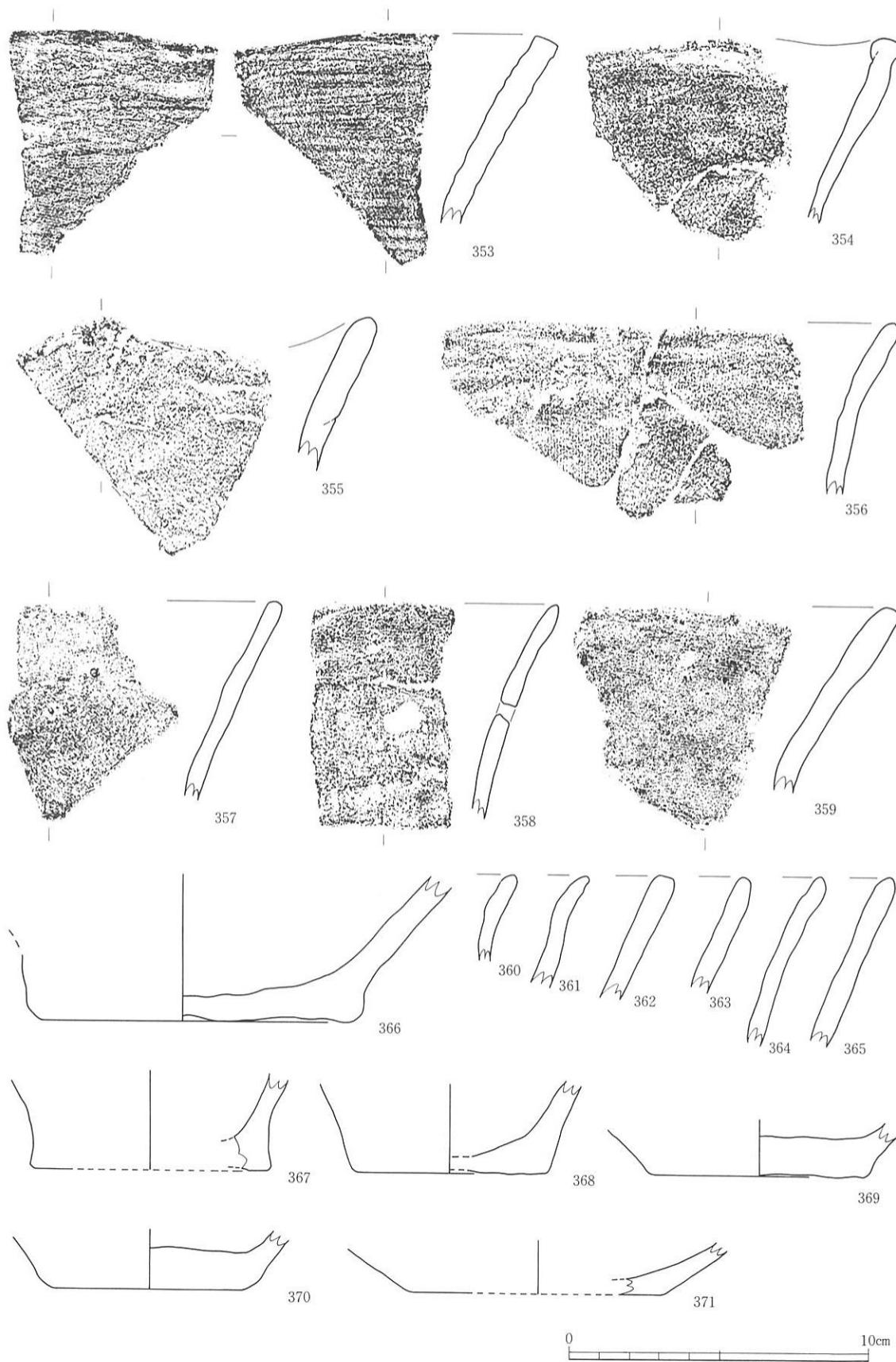


Fig. 75 縄文土器 VIII群(7)

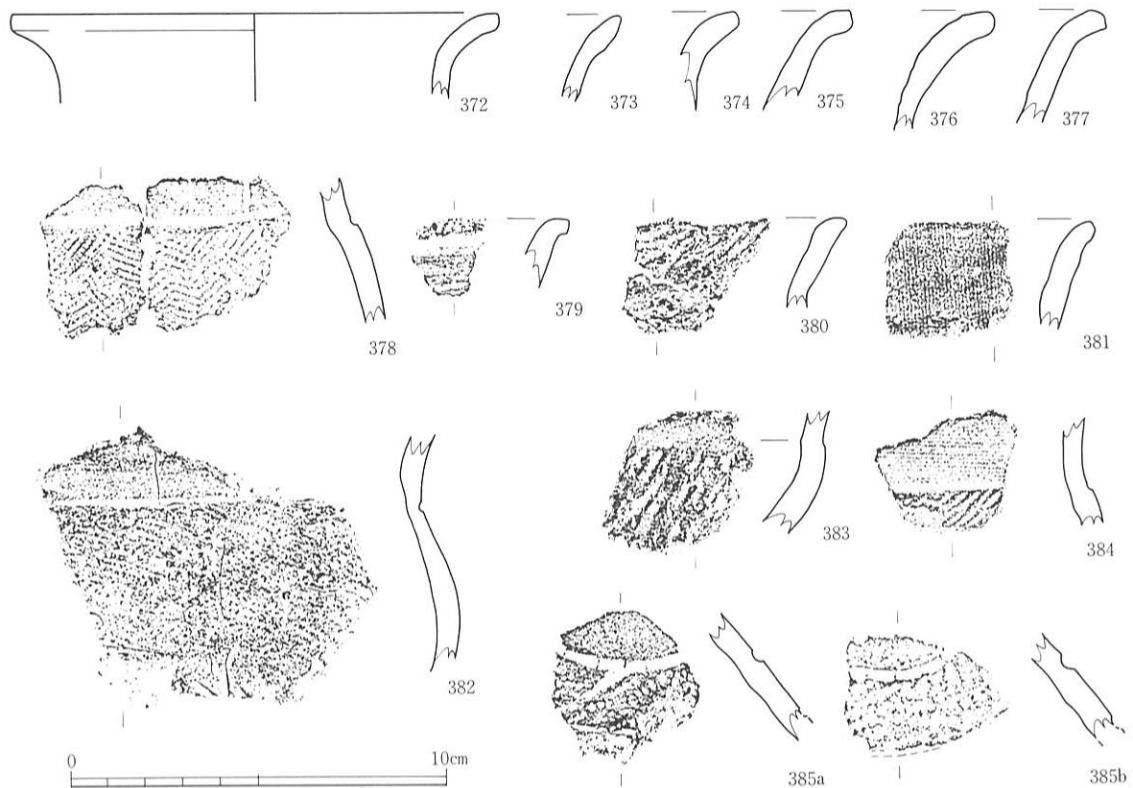


Fig. 76 縄文土器 VIII群(8)

IX群(Fig. 78, 79-401~423, Fig. 80-426) 口縁部と胴部に狭い磨消縄文帯を用いる土器である。

36類(Fig. 78-402.406.407.412, Fig. 79-419.423a, Fig. 80-426) 内折する口縁部に文様帯をもつ波状口縁深鉢や水平口縁深鉢(426)がある。器壁は薄い。

波状口縁深鉢は口縁部(406.419)、頸部から口縁部(407.412)があり、そのうち(412.419)は口縁部の内折が明瞭であるが、(407)は口縁部が内弯し頸部の器壁がやや厚い点が注目される。頂部は、凸帶貼り付け(406)またはつまみ上げる(419)。口縁部文様は、低い隆帶とその上下に引かれた沈線文および屈曲部上の3本沈線文(沈線文間幅4~5mm)からなり、(407)のみ沈線文間にRL縄文がわずかに残る。他の縄文は磨滅のため不明である。(412)は屈曲部片であり屈曲部上の沈線文下には細かな刻みを施す。

水平口縁深鉢(426)は、口縁部がゆるやかに内弯し、頸部がくびれ「く」の字状に胴部が張り出す器形である。口縁部および胴部に横位RL(R)縄文に2本平行沈線文を描き、口縁部では一部沈線文間を磨り消す。縄文の節は不明瞭であり無節縄文の可能性を残す。頸部は横位条痕、胴部下半は上下方向の磨きを用い丁寧に仕上げる。注目すべき点は胴部文様帯下に浅く施された、同じく無節縄文の可能性をもつLR(L)縄文であり、羽状縄文としての見方も可能である。

胴部片には縄文帯の沈線文間を「ノ」の字状沈線文で連結するもの(402)と一部頸部が残り3本以上の沈線文による磨消縄文帯が施されるもの(423a)がある。(423a)の残存部最上段はRL縄文施文後節を残してミガキを施し、同類他の個体に比べ器壁は厚い。

37類(Fig. 78-401) 口縁部が外反する深鉢で、口縁部内面と肩部に文様をもつ。口縁部内面の文様は2本の平行沈線文を用い、「J」字状に垂下する。肩部の沈線文下にLR縄文が施される。

38類(Fig. 78, 79-403~405.408.409.413.415.416) 無文粗製の深鉢である。口縁部はゆるく内弯する

8. 土器

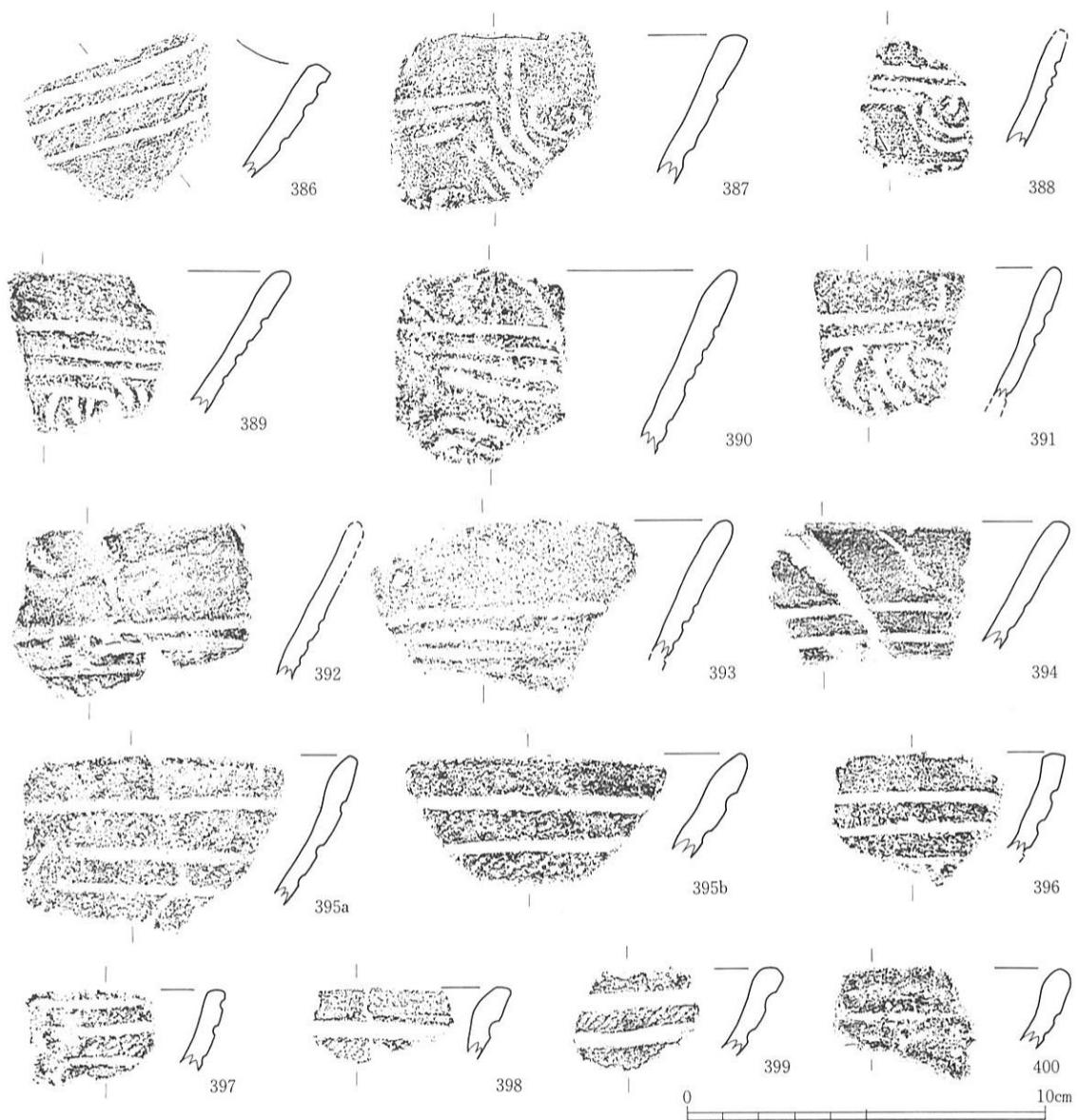


Fig. 77 縄文土器 VIII群(9)

もの(403)と直立するもの(404.405.409.413.415.416)があり、(404)が波状口縁のほかは水平口縁である。(408)は口縁部を欠くものの、張り出した胴部から頸部が外反ぎみに長く立ち上がり、頸部と胴部の境はなだらかな曲線をしており不明瞭である。口唇部は面をなすもの(403.413)、丸くおさまるもの(409.416)、やや尖りぎみに外反するもの(405.415)がある。調整は、幅5~6 mmのヘラ状原体を用いて口縁部横方向、下半部斜方向にナデるもの(403)、内外面条痕(408)、条痕後ミガキ(413)の他はナデである。(404)は口縁部端部内面に刻み目が施される。

IX群底部(Fig. 78, 79-410.422.423b) 凹底である。底面から外反してたちあがるもの(410)と内弯してたちあがるもの(422.423b)がある。

IX群その他の器種(Fig. 78, 79-411.414.417.418.420.421) 小型鉢(418)、浅鉢(411.417)と注口土器(414.421)、縄巻縄文(付加条)片(420)がある。(418)は小型鉢の頸胴部で、羽状縄文を施す。浅鉢は口縁部が内弯してたちあがるもの(411)と直行するもの(417)があり、前者は口唇部に面をもち後者の口

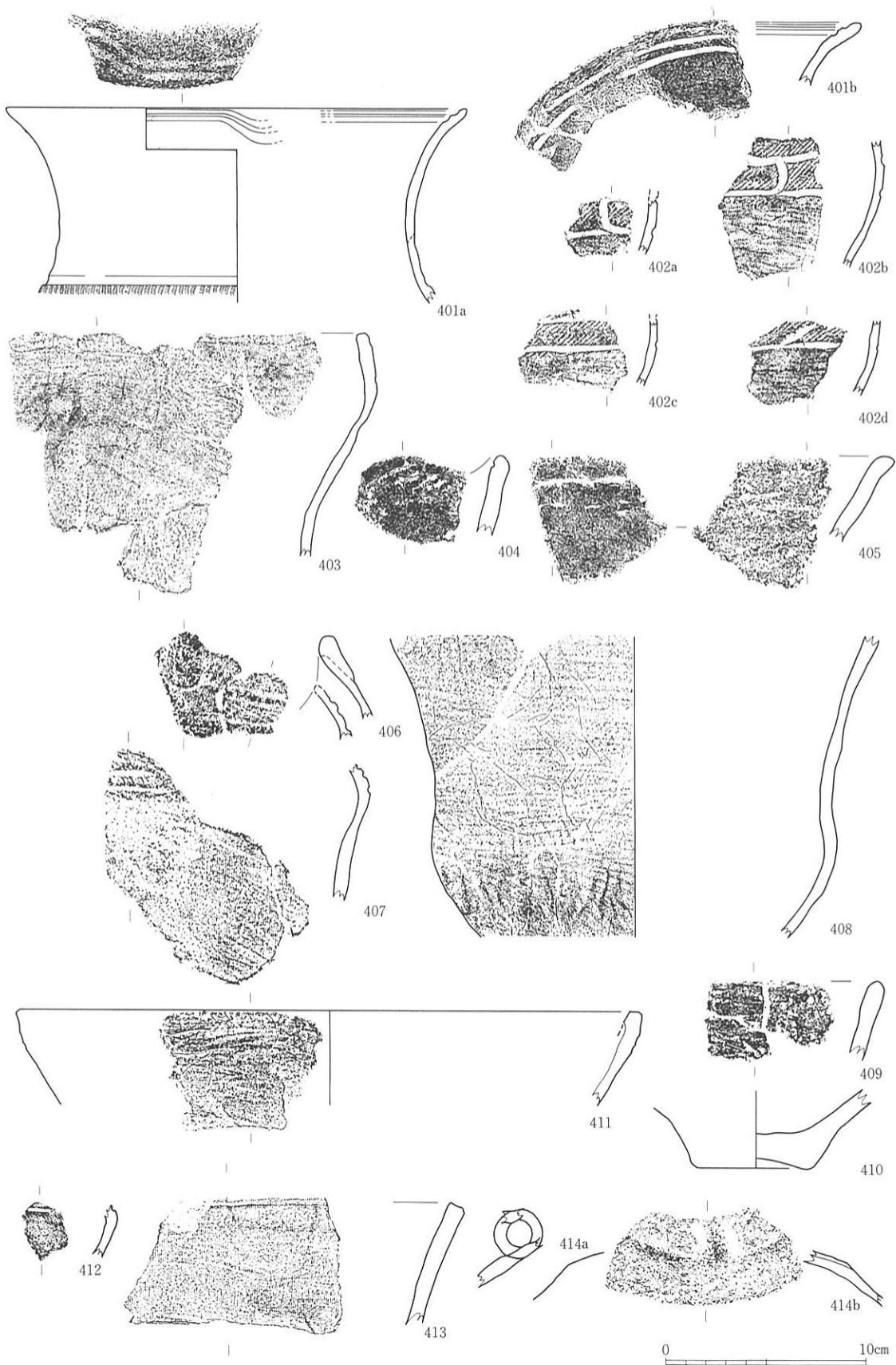


Fig.78 縄文土器 IX群(1)

8. 土器

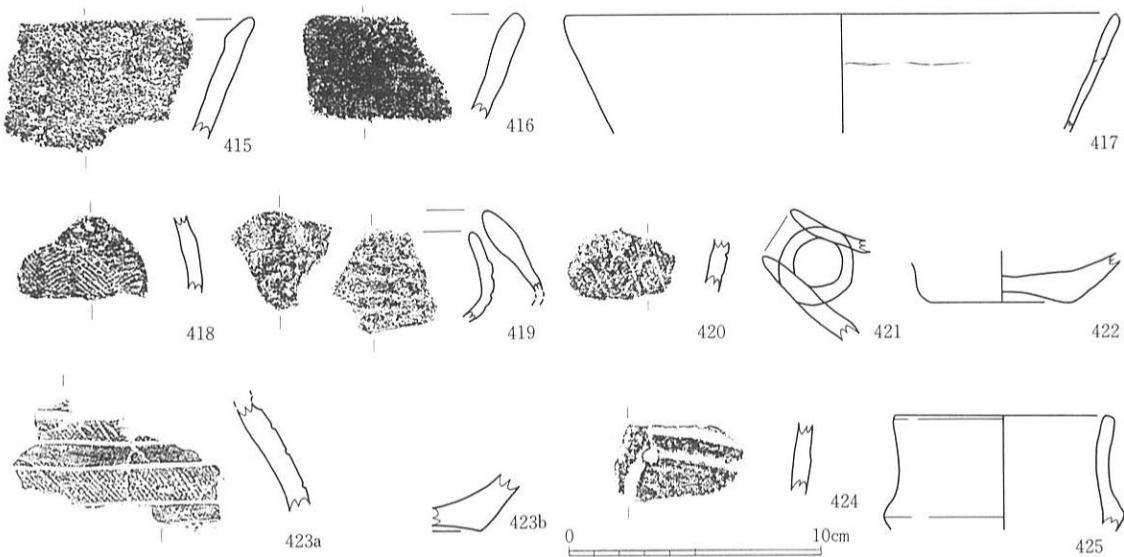


Fig. 79 縄文土器 IX群(2)、X群(1)

唇部は尖りぎみである。(411)は外面は条痕調整。(417)は堅緻な焼成であり器壁が3~5mmと薄い。

注口土器は肩部(414 b)、注口部(414 a, 421)がある。肩部(414b)は段をもち「ノ」の字状の隆帯を貼付する。同一個体片が3片あり、隆帯は3ヶ所以上あったものと思われる。磨滅が著しく文様は不明。

X群(Fig. 79, 80-424, 425, 427, 428) 卷貝の先端部を用いる、凹線文によって施文される土器である。

39類(Fig. 80-427) 「く」の字状に屈曲した口縁部に波頂部が4ヶ所、鞍部に突起が4ヶ所あり、上からみた場合平面方形になる深鉢である。口縁部は頸部から屈曲したのち再度外反して立ち上がり、凹線文が屈曲部端部と口縁部に施文される。屈曲部端部の凹線文断面形は浅い三角形をなし、段をつくり出したような効果を生む。波頂部と、鞍部の突起の扇形貝殻圧痕は、屈曲部分には切り込むように深く、その上部には浅く二段に施される。残存部は口縁部から肩部にかけての部分と、胴部の可能性をもつ弯曲した小片のみであるが、全形としては肩部から胴部にかけて屈曲をもつ深鉢が想定される²⁾。

40類(Fig. 80-428) 扇形貝殻圧痕文部分で低く波状になるものの、基本的には水平口縁の深鉢であり、肩部から口縁部が屈曲する。文様は口縁部が二段の扇形貝殻圧痕文をはさんで端部沿いに1、屈曲部に1、肩部に2の計4本の凹線文からなり、胴部は扇形貝殻圧痕文をはさんだ4本の凹線文からなる。胴部文様の下部はやや張り出したのち径を減ずる。無文帯は条痕後ナデ調整される。

胴部片(Fig. 79-424) 直角に引かれた二重の凹線文とその内側のコーナー部に施された刺突文からなる破片である。凹線文の断面形は横方向が浅い三角形、縦方向が半円形である。残存部僅少のため不明瞭ではあるが、外側凹線のコーナー部は扇形貝殻圧痕文端の可能性がある。胎土は微細な角閃石を多く含む。

X群その他の器種(Fig. 79-425) 鉢が1点ある。張り出した胴部から口縁部が外反して立ち上がる。残存部僅少のため復元口径には疑問の余地が残り、浅鉢となる可能性を残す。内外面とも横方向条痕後ナデを施す。胎土は(428)に類似し、微細な角閃石を多く含み茶黒色を呈する。

XI群(Fig. 81-429~432, 435~438) 凸帯のない、無文粗製の土器である。

41類(Fig. 81-429, 430) 口唇部に刻みをもつ土器である。(429)は口縁部端部がやや肥厚し、口唇部が

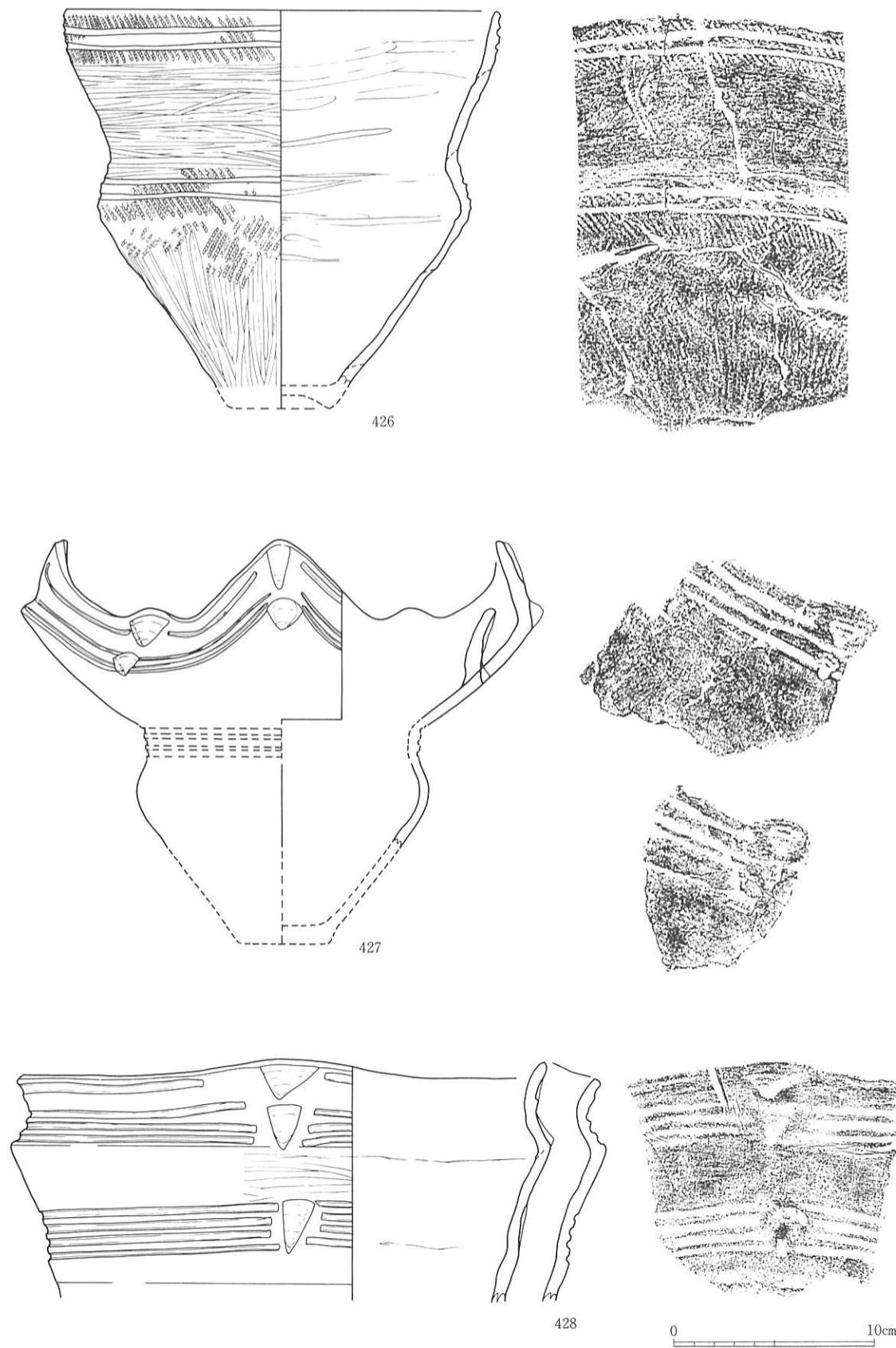


Fig.80 縄文土器 IX群(3)、X群(2)

8. 土器

面をなす。(430)は丸く成形される。

42類(Fig.81-431.432.435.436.437.438) 体部にゆるやかな屈曲をもつ土器である。屈曲のゆるやかなもの(431.436)とよりゆるやかなもの(432.437)がある。(435)は口縁部のみ、(432.437)は口縁部を欠き凸帯の明確な有無は判別できないが現状をもって本類に含めた。(435)は口唇部に面をもち、深鉢もしくは浅鉢の波状口縁となる可能性がある。調整は(431)が外面横方向条痕、内面屈曲部下半がケズリ、(438)は外面屈曲部下半がミガキである以外は外面屈曲部上半ナデ、下半ケズリ、内面ナデである。

XII群(Fig.81,82-433.434.439~447) 1条凸帯の土器である。

43類(Fig.81-433.434.439.440) 体部に屈曲のある土器である。(433)は口縁部のみであるが本類に含めた。口縁部は外反し、(440)は口唇部に面をもつ。凸帯は口縁部端部から下がってつけられ、形状は(433)が上三角形、(440)が三角形であり、双方とも刻み目はない。(439)は屈曲部に2条の沈線文がめぐり、屈曲はゆるいものの、大型の浅鉢である可能性をもつ。調整は(433)が内外面ミガキ、(434.439)が外面丁寧なナデで内面ミガキ、(440)は外面屈曲部下半がケズリのほかは丁寧なナデである。

44類(Fig.82-442.443.444.445) 口唇部に刻み目をもつ土器である。但し(445)は磨滅の為不明瞭である。口唇部に面をもち「D」字形もしくは「O」字形に刻むもの(442.443)と丸くおさめられた端部に「V」字形に刻むもの(445)がある。凸帯は口縁部端部から下がってつけられ、(442.444)は「D」字形刻み、(443)は刻み目なしである。(445)の内面口縁部端部には沈線文がひかれ、段状になっている。

XII群その他の器種(Fig.82-441.446.447) 「く」の字形口縁の浅鉢である。口縁部が外反し端部に3条沈線文(441)や2条沈線文を施すもの(447)と口縁部端部がわずかに外折するもの(446)がある。

XIII群(Fig.82~88-448~510) 2条凸帯が主体を占める土器群である。

45類(Fig.82~84-448~466) 口縁部端部から下がったところに凸帯をつける土器である。a 器形、b 口唇部の形状、c 凸帯の形、d 刻みの形、e 調整といった各要素ごとに記述する。

a 器形 口縁部凸帯と胴部凸帯の間隔から、小型深鉢の存在が指摘できる(461.462)。破片のため口径復元の厳密な値には不安が残るもの、直径18cm前後と他の個体に比べ明らかに小型であり、とくに(462)は口径／器高値がおおきく、鉢形になる可能性がある。

器形は胴部の屈曲の有無によって、口縁部が直行ぎみの屈曲のないもの(449.462.463)と胴部が張るものに大別され、後者は胴部最大径がほぼ胴部凸帯に相当するもの(450.451.455.461)と胴部凸帯より下位にくるもの(448.456)に分けられる。

b 口唇部の形状 面をもつもの(448.450)と先尖りのもの(463~466)、その中間に位置する丸くおさめるもの(449.451.453.456~462)と断面三角形につまみ上げるもの(452.454.455)がある。断面三角形につまみ上げるものは他者に比べ凸帯の位置が相対的に高い。また、先尖りのものは器壁が薄いものが多く、とくに(466)は器壁3mmと非常に薄い。特記すべき点は(449)の口縁部端部外面に施される軽い「O」字形の刻みである。この土器は磨滅が著しく不明瞭であるが、現状では外面に櫛描や刷毛目はみとめられない。

c 凸帯の形 断面台形(448)、断面蒲鉾形(462)以外は断面三角形である。(450)は比較的幅広い。(456)の口縁部凸帯は口縁部端部から一段下がったところにナデつけられており注意を要する。

d 刻みの形 爪形、「D」字形、「O」字形、小「OD」字形、「V」字形、刻み目無しがある。爪形

(4個)の口縁部凸帯と肩部凸帯は爪の方向が異なる。口縁部凸帯が「D」字形、胴部凸帯が「O」字形といった折衷形のもの(455)もある。大型深鉢に比べ小型深鉢は小さい刻みが密に施され、特に(462)は「V」字形と「D」字形の折衷形の刻み目が3~4/cmと密である。

e 調整 磨滅のため観察困難な資料が多いが、概ね外面凸帯を境として上半はナデ、下半はケズリ、内面ナデで成形時の粘土紐接合痕には指押さえが残る。凸帯貼付時の調整は凸帯の上側が下側に比べ丁寧にナデつけられる場合が多い。(462)は丁寧な作りであり、口縁部凸帯下は一部横方向ミガキが施され、胴部凸帯の上下ともに幅6mm前後の板状原体を用いて縦方向にナデる。また、(482)も口縁部凸帯下に幅8mm前後の板状原体を用いての調整痕が残る。(463)は胴部凸帶上半が幅18mmの板状原体を用いての縦方向ナデ、下半もおそらく同原体によるものであろう。

f その他 (450)は剥離が著しいものの、残存部は橙色を呈す。

(463)は炭化物が付着する。付着箇所は外面胴部凸帯より上半、内面胴部最大径より下半であり、底部内面には厚く残存する。

46類(Fig.84~88-467~510) 口縁部端部に接して凸帯をめぐらせる土器である。幅広い凸帯、口縁部端部にかぶさるように貼付された凸帯、口縁部端部に接した凸帯の3種がある。

幅広い凸帯は(467)の1点のみである。凸帯間は直立し、屈曲のない砲弾形の器形が想定できる。底部は丸底であろう。凸帯は偏平な断面蒲鉾形のものを貼り付け、磨滅著しく不明瞭なもの、刻みの形は「D」字形もしくは「V」字形である。調整は外面胴部凸帯より上はナデ、下はケズリ、内面はナデである。この土器は他の個体に比べ混入する砂粒が大きく器壁も厚い。

口縁部端部にかぶさるように貼付された凸帯をもつ土器は12点認められる(468~479)。破片資料がほとんどであるが、胴部凸帯から口縁部凸帯間が直立、外反、内弯するものがある。(472)は他に比べ大きく内弯するため、鉢になる可能性がある。(479)は凸帯が小さく、浅鉢である可能性も捨てきれない。口唇部は、端部が丸くおさめられたものまたは尖りぎみのものに凸帯を貼付し、面をなしているのが特徴的である。凸帯の形は、断面台形、三角形があるが、特に断面台形のものは口縁部端部に接した凸帯をもつ土器に比べ、凸帯の高さが高く、しっかりとした傾向がある(471~473)。三角形の凸帯には上三角形、三角形、下三角形の3種があり、口縁部端部に接した凸帯をもつ土器に比べ下三角形が少なく、上三角形、三角形の占める率が高い。刻みは「D」字形「小OD」字形「V」字形と刻み無しがある。本類のなかで胎土について特記すべきものに(476)がある。(476)の胎土は体部が茶黒色、凸帯が乳白色を呈するきめ細かい胎土からなり、明らかに異なる胎土を用いて土器を成形している。茶黒色土には角閃石が含まれる。一方乳白色土にはチャート、赤色酸化粒がわずかに含まれるのみで、水簸されたような精製された胎土である。

口縁部端部に接した凸帯をもつ土器(480~510)は、a 器形、b 口唇部の形状、c 凸帯の形、d 刻みの形、e 調整の各要素ごとに記述する。

a 器形 胴部凸帯から口縁部凸帯にかけて外反し、胴部最大径を口縁部径が凌駕するもの(487.501)、両凸帯間がわずかに外反するものの胴部最大径と口縁部径がほぼ同じのもの(488.496.497.505)、両凸帯間が直立し胴部最大径と口縁部径がほぼ同じのもの(502.510)、胴部凸帯から口縁部凸帯にかけて屈曲し胴部最大径が口縁部径を凌駕するもの(490.492.503.504.507)がある。(490)は完形品であり、丸底である。

b 口唇部の形状 丸くおさめるものと尖るものがある。明確に面取りを施す土器は含まれない。

8. 土器

c 凸帯の形 断面台形はほとんど無く、断面三角形が多数を占める。三角形のなかでも上三角形は(490)1点のみであり、残りは三角形や下三角形である。ここで注目されるのは、口唇部が尖るもの(489.491.493.497)のうち、大多数は凸帯の形が下三角形になることである。このことは凸帯貼付時の調整を口唇部の調整と同時に施してしまう結果によると考えられる。また、凸帯の幅や高さが口縁部端部にかぶさるように貼付された凸帯をもつ土器に比べ、減ずる傾向にあることが指摘できる。

d 刻みの形 「D」字形、「O」字形、小「OD」字形、「V」字形、刻み目無しがある。「D」字形刻み目(483～487)には原体の当たり痕が残り、凸帯の下まで強く刻まれるものが多い。「O」字形刻み目(488～491)は、おそらく指頭押さえによるものと考えられるが、断面三角形の凸帯に対して上から押されたもの(489)と下から押されたもの(488)、正面から押されたもの(490)がある。小「OD」字形の刻み目とした土器(492～499)は「O」字形「D」字形の区別がつきがたいものと、同一個体において双方が用いられているものである。浅く施される。「V」字形刻み目(500～503)は、原体をやや斜めにして施文したせいか、「D」字形に近いものが一部含まれる。(500)は深さ1mmにも満たない刻み目が密に施される。刻み目無しの土器(504～510)は、比較的凸帯が幅狭く低い小型のもの(505.508)とその他に分けられる。前者は凸帯貼付後丁寧にナデられ指押さえの痕跡を残さないのに対し、後者は凸帯の下部に指押さえの痕跡が残る傾向がある(特に507)。

e 調整 磨滅した土器が多く、調整を観察できる個体が限られるものの、おおよその傾向としては口縁部凸帯と胴部凸帯間はナデ、胴部凸帯下部はケズリ、内面ナデであり、XIII群の各類の土器と同じである。ただし、(501.502.505)は残存部に限っていえば胴部凸帯下部はナデ調整されている。(490)は胴部凸帯のない深鉢であるが、唯一完形品で調整観察可能な土器である。この個体の外面調整は、胴部屈曲ライン、胴部最大径付近を変換点として上からナデ、横方向条痕、底部からやや反時計回りに施されるケズリである。内面はナデを施す。

f その他 (490)の煤の付着は外面では底部周辺と胴部屈曲ラインより下、底部から10数cm上に挟まれた部分で観察できる。内面は底部周辺を除いて底部から10数cmまで炭化物が付着しており、丁度内外面煤の付着する箇所が逆転している。また内面の粘土紐接合痕が明瞭であり、おおよそ1.5～2.0cmの粘土帯を用いて成形したものと考えられる。この土器で特筆すべき点はサヌカイト片が1点胎土中に含まれることである。外面に露呈するサヌカイト片の最大長は8mm、最大幅は5mmを測り、胴部最大径付近に含まれる。

XIII群その他の資料(Fig.89) 磨滅や剝離のため刻みの形が判別できなかった口縁部(511～515)と胴部片(516～534)を一括した。

口縁部片は、凸帯が全て口縁部端部に接して貼付されるため、46類に含まれるものと考えられる。(514)は口縁部端部に接する剝離痕がみとめられる。胴部屈曲部においては明瞭な剝離痕はみとめられず、原形における胴部凸帯の有無は不明である。

胴部片は凸帯が貼付される箇所で屈曲するものとしないものがあり、器形、凸帯の断面形、刻み目の形はXIII群のバリエーションに包括される。これら胴部片のなかで、(521)は器壁が厚く、凸帯が幅ひろで高いしっかりしたものであることから45類に含まれるものと考える。

XIII群その他の器種(Fig.90,91-535～546) 浅鉢、鉢、壺がある。(535)は肩部の屈曲が曖昧であり、壺か浅鉢か判断しがたい土器であるが、ここでは壺に含めることとする。

浅鉢は、5点(536.537.538.545.546)である。「く」の字口縁をもつもの(536.538)、屈曲部から口縁

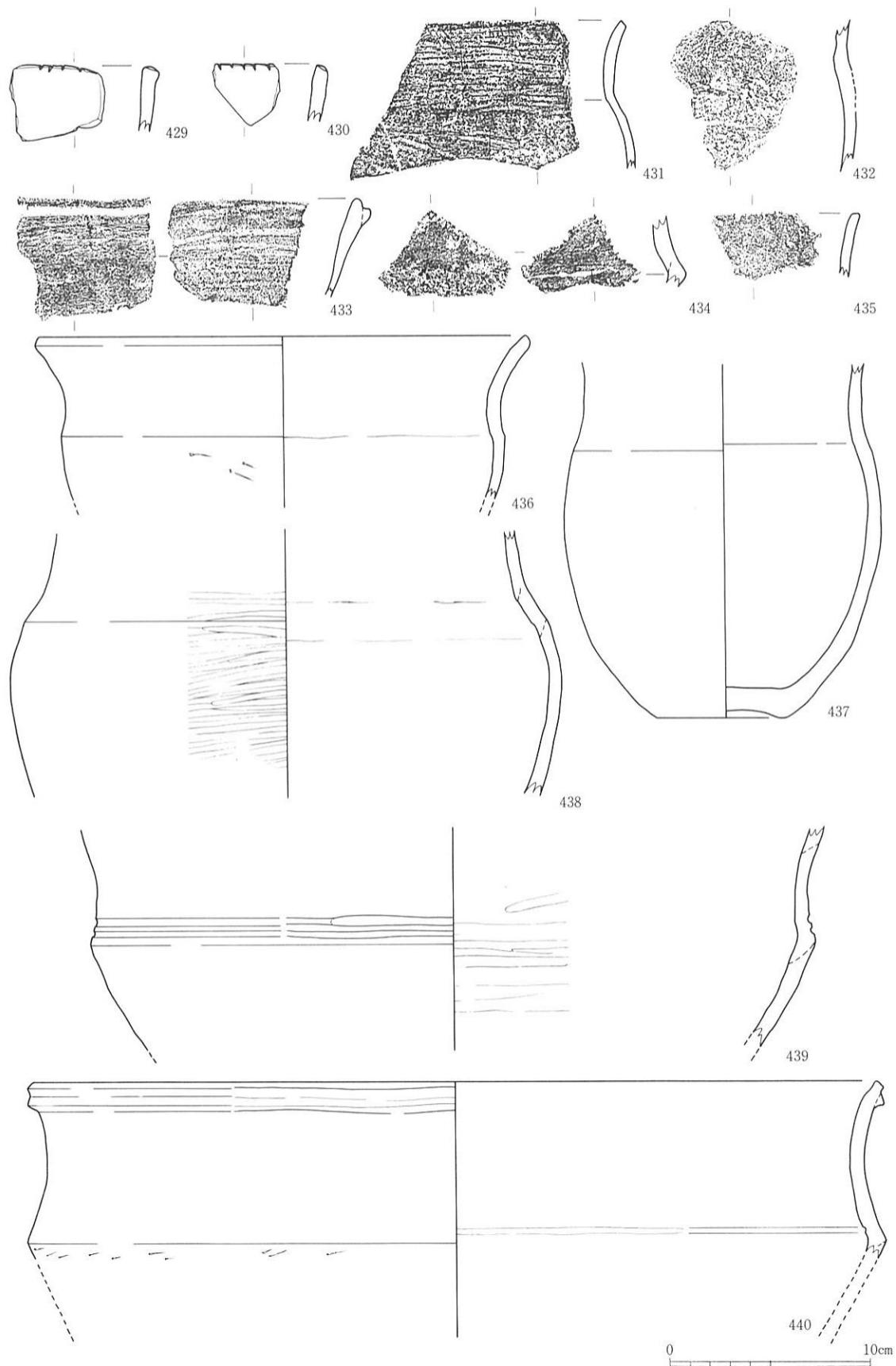


Fig.81 縄文土器 XI群、XII群(1)

8. 土 器

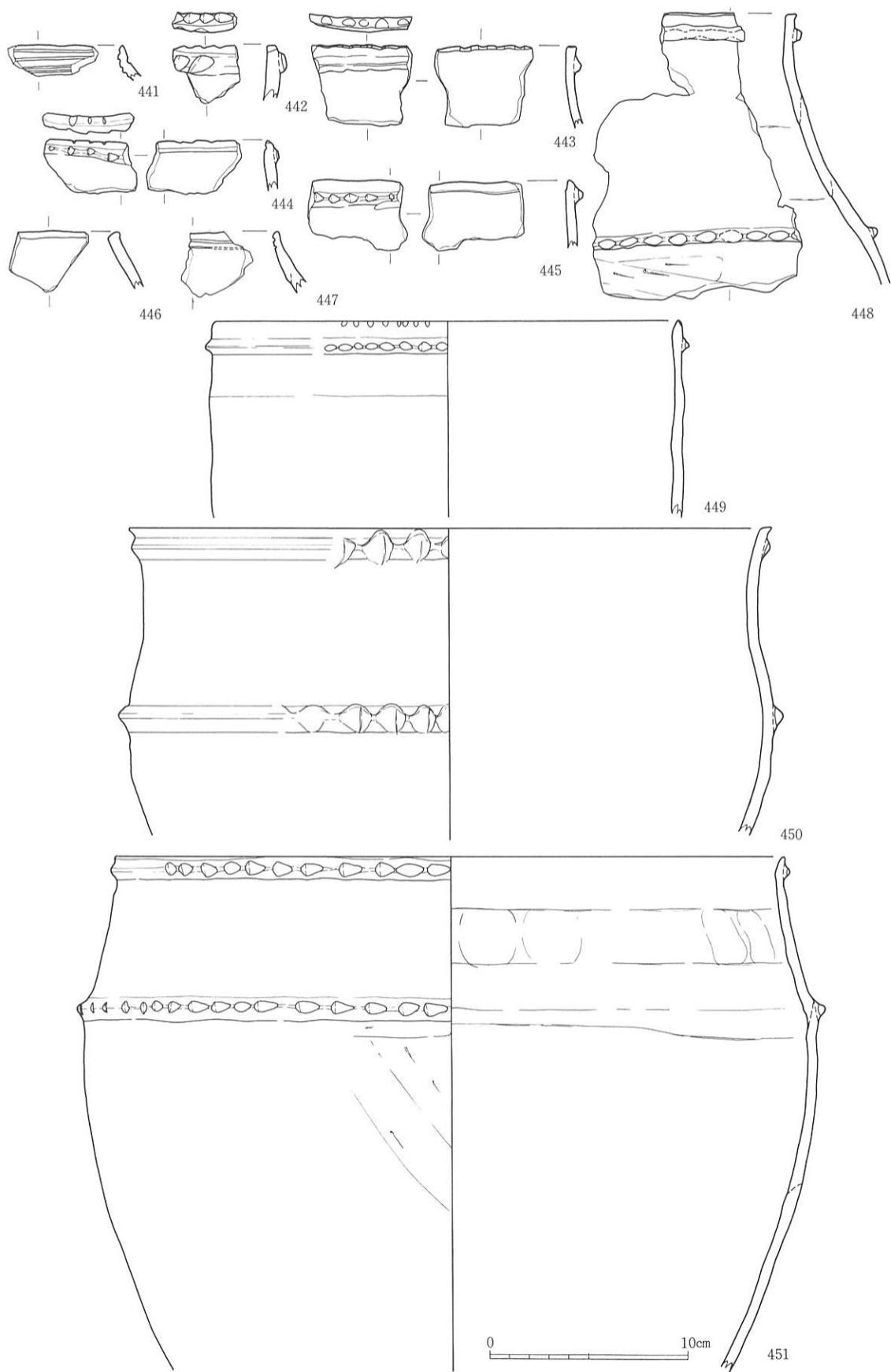


Fig. 82 繩文土器 XII群(2)、XIII群(1)

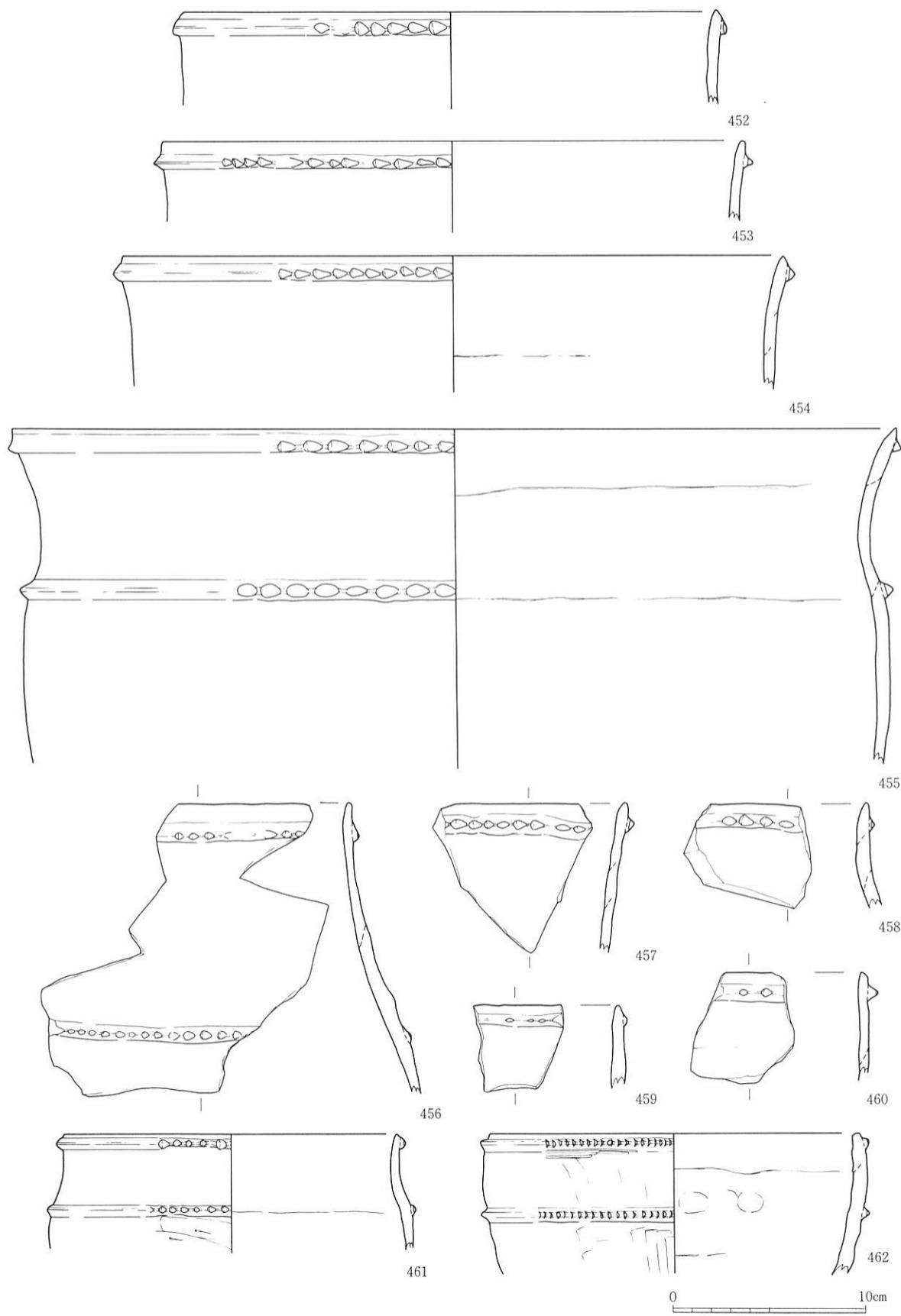


Fig.83 縄文土器 XIII群(2)

8. 土 器

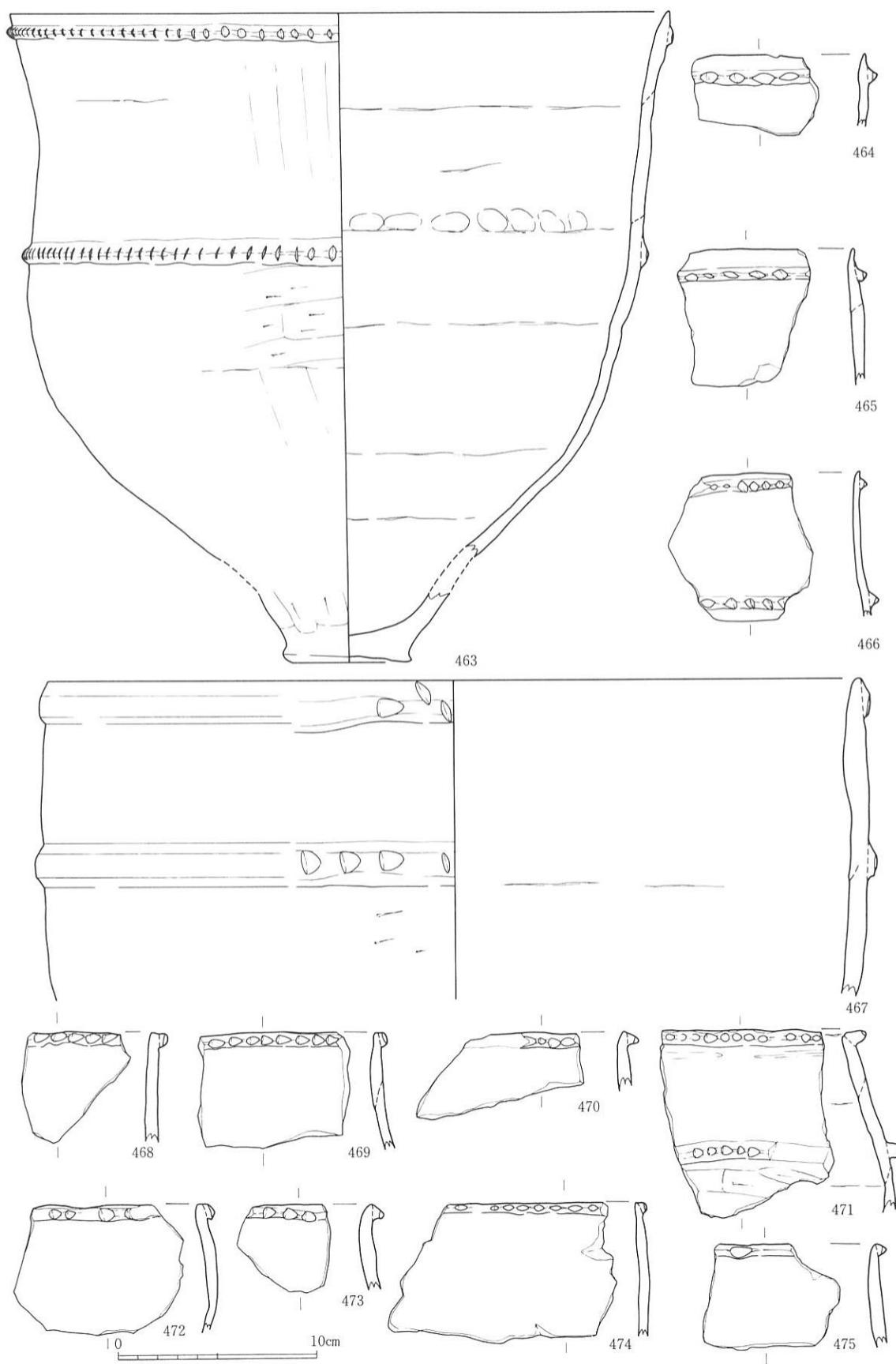


Fig.84 繩文土器 XIII群(3)

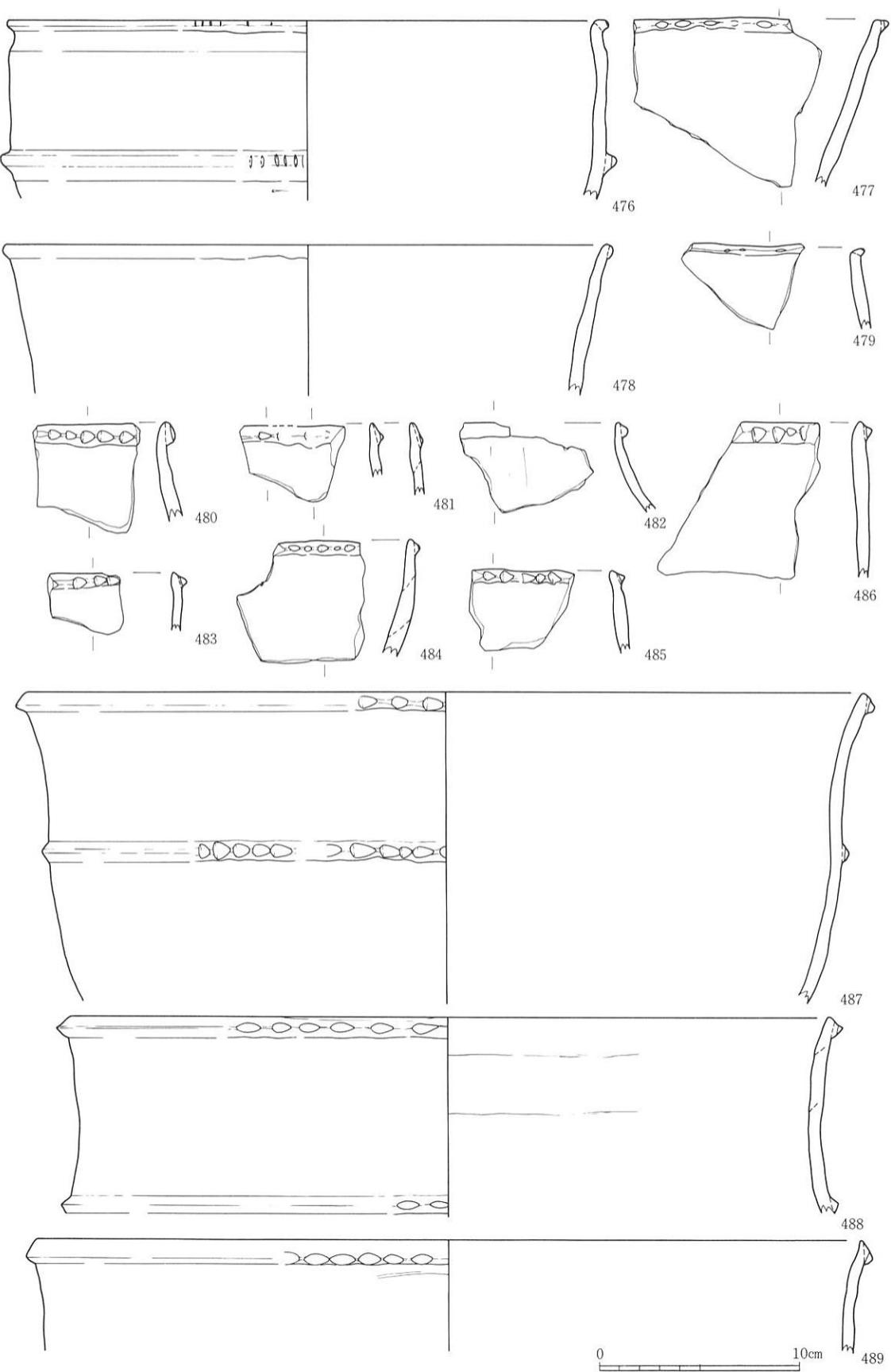


Fig.85 縄文土器 XIII群(4)

8. 土 器

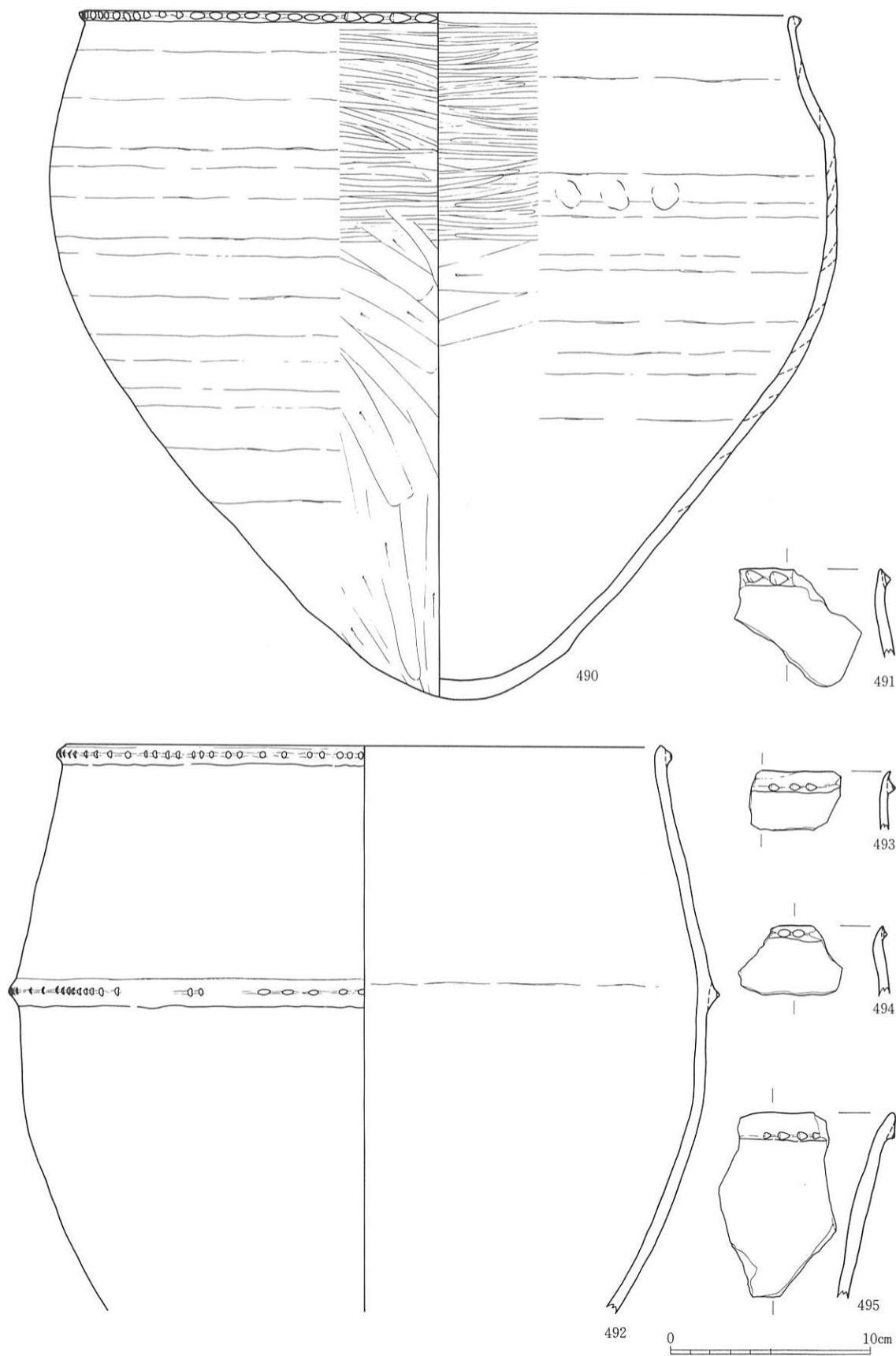


Fig.86 繩文土器 XIII群(5)

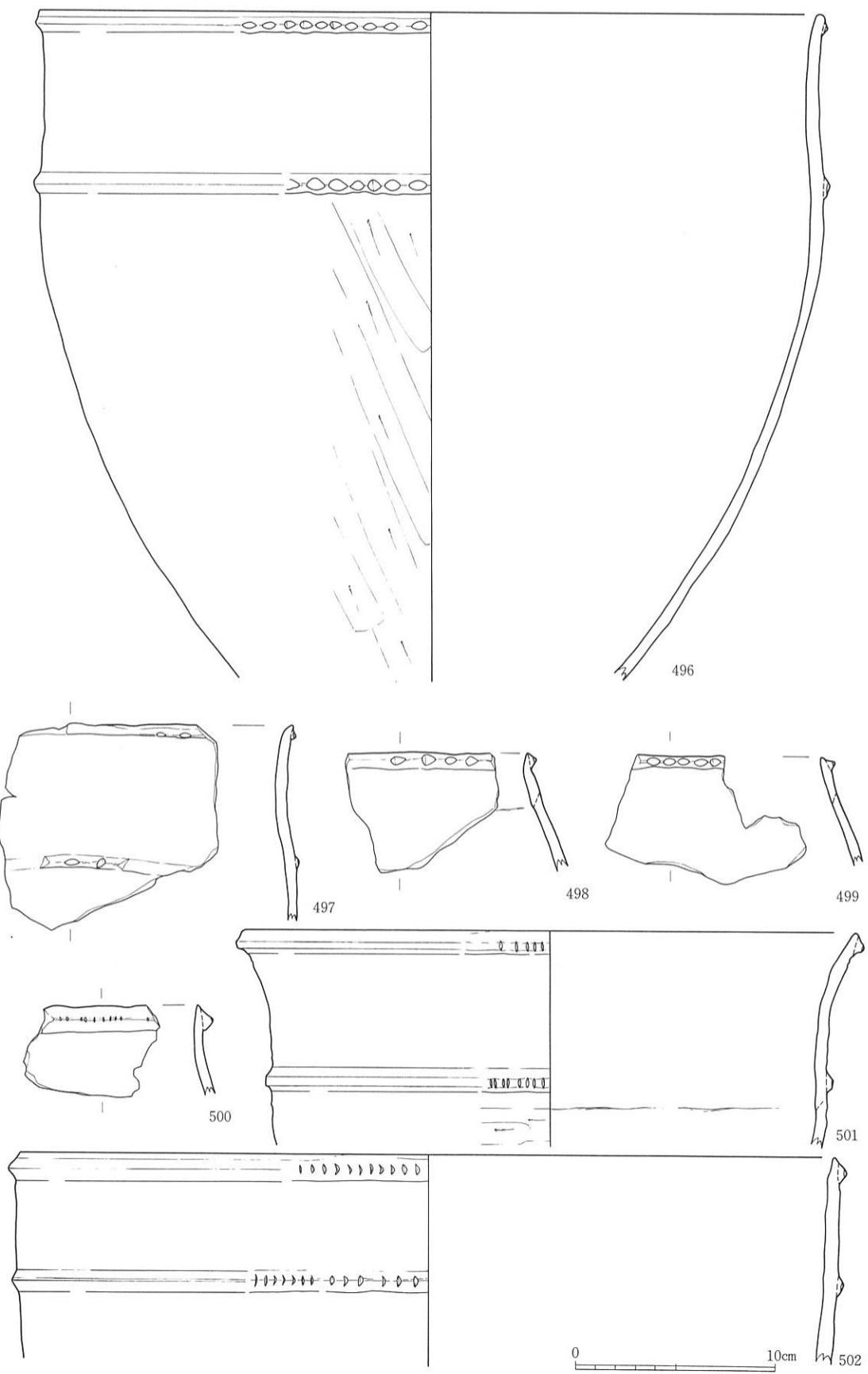


Fig.87 縄文土器 XIII群(6)

8. 土 器

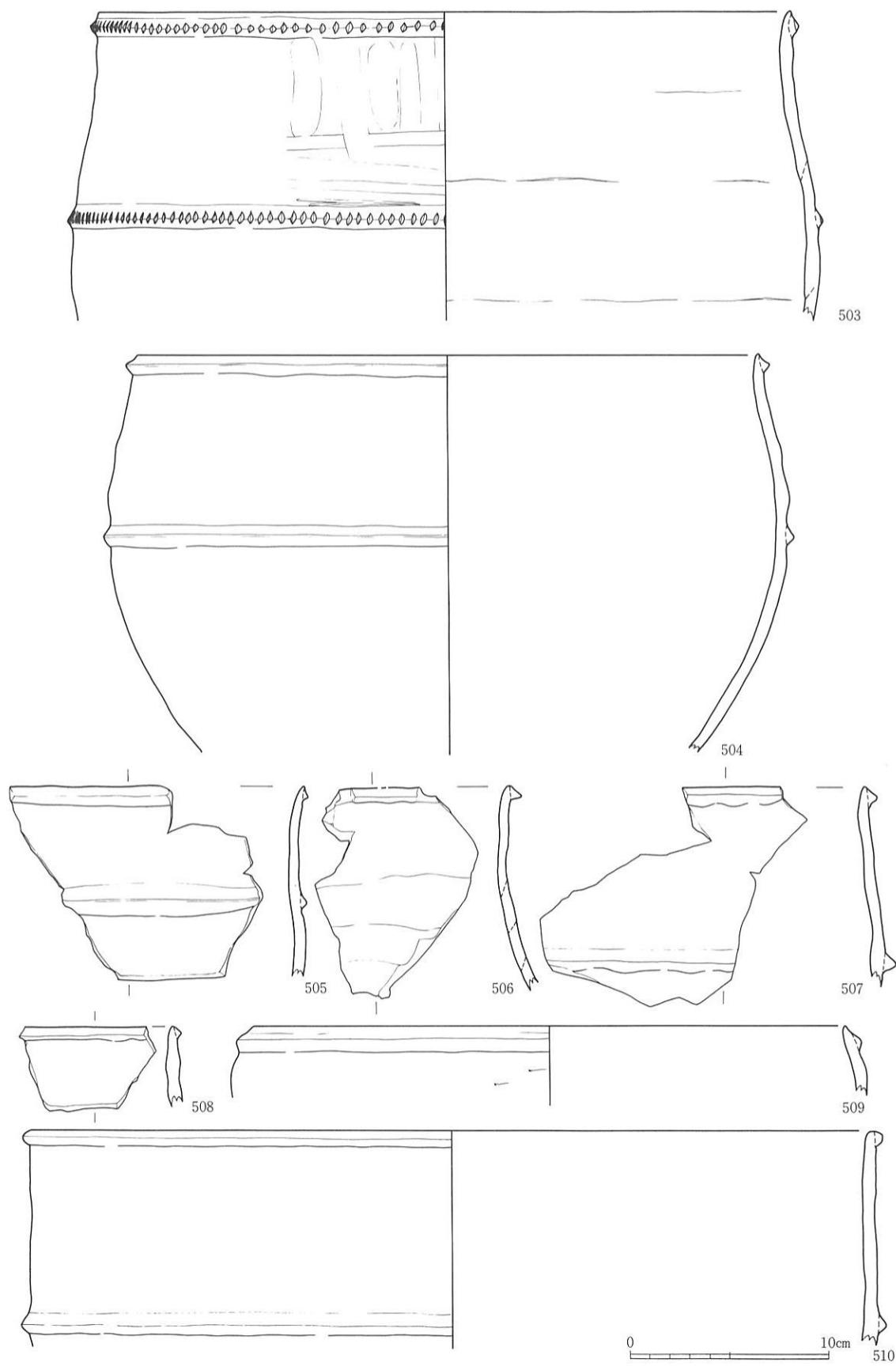


Fig. 88 繩文土器 XIII群(7)

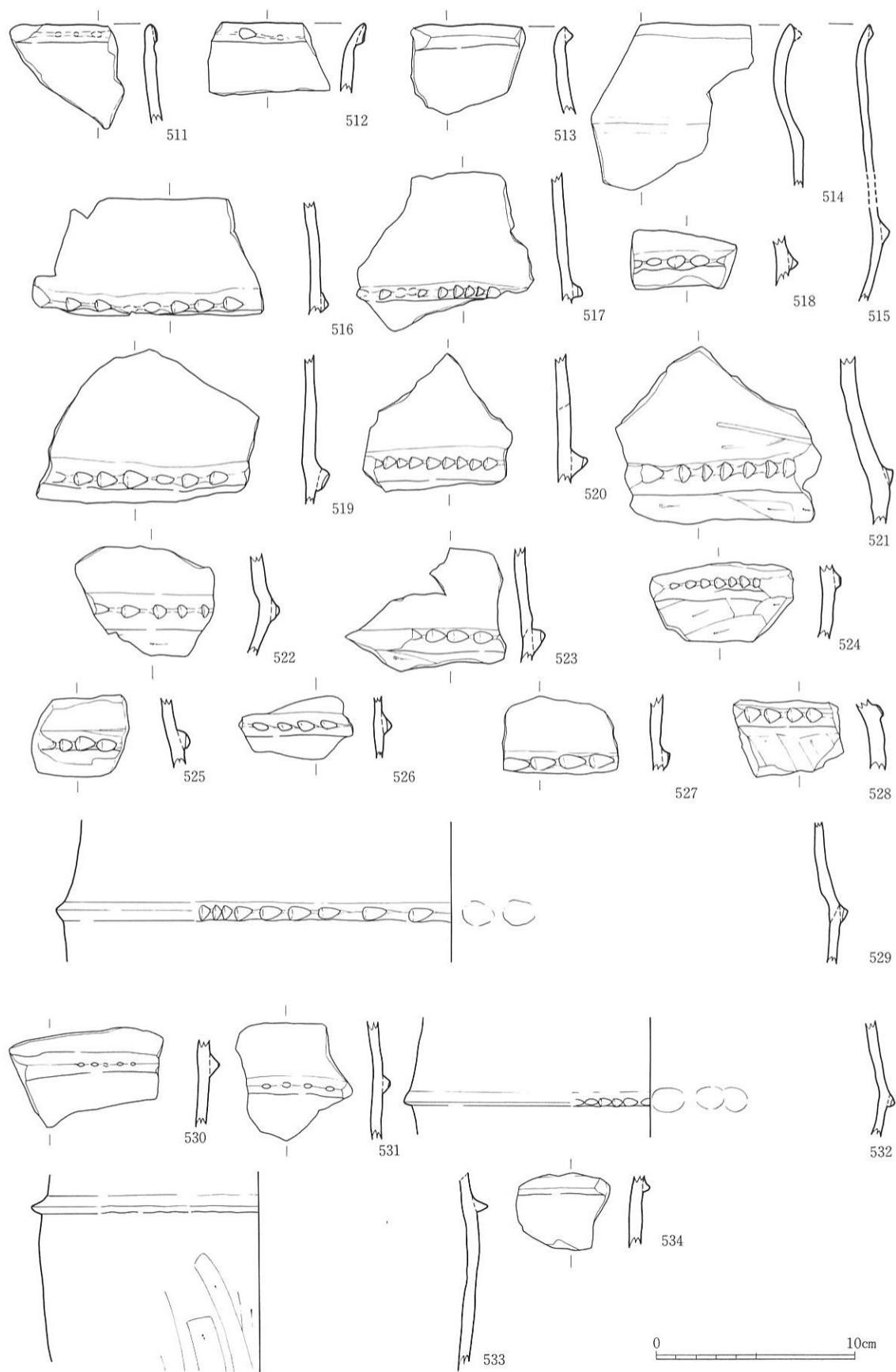


Fig.89 縄文土器 XIII群(8)

8. 土器

が外反してたちあがるもの（537）、口頸部が肩部からゆるく外反する椀形の器形（545?、546）がある。「く」の字口縁部をもつ浅鉢は口唇部がわずかに外反し尖りぎみに仕上げられるもの（536）と直行し尖りぎみの口唇部に粘土を貼付し肥厚させるもの（538）がある。調整は（536）の内面が条痕後ナデである以外は磨滅著しく不明である。口縁部が外反する（537）は、口唇部がわずかに外反し尖りぎみに仕上げられ、口縁部端部内面と外面屈曲部に各1条の沈線文が施される。調整は不明である。椀形の（545、546）はいわゆる浮線文土器である。（545）は胴部文様帶のみの残存である。残部僅少のため文様の復元は困難であるが、直線的な浮線で菱形または三角形の彫り込みを生みだし、残存部のなかで上部の浮線交点には刻みを下部の浮線交点には突起を付ける。この突起頂部は刻まれ2分割しており、それぞれの頂部下側に刺突文が施される。（546）は無文の肥厚した口縁部、頸部無文帶、胴部文様帶からなる。胴部文様は直線とわずかに弯曲する浮線文を用い、三角形の彫り込みとその間および上下のレンズ状彫り込みを連結させた意匠である。浮線文の交点には刺突文が施される。調整は（545）が磨滅のため不明である。（546）は口頸部は丁寧なミガキ状のナデ、胴部は浮線文技法によるミガキ、内面横ナデである。（545）の胎土は褐灰色（10YR7/1～6/1）を呈し白色砂粒を多く含み、明らかに他の土器と異なる。

鉢は、大型2点（539、542）と小型2点（540、541）の計4点ある。大型鉢は口縁がやや開いて直行する器形（539）と、胴部最大径から内弯する器形（542）がある。後者には口縁部端部に接して凸帯がめぐる。両者とも胴部上半に炭化物が付着することから、二次的な焼成を受けたことがうかがえる。小型鉢は口縁部がやや内弯してたちあがり、口縁部端部は丸くおさめられる。

壺は口頸部が内折する器形（535）と外反ぎみに直立する器形（543、544）の2種類がある。（535）は内折した頸部から口縁部端部が外反してつまみ上げられる。肩部より下半はわずかに残った部分から類推するならば、「く」の字に屈曲すると考えられ、肩部が最大径となる器形が想定できる。肩部には沈線文が1条めぐる。外面は丁寧なミガキ、内面は横方向ケズリの後ミガキで仕上げられるが、外面に比べ内面には砂粒が多く露呈し、また外面が乳白色であるのに対し内面は灰黒色を呈する。口頸部が直立する壺のうち（543）は凸帯が口縁部と肩部に巡り、凸帯の刻み目は非常に細かな「V」字形刻み目である。（544）は残存部僅少ではあるが、復元口径は約18cmを測り、頸部から肩部にかけてやや開く器形が想定できる。断面蒲鉾形の凸帯に小「OD」字形刻み目を施す。

XII群・XIII群底部(Fig. 91-547～564) 深鉢底部には丸底（550～552.554.555）、平底（553.556～563）がある。その他、台付き鉢（547）、浅鉢（548.549.564）のものと考えられる底部がある。

深鉢の丸底は、底部の厚さが厚いもの（550.551.555）と薄いもの（552.554）がある。前者は後者に比べ立ち上がりが急であり、後者は底部でやや面をなす傾向がある。深鉢平底は、先ず底部の器壁が厚いものと薄いものに分けられる。底部の器壁の厚いものはさらに底面直上でくびれ断面台形を呈するもの（561.563）と底面から直立するもの（556.557.560.562）、底面から内弯ぎみにたちあがるもの（553）がある。底部の器壁の薄いものは底面から直接胴部へたちあがる（558.559）。

台付き鉢底部（547）は脚部に外面からの非対称の2箇所の穿孔をもつ。内面には朱が残存する。浅鉢底部は、高台状の突起をもつもの（548）、わずかに凹底になるもの（549）、底面直上でわずかにくびれ、器壁が薄いもの（564）がある。（548）は内面が丁寧なナデで仕上げられる。

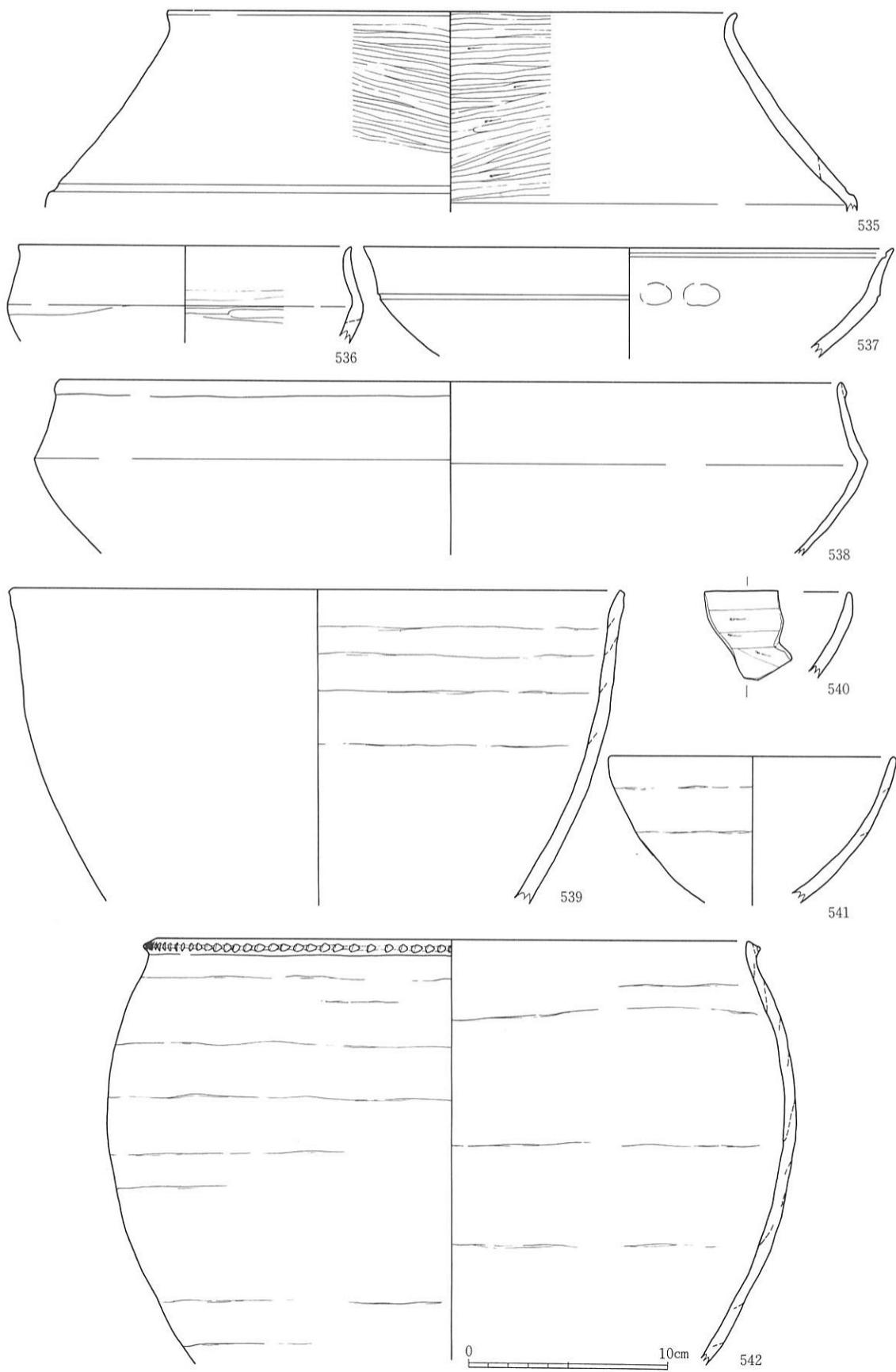


Fig.90 縄文土器 XIII群(9)

8. 土 器

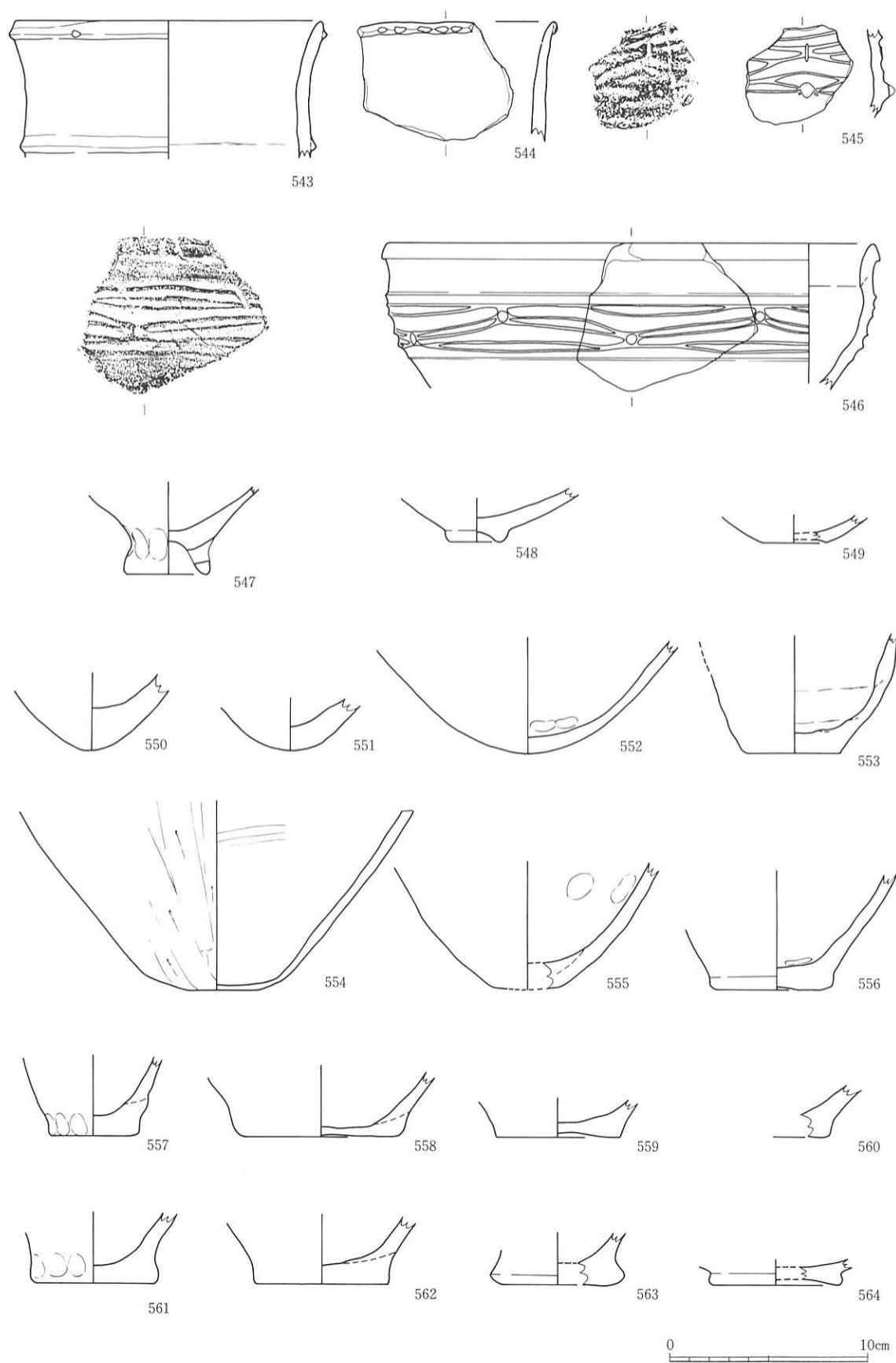


Fig. 91 縄文土器 XIII群(10)

2) 弥生土器

小阪遺跡では前期から後期の弥生土器が出土している。その出土状況を概観すると、前期の土器はおもに包含層中、または一部が溝から縄文晚期の凸帯文土器と共に出土し、中期の土器は河川内出土、後期土器はその末葉に位置付けられる土器が古墳前期土器とともに溝から出土する。弥生時代の範疇におさまる出土状況を示す遺物は中期河川出土土器のみであり、その他は前期、後期土器ともにそれぞれ時代が連続する出土状況を示す。ここでは弥生前期および中期土器をあつかい、後期土器は先述した通り第3章古墳時代において記述することとする。

弥生前期土器(Fig.92～94-565～600, Fig.96-608～636) 壺、甕、底部が出土した。

壺は、頸体部の境目に段をもつもの(565～568)、体部に段や木葉文をもつもの(569～572)、頸部に多条沈線文を施すもの(573～582)がある。

頸体部の境目に段をもつものは、大型(565.566)と小型(567.568)がある。口縁部は短く外反し、丸みをもつ(568)以外は、面をもつ。段の成形技法については、明瞭な粘土紐の継ぎ目が観察されず、(568)では籠状工具を用いて、段を明瞭につくり出しているのがわかる。表面の調整は内外面ともに磨滅のため不明である。

体部に段をもつものは、球形(569)または偏平な器形(570.571)をし、(569)は段・沈線文3条を施し、(570)は段・沈線文各2条間籠描木葉文を施し、(571.572)は段・沈線文間籠描平行斜線文を施している。(570)は全周復元できるものの磨滅が著しく、実測図には推定復元部分が多いことを了承されたい。(570)は、体部に復元16区画の木葉文をめぐらせる。施文の順序は平行沈線文→縦線文→「X」字→2重の円弧文であり、中心点の有無は不明である。施文部分は丁寧なナデ調整を施す。比較的残存良好な部位は茶黒色を呈しており、胎土が乳白色～橙色であることから黒色物質を塗布している。

既応の分類にあてはめれば、有軸X2木葉文(工楽1983)、陰刻表現有軸斜軸籠描木葉文(深澤1989)、cタイプ(亀谷1984)になる。(571)は、段をつくり出すための籠描沈線文が1条めぐる。外面には黒色物質が塗布され、また外面体部最大径付近と内面には炭化物が付着する。

頸部に多条沈線文を施すものは、口縁部が大きく外反し、長い筒状の頸部に球形の体部をもち、底部がやや突出する平底である。口縁部の端部が丸みをもつもの(573.574.575)と面をもつもの(576)がある。外面の調整は体部最大径付近のみ横方向、他の部分は縦方向のハケメ(5～6条/cm)であり、一部体部最大径付近において軽いヘラミガキがみとめられる。籠描沈線文は(576)が31条、(578)が $10 + \alpha \cdot 1 \cdot 7 + 1 \cdot 4 + \alpha$ 条、(579)が $11 + \alpha$ 条、(580)が10条、(581)が $5 + \alpha \cdot 1 \cdot 10 \cdot 1 \cdot 6 \cdot 1 \cdot 9 \cdot 1$ 条、(582)が $10 + \alpha \cdot 1 \cdot 8 \cdot 1$ 条の太細併用沈線文である。

甕は、短く外反する口縁部に裾すぼまりの体部をもつもので、無文のもの(584.585.591～596.600)、沈線文・段を施すもの(588.589)、沈線文を少条めぐらせるもの(586.590.597)、多条沈線文をめぐらせるもの(598)、直口の口縁部の端部下に突帯を貼付し、頸部に多条沈線文を施す「瀬戸内型甕」(599)がある。

無文の甕には、(600)が口縁部端部に刻み目をもつ可能性を残す以外は、端部に刻み目をもたない。口縁部の端部は、面をもつもの(584.585.600)ともたないもの(591～596)があり、(596)は口縁部端部が強く屈曲する。(584)は、体部外面の調整が縦方向ハケメ(9～10条/cm)を施し、内面に斜め方向のハケメを施す。体部上半に炭化物が付着する。他の個体は磨滅のため調整の詳細は不明である。(594.596)は、口縁部の屈曲が大きく中期にさがる可能性がある。

8. 土器

少条沈線文・段を施すものは、口縁部端部に刻み目を施す。(588)は口縁部の上下の端部に刻み目を施し、頸部に沈線文1条・段を施している。(589)は、口縁部端部に刻み目を施し、頸部に沈線文2条・段を施している。

多条沈線文を施すもののうち、(598)は6条、(599)は9条+ α 条の籠描沈線文を施す。

底部には、壺底部(608~623)、甕底部(624~634)と考えられるものがある。(635.636)は底部が上げ底をなし、蓋である可能性も否めないが、底面からの立ち上がり方などを考慮しここでは底部として報告する。

甕底部には、底部から外開きに開く体部をもつもの(624)と底部がわずかに突出する平底をもつもの(625~634)、底部が突出しやや上げ底のもの(635.636)がある。(636)の底側部には、輪状に爪痕がのこる。実測図中調整が無記入分の(624)が磨滅のため不明である以外はナデである。

弥生中期土器(Fig.95-601~607, Fig.96-637~639) 壺、甕、高杯、台付把手付鉢、底部がある。

壺は、口縁部(605)、体部破片(601.602)、底部を除いて復元できる個体(607)がある。(605)は、外反する口縁部がさらに上下に拡張し面をもつもので、上端部を欠損する。口縁部端部に上帯20条以上、下帯7条の2帯の簾状文が施される。上帯の簾状文はわずかに軸がずれることからハケ状の原体で施された可能性がある。胎土は角閃石を多く含む暗褐色のものである。(602)は簾状文に円形浮文を貼付し、簾状文の単位は上から6、7、17、18、11条である。6、7条は同時に施文され、間をヘラミガキにより消している。複体の原体によるものでその境目に円形浮文を貼付する。(601)は2帯の簾状文が施され、後期に属す可能性がある。(607)は、筒状の頸部に短く外反する口縁部の端部が上下にわずかに拡張し面をもち、体部最大径が下半にくる下膨れの無文の広口壺である。外面体部中央は横方向、その他は縦方向のヘラミガキを施し、体部内面は板ナデ状ハケメ(4~5条/cm)を施し、指押さえを残す。

甕は口縁部(606)のみである。短く外反する口縁部の端がわずかに立ち上がり面をもつ。口縁部の端部下端に刻み目を施す。口縁部上端には籠状原体の当たり痕があるものの、剥離のため明確な刻み目の存否は不明である。体部の外面はナデ、内面頸部より下は剥離のため断定できないが、粗いハケメ(7条/cm)の可能性を残す。

高杯は脚台端部のみの残存である(604)。裾開きの脚台の端部は、わずかに斜め外方に立ち上がり凹面をもつ。端部は三角形の粘土帶が貼付されたもので接合痕が明瞭に残る。内外面ともヨコナデ調整を施す。

台付把手付鉢(603)は、片方の断面楕円形の把手が残る鉢部下半から台部にかけて残存する。台部には、外側から内側に向かって上段9ヶ所(うち1ヶ所は未穿孔)、下段7ヶ所の穿孔があり、上段がほぼ均等に穿孔の位置決めがなされるのに対し、下段は不均等である。表面磨滅が著しいが外面に細かいヘラミガキを施している。

底部には、壺の底部になるかと考えられるもの(637.638)と壺か甕の底部と考えられるもの(639)の3個体がある。(637)はやや上げ底であり、調整は不明である。(638)は、薄い底部に粘土を貼り付けて体部を成形する。外面は縦方向のヘラミガキ調整を施す。(639)は底部外面ヘラミガキ、内面指押さえを残す。

3) 1990年度出土土器

小阪遺跡発掘調査の最終年度分として、I地区の未調査地の発掘調査が1990年5月から10月にかけて

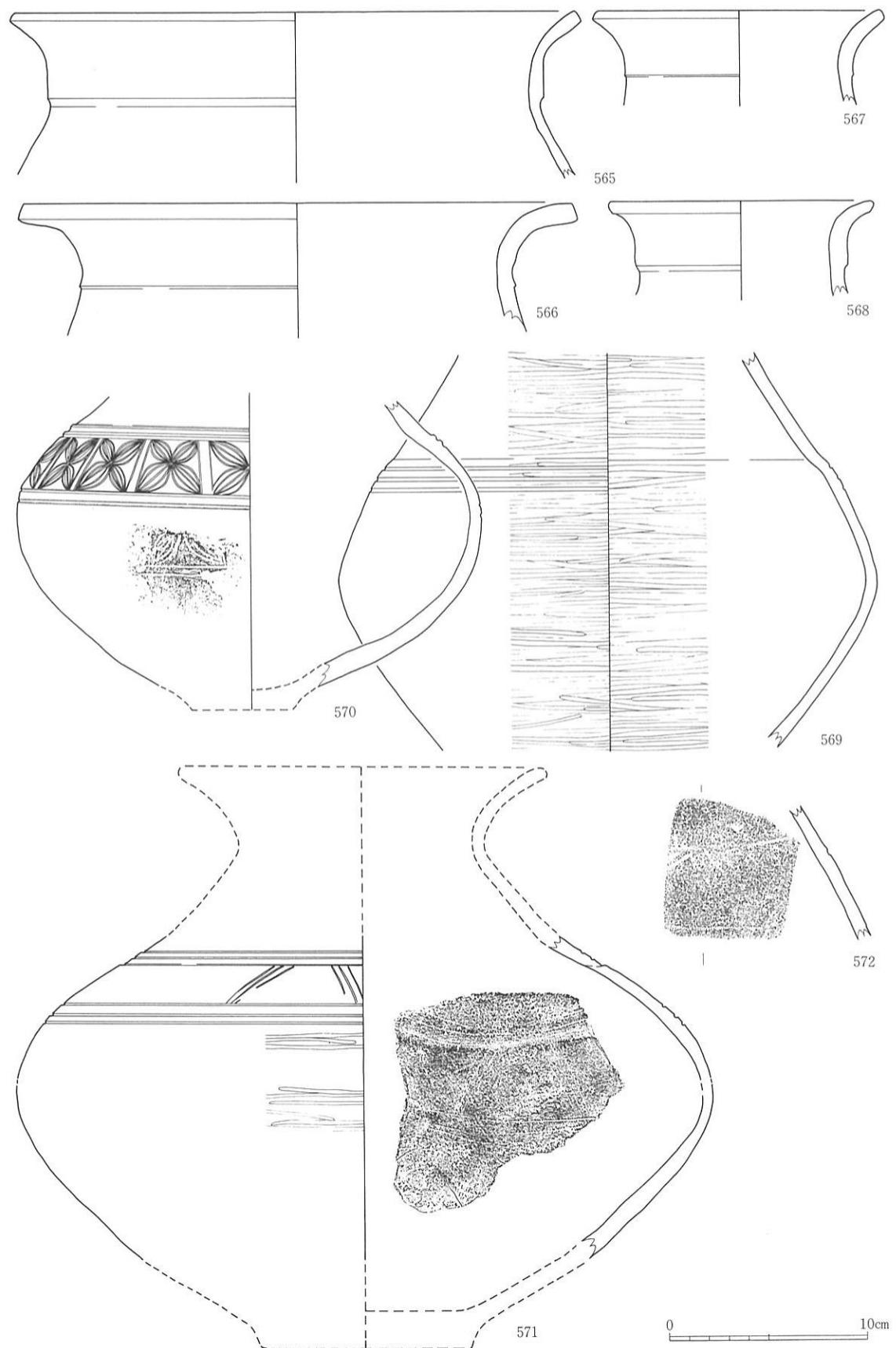


Fig.92 弥生前期土器(1)

8. 土 器

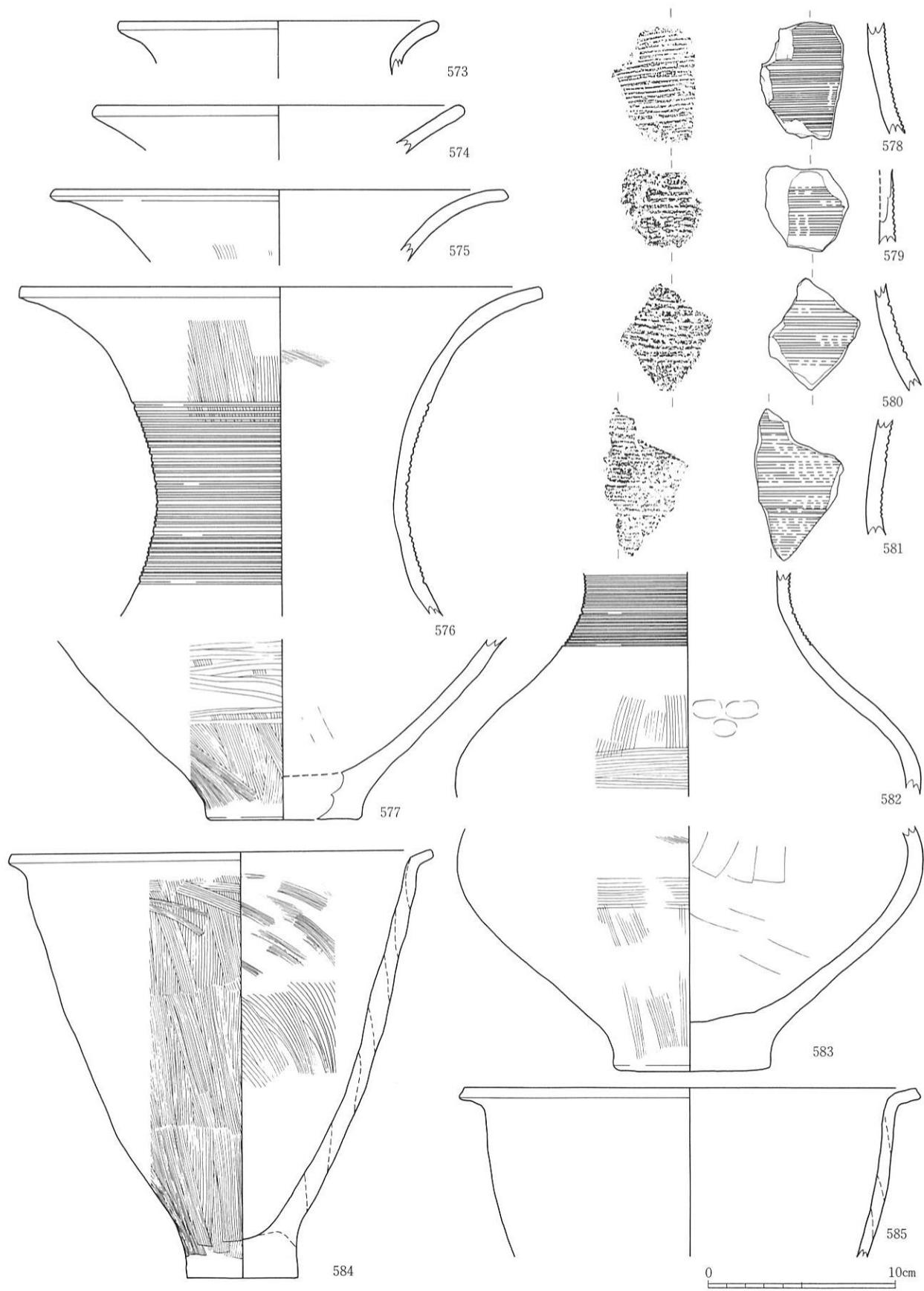


Fig.93 弥生前期土器(2)

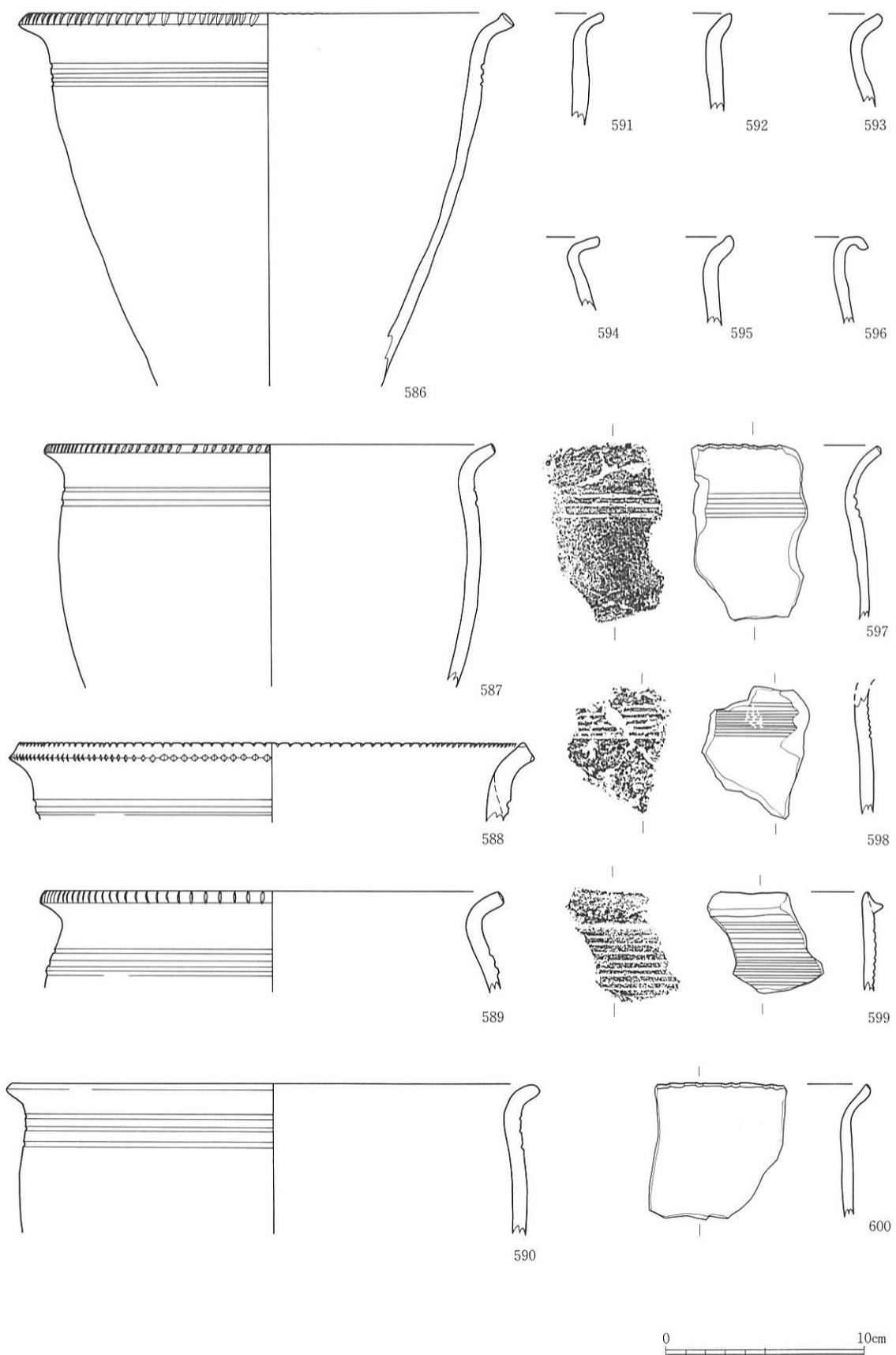


Fig.94 弥生前期土器(3)

8. 土 器

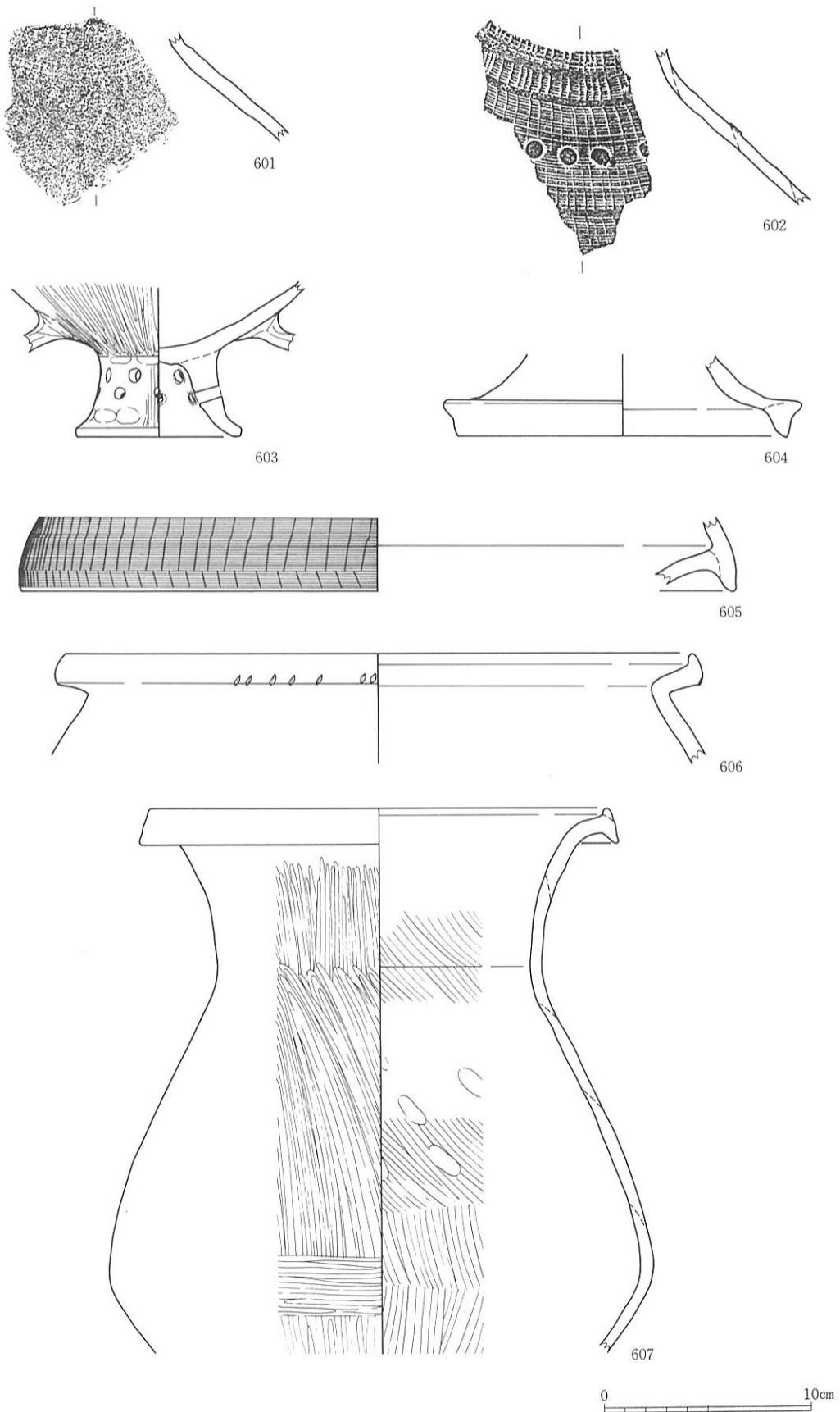


Fig. 95 弥生中期土器

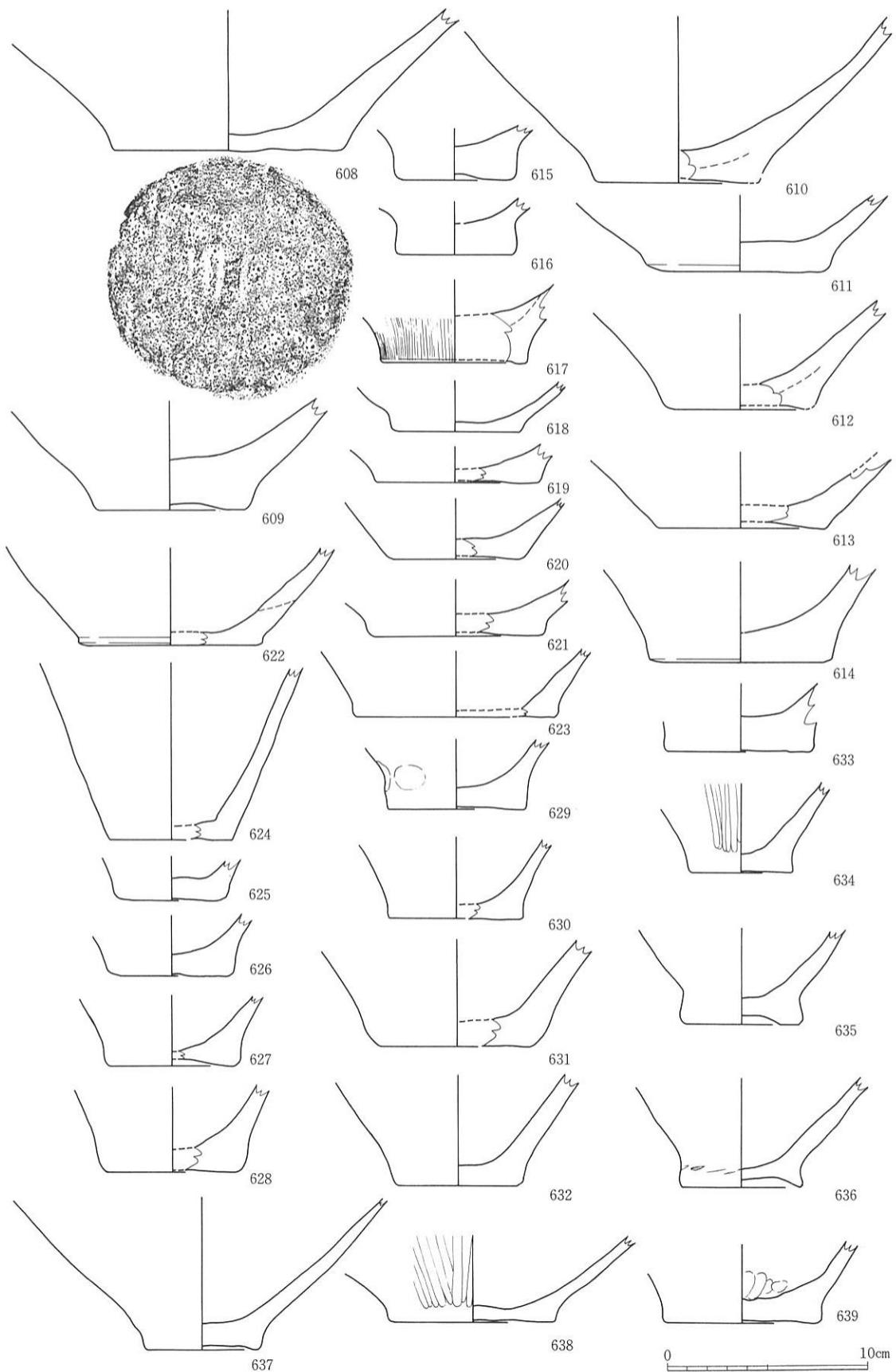


Fig. 96 弥生土器底部

8. 土器

行なわれた。この成果は『小阪遺跡（南その2－2）』として明らかにされている。ここでは、本書作成と一部並行したため、1) 縄文土器、2) 弥生土器にまとめられなかった1990年度出土土器を、別項とし報告する。

土器は、縄文早期末～前期初頭のものから晩期および弥生土器が出土している。年代の古いものから順に述べることとし、帰属する群および類と型式名は後尾の一覧表を参照されたい。

(640)は内外面ともに二枚貝による条痕調整であり、外面には条痕調整の上に曲線状の条痕が描かれている。器壁は約5～6mmであり、胎土には纖維が含まれる。

(641)はキャリパー形深鉢の口縁部である。隆帶上にハイガイを用いて貝殻押圧文を縦方向に施文し、隆帶下には二枚貝の腹縁部をもちいて刻み目を施すものである。口縁部端部内面には撫りの粗いRL縄文を施文する。

(642)は口縁部端部から横位RL縄文帯をへて隆帶による楕円形区画文を施す土器である。楕円形区画文のつなぎ部は突起状である。楕円形区画文下には3条の沈線文がみられ、胴部文様になると想われる。

(643)はRL縄文に2条の沈線文を描く胴部片である。外側の線がややふくらむことから紡錘文となる可能性がある。

(644)は深鉢胴部片であり、RL縄文に沈線文を用いて紡錘文を描く。胎土が(642)と類似し、出土地点も近接することから同一個体となる可能性も考えられるが、(642)にみられる楕円形区画文下の沈線文が3条であり、またIV群17類とした北白川追分町遺跡でいう深鉢B類の胴部文様では明らかな紡錘文がほとんどみられないことから、同一個体と確定するには至らなかった。

(645～648)は波状口縁をもつ深鉢の口縁部である。

(645)は口唇部が丸くおさまり、弯曲する口縁部に太い2条沈線文による区画文とその下に細い沈線文が2条描かれる。これは中心となる文様が口縁部から胴上部に移ったものであり、(94)と類似する。破片資料であり、文様構成からは後期北白川上層式の可能性があるが、胎土に砂粒を多く含み器壁も厚い点から中期末土器である可能性が高い。

(646)は頸部が強く屈曲するくびれの強い器形の深鉢である。口縁部は押し引き沈線文を用いておそらく波状口縁にそって施文し、波頂部下には刺突文上に渦文を配する。胴部は逆U字文になるであろう沈線文およびその間に施文される「S」字形文からなる。類似する深鉢は東庄内B遺跡などにみられ三重県を中心とする地域に散見できる。山の神式との関連性が考えられる土器である。

(647)は波頂部が尖るもので、(87)や(90)に類似する土器である。口縁部の屈曲はわずかであり、口縁部にはLR縄文地に沈線文が1条描かれる。

(648)は僅少な破片であるが、口縁部に区画文を施文するものである。

(649)はゆるやかなくびれをもつ深鉢の、わずかに内弯する口縁部(a)とくびれ部(b)である。口唇部、口縁部端部に横位RL縄文、胴部に縦位RL縄文を施す。

(650)はゆるく内弯する胴部片で、ゆるやかなくびれをもつ深鉢の胴部下半と考えられる。LR縄文を不定方向に施文する。

(651)はややくびれながらゆるく内弯し、ゆるやかなくびれをもつ深鉢のくびれ部から胴部下半にかけての破片である。主に横方向にナデを施す。

(652)はゆるやかなくびれをもつ水平口縁の深鉢であり、口縁部が内弯し、やや肥厚する。口縁部文様は横位LR縄文地上にほどこされ、渦文およびその脇に区画文を配する。口縁部と胴部を分かつ文様

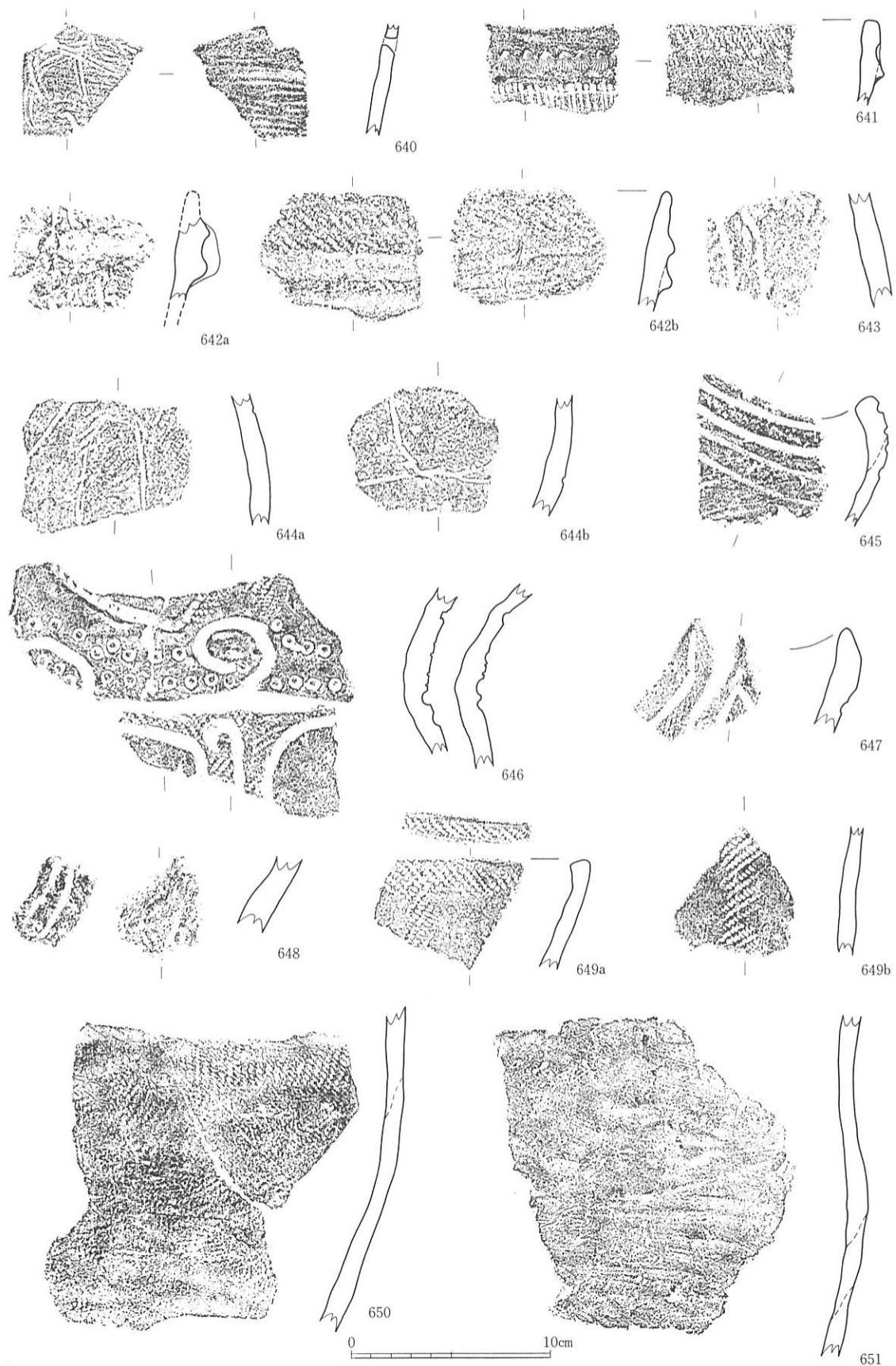


Fig.97 1990年度出土土器(1)

8. 土器

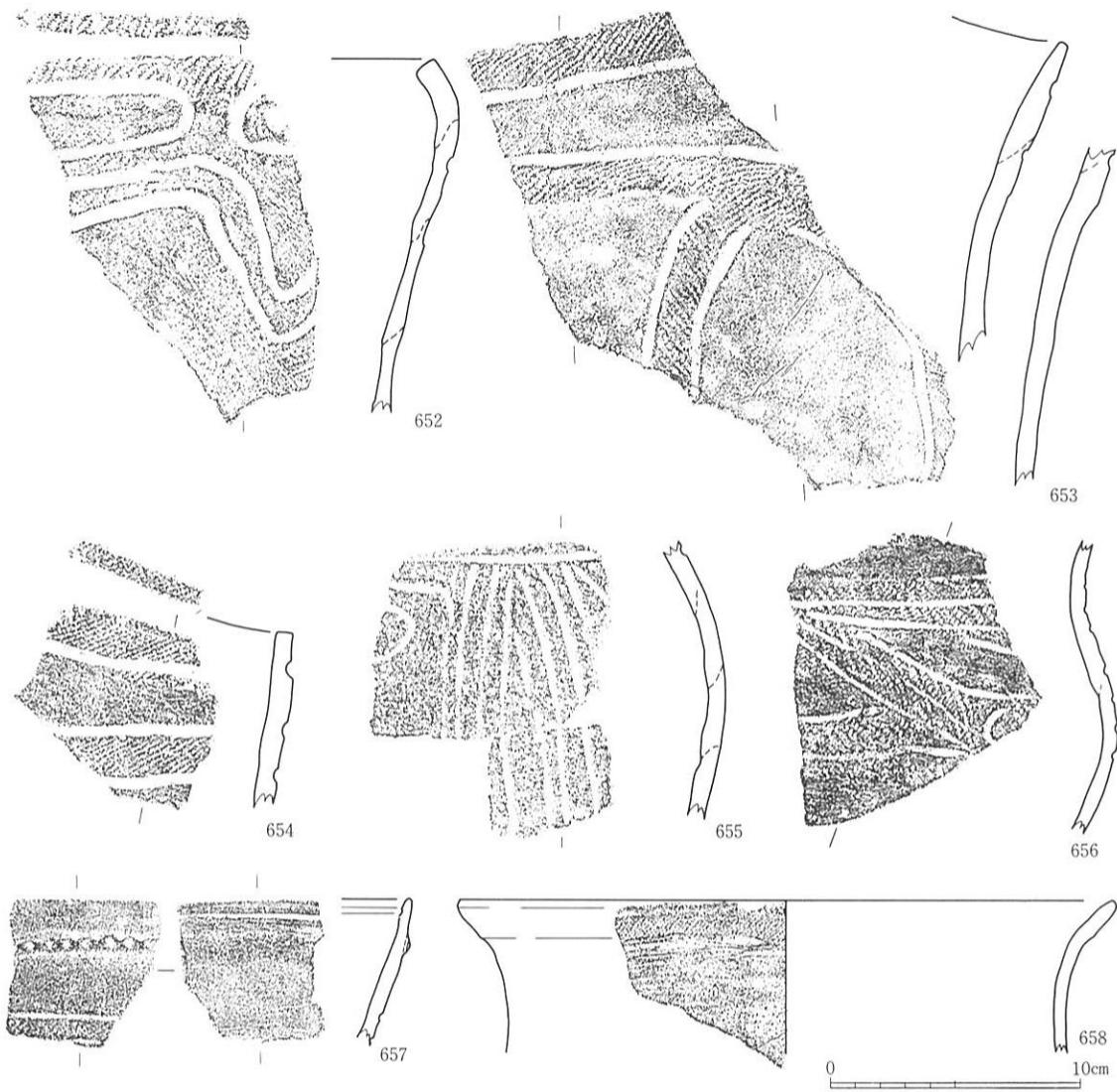


Fig.98 1990年度出土土器(2)

として、渦文下において大きく弯曲する波状文が描かれる。

(653)は波状口縁深鉢の口縁部から胴部にかけての破片であり、ゆるやかにくびれる器形が想定される。口縁部端部および口縁部と胴部を画する隆帯にそってLR縄文が施文され、前者は下部、後者は上部の沈線文によって区画される。胴部文様には沈線文間充填縄文帯によって紡錘文が施文され、口縁部文様と胴部文様が連続している。類例は、岡山県日羽建行田遺跡や京都府日野谷寺遺跡出土土器にみられ、縄文中期末北白川C式から後期初頭中津式への土器変遷をみるにあたっての好資料である。

(654)もまた(653)と同じく波状口縁深鉢の口縁部である。口縁部における隆帯はみられない。口唇部にLR縄文、口縁部端部および一段下がったところに沈線文間充填縄文帯が施文される。

(655)は弯曲する深鉢胴部片である。頸部の沈線文下に縦位重弧文が描かれる。

(656)はくびれをもつ深鉢の頸部から胴部にかけての破片である。胴部には3本沈線文間充填縄文が展開し、沈線文の先端は一部が鉤状に曲がるなど完結しない。

(657)は朝顔形深鉢の口縁部である。口縁部外面には一段下がったところに突帯が1条めぐり、こまかに「O」字形刻み目が施される。内面には1条沈線文がめぐる。

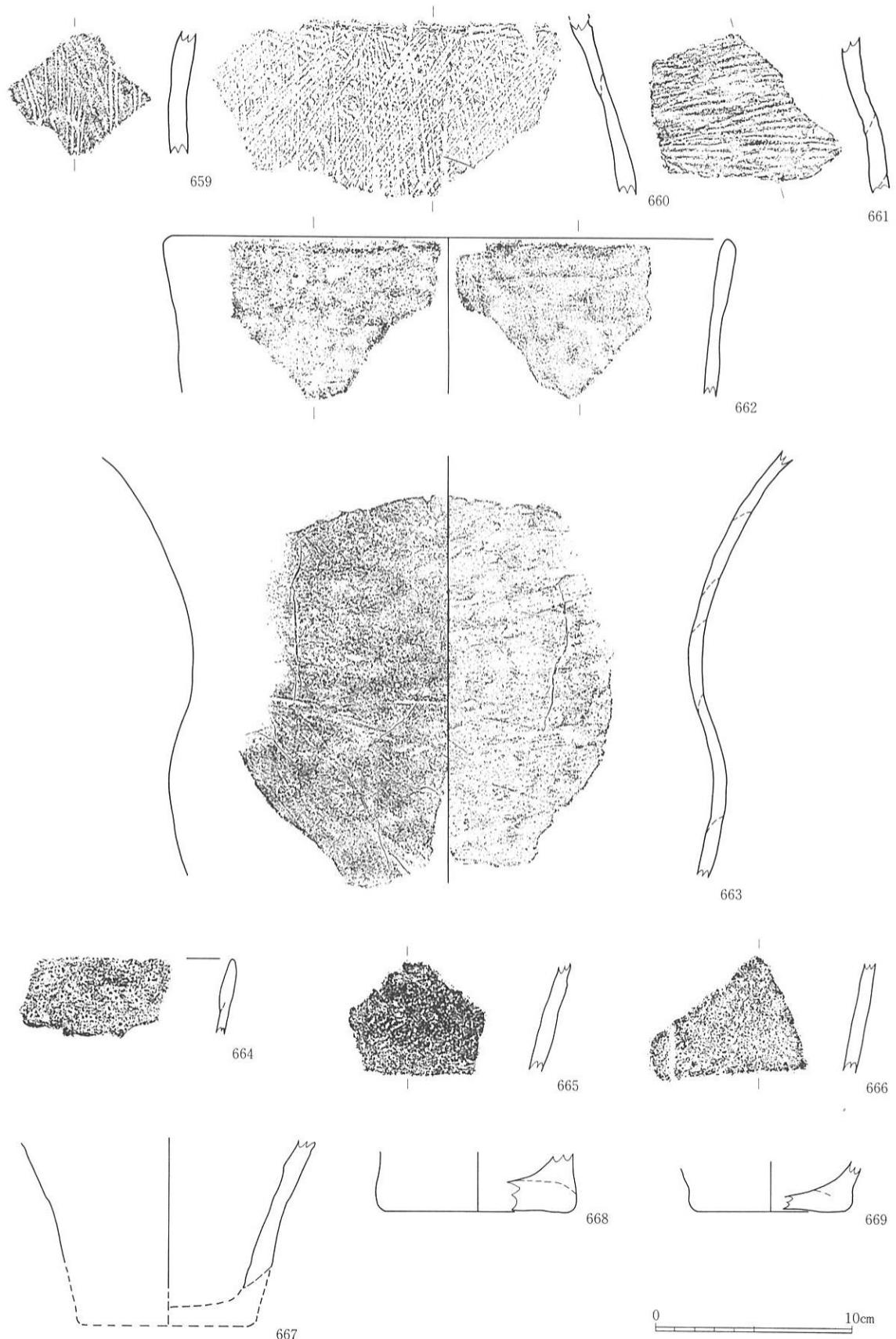


Fig.99 1990年度出土土器(3)

8. 土器

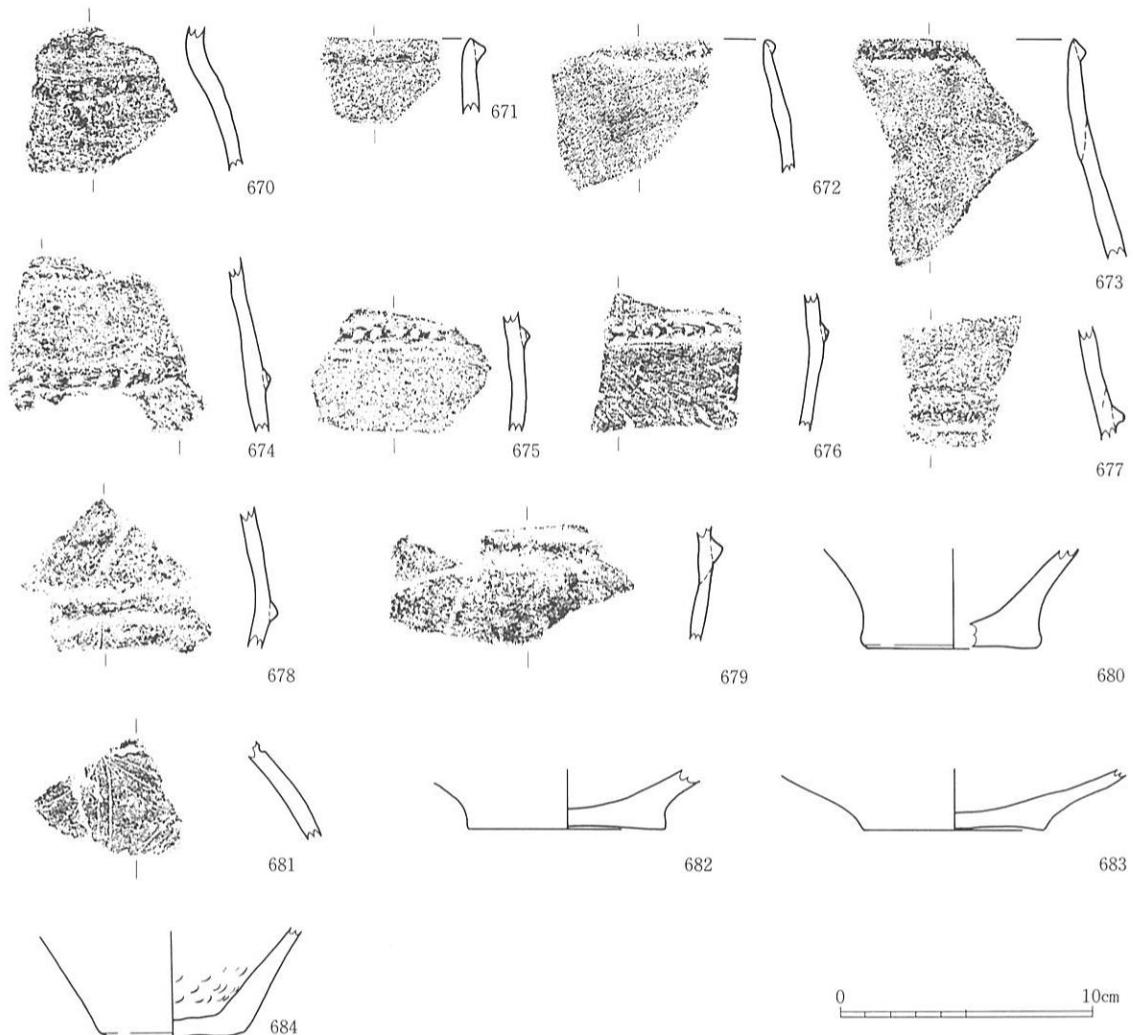


Fig.100 1990年度出土土器(4)

- (658)は深鉢口縁部である。肥厚する口縁部には節の小さな横位LR縞文が施される。
- (659)は深鉢胴部片であり、くびれ部に相当する。縦方向条線文が施される。
- (660)は深鉢頸部から胴部にあたる破片である。1単位4条以上の条線文が縦方向に施文された後斜方向に施文される。
- (661～664)は無文である。(661)が横方向巻貝条痕による調整であるほかはナデを施す。
- (665.666)は深鉢胴部片であるが、磨滅著しく詳細は不明である。
- (667～669)は底部である。(668)が底面より直立する以外は外方向に開くものである。
- (670)は頸部がナデ、胴部はケズリ調整であり、凸帯はみられない。
- (671～679)は刻み目凸帯が貼付される土器である。(671～673)は口縁部端部に貼付される。刻み目は無いもの(671～673.677.678.679)と小「OD」字形のもの(674～676)がある。
- (681)は弥生前期壺形土器肩部であり、木葉文が施される。1条沈線文の下に施された縦方向2条沈線文によって区画されたスペースに、X字に弧状沈線を組み合わせた文様が施文される。顔料は認められない。
- (680.682～684)は底部である。(680)は縄文晩期深鉢底部、(682.683)は弥生前期壺形土器底部と考えられる。(684)は内面に指押さえにともなう爪形が残る。

4) 既存の土器型式との対応関係³⁾

I群は、縄文早期末～前期初頭の土器である。

1類、2類ともに条痕調整のみの土器であり、明確な型式比定はできないが、1類は口唇部が尖らず面をなし、北白川下層I式(岡田1965)以前に位置づけられる。

II群は、縄文前期の土器である。

3類は、「爪形文中央が最も押圧が深い」(網谷1988)とする当該型式のC字形爪形文の特徴とは反するものの、小型で間隔を開けて施文されており、北白川下層IIb式(古)(網谷1981, 1982, 1985, 1987)にあたる。

4類の羽状縄文は、北白川下層II式～III式(網谷1988)に比定される。

5類は、鷹島式(巽・中村1969)に特徴的な幅広い爪形文もみられないため、大歳山式(直良1926, 1927)に含まれると考えられる。しかし、口縁部が肥厚せず、隆帶上の刺突文も明確にΣ字状工具によるものとは判断しがたい土器で、しいて言うならば、大歳山出土縄文土器第IVC類(中村1986)に類例が求められる。

III群は、縄文中期の船元式と里木II式土器(間壁1971)にあたる。

6類は、船元I式に比定される。(7)は、類例が里木貝塚船元I式A類にみられ、幅広い爪形文のかわりに刺突状の圧痕を用いており、船元I式のなかでも新しい段階に位置づけられる。(8)の口唇部刻み目は、里木貝塚船元I式B類に多くみられる。

7類の円形刺突文は、里木貝塚船元II式A類、B類にみられる。8類は、里木貝塚船元II式A類に類例がある。9類の二枚貝殻頂部圧痕文は、里木貝塚では船元I式にみられる施文法ではあるが、隆帶上刻み目や隆帶下半部の二枚貝腹縁部(?)による刻み目など船元II式の要素を含む。

同一面出土土器である7類から9類の土器は、大きくは船元II式に含まれるもの、一部は船元II式のなかでも古い段階に位置づけられる可能性をもつ。

10類は、船元II式である。

12類は、撫糸文を地文とし、里木貝塚里木II式である。

13類は、類例を里木貝塚里木III式や東海地方の咲畠式(磯部・久永ほか1960)もしくは中富IV・V式(増子1981)にみいだせる。

IV群は、縄文中期末～後期初頭の北白川C式(泉1985)である。以下各類を北白川追分町遺跡における土器分類(追分町分類と略称)および分析結果と比較、検討する。

14類は、口縁部と胴部を隆帶で区分し、隆帶部分で器壁が内折したのち口縁部がたちあがるものや口縁部が直線的にたちあがるものがあり、追分町分類の深鉢A1、深鉢A2類に相当する。追分町遺跡に比べ本類の隆帶は低く痕跡的に残り、口縁部文様も簡略化した土器が多い。

15類は、隆帶によって口縁部と胴部文様が区分されるという点においては14類と同じであるが、口縁部文様帯が縄文のみの施文で、胴部に文様が施文される点が特徴的である。追分町分類深鉢A2類とD2類の折衷形式とも考えられ、追分町分類では的確に該当するものは見当たらない。

16類は、追分町分類の深鉢A4類にあたる。口縁部と胴部を区分する連弧文、波状文、横位短直線文は、14、15、19類においても用いられるものがあり、北白川追分町遺跡における指摘どおり、他器種に一部共通する文様であることから、胴部片には他類が含まれる可能性がある。胴部文様には垂下沈線をもつものを含む。屈曲のないすん胴な器形であり、口縁部文様も簡略化している。

8. 土器

17類は、追分町分類の深鉢B2類にあたる。橋状把手を有する深鉢B1類は、本遺跡においては認められない。

18類～21類は、追分町分類深鉢C類に相当するものであるが、ここでは突起状山形口縁の形状を第1要素とし、口縁部文様を第2要素として分類した。

18類は水平口縁と山形口縁が同一個体に用いられ、類例としては河内長野市三日市遺跡出土土器1点を知るのみである。口縁部文様帯と胴部文様帯は連結せず、しかも「J」字文の萌芽形態ともみられる胴部の渦文から、北白川C式から中津式を考えるにあたっての好資料と考えられる。

19類の断面正円形の筒状山形口縁は、中津式に多くみられ、器形のみでいうならば、中津式に含まれる可能性が大きい。

20類の口縁部文様は、区画文と沈線文のみがあり、追分町分類の深鉢C1、C2類にあたる。

21類は、口縁部が屈曲し面をなすものと内弯するものがある。後者のうち破片資料には、波状口縁になる可能性をもつものもあり、追分町分類深鉢A類と区分しがたい。口縁部文様は、前者は区画文、沈線文、後者は区画文、沈線文、縄文があり、型式的に後者は前者に比べ新しい可能性が考えられる。

22類は、追分町分類深鉢D2類にあたる。(103)は口縁部が「く」の字形に屈曲し、器形的には深鉢A3類といえ、本遺跡では1点のみの出土である。深鉢D2類はその系譜を深鉢B類に求める考え方がある(中村1980)。本遺跡においては、深鉢B類はその退化形態であるB2類のみの出土であり、しかも3点のみと点数が限られる。これに比し深鉢D2類は14点出土している。出土地点をみると、13Iトレンチでは同一面で両者は出土するものの、深鉢D2類の多くは中津式を含む16Fトレンチ河川出土であり、同河川からは深鉢B2類は出土していない。他遺跡に目を転ずると、北白川追分町遺跡では、中期末の最も新しい様相を示す土器群とされる、BE32・33区のみに深鉢D2類はみられ、また今安楽寺遺跡(能登川町教育委員会1990)、東庄内A遺跡において深鉢D2類は中津式と共に伴することから、深鉢D2類は中津式まで継続するといえる。以上より、中期末葉の13Iトレンチ出土土器の時期前後が、深鉢B2類とD2類の消長の転換期である可能性は指摘できるが、深鉢D2類の系譜を深鉢B2類に求めることについては、その分布域についての検討などが必要と考えられ、ここで性急に結論をだすことはできない。

23類は、追分町分類の深鉢D1類である。

24類は、無文という点では追分町分類の深鉢F類に比定されるものの、隆帯をめぐらせ、ずん胴な器形という点については類例をしらない。(118)は、概報時、北白川上層式最終末として報告したものであるが、隆帯を口縁部と胴部を区分するものと捉え、今回は本類に含めた。

近畿地方中・南部における中期末葉の無文深鉢は、全面縄文が主体であり、条痕文は少数であることが指摘されている(玉田1985)。本遺跡の無文深鉢は、中津式が少数出土する16Fトレンチ河川から、縄文10点、ナデ14点、条痕2点、擬縄文2点が出土している。縄文が中期末的なもの、条痕と擬縄文が後期的なものと考えると、ナデによる無文深鉢の帰属が問題となる。北白川追分町遺跡では、深鉢F類とされる縄文のない無文土器が4点出土している。一方、中期末土器とともに中津式が出土した片吹遺跡SB07では、中津式に含めて縄文のない無文土器が出土している。小阪遺跡周辺では、中期末葉土器が主体の西浦橋遺跡や、中津式土器が主体の池田寺遺跡で、無文深鉢が出土しており、条痕やナデの深鉢は中津式に多くみられる傾向がある。無文土器は、有文土器に比べ年代の比定が困難であり、今後資料の蓄積をまって、その年代差、地域差を検討する必要性がある。

14～24類の胴部片a～j類は、口縁部との組合せに注目してみていただきたい。

a類は、14、16、19、20、21類の波状口縁もしくは山形口縁に用いられる。追分町分類においても同様に、深鉢A1、A2、A4、C類にみられる。

b類は、16類の連弧文、波状文の一部、または後述のh類紡錘文の一部になる可能性をもつが、細片のため特定は困難である。

c類のうち(134)は、中部東海地方の島崎III式、山の神式(増子1981)にみられる、沈線文土器の羽状沈線文である可能性が考えられる。

d類は、垂下線のみの胴部文様は14～24類中認められないものの、縦位縄文、蛇行沈線文と組合わさる土器は15、19類に認められる。追分町分類においても、垂下線のみの胴部文様はみられず、縦位縄文と組合わさる文様が、深鉢A1、B類の胴部に施される。

e類は、22類の胴部文様である。追分町分類では、深鉢A4類星田式系の胴部文様とされる。

f類は、16類の胴部文様にみられる。星田遺跡出土土器にみられる文様であり、加曾利E式土器にみられる逆「U」字形沈線文間に縦位縄文を施す胴部文様の退行したものであろうか。

g類は、本遺跡、追分町遺跡ともに口縁部文様との組合せを示す資料はない。

h類は、21類にみられる。追分町遺跡では該当する資料は出土していないものの、丁・柳ヶ瀬遺跡、布留遺跡、日野谷寺SK261出土資料などに紡錘文が施される土器があり、h類は追分町分類A2、C類にあたる波状口縁、山形口縁の土器に多く用いられる胴部文様といえる。注目されるのは(175.176)にみられるような胴部文様を横方向に連結する文様の存在である。北白川C式と中津式の文様構成の相違点として、胴部文様の縦方向から横方向への変化があげられることから、これらの資料はその漸移的な文様として理解できる。

i類は23類、j類は24類の土器にほぼ対応するが、j類は有文土器の胴部下半の可能性もあり、小片の場合確定できない。

IV群の深鉢以外の器種では、浅鉢(196)の突起部が無穿孔であり、橋状把手の退行したものと考えられることから、北白川C式のなかでも新しく位置づけられる。

IV群は、E、F、G地区を貫流する河川とI地区の土器片敷遺構を中心とする面の2ヵ所から集中的に出土している。深鉢各類の比率をみると、14類14%、15類3%、16類25%、17類5%、18類1%、19類5%、20類5%、21類22%、22類16%、23類2%、24類2%であり、16類、21類が多く、22類、14類がこれにつづき、他の類は少ない。次に縄文の撚りについてはLR89%、RL11%と圧倒的にLRが大勢を占める。以上のような組成を示すIV群は、北白川C式のなかでも新しく位置づけられる土器群と考えられ、北白川C式4期(泉1985)、北白川C式3様式b段階(泉1988)に相当すると考えられる。

V群25類、26類は、中津式に比定される。破片資料であり全体の文様構成は不明ではあるが、口縁部端部に縄文帯が接し、胴部文様が紡錘文となる(653)は、右近次郎遺跡や津雲貝塚、日野谷寺遺跡SK261に類似するモチーフがある。中津I式(古)(玉田1988)に、磨消縄文帯が口縁部端部から一段下がったところに施され、胴部文様も「J」字文や「H」字文となる個体は中津I式(新)に位置づけられる。器壁の薄い突起状山形口縁(219)は、裏陰遺跡や大官大寺下層遺跡など、中期末～後期初頭の土器が出土する遺跡に類例がみられ、「J」字文が同一個体である可能性が高いことからここでは中津式に含めている。

その他の器種で双耳壺は、西日本において中津式から福田K2式にかけてみられる器種であり、年代の遡る資料としては仕出原遺跡例がよく知られている。(244)は、肩の張る器形とモチーフから中津式

8. 土器

に位置づけられ、同時期の類例としては恩智遺跡、琵琶湖湖底遺跡、岩の鼻遺跡例などがあげられる⁴⁾。

VI群27類は、把手状に肥厚した口縁部のみであるが、四ツ池式期(泉・玉田1986)あるいは広瀬土壙40段階(千葉1989)である。

VII群28類、29類は、北白川上層式1～2期(泉1981)にあたる。(250)は関東の堀之内II式系のモチーフであり、一部3本沈線文による磨消繩文を用いることから、北白川上層式2期の新段階に比定できる。

VIII群は、北白川上層式2～3期(泉1981,1988)が相当し、遺物集中区出土土器は、ある程度の時期幅をもつ土器群と考えられる。

30類では、(267)が頸部に垂下条線文を残し雑な口縁部文様を施すことから、北白川上層式2期に位置づけられる。(286,287)にみられる口縁部複合鋸歯文は、北白川上層式2期に多い文様である。一方、胴部片のなかで、格子文は北白川上層式3期に多い。また、3～4条以上の帶状磨消繩文は、北白川上層式3期に特徴的な文様である。

31類は、淡輪遺跡(大阪府教育委員会1981,1987)に類例があり、北白川上層式3期に位置づけられよう。その他の個体は口縁部端部の肥厚が明確なものはなく、北白川上層式2～3期である。

32類のうち、(329)はj、h類にみられるような多重三角形文であり、堀之内II式でも古い様相を示す。(330)の「8」字形の類例は、「S」字文の対面する形とみると、桑飼下遺跡(平安博物館1975)があげられる。桑飼下遺跡報告では当該資料を一乗寺K式とみるもの、(330)は北白川上層式3期の範疇に含まれるものと考える。

33類では、肥厚する幅の広い口縁から狭い口縁、頸胴部の区分では沈線文、段と文様のみの区分がみられ、型式的に幅をもつ。淡輪遺跡1986年度出土土器に類似し、北白川上層式2～3期にまたがる。

34類、35類の粗製土器は、明確な型式比定は困難であるが、肥厚する口縁が少なく、口縁部端部が内面からのナデにより尖り外反するものが多いことから、有文深鉢同様北白川上層式2～3期と考えられる。

その他の器種では、北白川上層式2～3期に特徴的な鉢C(泉1981)が多く認められる。注口土器は、後述するIX群にも含まれ、北白川上層式3期～一乗寺K式に資料が多く、堀之内II式～加曾利B1式に比定される。浅鉢(274)の類例は、桑飼下遺跡や飛鳥京下層遺跡などに認められ、文様が4単位であることなどから、これらは北白川上層式3期と考えられる。

VIII群の繩文の撲りは、LRが優勢であり、北白川上層式2期から3期にかけてLRが優勢になる近畿地方の趨勢に合致する。器種組成では、北白川上層式3期に典型的な、口縁部が内弯する3単位の波状口縁有文深鉢が本群にはみられないことが注目される。

IX群は、15F遺物集中区以外の土器群で、北白川上層式3期、一乗寺K式、元住吉山I式(岡田1965)にあたる。北白川上層式3期には(401,403,407,408)が、一乗寺K式には(406,419)が、一乗寺K式～元住吉山I式には(402,413,414,421)が、元住吉山I式には(423)が相当する。(407)は比較的器壁が厚く、口縁部が内弯することから、北白川上層式3期的な要素をもつ土器と考えた。(426)は、器形が一乗寺K式～元住吉山I式的ではあるものの、口縁部が屈曲せず、胴部には上段RL、下段LRの羽状繩文的な繩文を施すことから北白川上層式2期にさかのぼる可能性を残す。

X群は、巻貝による凹線文と扇形圧痕を特徴とし、宮滝式に相当する。

39類の(427)は完形品の類例が宮滝遺跡、御経塚遺跡の御経塚II式(高堀1983)にみられる。40類の(428)は胴部の屈曲がみられず、鳥居遺跡B群第1類(中村1977)よりは新しく、瓦口森田遺跡出土土器(香芝町教育委員会1989)よりは古い様相を呈する。39類は宮滝式前期～後期、40類は宮滝式後期(丹羽

1989)と考えられる。

XI群～XIII群は縄文晩期土器である。

XI群は滋賀里III式(滋賀県教育委員会1973)である。

41類は凸帯がなく、口唇部に刻み目が施されることから、滋賀里III式と考えられる。

42類の(431.436)は、凸帯が認められず、滋賀里III b式(家根1981)に比定できる。(437.438)は口縁部を欠き、明確な型式はわからないものの、(437)の凹底や(438)の器形から滋賀里III b～船橋式に含まれると考えられる。

XII群は滋賀里IV式である。

43類は、凸帯が口縁部端部からやや下がって1条めぐり、口唇部が面取りされる(440)。屈曲部に施される沈線文は、口酒井遺跡第1段階に類例がみられることから(浅岡1988)、滋賀里IV式と考えられる。

44類にみられる口唇部刻み目および口縁部内面沈線文は、口酒井遺跡第1段階～第2段階に類例があり、滋賀里IV式～口酒井式(泉1986)に位置づけられる。

その他の器種では、「く」の字口縁の浅鉢で内面口縁部端部に多条の沈線文を施す土器(441)は、口酒井第2段階に類例がみられ、滋賀里IV式～口酒井式に位置づけられる。(446.447)は口縁部端部の屈曲がみられず、口酒井式～船橋式となろうか。

XIII群は滋賀里V式である。

45類は、口縁部端部から下がったところに凸帯がめぐる深鉢を主体とする土器群であり、おおきくは船橋式に位置づけられる。

46類は、口縁部端部に凸帯が接した深鉢を主体とする土器群であり、おおきくは長原式に位置づけられる。しかし、口唇部の形状や凸帯の形などの各属性は、45、46類に重複する部分があり、船橋式から長原式への変化は漸移的なものであり(南1989)、諸属性をふまえての検討が必要と考えられる。

ここでは、胎土中に角閃石を含む土器が注目されたため、この属性を中心に検討する。観察は30倍ハンドスコープを用いておこなった。41～46類における、角閃石を含む土器の数はTab.7の通りである。

41～44類については、土器の点数が少なく、全体に占める割合についての検討はできないが、41～43類では角閃石を含まないものがあるのに対し、44類は全て角閃石を多量に含む点が注目される。

45類、46類における角閃石を含む土器の全体に対する割合は、45類が58%、46類が83%であり、46類における高率が注目される。つぎに45類、46類の角閃石を含む土器、含まない土器の諸属性について検討することとする。

属性は本文中において、a 器形、b 口唇部の形状、c 凸帯の形、d 刻みの形、e 調整について各々述べたが、ここではb～dについて各々検討する。

45類角閃石を含まない土器の口唇部の形状は、平坦：丸形：三角形：尖形=1：5：2：0

45類角閃石を含まない土器の凸帯の形状は、断面台形：蒲鉾形：三角形=0：0：8

Tab.7 角閃石を含む土器の数量

	無し	微量	普通	多量
XI-41	2			
XI-42	2	2		1
XII-43	3		1	
XII-44				3
XIII-他		1	2	
XIII-45	8	1	1	9
XIII-46	7	2	2	30

8. 土器

45類角閃石を含まない土器の刻みの形は、爪形：「D」字形：小「OD」字形=1：4：3

45類角閃石を含む土器の口唇部の形状は、平坦：丸形：三角形：尖形=1：5：1：4

45類角閃石を含む土器の凸帯の形状は、断面台形：蒲鉾形：三角形=1：1：9

45類角閃石を含む土器の刻みの形は、「D」字形：小「OD」字形：「V」字形=2：7：2

46類角閃石を含まない土器の口唇部の形状は、平坦：丸形：尖形=0：6：1

46類角閃石を含まない土器の凸帯の形状は、断面台形：蒲鉾形：三角形=2：1：4

46類角閃石を含まない土器の刻みの形は、「D」字形：小「OD」字形：「V」字形：無=2:3:0:2

46類角閃石を含む土器の口唇部の形状は、平坦：丸形：三角形：尖形=0：11：7：26

46類角閃石を含む土器の凸帯の形状は、断面台形：蒲鉾形：三角形=5：1：28

46類角閃石を含む土器の刻みの形は、「D」字形：小「OD」字形：「V」字形：無=9:14:5:6

母数が少ないものの、以上の結果からうかがわれる傾向を列挙すると、

1. 45類土器の口唇部の形状では、角閃石を含まない土器には口唇部を尖らせるものは無いが、角閃石を含む土器には口唇部を尖らせるものがみられる。
2. 45類土器の凸帯の形状は、角閃石を含むもの含まないもの双方ともに断面三角形が多い。
3. 45類土器の刻みの形は、角閃石を含む土器において「V」字形や小「OD」字形が多くみられる。
4. 46類土器の口唇部の形状は、角閃石を含むもの含まないもの双方ともに、丸くおさめるものが一定の割合を占めるが、角閃石を含まないものでは口唇部を尖らせるものが多くみられる。
5. 46類土器の凸帯の形状は、角閃石を含む土器に断面三角形のものがが多くみられ、口唇部を尖らせるものには下三角形の凸帯が貼付される傾向がある。
6. 46類土器の刻みの形は、角閃石を含むもの含まないもの双方ともに「D」字形が一定の割合を占めるものの、角閃石を含む土器では刻み目無しや「V」字形、小「OD」字形がやや割合を増す傾向がある。
7. 口唇部が平坦な土器は45類のみであり、46類にはみられない。
8. 口唇部を尖らせる土器は45類、46類の違いよりも、角閃石を含む土器に多いといえる。
9. 刻みの無いものは、45類にはみられず、46類のみであり、角閃石を含むもの含まないもの双方にみられる。

その他、底部の角閃石を含むものの割合をみると、丸底で器壁が厚く尖るもの(550.551)は、石英、長石が多いのに対し、丸底でも器壁が薄く弯曲するもの(552～555)や平底は、角閃石を多く含む。浮線文土器は、(545)が白色粒や赤色酸化粒を多く含んだ粗い胎土であり、明らかに他の土器と異なるのに対し、(546)は茶黒色を呈し、一見角閃石を含む土器と同様な色調であるが、角閃石は含まれない。

XIII群その他の土器の帰属は、口縁端部が屈曲せず直行することから、凸帯文2期後半(535～538)から3期(540.541)(泉1990)と考えられる。また浮線文土器は、地域間の並行関係などの検討が必要であるが(石川1985.石川ほか1988.設楽1982)、詳細は第III部第3章に依ることとし、ここでは大きく凸帯文3期以降弥生前期中段階のなかでも新しい時期に帰属するものと考えられる。

Tab. 8 繩文～弥生時代土器一覧表(1)

番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り	番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り
1a	I-1	10 I	崖錐性堆積上面		36	IV-14	16 F	縄文河川7.8	LR
1b	I-1	10 I	崖錐性堆積上面		37	IV-14	16 F	縄文河川7.8	RL
1c	I-1	10 I	崖錐性堆積上面		38	IV-14	3 E	縄文河川6	LR
1d	I-1	10 I	崖錐性堆積上面		39	IV-14	9 G	縄文河川19.20	LR
1e	I-1	10 I	崖錐性堆積上面		40	IV-14	16 F	縄文河川7.8	LR
2	I-2	16 F	縄文河川7		41	IV-14	16 F	縄文河川7.8	LR
3	II-3	16 F	縄文河川8		42	IV-14	2 F	縄文河川7.8	RL
4	II-3	4~13 I	古代河川8		43	IV-14	4 E	縄文河川6	LR
5	II-4	2 G	縄文河川22		44	IV-14	16 F	縄文河川7.8	LR
6	II-5	13,14 I	縄文河川30?	RL	45	IV-14	12 G	縄文河川19.20	LR
7a	III-6	5 I	縄文中期船元面	RL	46	IV-15	4 E	縄文河川6	RL
7b	III-6	5 I	縄文中期船元面	RL	47	IV-15	16 F	縄文河川7.8	LR
8	III-6	5 I	縄文中期船元面	RL	48	IV-15	12 G	縄文河川19.20	LR
9	III-7	13 I	縄文中期船元面	RL	49	IV-16	16 F	縄文河川7.8	LR
10	III-7	13 I	縄文中期船元面		50	IV-16	12 G	古墳時代河川8	
11	III-7	4 E	縄文河川6	RL	51	IV-16	2 G	縄文河川19.20	
12	III-7	16 F	V層	RL	52	IV-16	2 G	縄文河川19.20	LR
13	III-8	3 E	縄文河川6		53	IV-16	2 G	縄文河川19.20	LR
14	III-8	23~25 C	古墳時代河川 1	RL	54	IV-16	4 E	縄文河川6	LR
15	III-8	16 F	縄文河川7.8		55	IV-16	16 F	縄文河川7.8	LR
16	III-8	2 G	縄文河川22		56	IV-16	16 F	縄文河川7.8	LR
17	III-8	13 I	縄文中期船元面	RL	57	IV-16	16 F	縄文河川7.8	LR
18a	III-8	13 I	縄文中期船元面	RL	58	IV-16	16 F	縄文河川7.8	LR
18b	III-8	13 I	縄文中期船元面	RL	59	IV-16	16 F	縄文河川7.8	LR
18c	III-8	13 I	縄文中期船元面	RL	60	IV-16	16 F	縄文河川7.8	LR
18d	III-8	13 I	縄文中期船元面	RL	61	IV-16	4 E	縄文河川6	LR
19	III-8	13 I	中期末～後期初頭土器群5		62	IV-16	12 G	縄文河川19.20	LR
20a	III-9	13 I	縄文中期船元面	RL	63	IV-16	7 I	縄文河川28	LR
20b	III-9	13 I	縄文中期船元面	RL	64	IV-16	16 F	縄文河川7.8	LR
21a	III-9	13 I	縄文中期船元面	RL	65	IV-16	16 F	縄文河川7.8	LR
21b	III-9	13 I	縄文中期船元面	RL	66	IV-16	2 G	縄文河川19.20	LR
22	III-9	11 I	古代河川8	RL	67	IV-16	16 F	縄文河川7.8	LR
23a	III-9	13 I	縄文中期船元面	RL	68	IV-16	16 F	縄文河川7.8	
23b	III-9	13 I	縄文中期船元面		69	IV-16	1 F	縄文河川7.8	
24	III-10	1 H	縄文河川25	RL	70	IV-16	16 F	縄文河川7.8	
25	III-10	16 F	縄文河川7.8	RL	71	IV-17	15 F	縄文河川7.8	LR
26	III-11	16 F	縄文河川7.8		72	IV-17	13 I	中期末～後期初頭土器群5	RL
27	III-11	12 G	縄文河川19.20		73	IV-17	13 I	中期末～後期初頭土器群5	
28	III-11	1 G	古代河川6	RL	74	IV-17	12 G	古墳時代河川8	
29	III-11	2 F	縄文河川11		75	IV-18	11 I	土器片敷遺構上面	LR
30	III-11	13 F	中期末～後期初頭土器群1		76	IV-19	16 F	縄文河川7.8	LR
31a	III-12	13 I	縄文中期里木面	撲糸文	77	IV-19	12 G	縄文河川19.20	
31b	III-12	13 I	縄文中期里木面	撲糸文	78	IV-19	16 F	縄文河川7.8	RL
32	III-12	1 H	縄文河川25		79	IV-19	13 I	中期末～後期初頭土器群5	
33	III-13	4 E	縄文河川6		80	IV-20	5 I, 9 I	中期末～後期初頭土器群5	RL
34	IV-14	1 F	縄文河川12	LR	81	IV-20	13 I	中期末～後期初頭土器群5	
35	IV-14	16 F	縄文河川7.8	LR	82	IV-20	5 I	縄文河川29肩部	

燃りは明瞭なもののみを記入しており、磨滅の為不明瞭なものは空白にしている。

8. 土器

Tab. 9 縄文～弥生時代土器一覧表(2)

番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り	番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り
83	IV-20	16F	縄文河川7.8	LR	129	IV胴部b	1 F	縄文河川7	LR
84	IV-21	11 I	土器片敷遺構	LR	130	IV胴部b	16F	縄文河川7.8	LR
85	IV-21	4 E	縄文河川6	LR	131	IV胴部c	1 F	縄文河川7.8	
86	IV-21	16F	縄文河川7.8	LR	132	IV胴部c	16F	縄文河川7.8	
87	IV-21	7 G	古代河川6	LR	133	IV胴部c	16F	縄文河川7.8	
88	IV-21	1 F	縄文河川12	LR	134	IV胴部c	16F	縄文河川7.8	
89	IV-21	11 I	中期末～後期初頭落込み1		135	IV胴部d	16F	縄文河川7.8	
90	IV-21	11 I	中期末～後期初頭土器群5		136	IV胴部d	16F	縄文河川7.8	
91	IV-21	13 I	中期末～後期初頭土器群5		137	IV胴部d	2 G	縄文河川19.20	
92	IV-21	13 I	中期末～後期初頭土器群5		138	IV胴部d	16F	縄文河川7.8	
93	IV-21	4 E	縄文河川6	LR	139	IV胴部d	16F	縄文河川7.8	
94	IV-21	16F	縄文河川7.8		140	IV胴部d	11 I	縄文河川29	
95	IV-21	16F	縄文河川7.8	LR	141	IV胴部d	16F	縄文河川7.8	
96	IV-21	13 I	中期末～後期初頭土器群5		142	IV胴部d	16F	縄文河川7.8	LR
97	IV-21	16F	縄文河川7.8		143	IV胴部e	7 G	古代河川6	LR
98	IV-21	11 I	中期末～後期初頭土器群5		144	IV胴部e	16F	縄文河川7.8	LR
99	IV-21	2 G	縄文河川19.20	LR	145	IV胴部e	16F	縄文河川7.8	LR
100	IV-21	11 I	中期末～後期初頭落込み1	LR	146	IV胴部e	16F	縄文河川7.8	LR
101	IV-21	16F	縄文河川7.8	LR	147	IV胴部e	16F	縄文河川7.8	LR
102	IV-21	7 G	古代河川6	LR	148	IV胴部e	11 I	中期末～後期初頭土器群5	LR
103	IV-22	11 I	土器片敷遺構	LR	149	IV胴部e	12G	縄文河川19.20	LR
104	IV-22	11 I	土器片敷遺構上面	LR	150	IV胴部e	16F	縄文河川7.8	LR
105	IV-22	11 I	中期末～後期初頭土器群5	RL	151	IV胴部e	12G	縄文河川19.20	LR
106a	IV-22	1 F	縄文河川7.8	LR	152	IV胴部e	4 E	縄文河川6	LR
106b	IV-22	16F	縄文河川7.8	LR	153	IV胴部e	1 F	縄文河川7.8	LR
107	IV-22	13 I	中期初頭～後期初頭土器群5	LR	154	IV胴部e	16F	縄文河川7.8	LR
108	IV-22	13 I	中期初頭～後期初頭土器群5	LR	155	IV胴部e	16F	縄文河川7.8	LR
109	IV-22	13 I	中期初頭～後期初頭土器群5	LR	156	IV胴部e	16F	縄文河川7.8	LR
110	IV-22	16F	縄文河川7.8	RL	157	IV胴部e	2 G	縄文河川19.20	RL
111	IV-22	16F	縄文河川7.8	LR	158	IV胴部e	12G	縄文河川19.20	LR
112	IV-22	16F	縄文河川7.8	LR	159	IV胴部f	16F	縄文河川7.8	LR
113	IV-22	1 F	縄文河川7	LR	160	IV胴部f	4 E	縄文河川6	LR
114	IV-22	16F	縄文河川7.8	LR	161	IV胴部f	13 I	V層	LR
115	IV-22	16F	縄文河川7.8	LR	162	IV胴部f	2 G	縄文河川19.20	LR
116	IV-23	16F	縄文河川7.8	LR	163	IV胴部f	16F	縄文河川7.8	LR
117	IV-23	3 E	縄文河川6	LR	164	IV胴部f	1 F	縄文河川7.8	LR
118	IV-24	4 E	縄文河川6		165	IV胴部f	3~27 C	古墳時代河川1	RL
119	IV-24	7 G	古代河川6		166	IV胴部g	16F	縄文河川7.8	LR
120	IV胴部a	11 I	中期末～後期初頭土器群5	LR	167	IV胴部g	16F	縄文河川7.8	LR
121	IV胴部a	2 G	縄文河川19.20		168	IV胴部g	16F	縄文河川7.8	
122	IV胴部a	11 I	中期末～後期初頭土器群5		169	IV胴部g	13 I	中期末～後期初頭土器群5	RL
123	IV胴部a	16F	縄文河川7.8	LR	170	IV胴部g	16F	縄文河川7.8	LR
124	IV胴部a	16F	縄文河川7.8		171	IV胴部h	7 G	古代河川6	LR
125	IV胴部a	1 F	縄文河川12	LR	172	IV胴部h	13 I	中期末～後期初頭土器群5	LR
126	IV胴部a	16F	縄文河川7.8	LR	173	IV胴部h	13 I	中期末～後期初頭土器群5	
127	IV胴部a	7 G	古代河川6	LR	174	IV胴部h	4 E	縄文河川6	LR
128	IV胴部b	16F	縄文河川7.8	LR	175	IV胴部h	11 I	中期末～後期初頭土器群5	LR

Tab.10 縄文～弥生時代土器一覧表(3)

番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り	番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り
176	IV胴部h	7 G	古代河川6	LR	219e	V-25	2 F	中期末～後期初頭土器群2	
177	IV胴部i	2 G	縄文河川19.20	LR	220	V-25	15G	中期末～後期初頭土器4	RL
178	IV胴部i	16F	縄文河川7.8	LR	221	V-25	9 I	縄文河川28.29	
179	IV胴部i	16F	縄文河川7.8	LR	222a	V-25	11 I	中期末～後期初頭落込み1	LR
180	IV胴部i	16F	縄文河川7.8	LR	222b	V-25	11 I	中期末～後期初頭落込み1	LR
181	IV胴部i	16F	縄文河川7.8	LR	222c	V-25	11 I	中期末～後期初頭落込み1	LR
182	IV胴部i	6 F	縄文河川7.8	LR	222d	V-25	11 I	中期末～後期初頭落込み1	LR
183	IV胴部i	2 G	縄文河川19.20	LR	222e	V-25	11 I	中期末～後期初頭落込み1	LR
184	IV胴部i	1 F	縄文河川7.8	LR	222f	V-25	11 I	中期末～後期初頭落込み1	LR
185	IV胴部j	3 E	縄文河川6		223a	V-25	13F	中期末～後期初頭土器群1	
186	IV胴部j	16F	縄文河川7.8		223b	V-25	13F	中期末～後期初頭土器群1	
187	IV胴部j	16F	縄文河川7.8		223c	V-25	13F	中期末～後期初頭土器群1	
188	IV胴部j	16F	縄文河川7.8		223d	V-25	13F	中期末～後期初頭土器群1	
189	IV胴部j	16F	縄文河川7.8		223e	V-25	13F	中期末～後期初頭土器群1	
190	IV胴部j	4 E	縄文河川6		223f	V-25	13F	中期末～後期初頭土器群1	
191	IV胴部j	2 G	縄文河川19.20		223g	V-25	13F	中期末～後期初頭土器群1	
192	IV胴部j	2 G	縄文河川19.20		223h	V-25	13F	中期末～後期初頭土器群1	
193	IV胴部j	2 G	縄文河川19.20		223i	V-25	13F	中期末～後期初頭土器群1	
194	IV胴部j	2 G	縄文河川19.20		224	V-25	1 G	古代河川6	LR
195	IV胴部j	4 E	縄文河川6		225	V-25	1 F	縄文河川7.8	LR
196	IVその他	16F	縄文河川7.8		226	V-25	4 E	縄文河川6	LR
197	IVその他	7 G	古代河川6		227	V-25	1 H	V層	RL
198	IV底部	3 E	縄文河川6		228a	V-25	2 F	中期末～後期初頭土器群3	LR
199	IV底部	4 E	縄文河川6		228b	V-25	2 F	中期末～後期初頭土器群3	LR
200	IV底部	13 I	中期末～後期初頭土器群5		228c	V-25	2 F	中期末～後期初頭土器群3	LR
201	IV底部	11 I	中期末～後期初頭土器群5		229	V-25	11 I	中期末～後期初頭土器群5	RL
202	IV底部	11 I	中期末～後期初頭土器群5		230	V-25	1 F	縄文河川7.8	
203	IV底部	16F	縄文河川7.8		231	V-25	4 E	縄文河川6	LR
204	IV底部	16F	縄文河川7.8	RL	232	V-25	1 F	縄文河川12	LR
205	IV底部	1 F	縄文河川7.8		233	V-25	16F	縄文河川7.8	LR
206	IV底部	16F	縄文河川7.8		234	V-25	16F	縄文河川7.8	LR
207	IV底部	13 I	V層		235	V-25	4 E	縄文河川6	LR
208	IV底部	16F	縄文河川7.8		236	V-26	4 E	縄文河川6	縄縄文?
209	IV底部	1 G	古代河川6		237	V-26	2 G	縄文河川19.20	
210	IV底部	16F	縄文河川7.8		238	V-26	16F	縄文河川7.8	
211	IV底部	1 F	縄文河川7.8		239	V-26	12G	後期土器群11	
212	IV底部	16F	縄文河川7.8		240	V-26	3～27C	古墳時代河川1	
213	IV底部	16F	縄文河川7.8		241	V-26	4 E	縄文河川6	
214	IV底部	12G	後期土器群11	RL	242	Vその他	4 E	縄文河川6	LR
215	IV底部	4 E	縄文河川6		243	Vその他	1 H	V層	
216	IV底部	7 I	縄文河川28	LR	244	Vその他	4 E	縄文河川6	LR
217	IV底部	1 F	縄文河川12		245	Vその他	9 I	V層	LR
218	IV底部	16F	縄文河川7.8		246	Vその他	16F	縄文河川7.8	LR
219a	V-25	2 F	中期末～後期初頭土器群2	LR	247	VI-27	3 F	後期土器群9	
219b	V-25	2 F	中期末～後期初頭土器群2	LR	248	VII-28	4 B	V層	
219c	V-25	2 F	中期末～後期初頭土器群2	LR	249a	VII-28	1 G	V層	RL
219d	V-25	2 F	中期末～後期初頭土器群2	LR	249b	VII-28	1 G	V層	RL

8. 土器

Tab.11 繩文～弥生時代土器一覧表(4)

番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り	番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り
250	VII-28	7 I	縄文河川28.29		297	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR
251	VII-28	12G	縄文河川19.20		298	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR
252	VII-28	4 E	縄文河川6		299	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR
253	VII-28	3 D	V層		300	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR
254	VII-28	3 ~27C	古墳時代河川1		301	VIII-30	15 F	遺物集中区	
255	VII-28	7 I	縄文河川28.29		302	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR
256	VII-29	1 F	縄文河川7.8	擬縄文	303	VIII-30	15 F	遺物集中区	
257	VII-29	16 F	縄文河川7.8	擬縄文	304	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR
258	VII-29	7 I	縄文河川28.29		305	VIII-30	15 F	遺物集中区	
259	VII-29	13 I	縄文河川28.29		306	VIII-30	15 F	遺物集中区	
260	VII-29	1 E	V層		307	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR
261	VII-29	9 I	縄文河川28		308	VIII-30	15 F	遺物集中区	
262	VII-29	4 E	縄文河川6		309	VIII-30	15 F	遺物集中区	
263	VII-29	8 F	V層		310	VIII-31	15 F	遺物集中区	
264	VII-29	16 F	V層		311	VIII-31	15 F	遺物集中区	
265	VIII-33	15 F	遺物集中区	LR	312	VIII-31	15 F	遺物集中区	
266	VIII-33	15 F	遺物集中区	LR	313	VIII-31	15 F	遺物集中区	
267	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR	314	VIII-31	15 F	遺物集中区	
268	VIII-34	15 F	遺物集中区		315	VIII-31	15 F	遺物集中区	
269	VIII-33	15 F	遺物集中区	RL	316	VIII-31	15 F	遺物集中区	
270	VIII-31	15 F	遺物集中区	LR	317	VIII-31	15 F	遺物集中区	LR
271	VIIIその他	15 F	遺物集中区	RL	318	VIII-31	15 F	遺物集中区	LR
272	VIIIその他	15 F	遺物集中区		319	VIII-31	15 F	遺物集中区	
273	VIIIその他	15 F	遺物集中区		320	VIII-31	15 F	遺物集中区	
274	VIIIその他	15 F	遺物集中区	LR	321	VIII-31	15 F	遺物集中区	
275	VIII底部	15 F	遺物集中区		322	VIII-31	15 F	遺物集中区	
276	VII-28	11 F	後期土器群8		323	VIII-31	15 F	遺物集中区	LR
277	VII-28	11 F	後期土器群8	LR	324	VIII-31	15 F	遺物集中区	
278	VII-28	11 F	後期土器群8		325	VIII-31	15 F	遺物集中区	
279	VII-28	11 F	後期土器群8		326	VIII-31	15 F	遺物集中区	
280	VII-28	11 F	後期土器群8		327	VIII-31	15 F	遺物集中区	
281	VIII-30	15 F	遺物集中区		328	VIII-31	15 F	遺物集中区	
282	VIII-30	15 F	遺物集中区		329a	VIII-32	15 F	遺物集中区	LR
283	VIII-30	15 F	遺物集中区		329b	VIII-32	15 F	遺物集中区	LR
284	VIII-30	15 F	遺物集中区		329c	VIII-32	15 F	遺物集中区	LR
285	VIII-30	15 F	遺物集中区		329d	VIII-32	15 F	遺物集中区	RL
286	VIII-30	15 F	遺物集中区		329e	VIII-32	15 F	遺物集中区	LR
287	VIII-30	15 F	遺物集中区		329f	VIII-32	15 F	遺物集中区	LR
288	VIII-30	15 F	遺物集中区		329g	VIII-32	15 F	遺物集中区	LR
289	VIII-30	15 F	遺物集中区		329h	VIII-32	15 F	遺物集中区	LR
290	VIII-30	15 F	遺物集中区		329i	VIII-32	15 F	遺物集中区	
291	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR	329j	VIII-32	15 F	遺物集中区	
292	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR	329k	VIII-32	15 F	遺物集中区	
293	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR	330a	VIII-32	15 F	遺物集中区	
294	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR	330b	VIII-32	15 F	遺物集中区	
295	VIII-30	15 F	遺物集中区	LR	330c	VIII-32	15 F	遺物集中区	
296	VIII-30	15 F	遺物集中区		330d	VIII-32	15 F	遺物集中区	

Tab.12 繩文～弥生時代土器一覧表(5)

番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り	番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り
331	VIII-33	15F	遺物集中区		376	VIIIその他	15F	遺物集中区	
332	VIII-33	15F	遺物集中区		377	VIIIその他	15F	遺物集中区	
333	VIII-33	15F	遺物集中区	LR	378	VIIIその他	15F	遺物集中区	LR+RL
334	VIII-33	15F	遺物集中区	LR	379	VIIIその他	15F	遺物集中区	
335	VIII-33	15F	遺物集中区		380	VIIIその他	15F	遺物集中区	
336	VIII-33	15F	遺物集中区	LR	381	VIIIその他	15F	遺物集中区	
337	VIII-33	15F	遺物集中区		382	VIIIその他	15F	遺物集中区	
338	VIII-33	15F	遺物集中区	LR	383	VIIIその他	15F	遺物集中区	LR
339	VIII-33	15F	遺物集中区	LR	384	VIIIその他	15F	遺物集中区	LR
340	VIII-33	15F	遺物集中区	LR	385a	VIIIその他	15F	遺物集中区	LR
341	VIII-33	15F	遺物集中区		385b	VIIIその他	15F	遺物集中区	LR
342a	VIII-33	15F	遺物集中区		386	VIIIその他	15F	遺物集中区	
342b	VIII-33	15F	遺物集中区		387	VIIIその他	15F	遺物集中区	
343	VIII-34	15F	遺物集中区		388	VIIIその他	15F	遺物集中区	
344a	VIII-34	15F	遺物集中区		389	VIIIその他	15F	遺物集中区	
344b	VIII-34	15F	遺物集中区		390	VIIIその他	15F	遺物集中区	
345	VIII-34	15F	遺物集中区		391	VIIIその他	15F	遺物集中区	
346	VIII-34	15F	遺物集中区		392	VIIIその他	15F	遺物集中区	
347	VIII-34	15F	遺物集中区		393	VIIIその他	15F	遺物集中区	
348	VIII-35	15F	遺物集中区		394	VIIIその他	15F	遺物集中区	
349	VIII-35	15F	遺物集中区		395a	VIIIその他	15F	遺物集中区	LR
350	VIII-35	15F	遺物集中区		395b	VIIIその他	15F	遺物集中区	LR
351	VIII-35	15F	遺物集中区		396	VIIIその他	15F	遺物集中区	
352	VIII-35	15F	遺物集中区		397	VIIIその他	15F	遺物集中区	LR
353	VIII-35	15F	遺物集中区		398	VIIIその他	15F	遺物集中区	LR
354	VIII-35	15F	遺物集中区		399	VIIIその他	15F	遺物集中区	LR
355	VIII-35	15F	遺物集中区		400	VIIIその他	15F	遺物集中区	
356	VIII-35	15F	遺物集中区		401a	IX-37	16F	後期土器群4	LR
357	VIII-35	15F	遺物集中区		401b	IX-37	16F	後期土器群4	
358	VIII-35	15F	遺物集中区		402a	IX-36	16F	後期土器群4	LR
359	VIII-35	15F	遺物集中区		402b	IX-36	16F	後期土器群4	LR
360	VIII-35	15F	遺物集中区		402c	IX-36	16F	後期土器群4	LR
361	VIII-35	15F	遺物集中区		402d	IX-36	16F	後期土器群4	LR
362	VIII-35	15F	遺物集中区		403	IX-38	16F	後期土器群4	
363	VIII-35	15F	遺物集中区		404	IX-38	16F	後期土器群4	
364	VIII-35	15F	遺物集中区		405	IX-38	16F	後期土器群4	
365	VIII-35	15F	遺物集中区		406	IX-36	2F	後期土器群6	
366	VIII底部	15F	遺物集中区		407	IX-36	2F	後期土器群6	RL
367	VIII底部	15F	遺物集中区		408	IX-38	2F	後期土器群6	
368	VIII底部	15F	遺物集中区		409	IX-38	2F	後期土器群6	
369	VIII底部	15F	遺物集中区		410	IX底部	2F	後期土器群6	
370	VIII底部	15F	遺物集中区		411	IXその他	2F	後期土器群6	
371	VIII底部	15F	遺物集中区		412	IX-36	2F	後期土器群5	
372	VIIIその他	15F	遺物集中区		413	IX-38	2F	後期土器群5	
373	VIIIその他	15F	遺物集中区		414a	IXその他	2F	後期土器群5	
374	VIIIその他	15F	遺物集中区		414b	IXその他	2F	後期土器群5	
375	VIIIその他	15F	遺物集中区		415	IX-38	14F	古墳時代河川6	

8. 土器

Tab.13 繩文～弥生時代土器一覧表(6)

番号	分類	トレンチ名	出土土地点	燃り	番号	分類	トレンチ名	出土土地点	燃り
416	IX-38	2 F	縄文河川11		462	XIII-45	8 I	晩期～前期土器群8（第7層）	
417	IXその他	2 F	縄文河川11肩部		463	XIII-45	13D	縄文河川3	
418	IXその他	1 F	後期土器群2	LR+RL	464	XIII-45	4 B	IV層	
419	IX-36	2 F	後期土器群6		465	XIII-45	2 B	I～IV層	
420	IXその他	15 F	後期土器群5	縄巻縄文	466	XIII-45	3 B. 4 B	IV層	
421	IXその他	9 F	後期土器群10		467	XIII-46	4 B	IV層	
422	IX底部	10 F	後期土器群7		468	XIII-46	4 B	I層	
423a	IX-36	12G	後期土器群11	RL	469	XIII-46	4 B	IV層	
423b	IX底部	12G	後期土器群11		470	XIII-46	11 I	古代河川8	
424	X胸部	12G	後期土器群11		471	XIII-46	1 C	縄文河川1	
425	Xその他	2 E	縄文河川4		472	XIII-46	10D	IV層	
426	IX-36	16 F	後期土器3	RL+LR	473	XIII-46	2 A	IV層	
427	X-39	12G	後期土器群11		474	XIII-46	4 B	IV層	
428	X-40	4 E	後期土器1		475	XIII-46	1 B	IV層	
429	XI-41	4 B	IV層		476	XIII-46	5 I	晩期～前期土器群8（第7層）	
430	XI-41	4 B	IV層		477	XIII-46	15G	古墳時代河川8	
431	XI-42	2 H	V層		478	XIII-46	4 B	IV層	
432	XI-42	16 F	晩期～前期土器5		479	XIII-46	3 D	IV層	
433	XII-43	2 H	V層		480	XIII-46	2 A	IV層	
434	XII-43	1 H	V層		481	XIII-46	1 H	縄文河川25	
435	XII-42	1 H	V層		482	XIII-46	1 H	縄文河川25	
436	XII-42	3 B	IV層		483	XIII-46	6 F	晩期～前期土器群4	
437	XII-42	1 F	晩期～前期土器6		484	XIII-46	11 I	古代河川8	
438	XII-42	4 B	IV層		485	XIII-46	6 F	晩期～前期土器群4	
439	XII-43	3 B	IV層		486	XIII-46	2 B	I～IV層	
440	XII-43	3 B	IV層		487	XIII-46	3 B	IV層	
441	XIIその他	4 B	IV層		488	XIII-46	3 B	IV層	
442	XII-44	2 B	IV層		489	XIII-46	4 B	IV層	
443	XII-44	1 H	V層		490	XIII-46	1 H	V層	
444	XII-44	1 H	V層		491	XIII-46	1 B	I～IV層	
445	XII-44	1 H	V層		492	XIII-46	1 A	IV層	
446	XIIその他	4 B	IV層		493	XIII-46	3 D	IV層	
447	XIIその他	4 B	IV層		494	XIII-46	2 B	II層	
448	XIII-45	2 H	V層		495	XIII-46	8 D	縄文河川3	
449	XIII-45	4 B	IV層		496	XIII-46	4 B	晩期～前期土坑2	
450	XIII-45	3 B	IV層		497	XIII-46	4 B	IV層	
451	XIII-45	4 B	晩期～前期土坑1		498	XIII-46	4 B	I～IV層	
452	XIII-45	3 B. 4 B	III層		499	XIII-46	3 B	II層	
453	XIII-45	4 B	IV層		500	XIII-46	4 B	III層	
454	XIII-45	4 B	IV層		501	XIII-46	1 B	IV層	
455	XIII-45	4 B	IV層		502	XIII-46	5 I	晩期～前期土器群8（第7層）	
456	XIII-45	5 E	III～IV層		503	XIII-46	5 I	晩期～前期土器群8（第7層）	
457	XIII-45	4 B	IV層		504	XIII-46	3 C	晩期～前期溝4	
458	XIII-45	4 B	IV層		505	XIII-46	2 B	III層	
459	XIII-45	3 D	IV層		506	XIII-46	2 B	I層	
460	XIII-45	3 B	IV層		507	XIII-46	8 F	V層	
461	XIII-45	2 I	晩期～前期土器群8（第7層）		508	XIII-46	12 G	縄文河川19.20	

Tab.14 繩文～弥生時代土器一覧表(7)

番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り	番号	分類	トレンチ名	出土地点	燃り
509	XIII-46	4 B	IV層		555	XII,XIII底部	4 E	IV～V層	
510	XIII-46	3 B	IV層		556	XII,XIII底部	10D	IV層	
511	XIII口縁部	1 H	繩文河川25		557	XII,XIII底部	2 B	I～IV層	
512	XIII口縁部	1 A	IV層		558	XII,XIII底部	3 B	IV層	
513	XIII口縁部	4 B	II層		559	XII,XIII底部	4 B	I～IV層	
514	XIII口縁部	2 H	繩文河川26		560	XII,XIII底部	2 B	I層	
515	XIII口縁部	9 D	IV層		561	XII,XIII底部	13D	繩文河川3	
516	XIII胴部	4 B	IV層		562	XII,XIII底部	4 B	III～IV層	
517	XIII胴部	3 B	IV層		563	XII,XIII底部	3 D	III層	
518	XIII胴部	4 B	IV層		564	XII,XIII底部	2 B	III～IV層	
519	XIII胴部	4 B	IV層		565	弥I壺	3 B, 4 B	IV層	
520	XIII胴部	3 D	III層		566	弥I壺	15C	晚期～前期土器群2周辺	
521	XIII胴部	2 H	V層		567	弥I壺	5 I	晚期～前期土器群8（第7層）	
522	XIII胴部	4 B	IV層		568	弥I壺	3 D	IV層	
523	XIII胴部	1 A	IV層		569	弥I壺	2 H	晚期～前期土器群7	
524	XIII胴部	5 I	晚期～前期土器群8（第7層）		570	弥I壺	7 D	IV層	
525	XIII胴部	3 B	IV層		571	弥I壺	13D	繩文河川3	
526	XIII胴部	3 B	III～IV層		572	弥I壺	9 I	晚期～前期土器群8（第7層）	
527	XIII胴部	3 B	IV層		573	弥I壺	1 A	IV層	
528	XIII胴部	4 B	III～IV層		574	弥I壺	1 A	IV層	
529	XIII胴部	4 B	III～IV層		575	弥I壺	7 D	晚期～前期溝10	
530	XIII胴部	3 B	IV層		576	弥I壺	7 D	晚期～前期溝10	
531	XIII胴部	3 B	I～III層		577	弥I壺	7 D	晚期～前期溝10	
532	XIII胴部	4 B	IV層		578	弥I壺	7 D	晚期～前期溝10	
533	XIII胴部	2 B	IV層		579	弥I壺	15C	IV層	
534	XIII胴部	2 B	III層		580	弥I壺	1 A	IV層	
535	XIIIその他	3 D	繩文河川3		581	弥I壺	4 E	IV層	
536	XIIIその他	4 B	IV層		582	弥I壺	7 D	晚期～前期溝10	
537	XIIIその他	4 B	IV層		583	弥I壺	7 D	晚期～前期溝10	
538	XIIIその他	4 B	IV層		584	弥I甕	10 I	晚期～前期土器群8（第7層）	
539	XIIIその他	1 H	繩文河川23		585	弥I甕	5 I	晚期～前期土器群8（第7層）	
540	XIIIその他	1 H	V層		586	弥I甕	15C	晚期～前期溝9	
541	XIIIその他	1 H	V層		587	弥I甕	5 I	晚期～前期土器群8（第7層）	
542	XIIIその他	9 D	IV層		588	弥I甕	5 I	晚期～前期土器群8（第7層）	
543	XIIIその他	2 B	III～IV層		589	弥I甕	13D	IV層	
544	XIIIその他	4 B	IV層		590	弥I甕	15C	晚期～前期土器群2	
545	XIIIその他	3 D	繩文河川3		591	弥I甕	15C	IV層	
546	XIIIその他	5 I	晚期～前期土器群8（第7層）		592	弥I甕	5 C	晚期～前期土器群1	
547	XII,XIII底部	2 A	V層		593	弥I甕	13D	IV層	
548	XII,XIII底部	1 H	V層		594	弥I甕	4 E	IV層	
549	XII,XIII底部	16 F	繩文河川9?		595	弥I甕	5 C	晚期～前期土器群1	
550	XII,XIII底部	4 B	I層		596	弥I甕	3 C	晚期～前期溝4	
551	XII,XIII底部	3 B, 4 B	I層		597	弥I甕	15C	IV層	
552	XII,XIII底部	4 B	IV層		598	弥I甕	15 C	晚期～前期土器群2	
553	XII,XIII底部	12 G	I層		599	弥I甕	15 C	IV層	
554	XII,XIII底部	4 B	V層		600	弥I甕	15 C	IV層	

8. 土器

Tab.15 繩文～弥生時代土器一覧表(8)

番号	分類	トレンチ名	出土地点	撲り	645	IV-21	14 I	縄文河川28	
601	弥III・IV壺	5 G	縄文河川18		646	IV-21	14 I	縄文河川28	RL
602	弥III・IV壺	14G	縄文河川18		647	IV-21	14 I	縄文河川29	LR
603	弥III・IV鉢	23~25C	古墳時代河川1		648	IV-21	14 I	縄文河川29	
604	弥III・IV 高環 壺	2 H	古墳時代河川9		649a	IV-22	14 I	縄文河川29	RL
605	弥III・IV壺	2 H	IV.V層		649b	IV-22	14 I	縄文河川29	RL
606	弥III・IV甕	2 H	IV.V層		650	IV胴部i	14 I	縄文河川28	LR
607	弥III・IV壺	2 G	縄文河川22		651	IV胴部j	14 I	縄文河川28	
608	弥I壺底部	1 H	古墳時代溝37		652	IV~V	14 I	縄文河川28	LR
609	弥I壺底部	15 C	晩期～前期土器群2		653	V-25	14 I	縄文河川28	LR
610	弥I壺底部	15 C	IV層		654	V-25	14 I	縄文河川28	LR
611	弥I壺底部	12 I	晩期～前期土器群8(第7層)		655	VII-28	14 I	縄文河川28	
612	弥I壺底部	3 C	IV層		656	VII-28	14 I	縄文河川28	RL
613	弥I壺底部	4 B	IV層		657	VIII-32	14 I	縄文河川28	LR
614	弥I壺底部	8 I	晩期～前期土器群8(第7層)		658	VIII-33	14 I	縄文河川28	LR
615	弥I壺底部	2 B	II層		659	VII-28	14 I	縄文河川28	
616	弥I壺底部	1 A	II層		660	VII-28	14 I	縄文河川28	
617	弥I壺底部	5 I	晩期～前期土器群8(第7層)		661	VII-29	14 I	縄文河川28	
618	弥I壺底部	27 C	IV層		662	VII-29	14 I	縄文河川28	
619	弥I壺底部	27 C	IV層		663	VII-29	14 I	縄文河川28	
620	弥I壺底部	4 E	IV層		664	VII-29	14 I	縄文河川28	
621	弥I壺底部	15 C	IV層		665	IV~V	14 I	縄文河川28	
622	弥I壺底部	3 D	IV層		666	IV~V	14 I	縄文河川28	
623	弥III・IV 壺底部	1 A	III.IV層		667	IV~V底部	14 I	縄文河川28	
624	弥I甕底部	9 D	IV層		668	IV~V底部	14 I	縄文河川29	
625	弥I甕底部	13 D	IV層		669	IV~V底部	14 I	縄文河川28	
626	弥I甕底部	16 F	IV層		670	XI~XII	14 I	晩期～前期土器群8(第7層)	
627	弥I甕底部	3 D	IV層		671	XIII-46	14 I	晩期～前期土器群8(第7層)	
628	弥I甕底部	15 C	III層		672	XIII-46	14 I	晩期～前期土器群8(第7層)	
629	弥I甕底部	5 I	晩期～前期土器群8(第7層)		673	XIII-46	14 I	古代河川8下層	
630	弥I甕底部	4 D	IV層		674	XIII	14 I	晩期～前期土器群8(第7層)	
631	弥I甕底部	15 C	晩期～前期土器群2		675	XIII	14 I	古代河川8下層	
632	弥I甕底部	5 C	IV層		676	XIII	14 I	古代河川8下層	
633	弥I甕底部	15 C	IV層		677	XIII	14 I	古代河川8下層	
634	弥I甕底部	2 H	IV層		678	XIII	14 I	晩期～前期土器群8(第7層)	
635	弥III・IV 甕底部	2 A	II層		679	XIII	14 I	晩期～前期土器群8(第7層)	
636	弥III・IV 甕底部	10 I	晩期～前期土器群8(第7層)		680	XIII底部	14 I	晩期～前期土器群8(第7層)	
637	弥III・IV 壺底部	30 C	III層		681	弥I壺	14 I	古代河川8下層	
638	弥III・IV 壺底部	2 H	IV.V層		682	弥I底部	14 I	古代河川8下層	
639	弥III・IV 壺底部	2 H	IV.V層		683	弥I底部	14 I	中世河川2	
640	III-9	14 I	縄文河川28		684	弥I底部	14 I	中世河川2	
641	I-1	14 I	縄文河川28						
642a	IV-17	14 I	V層	RL					
642b	IV-17	14 I	V層	RL					
643	IV胴部g	14 I	V層						
644a	IV胴部h	14 I	V層	RL					
644b	IV胴部h	14 I	V層						

9. 石 器

1) 概要と計測基準

本節における「石器」の用語は、剝片なども含む広義の意味で使用する。従って狭義の「石器」に対しては「トゥール」の用語をあて混乱を避ける。

当遺跡においては全調査区を通じて石器の出土が認められた(Tab.16)。打製石器に関しては1点のみチャート製であるほか、すべてサヌカイト製である。なおB地区からの打製石器の出土数が目立つが、これは微細なチップまで丹念に採集された結果であり、石器自体の分布を反映してはいないと考える。

時期的には、旧石器時代から弥生時代に至る各期の石器が出土している。ただし後述する一部の石器群を除いて、その大半は二次堆積であり原位置を保っていないのみならず、後世の遺物包含層中に含まれている。従って定型的なトゥールを除けば、その所属時期や組成などに関しては不明な点が多い。

石器の出土パターンは以下の3類型に分けられる。

(1) 原位置を保っていると考えられる石器 (F地区縄文時代後期遺物集中区出土石器)

(2) 原位置からは遊離している可能性が高いが、共伴する土器からその所属時期が限定される石器

(I地区出土の石器の一部)

(3) 後世に形成された遺物包含層中に混入している石器

以下の記述は主にF地区集中区出土石器を中心にするが、そのほかにはI地区出土の石器にも若干触れるが、パターン3の石器に関しては、紙面の関係上、代表的なものをFig.115～130に掲載し、その概要をTab.26～28にまとめるにとどめる。またI地区出土の石器の一部を一括してFig.131～132に掲載しているが、これは追加資料を便宜的にまとめたものであり、その他にも整理過程で抽出されたものはFig.115～130に掲載している。整理の不手際と御理解頂きたい。なお磨製石器に関しては本節後段にまとめる(Fig.133～141)。

計測の基準はFig.101、Tab.17に掲げる。若干の説明を加えると、遺物の置き方は、定型的なトゥールに関しては通例に依っている。剝片に関しては打面の残るものは打面を画面上縁に平行に、かつ主要剝離面を水平に置いた状態で計測を行った。打面および打点の残らない剝片は、主要剝離面の加撃軸を画面の側縁に平行に、かつ主要剝離面を水平に置いた状態で計測を行った。重量は島津製作所ELECTRONIC READING BALANCE LIBROR ED2000-20により、面積は実測図よりタマヤテクニクスのTAMAYA PLANIX 6によりそれぞれ計測した。なおこれらの計測値の有効数字は小数点以下1桁である。

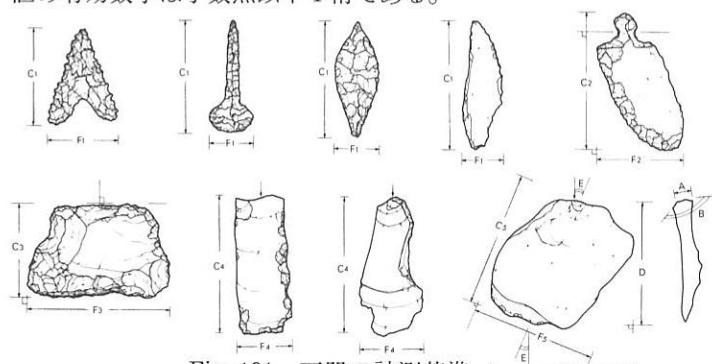


Fig.101 石器の計測基準

地区	サヌカイト	磨製石器
A	32	2
B	635	31
C	64	13
D	155	13
E	27	4
F	274	162
G	53	13
H	44	4
I	384	9
合計	1668	251

Tab.17 石器の計測基準表

石器 ドリル 尖頭器 ナイフ形石器	C1 長さ(cm) F1 打点(刃先)の軸に直交するみかけの最大幅 F2 打面(刃先)の投影面積 厚さ(重さ)(g)×単位面積あたりの重量
石器	C2 長さ(ツバ)のくびれ部分を水平に置いた場合の面積 F3 打面(刃先)の面積 厚さ(重さ) 面積 厚さ(重さ)
楔形石器	C3 長さ(ツバ)を水平に置いた場合の面積方向の長さ F4 打面(刃先)の面積 厚さ(重さ) 面積 厚さ(重さ)
スクレイパー ノッカ 二次加工のある剝片 剝片(打点の残らないもの)	C4 長さ(常材剝片の剝離の加撃軸方向でのみかけの最大長さ) F5 打面(刃先)の面積 厚さ(重さ) 面積 厚さ(重さ)
剝片(打痕の残るもの)	A 打痕(→打点部分)での打面の厚さ B 打痕(→打点と主要剝離面との交わる角度) C3 長さ(打痕の最も奥の端までの長さ) D 打痕(→打痕から最も奥までの距離) E 回転角(→長さを決定する軸線と加撃軸とのなす角度) F6 加撃軸(→加撃軸に直交するみかけの最大幅) G 加撃軸(→加撃軸に直交するみかけの最大幅) 厚さ(重さ) 面積 厚さ(重さ)
石核	厚さ(重さ) 面積 厚さ(重さ)
砂片	厚さ(重さ)
石礫・石塊 石塊丁・石斧 磨石・凹口 石皿	長さ(水平に置いた場合、既存部の最大長石塊丁は刀削 刃端(→刃先)とした 刃端(→刃先)に直交するみかけの最大幅 厚度(既存部の最大厚さ)

9. 石 器

厚さ指数は重量を表面積で除した、単位面積あたりの重量をあてている。これは素材の比重を考慮に入れることによって、おおむね平均厚に読み換えることができる。打角に関しては打点部付近において5度単位の切り込みを入れたシートをあてることによって、その近似値を採用した。

2) 打製石器

出土石器の器種を列記すると以下のようになる。

F地区集中区	石鏸・楔形石器・スクレイパー・二次加工のある剝片・石核・剝片・碎片・チップ
I地区	国府型ナイフ形石器・有舌尖頭器・石鏸・石匙・楔形石器・スクレイパー・二次加工のある剝片・石核・剝片・碎片
その他	国府型ナイフ形石器・翼状剝片・有舌尖頭器・尖頭器・石鏸・石匙・スクレイパー・鋸歯縁石器・ノッチ・ドリル・両面加工石器・石鎗・楔形石器・二次加工のある剝片・石核・剝片・碎片・チップ

〔F地区縄文時代後期遺物集中区出土石器〕

石鏸 (S 1～S 6)

未完成品を含めて6点出土している。いずれも凹基式でやや小型である。製作は1側縁ごとに一定の方向の成形を順次繰り返すという傾向は認められるが、表裏面の切り合い関係をみると作業を行う側縁の順序は一定していない。また製品では、基部の抉りは作業の最終段階に行われているようにみえるが、未完成品では、作業の比較的早い成形段階において既に抉りが入れられていることがわかる(S 6)。

(S 2, S 5)は側縁を鋸歯状に仕上げている。いずれも表裏面ともほぼ同じ位置から丁寧な剝離を加え、側面をみると軸線が側面の中軸に沿うように両刃に仕上げてある。

(S 6)は未完成品である。素材剝片の打点部に比較的近いところを利用しておらず、素材剝片の主要剝離面の加撃軸に直交ないしやや斜交する方向に長軸が設定されている。成形の段階で、素材の背面側からパルプの高まりを除去するように剝離を行ったが失敗し、急角度の側縁が残ってしまった。このため以後の加工が困難になり放棄したものと考えられる。

一般に石鏸は加工が全面におよび素材の利用方法のわからないものが多いが、長軸方向の断面形状は必ず両端部のすぼまった柳葉形になる。素材を縦位に利用した場合、端部の形状を仕上げるのにかなりの加工を要するが、素材を横位に利用した場合は一次剝離の両側縁を端部に利用すれば、容易に比較的尖った形状に仕上げられることが予想される。逆に側縁部の仕上げはかなりの加工を必要とするが、比較的大きな素材から仕上げていけば、成形時の失敗はかなり防げるだろう。従って歩留りという観点から考えると、(S 6)に見られるような素材の割りつけも理にかなっているようである。

楔形石器 (S 7～S 9)

平行する2辺にのみ対向する剝離が見られるもの(S 8)と、直交する二組の辺にそれぞれ対向する剝離が見られるもの(S 7, S 9)がある。剝離面の末端はステップあるいはヒンジで収束するものが多く、端部には潰れも認められる。また側面は縦断する剝離面によって構成される場合もあり(S 9)、一部に自然面が残されているもの(S 8, S 9)もある。これらの石器は、対向する剝離が見られる点と剝離面の形状などを除けば、大きさや形状、加工などに斎一性を認めがたい。なおこの集中区のみでみた場合の出現頻度はあまり高くないが、全調査区を通じてみた場合、トゥール中でのその頻度は卓越している。

スクレイパー (S 10・S 11)

厳密には「スクレイパー的な二次加工のある剝片」とも考えられる。(S 10)には腹面側にも刃部の作

出に係わるような剝離がみられるが、いずれも浅く平坦な様相を呈するのに対して、背面側に残る剝離は比較的急角度であり、その連續性も整っている。最終的な刃部整形のようである。(S11)はインバースリタッチによって腹面側に小さな剝離を連続させて入れて、やや角度の急な刃部を作出している。単に現象的に見るならば、スクレイパーの様相を呈するが、この小剝離は加工ではない可能性も残る。

石核(S12～S23)

現象的にみて、総ての剝離面がネガ面で構成されており、それぞれの剝離が二次加工とは考えがたいものを、この範疇に一括した。ただし残核と考えても、他の剝片類と比較して総じて剝離面の大きさが小さく、積極的に石核と呼べそうなものは限られてくる(S13. S14. S16など)。そのほか楔形石器、碎片とみることも可能な石器も含まれている(S15. S17. S18. S20など)。(S13. S14. S16)をみると、総じて打面は自然面を利用しておらず、剝離の方向性にも明瞭な傾向をうかがうことはできない。また残された剝離面を観察しても目的として剝取される剝片の形状にも斎一性は認めがたい。

二次加工のある剝片(S24～S34)

明瞭な二次加工は認められるが、定型的なトゥールには分類されないものを一括してこの範疇に含めた。これに分類されるものは、明らかに刃部を作出している上に、周辺部にも比較的丁寧な加工を施すもの、明らかに刃部を作出しているが、そのほかは素材剝片の一次剝離面をそのまま残し、加工を施さないもの、明らかに二次的な剝離を行っているが、刃部の作出などとは考えがたく、その性格の明らかなないものの3つのグループに大別できる。

Aグループ(刃部作出+縁辺加工) S24. S26. S31. S32. S34

Bグループ(刃部作出のみ) S27. S28. S30

Cグループ(刃部なし) S25. S29

A、B両グループに関しては、横長傾向の剝片を多用しているようであるが、素材の形状に係わらず刃部はいずれも素材の長軸方向に沿う縁辺に、背腹両面からの比較的丁寧な剝離によって作出されている。またAグループの縁辺部の整形に関してはインバースリタッチも認められ多様であるが、おおむね素材剝片のバルブの高まりを除去しようという意図をうかがうことができる。特異な例として、(S28)は素材剝片のバルブの高まりを除去しつつ、打点方向に背面側から刃部を作出している。なお、(S33. S34)は接合資料であり、(S33)は素材剝片を剝離する際に割れたものの一片を素材としている。単体で見ると縦長剝片が素材のようであるが、接合状態でみると必ずしも縦長剝片を剝取することを意図しているように見えない。(S34)は剝片の末端部におおまかな刃部を成形した後に、素材剝片のバルブの高まりを除去する作業の途中で破碎したものと思われる。

Cグループの中で、(S25)は横長剝片のバルブの高まりを除去する加工を背面側から連続的に行っていているのみである。また、(S29)は上端部は折れているが、その他の縁辺には二次加工が認められる。特に左側縁下部には腹面側に連続する小剝離が認められ、スクレイパーエッジ的な比較的急角度の刃部を形成しているようにも見受けられる。

剝片(S35～S142)

大別すると、剝離面を打面とするもの、自然面を打面とするもの、打面の残らないものに分けられる。これらの中には、縁辺に微小な剝離の認められるものや散漫な二次的な剝離の認められるものも含まれているが、それらの剝離を人為的な連続的加工と認識したか否かによって二次加工のある剝片と一線を画している。また、打面部の欠けている剝片に関しては、その大半は「折れ」によるものである。折れ

9. 石 器

に関しては、人為的な切断と偶発的な折損との識別が現状では不可能なため該当する剥片はここに一括している。従ってこれが二次加工であるか否かの検討は全く行っていない。

なお剥片と碎片あるいはチップの間には明確な定義上の差異を設定していない。おおむね、目的的な剥片とするにはあまりにも微小なものをチップ、本来は剥片の一部であろうが、剥離面の切り合いや形状などから主要剥離面の認識できなかったものを碎片と分類したが、境界領域に位置するようなものは、そのグルーピングに混乱が認められる。これは作業の終盤に明らかになったもので、再検討する余裕がなかった。この点はひとえに筆者の力量不足によるものであることを明記しておく。

剥離面を打面とする剥片は(S 35～S 48)、打面のほとんどが1枚の剥離面によって構成され、明らかな調整打面は認められない。背面は、主要剥離面と同一方向か、直交方向の剥離面によって構成されるものが多く、そのほとんどは複数の剥離面からなる。形状は、方形から縦長を指向しているように見受けられるが、さほど明瞭ではない。自然面を打面とする剥片に関しては(S 49～S 81)、背面も自然面によって構成されるものの出現がやや顕著であるが、背面は剥離面を打面とする剥片と同様に同一方向か直交方向の複数の剥離面によって構成される場合が多い。剥片の形状に関しては、剥離面を打面とする剥片と比較して、どちらかと言えば方形から縦長を指向しているように見受けられる。そのほかに円盤状の石核から剥取されたような剥片も存在する(S 37, S 80)。

打面の欠如する剥片に関しては(S 84～S 107)、打面部の欠如という特徴に加えて、そのほかの側縁にも折れが比較的顕著に認められたり、形状の不安定なものも多いという点が目につく。二次加工が見られないことも併せて考慮すると、これらの折れは人為的な折断ではない可能性が高く、従ってこれらは剥片剥離時の碎片がその多くを占めているという可能性を指摘することができる。

〔 I 地区出土の石器〕

(S 298, S 299, S 300)は縄文時代晩期の包含層より、(S 302, S 304, S 305)は縄文時代中期(船元式)の包含層より、また(S 303)は縄文時代中期末(北白川C式)の土器片敷遺構よりそれぞれ出土したものである。いずれも出土点数が限られているが、プライマリーな出土のものをここで取り扱う。石器群の様相を知るには資料不足であるが、(S 298, S 299)は二次加工のある剥片、(S 300)はスクレイパーである。(S 302)は下縁部に細かなステップフレイキングが見られ、右側面の一部は縦方向の剥離面によって構成されている。上縁部の剥離は貧弱であるが、楔形石器であろう。(S 304)は剥片であるが、バルブを除去するような二次加工が背面にみられる。(S 305)は石核である。自然面を打点としており、縁辺を巡るように求心的な剥離を行っている。石核の大きさをみても、さほど大きな剥片の剥取は意図していないようである。(S 303)は比較的小型の二次加工のある剥片である。下部は欠損しているが、自然面を打面とする縦長剥片の両側縁に腹面側から小剥離を連続させている。(Fig. 119—S 205, S 206, Fig. 120—S 208)は縄文時代中期(船元式)の石匙である。いずれも縦型であるが、(S 205, S 206)は横長剥片を、(S 208)は縦長剥片を素材としている。総じて粗雑な作りであり、特に(S 205, S 208)に関しては素材の端部に粗い剥離を加えて抉りを入れることで、つまみ部を形成しているに過ぎない。刃部の作出は素材剥片の上縁から側縁にかけての部分を指向しているようである。(Fig. 119—S 201)は縄文時代晩期の石匙である。素材剥片の上部の粗い剥離がみられる部分がつまみ状を呈しているのみであり、明瞭な刃部の作出もみられることや、微小剥離も認められることなどから、未成品の可能性もある。

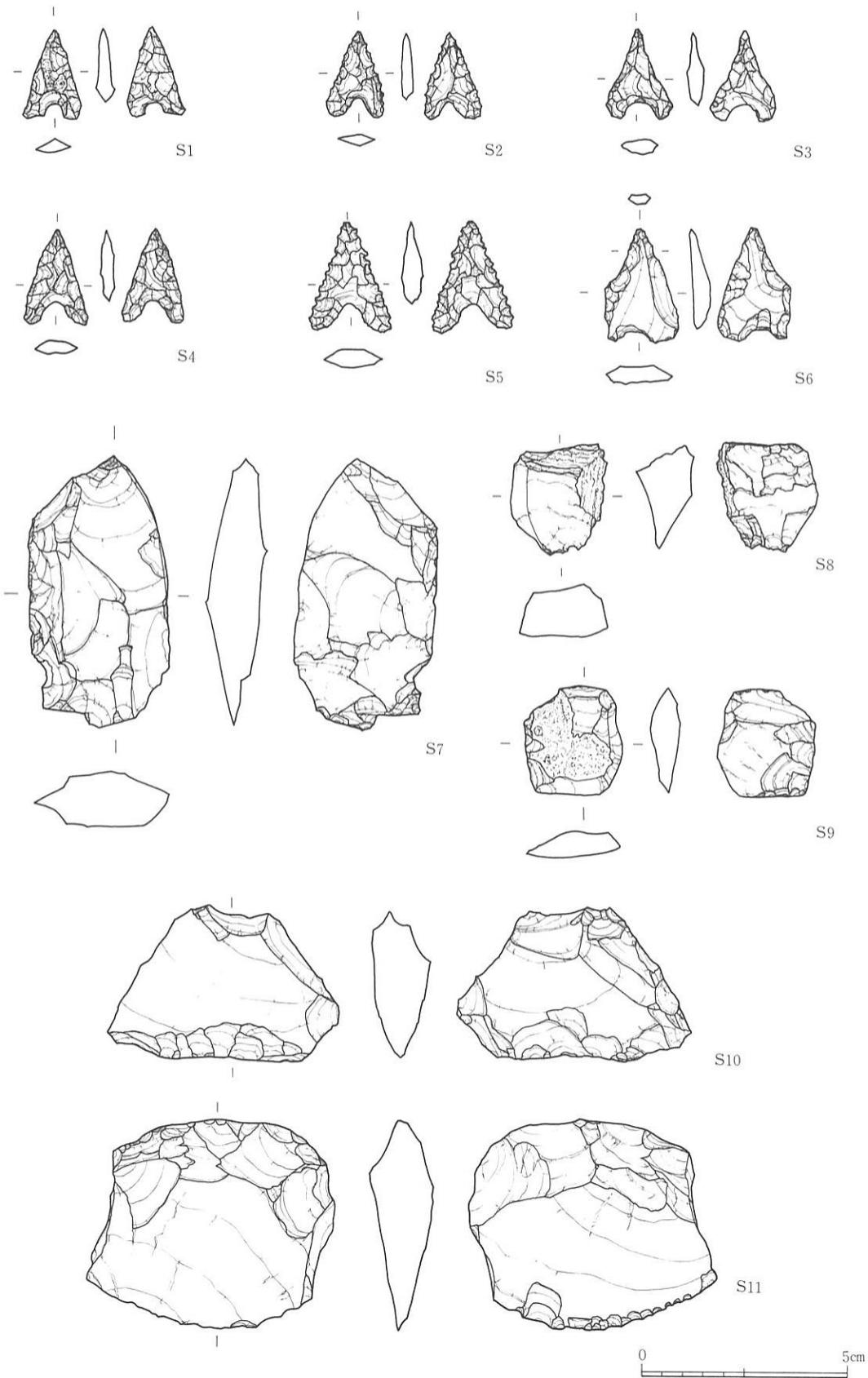


Fig.102 F地区縄文時代後期 打製石器(1) 石鏃、S 1～S 6、楔形石器S 7～S 9、スクレイパーS 10. S 11

9. 石 器

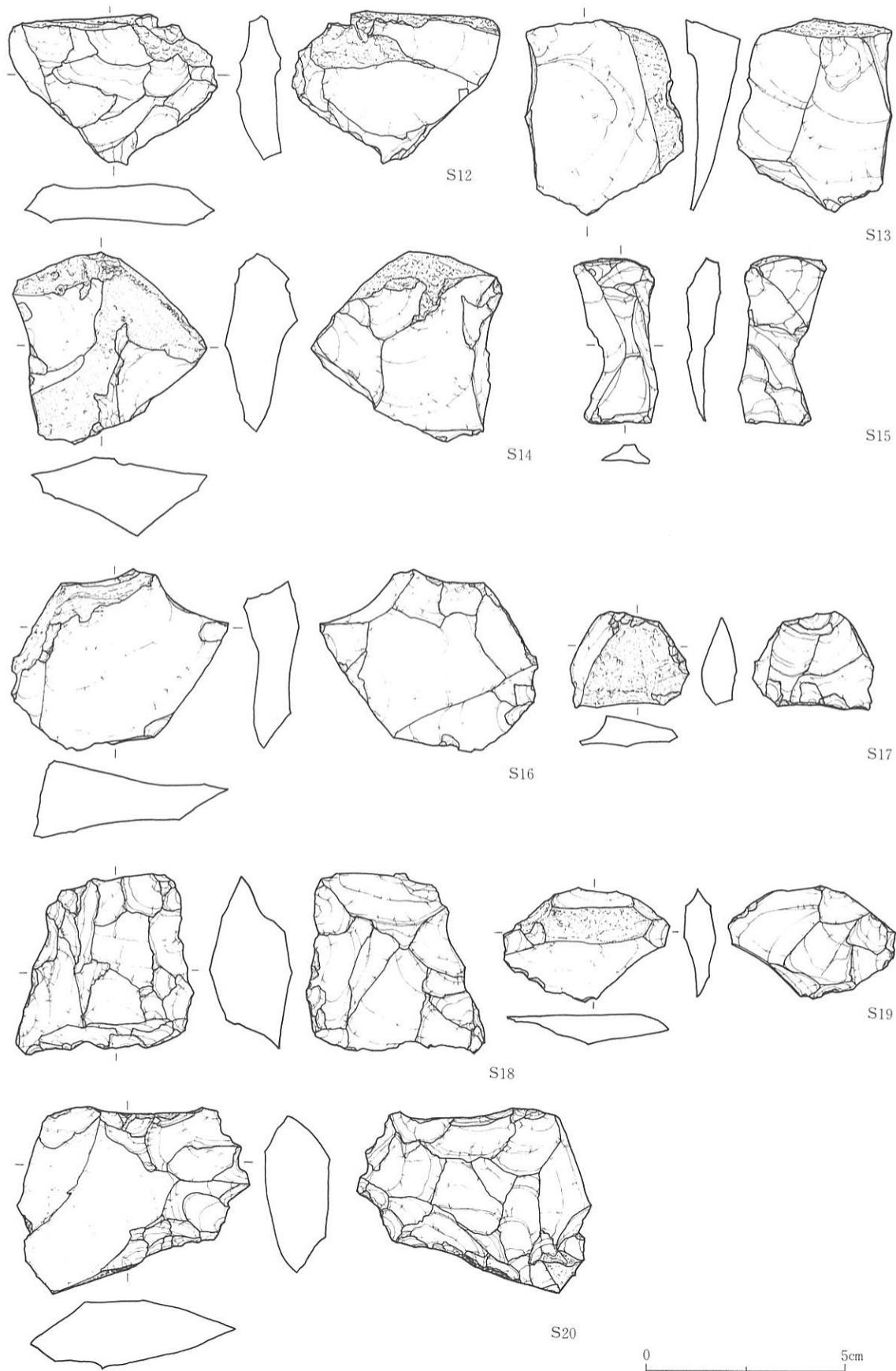


Fig. 103 F 地区縄文時代後期打製石器(2) 石核

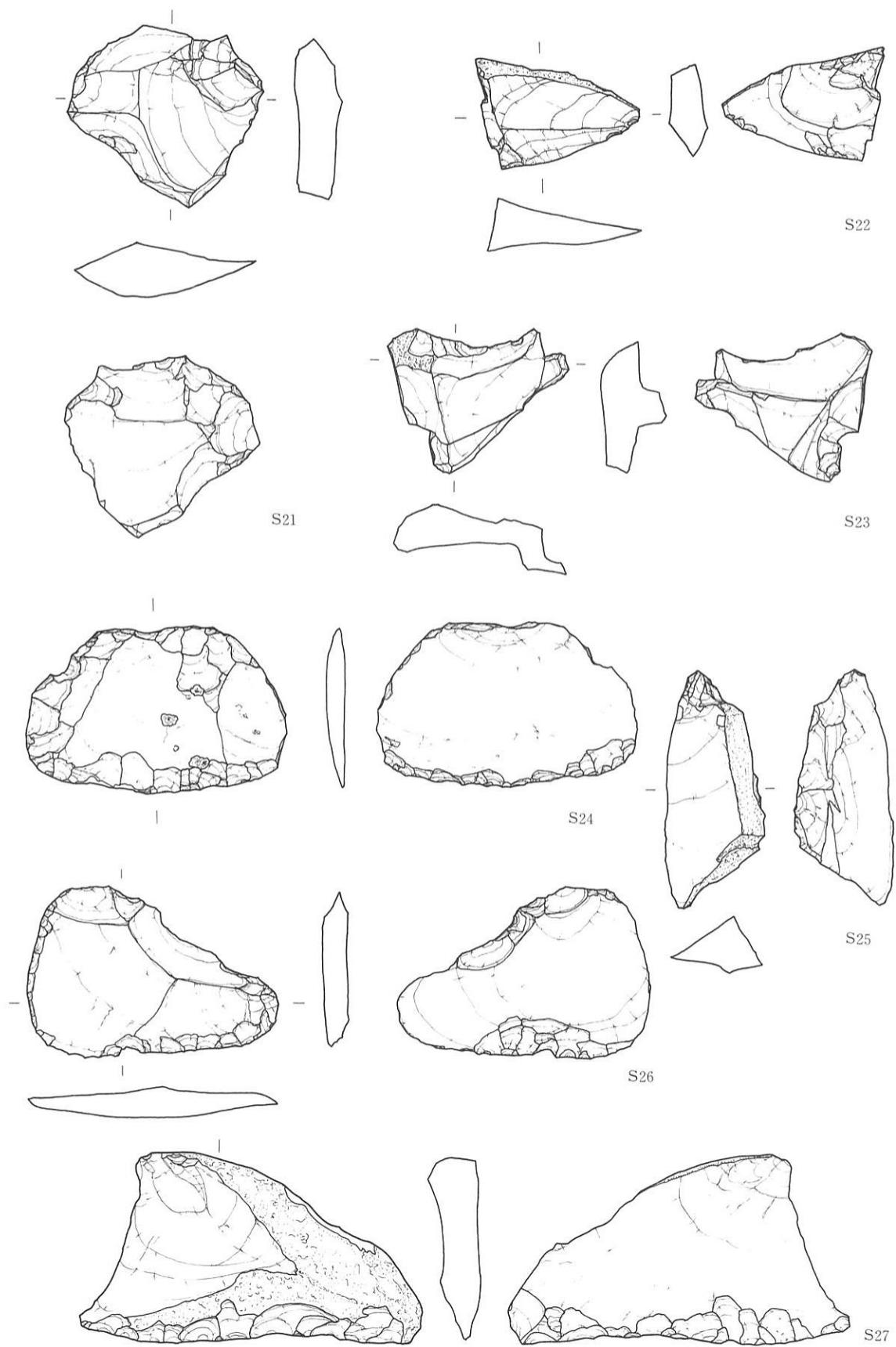


Fig.104 F 地区縄文時代後期 打製石器(3) 石核 S 21～S 23、二次加工のある剥片 S 24～S 27
(S = 2/3) 149

9. 石 器

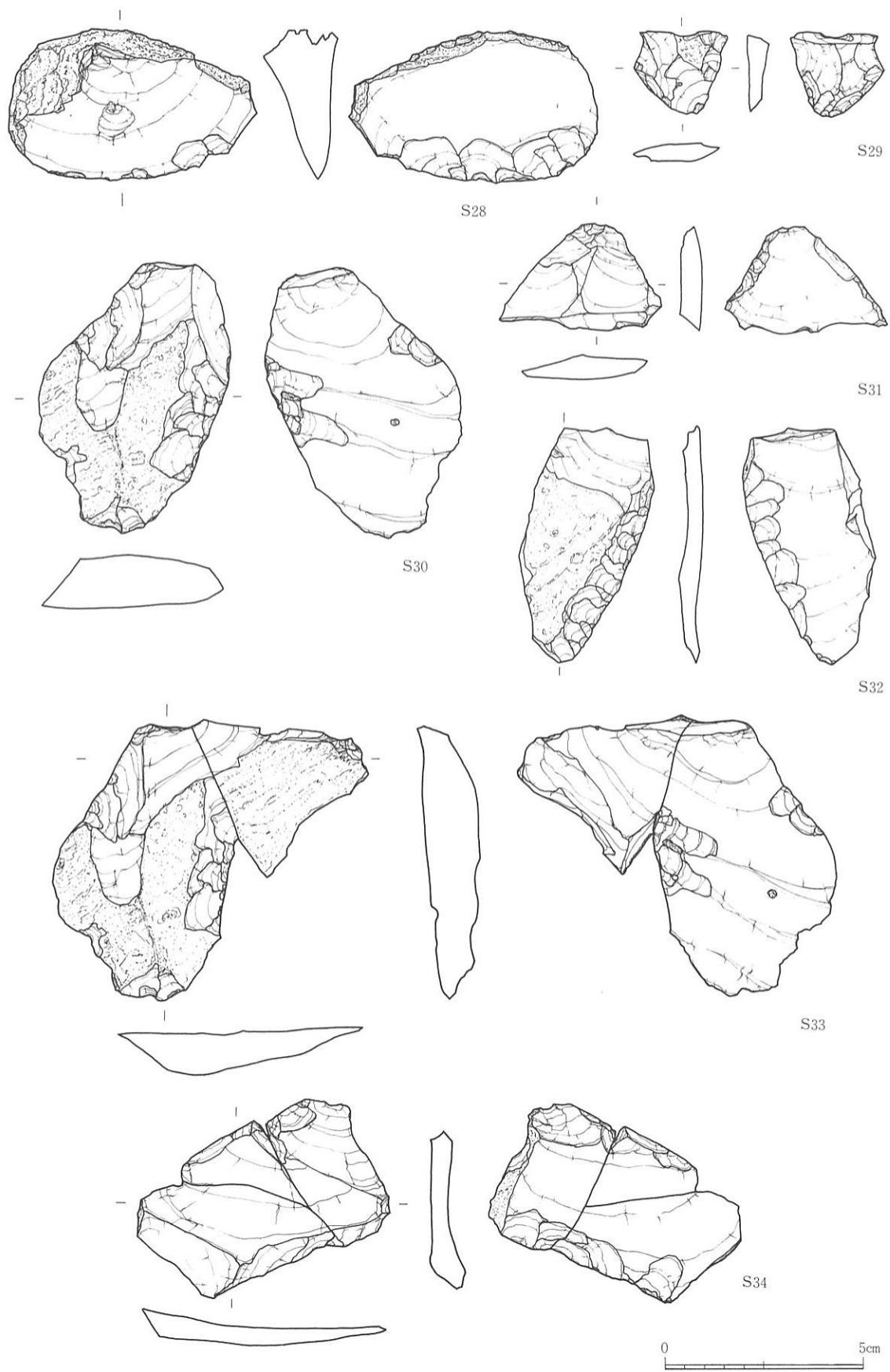


Fig.105 F 地区縄文時代後期 打製石器(4) 二次加工のある剥片 S 28~S 32、接合資料 S 33. S 34
150

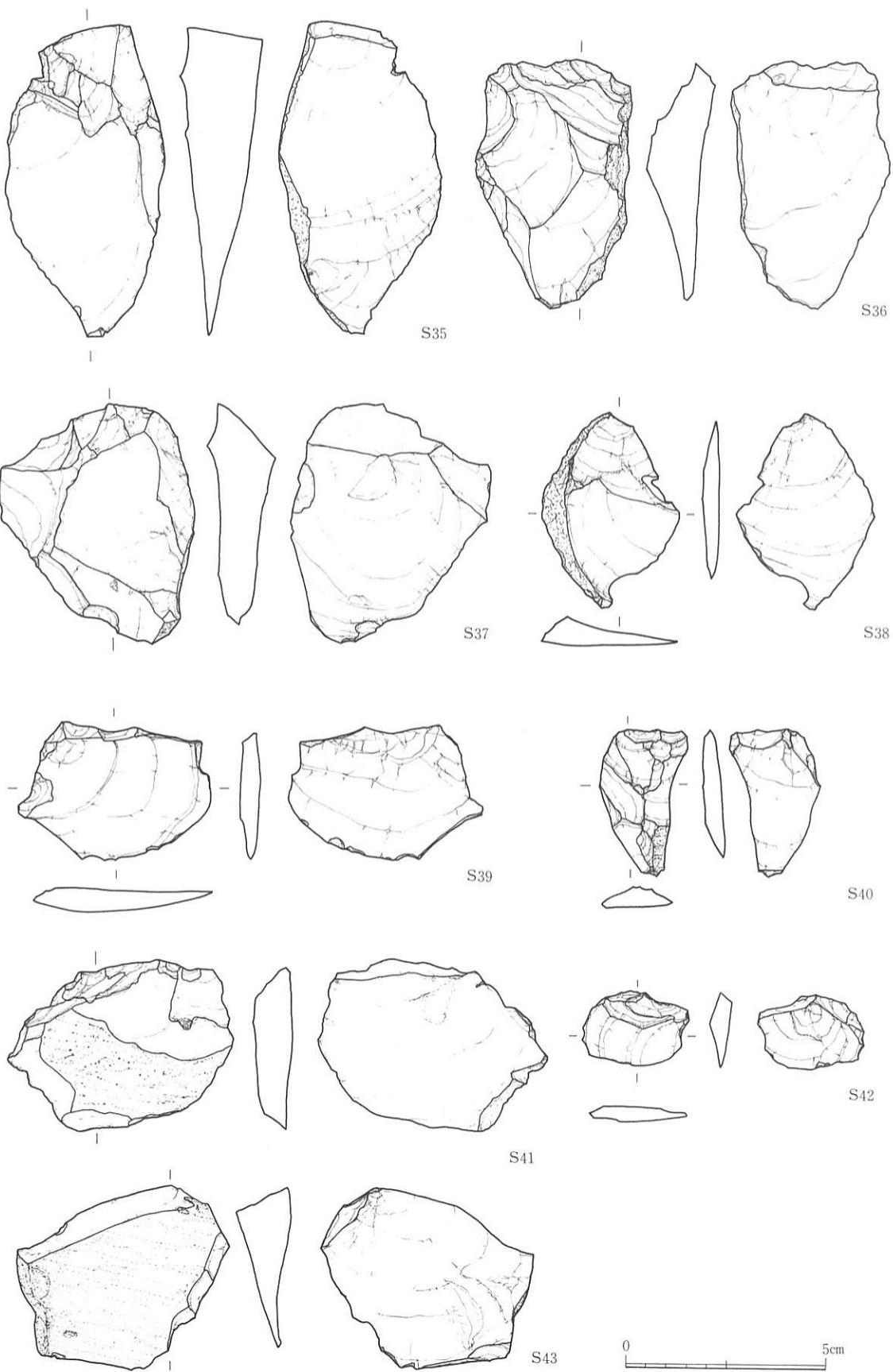


Fig. 106 F 地区縄文時代後期 打製石器(5) 剥片 (打点の残るもの)

9. 石 器

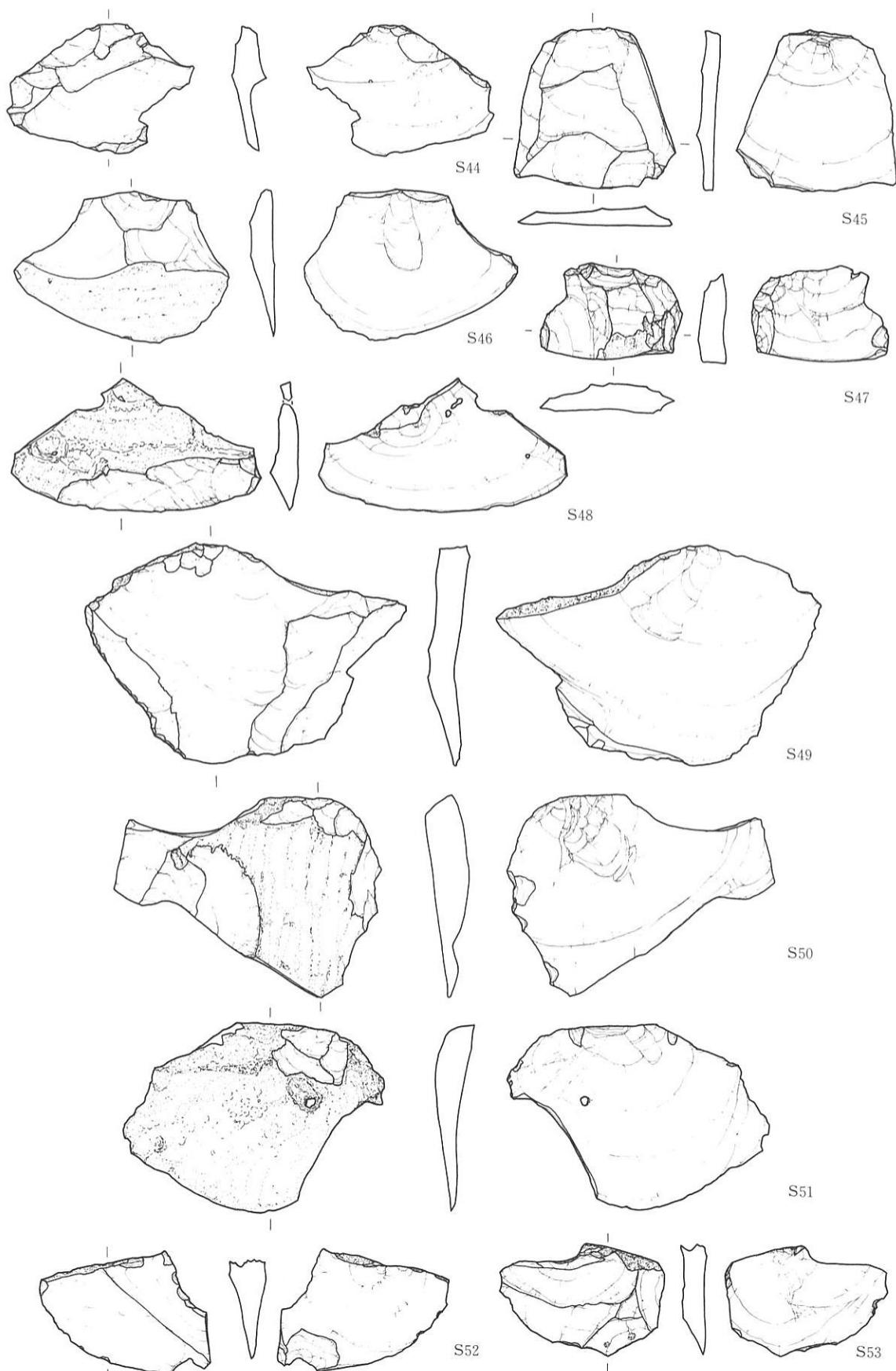


Fig. 107 F 地区縄文時代後期 打製石器(6) 剥片(打点の残るもの) (S=2/3)

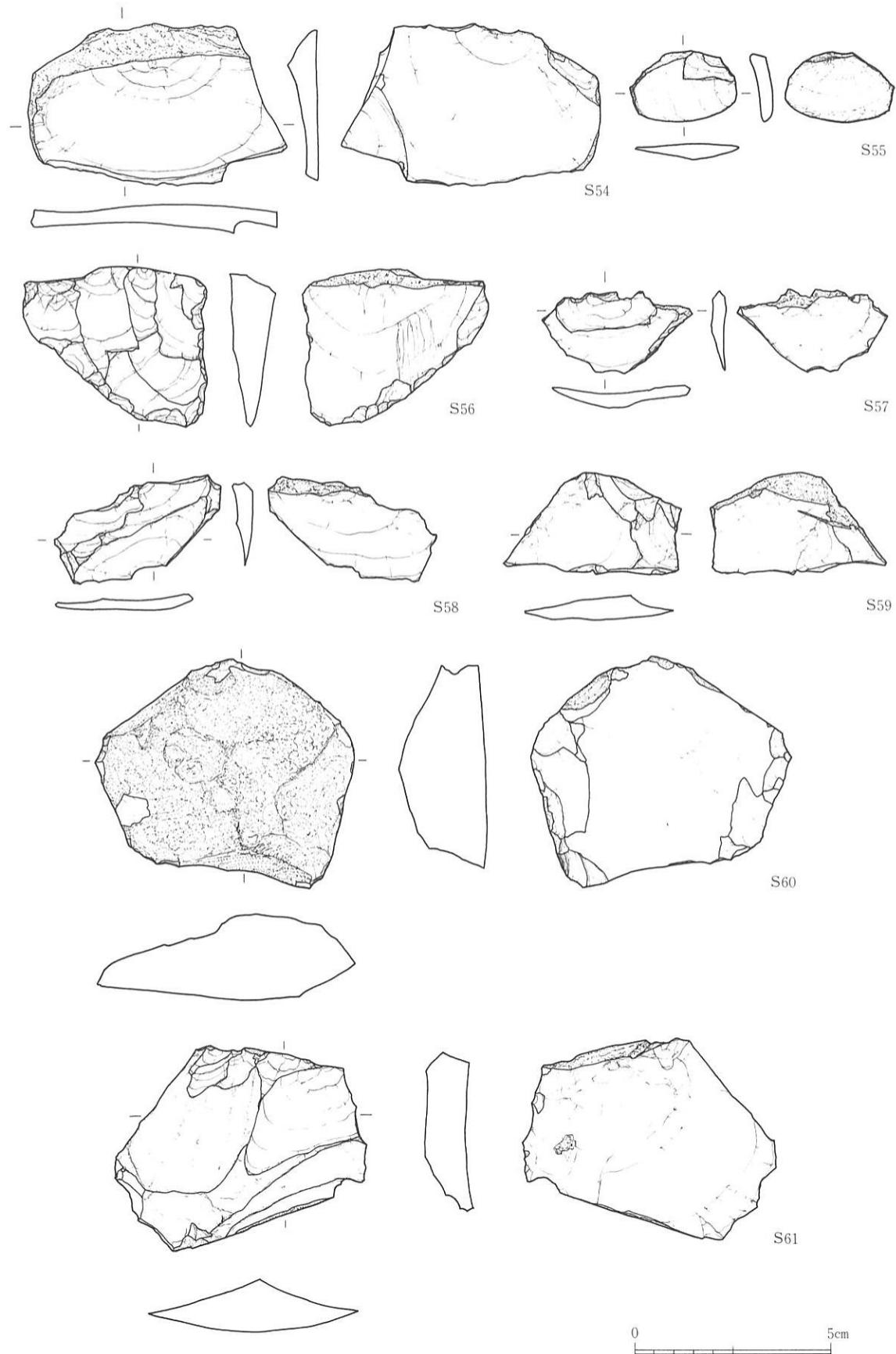


Fig. 108 F 地区縄文時代後期 打製石器(7) 剥片 (打点の残るもの)

9. 石 器

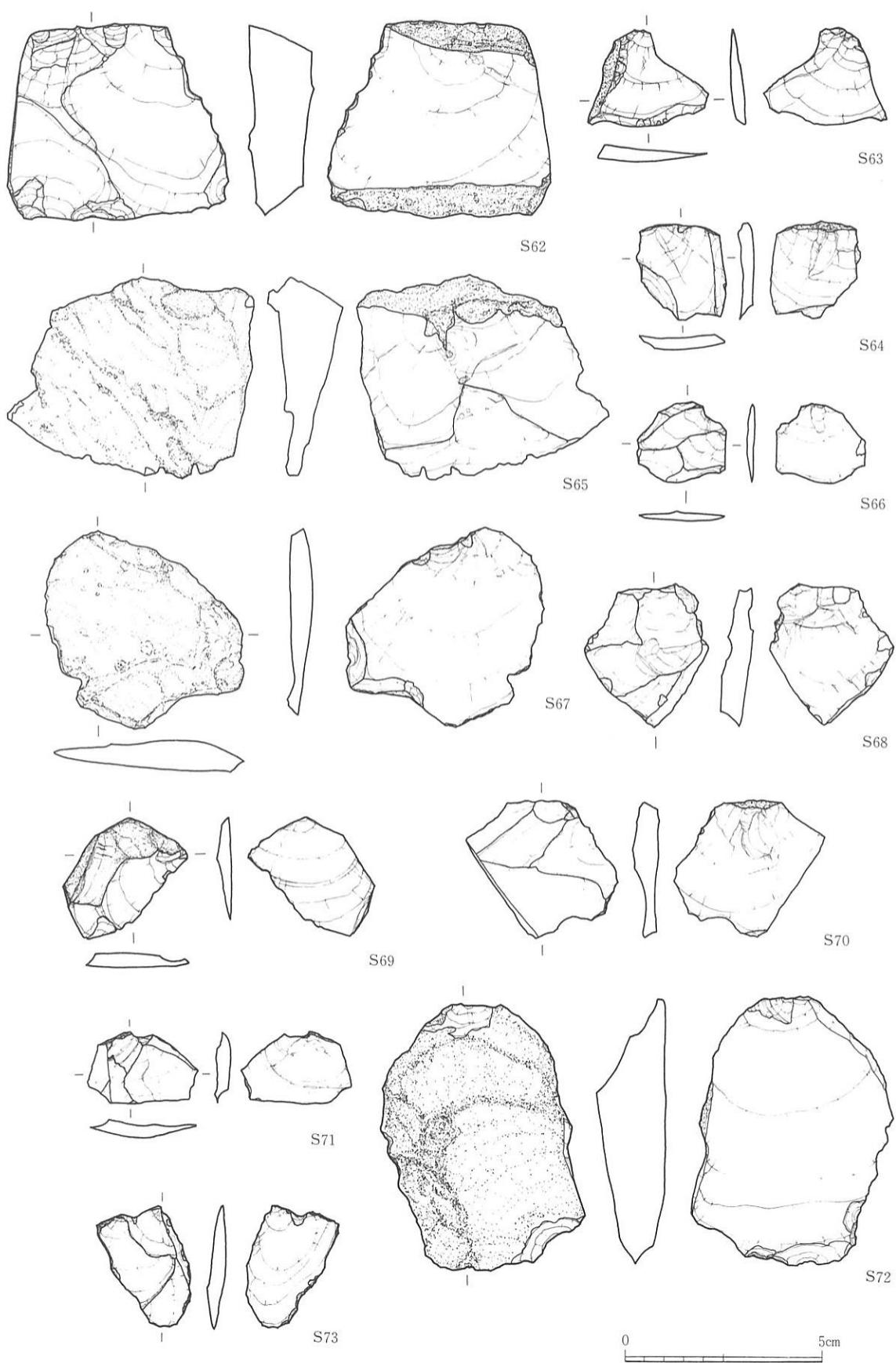


Fig.109 F 地区縄文時代後期 打製石器(8) 剥片 (打点の残るもの)

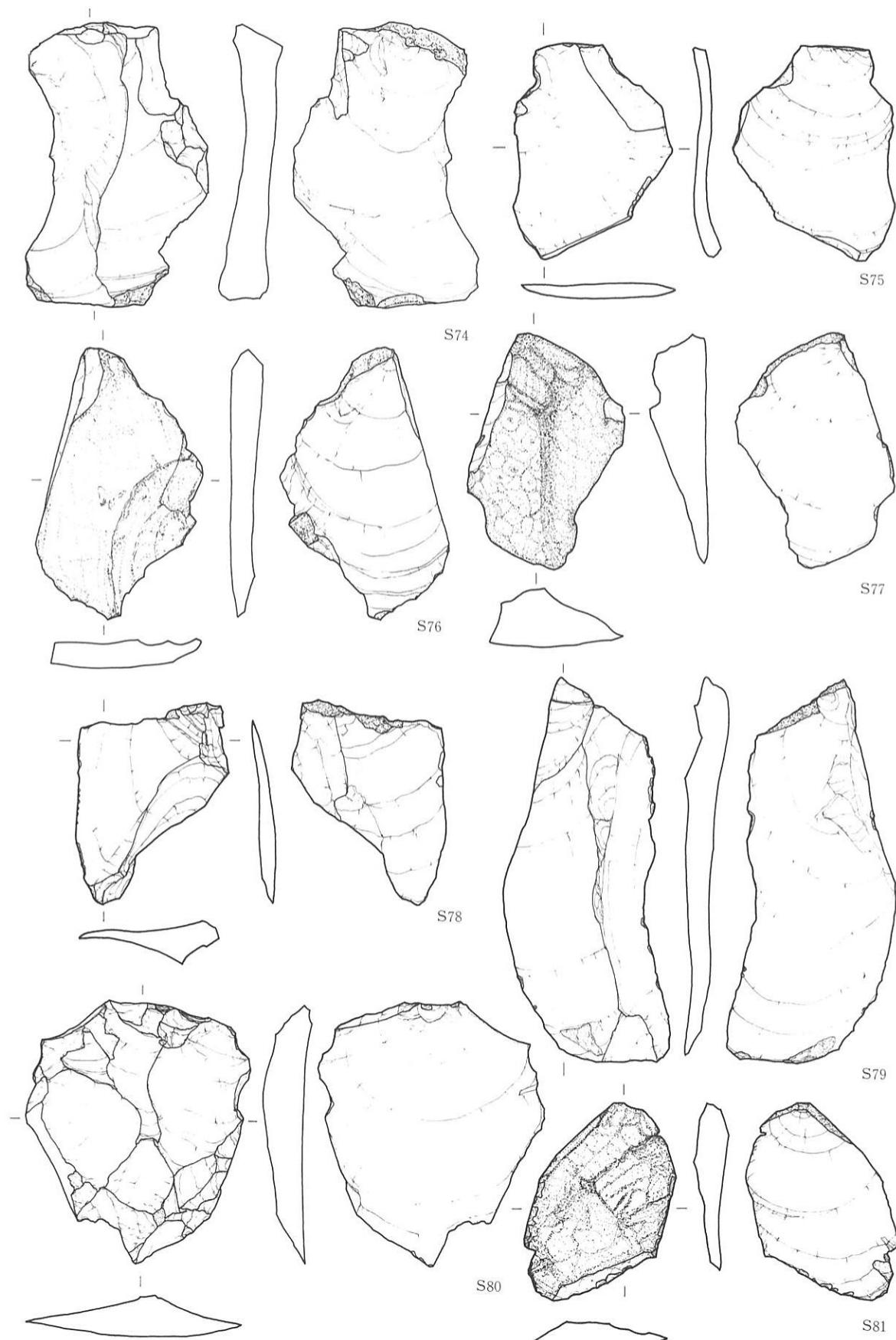


Fig. 110 F 地区縄文時代後期 打製石器(9) 剃片 (打点の残るもの) (S=2/3)

9. 石 器

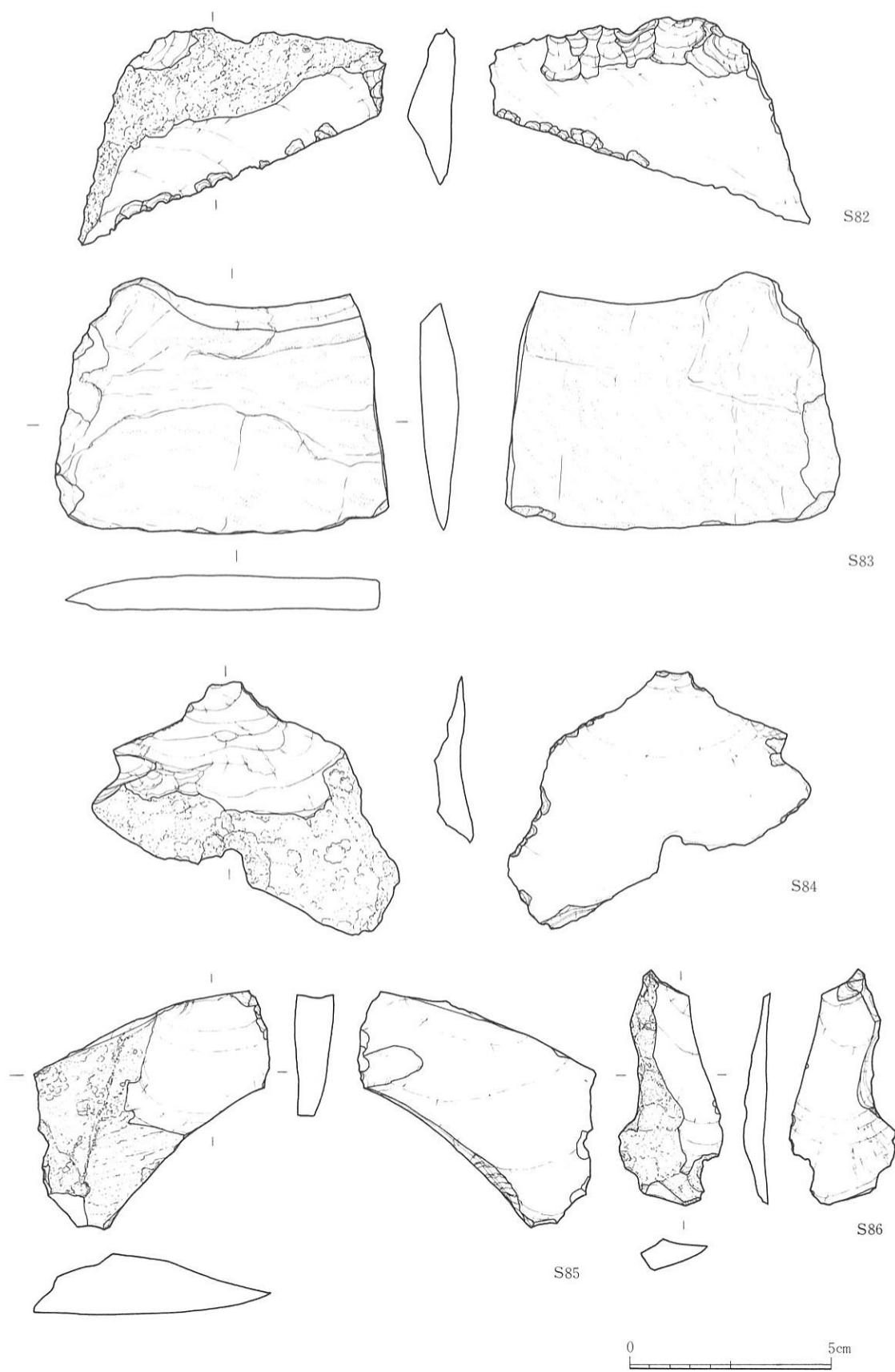


Fig.111 F 地区縄文時代後期 打製石器(10) 二次加工のある剥片 S 82、剥片？ S 83、
剥片（打点の残らないもの） S 84～S 86

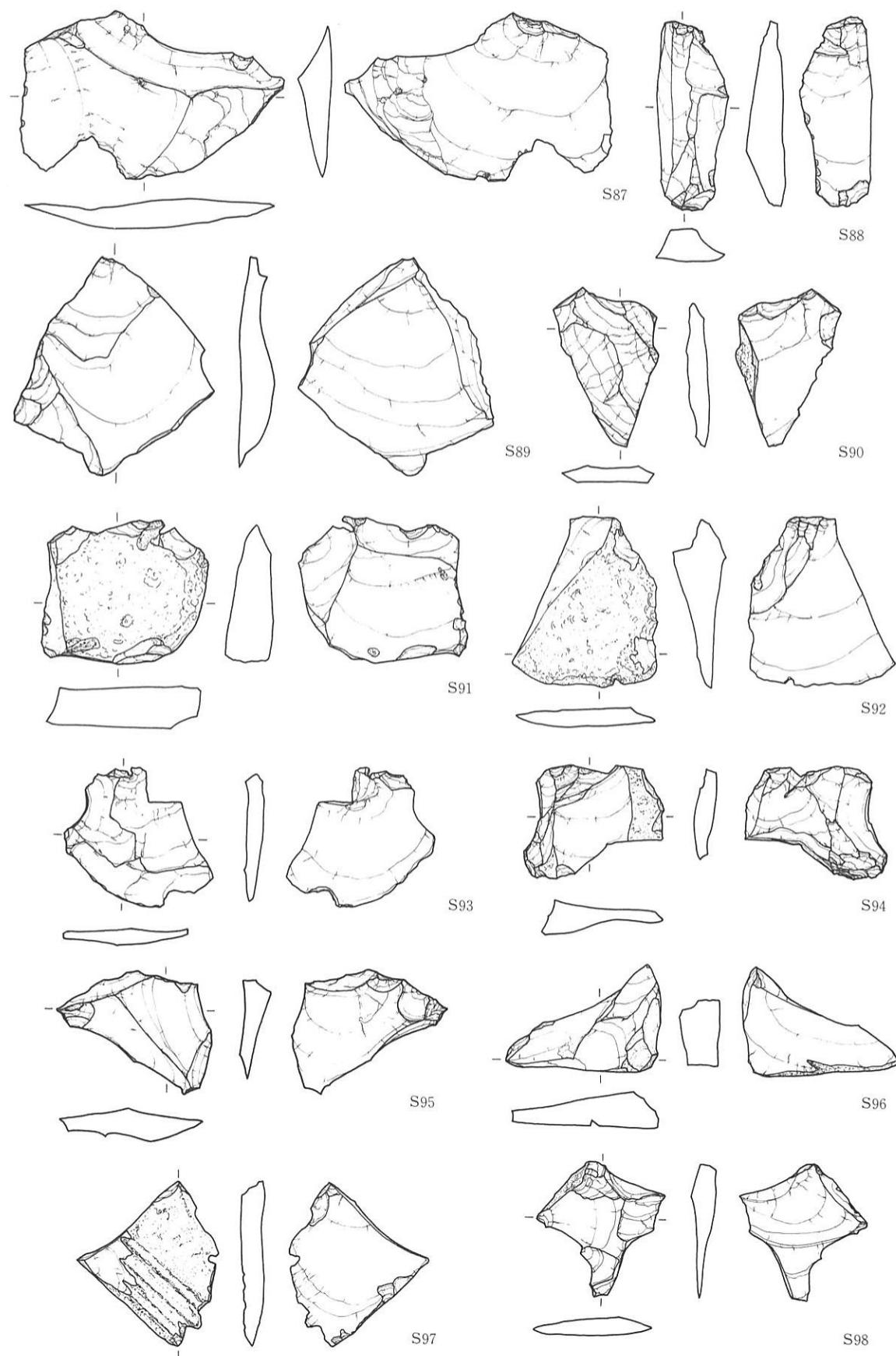


Fig.112 F地区縄文時代後期 打製石器(11) 剥片（打点の残らないもの）（S=2/3）

9. 石 器

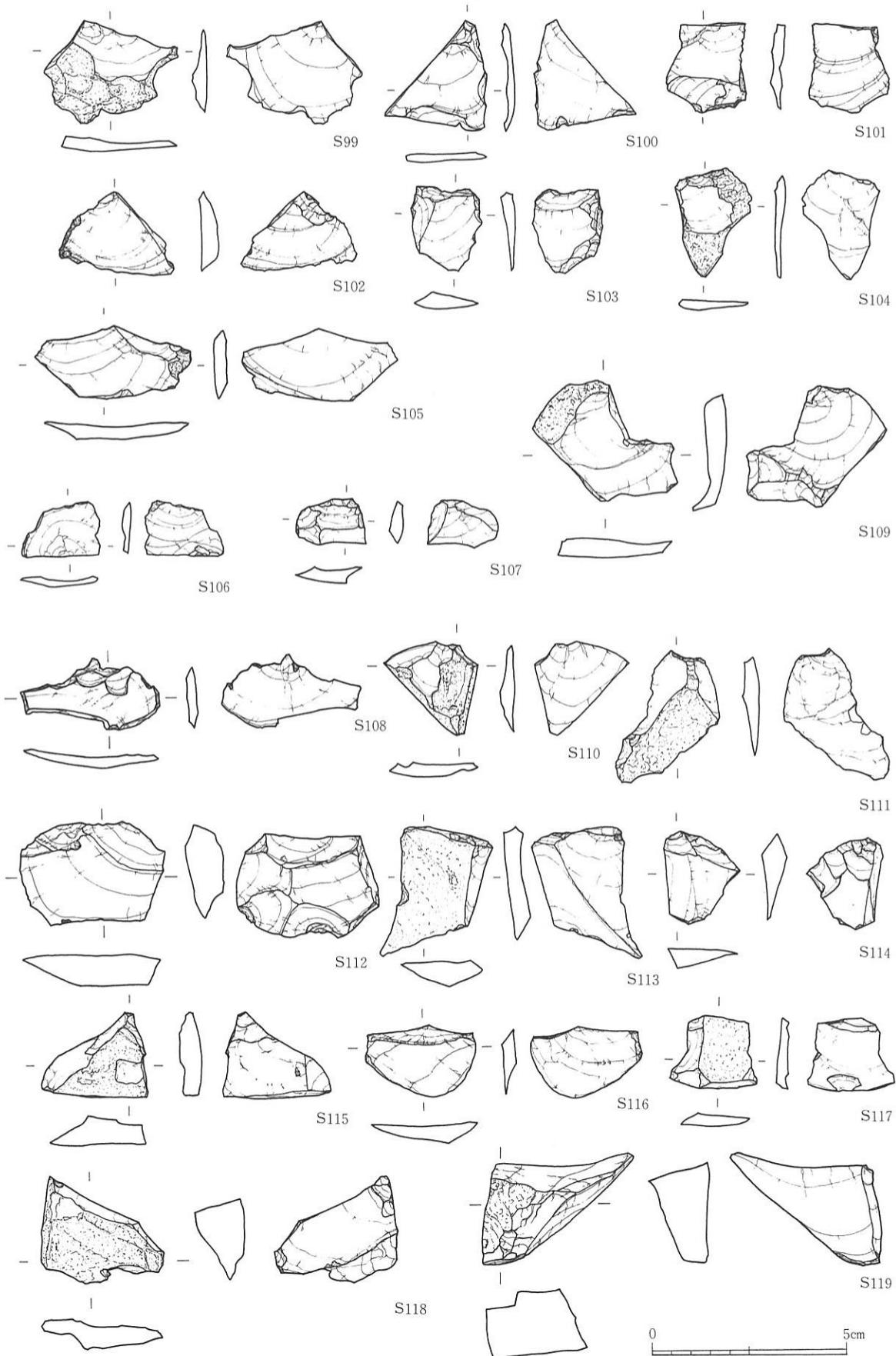


Fig.113 F地区縄文時代後期 打製石器(12)
剥片（打点の残らないもの）S99～S109、
碎片・チップ等S110～S119
158

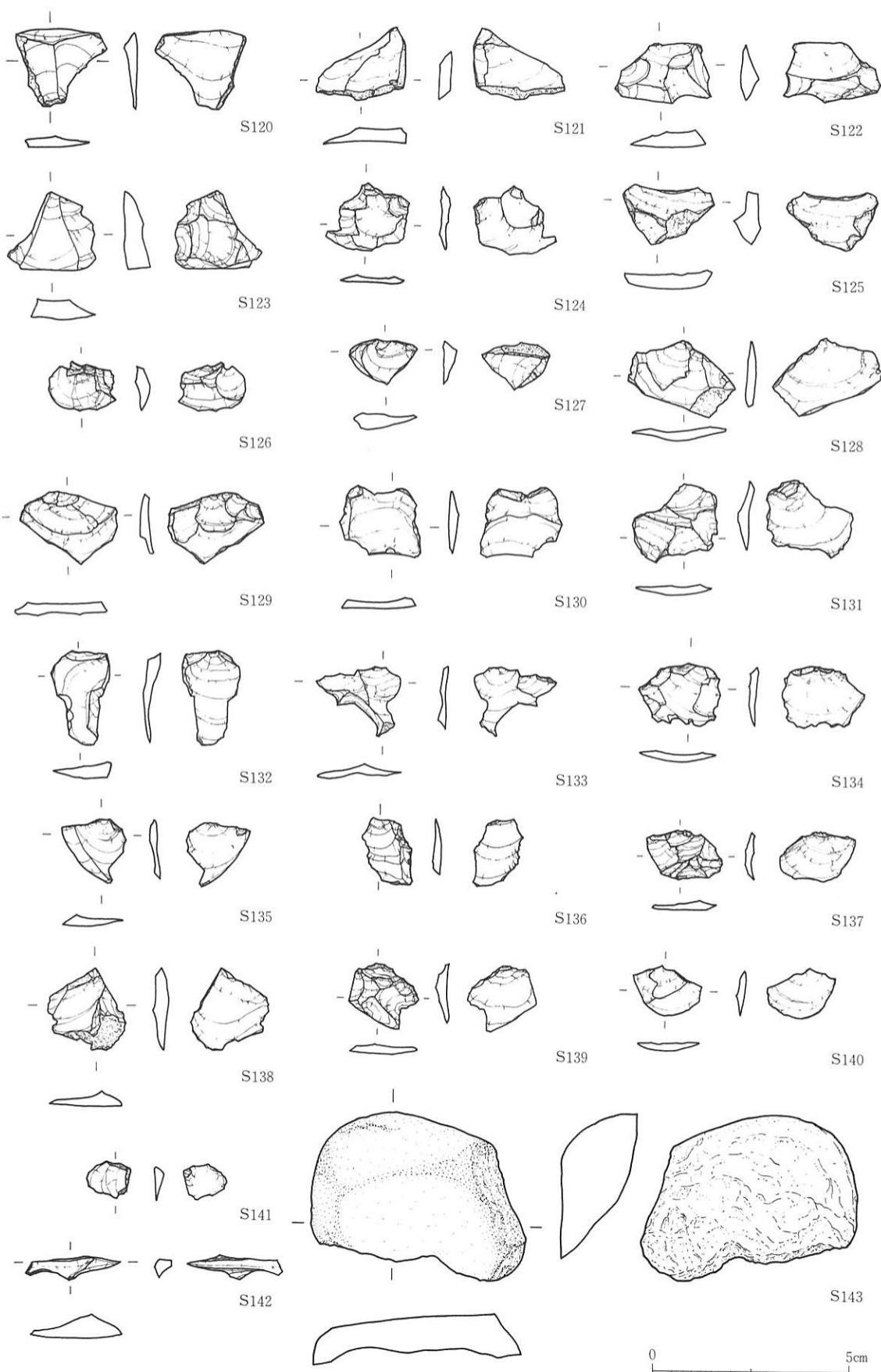


Fig.114 F地区縄文時代後期 打製石器(13) 碎片・チップ等 S120～S142、破碎碟 S143

9. 石 器

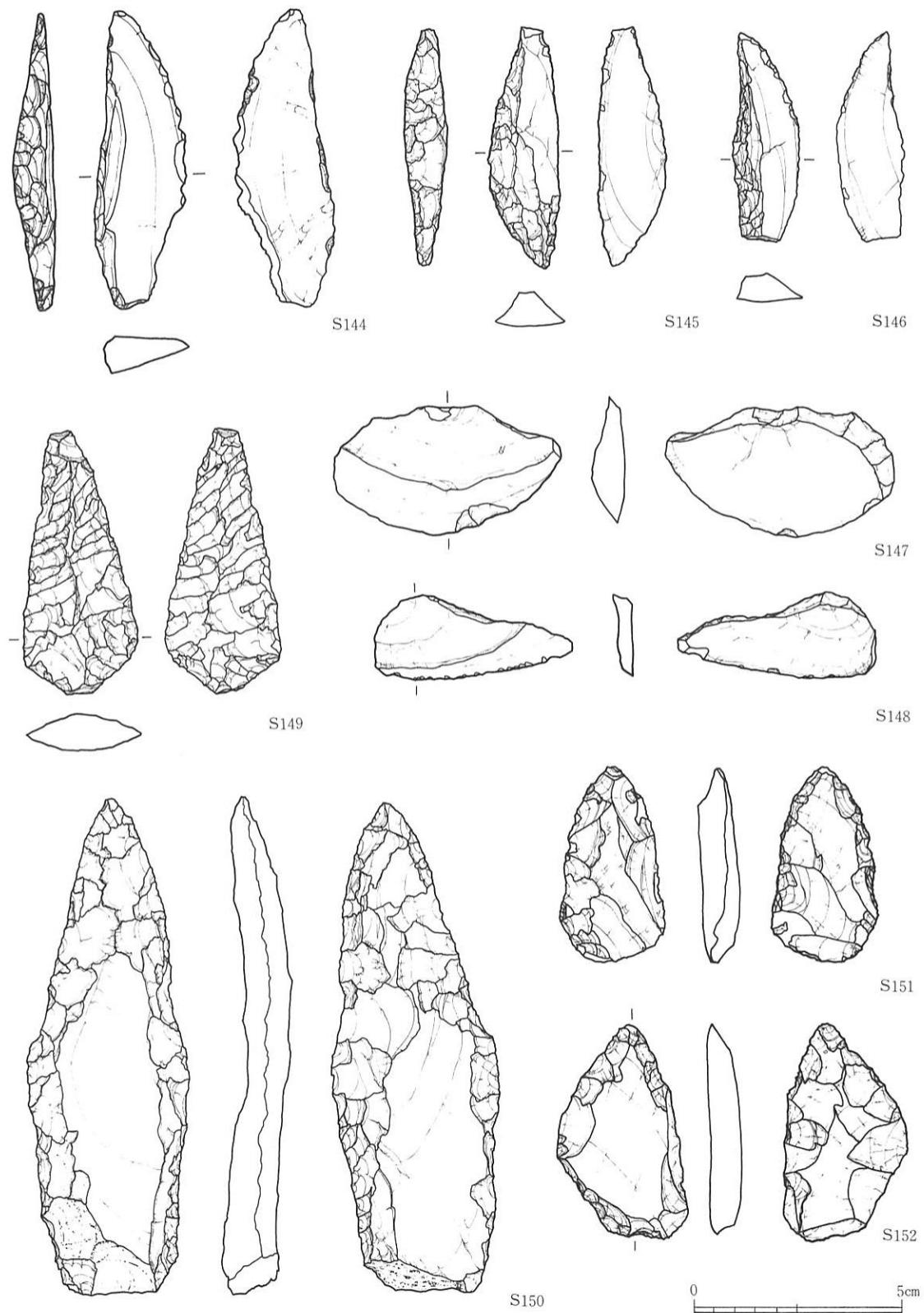


Fig. 115 打製石器(1) 国府型ナイフ形石器 S 144～S 146、翼状剥片 S 147. S 148、
有舌尖頭器 S 149. S 150、尖頭器 S 151. S 152

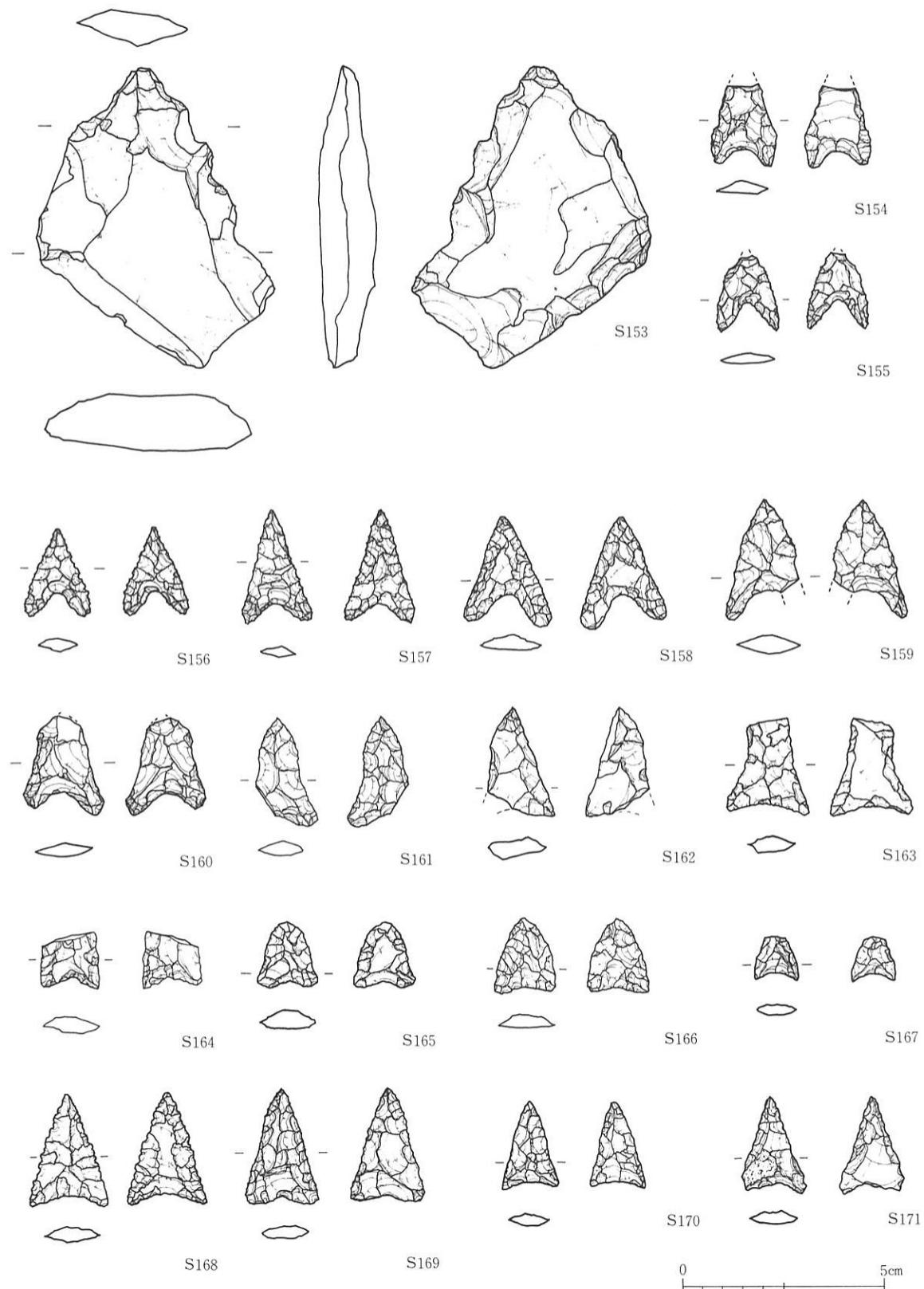


Fig.116 打製石器(2) 尖頭器 S 153、石鏃 S 154～S 171

9. 石 器

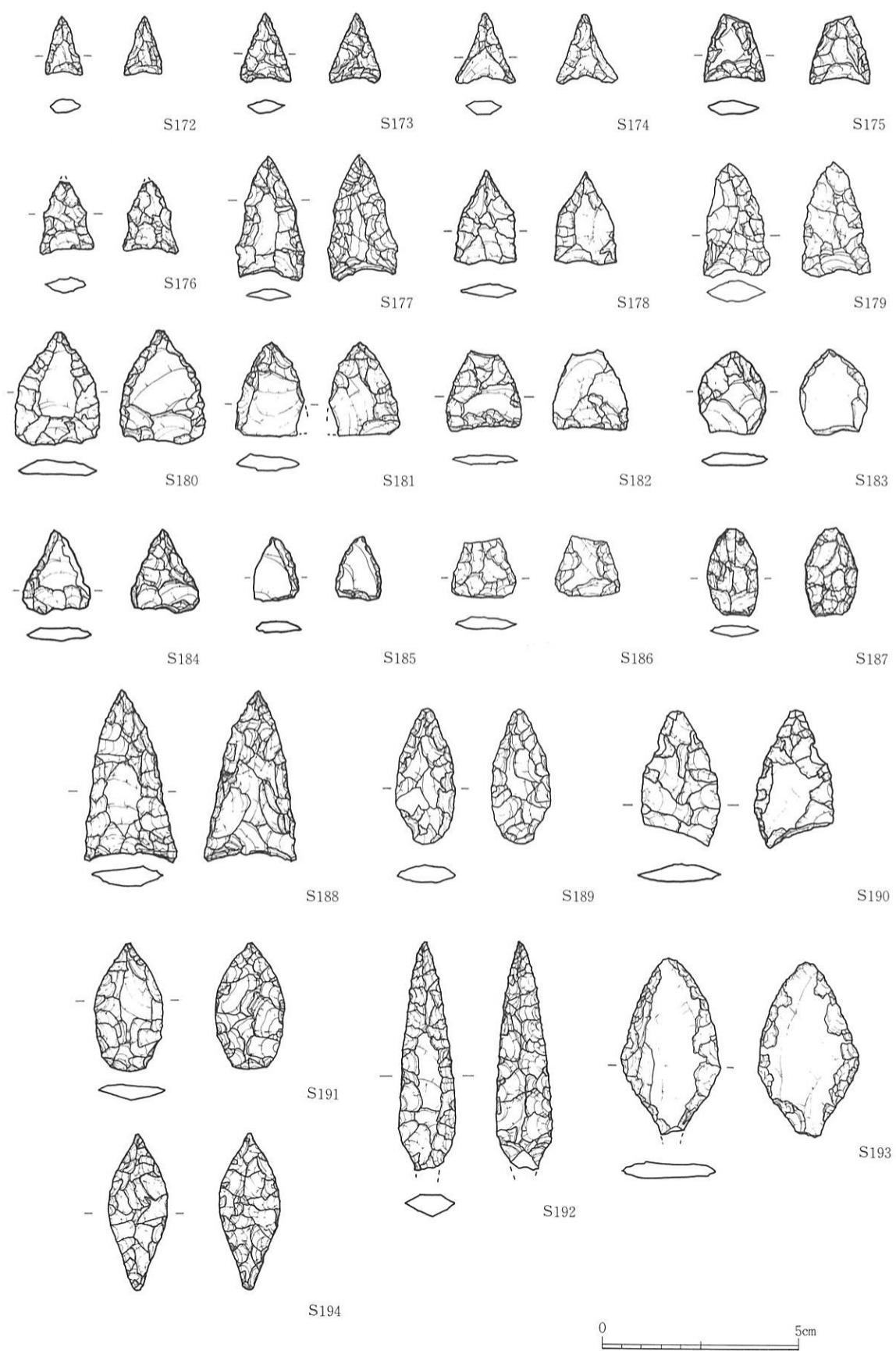


Fig.117 打製石器(3) 石鏃

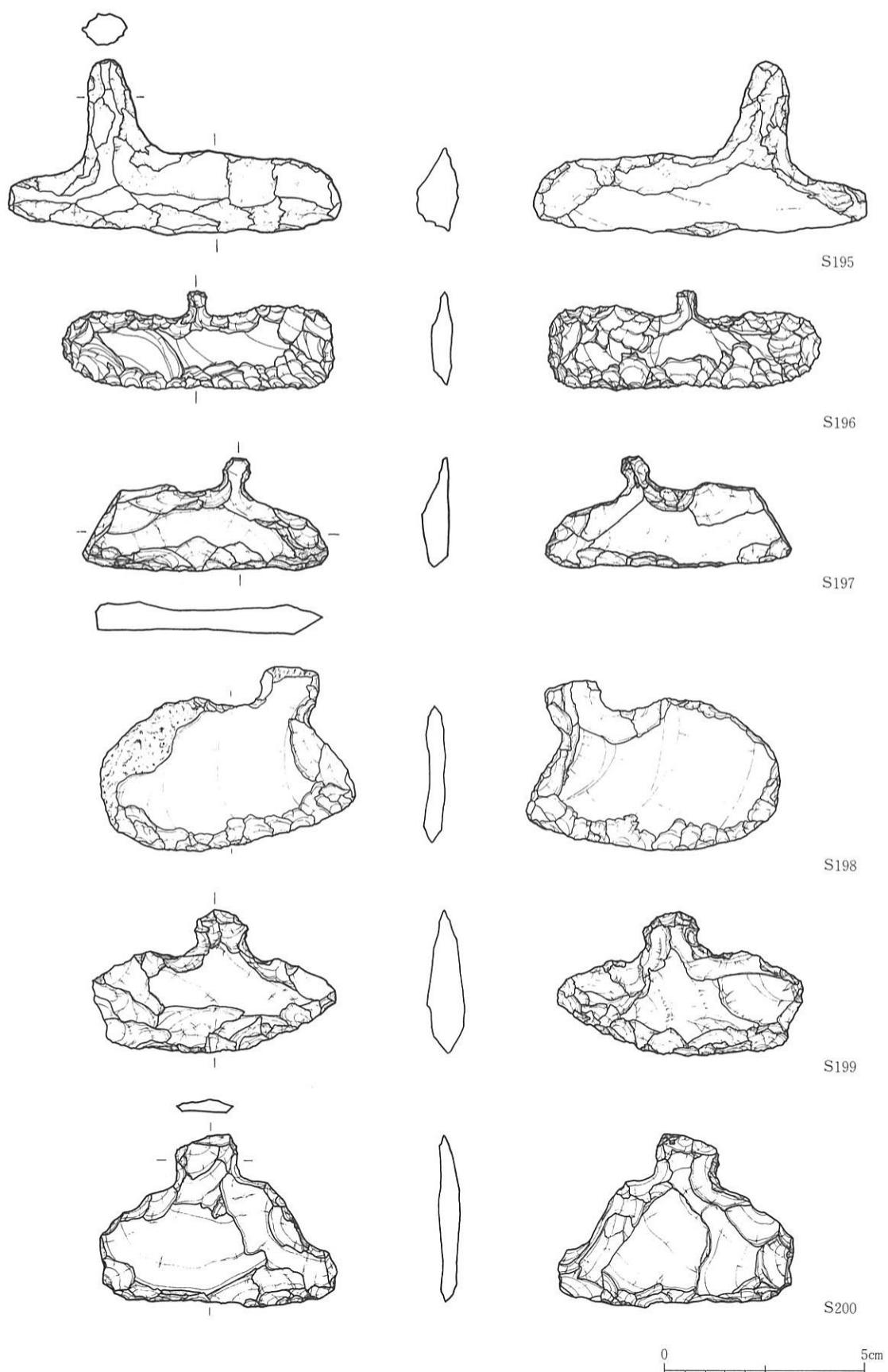


Fig.118 打製石器(4) 石匙

9. 石 器

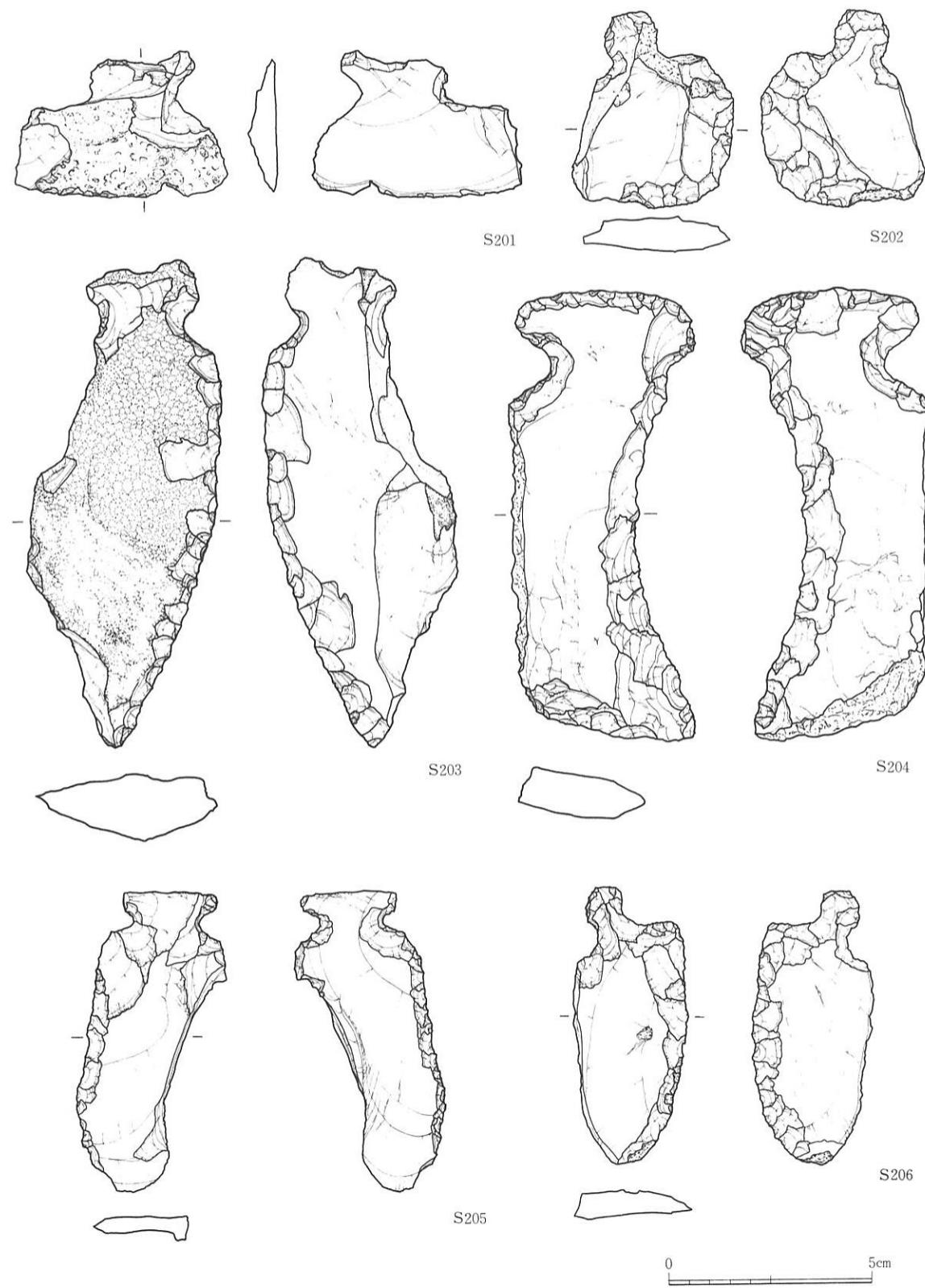


Fig.119 打製石器(5) 石匙

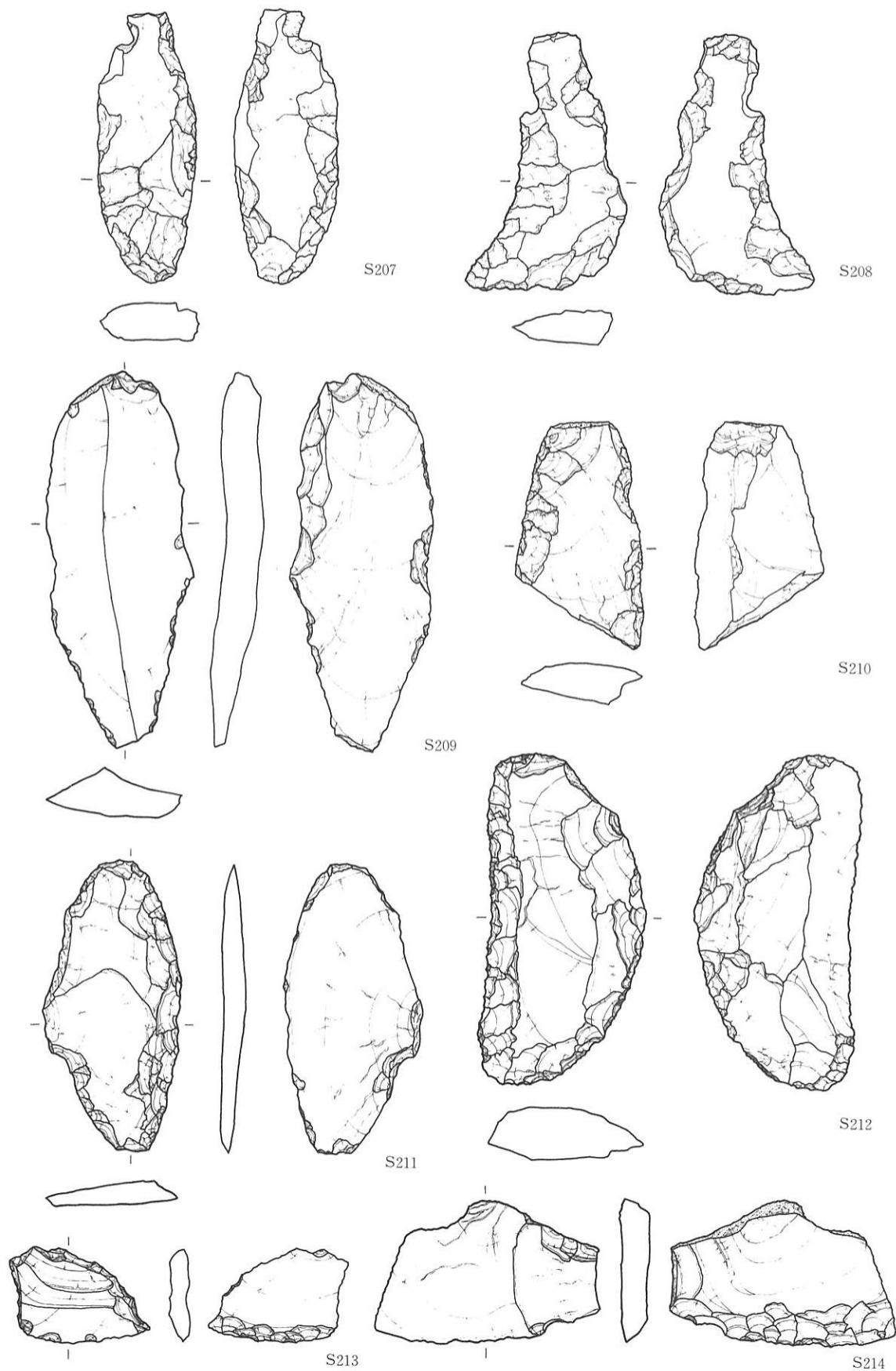


Fig. 120 打製石器(6) 石匙 S 207, S 208、スクレイパー S 209～S 214 (S = 2/3)

9. 石 器

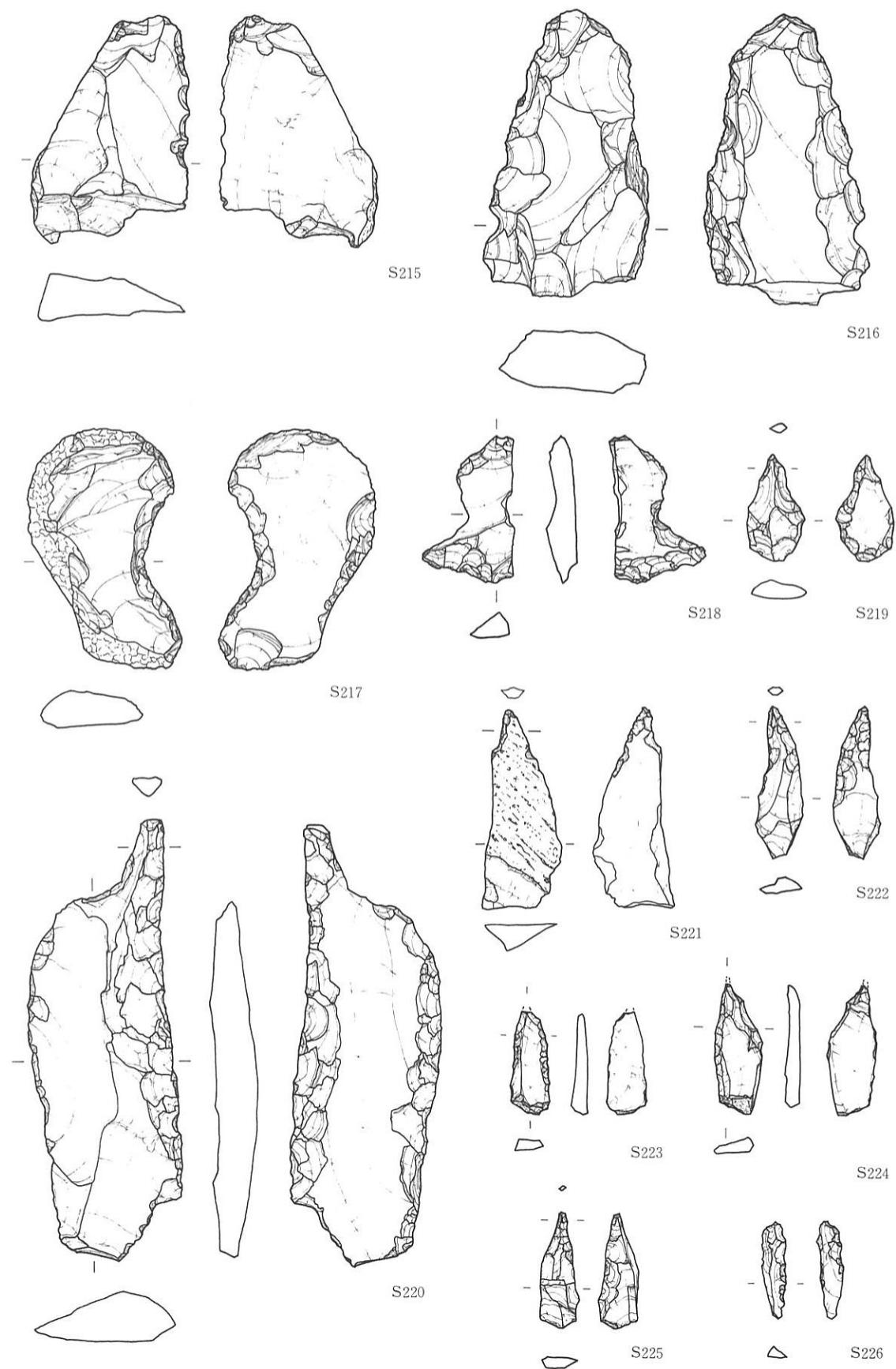


Fig. 121 打製石器(7) 鋸齒緣石器 S 215. S 216、ノッチ S 217. S 218、ドリル S 219~S 226
(S = 2/3)

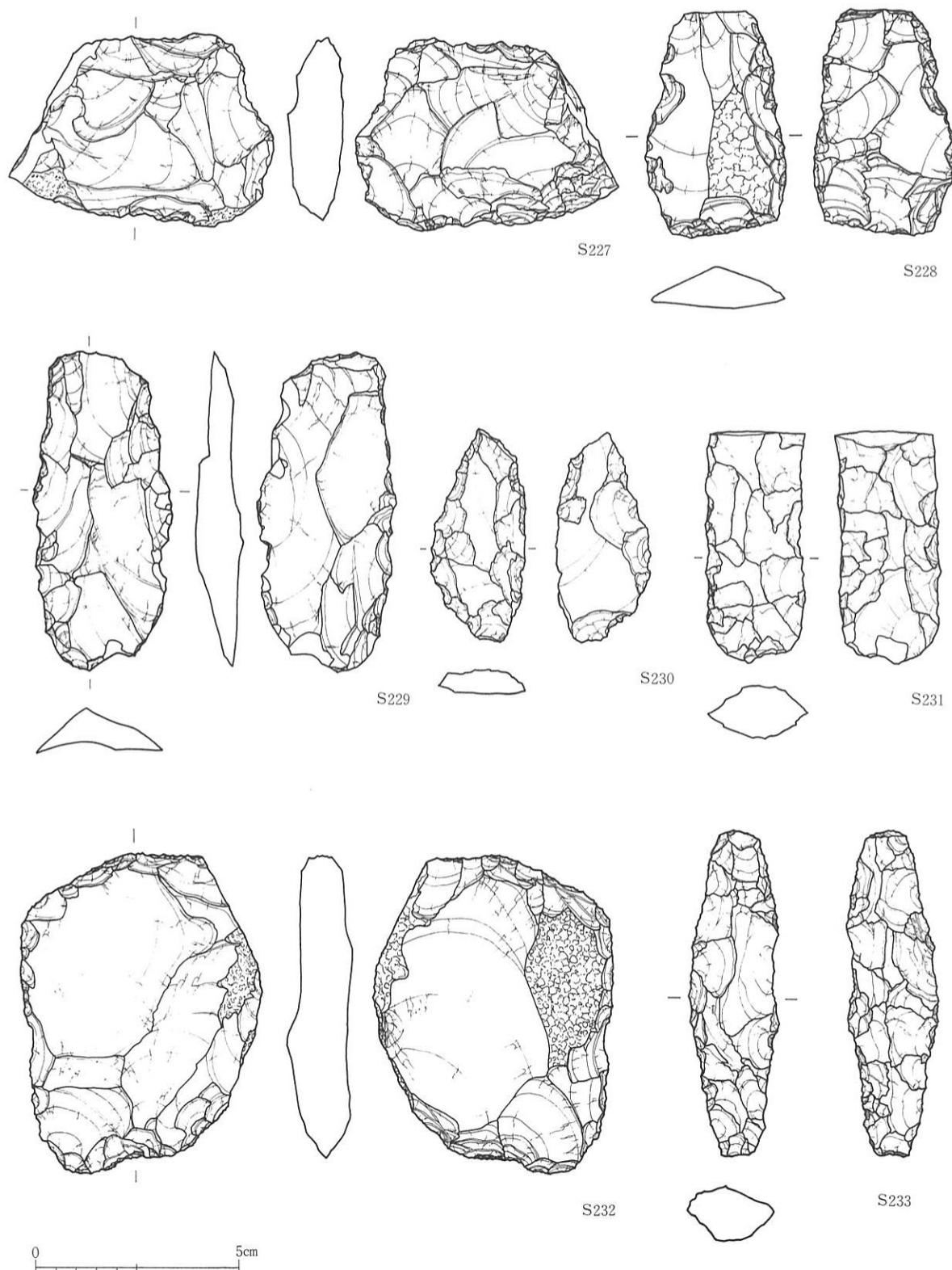


Fig.122 打製石器(8) 両面加工石器 S 227～S 230、石槍？ S 231. S 233、楔形石器 S 232

9. 石 器

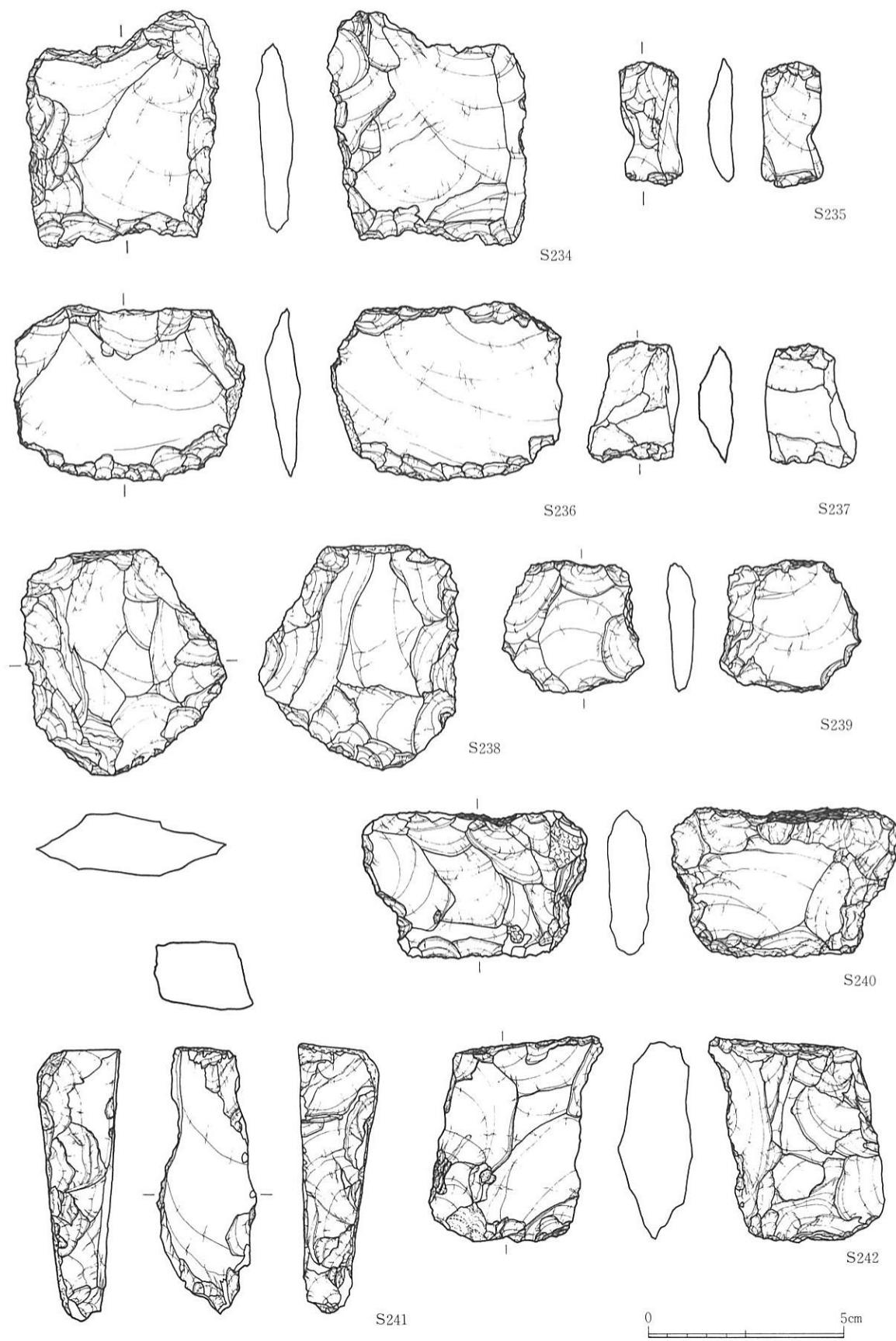


Fig.123 打製石器(9) 楔形石器

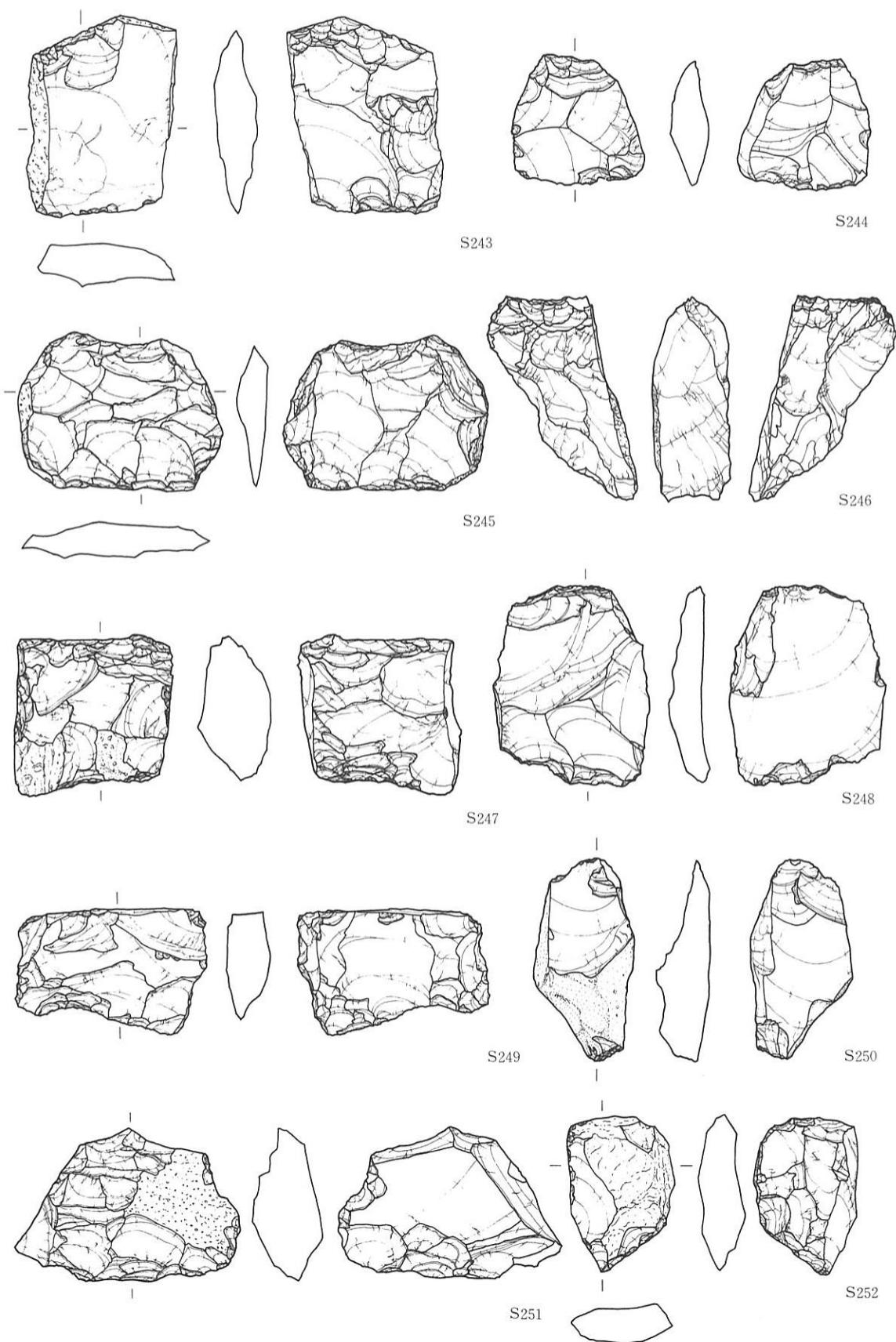


Fig. 124 打製石器(10) 楔形石器 ($S = 2/3$)

9. 石 器

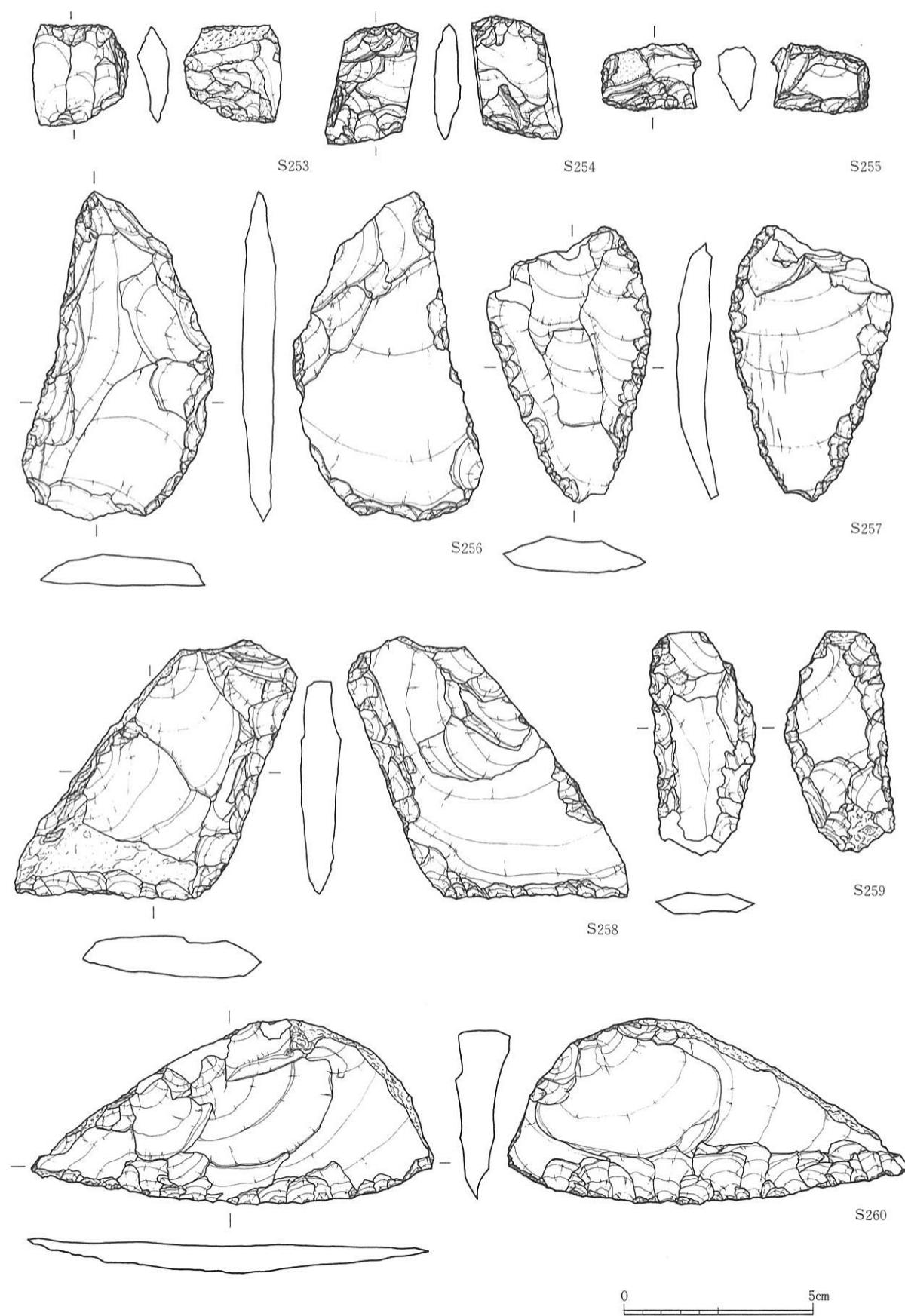


Fig. 125 打製石器(11) 楔形石器 S 253～S 255、二次加工のある剝片 S 256～S 260

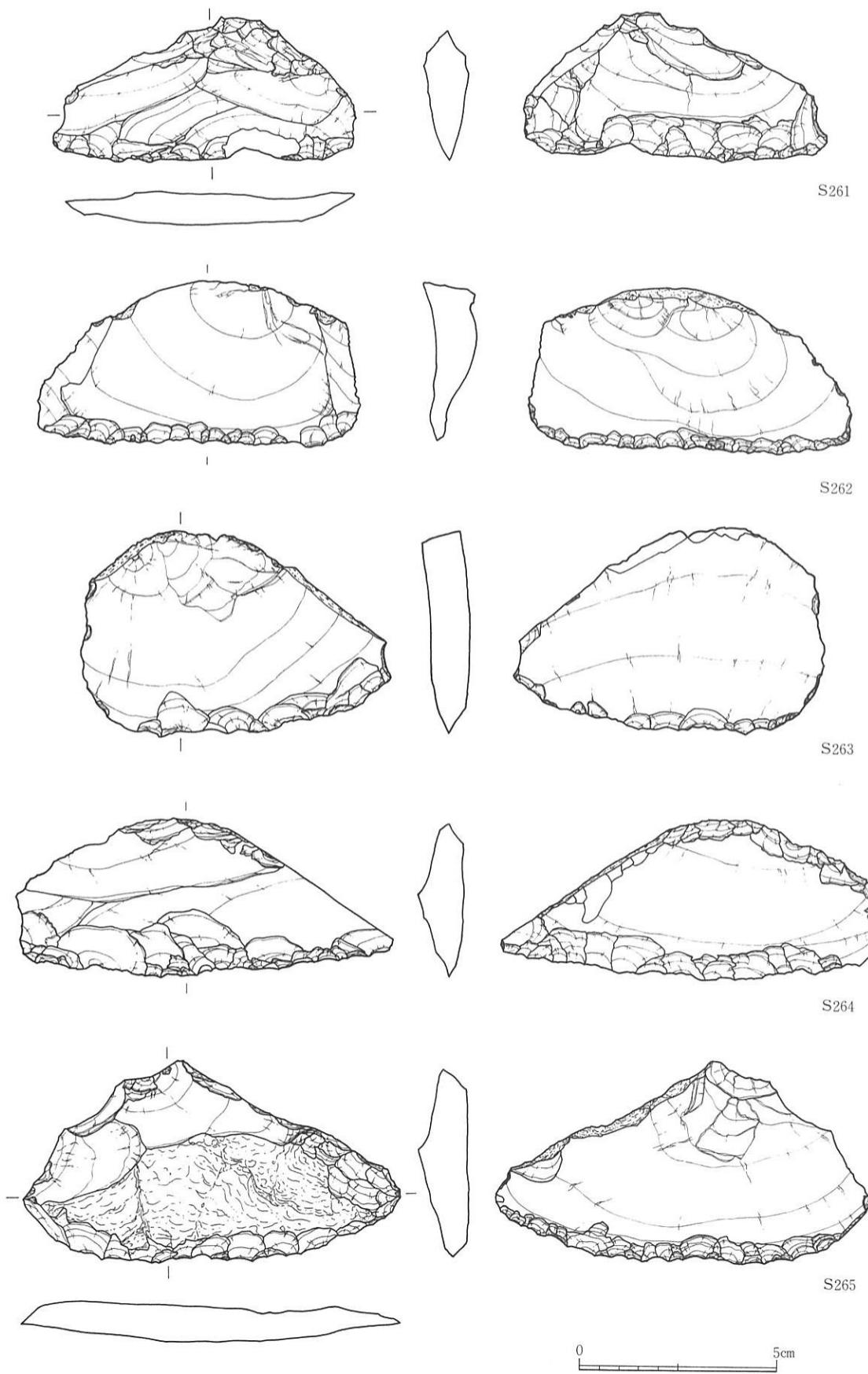


Fig. 126 打製石器(12) 二次加工のある剥片

9. 石 器

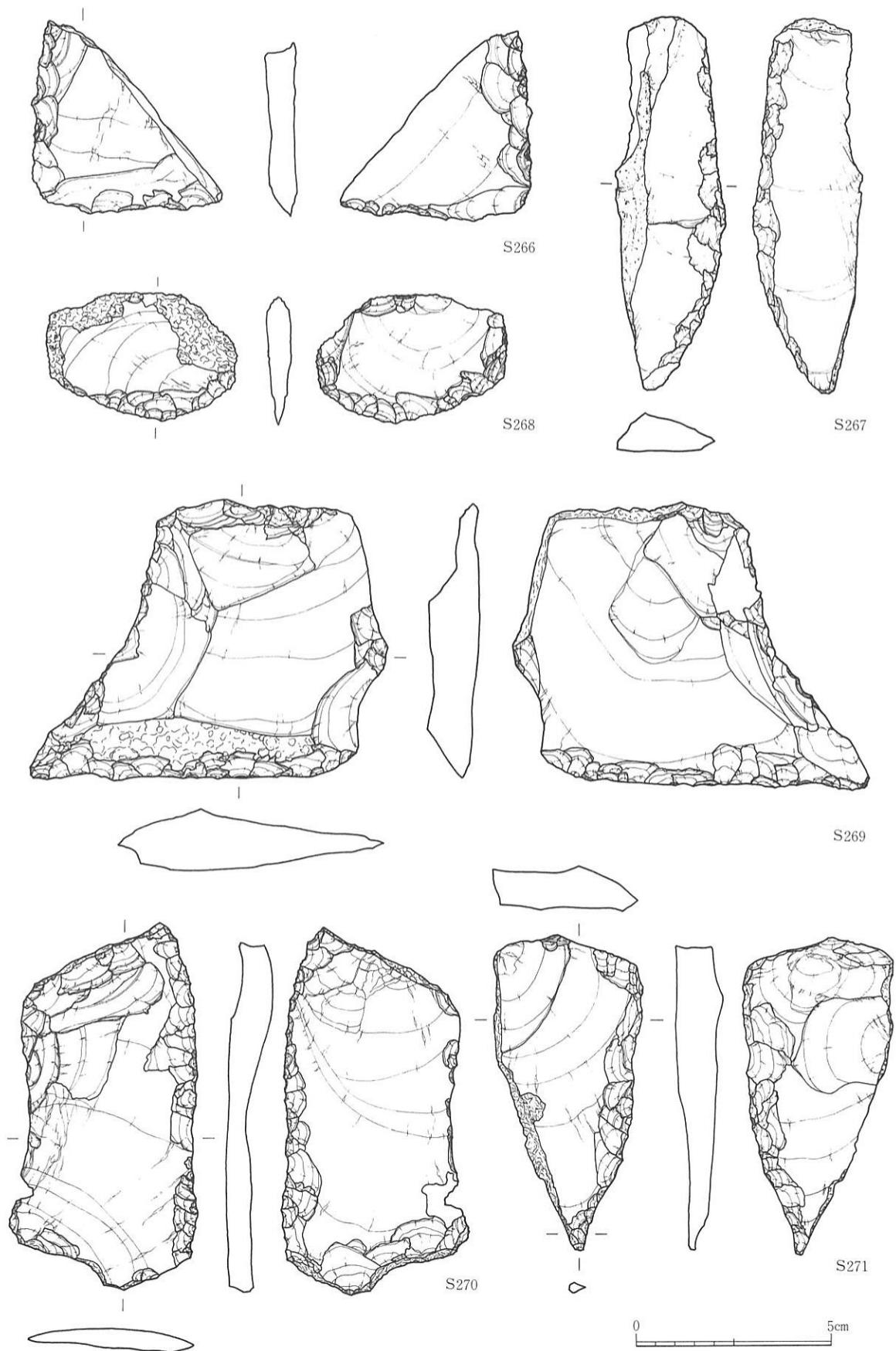


Fig. 127 打製石器(13) 二次加工のある剥片

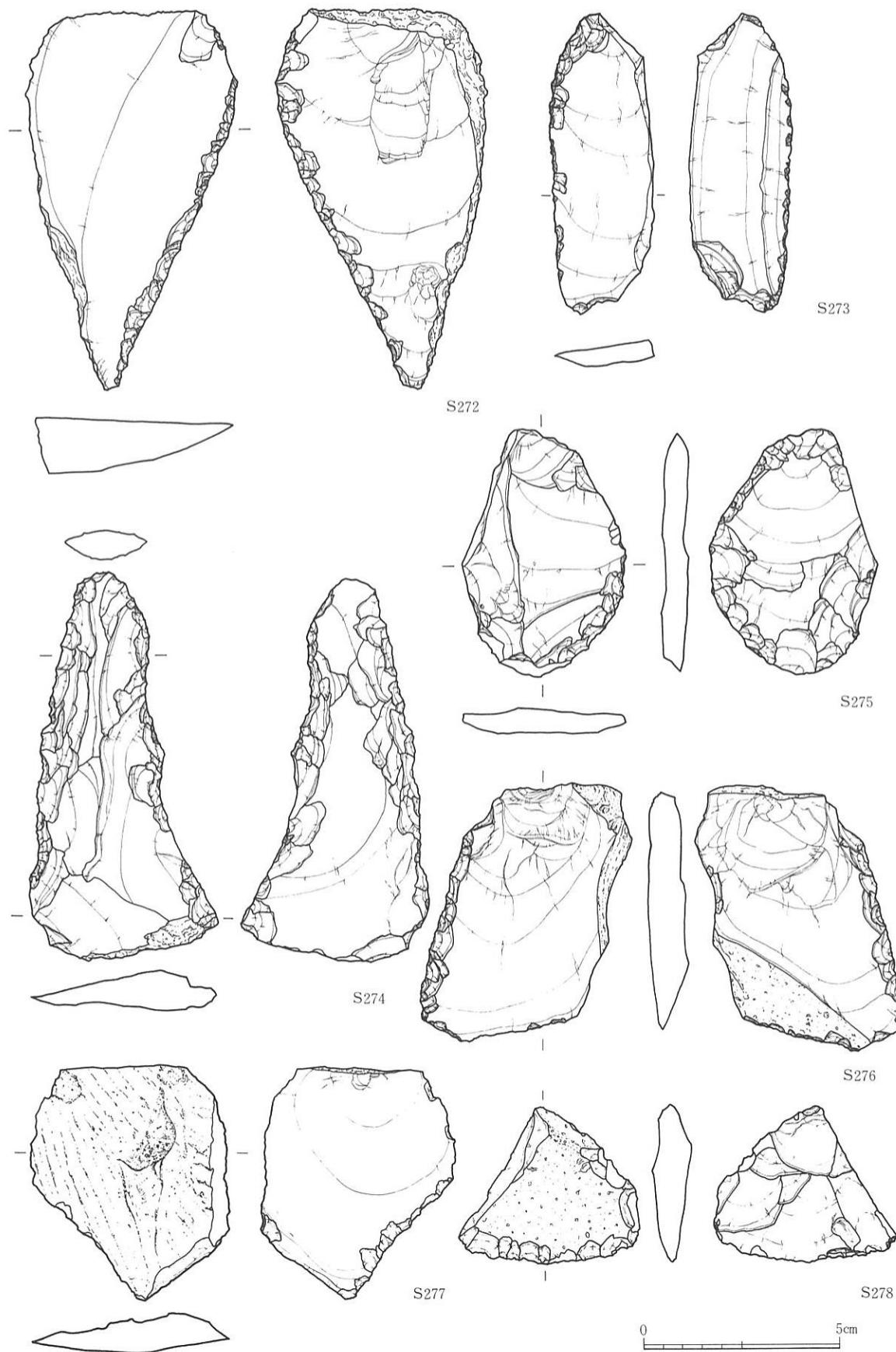


Fig.128 打製石器(14) 二次加工のある剝片

9. 石 器

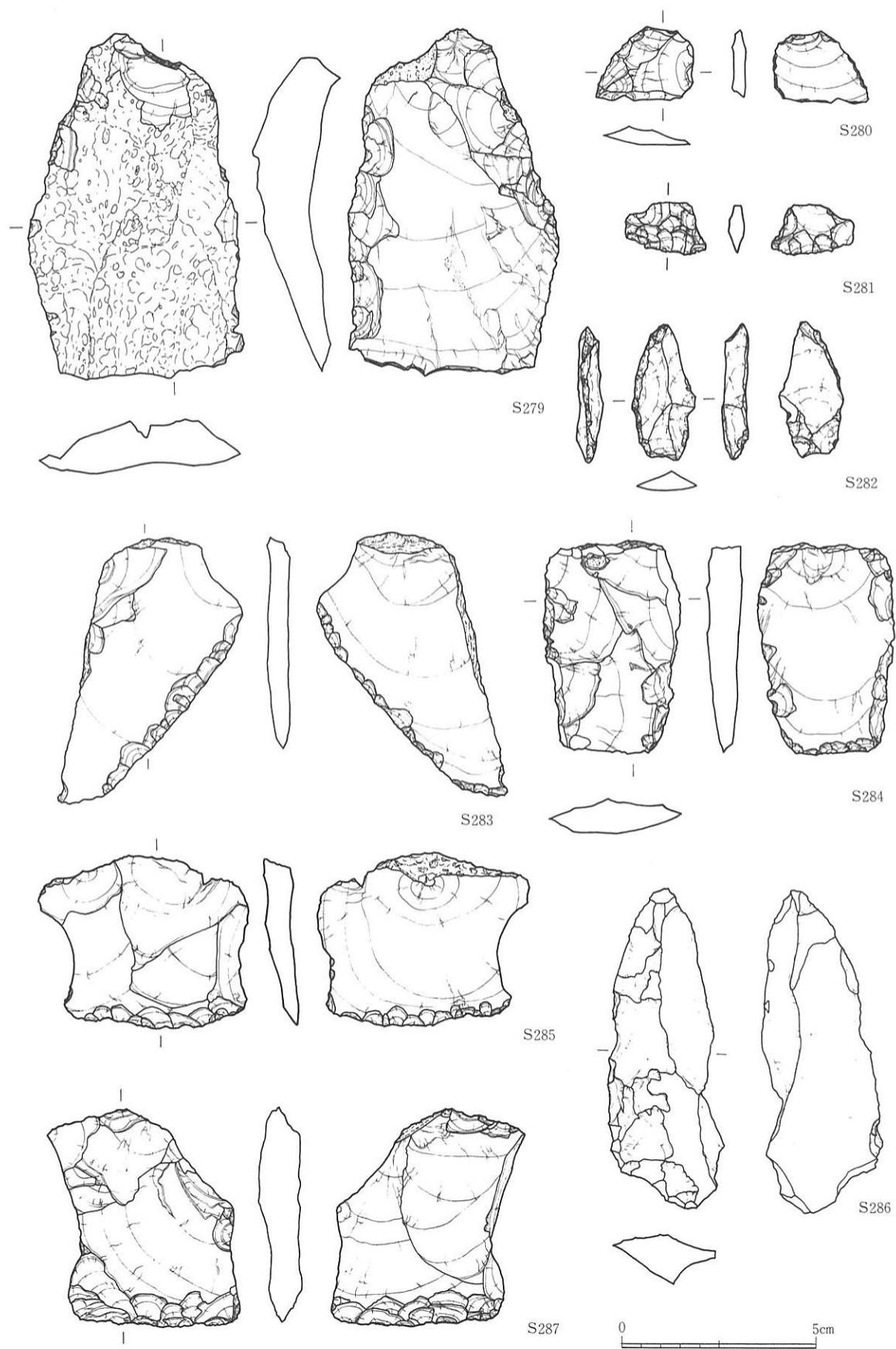


Fig.129 打製石器(15) 二次加工のある剝片

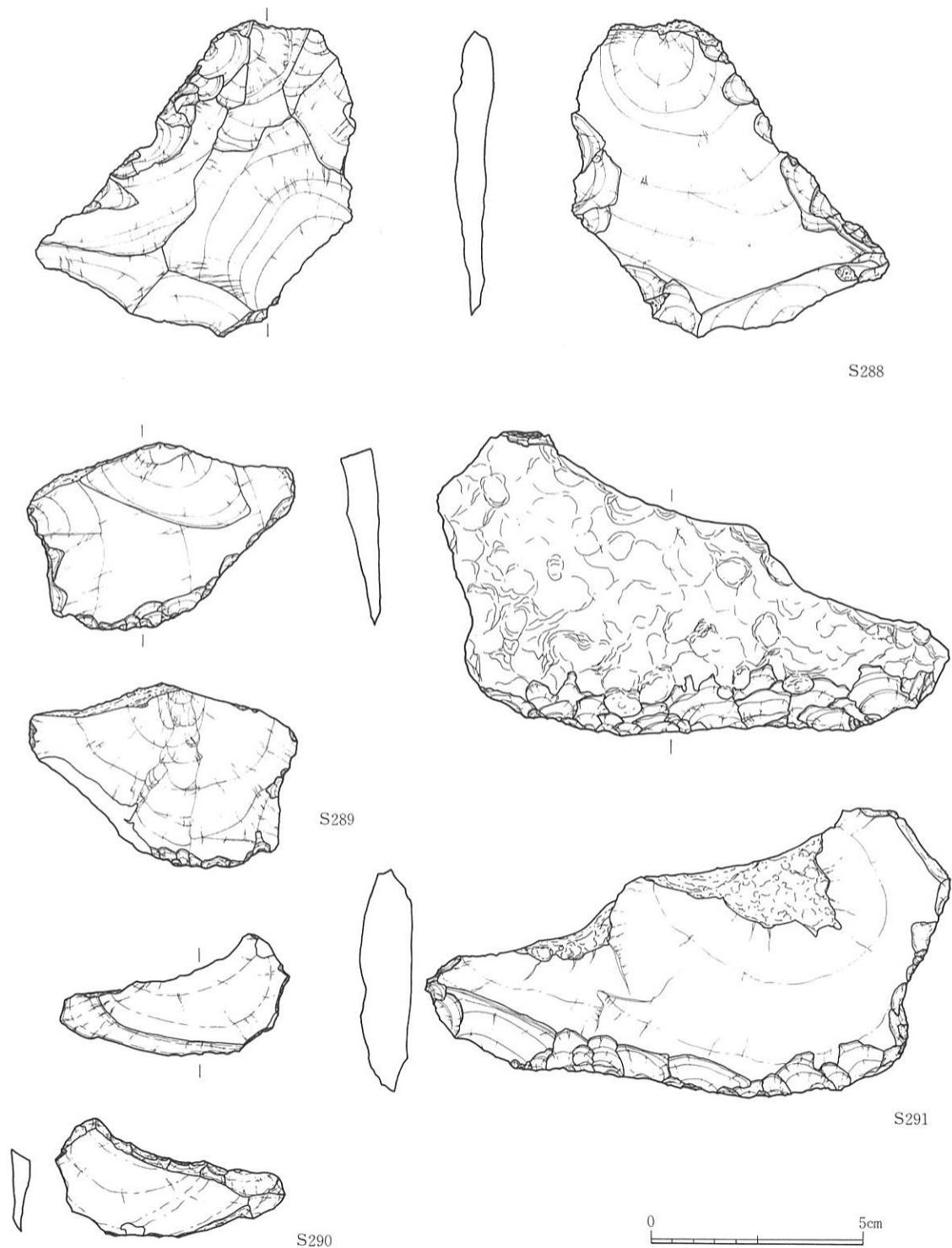


Fig.130 打製石器(16) 二次加工のある剝片

9. 石 器

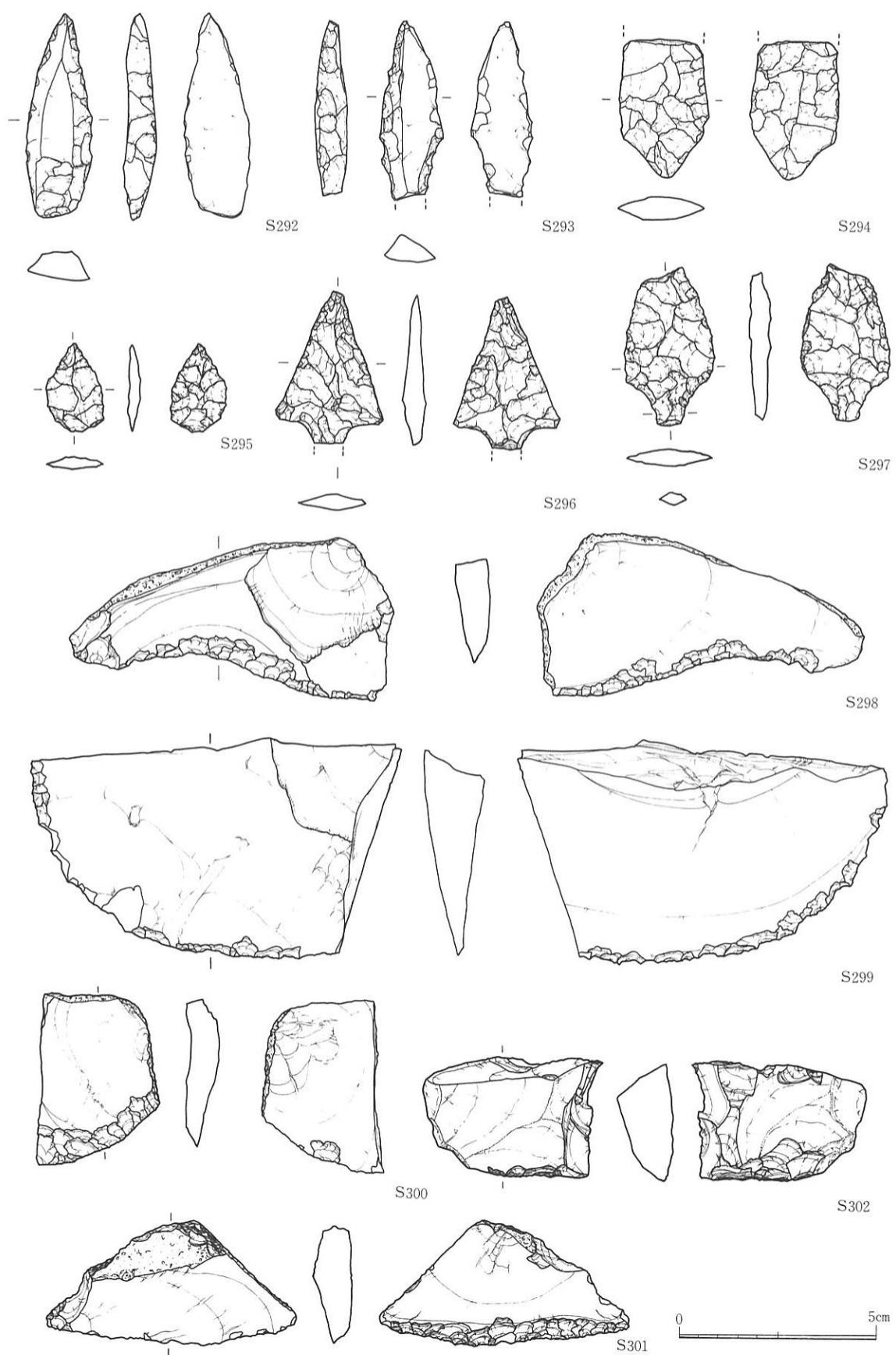


Fig.131 I 地区出土石器(1) 国府型ナイフ形石器 S 292. S 293、有舌尖頭器 S 294、
石鏟 S 295~S 297、二次加工のある剥片 S 298. S 299、
スクレイパー S 300. S 301、楔形石器 S 302

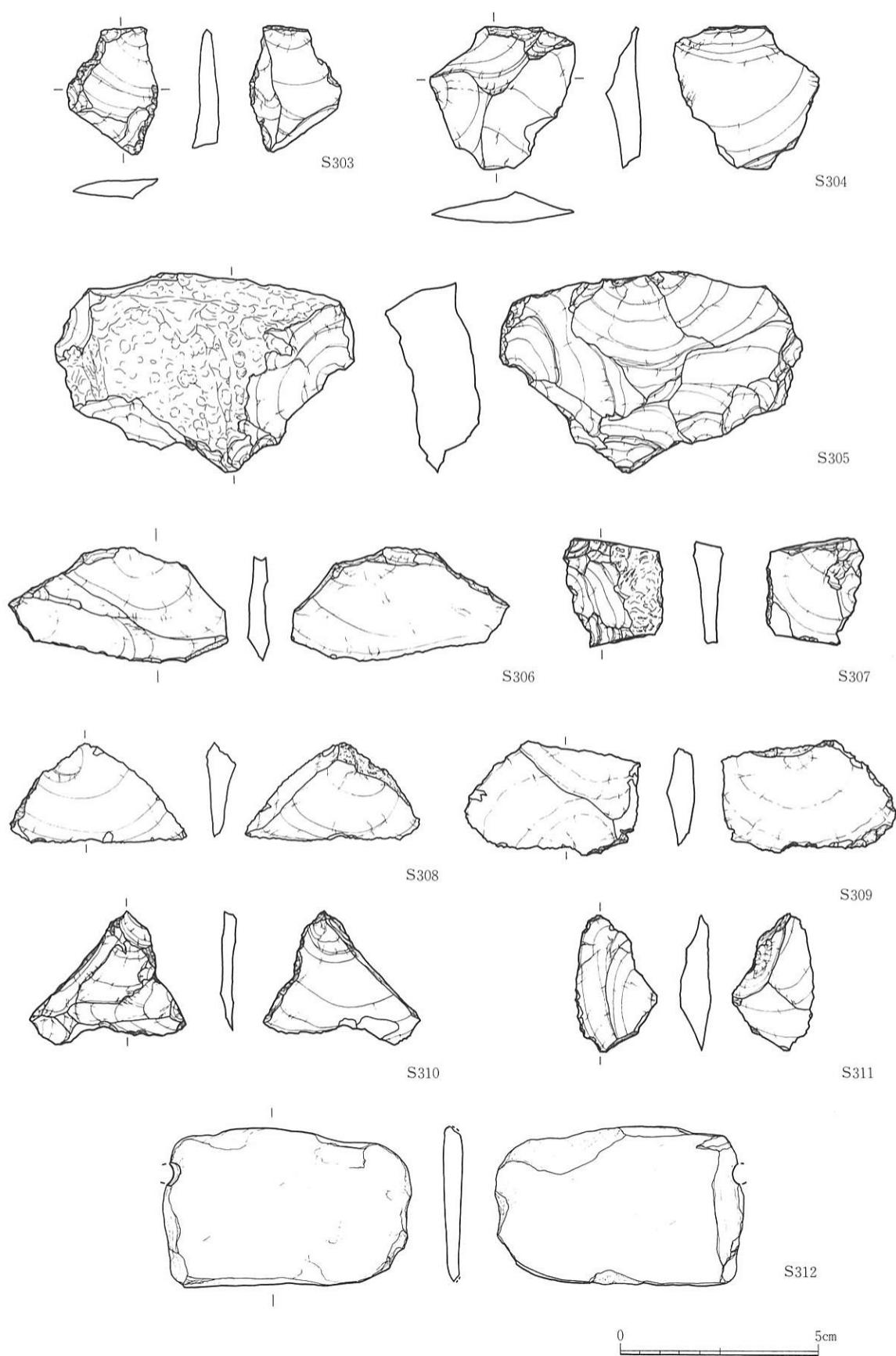


Fig.132 I 地区出土石器(2) 二次加工のある剥片 S 303. S 307、石核 S 305、
剥片 S 304. S 306. S 308～S 310、碎片 S 311、石庖丁 S 312

9. 石 器

3) 磨製石器

小阪遺跡の縄文～弥生時代の遺構面または包含層中より出土した磨製石器は、石錘3点、石棒2点、石庖丁14点、石斧3点、敲石12点、凹石3点、石皿1点の計38点(Tab.29)である。他に15Fトレーナー集中区などにおいて敲石あるいは磨石の可能性をもつ一辺10～15cm程度の石が数点認められるが、使用痕が明瞭ではないためここには含めなかった。

石錘(S 313～S 315) 長円形を呈する偏平な砂岩の両端を両面より打ち欠いたもので、比較的小型のもの(S 314)と、中型のもの(S 313)が各1点ある。(S 314)の打ち欠き部は片面が両端とともに大きく、他面は両端ともに小さい。打ち欠き部には使用による明らかな磨滅は認められない。(S 313)は打ち欠き部以外に剥離面が認められる。(S 315)はおむすび形を呈し、幅5mmの紐擦れ痕が一巡する。

石棒(S 316・S 317) 断面形が長円形を呈する板状のもの(S 316)と比較的正円形に近いもの(S 317)がある。(S 316)は両端ともにやや磨滅し、とくに図上下端部はなめらかである。(S 317)は図上、下端部がやや磨滅しなめらかであるが、上端部は新しい断面であり、折れたような形状を示す。2点とも表面はやや磨滅したなめらかなもので、線刻や敲打痕、赤色顔料などは認められない。

石庖丁(S 318～S 331) 完成品2点、欠損品12点がある。平面形の形態により長方形態(S 325)、杏仁形態で背部に比べ刃部が浅く外弯するもの(S 320.S 322.S 324)、直線刃半月形態(S 318.S 319.S 326.S 327.S 328.S 330.S 331)、内弯刃形態のもの(S 321.S 323)に分類される。(S 329)は残存部において背部と刃部が平行することから長方形態もしくは橢円形態かと考えられる。片刃の場合、刃面のある面をA面、他方をB面とし、図上断面を中心に左側にA面、右側にB面をおいた。これにならい、記述の便宜上両刃の場合においても、断面の左側をA面、右側をB面と呼称する。

長方形態(S 325)はB面剥離のため刃部の形態は不明であるが、A面刃部はなだらかに作りだされており刃部稜は不明瞭であることから両刃の可能性が大きい。紐孔は1ヶ所残存し穿孔は両面よりなされている。側辺端部は磨滅しやや面をなす。背面には直交する磨滅痕がある。

杏仁形態の刃部は(S 320.S 324)が両刃、(S 322)はA面中央部が剥離し刃面が一部に限られるものの、B面刃部が稜の不明瞭ななだらかな面をなすことから両刃に近い片刃と考えられる。(S 320)の紐孔は中央より背寄りに比較的近接してもうけられ、両面より穿孔されている。両面ともに一方の肩部から体部にかけて光沢が顯著である。A面では双孔間を結ぶ方向、B面では上方の背方向にのびる紐擦れ痕がみられる。またA面では双孔間寄り紐孔角が丸く磨滅し、B面では背寄りの紐孔角および紐孔直上の背面とB面との角が丸く磨滅している。刃先には刃線に直交する磨滅痕が認められる。(S 322)はB面紐孔下の体部中央部が剥離し、磨滅のため不明瞭ではあるが剥離部分は上下方向の強い磨滅によって形成された可能性がある。(S 324)のA面刃部は体部に比べなめらかな面をなすことによって区別され、稜線をいた。B面には紐孔周辺に右上～左下方向の磨滅痕が認められる。刃先には刃線に直交する磨滅痕が全体に認められ、端部よりも刃部中央に集中する傾向がある。

直線刃半月形態の刃部は片刃であり、刃部がなだらかに作りだされたもの1点(S 327)を除いては、全て稜が明瞭な刃部である。また背面が明瞭なものが数点ある(S 318.S 319.S 330)。(S 318)は紐孔の左上方に穿孔途中の孔を残す。A面には紐孔周辺の体部に左上～右下方向の磨滅が認められる。(S 328)はA面肩部に右上～左下方向、体部下半に横方向、刃部に横方向のわずかな磨滅痕が認められる。B面においても図示するような磨滅痕がかすかに観察できるがA面以上に不明瞭なものである。(S 330)のA面には背部から下方向および肩部右上～左下方向の磨滅痕が認められる。(S 331)は紐孔周辺の剥離

が著しいもので、欠損品ではあるが紐孔の位置から小型石庖丁と考えられる。その他の個体については磨滅のため詳細不明である。

内弯刃形態は、(S 321)が刃部稜線が明瞭な片刃であり、刃面は急な傾斜面をなす。平面形が一方に幅を減じる非対称のものであり、幅が広い肩部は背部が丸く厚みをもち、幅が狭い肩部は両刃状であり剝離がみられる。A面では双孔間寄り紐孔角が丸く磨滅し、B面では背寄りの紐孔角がわずかに磨滅しており紐孔間にあたる背部はわずかに弯曲する。(S 323)は磨滅のため詳細不明であるが、刃部に細かな剝離がみられる。

石斧(S 332～S 334) 偏平な両刃の磨製石斧〔定角式磨製石斧(S 333)〕と円筒形の大型蛤刃石斧2点(S 332, S 334)が出土している。(S 333)は刃部が剝離するほかは基端面、両主面ともに磨滅や敲打痕が認められず滑らかな面をなす。両側面には刃部に近い部分に一部磨滅が認められる。柄に対する装着痕、使用痕とみられる線状痕は不明。(S 332, S 334)は尖基であり(S 332)は刃部にかけてやや幅をひろげる平面形を呈するが、(S 334)は基部と刃部との幅に差がなく円筒形に近い形状である。(S 332)は基部に敲打痕が残り、刃部はなめらかな面をなし、刃線に平行および斜方向の線状痕が認められる。(S 334)は刃部が磨滅する他は、線状痕、敲打痕などは認められない。主面中央部が比較的磨滅しているが、柄に対する装着部位を示すような明確なものではない。

敲石(S 335～S 346) 敲打痕が認められるものはすべて敲石とした。敲打痕のありかたから
A主面にのみ敲打痕が認められる
B側面にのみ敲打痕が認められる
C主面および側面に敲打痕が認められる
D端面に敲打痕が認められる

に分類し、また大きさについては任意に1000g以上を大、500～1000gを中、500g未満を小とした。

A一大S335, S337, S340, S342
B一中S336, 小S338, S339
C一中S343, 小S344
D一大S341, 中S345

これら敲石としたものには敲打痕のほかに表面がなめらかな形状を示し磨滅痕が認められるものも多く(S 335, S 336, S 338が特に顕著)、磨石としての用途を兼ねたものも多いと考えられる。これは凹石についてもあてはまる。(S 341)の敲打痕は石の表面が剝離したような状態であり、明らかに使用によって生じたものとは判断しがたい。(S 346)は偏平な小型のものであり、敲打痕もその端部に浅く細かいものが認められるのみで、他の敲石とは用いる対象が異なる可能性をもつ。

凹石(S 347～S 349) 主面中央における敲打痕が顕著なものを敲石と区別した。(S 349)は敲打痕周囲がなめらか面をなし磨石としても用いられたと考えられる。

石皿(S 350) 上面中央の窪み部分と側面に磨滅が認められるが、磨滅の方向は不明。裏面はなめらかな平らな面をなす。

遺物の種別や型式など遺物自体のもつ諸属性と出土地点および時期との整合性については、とくに矛盾する点は認められない。とくにIV層出土の縄文晩期～弥生前期に位置づけられる石棒(S 316, S 317)や石斧(S 332, S 334)は近畿地方における当該期の周辺遺跡例とも合致するものである。石庖丁については池上遺跡との比較から弥生時代中期の範疇に含まれるものと考えられる。

9. 石 器

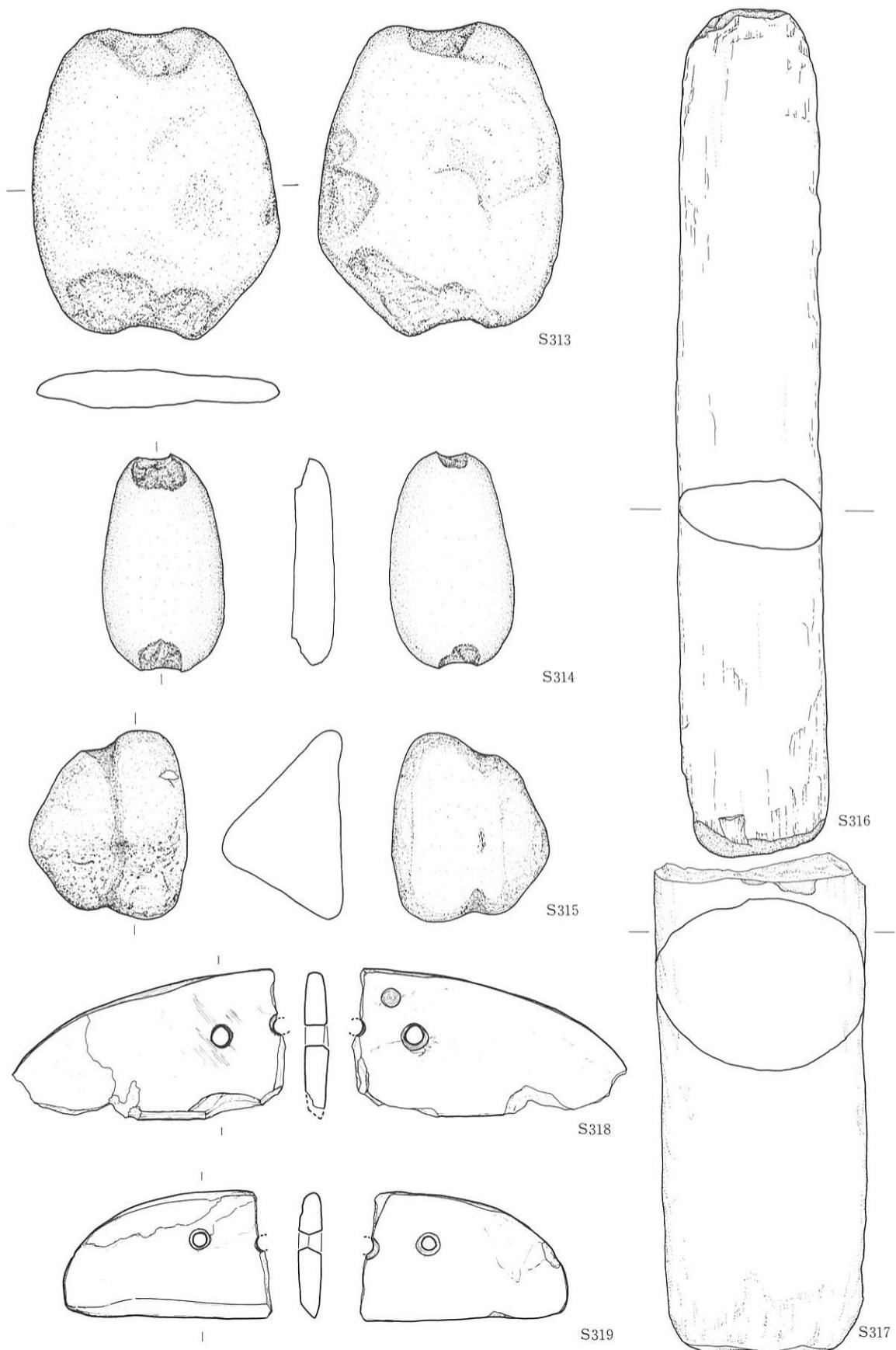


Fig.133 磨製石器(1) 石錘 S 313~S 315、石棒 S 316. S 317、石庖丁 S 318. S 319 (S =1/2)

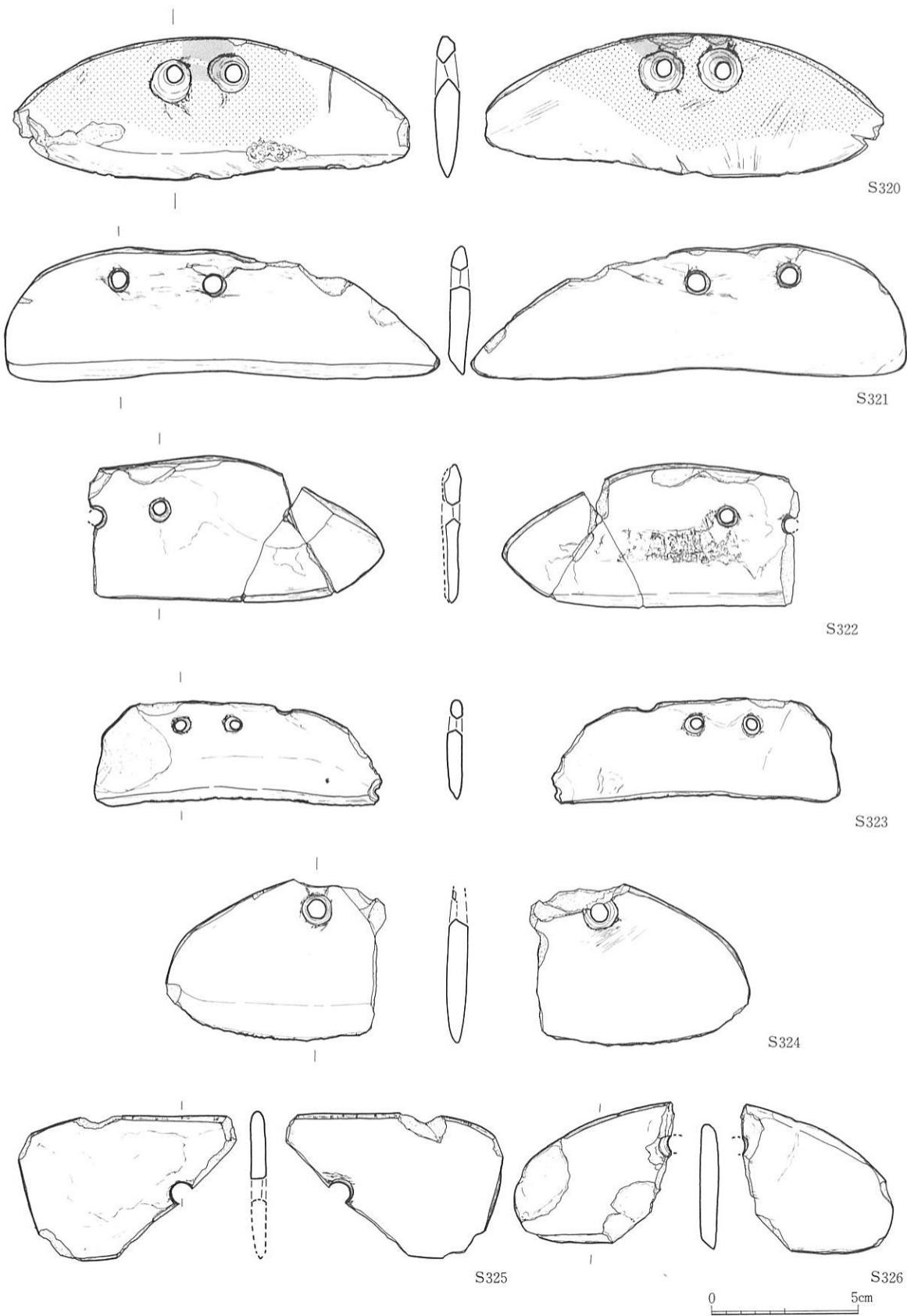


Fig.134 磨製石器(2) 石庖丁

9. 石 器

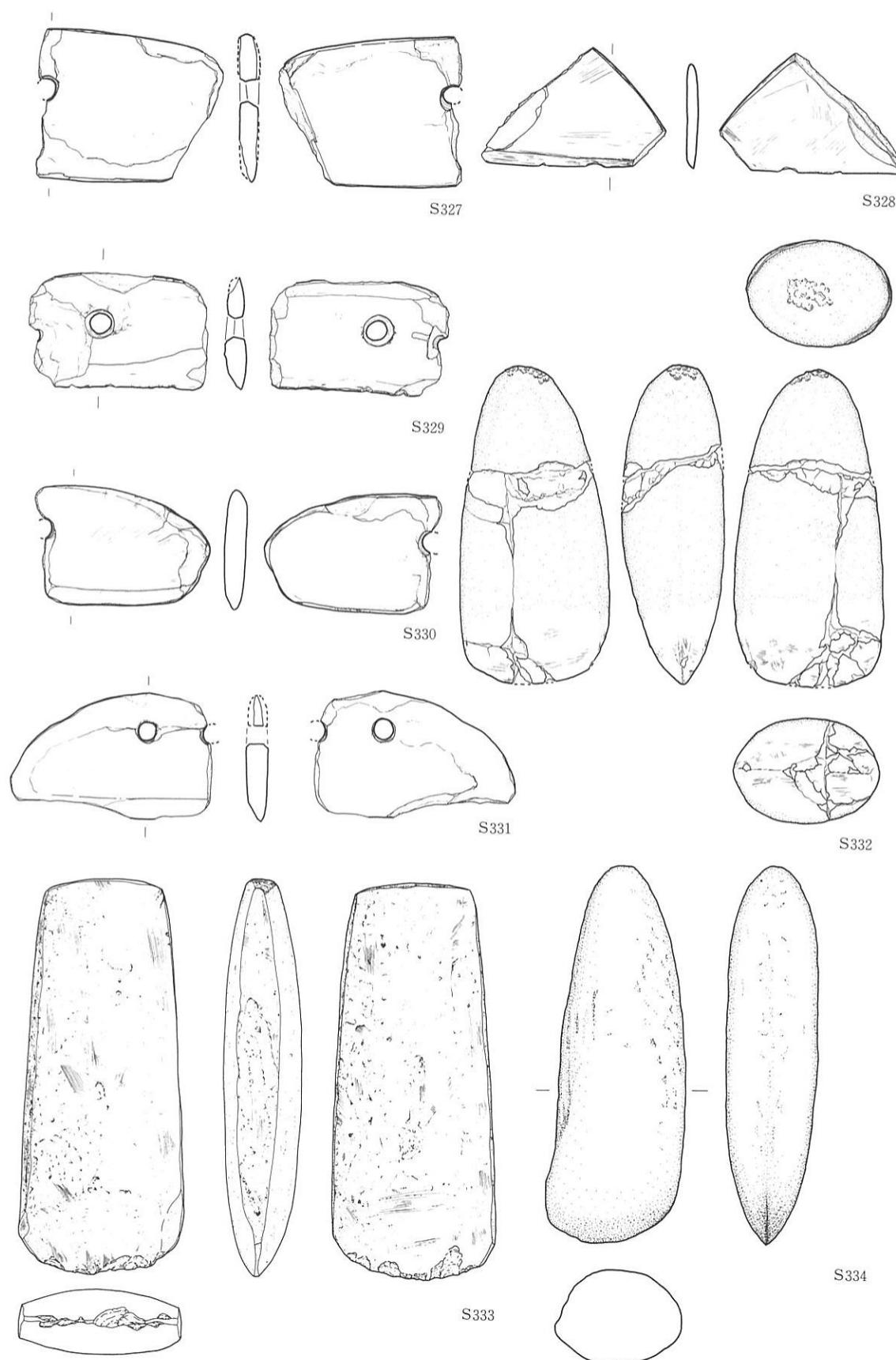


Fig. 135 磨製石器(3) 石庖丁 S 327~S 331、石斧 S 332~S 334 (S = 1/2)

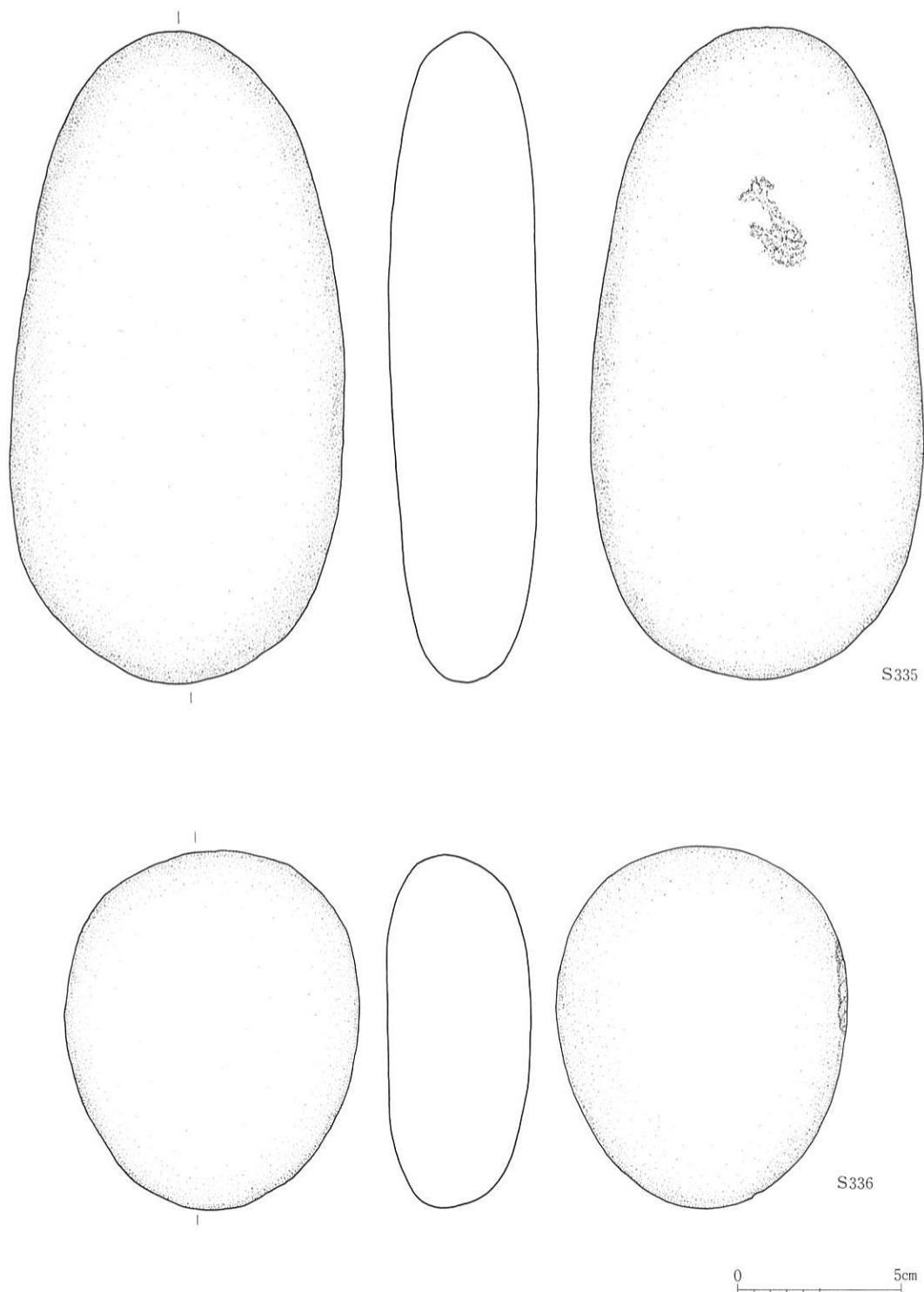


Fig.136 磨製石器(4) 敲石

9. 石 器

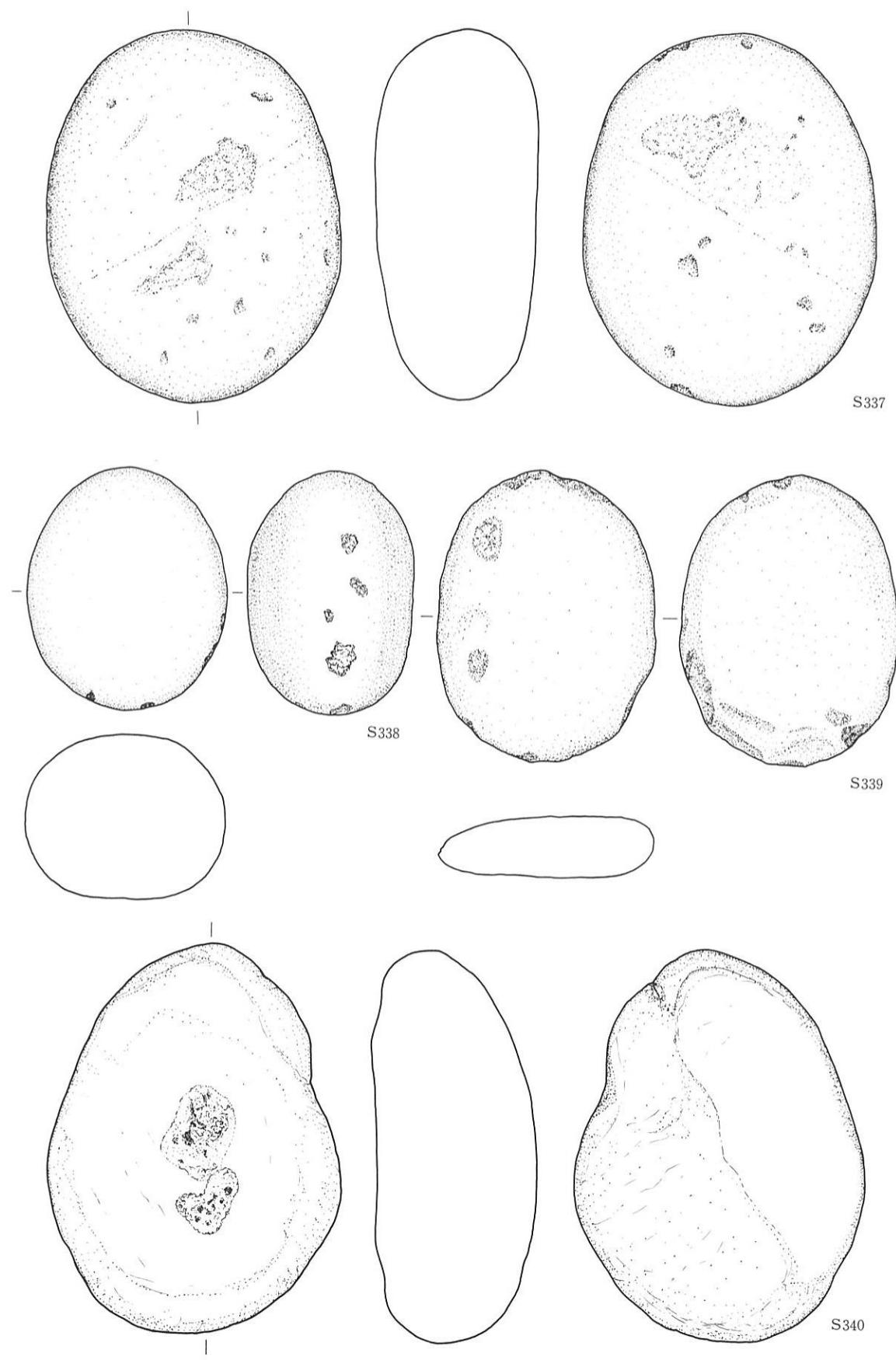


Fig.137 磨製石器(5) 敲石 ($S=1/2$)

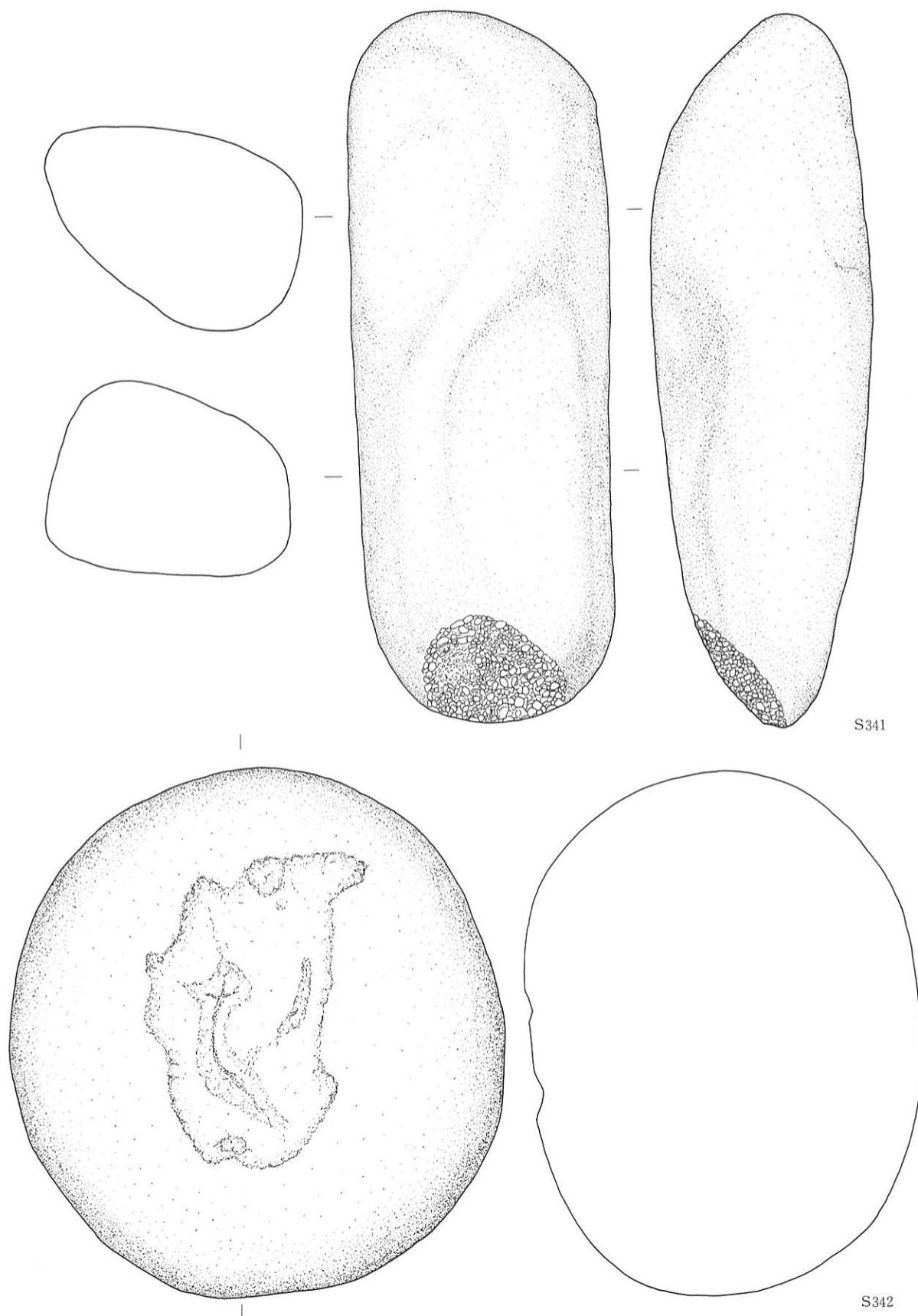


Fig.138 磨製石器(6) 敲石 ($S = 1/2$)

9. 石 器

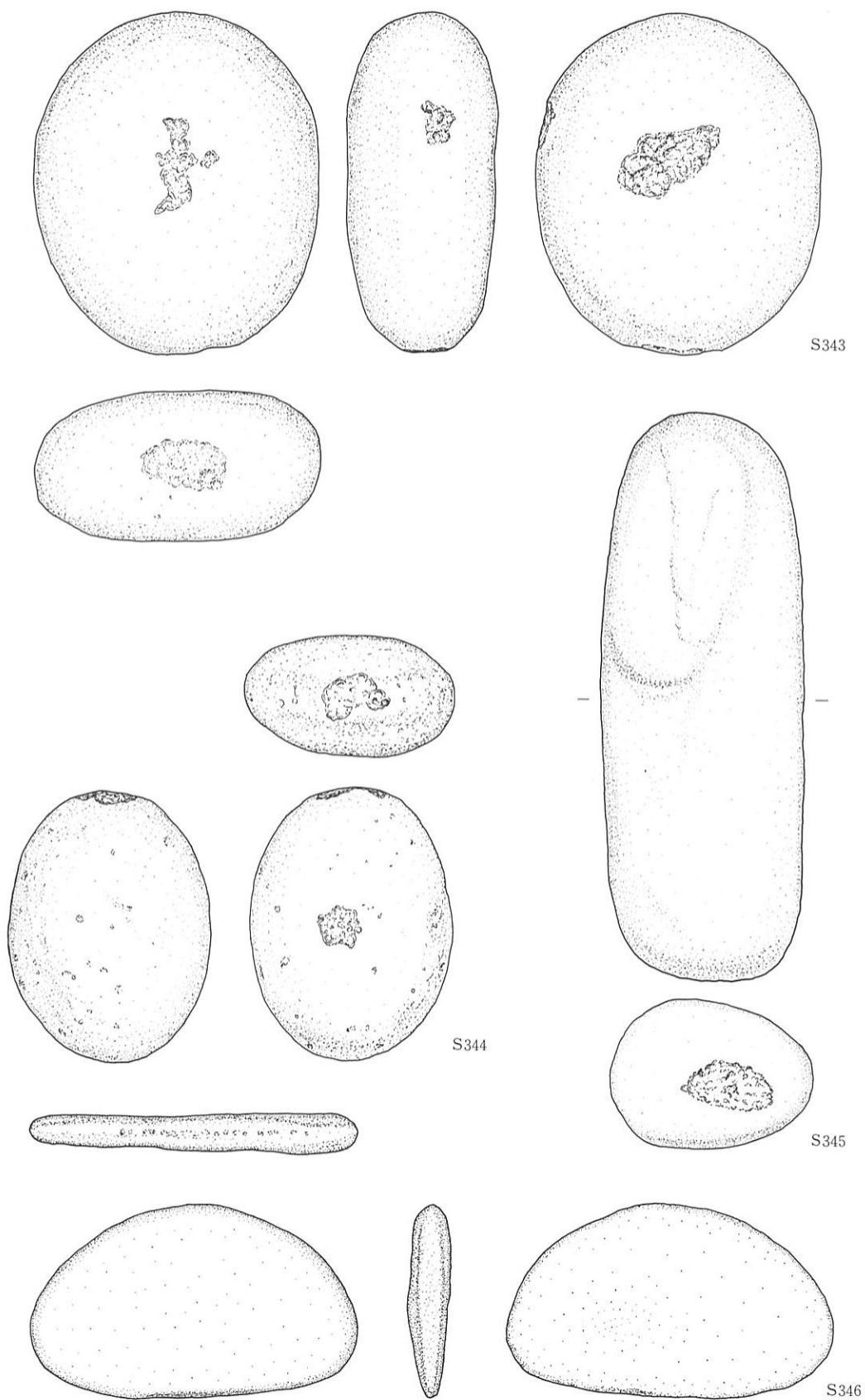


Fig.139 磨製石器(7) 敲石 ($S = 1/2$)

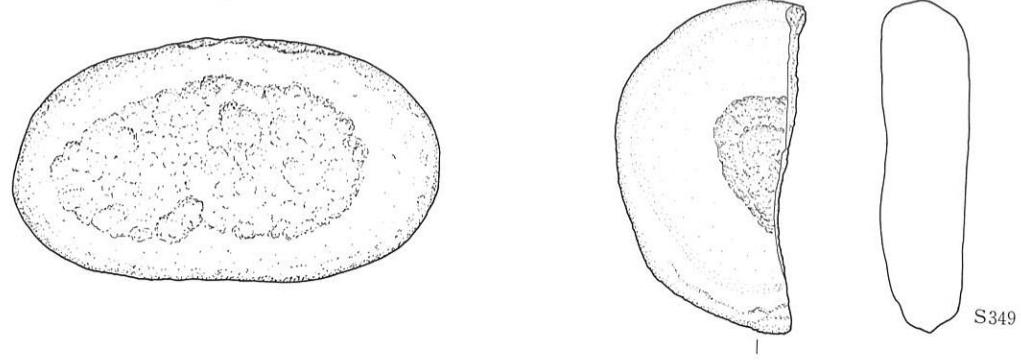
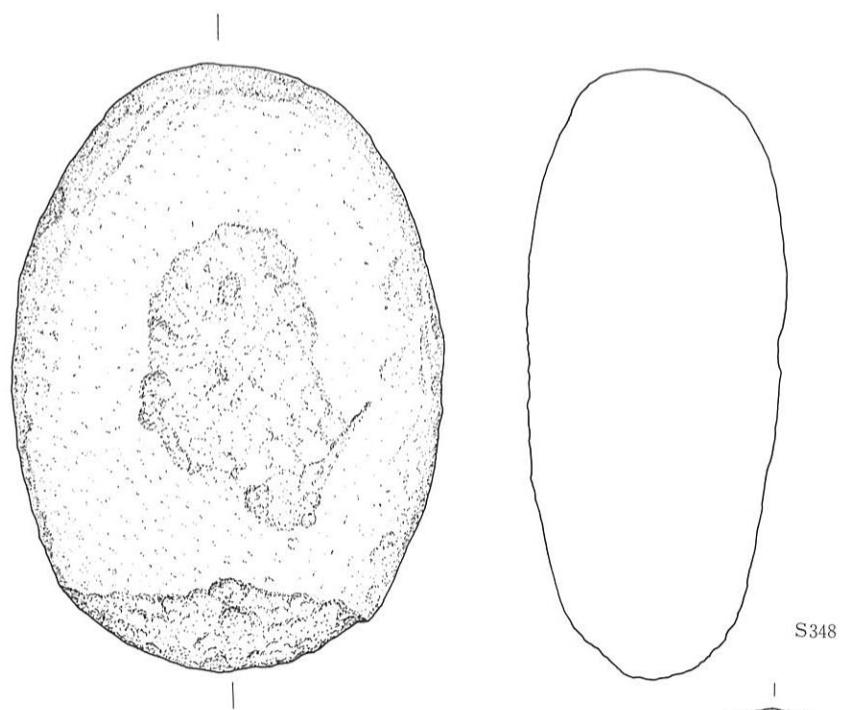
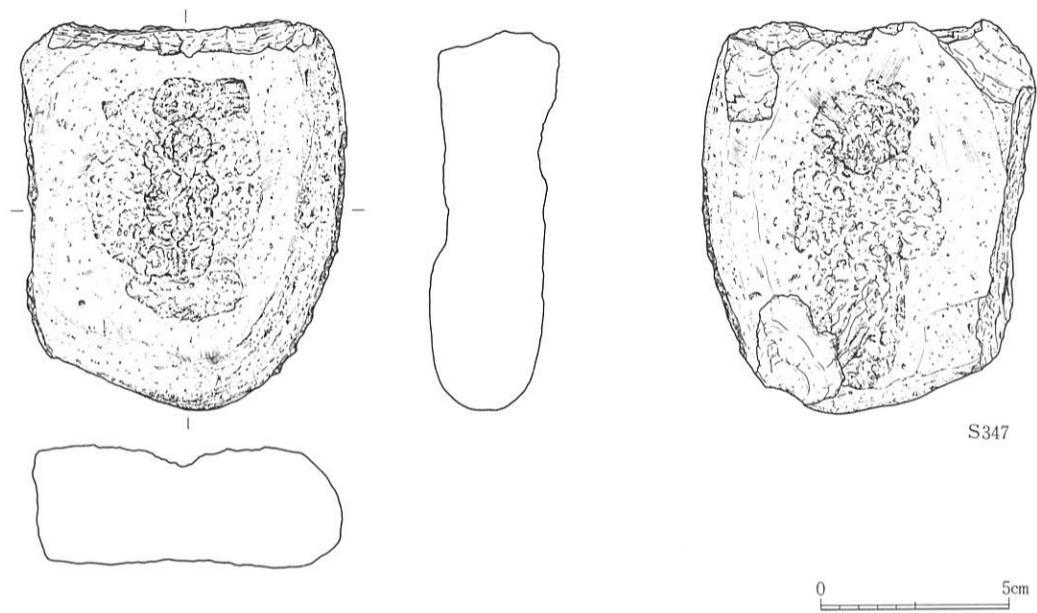


Fig.140 磨製石器(8) 凹石

9. 石 器



Fig. 141 磨製石器(9) 石皿

Tab.18 石器一覧表(1)石鏃

番号	長さ	幅	重量	面積	厚さ指数	基部	加工順序	備考
s 1	2.2	1.4	0.6	1.6	0.4	凹	左側縁B→A・先端→基部⇒右側縁A→B・先端→基部⇒左側縁A→B・先端→基部 右側縁B→A・先端→基部	
s 2	2.1	1.4	0.6	1.6	0.4	凹	左側縁B→A・基部→先端⇒左側縁A→B・基部→先端⇒右側縁A→B⇒右側縁B→A	素材剥片のエッジを利用 側縁鋸歯状
s 3	2.2	1.6	0.7	1.6	0.4	凹	左側縁B→A・先端→基部⇒右側縁A→B・先端→基部⇒左側縁A→B・先端→基部⇒右側縁B→A・先端→基部	素材剥片のエッジを利用 側縁鋸歯状
s 4	2.3	1.5	0.8	1.9	0.4	凹	左側縁A→B・基部→先端⇒右側縁B→A・先端→基部⇒左側縁B→A・先端→基部⇒右側縁A→B・先端→基部	
s 5	2.7	2.0	1.3	2.8	0.5	凹	右側縁B→A・基部→先端⇒左側縁B→A・基部→先端⇒左側縁A→B・基部→先端⇒右側縁A→B・基部→先端	側縁鋸歯状
s 6	2.8	1.8	2.3	3.0	0.8	凹	右側縁B→A・先端→基部⇒左側縁B→A・先端→基部⇒左側縁A→B・基部→先端	未成品

Tab.19 石器一覧表(2)楔形石器

番号	長さ	幅	重量	面積	厚さ指数	対向する剝離	剝離形状	つぶれ	備考
s 7	6.6	3.4	39.9	17.4	2.3	2組	ステップ・ヒンジ	○	上端は右肩の剝離でとばされた
s 8	2.7	2.5	9.5	4.8	2.0	1組	ステップ		上端自然面
s 9	2.5	2.7	5.5	5.2	1.1	2組	ステップ・ヒンジ	○	右側縁は上下方向の剝離面により構成される

Tab.20 石器一覧表(3)スクレイパー

番号	長さ	幅	重量	面積	厚さ指数	刃部	備考
s 10	3.4	5.7	31.6	14.9	2.1	インバースリタッチ?	腹面側刃部に見られる剝離は不規則で末端がヒンジになる剝離も多い・素材は両面ともポジティブな面で構成される?
s 11	5.1	6.3	50.7	23.9	2.1	インバースリタッチ	刃部を形成する剝離は小さくやや散漫、剝離順序はほぼ一定している。バルブを除去

Tab.21 石器一覧表(4)二次加工のある剝片

番号	長さ	幅	重量	面積	厚さ指数	素材	加工部	刃部作出	備考
s 24	4.1	6.6	19.8	22.0	0.9	横長	上(A面) 左(A面) 下(A面・B面)	下(両刃)	
s 25	2.3	6.0	17.3	10.4	1.7	横長	上(B) 右(A)		
s 26	4.2	6.4	21.6	19.4	1.1	横長	上(B) 左(A) 下(A・B) 右(A)	下(両刃)	
s 27	5.2	7.8	50.1	43.3	1.2	横長	下(A・B)	下(両刃)	
s 28	4.0	6.0	28.6	18.2	1.6	横長	上(A・B)	右(片刃?)	素材のバルブを除去しつつ刃部作出
s 29	2.3	2.0	2.6	3.4	0.8	—	左(A・B) 下(A・B) 右(A?)		
s 30	6.1	5.8	52.6	22.5	2.3	縦長	右(A・B)	右(両刃)	接合資料
s 31	2.7	4.1	5.9	6.8	0.9	横長?	上(A) 右(B)	右(片刃)	
s 32	5.9	3.4	12.9	13.6	0.9	縦長	右(A・B)	右(両刃)	
s 33	6.1	8.3	70.2	31.3	2.2	—			接合資料
s 34	4.9	5.8	22.7	19.0	1.2	横長	上(A・B) 下(A・B)		接合資料

Tab.22 石器一覧表

(5) 石核

番号	重量	面積	厚さ指数	備考
s 12	33.5	13.0	2.6	
s 13	25.8	14.7	1.8	
s 14	38.7	15.3	2.5	
s 15	6.6	6.6	1.0	
s 16	34.5	16.8	2.1	
s 17	7.8	5.3	1.4	
s 18	39.9	15.6	2.6	
s 19	8.9	7.9	1.1	
s 20	48.2	19.4	2.5	
s 21	26.6	14.5	1.8	
s 22	11.7	7.4	1.6	
s 23	—	—	—	接合3
s 23'	25.4	9.6	2.6	接合3

Tab.23 石器一覧表(6)剝片①

番号	打点厚	打面角	長さ	加撃軸長	振れ角	幅	加撃軸幅	重量	面積	厚さ指数	打面	背面剝離方向	背面に残る主要な剝離面
s 35	1.9	95	7.5	7.4	3	4.0	4.1	65.7	22.2	3.0	剝離面	単	3
s 36	—	—	3.7	3.2	10	2.4	2.2	4.1	5.2	0.8	剝離面	単	4
s 37	1.6	125	4.8	4.2	12	4.9	5.1	41.7	20.8	2.0	剝離面	求心	6
s 38	—	—	4.7	4.6	1	3.4	3.4	8.3	10.0	0.8	剝離面	直交	2
s 39	—	—	3.5	3.2	18	4.9	4.9	10.7	11.9	0.9	剝離面	単	1
s 40	0.7	125	5.7	5.1	10	4.0	4.0	31.7	18.2	1.7	剝離面	直交	4
s 41	0.4	115	4.0	3.8	11	5.6	5.8	21.6	17.8	1.2	剝離面	直交	4
s 42	0.4	120	1.8	1.6	44	2.3	2.6	2.5	3.6	0.7	剝離面	直交	3
s 43	1.4	70	5.3	3.6	38	4.5	5.3	26.8	16.8	1.6	剝離面		
s 44	0.2	120	3.6	3.2	44	3.5	4.8	9.5	9.8	1.0	剝離面	単	3
s 45	0.4	110	4.1	3.9	28	4.2	4.1	11.1	12.7	0.9	剝離面	直交	6
s 46	0.2	110	3.9	3.7	12	5.8	5.9	10.6	13.9	0.8	剝離面	単	3
s 47	—	—	2.7	2.3	40	3.4	3.4	8.9	6.5	1.4	剝離面	直交	4
s 48	0.6	120	4.8	2.5	47	3.8	5.8	13.0	13.3	1.0	剝離面	単	1
s 49	0.8	85	5.8	5.6	29	7.2	8.2	38.5	28.9	1.3	自然面	直交	4

※Tab.17の石器の計測基準表の表内文字が判読しにくいため、凡例に拡大して再記してある。

9. 石器

Tab.24 石器一覧表(6)剥片②

番号	打点厚	打面角	長さ	加擊軸長	振れ角	幅	加擊軸幅	重量	面積	厚さ指数	打面	背面剝離方向	背面に残る主要な剝離面
s 50	0.6	80	5.5	5.0	67	6.1	6.8	31.4	20.8	1.5	自然面	単	3
s 51	—	65	4.7	4.5	49	4.9	6.6	18.5	20.2	0.9	自然面	直交	2
s 52	0.9	95	3.5	2.4	46	3.3	4.3	9.2	9.0	1.0	自然面	直交	4
s 53	0.7	90	2.9	2.7	68	3.0	4.1	7.1	8.0	0.9	自然面	単	1
s 54	1.5	—	6.1	4.8	52	7.7	6.1	27.9	20.5	1.4	自然面	対向	6
s 55	0.4	115	1.6	1.6	0	2.7	2.7	2.3	3.7	0.6	自然面	単	1
s 56	1.2	110	3.7	3.3	18	4.5	4.7	20.3	13.3	1.5	自然面	直交	2
s 57	—	—	2.2	1.8	78	2.3	3.8	2.6	5.3	0.5	自然面	単	2
s 58	0.7	130	3.1	1.9	41	2.8	4.3	5.2	7.1	0.7	自然面	対向	3
s 59	0.6	120	3.3	2.0	60	3.4	4.4	9.0	8.1	1.1	自然面	直交	2
s 60	0.8	95	5.7	5.3	32	6.5	6.4	87.5	27.1	3.2	自然面	対向	6
s 61	0.9	115	5.4	3.8	24	5.9	6.4	41.0	22.9	1.8	自然面	対向	3
s 62	1.3	115	5.0	3.3	43	5.6	5.6	51.3	22.5	2.8	自然面	対向	1
s 63	0.5	60	2.7	2.5	20	2.8	3.1	2.9	4.4	0.7	自然面	直交	3
s 64	0.3	115	2.5	2.2	13	2.3	2.2	2.5	4.3	0.6	自然面	直交	3
s 65	1.5	110	5.0	4.2	34	5.6	6.3	43.5	23.8	1.8	自然面	直交	3
s 66	—	—	2.0	1.9	13	2.3	2.3	0.9	3.2	0.3	自然面	対向	4
s 67	0.1	75	5.0	4.6	40	4.4	5.0	18.7	17.3	1.1	自然面	直交	3
s 68	0.2	70	3.5	3.5	0	3.2	3.2	7.9	7.2	1.1	自然面	単	3
s 69	0.3	75	3.2	2.6	20	2.8	3.2	4.0	5.6	0.7	自然面	単	1
s 70	0.4	110	3.3	3.2	4	3.9	3.9	7.0	8.5	0.8	自然面	直交	4
s 71	0.3	100	2.2	1.7	43	2.3	2.8	2.1	3.7	0.6	自然面	単	4
s 72	0.2	106	6.7	6.6	5	5.3	5.2	65.3	25.5	2.6	自然面	直交	3
s 73	0.1	80	3.1	3.1	0	2.4	2.4	2.5	4.8	0.5	自然面	直交	3
s 74	1.4	116	6.4	6.4	0	4.9	4.9	50.7	25.2	2.0	自然面	直交	3
s 75	0.6	110	5.6	5.0	13	4.2	4.2	14.3	16.2	0.9	自然面	直交	2
s 76	0.5	120	6.7	6.4	5	4.5	4.3	23.9	18.7	1.3	自然面	直交	3
s 77	—	110	6.1	6.1	0	4.3	4.7	30.4	15.9	1.9	自然面	直交	3
s 78	1.1	110	5.4	2.8	23	4.0	4.0	15.3	13.1	1.2	自然面	直交	3
s 79	0.6	115	9.7	9.4	12	4.7	4.3	38.3	30.0	1.3	自然面	直交	3
s 80	—	—	6.7	6.7	0	5.8	5.8	43.8	27.7	1.6	自然面	求心	7
s 81	0.6	65	5.3	4.2	19	3.5	3.9	18.3	13.7	1.3	自然面	直交	3
s 82	—	70	5.9	3.6	38	6.2	8.5	39.0	22.7	1.7	自然面	直交	3
s 83			5.6			8.3		64.1	43.1	1.5	自然面	直交	3
s 84			4.0			7.5		29.6	26.0	1.1	打点なし	単	1
s 85			3.0			6.7		46.0	19.9	2.3	打点なし	単	1
s 86			5.4			2.6		9.0	9.5	0.9	打点なし	単	1
s 87			3.1			6.8		17.8	18.8	0.9	打点なし	直交	3
s 88			4.7			1.8		8.6	6.7	1.3	打点なし	直交	5
s 89			5.3			5.0		26.0	16.9	1.5	打点なし	直交	3
s 90			3.7			2.7		6.0	6.5	0.9	打点なし	単	1
s 91			3.5			4.3		24.1	12.5	1.9	打点なし	直交	3
s 92			4.2			3.7		15.4	11.0	1.4	打点なし	直交	4
s 93			3.5			3.8		4.5	7.6	0.6	打点なし	直交	3
s 94			3.1			2.8		7.5	7.0	1.1	打点なし	単	2
s 95			2.0			4.0		6.2	6.9	0.9	打点なし	直交	4
s 96			1.9			4.4		10.2	5.6	1.8	打点なし	直交	4
s 97			4.2			3.6		9.8	7.8	1.3	打点なし	直交	4
s 98			3.1			3.3		3.5	5.4	0.6	打点なし	直交	4
s 99			2.7			3.5		2.7	5.3	0.5	打点なし	単	1
s 100			1.6			3.1		1.7	3.9	0.4	打点なし	対向	2
s 101			2.2			2.0		1.5	3.5	0.4	打点なし	直交	2
s 102			2.0			3.0		2.4	3.5	0.7	打点なし	単	1
s 103			2.1			1.8		1.8	3.1	0.6	打点なし	直交	2
s 104			2.7			2.0		1.1	3.5	0.3	打点なし	単	1
s 105			1.8			4.0		3.8	5.0	0.8	打点なし	単	2
s 106			1.3			2.1		0.7	2.2	0.3	打点なし	対向	1
s 107			1.9			1.8		0.8	1.7	0.5	打点なし	直交	3
s 108			1.6			3.6		1.7	3.8	0.4	打点なし	対向	3
s 109			2.1			3.9		5.9	6.4	0.9	打点なし	直交	2

Tab.25 石器

一覧表(7)
碎片・チップ
・その他

番号	重量
s 110	2.9
s 111	2.7
s 112	11.1
s 113	5.3
s 114	2.4
s 115	4.1
s 116	2.2
s 117	1.4
s 118	8.5
s 119	16.7
s 120	1.5
s 121	1.9
s 122	1.9
s 123	2.5
s 124	0.7
s 125	1.8
s 126	0.5
s 127	0.8
s 128	1.5
s 129	1.3
s 130	1.0
s 131	1.1
s 132	1.1
s 133	0.6
s 134	0.4
s 135	0.5
s 136	0.4
s 137	0.6
s 138	1.1
s 139	0.6
s 140	0.4
s 141	0.2
s 142	0.4
s 143	46.8

Tab.26 石器一覧表(8) その他の石器①

番号	調査区	分類	打面厚	打面角	長さ	加撃軸長	振れ角	幅	加撃軸幅	重量	面積	厚さ指数
s 144	E	国府型ナイフ形石器			7.2			2.5		12.7	11.1	1.1
s 145	I	国府型ナイフ形石器			5.7			1.7		8.4	6.5	1.3
s 146	I	国府型ナイフ形石器			4.9			1.6		5.7	5.9	1.0
s 147	I	翼状剝片	4.0	120	3.2	2.6	62	3.7	5.5	17.7	12.1	1.5
s 148	I	翼状剝片	7.0	115	3.8	1.8	73	2.1	4.8	6.7	6.5	1.0
s 149	I	有舌尖頭器			5.3			2.8		15.3	11.5	1.3
s 150	I	有舌尖頭器未製品			12.0			4.1		58.6	33.3	1.8
s 151	C	尖頭器			4.7			2.5		11.1	8.5	1.3
s 152	B	尖頭器			5.1			3.1		13.8	10.7	1.3
s 153	B	尖頭器			7.4			5.9		51.9	25.2	2.1
s 154	F	石鎌			2.1			1.7		1.0	2.3	0.4
s 155	H	石鎌			1.9			1.5		0.4	0.7	0.2
s 156	F	石鎌			2.2			1.7		0.7	1.8	0.4
s 157	A	石鎌			2.8			1.8		0.9	2.4	0.4
s 158	I	石鎌			2.8			2.1		1.4	2.9	0.5
s 159	H	石鎌			2.9			1.8		1.4	2.8	0.5
s 160	I	石鎌			2.4			2.0		1.5	2.9	0.5
s 161	B	石鎌			2.7			1.5		1.0	2.2	0.5
s 162	B	石鎌			2.7			1.6		1.3	2.4	0.5
s 163	I	石鎌			2.5			2.1		1.4	2.9	0.5
s 164	B	石鎌			1.4			1.4		0.8	1.6	0.5
s 165	I	石鎌			1.7			1.5		0.8	1.6	0.5
s 166	B	石鎌			1.9			1.5		0.8	2.0	0.5
s 167	B	石鎌			1.1			1.1		0.3	0.8	0.4
s 168	I	石鎌			2.9			2.0		1.5	2.8	0.5
s 169	F	石鎌			2.8			1.8		1.3	2.9	0.4
s 170	B	石鎌			2.2			1.4		0.6	1.7	0.4
s 171	B	石鎌			2.4			1.6		1.0	2.0	0.5
s 172	B	石鎌			1.5			0.9		0.4	0.8	0.5
s 173	B	石鎌			1.8			1.2		0.4	1.2	0.3
s 174	B	石鎌			1.8			1.6		0.5	1.3	0.4
s 175	B	石鎌			1.7			1.5		0.8	1.7	0.5
s 176	E	石鎌			1.9			1.4		0.7	1.6	0.4
s 177	D	石鎌			3.2			1.8		1.5	3.7	0.4
s 178	B	石鎌			2.3			1.6		0.8	2.6	0.3
s 179	B	石鎌			2.9			1.7		1.9	3.3	0.6
s 180	B	石鎌			2.9			2.2		2.7	4.3	0.6
s 181	D	石鎌未製品			2.4			1.8		1.6	2.9	0.6
s 182	I	石鎌			2.1			1.9		1.3	2.9	0.4
s 183	B	石鎌			2.1			1.7		1.4	2.7	0.5
s 184	B	石鎌			2.1			1.7		1.1	2.2	0.5
s 185	B	石鎌			1.6			1.1		0.5	1.4	0.4
s 186	B	石鎌			1.5			1.6		1.0	2.0	0.5
s 187	I	石鎌			2.2			1.3		1.1	2.2	0.5
s 188	A	石鎌			4.1			2.4		4.6	6.1	0.8
s 189	B	石鎌			3.4			1.5		2.0	3.6	0.7
s 190	I	石鎌			3.5			2.0		2.9	4.3	0.7
s 191	F	石鎌			3.3			1.8		2.5	4.2	0.6
s 192	H	石鎌			5.8			1.5		4.7	5.7	0.8
s 193	I	石鎌			4.4			2.5		7.3	5.6	0.8
s 194	C	石鎌			4.0			1.6		2.0	3.9	0.5
s 195	F	横形石匙			4.5			8.3		27.6	16.3	1.7
s 196	H	横形石匙			2.5			6.8		13.4	12.0	1.1
s 197	F	横形石匙			3.4			5.9		11.8	10.0	1.2
s 198	I	横形石匙			4.5			9.4		25.8	18.9	1.4
s 199	H	横形石匙			3.6			6.1		18.4	13.2	1.4
s 200	F	横形石匙			4.4			5.8		13.8	15.6	0.9
s 201	I	横形石匙			3.6			5.1		12.5	12.5	1.0
s 202	I	縦形石匙			6.5			4.2		15.6	14.5	1.1
s 203	F	縦形石匙			12.0			4.7		75.6	35.0	2.2
s 204	C	縦形石匙			10.9			5.0		66.4	35.6	1.9
s 205	I	縦形石匙			7.4			3.5		13.1	16.2	0.8
s 206	I	縦形石匙			6.4			4.2		20.4	14.6	1.4
s 207	G	縦形石匙			6.9			2.1		22.4	13.7	1.6
s 208	I	縦形石匙			4.9			4.3		18.4	13.2	1.4
s 209	D	スクレイパー			9.4			3.6		22.0	24.8	1.5
s 210	I	スクレイパー			5.7			3.8		19.1	14.7	1.3
s 211	G	スクレイパー			3.2			7.3		17.0	17.9	0.9
s 212	C	スクレイパー			3.9			8.2		51.5	25.7	2.0
s 213	D	スクレイパー			1.9			3.3		5.6	5.8	1.0
s 214	F	スクレイパー			5.3			3.4		21.1	14.9	1.4

9. 石 器

Tab.27 石器一覧表(8) その他の石器②

番号	調査区	分類	打面厚	打面角	長さ	加擊軸長	振れ角	幅	加擊軸幅	重量	面積	厚さ指数
s 215	D	鋸歯縁石器			3.8			5.0	19.6	15.5	1.3	
s 216	D	鋸歯縁石器			4.5			6.6	44.6	20.9	2.1	
s 217	F	ノッチ			4.2			5.9	23.8	15.8	1.5	
s 218	A	ノッチ			1.0			3.7	4.5	4.6	1.0	
s 219	B	ドリル		2.7			1.5		1.6	2.3	0.9	
s 220	F	ドリル			11.0		3.8		44.8	29.0	1.5	
s 221	I	ドリル			5.0		2.0		5.1	6.4	0.8	
s 222	B	ドリル			3.8		1.2		1.8	3.0	0.6	
s 223	D	ドリル			2.6		1.0		1.2	2.0	0.6	
s 224	D	ドリル			3.3		1.2		2.6	2.8	0.9	
s 225	B	ドリル			2.9		1.0		1.2	2.0	0.6	
s 226	B	ドリル			2.5		0.7		0.4	1.2	0.3	
s 227	I	両面加工石器			4.7		6.3		55.8	22.6	2.5	
s 228	B	両面加工石器			5.5		3.5		21.2	15.1	1.4	
s 229	I	両面加工石器			7.9		3.4		30.5	20.6	1.5	
s 230	I	両面加工石器			5.1		2.4		9.9	8.2	1.2	
s 231	I	石槍?			5.7		2.6		22.5	12.6	1.8	
s 232	D	楔形石器			7.8		5.9		95.2	36.2	2.6	
s 233	C	石槍?			8.0		2.3		19.0	13.1	1.5	
s 234	C	楔形石器			5.9		5.1		35.2	23.8	1.5	
s 235	B	楔形石器			3.2		1.6		3.4	4.2	0.8	
s 236	E	楔形石器			4.5		5.8		23.6	21.9	1.1	
s 237	I	楔形石器			3.2		2.3		7.7	5.4	1.4	
s 238	H	楔形石器			5.1		5.7		51.2	21.8	2.3	
s 239	B	楔形石器			3.0		3.6		9.3	9.2	1.0	
s 240	F	楔形石器			3.8		5.7		33.8	17.9	1.9	
s 241	I	楔形石器			6.8		2.5		40.6	12.0	3.4	
s 242	F	楔形石器			5.2		4.5		41.5	17.7	2.3	
s 243	B	楔形石器			5.1		3.8		23.4	16.0	1.5	
s 244	B	楔形石器			3.3		3.3		11.5	8.4	1.4	
s 245	G	楔形石器			4.0		5.2		22.8	16.4	1.4	
s 246	B	楔形石器			5.1		3.7		29.0	10.4	2.8	
s 247	B	楔形石器			4.0		4.0		38.2	13.7	2.8	
s 248	B	楔形石器			5.0		4.0		18.0	15.9	1.1	
s 249	H	楔形石器			3.2		4.8		24.3	12.0	2.0	
s 250	B	楔形石器			5.0		2.6		15.8	9.2	1.7	
s 251	G	楔形石器			3.8		5.7		36.3	15.1	2.4	
s 252	D	楔形石器			4.0		2.6		14.7	8.3	1.8	
s 253	I	楔形石器			2.5		2.6		6.7	5.2	1.3	
s 254	B	楔形石器			2.9		2.8		7.2	5.8	1.2	
s 255	B	楔形石器			1.7		2.6		4.2	3.7	1.1	
s 256	D	二次加工のある剝片			8.6			5.0	41.7	28.5	1.5	
s 257	D	二次加工のある剝片			6.5			4.8	28.2	20.8	1.4	
s 258	G	二次加工のある剝片			5.2			9.1	59.8	30.1	2.0	
s 259	H	二次加工のある剝片			4.2			3.9	12.7	12.0	1.1	
s 260	F	二次加工のある剝片			4.2			9.8	62.4	33.5	1.9	
s 261	F	二次加工のある剝片			3.3			7.6	27.3	19.4	1.4	
s 262	F	二次加工のある剝片			3.7			8.2	36.3	26.0	1.4	
s 263	B	二次加工のある剝片			5.6			6.6	46.5	29.5	1.6	
s 264	C	二次加工のある剝片			4.0			9.3	48.3	26.0	1.9	
s 265	I	二次加工のある剝片			4.3			9.0	60.6	30.4	2.0	
s 266	D	二次加工のある剝片			3.7			6.8	19.7	14.2	1.4	
s 267	E	二次加工のある剝片			9.2			2.9	29.8	19.8	1.5	
s 268	D	二次加工のある剝片			3.0			4.6	12.4	12.2	1.0	
s 269	F	二次加工のある剝片			7.0			9.2	91.8	45.1	2.0	
s 270	I	二次加工のある剝片			7.4			4.8	42.9	34.4	1.2	
s 271	F	二次加工のある剝片			7.2			3.8	41.5	20.9	2.0	
s 272	H	二次加工のある剝片			9.0			5.4	74.6	34.6	2.2	
s 273	B	二次加工のある剝片			7.4			2.2	15.4	15.7	1.0	
s 274	C	二次加工のある剝片			3.5			9.3	49.5	28.0	1.8	
s 275	I	二次加工のある剝片			5.3			4.5	20.9	18.4	1.1	
s 276	D	二次加工のある剝片			4.2			5.4	41.9	25.4	1.6	
s 277	E	二次加工のある剝片			5.3			4.9	31.6	21.6	1.5	
s 278	B	二次加工のある剝片			3.9			4.7	14.9	11.4	1.3	
s 279	F	二次加工のある剝片			8.4			5.4	91.9	36.4	2.5	
s 280	I	二次加工のある剝片			1.8			2.3	2.7	3.3	0.8	
s 281	C	二次加工のある剝片			1.2			2.1	0.8	1.8	0.4	
s 282	I	二次加工のある剝片			3.5			1.6	3.0	3.6	0.8	
s 283	F	二次加工のある剝片			4.9			4.2	20.3	18.0	1.1	
s 284	I	二次加工のある剝片			5.2			3.5	19.9	15.6	1.3	
s 285	B	二次加工のある剝片			3.5			5.4	15.7	18.3	0.9	

Tab.28 石器一覧表(8) その他の石器③

番号	調査区	分類	打面厚	打面角	長さ	加撃軸長	振れ角	幅	加撃軸幅	重量	面積	厚さ指数
s 286	G	二次加工のある剝片				2.8			8.1	30.1	17.5	1.7
s 287	D	二次加工のある剝片				5.5			5.1	37.2	19.6	1.9
s 288	F	二次加工のある剝片				6.8			7.5	52.7	33.3	1.6
s 289	D	二次加工のある剝片				4.1			6.3	19.6	18.3	1.1
s 290	I	二次加工のある剝片				1.7			5.2	8.7	8.4	1.0
s 291	F	二次加工のある剝片				6.4			12.6	105.0	51.0	2.1
s 292	I	国府型ナイフ形石器			5.2			1.7		7.4	6.2	1.2
s 293	I	国府型ナイフ形石器			4.5			1.6		5.3	5.0	1.1
s 294	I	有舌尖頭器			3.5			2.3		6.8	6.2	1.1
s 295	I	石鎌			2.2			1.4		0.9	2.3	0.4
s 296	I	石鎌			3.9			2.7		4.1	5.6	0.7
s 297	I	石鎌			4.0			2.3		4.5	6.2	0.7
s 298	I	二次加工のある剝片			7.4	4.3		4.5		34.6	21.6	1.6
s 299	I	二次加工のある剝片				5.2			9.4	83.6	39.2	2.1
s 300	I	スクレイバー				2.8			4.2	14.2	10.5	1.4
s 301	I	スクレイバー				3.0			6.3	15.4	11.8	1.3
s 302	I	楔形石器			2.9			4.4		25.6	10.8	2.4
s 303	I	二次加工のある剝片				3.2			2.3	4.5	4.8	0.9
s 304	I	剝片			3.6			3.7		8.8	9.2	1.0
s 305	I	石核								95.9	27.5	3.5
s 306	I	剝片			2.6			5.5		10.1	11.1	0.9
s 307	I	二次加工のある剝片				2.7			2.5	5.6	5.3	1.1
s 308	I	剝片(自然面打面)			1.6			4.4		6.2	6.3	1.0
s 309	I	剝片(自然面打面)			2.3			4.5		8.8	9.6	0.9
s 310	I	剝片			3.5			4.0		4.3	6.7	0.6
s 311	I	碎片								4.7		
s 312	I	石庖丁			6.3				4.1	28.2		

Tab.29 石器一覧表(9) 磨製石器

番号	調査区	出土地点	種別	長さ	幅	重量	厚さ	石材
s 313	B	IV層	石錐	10.6	8.9	189.0	1.3	砂岩
s 314	F	縄文河川11	石錐	7.4	4.3	68.0	1.5	砂岩
s 315	B	IV層	石錐	6.5	5.4	162.0	4.3	砂岩
s 316	D	IV層	石棒	28.7	5.0	544.3	2.3	結晶片岩
s 317	D	IV層	石棒	17.0	7.2	1141.7	5.7	ミローナイト
s 318	D	I層	石庖丁	9.4	5.0	49.2	0.7	緑色片岩
s 319	D	I層	石庖丁	7.1	4.4	38.5	0.8	緑色片岩?
s 320	H	III～IV層	石庖丁	13.5	5.0	80.1	0.8	流紋岩(?)
s 321	D	IV層上面	石庖丁	14.7	4.4	70.9	0.7	流紋岩
s 322	D	IV層	石庖丁	10.1	4.9	41.4	0.6	緑色片岩
s 323	G	IV～V層	石庖丁	9.8	3.6	30.5	0.6	緑色片岩(g.s)
s 324	H	III～IV層	石庖丁	7.5	5.5	46.0	0.7	溶結凝灰岩
s 325	G	I～II層	石庖丁	7.4	4.9	31.0	0.5	緑色片岩
s 326	D	I層	石庖丁	5.3	5.0	26.8	0.8	安山岩?
s 327	D	IV層	石庖丁	6.2	5.1	34.1	0.7	溶結凝灰岩?
s 328	H	縄文河川25南肩	石庖丁	6.1	4.0	14.9	0.5	緑色片岩
s 329	I	I層	石庖丁	6.0	4.0	30.2	0.8	緑色片岩
s 330	F	縄文河川14	石庖丁	5.9	4.0	27.5	0.7	緑色片岩
s 331	F	IV層上面	石庖丁	6.7	4.1	28.0	0.8	緑色片岩
s 332	A	IV層	石斧	10.6	5.0	280.3	3.5	閃綠岩
s 333	I	中期末～後期初頭土器群5	石斧	13.3	5.6	343.0	2.6	安山岩質凝灰岩
s 334	B	IV層	石斧	12.7	4.7	278.0	3.2	流紋岩(?)
s 335	F	V層	敲石	19.8	10.2	1400.0	4.6	中粒砂岩
s 336	F	V層	敲石	11.0	9.0	650.0	4.4	砂岩
s 337	B	IV層	敲石	12.7	10.0	1200.0	5.7	中粒斑れい岩
s 338	F	後期遺物集中区	敲石	8.3	6.8	457.0	5.8	花崗閃綠岩
s 339	B	IV層	敲石	9.9	7.5	230.0	2.1	和泉砂岩
s 340	F	後期遺物集中区	敲石	13.4	10.0	1040.0	5.7	チャート
s 341	F	V層	敲石	24.6	8.8	2350.0	7.6	砂岩
s 342	F	V層	敲石	18.3	17.9	6030.0	13.5	砂岩
s 343	F	V層	敲石	11.0	9.1	720.0	4.8	砂岩
s 344	F	後期土器群5	敲石	8.7	6.6	317.0	3.8	アブライト
s 345	B	IV層	敲石	18.1	6.5	850.0	4.8	砂岩
s 346	B	IV層	敲石	6.2	10.5	103.0	1.4	砂岩
s 347	I	中期末～後期初頭土器群5	凹石	9.9	8.6	543.0	3.5	砂岩
s 348	B	IV層	凹石	16.2	11.5	1700.0	6.8	和泉砂岩
s 349	F	後期遺物集中区	凹石	8.9	5.0	142.0	2.3	砂岩
s 350	F	後期土器群7	石皿	26.0	30.6	13500.0	11.6～9.0	砂岩

10. その他の遺物

10. その他の遺物

1) 木器

縄文～弥生時代の木器は、木製容器 1 点のみである。I 地区崖錐性堆積ぞいにひろがる後背湿地より出土し、縄文晩期～弥生前期土器群 8 に含まれる。

容器は復元最大長 29cm、同最大幅 23cm、厚さ 12.5cm、刳り込み部の復元最大長 26cm、最大幅 19cm、深さ 6cm を測る平面橢円形を呈するものであり、一端が欠損するものの復元可能な製品である。横木取りされた材に抉りをいれて形成され、刳り込み部の内面上端部、縁部と外面上端部はなめらかに仕上げられているが、内面見込みの部分や外面下半から底面にかけては一部加工痕がみられるものの凹凸が激しい。加工痕は、内面上端部に幅は不明であるが偏平な工具による上下方向の痕跡、外面上端部に切断面、底面には逆「U」字状に弯曲するものおよび直線的な工具痕が認められる。また凹凸が激しい面においても幅 3cm 前後の工具による粗い調整がなされた可能性があり、腐食が著しく特定は困難であるが、工具として用いられたであろう石斧類との比較、検討が可能な資料と考えられる。

2) 土製品

縄文晩期土器群 8 出土の管玉状土製品 1 点と河川 12 出土の不明土製品 1 点の計 2 点がある。

管玉状土製品は最大長 2.6cm、直径 1.5cm、孔径 0.4cm を測る。穿孔は焼成前のものである。胎土は砂粒を含み、緻密とは言いがたい。色調は灰白色(10YR7/1)。磨滅のため詳細は不明である。

不明土製品は最大長 8.6cm、最大幅 3.2cm を測る。一部粘土が皺になる部分がみられる小型の鰹節型のものであり、片手で握られた粘土がそのまま焼成されたような形状を示す。胎土は微細な長石を含む精良なもので、灰白色(2.5Y8/2)を呈する。

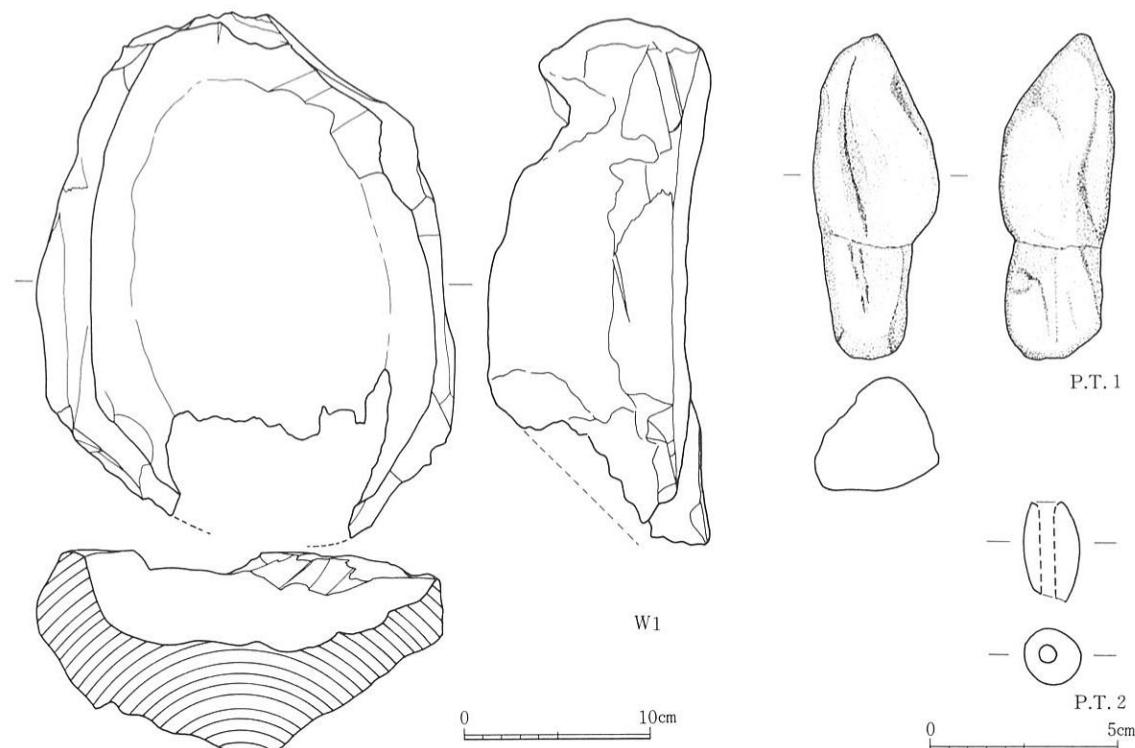


Fig. 142 その他の遺物

11. 小 結

小阪遺跡の縄文～弥生時代の遺構と遺物について、各々時代順に述べてきた。ここでは地形からみた河川の分類後、時期ごとに河川による自然堤防や後背湿地の形成を考慮しての遺構、遺物の有り方をまとめておきたい。

小阪遺跡の河川は、現石津川の流域に存在する埋没河川で現石津川と同様の方向性をもつもの、現陶器川流域の埋没河川で現陶器川と同じ方向性をもつもの、原ノ池内に存在する埋没河川で原ノ池から東北東に伸びる小開析谷の影響を受けたものの3種に大別できる。それぞれ石津川系、陶器川系、原ノ池内小開析谷系と呼称する。縄文～弥生の埋没河川をこれと対比、分類するならば次のようになる。

石津川系—河川1、2

陶器川系—河川3、4、5～6、7～9、10、13、14、28、29、30

原ノ池内小開析谷系—河川23、24、25、26、27

これ以外に主にG地区の河川が該当することになるが、陶器川と原ノ池内小開析谷双方の影響を受けたと考えられる河川があり、これを陶器川・原ノ池内小開析谷系と呼称する。

陶器川・原ノ池内小開析谷系—河川12、15、16、17、18、19～22

その他以上の分類に該当しないものに河川11があるが、これは河川12のショートバーと考えられる。また、谷状地形は現在上池、下池となっている伏尾段丘を開析する谷の延長上に位置し、これの埋没微地形であろう。

小阪遺跡では、姶良火山灰、アカホヤ火山灰が検出されている。姶良火山灰は伏尾段丘から流入したものと考えられる二次堆積である。アカホヤ火山灰は前後する層より出土する遺物はないものの、上層で採取された自然木の¹⁴C年代測定値がB.P. 5790±30(KSU-2096)を示し、またI地区(T.P.+18.5m)では面的な広がりをもって検出されることやF地区(T.P.+19.0m)においても確認されていることから、プライマリーな堆積物である可能性が高い。これら火山灰の降下年代と前後する年代の遺物としては、国府型ナイフ2点と早期末～前期初頭の土器が2点あげられるが、国府型ナイフは上層旧耕作土からの出土であり、プライマリーな出土状況を示すものではない。土器2点は、姶良火山灰が介在する崖錐性堆積の上面とそれを削る河川内からの出土である。これも同じくプライマリーな出土状況ではない可能性が高い。しかしながら2点とも残存状況が良好であり、小阪遺跡ではこの年代から周辺における人間活動をうかがうことができる。

縄文時代前期については、河川7から北白川下層II b式土器1片、河川30から大歳山式土器1片が出土するのみであり、包含層や面は検出されていない。一方大歳山式土器は残存良好であり、河川30付近における供給地の存在がうかがえる資料である。

縄文時代中期には、石津川系河川2、陶器川系河川6、30、陶器川・原ノ池内小開析谷系河川15、原ノ池内小開析谷系河川25の存在がうかがえる。25からは、船元II式土器が出土しており、また近接することから同一河川となる可能性を有する。これらの河川にともなう包含層および生活面は、I地区河川30によって形成された自然堤防上に認められた。ここでは船元I式、船元II式、里木式の遺物が出土しており、それぞれの時期の包含層および生活面が存在したものと考えられるが、船元I式土器は2点、里木式土器は同一個体片が2点のみであり、明確に確認したのは遺物が比較的まとまって出土した船元II式土器の面に限られる。この面は薄い黒色を呈し土壤化がうかがえることや、立木の根が張った状

11. 小 結

態で検出されていることから、この時期に地表面であったことは確実である。土器は型式的に船元II式でも古い段階に位置づけられるものが3個体程度出土している。土器とともに石鏃1点、楔形石器1点、尖頭器の可能性をもつ加工石器1点、石匙5点（横形1点、縦形4点）、磨石1点が出土しており、この時期の組成を考えるにあたっての好資料になるものと考えられる。

縄文時代中期末～後期初頭には、石津川系河川2、陶器川系河川6、7～8、29、陶器川・原ノ池内小開析谷系河川12、15、19～20、原ノ池内小開析谷系河川24が機能していたものと考えられる。河川の連続性をみると、河川6、7～8は位置的にも近接し方向性を同じくすること、出土遺物が当該年代のものが主体であり、ともに砂礫層から主に出土していることから同一河川である可能性が大きい。また、この連続するものとして河川12、19～20があげられる。両河川ともに当該年代の遺物が砂礫層から出土していること、土器(47、48)が河川7～8、河川19～20からそれぞれ出土していることから、これも同一河川となる可能性をもつ。これらが同一河川であれば、河川19～20から蛇行しながら河川12へと連続し、河川7～8にかけて湾曲しながら河川6へとねかける河川が想定される。この一連の河川からは残存良好な北白川C式でも新しい段階の土器および中津式土器片が多く出土しており、付近に居住域の存在が想定された。しかし河川周辺においては、中津式の小片を中心とする土器群を4ヶ所(T.P.+19.9～20.5m)確認するにとどまった。一方、河川29の形成する自然堤防には北肩部に土坑1基、南肩部に土器片敷遺構、落込み2基とその周辺の土器群(T.P.+21.0m)が立木の痕跡とともに検出されている。土器片敷遺構は住居跡の炉となる可能性をもつものの、断定するには至らなかった。土器片敷遺構からは4個体分の土器片が出土しており、そのうち1個体は完形に、1個体は土器上半部が復元できた。土器は北白川C式でも中津式に近い最新段階に位置づけられるものであり、この時期の好資料である。落込み出土土器は中津式の範疇に含まれる。

以上大きく2地点において当該期の遺構、遺物が確認されているが、一連の河川出土土器と土器片敷遺構を中心とする河川29周辺出土土器は、ほぼ時期を同じくするものであり、両者は併存した可能性も考えられる。しかし、後者は居住域とするには遺構・遺物が希薄であり、E～G地区の一連の河川から出土する遺物の供給地は調査がおよんではない周辺部と考えられる。

後期には、石津川系河川2、陶器川系河川5、8～9、13、28、陶器川・原ノ池内小開析谷系河川15、19～20が機能しており、その周辺には四ツ池式期の土器群が1ヶ所、北白川上層式2期の土器群が1ヶ所、北白川上層式2～3期の遺物集中区と土器群が1ヶ所、北白川上層式3期～一乗寺K式の土器群が3ヶ所、元住吉山式の土器が2ヶ所、宮滝式土器が1ヶ所、時期の特定ができないその他後期の土器群が3ヶ所検出されている。

四ツ池式期には3Fトレンチにおいて、土器群(T.P.+22.0m)が検出された。同トレンチ南西端の河川13はこの土器群以降に機能したものである。

北白川上層式2期から一乗寺K式期にかけては、F地区河川8～9により形成された自然堤防上に、遺物集中区を中心として各土器群が一部時期が重なりながら連続する。遺物集中区では2860点余の土器片および石器が出土している。なかでも土器が密に集中する部分においては剝片石器などが集中し、石器製作に関わる作業スペースであった可能性が指摘できよう。

元住吉山式期には河川8～9による自然堤防上に1点、河川19～20による自然堤防上に1点土器が認められた。

宮滝式期には河川5による自然堤防上において、土器が1点出土している。

以上の土器群の検出面をみると、3FトレンチがT.P.+22.0m、11Fおよび12GトレンチがT.P.+21.5m、15Fトレンチ遺物集中区周辺がT.P.+21.0m前後、16FトレンチがT.P.+20.5m前後であることから、3Fトレンチ周辺を頂部とし河川8～9へと下る北東～南西方向の微高地が想定され（鋤柄1989）、これは現地形と一致するものである。

小阪遺跡ではこうした微高地から川岸に向かう傾斜面での人間活動が、遺物集中区をはじめとする出土状況からうかがうことができ、近畿地方における縄文後期遺跡の立地を示す一資料になるものと考えられる。

晩期～弥生前期には、陶器川系河川3、4、原ノ池内小開析谷系河川23が存在する。河川3南肩では溝や土器群が検出され、この時期に人間活動が氾濫原にまでおよんでいたことがうかがえる。一方、遺跡周辺が森林の様相を呈していたであろうことが、立木の根の痕跡より想定され、D地区における検出状況より森林はかなり河川にせまっていたものと考えられる。以上より小阪遺跡では畠痕をもつ縄文晩期土器片が出土しているものの、遺跡周辺における水田の開発はまだ遅れるものと考えられる。この時期の遺物では、中部・北信越系の浮線文土器、前期中段階に位置づけられる木葉文土器の出土が注目される。また縄文晩期土器のなかで角閃石を含むものが全体の6～8割を占めることが明らかであり、この問題については自然科学的分析も行なった。

弥生時代には、陶器川・原ノ池内小開析谷系河川18、21、22、原ノ池内小開析谷系河川26、27が機能していたものと考えられる。河川27周辺で確認された土壤化層が水田の可能性をもつことは先述した通りであるが、具体的な水田遺構は検出されていないもののこれを水田と仮定すれば、しがらみや杭列の存在も理解が容易になる。また、遺物が出土せず明らかではないものの、当該期の相当層であるIII層の堆積状況が注目される。III層はA～F地区の広範囲にわたり認められる、層厚10～30cm前後のほぼ水平な粘土～シルト層である。IV、V層と同様河川によって運び込まれる大阪層群起源の堆積物であるが、IV、V層に比べ層中に砂層やシルト質のラミナは認められず、かなり安定した堆積状況がうかがえる。したがって、当該期の河川はG、H地区で認められるもののみであるがA～F地区では河川が調査区から離れた、伏尾あるいは小坂の段丘沿いに流れていた可能性が指摘される。

小阪遺跡では、縄文時代早期末～前期初頭から晩期までの土器が出土しており、中期末～後期初頭から遺構、遺物が顕著となる。これは、西日本における傾向と一致するものである。また、河川埋土の傾向をみると、中期末～後期初頭には自然木を含む砂礫であるが、後期中葉から細砂に植物遺体層が介在するようになり、晩期には植物遺体層の厚い堆積が認められるようになる。これは谷部内において検出した河川が占める位置や、同一河川であっても部分によって堆積状態は異なるものであり一概にはいえないものの、小阪遺跡における河川埋土の傾向としては指摘できる。小阪遺跡では花粉、珪藻分析、大型植物遺体、木材鑑定など自然科学的調査を行なっており、以上のような遺体、遺物の出土状況や河川埋土の傾向は、これら自然科学的調査成果を含めて再考してみたい。

註

- 1) 梶山彦太郎氏に御教示いただいた。
- 2) 『野々市町御経塚遺跡』を参考に復元した。
- 3) 第III部第2章と重複する資料文献は省略させていただいた。
- 4) 穂積裕昌氏に御教示いただいた。

参考文献

- 浅岡俊夫 1988 「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』
- 網谷克彦 1981 「鳥浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究（I）」『鳥浜貝塚1980年度調査概報』 福井県教育委員会
- 網谷克彦 1982 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究3』 雄山閣
- 網谷克彦 1985 「II. 遺物」『鳥浜貝塚1984年度調査概報』 福井県教育委員会
- 網谷克彦 1987 「II. 遺物」『鳥浜貝塚1985年度調査概報』 福井県教育委員会
- 網谷克彦 1988 「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観1 前期』 小学館
- 石川日出志 1985 「中部地方以西の縄文時代晚期浮線文土器」『信濃』 37-4
- 石川日出志ほか 1988 「鳥屋遺跡の発掘調査（遺跡外の出土遺物）」『豊栄市史資料編1 考古編』
- 泉 拓良 1981 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』 雄山閣
- 泉 拓良 1985 「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告III－北白川追分町縄文遺跡の調査－』 京都大学埋蔵文化財研究センター
- 泉 拓良 1986 「縄文と弥生の間に」『月刊歴史手帖』 14-4
- 泉 拓良・玉田芳英 1986 「文様系統論縁帶文土器」『季刊考古学』 17
- 泉 拓良 1988 「咲畠・醍醐式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』 小学館
- 泉 拓良 1990 「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報 第8集』 奈良大学文学部文化財学科
- 磯部幸男・久永春男ほか 1960 『咲畠貝塚』
- 大阪府教育委員会 1981 『淡輪遺跡発掘調査概要報告書・III』, 1987 『淡輪遺跡発掘調査概要報告書・VIII』
- 岡田茂弘 1965 「縄文文化の発展と地域性近畿」『日本の考古学II 縄文時代』 河出書房
- 香芝町教育委員会 1989 『瓦口森田遺跡発掘調査概報』
- 亀谷尚子 1984 「木葉文土器の考察」『西部瀬戸内における弥生文化の研究』（山口大学人文学部考古学研究室研究報告 第三集）
- 吉良哲朗 1989 『原色日本貝類図鑑』 保育社
- 工楽善通 1983 「遠賀川式土器における木葉文の展開」『文化財論叢』
- 滋賀県教育委員会 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』
- 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』 34-4
- 鋤柄俊夫 1989 「遺跡の立地について」『小阪遺跡（その6-3）－調査の概要－』（財）大阪文化財センター
- 高堀勝喜 1983 『野々市町御経塚遺跡』 野々市町教育委員会
- 巽 三郎・中村貞史 1969 『鷹島』
- 玉田芳英 1985 「縄文時代中期末～後期初頭の土器について」『片吹遺跡』 兵庫県龍野市教育委員会
- 玉田芳英 1988 「中津・福田K II式土器様式」『縄文土器大観4 後期』 小学館
- 千葉 豊 1989 「縁帶文系土器群の成立と展開－西日本縄文後期前半期の地域相－」『史林』 72-6
- 中村貞史 1977 「海南市鳥居出土の縄文時代遺物について」『県立紀伊風土記の丘年報』 第4号
- 中村友博 1980 「馬場川O式の型式学的位置」『月刊歴史手帖』 8-4
- 中村善則 1986 「播磨大歳山遺跡1－縄文土器－」『神戸市立博物館研究紀要』 第3号
- 直良信夫 1926 『播磨国明石郡垂水村山田大歳山遺跡の研究』
- 直良信夫 1927 「近畿地方に於ける縄文土器の研究」『考古学雑誌』 17-4
- 能登川町教育委員会 1990 『能登川町埋蔵文化財調査報告書第17集 今安染寺遺跡』
- 深澤芳樹 1989 「木葉紋と流水紋」『考古学研究』 36-3
- 平安博物館 1975 『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』
- 間壁忠彦・間壁葭子 1971 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報 第7号』
- 増子康真 1981 「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階 本文編・補足改定版』
- 三日市遺跡調査会 1988 『三日市遺跡調査報告書I』
- 南 博史 1989 「大阪湾周辺地域における縄文晚期凸帯文土器の変遷」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』 2
- 家根祥多 1981 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』 雄山閣
- 丹羽佑一 1989 「凹線文系土器様式」『縄文土器大観4』 小学館

第3章 古墳時代の遺構と遺物 —陶邑のなかで



Fig. 143 周辺の地形と古墳時代の遺構

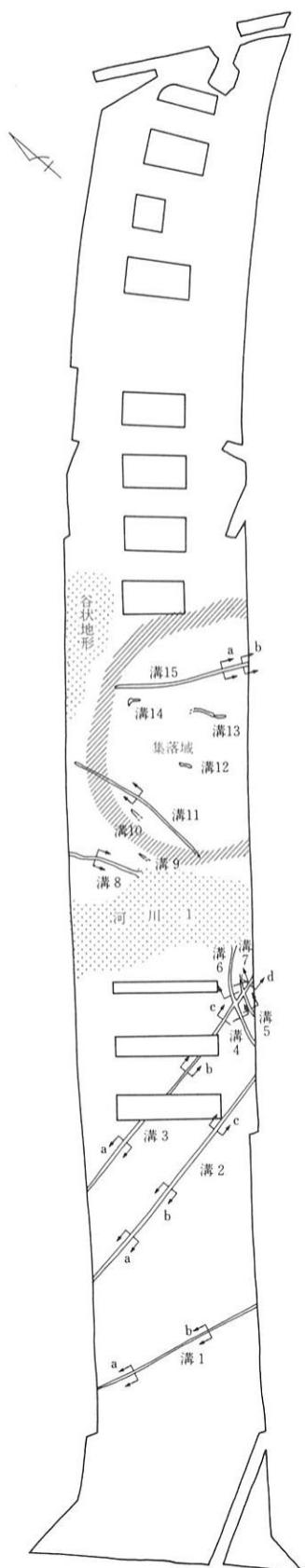


Fig. 144 古墳時代河川・溝空間分布(1)

当該調査区をとりまく歴史的環境は、序章でふれたように古墳時代に入って激変する。たとえば奈良県纏向遺跡などに代表される、古墳時代前期初頭における畿内中心の土器の移動や、古市・百舌鳥古墳群などに顕著な、古墳時代中期における巨大な前方後円墳の造営などがその象徴的な現象であろう。しかも、これらは具体的に遺存したものの表層からのみ知り得る情報であって、実際の畿内社会における支配者階級への権力集中と、全国レベルで見た場合の畿内勢力の急速な伸長は、これまでの歴史発展における諸階梯の中でも、最も飛躍的な変化であったことが推測される。

こういった、いわば政治的な動向を背景にした歴史的環境の変動は、泉北丘陵の開発にも少なからず影響を及ぼしている。それは特に古墳時代中期に至って、畿内の勢力が、須恵器という外来の土器を製作する集団を主導的に掌握し、自らの統治範囲内に製作地域を設けるために泉北丘陵を選択したということに起因する。

また、こうした開発行為の前提には、自然環境の安定も見逃せない要素となっていよう。基本層序の第Ⅰ層～第Ⅱ層の堆積は、それ以前の第Ⅲ層～第Ⅳ層に比べて、明らかに安定した様相を呈している。古墳時代の遺構は、基本的にはまさにこの第Ⅲ層の上面で検出されるのであり、水に襲われ続けたであろう調査区内に初めて本格的な開発の目が注がれた背景には、歴史的および地理的な条件の両者が時期を同じくして整っていたことが挙げられる。したがって、当該期に小阪遺跡内で検出される遺構群は、前代までの遺構群に比べ、きわめて明確に人間活動の痕跡を残しており、より生々しい生活臭を感ずることができる。

実際に検出される遺構は、C地区の集落域を除いて、溝と河川がほとんどである。ただし、Fig.144～148に掲載した溝と河川の関係及び各溝の断面を参照いただければ良くご理解いただけると思うが、地形的な制約を受けながらも、河川や居住域からの積極的な導排水を意識し、かつ極めて人為的に設定、掘削した様相がうかがえる。

また、遺構の分布には疎密がある。概して、C地区の集落と河川1周辺、やや離れてE地区とF地区の一部に古墳時代中期の遺構、F地区とG地区の一部には古墳時代前期の遺構が、そしてG地区から北東側には古墳時代後期の遺構が検出されている。A地区の南西端付近は旧石津川、D地区は旧陶器川、G地区北東端付近は旧陶器川支谷の直接的影響を受けていたためか、あまり顕著な遺構は検出されていない。遺構群の検出面は、A、B、C、Dの各地区とE地区の一部で、基本層序の第Ⅲ層（黄橙色系の粘質土、マンガンは点状の小結核で層中に分布）上面、E地区の残り部分とF地区とG地

区の一部では、第Ⅳ層（灰褐色系のシルト、マンガン斑が大量に集積）上面に、そしてF、G地区の残り部分、H地区については第Ⅳ層（青灰色系のシルト、還元状態にあるため本来の土色は不明）上面に各々求められる。ただし、I地区については、伏尾丘陵に近接するため、崖錐性堆積（非常に堅緻な礫混じりの灰白色シルト、無遺物）上で検出されている。

遺構の埋土は、後節で詳述するが、古墳時代中期にはほぼ単一の土色、土質である。基本的には粘質土であり、有機質を多く含むためか、土色は黒褐色系を呈する。古墳時代前期と後期の遺構に若干ではあるが、灰色系の粘土や粗砂を埋土にするものがあって、形成された時期の周辺の環境と、利用状況の差異を示唆している。

ここで、遺物に目を転じると、まず第一に庄内～布留期の土師器が少ないながらも、まとまって出土しており、和泉地域での当該期の空白を埋める貴重な資料と成り得る。そして、第二には、「陶邑」に比定される泉北丘陵の北端に位置し、TK73号窯に代表される初期須恵器の窯群に近接した当調査区では、いたるところから初期須恵器が出土している。加えて、韓式系土器など、朝鮮半島とのつながりを示す資料も多く含まれている。第三には、やはり「陶邑」ならではの須恵器窯の灰原資料が挙げられよう。

こうした遺構、遺物群は、互いに強い関連を持ち、とりわけ「陶邑」の存在とは切り離しては考えられない小阪遺跡の性格を暗示している。

以下ではその各々の詳細に触れ、概要報告では成し得なかった調査区内における古墳時代の全体像に迫りたい。

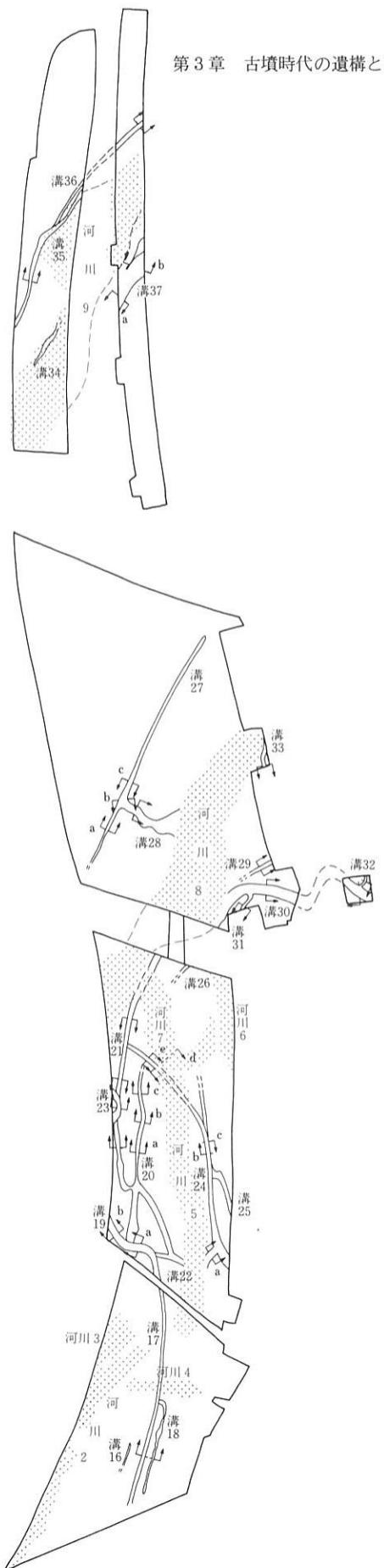
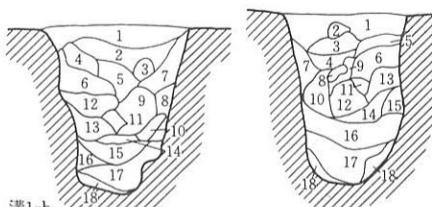


Fig. 145 古墳時代河川・溝空間分布(2)

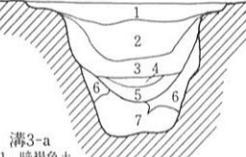
T.P.+20.70m



溝1-b

1. 暗黃褐色土 黃褐色土ブロック含む
2. 褐色土ブロック
3. 黄褐色土 褐色土ブロック含む
4. 黄褐色土 灰白色砂質土ブロック含む
5. 黄灰色砂質土
6. 黄褐色土
7. 淡褐色土
8. 黄褐色土ブロック
9. 灰白色砂質土 黄褐色粘土ブロック含む
10. 黑褐色粘土
11. 暗褐色粘土
12. 暗灰褐色粘土
13. 濁褐色土
14. 黄褐色粘土
15. 黄褐色土 黄色土混じり
16. 黑褐色粘土
17. 暗灰褐色粘土 ベース
18. 灰色粘土

T.P.+20.60m



溝3-a

1. 暗褐色土
2. 黑褐色土
3. 黑褐色土 黄色砂を少量含む
4. 黑褐色土 黄色ブロック混じり
5. 黑褐色土
6. 黄褐色土 暗灰色土ブロック混じり
7. 黑色土と灰白色土の互層 螺旋状に堆積

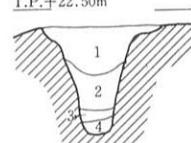
T.P.+20.50m



溝4

1. 茶黒色粘土
2. 黄色粘土ブロック含む

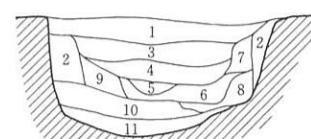
T.P.+22.50m



溝11

1. 茶黒色粘土 マンガン多し、酸化鉄有り
2. 黑褐色粘土 精土のブロック有り、マンガン・酸化鉄有り
3. 黑褐色粘土
4. 暗褐色粘土 灰褐色粘土ブロック有り

T.P.+22.10m



溝17

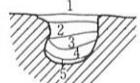
1. 暗黒褐色粘土 マンガン多し、粗砂多し
2. 褐色粘土 酸化鉄有り、マンガン若干有り、黄褐色のブロック含む
3. 暗褐色粘土 マンガン多し、酸化鉄わずかに有り、粗砂わずかに含む
4. 褐色砂 シルト～粗砂
5. 暗灰褐色砂 中砂～細砂
6. 黄褐色粘土 灰褐色と黄褐色の重なるラミナ
7. 暗灰褐色砂質土 マンガン多し、酸化鉄わずかに有り、粗砂わずかに含む
8. 黄褐色砂質土 ラミナ有り
9. 暗灰褐色砂質土 マンガン多し、酸化鉄わずかに有り、粗砂わずかに含む
10. 灰褐色砂 中砂～細砂
11. 細砂

T.P.+20.70m



溝2-a

1. 暗褐色土
2. 黑褐色土
3. 黑褐色土 5より 色調くらい
4. 黑褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土



溝2-b

1. 黑茶色粘土
2. 暗褐色土 茶褐色粘土
3. 黑褐色土 ブロック有り、マンガン有り
4. 黄褐色土 黑褐色土ブロック混じり
5. 黄褐色土 ブロック有り、マンガン若干有り



溝2-c

1. 黑茶色粘土
2. 暗褐色土 茶褐色粘土
3. 黑褐色土 ブロック有り、マンガン有り
4. 黄褐色土 黑褐色土ブロック混じり
5. 黄褐色土 ブロック有り、マンガン若干有り

T.P.+20.40m



溝3-b

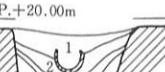
1. 暗茶褐色土 暗灰色シルト、
2. 黑褐色粘土 暗褐色粘土ブロック
3. 暗茶灰色粘土
4. 黑褐色粘土 灰色粘土混じり
5. 灰色粘土 泥土層
6. 黄褐色粘土

溝3-c

1. 暗茶灰色粘土 マンガン多し
2. 暗茶灰色粘土 マンガン多し、黄褐色
3. 黑褐色粘土 ブロック含む
4. 黑褐色粘土
5. 黑褐色粘土 淡青灰色粘土のブロックわざかに含む
6. 黑褐色粘土

溝3-d

1. 茶黒色粘土



溝3-d

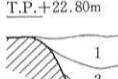
T.P.+20.00m



溝8

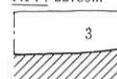
1. 黑褐色土
2. 暗褐色粘土 墓化物を若干含む
3. 灰褐色粘土 墓化物を多く含み、強く黒色を帯びた泥土
4. 暗茶色粘土 灰黑色粘土ブロック含む
5. 灰黑色粘土 墓化物を多量に含む泥土
6. 黑褐色粘土
7. 灰黑色粘土 墓化物を多量に含む泥土

T.P.+22.80m



1. 黑褐色粘土 マンガン強い
2. 黑褐色粘土 マンガン強い中、わずかに耕土の土有り、黄褐色粘土砂混じりのブロック
3. 黑(灰)色粘土(水により泥の混じり)中、若干黑褐色粘土(マンガン強い)含む、耕土と黄褐色粘土(砂混じり)の擾乱
4. 耕土の土と黄褐色粘土(砂混じり)の擾乱

T.P.+22.80m



溝15-b

1. 黑褐色粘土 マンガン強い
2. 黑(灰)色粘土 水により泥の溜りか
3. 黑(灰)色粘土(水により泥の溜り)中、耕土の土含む、黄褐色粘土(砂混じり)ブロック

溝18

1. 暗褐色粘土 マンガン多し、細砂有り
2. 暗茶褐色粘土 マンガン有り、酸化鉄わずかに有り
3. 黑褐色粘土 マンガン有り、酸化鉄わずかに有り

溝33

1. 黑褐色粘土(2.5Y3/1)緑灰色シルトブロック(10G6/1)を含む
2. 黑褐色粘土(2.5Y3/1)緑灰色シルトブロック(10G6/1)を多量に含む
3. ぶい黄色細砂(2.5Y6/3)
4. オリーブ黒色粘土(5Y3/1)灰白色(5Y8/2)の炭酸カルシウムの結核を多く含む
5. オリーブ黒色粘土(5Y3/1)細砂を含む
6. オリーブ黒色粘土(5Y3/1)
7. 緑灰色細砂(5G6/1)オリーブ黒色粘土(5Y3/1)と炭酸カルシウムを含む

0 2m

Fig.146 古墳時代溝断面(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

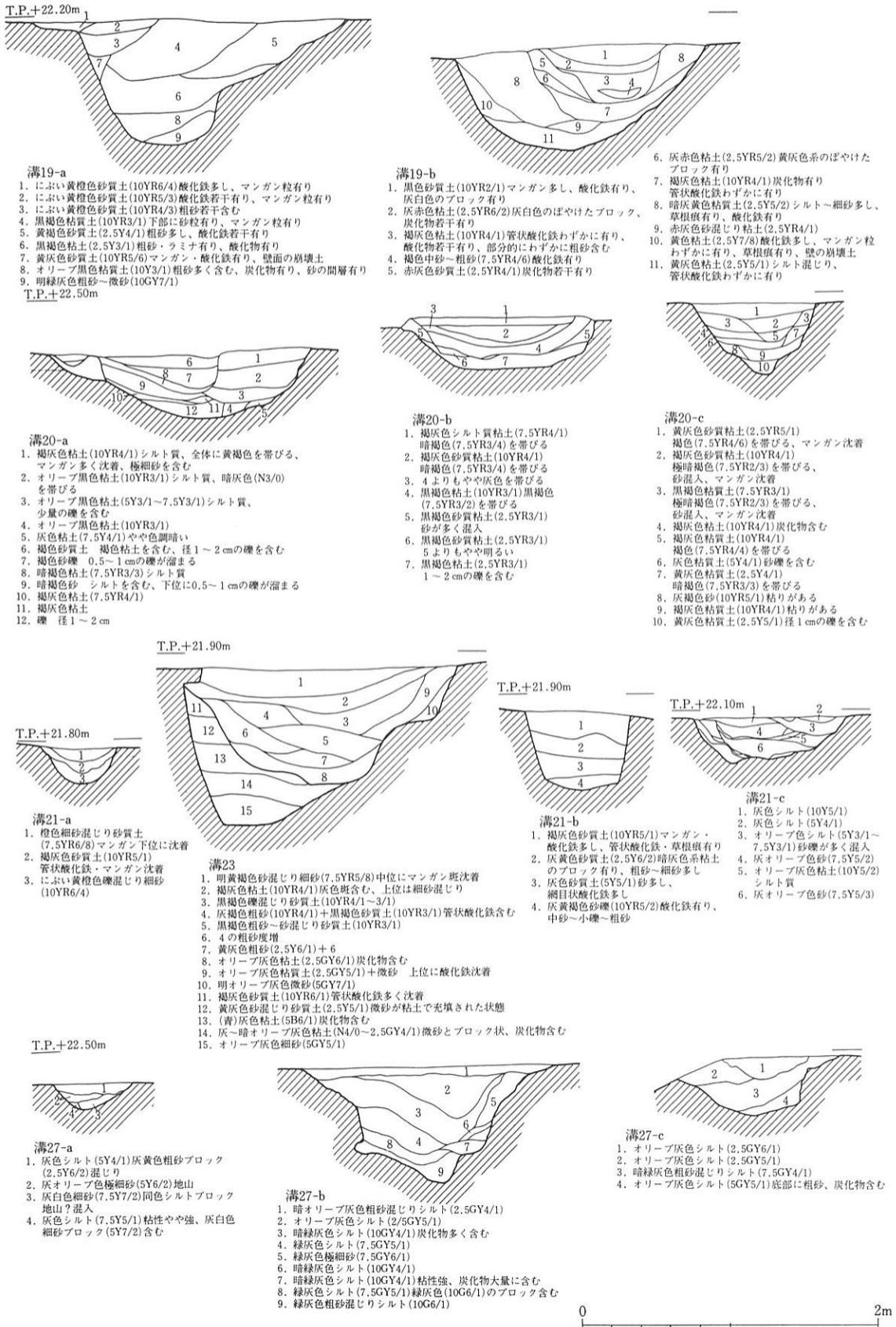


Fig.147 古墳時代溝断面(2)

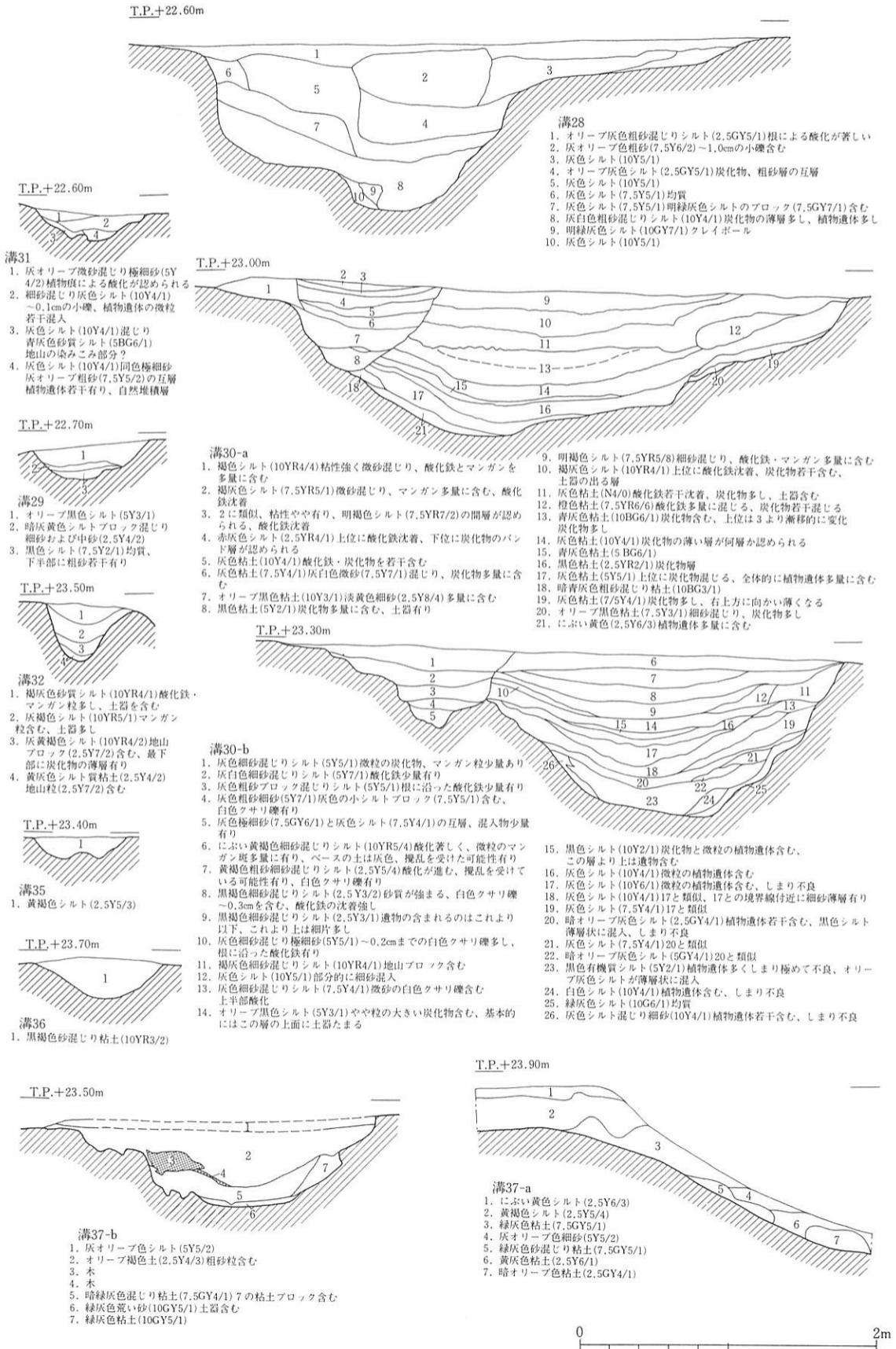


Fig. 148 古墳時代溝断面(3)

1. 河 川

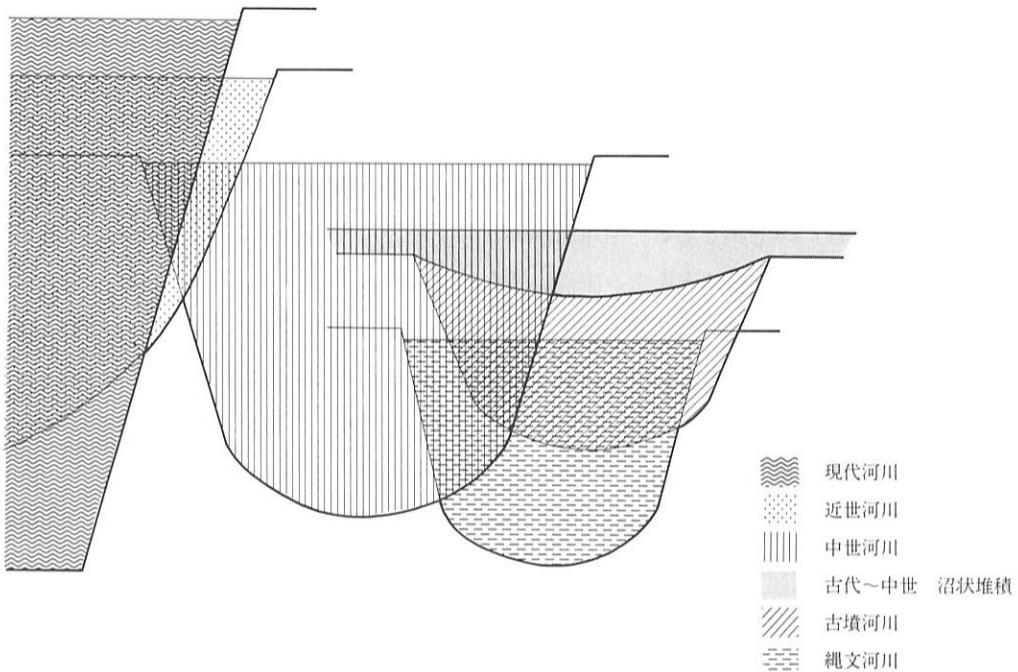


Fig.149 小阪遺跡における一般的な河川重層関係（模式）

前章までにおいても、繰り返し述べてきたが、当調査区内ではその立地条件から河川が複雑に切り合った状態で、数多く検出されている。古墳時代もその例外ではなく、大きな河道を持つものから比較的小なものまで含めると合計9条の河川が検出されている。

これらの古墳時代河川は単独では存在せず、概して上層は古代以降の沼状堆積、下層は弥生～縄文時代の河川というような重複関係をともなっている（Fig.149）。上部での切り合い関係の把握、もしくは堆積層の分離については、粘土層と砂礫層との重複であることが多く、比較的容易である。しかしながら、下部の場合は、包含する遺物の時期こそ異なるが、堆積層自体は、砂礫層と砂礫層が重複関係を成すので、層理面の判別には困難をともなう。つまり、古墳時代河川については、河底部が粘土あるいはシルト質の堆積層に到達していないかぎり、正確な深度が計測できないということである。

巨視的には、E～H地区までの河川2～9は、すべて西南方向に流れ、C地区の河川1のみが南東から北西方向に流れている（Fig.144, 145）。E～H地区の河川は、伏尾丘陵の北東の谷部から調査区内に流入して、調査区北西側の段丘に沿って石津川へと流れていく。これは現在の陶器川とほぼ同じ経路であることから旧陶器川のグループに属すると考えてよかろう。これに対して、C地区の河川1は伏尾丘陵の西側に沿って、あるいは丘陵上の支谷から調査区内に流入し、北上して石津川に合流する経路をとっている。この河川については、どちらかと言えば旧石津川水系の範疇でとらえる方が理解しやすい。

河川1～9に包含される遺物には、初期須恵器をはじめ、古墳時代中期のものが圧倒的に多いが、同時に古墳時代前期から後期にいたる種々雑多な遺物も出土している。これらによって知りえる河川の形成時期と最終埋没時期は、調査時における層順の把握が曖昧であったという反省もあるが、河川内の砂礫層を一括し、その中の遺物の新古によってのみ、類推しているに過ぎない。

1. 河 川

河川 1 (Fig. 150~153) 河川 1 は C 地区の中央部を貫流している。南側の伏尾丘陵上で現在は堰止められて、上池・下池となっている小さな支谷がおそらく河川 1 の源流かとも考えられる。

河道の幅は、最大約27m、最小約19mを測る。層序模式図を参照していただくと理解しやすいが、肩部では古墳時代のシルト層が被っており、中央部分を古代以降の河川が流れている。しかも調査時には、河底部まで掘削することができなかつたので、深度については検出面から約2.6m以上が残存していたとしておく。ただし、シルト層は下部の砂礫層を削剝しているわけではないので、実質的な古墳時代の砂礫層は約3m程度であったと推測される。

検出面は、C 地区では主に現在の耕作土直下に存在する明黄褐色粘質土（基本層序の第III層、マンガンの点状小結核を含む）の上面である。河川肩部斜面の下側では青灰色シルト（基本層序の第V層）が露出している。砂礫層は灰色系の土色で、中には拳大の礫も含む。

河川 1 のすぐ東岸には、古墳時代中期の集落の中心がある。ここから多くの溝が河川に注ぎ込んでいるが、溝が運び込んだ黒褐色の粘土が河川の斜面に堆積している。黒褐色の粘土中には、土器、木器など多くの遺物が含まれており、特に溝 8、9 排水口と対岸の溝 6 排水口付近に集中していた。遺物の出土状況から、右岸側を遺物群 1 ~ 3 (Fig. 152)、左岸側を遺物群 4 ~ 5 (Fig. 153) として一括している。これらの遺物群には、明らかに通有の土師器や、以降に継続していく通有の形態を持つ須恵器のほかに、特徴的な土器が含まれている。それらは軟質の韓式系土器をはじめとして、朝鮮半島の南部に特有の形態を持つものや、瓦質土器そのもの、逆に土師器の形態や製作技法を持つ須恵器などである。

また、木器も農具を中心として豊富に出土しており、臼、梯子などの大型品もある。これらの中で鎌状の木製品は刃の部分まで木製で、実用に適したかどうか疑問である。こうした木製品は古代に祭祀具として利用されている例が見られ、河川にかかる水際の祭りに供された可能性もある。

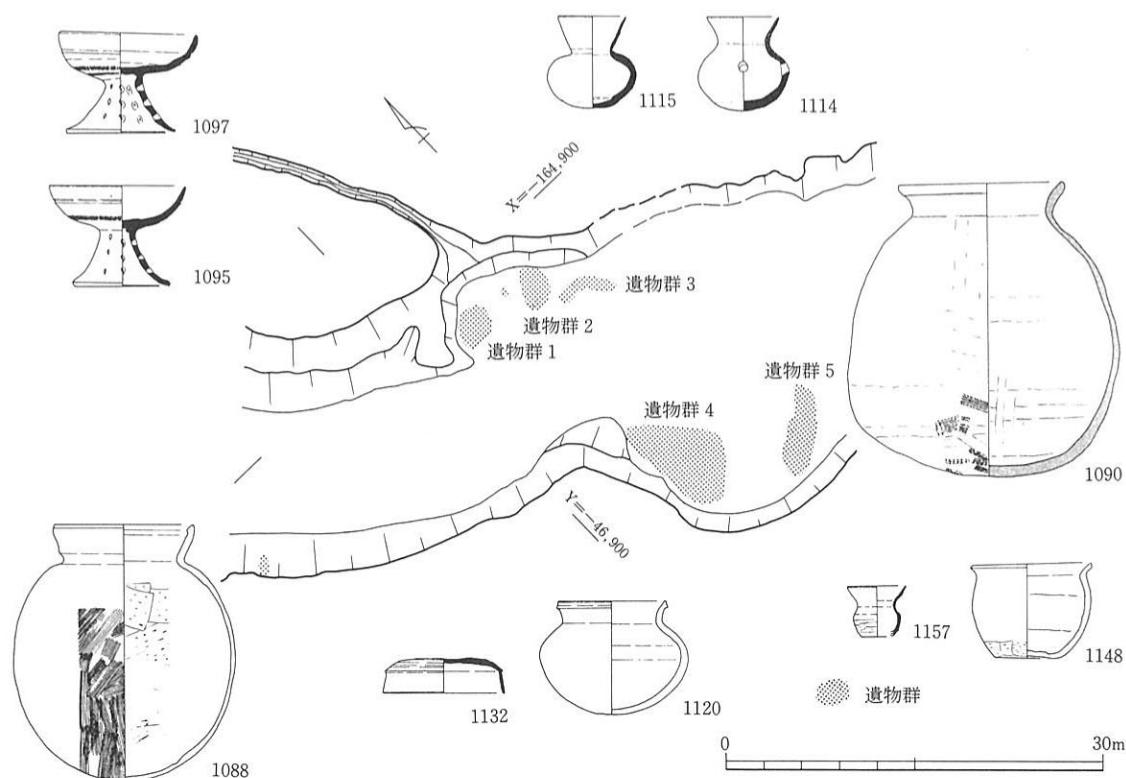


Fig. 150 C 地区 河川 1 遺物出土状況平面と主な出土遺物

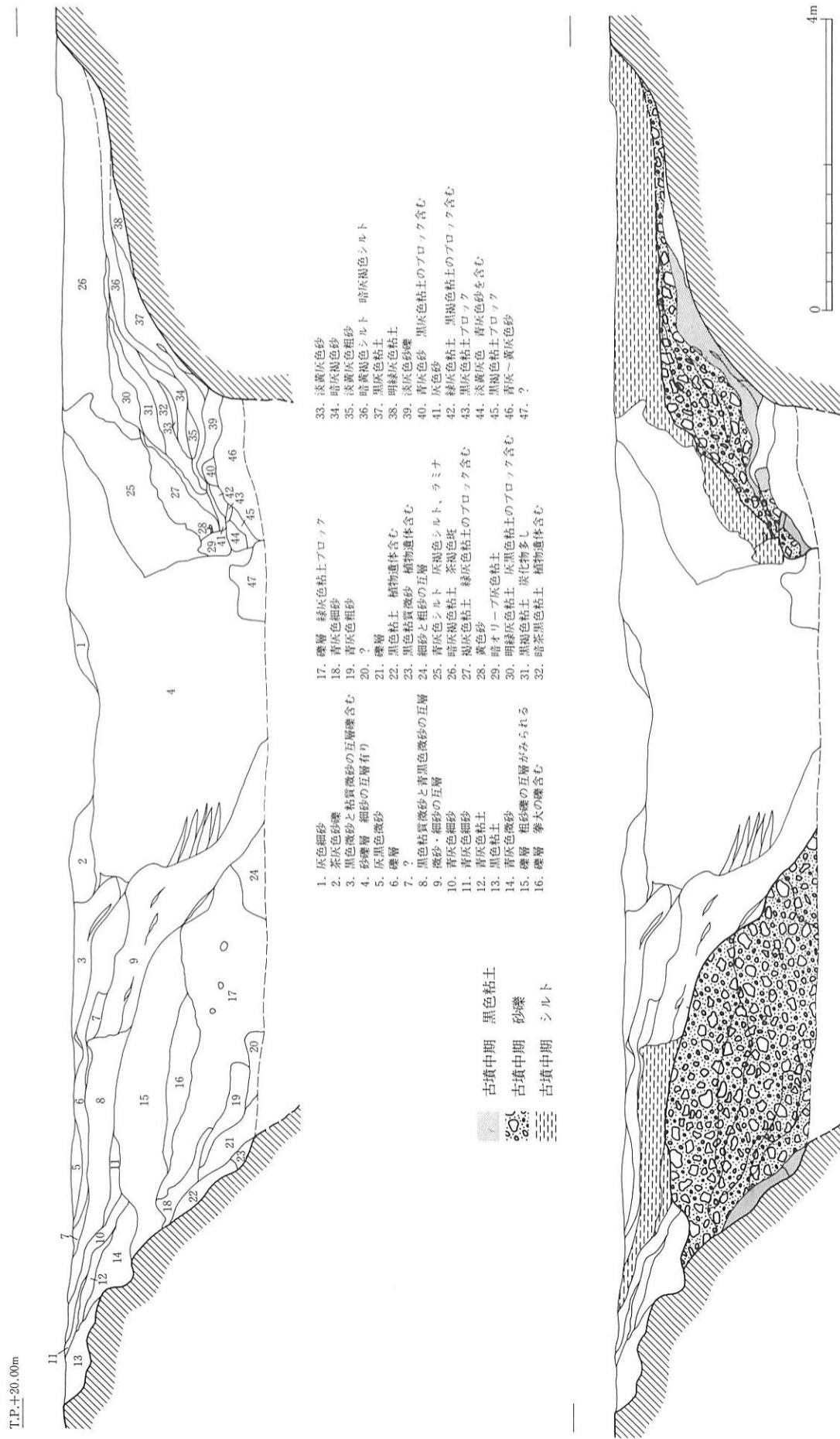


Fig.151 C地区 河川1断面図および層序模式図

1. 河 川

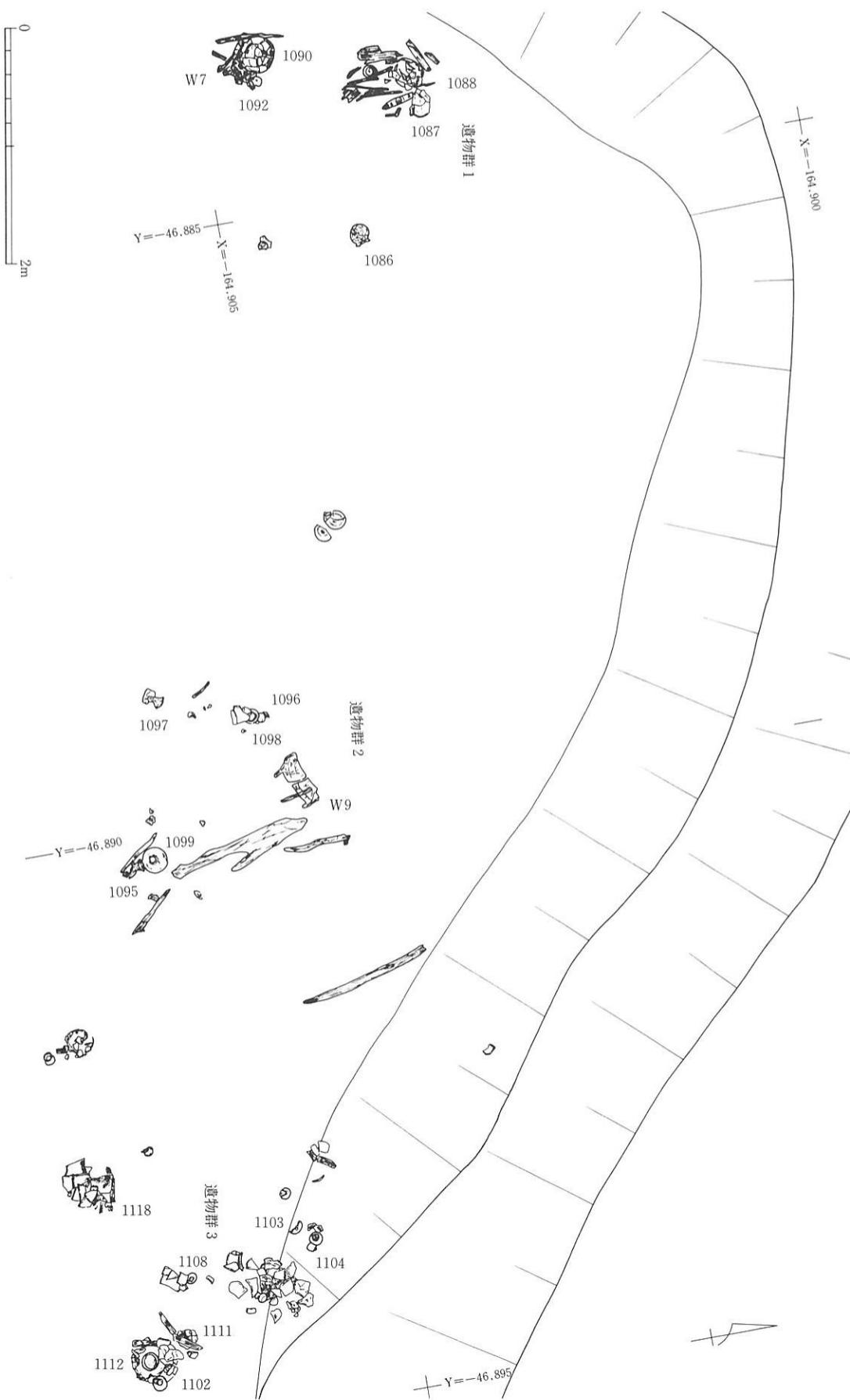


Fig. 152 C 地区 河川 1 遺物出土状態(1)

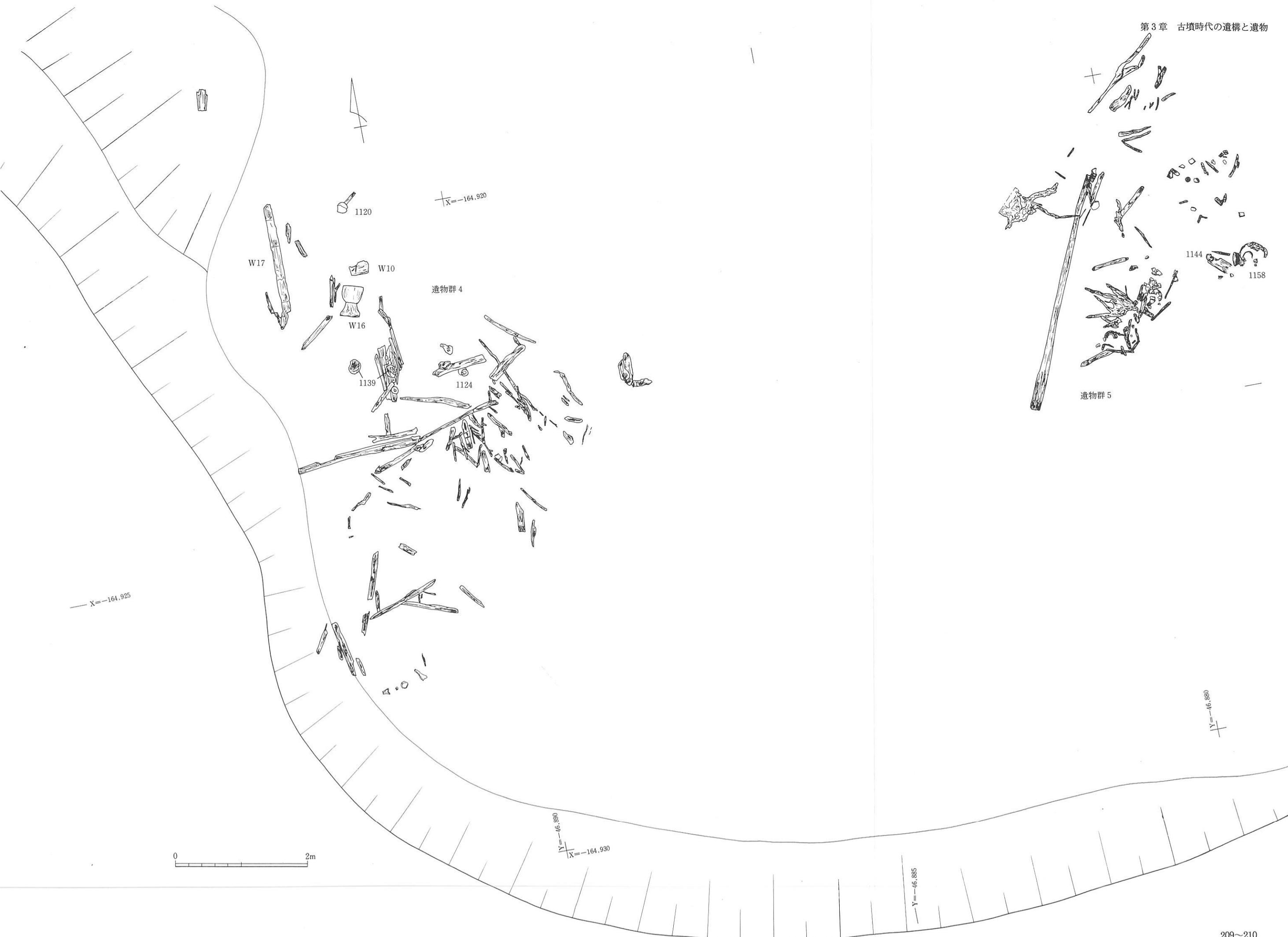


Fig.153 C地区・河川1遺物出土状態(2)